真・こことは違うどこかの日常

カブト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・ここは違うどこかの日常

【Ｎコード】
Ｎ７８９２Ｐ

【作者名】
カブト

【あらすじ】
我々が住むこの世界とは別の世界、ここは違うどこかの世界、様々な姿形の『人』達が住むある都市で、人間族の少年と霊狐族の美女のカップルが織りなす穏やかだけど賑やかな日常を描いていきます。

※前作で読者の皆様にご指摘いただきました部分を修正し、もう一度日常メインのお話として書きなおしました。
一応前作は削除せずに残していますので、もしよろしければ読み

比べてみてくださいませ。

序章

いまとは違う、いつかの時代。

ある世界に一匹の狐がいた。

狐といってもただの狐ではない、数百年を生きた大妖。

その身体の内に秘めた霊力は強大無比、風に乗って空を飛び、雷を操って敵を滅し、龍族ですら扱うことが難しいとされる嵐を呼ぶことだってできた。

力技ばかりではない、姿形を変幻自在に変えることにも長け、人間が使うあらゆる言語をしゃべり、人の心ですら容易く見透かすこともできた。

狐が住んでいた世界で、狐以上の力を持つ存在はほとんどおらず、いたとしても彼らは狐が住んでいる場所に関心が全くなかったので、事実上狐はあらゆる生物の頂点に立つ存在となっていた。

なにもかもが自分の思うまま、当時、世界のあらゆる場所に存在し、他の生物達を支配していた人間ですら狐のことを恐れ、決して狐の言うことに逆らおうとはしなかったし、またその行う全てのことに逆らうこともしなかった。むしろ世界のあちこちにあった人間の国の王達が自ら進んで狐のご機嫌伺いにやってくる始末。

狐は世界の主として君臨していた。

狐にできないことは何一つとしてないようにみえた、自分の力をちょっとだけ見せつけるだけで人間達は自分を大いに恐れ敬い、何も言わなくても勝手にいろいろと財宝や食べ物を運んできたり、自分の発する言葉にいちいち反応して狐が少しでも気に入るように対処してくれたからだ。

狐は毎日毎日を愉快に過ごした。

しかし、あまりにも何もかもが思うままになっていたため、だんだん狐は毎日が退屈になってきた。

暇つぶしに大嵐を起こしてみたり、人間の王族をからかって遊ん

でみたりしてみたが、どれもこれも大して面白くはなかった。
あるとき、狐は自分が行ったことのない場所に行ってみようと思い立ち、今まで見向きもしなかった世界の端に足を運んでみることにした。
そこなら何か自分の知らないおもしろい何かがあるかもしれないからだ。
風に乗って空を駆け、あっというまに狐は世界の端っこに到着した。
そこは自分が普段住んでいる都会とは違う、辺境の中の辺境。あれほど世界に満ちあふれて存在している人間も、小さな集落を作って点々と暮らしているだけであり、それどころか他の生き物の姿もほとんど見かけないような荒れ地が広がるばかり。
その様子を見た狐はがっかりして、すぐに都に帰ろうと思った。
風を再び呼んでその上に乗り、元いた場所へと駆け出そうとする。
だが・・
都に戻ろうと駆け出そうと一歩踏みだしたちょうどそのとき、狐の視線の端っこに一人の人間の少年の姿が映った。
歳の頃は十六歳くらいだろうか、薄汚れた旅装に身を包み背中に大きなリュックを背負ったその少年は、楽しげに鼻歌を歌いながらてくてくといずこかへと歩いて行く。特別美しい美少年というわけではないが、かといって不細工という言葉からはかなり遠ざかる。どちらかというと化粧でもすれば女の子に見えないこともないかわいらしい顔、分厚い旅装の上からではにわかに判別しにくいが、華奢で小柄な体。どこにでもいそうな普通の少年。
都に帰ればこれくらいのレベルの少年なら掃いて捨てるほどいる、別に興味はない・・はずだったのだが、なぜが狐はその少年を無視することができなかった。
自分でもよくわからない気持ちに狐は困惑する。
（なんで私がたかだが人間の子供に気を取られなくてはならないの

だ？　人間達の上に君臨し支配しているこの私が・・いやまて、ひょっとするとあの人間の少年は他の生き物が化けているのかもしれない。もしそうなら面白い。折角だから、一つ話しかけてみることにしよう）

そう思いなおした狐は、自分が呼んだ風から降り立つと地上にいる少年目がけて駆け下りていった。

『おい、そこの少年』

突然自分の目の前に姿を現した大きな狐を見て、少年はびっくりしたような表情を浮かべて立ち止まる。

しかし、その驚きは恐怖を抱いたそれではなく、ただ純粋にびっくりしただけのようで、すぐに立ち直ってみせると、穏やかな笑みを浮かべて狐のほうを見つめ返した。

「なんでしょう、キツネさん？　僕に何か御用ですか？」

『おまえの魂が気に入った。食わせろ』

きょとんとして問いかけてくる少年に、狐は思いきり邪悪な笑みを浮かべて傲然と呟いた。

狐の言葉を聞いた少年は、なんとも反応に困った表情を浮かべてすぐには返答できなかった。

狐の言葉は、勿論本心からではない。歳を経た龍神の魂や力ある土着神の魂ならともかく、たかが人間の魂など食らっても何の足しにもなりはしない。いや、弱い魂や穢れた魂を食らってしまってはむしろ自分が弱体化してしまう恐れがある。はっきり言ってこの目の前の少年の魂を食らうことは狐にとって何のメリットもないのだ。

・・にも関わらず、そう言って見せたのは目の前の少年がどう反応

するのか見たかったからだ。
はっきり言えば熊よりも大きな体格を持つ大妖怪の自分に食われると言われて、目の前の少年が驚き慌てる様が見たかったのだ。
狐は少年が無様に狼狽して命乞いを始めるのを今や遅しと待ち続けたが、残念なことに少年の反応は狐が思い描いていた展開とは全く違うものであった。
少年は狐の言葉を聞いた後、しばらく腕組みをして真剣に悩み続けていたが、やがて顔を上げるとやっぱりなんとも困った表情を浮かべたまま、狐が仰天するような言葉を返してきたのだった。

「キツネさん、すいません、半分じゃダメですかね？」

『ああ、半分か。なるほど半分・・って、へ？・・はぁっ！？　は、半分？　半分ってなんだっ？』

狐は最初少年の発した言葉の意味がわからないまま生返事を返そうとしたのだが、すぐにその言葉の意味の奇妙さに気がついて素っ頓狂な声で聞き返す。

「いや、あの、実は僕、次の転生先がすでに決まっているんです。今ここにいるのは、そこに行くまでの繋ぎというかなんというか・・ともかく、そこに行くのはもう決定事項で僕個人の一存では変えられないんですよ。もし、それを破ることになったら僕も狐さんもいろいろとまずいことになるので・・」

心から申し訳ないと思っている表情で狐に謝ってくる少年。狐は、『こいついい加減なことを言って誤魔化そうとしているな』と思いすぐに霊力を使って少年の心を見透かしてみるが、予想外なことにそこには一片の嘘も含まれていなかった。
狐は自分の予想とははるかに違う方向に話が転がって行こうとし

ていることに困惑しつつも、なんとなくこのまま放置して去っていく気にもなれず、そのまま話を続けてみることにする。

『あ～、まあ、おまえが嘘をついていないのはわかるが、なんで半分ならいいんだ？』

「詳しく説明したいんですけど僕も勉強不足で・・あの、わかる範囲で説明しますね」

てへへとかわいらしく笑ってみせる少年の姿を見て、狐はいつのまにか作っていた邪悪な笑みをやめてしまっていた。そして、表情に困ったような顔で少年を見返して続きを話すように促す。

『それでいいから話してみろ』

「わかりました。あの、魂ってその人が通ってきた人生の『道』の濃さで多くなったり少なくなったりするそうなんです。逆にいえば、ちょっとしかなくても、あるいはでっかい塊だったとしても魂は魂なんです。だから、ちょっとでも残れば魂として存在していることになるので大部分を狐さんにあげてもいいんですけど・・でもでも、あまりにも小さいと核となる人格そのものが消えてしまうらしいんです。転生すれば記憶はなくなるし、魂もまた何もないところから始まるんですけど、僕の場合はちょっと特殊でして。最終的に僕にはいかなくていけない場所があるので、人格が消えてしまうほどあげるわけにはいかないんですよ。それで、半分あればなんとか人格や大事な部分は保持できると思うので、半分でよければ差し上げますって言ったのですよ」

『そうか、まあ、なんとなくはわかったが、しかし・・おまえ、わしに魂を半分も渡してしまってもいいのか？　人間は魂がないと生

きられない、半分しかなければ当然その生も半分ということになるんだぞ？』

どうやら目の前の少年が本気で魂を差し出そうとしていることがわかった狐はなんとも扱いに困ってきて困惑の表情を浮かべる。元々からかうだけでそんなつもりはなかったのだが、今更自分からやっぱりやめたというのはかっこ悪い気がするし、それなら少年がなんとか思いなおしてくれないかなと思って問いかけてみた。しかし・・・

「ええ、構いませんよ。半分だってやれることはいっぱいあるんです。それに狐さんが僕の魂を気に入ったと仰るなら、きっと僕の魂の半分はあなたの側にあるべきなんでしょう」

『そ、そういうものなのか？　と、というか別に無理だったら無理で構わないんだぞ、』

狐の思惑とは逆に、晴れやかな笑顔で肯定されてしまい、益々困惑の度合いを深める狐。やはりここはもう自分からもういらないというしかないと口を開こうとしたのだが、のんびりした様子とは裏腹に意外とせっかちだった少年は、狐が口を開くよりも早く行動をおこしていた。

「大丈夫です。すぐに半分にしますね」

『え、す、すぐにって・・ちょ、ちょっと待て、おいっ！！』

少年が何かをしようとしているのに気がついて狐は慌てて止めに入るが、それよりも早く少年は両手を組み合わせて何かの印をいくつも素早く結び短い言葉で何かを呟いた。すると、眩い光が少年の

姿を包み込み、やがてそれが晴れたときには、少年の姿は二つになっていた。

「「はい、狐さん、半分にできました」」

呆気に取られている狐の目の前で、二人になった少年は全く同じ笑顔で微笑みかける。狐はあまりの出来事に口をぱくぱくさせるばかりで、咄嗟に言葉が出てこず、やがて頭を抱えてうずくまってしまうのだった。その様子を二人の少年は不思議そうに見つめていたが、やがて一人がもう一人に話しかける。

「ここには僕が残るから、君はもう行っていいよ」

「そうか、わかった。長い間、僕と共にあってくれてありがとう、僕の半身」

「うん、僕のほうこそありがとう、僕の半身。僕はもうここで終わる、これからまだまだ続いていく君の道に付き合えないのは残念だけど・・同時にほっとしてる部分もあるよ。ようやく僕は解放されるんだって」

「そうだね、確かにそれも僕の本心だ。連なる夜の闇の果て・・その向こうにある何もない『無』に帰りたい気持ちがあることも事実。でも、僕は行くことにするよ。いつか君のいる場所に行くことになるだろうけど、今は老師の指し示す場所に向かうことにする」

「うん、老師によろしく伝えてね」

「うん、さようなら、ここに残る僕の半身」

「さようなら、道を進むことにした僕の半身。君の中に残る、『人』を想う『仁』の心がいつまでも残り続けますように」

そう言って二人はお互い強く抱き合うと、やがて、もう一人は道に置いていたリュックを背負い直していずこかへと去って行った。

その様子を大きな口を開けて唖然としたまま見つめ続けていた狐だったが、残った少年がやがて自分に視線を向け直したことに気がついてなんともきまずいようないたたまれないような表情を浮かべて見せる。狐はしばらくどう返答したらいいのかわからず無言を貫いていたのだが、残った少年の無垢な視線があまりにも痛くなってきて、自分でも勝手だなあと思う言葉を口にする。

『な、なんか言いたいことがあるのか!?』

「いえ、あの、どうぞ、食べていいですけど・・」

『た・・たべっ!?　ば、バカッ、何いってるんだ!?』

「いや、だって狐さんが気にいったからって」

『た、確かにそうだけどっ!!　え、ええい、なんかもう気分が乗らないから今はいらんっ!!　いらんたらいらん!!』

「え、そうなんですか?　じゃあ、あとでってことですか?」

『う、ま、まあそういうことだ』

「わかりました。じゃあ、しょうがないですね」

どう返答を返したらいいかわからないままに狐はとりあえず、そ

の場しのぎの言葉を口にするが、それをどう受け止めたのか、少年はとてとてと狐の側にやってくると、怖れる風など全くなくよっこいしょと狐の大きな背中によじ登ってしがみつく。

『お、おまっ！！　何やってるんだ！？』

「ふえっ？　いやだって、ついていかないとまずいかなと思ったので。僕、空とか飛べないですし」

『おまえ、わしが怖くないのか？　数百年生きた大妖怪だぞ、わしは？　ついてくれば生きたまま裂かれて食われてしまうんだぞ！？』

「え、でも、僕の魂が気に入ったんでしょ？　それってどんな形であれ好意があるってことですよね？」

『おまえ・・本当に奇妙な性格しているな』

きょとんとした顔で聞き返してくる少年の姿を見て、毒気を抜かれたようになった狐は大きく深い溜息をひとつ吐きだした。そして、改めて自分の背中の少年を見つめる。自分の魂を半分にして2人になってみせたことからただの人間ではないことはわかる。しかし、霊力や魔力など一切感じないし、身体的能力も全然よさそうではない。狐が本気になってここで無理矢理落として都に帰ることもできるだろうし、ここで殺してしまうのも容易いだろう。

しかし、どうしても狐はそうすることができなかった。なんとなく殺してしまうのが嫌だった。そして、自分を見ても恐れない、嘘をつかない、しかも自ら進んで殺されようというこの変な生き物を飼ってみたくなったのだ。

『もういい、どうせ、それほど長く生きられないんだろ。おまえが

死ぬ時に食うことにする』

「わかりました。じゃあ、とりあえず、それまでよろしくお願いいたします」

『わしとしたことが変なの拾ってしまったなあ。まあ、いいか、どうせそれほど長い時ではあるまい』

「そうですね、あっという間ですよ、きっと」

『自分でいうな、馬鹿者!!　ほら、都に行くぞ!!　しっかりつかまってろよ!!』

その後、狐はこの変な少年と都で暮らすことになった。この変な少年は、『狐さん』、『狐さん』と自分のことを気安く呼び、勝手に自分の世話を焼き、気に入らないことがあるとずけずけと物をいい、狐が間違ったことをすると平気で説教してくるという、狐にとっては物凄く鬱陶しい存在だった。喧嘩はしょっちゅうだったし、価値観の違いでぶつかりあうことだって数限りなくあった。なのに狐は決して少年を離そうとはしなかったし、少年も狐から離れようとはしなかった。喧嘩している最中もどちらかが飛び出していなくなるなんてことはなかった。他の妖怪が縄張り争いにきて力比べになった危険な状態の時だって少年は狐の側にいた。かつて狐に痛い目にあわされた国が、軍隊を連れて討伐に現れたときも少年は出て行こうとはしなかった。狐のほうも少年にどれだけ耳の痛いお小言を聞かされても決して少年を邪険に扱ったりしなかった。自分が悪いときには自ら折れて謝ったりもした。あの、プライドの高い狐が自らである。いつのまにか二人の絆は深く強くなっていたのだ。

しかし、そんな二人の日常は、あの日二人が出会った時に予想した通り、それほど長くは続かなかった。

魂を半分にしてただでさえ長生きできない身体になった上に、健康な人間ですら耐えられないくらい強大な霊力を常に放出し続けている狐の側に居続けた少年は、出会ってからわずか三年ほどで動けなくなった。そして、動けなくなってから一カ月を待たずして死神が彼を迎えに来た。

最後まで・・死を迎える最後まで少年は狐と共にあり、最後まで笑顔を絶やすことはなかった。

そして、狐は再び一匹になった。

別に今までと変わらない、また退屈な日々が始まるだけ、狐は少年と永遠の決別をした日そう思いこもうとした。

しかし、いつまでたっても狐は少年の亡骸の側から動くことができなかった。それはばかりではない、自分の両目から流れる熱い何かを止めることもできず、口からは言葉にならない嗚咽が漏れ続けた。それはいつまでもいつまでも続いた。

少年の死に際の言葉、『僕が死んだら約束通り食べてくださいね』という言葉が何度も何度も脳裏をかすめる。

しかし、その言葉を実行に移すことはできなかった。狐は少年の顔に自分の口を何度も何度も近づけはした。だが、食べようとはせず、ただただ、その鼻面を少年の冷たくなった亡骸に押し付けるばかり。そんなことをしても少年は生き返らない。そんなことは百も承知だった。でも、やらずにいられなかった。もう一度でいいから『狐さん』と呼んでほしかった。いや、ついに最後まで教えなかった自分の真名で呼んでほしかった。

大妖怪である狐にとって真名を知られることは、その命そのものに関わることである、勿論普通は絶対に教えたりしないし、自分から他人に教えることなどありえない。だが、それを警戒して教えなかったわけではないのだ、ただ、改めて言うのが照れくさかっただけなのだ。いつか言おう、いつか教えてやろう、そう思ってた。愚

かにも自分と、この少年の過ごす時間が同じだと思いこんで、無限にあるわけではない時間を無為に過ごしてしまったのだ。そして、全てが終わってしまってから悟る、自分には二度とその機会が訪れないことを。

涙も枯れ、嗚咽すら出せなくなるほど長い長い時間を少年の亡骸の側で過ごし、やがて、狐の身体は徐々に衰弱していった。

いくら数百年を生きた大妖怪といえど、飲まず食わずで、霊力の補給もせずに過ごせば体も衰弱する。このままでは死ぬ。勿論そんなことわかっていたが、それでも狐は少年の亡骸の側を離れようとしなかった。

少年の亡骸は不思議なことに何日、何週間、何か月、いや、何年という月日が流れても腐りもせずそのままの姿であり続けた。あまりにも不自然な現象であったが、少年が死んでいるという事実が覆るわけもなく、狐にとってはどうでもいいことだった。

やがて、どれほどの歳月が流れたのか、狐は弱りきった身体の自分にいよいよ死期が迫っていると悟ったちょうどそのころ、狐の、いや、少年の亡骸の元に一人の老人が訪ねてきた。

どこからが髪でどこからがまゆげでどこからがひげなのかわからないくらい白い毛に顔は覆われて隠れ、ちんまりとした身体に東方の薄い緑色の着物に身を包んだその老人は、少年が横たえられている部屋の中に入ってくると、しばらく少年の亡骸と、その側で横になっている狐の姿を交互に見つめ続けた。

そして、それが終わったあとゆっくりした口調で狐に話しかけてきた。

「もう、この子を返してもらってもええかな？　おまえさん、もうじき死ぬんじゃから、この子の魂もいらんじゃろ？」

狐の耳に聞こえてきたのは、枯れ果てた老人にしては低いがよく通る美しい声だった。狐は億劫そうに老人に視線を向けた。

『あんた誰だ?』

「この子の師匠じゃよ」

『今頃になって保護者面でのこのこやってきたというわけか・・もうこいつは死んでいるというのに、ただの死体でしかないというのに』

「魂は不滅じゃ。特に強い想いで己が信じる『道』を進んだ魂は強く美しいまま残り、決して滅びることはない」

『いい加減なことを言うな!!　滅びたじゃないか!!　こいつは死んで動かなくなった!!　死んだら終わりだ、もう次はない!!』

ゆっくりと、しかし、よく耳に響く声で一語一語を噛み締めるように話す老人の言葉を聞いていた狐だったが、その内容に納得できず、力ない声で怒りの声をあげる。しかし、老人は狐の怒りの言葉に気を悪くした風もなく、ゆっくりと首を横に振ってみせる。

「いいや、不滅じゃよ。その証拠にほれ、その子の身体は腐りもせずそのまま、そして、その魂もそこにとどまり続けておる」

『え・・』

「おまえさんのことが余程好きじゃったんじゃなあ、その子は。その子の魂はな、おまえさんが心配で心配で、ここから離れられずにいるのじゃ。自分の朽ちる姿をおまえさんに見せて悲しませたくなかったんじゃろうなあ。必死に肉体をそのままにして保持したままここに留まり続けているのがはっきり見える」

『い、いるのか？　あいつ、わしの側に・・ううん、今ここにいるのか？』

「おるよ。ずっとおまえさんにくっついておるよ」

老人の言葉を聞いた狐は、衰弱しきった体をのろのろと持ち上げて立ち上がらせると、自分のすぐ横に横たわる少年の顔に自分の顔を押し付けた。すると、薄暗い部屋の中、狐の想いに応えようとするかのように少年の亡骸の周囲に青白い鬼火が浮かび上がって明滅して見せる。

それを見た狐は一瞬驚愕の表情を浮かべてみせるが、すぐになんともいえない嬉しそうな、しかし、悲しそうな表情を浮かべて鬼火を見つめ、そして、目の前で静かに眠る少年に視線を向け直す。

『馬鹿だなあ、おまえは。ほんと馬鹿だ。しかもお節介で、お人好しで・・』

しかし、それ以上言葉を続けることができず、狐はただただ少年の顔に自分の顔を押し付け続けた。そうしてどれくらい時間が過ぎただろうか、やがて、ゆっくりと顔をあげた狐は、黙って横に立ち続けている老人のほうを見つめる。

『連れて行くのか？』

「連れて行くよ。それが約束だったからな」

『誰との？』

「この子とわかれたこの子の半身とのじゃ。この子の半身が別の世

界に旅立つときに約束したのじゃ。もしこの子の魂が消えずに残っていたら、自分ともう一度会わせてほしいと。別の世界に行くことでお互い記憶を失い、人格を失ってしまってお互いが誰だかわからないだろうけど、それでももう一度会いたいと言っておったのでな。それでその約束を果たすためにここにやって来たわけじゃが・・」

狐の言葉に頷いてみせた老人だったが、何か思うところがあるのか、少し言葉をきると自分の顎ひげをしわだらけの枯れ木のような手でゆっくりと撫ぜてみせる。そして、その手を動かしながら言葉を再び紡ぎ始めた。

「あの子が向かった世界はな、これから大変な事態になっていくのじゃ」

『大変な事態？』

「うむ、そこに住む人々は、本来その世界にないはずの力を別の世界から引き出して使い、勝手気まま、思うがままに母なる世界を自分の都合のいいように変えていっておる。その世界はそのことに非常に怒っていてのう。もう間もなく、人々にその怒りの拳を振り下ろすじゃろう。それはもう世界そのものの怒りじゃから凄まじいものになるじゃろうて。そこに住む人々は下手をすると全滅させられてしまうかもしれんのう」

そう言った老人は、深い悲しみを秘めた溜息をひとつ大きく吐きだして見せた。

「放っておいてもよいのじゃが、いくらなんでもあまりにもな・・その世界には普通に平和に暮らしている人々だって大勢おる。いくら連帯責任といえど、そんな人達まで巻き添えを食って全滅という

のは行きすぎじゃと思ったのじゃ。しかし、わしらは基本的に各世界に対し不干渉を貫かねばならぬ、自ら手心を加えることはわしらの法に触れるでの。それで、まだわしらの側でもなく、世界の側でもない半人半仙のあの子を向かわせることにしたのじゃ」

『半人はわかるが・・半『仙』？　『仙』とはなんだ？　こいつがただの人間ではないとは知っていたけど』

「まあ、世捨て人じゃよ。世界との絆を断ち切り、世界と世界の挟間にある境界『線』の世界に生きる者達のことじゃ。あまり気にするでない。それよりも、あの子のことじゃ。あの子は己の半身を失うことで、いろいろと苦労を重ねた。しかし、その苦労があの子を成長させ、今ではこの子と一つであったときよりも大きな魂を持つようにまでなった。きっと向こうの世界でも己の役割を立派に果たしてくれるであろうし、世界に押しつぶされたりもせんじゃろう。しかしな、この目の前にいる子はそうではない。強い光は放っておるが、相変わらず中途半端な大きさの魂のままじゃ。これから激動の時代を迎えるあの世界に連れて行って果たしてそれが幸せなことかどうか・・かといって、約束を破るわけにもいかんしのう。そもそもこの子は、あの子の半身であの子のものじゃ。おまえさんにも、この子は必要ではなくなるじゃろうし、となると、やはり元の持ち主にもどしてやらねばなるまいて」

最後のほうは自分を納得させるためのような言葉らしきものを呟いてみせ、老人は二つほど頭を横に振って何かを振り払うと、少年の亡骸のほうにゆっくりと近づいていった。

「そういうわけじゃから、この子の魂は返してもらうぞ」

狐にそういうと、老人は少年の身体にその皺だらけの枯れ木のよ

うな手を伸ばしていく。だが、狐は衰弱しきった体に鞭打って動かすと、老人と少年の間に滑り込んだ。

「をいをい、もういいじゃろう？　今更おまえさんがこの子の魂を食らっても、この子の魂は消滅せんし、ましてやおまえさんはもう間もなく死ぬ。そうなってからこの子の魂を取り出すことだってできるんじゃから、何をしようと結局のところ一緒なんじゃよ？」

『わかってる。そんなことはよくわかってる。だからこいつを連れて行くのは構わない。だけど、ひとつだけ条件が・・ううん、頼みがある』

「頼み？　頼みとはなんじゃ？」

狐がそんなことを言い出すとは思ってなかった老人は、伸ばしかけていた手を止めて狐のほうをじっと見つめる。すると、狐は老人の顔を真っすぐに見つめ返し、自分の想いを口にした。

『わしを・・ううん、私も一緒に連れて行ってくれ。こいつを連れて行くことになっている世界に連れて行ってくれ』

「なんじゃと？　転生させろというのか？」

驚いて問い返す老人に、狐はゆっくりと首を縦に振ってみせる。

『なんの力もいらん、私の身体の霊力がほしいなら私が死んだ後、好きなだけ持って行けばいいし、向こうの世界で同じような大妖怪にしなくてもいい。狐じゃなくてもいい、人間に転生させても文句はいわん』

「いやしかしな、記憶も能力も全て失うんじゃぞ？　その状態で会っても意味があるとは思えないし、ましてやこの子に出会えるとも限らんのじゃぞ？　なのに違う世界での転生を望むのか？　やめとけ狐殿。お主ほどの力の持ち主ならこの世界で再び今の記憶を持ったまま再生することも可能じゃ。そうしなされ」

『いやだ！！　それでも・・それでも・・記憶を失っても能力を失ってもいい！！　私はこいつと同じ世界、同じ空の下にいたいんだ。それに私はどんな状態になっていても、必ずこいつを見つけ出してみせる！！　だから・・だから、頼む！！　頼む頼む！！』

弱った体をひきずって老人のほうにやってきた狐は、必死になってすがりついて懇願する。その姿をなんともいえない様子で見つめていた老人だったが、やがて、溜息を吐きだすと、こっくりと首を縦に振って見せた。

「わかったわい。しかし、どうなっても知らんぞ。今からおまえさん達が転生するところは危険極まりないところじゃ。下手をすれば転生してもあっさりと死んでしまうかもしれん、それでもええんじゃな？」

『構わない。それに心配せずとも、私はどんな姿になってもあっさりと殺されたりはせん。記憶を失うのは痛いが、能力を失うのはむしろ好都合だ。この忌まわしい能力のせいでこいつを殺してしまったから・・今度はこいつを害さないように強くなって、今度こそこいつを守ってやるんだ。そして、一緒に・・いつまでも一緒に』

そう言って狐は顔を赤らめ潤んだ瞳で少年のほうに視線を向けると、老人から身体を離して少年の亡骸に覆いかぶさる。

「やれやれ、たかだか人間一人の為に数百年の霊力をドブに捨てるとは・・」

『私の霊力や命をどう使おうと私の勝手だ!!』

「わかったわかった。この子と同じ時代を生きられるようにできるだけ近い間隔で転生できるようにしてあげよう。しかし、あとのことは知らぬよ。わしらは基本的に不干渉じゃから、それ以降のことについてはおまえさんが自分でなんとかするがいい」

『元よりそのつもりだ。さあ、さっさとやってくれ』

「まったく、こんなことになってしまうとは・・『人』の想いとは実に面白いものよのう。どれだけ永く生きても、未だにわからぬ。みながそれぞれ進み行く『道』のなんと多彩なことよ。しかし、だからこそおもしろいか」

老人はそう呟くと、困ったような、しかし、どこか面白そうな様子でその両手を突き出した。

その両手からはみるまにまばゆい光が溢れ出し、そして、狐と少年の姿を覆い隠していった。

そして、時は流れ、ここことは違うどこかの世界。

人間ばかりではなく、いろいろな姿形の種族が住むある世界。

その世界の北方の片隅にある一都市の中、ある高校の保健室の一室。

「連夜くん！！　いったいどうしてこうなったの！？　なんでこんなに傷だらけなの！？」

悲鳴にも似た金切り声をあげるのは、白衣を来た一人の歳若い女性研修生。美しく長い金髪、頭部からはぴんとたった大きな狐の耳、エメラルドのような美しい碧眼、とがった顎、血色のいいピンク色の唇、大きめの白衣の上からでもはっきりとわかるみるからにやわらかそうで形のよい大きな胸にくびれた腰、そして、すらっとして長い脚線美。ぷりっとしたお尻からは美しい金色の獣毛に覆われた三本の尻尾が伸びている。人間族ではないが誰が見ても完全無欠の美女。

霊狐族と言われる半人半獣の種族のその女性は、自分の目の前に座ってなんとも言えない困ったような笑顔を浮かべている一人の少年をじっと見つめる。

「いや、あの、その・・か、階段から落ちちゃってその・・」

目の前の美しい女性が詰め寄ってくるのに対し、しどろもどろに言い訳をする少年。

その少年は目の前に座る一流女優かモデルバリに美しい女性と対照的に、どこにでもいるような普通の人間族の少年だった。

癖っ毛のない長くも短くもない黒い髪に、まるで月のない日の夜空のような色をした黒い瞳、男子高校生の平均身長よりも弱冠低い

と思われる身長に、やせ気味で小柄な体格。かっこいいわけでもイケメンでもないが、かといって不細工でもなくかっこ悪くもない。その性格からきているのか、全体的に人の良さそうな雰囲気を自然と纏い、化粧でもすれば女の子に見えそうなそんなかわいらしい少年だった。

しかし、今の少年の姿は、それら全てを完全に台無しにしてしまっていた。

頭のてっぺんからつま先まで、見事なまでに泥だらけ、そればかりではない、擦り傷や打撲のあとが、顔やまくりあげられた袖から伸びる腕のあちこちに点在していた。

「階段から落ちたくらいでこんな傷になるわけないでしょ!?　またね、またなのね？　今度は誰にやられたの!?　どうせまたこの学校のろくでなしの不良どもにやられたんでしょ!?　三年の鮫島達？　それとも二年のブルータス一派？　あ、一年生の連中なの？」

「お、落ち着いてくださいってば、如月先生。本当に喧嘩とかじゃないんです。それに大した傷じゃありませんし」

「大した傷じゃない!!　体中打撲だらけ、青あざだらけ、もう～～!!」

なんとか目の前の美しい女性をなだめようとする少年だったが、全然効果はない。それどころか、少年の顔や腕に残る明らかに誰かに殴られたとわかるいくつもの青あざを見て、女性の透き通るような碧い瞳にみるみる大粒の涙がいくつも浮かびあがって行く。

「あなたに何かあったら・・もし、何かあったら・・」

「あああ、大丈夫。本当に大丈夫ですから、ね、ね。」

慌ててポケットから奇麗な白いハンカチを取り出した少年は、そっとそれを女性の目にあてて涙を拭き取ってやる。そんな少年の気遣いに女性はちょっと嬉しそうな表情を浮かべてみせたが、すぐに不機嫌そうな顔に変えて口をとがらせる。

「ほんとにもう連夜くんはお人好しなんだから。そんなんだから、頭の悪い馬鹿どもに目をつけられちゃうのよ」

「め、面目次第もない」

「ってことはやっぱり、誰かにやられたのね」

「は、はうっ!!　あ、いや、その!!」

まんまと女性に乗せられてしまった少年は、両手をばたばたとさせて慌てだす。そんな少年の姿をしばらくじと〜〜っとした目で見つめていた女性だったが、やがて何とも言えない溜息を一つ吐き出して表情を緩めると、すっと少年に近寄ってその身体を引き寄せて抱きしめる。

「ちょ、き、如月先生!!　が、学校の中でそれはちょっと・・」

「大丈夫、部屋の鍵は閉めてあるし、カーテンも閉めてるから誰も見てないわよ。それよりも連夜くん、二人きりのときはちゃんと名前で呼んでくれる約束だったでしょ？」

突然の熱烈な抱擁に、少年は顔を真っ赤にして女性の抱擁から逃れようとジタバタしてみせるが、女性は少年をがっちりと抱きしめたまま放そうとしない。

それどころか、しきりに照れる少年に自分の顔を近づけて真っすぐにその黒い瞳を見つめ、甘えるように囁きかける。

「い、いやでもですね・・」

「『如月先生』は、みんなの前でだけ。今は二人だけなんだから、ちゃんと名前で呼んで」

しばらくの間、女性の潤んだ瞳で見つめられていた少年は、あっちこっちに視線を移してなんとか逃れられないかともがいていたが、やがて観念したかのようにがっくりと肩を落とし、女性の瞳を見つめ返した。

「もう～、誰かに聞かれたら本当にマズイんですよ？　ただでさえ、しょっちゅうこの部屋に入り浸ってるから、いつ僕らの関係を疑われても不思議じゃない状態なのに・・だからこそ、できるだけ学校の中ではファミリーネームで呼び合って、卒業まで気がつかれないようにしようって約束したでしょ？」

「連夜くん。お・ね・が・い」

なんとか最後の抵抗をしようとする少年だったが、美しい女性のすがりつくような視線を真向から見てしまい、ついに抵抗を諦める。そして、今まで以上に顔を赤くして若干顔を背け気味にし、ちらちらと横眼で女性を見ながら、おずおずと口を開いた。

「今だけですよ・・その・・玉藻さん」

少年に名前を呼んでもらった女性は、ぱあっと表情を明るくすると、素早く片手を離して少年の顎を強く、しかし、痛くならないよ

うに掴む。少年は女性が何をしようとしているのか咄嗟にわからず、しばし呆気に取られてその手を見つめていたが・・

「あの、玉藻さん、何を・・むぐっ！！」

くいっと顎を掴んだ片手をひねって少年の顔を自分のほうに向けさせた女性は、その唇に自分のそれを重ねる。しばらくの間情熱的に少年のそれに重ね続け、やがて恍惚とした表情で唇を離し、大輪の華のような笑みを浮かばせて見せる。

「好き・・大好きよ、連夜くん」

唇を奪われた少年は、一瞬怒ったような表情を浮かべて目の前の女性に文句を言おうとしたが、それよりも早くなんともいえない幸せいっぱいに自分に向けての好意を口にする女性の姿に何も言えなくなってしまい、ただただ口をぱくぱくさせるだけ。

「連夜くんは？　連夜くんは私のこと好き？」

「あ、当り前じゃないですか。好きですよ。誰よりも玉藻さんのことが大好きだし、大切に想ってます。・・って、ご存知でしょ？」

「うん、知ってる。よ～く知ってる。でも、やっぱりその想いを口にしてほしいの。そして、それを聞きたいの。連夜くんの口から出た言葉で聞きたいの、どんな音楽よりも、誰の言葉よりも、いつでも、どこでも聞いていたいの。そして、そして、私の想いを聞いてほしいの、知ってほしいの、ほかの誰でもない、連夜くん自身に」

これ以上ないくらい熱烈な愛の告白をしてくる女性に、少年はしきりに照れて、女性の腕の中でみるみる小さくなっていく。

「う、嬉しいですし、幸せですし、光栄です。一流女優なんかめじゃないくらい奇麗で、頭もよくて、スポーツもできて、おまけに喧嘩も強い玉藻さんが、なんの取り柄もない、強くもなければかっこよくもない、大して価値もない僕をどうしてそこまで慕って下さるのかわからないですけど・・」

「そんなことない！！　連夜くんは強いしかっこいいわよ！！　それに他の誰かにとっては価値がないかもしれないけど、私にとっては自分の命と同じくらいあなたには価値があるわ」

「う・・自分ではそうは思えないですけど、少なくとも玉藻さんが恥ずかしい想いをしない程度には価値のある男になりますね」

「もう、なってるわよ。私の中ではあなたは本当に一番いい男なんだから、そして、私の大事な大事な宝物なんだから」

自分の腕の中で小さくなっている少年のほっぺに、自分のほっぺをぐりぐりと押し付けながら、女性はきっぱりと断言する。そんな女性の姿を少年は苦笑を浮かべて見つめていたが、やがて女性と同じような幸せそうな笑顔を浮かべて女性の身体を抱きしめ返す。

「ずっと・・ずっと玉藻さんの側にいさせてくださいね」

「当たり前じゃない、連夜くんは、ずっとずっと私の側にいるのよ。ずっと、これからもずっとずっといつまでも一緒にね」

「はい」

そう言って見つめあった二人は、もう一度唇を重ね合う。遠い昔

に交わした約束をもう一度確認しあうように。

ここは違うどこかの世界。

長い長い時の果てに再び巡り合った二人のカップルの他愛のない、穏やかだけど賑やかな日常が始まる。

「ところで連夜くん」

「なんですか、玉藻さん」

「結局、私の大切な宝物を傷つけてくれたのはいったいどこのどなた様なのかしら？」

「お、教えたらどうなるんですか？」

「ふふふ、二度とそういうことがないように、きっちりお話しようと思うの。それはもう、念入りに、微に入り細に入り、懇切丁寧にね・・うふふ・・うふふふふ・・どこをどうへし折ってやろうかしら・・」

「ぜ、絶対教えません」

第一話　『狐と少年』

暖かく気持ちよい風が入ってきている方向にふと視線を向けてみた保健室の主は、その風の通り道となっている窓の向こうに何かをみつけて椅子から立ち上がると小走りに窓へと駆け寄る。うららかな春の日差しに目を細めつつも窓から半分身を乗り出したその人物は、窓の外の向こう側に広がる大きなグラウンドに目を凝らす。

窓の向こうに見えているのはのは直径2ギロメトルはあるという恐ろしく広くでかいすり鉢状になった円形のグラウンド。今ここには種々雑多な姿形をした大勢の生徒達の姿があった。

全員同じデザインの3年生を示す深い紺色のジャージと、白い体操服を着用しているため、かろうじて同じ学年の生徒であると判別できるが、それぞれの姿形の統一性は全くなく、体操服がなければ学年どころか、年齢さえ判別できないだろう。

3メトルはあるだろう巨大な体格を持つ巨人族系から、1メトルにも満たない身長の小柄な小人族系の生徒。直立したトカゲや双頭の蛇といった爬虫類系、シルエットこそ『人』型をしているが全身は獣毛に覆われ、腰からは尻尾、、そしてなによりもその頭は狼や猫、あるいは牛の頭そのものという半獣人系の生徒、ガラス細工のように儚くも美しい姿をした妖精系の生徒、まるで無骨な鎧甲冑か、あるいは特撮ヒーローのスーパースーツでも身にまとっているようなギラギラと光る外骨格で構成された昆虫系の生徒、それはもうこの世界に住む様々な『人』種の博覧会のような幻想的な光景だが・・

「これだけの『人』種が揃っていても全種族の種類の一割にも満たないんでしょうね・・『人』の種類って、本当に多彩よねえ」

すり鉢の端にあたる少し高い場所に立つ五階建て校舎の一階にある保健室の窓から感慨深げに見つめ、ぼんやりと呟いてみせる保健

室の主。
　その呟きが聞こえたわけではないだろうが、何人かの生徒が保健室の窓から自分達を覗いている人物がいることに気がついてそちらに視線を走らせるのが、彼女の目に映る。生徒達がいる場所と、自分がいる保健室のある場所はかなり離れているが、眼のいい種族からすればそれほど遠いという距離でもない。彼女を見つけたのは恐らくそういった眼のいい種族の者達だったのだろう。生徒達は誰が見ているんだろうと、興味本位でこちらの姿をじ～～っと見つめていたが、窓から身を乗り出している自分が誰なのかわかった瞬間、一斉に顔を強張らせ回れ右をする。
　そして、何も見なかったことにするかのように、そして、窓の主から逃れるように怯えた表情で他の生徒達が密集しているところにそそくさと入り込んでいく。
　その様子を見ていたその人物は、一瞬凄まじい怒りと敵意を込めた表情を浮かべ、自分をまるで化け物でも見るような目で見ていた生徒達に殺意のこもった視線を走らせてみせたが、すぐに思いなおすと何とも言えない苦笑を浮かべて表情和らげる。

「って、なるべく『人』を寄せ付けない為に、わざとこういう姿をしてるんだから、当然と言えば当然の反応よね。あ～、でも、やっぱり腹立つなあ」

　小さく呟いてみせると、がっくりと肩を落とし、たははと力無く笑ってみせる。
　そう、保健室の主である彼女の姿は少しばかり他の『人』達とは違っていた。
　種々雑多、実に様々な姿形をした『人』種が日常的に暮らしているこの世界。当然であるが、この世界の住人達は隣人が多少変わった姿形をしていても大して驚いたりはしない。６メトルを超す巨体を持つドラゴン族もいれば、１メトルどころか、５０ゼンジメトル

ほどしかない極東小人族（コロポックル）だっている。それもそういう特別な姿形をした種族が一種だけで存在しているわけではない。一つの体系だけでも実に多岐に渡って存在している。上半身が美しい女性で下半身が大蛇である種族なら、西域半人半蛇族（ラミア）や東方半人半蛇族（ぬれおんな）があるし、頭が牛で首から下が人というなら西域牛頭人体族（ミノタウロス）に、東方牛頭人体族（しゅう）だっている。数え上げていたらきりがないし、気にするだけ無駄である。

そういうわけで、普通は外見を見てどうこうということはまあまずないし、ありえない。

だがしかしである。

その外見に意味があるとするならば、話は別だ。

例えば、かつて『国』というものがあった頃に力を持って君臨していた王族や、貴族の末裔。現在『上級種族』と呼ばれている稀少種族の子孫達であるとか、あるいは、その逆に、その『上級種族』達によって最下位に位置する者、『奴隷種族』などという不名誉な蔑称を与えられて差別されていたもの達。現在『下級種族』と呼ばれている種族の者達などの場合は、やはりどうしても外見で判断されがちである。

『国』というものが存在しなくなり、種族間でいがみあっていては決して生き残れない時代になってより、ほとんどそういった差別はなくなってはいるが、かといって完全に消滅したわけではいない。ごく一部ではあるが悪しき慣習として今尚根強く残っている。

しかし、保健室の彼女の場合は、そのどちらの場合でもない。

確かに彼女は、圧倒的な『霊力』を誇り東方の国々で隆盛を誇った『上級種族』の一つ霊狐族の末裔である。そう言った意味では確かに一目置かれてもおかしくない立場であったが、そうではないのだ。

原因は、彼女が他の霊狐族の者と違う容姿をしているということにある。それもかなりよくない方に違っていた。

霊狐族に伝わるある伝説をあまりよく知らない『人』が彼女の容

姿を見たならば、少々変わってはいるものの、なかなかのものであると感じるだろう。いや、なかなかどころではない、獣人族系の女性の中では間違いなく美女に入る容姿をしているのだ。

大きめの白衣から覗く手や尻尾を覆うのは金色の獣毛。金色といってもくすんでいるような色ではない、間違いない黄金の光を放つ美しい艶々とした毛で、かといって固いという印象はなく、みるからに柔らかそうなそれは文句のつけどころのない美しい毛並みをしている。毛ばかりではない、スタイルだって素晴らしいものがある。大きめの白衣に身を包んでいるため遠くからではそのスタイルはわかりづらいが、近くに寄って大きく開いた白衣の間から見える普段着の彼女の姿を見れば、ちょっと見ただけでも物凄いスタイルの持ち主だとわかるだろう。はちきれんばかりに大きな胸は決して形を崩しておらず、まただからといって太っているわけではなく腰はきゅっとくびれている。お尻も明らかに引き締まっているものの、女性特有の丸みがあり実に魅力的、足もすらっとして長くなかなかの脚線美の持ち主。これだけの器量もちであれば、普通恐れられるよりも圧倒的に好意の目で見られそうものなのだが、ある部分が彼女の印象を『恐怖』に決定付けてしまっていた。

顔である。

いや、遠眼に見ればむしろその顔だって美しいといえる。一つ一つのパーツは実によく整っているし、狐の顔であり人型種族の者達からしたら魅力がなくても、獣人系の者達には十分に魅力的なはずだった。

しかし、しかしである。

残念なことに、彼女を真正面から見た者のほとんどが、その心を『恐怖』に支配され間違いなくまわれ右させてしまうのだ。

ぴんと立った狐の耳、妖しい光を放つ金色の瞳、耳まで裂けた大きな口、そして、その口にズラリと並ぶのは鋸の刃よりも鋭いであろう犬歯、そしてそして、まるで虚無そのもののような真っ白な顔には、血のように赤いくまどり模様が浮かんでいた。

『金毛白面九尾の狐（エンパイアブレイカー）』

他種族にまで悪名を轟かせる伝説の魔狐。かつてその膨大な霊力を操り、十二人の英雄を抹殺し、七つの騎士団を壊滅させ、四つの国家を滅ぼしたという血も涙もない残虐非道な大悪党。

と・・いってもそれは千年も昔に存在した彼女とは全く関係ない別人のことで、今となってはただの伝説でおとぎ話であることを皆が皆知っている。姿形だってそうだ。確かに金毛白面の彼女だが、尻尾は九本には程遠い三本しかなく、霊力だってほとんど持ってない。

普通なら、『ああ、言われてみれば似てるね』で済む話だったのだが。

「やっぱ、就任初日のあれが悪かったのかなあ・・」

四月の始業式の後にあった、一連の出来事を思い出した保健室の主は、なんとも言えない切なげな溜息を吐きだして見せる。

彼女の名前は『如月（きさらぎ）　玉藻（たまも）』

北方に位置する城砦都市『嶺斬泊』。その中に存在している四つの高校の一つ『都市立御稜高校』にこの春臨時で就任した教育研修生。『都市立御稜大学』に通う今年二十一歳になる大学三年生というのが本来の彼女の立ち位置。

非常に優秀な大学生である彼女は三年生にしてすでに卒業必要な単位を全て修得してしまっていて、後はのんびり好きなことをして大学生活を楽しむ予定だったのだが、彼女の師匠とも言うべき大学のある教授が、いい機会だから現場で実習を積みなさいと彼女に提案。

しかし、今更高校に行って、現役高校生と接触する機会をもらったからといって得る物があるとは思えず、丁重にお断りをいれようとしたのだったが、赴任先を聞いて百八十度態度を逆転させる。むしろ、是非行かせてくださいと教授に懇願し、晴れて御稜高校の臨時保険医になったのだった。

ちなみに元々いた保険医の先生は産休の為長期休暇に突入。

本当なら別の学校の保険医の先生を迎える予定だったのだが、その先生は直前で他の病院に引き抜かれてしまい契約は白紙に。困った高校側は大学側に泣きついた。で、その話を教授が聞きつけ、大学でも優秀な『療術師』として名を馳せていて、教授自身も信頼している玉藻に白羽の矢がたてられたというわけである。

結局、玉藻が教育実習生として一年間の期限で常駐することが決定し、今年の春の始業式から赴任することに。

「始業式そのものは問題なかったのになあ」

そう、玉藻の言葉通り、始業式そのものは何の問題もなくつつがなく終わった。結構面白かった校長先生の若き日の冒険談はともかく、次にあった教頭の自慢話はあまりにもつまらないうえにしょうもなく、あやうく爆睡しそうになったりしたが、それでもなんとか耐えきり、壇上に上がって自分の自己紹介も済ませ、無事平穏に終わったのだ。

しかし、その後に問題が待ち構えていた。現在この学校で一番大きな勢力を誇る不良集団が、玉藻に目をつけて早速因縁をつけてきたのだ。いや、因縁だけならばまだいい、軽くあしらって追い返すか、無視すればいいだけだったのだが、あろうことか不良集団のリーダーが玉藻の美貌に目をつけて取り巻きを使って力づくで手込めにしようとしてきたのだ。

流石にそれを看過するわけにはいかない。これからのこともあるので、ちょっと厳しく指導したのだが・・

他の生徒達に見られたわけではないし、玉藻にほとんど全殺し気味にシメラれた・・いや厳しく指導された不良達は自分達の悪事が露見することを恐れ、玉藻の厳しい指導内容については決して口外したりはしなかったが、それでもどこからどう漏れたのか、学校きっての猛者達が新人保険医に全殺しにされたという噂は始業式の翌日には全校に広がっており、そこから『金毛白面九尾の狐（エンバイアブレイカー）』の伝説が始まってしまったのだった。

ある事情から、あまり保健室に『人』が・・特に男が来ることを望まなかった玉藻は、これ幸いと噂をそのままにしておいたのだが、玉藻の予想以上に尾びれ背びれがついて広まっていき、今では恐怖の象徴扱いである。

まあ、玉藻が常に仏頂面で人とのコミュニケーションをとりたがらず、男共を遠ざけるために『恐怖』のオーラを撒き散らしているというせいもあるのだが。

「ちょ～～～っとやり過ぎたかなあ・・まあ、でも別にいいか。わかってくれる『人』はわかってくれてるし」

そう呟いて、う～～んと一つ伸びをした玉藻だったが、再びグラウンドに目を向けてみたときに、あることに気がついて身体を硬直させる。

「あ・・」

小さく呻いて身体をさらに窓から乗り出した彼女は、自分の視線にあるものをもっとよく見ようと懸命に目を凝らす。

その視線の先には、大柄な巨人族やトロール族に紛れる感じで立つ、一人の小柄な人間族の少年の姿があった。

遠目からでも絶対に見間違えない、ほかの誰かならばともかく、彼女だけは絶対に間違えることなどありえないその姿。月のない日

の怖いくらいに深い、しかし、どこか優しい感じのする夜空のような色をした黒い髪に、黒い瞳、白い体操服から伸びた健康的な腕、ボクサーパンツに近い体操ズボンから伸びた細いが引き締まった足、そしてなによりも、見る人の心を包み込むような穏やかな笑顔。

そんな少年を呆けたような表情でしばらく見つめ続ける玉藻。どこか切なそうに、どこか夢見るように、しかし、明らかに幸せそうに少年を見つめ続ける。穏やかな笑顔を浮かべ続けている少年の顔、中でも吸い込まれそうになる黒い優しい瞳をどれくらい見つめていただろうか、恐らくそれほどの時間は経ってなかったはずだが、玉藻はあることにはっと気がつく。

「ひょっとして・・私に気がついてる?」

一方的に鑑賞していたと思っていた玉藻だったが、少年の身体はこちらを向き、その瞳は真っ直ぐ自分のほうを見つめていることに今更ながらに気がついた。

「や、やだ、ちょっともう・・」

呆けたような間抜けな顔を見られていたとわかって、玉藻は顔を赤らめながら『にゃ〜〜!!』と慌てふためきながら両手をバタバタさせるが、その様子を見ていたらしい少年が、自分に玉藻が手を振ってくれていると勘違いしたのか、玉藻と同じように顔を赤らめてはにかんだ笑みを浮かべながら、小さく手を振り返しているのが見えた。

玉藻はそんな少年の姿を見て一瞬動きを止めると、自分に手を振り続けている少年の姿をじっと見つめる。そして、先程まで噴出していた『恐怖』のオーラはどこにいってしまったのか、物凄く力いっぱいこれ以上ないというくらいの幸せそうな笑みを浮かべて窓枠に足をかけてその身を乗り出させると、両手と三本の尻尾をぶんぶん

振りまわして少年に応えてみせる。
　そうして、しばらく二人だけの幸せな空間を作り上げていた玉藻達だったが、やがて体育担当の教師がやってきて生徒達を呼び、少年も体育教師のところにいくためにそこを離れようとする。
　その様子を見ていた玉藻は、明らかに残念無念という表情を作ったが、果たしてその表情までも見えていたのだろうか。駆け出してからすぐに立ち止まった少年は、振り返って玉藻のほうをもう一度見つめると、声に出てはいないようだが、まるで玉藻に見せるようにゆっくりと口を動かして見せる。
　玉藻は、そんな少年の様子を呆けたように見つめていたが、その口の動きからなんと言ったのかがわかると、瞬間湯沸かし器のように顔を真っ赤にして窓枠からずり落ちてしまうのだった。
　一瞬視界から消えた玉藻を見て、少年はちょっと慌てたような心配そうな表情を浮かべていたが、すぐに窓枠に白面の雌狐が顔を覗かせるのを確認するとほっとした様子で胸をなでおろす。そして、その雌狐が片手を自分の胸に当てて、先程の少年と同じようにゆっくりと口を動かして見せるのを見て、その意味が『あたしも』だとわかると、物凄く照れたような、そして嬉しそうな顔で頭をかくと、もう一度玉藻に手を大きく振って見せてから、体育教師のほうに走っていった。
　そんな少年の後ろ姿をなんともいえない優しい瞳で見つめて見送った玉藻は、彼が他の生徒達の群れの中に入って見えなくなると、顔を俯かせて切なげに吐息を洩らしてみせる。

「もう、年上をからかって。何が『愛しています』よ！！　・・って、からかってないわね。連夜くん、そういうこと言うときはいつも本気だし、あ～、もう、ほんとにかわいいんだから！！　なんでこんなに愛おしいんだろう！？　連夜くん、大好き！！　ほんとにほんとに私も愛しているからね！！」

両手で自分の白い狐顔を押さえながら、少女のようにキャーキャー騒ぎながら幸せそうに部屋中を跳ねまわる玉藻。

そう、あの黒髪黒眼の人間族の少年は、彼女の・・霊狐族の臨時女性保険医である如月（きさらぎ）　玉藻（たまも）の最愛の恋人。

彼の名は『宿難（すくな）　連夜（れんや）』。

この『都市立御稜高校』に通うもう直十八歳になる高校三年生の人間族の少年。

都市中央から若干離れた場所にある閑静な住宅街にある、そこそこ大きい一軒家に両親や三人の兄姉妹（きょうだい）達と住んでいる、一見ごく普通の少年。三つ年上の玉藻とは、接点がないように見えるが、実は連夜の姉が玉藻の同級生で小学生以来の大親友。それでも連夜と積極的に関わる機会はほとんどなく、一年前までは親しいどころかほとんど言葉も交わすことのない間柄であったのだが、あること事件がきっかけで玉藻は連夜に一目惚れしてしまう。そして、一年前のゴールデンウィークのある日、玉藻が連夜に自分のモノになってくれと懇願し、それを連夜が受け入れる形で恋人同士に。紆余曲折はいろいろとあるし、喧嘩や意見の食い違いから一瞬気まずくなったりすることもあるが、世間一般の恋人達からすればそんな期間が存在するのは文字通り一瞬のみ。基本的に両人が両人ともお互いにべた惚れであるため、喧嘩したままであるとか、気まずいままであるとかいう状態に耐えられずすぐに仲直りしてしまうのである。　後に残るのはひたすらに極甘の時間。

ちなみに玉藻と連夜はただの恋人同士というだけの関係ではすでにない。正式に婚約を交わしていて近いうちに結婚することが確定している間柄である。

ともかく、世間一般でいうところのバカップルという言葉すら生ぬるいくらい、仲が良すぎる完全無欠にバカップルな彼らであるが、ごくごく一部の身内以外にはその関係を公表していない。付き合い始めた当初は、別に絶対に秘密にしなくてはならないとは思ってい

なかった二人であったが、とある人物の連夜に対するある想いを知ってしまい、その人物にだけは自分達の関係を知られるのは非常にマズイという結論になってしまったのである。だとしても他の『人』達には言えないこともないのだが、ちょっとでも他に漏らすとその人物の耳に入りかねないという微妙な位置にその人物がいるため、周囲にもなかなか切り出せない状態となってしまっているのだ。

まあ、いずれはきっちり白黒つけるということを玉藻も連夜も決意しているが、今の段階ではまだ秘密を保持しなくてはならない。

で、どうせ、秘密を守らなくてはならないのなら、一つや二つその秘密が増えたところでおんなじだと考えた玉藻は、この臨時保険医の話に飛びついたというわけである。

二人の関係を学校側に秘密にしなくてはならないものの、愛する少年と同じ場所にいて、同じ時間を過ごすことができるのであるからと。

「この仕事受けて本当によかったあ・・こうしてほとんど毎日連夜くんに会えるし。ただまあ話すだけでも周囲に気を使わなくてはいけないし、二人だけになる機会を作るのが大変だったりするけど、それはそれでまた違った楽しみがあるというか」

くふふと、いたずらっこのような表情を浮かべて忍び笑いをもらす玉藻。

「体育の授業のあとは昼休み、さあて今日はどうやって連夜くんを呼び出してお昼ごはんを一緒に食べようかしら。ワンパターンだけど、日誌を取りに来るように放送するのが一番固いかな。うふふ、連夜くんたらきっとまた慌てて走ってくるんだわ。そして、こう言うわね、『玉藻さん、私用で学校の放送を使うのはやめてください!!　めちゃくちゃ恥ずかしいです!!』って。あははは。怒った顔もまたかわいいのよねえ」

このあと実行することになるであろう、いたずらを兼ねた恋人へのラブコールの結果を予想し、屈託のない笑い声をあげる。

「でも、あまり怒らせるとお弁当もらえなくなっちゃいそうだから、そこそこにしとかないとね。やっぱり怒った顔よりも笑ってる顔のほうが素敵だしね」

そう呟いて笑い声を収めると、玉藻は再び窓のほうに歩み寄ってグラウンドのほうに視線を向ける。最愛の恋人が頑張って体育の授業を受けている姿をもう一度よく眼を凝らす。

だが・・

「な・・何？　ま、まさか！？」

玉藻の目に飛び込んで来たのは、広いグラウンドを覆い隠すほどの白煙。そして、グラウンドのあちこちから聞こえてくる怒号。

しばし、呆気に取られてその様子を見つめていた玉藻だったが、すぐに表情を引き締めると部屋の中の自分の机のほうに引き返し着ている白衣を脱いで、机の上に放り投げる。白衣だけではない、下に来ていたタートルネックのセーターも、巻きつけ型のタイトスカートも素早く脱ぎ去る。そして、その下から現れたのは魅惑的な下着姿ではなく、身体の線がはっきりわかる濃いい青色のボディスーツ。玉藻は机の真横にあるロッカーをあけて迷彩色の袖なしの軍用ジャケットと、ブーツ、それに無骨なアームガードを取り出して素早く身につけると、両腕を目の前で十文字に交差して構え、一気に開くようにして左右に振りぬいて気合いのこもった雄叫びをあげる。

「おおおおおおっ！！」

玉藻の顔が一瞬にして狐から『人』の顔へ変貌する。顔だけではない、狐の耳、尻尾はそのまま残ってはいるものの、全身を覆っていた金色の体毛はなくなり、抜けるような白い肌が眩しい、目もくらむような人型種族の美女の姿に。

玉藻はロッカーの扉の裏に設置してある鏡で自分の姿が、この学校ではほとんど知られていない人型の姿に変化したことを確認すると、仕上げとばかりに暗視ゴーグルにもなる特殊サングラスを着用。

鏡の中の自分に一つ大きく頷いてみせると、そのまま部屋の窓へと突進してそこから外へと飛び出す。そして、凄まじい勢いで斜面を駆け降り白煙が舞い上がるグラウンドへと弾丸のように突き進んでいく。そして、一瞬の迷いもなく白煙の中へと飛び込む。

第二話　『麗狐乱舞』

白煙の中は大乱闘の真っ最中、体操服姿の生徒達と、改造していると思われるバラバラな学ラン姿の生徒達があちこちで戦っているのが見えた。その学ラン姿の生徒達をよく見てみると、玉藻の記憶にひっかかる顔がちらほらと見える。

「私が赴任初日にシメてやったやつらか。ほんと懲りないわねえ」

恐らく襲撃してきたのはこいつらだ。それも大した理由ではないに違いない。退屈しのぎ程度で授業を妨害しに来たのだろう。呆れ返り何とも言えない軽蔑しきった表情で不良達を見つめる玉藻。溜息を一つ吐き出して一瞬疲れたような表情になりがっくりと肩を落として見せるが、次の瞬間、獰猛な肉食獣のそれへと表情を変化させる。そして、すぐ近くで草原妖精族（グラスピクシー）の少年の上に馬乗りになり、下卑た表情を浮かべて少年を殴打しようとしていた魔族の不良の側まで一瞬で移動すると、その脇腹をとんでもない力で蹴り飛ばし、宙へと舞いあげる。

「ぎゃぴっ！！」

一瞬自分に何が起きたのかわからなかった不良は、痛む脇腹を押えながら空中でバタバタともがき続ける。その後、ある程度まで宙を上がって地面に向かって落下し始めたとき、ちょうど下を見た彼は、そこに待ちうける者を確認し恐怖で身体を強張らせる。

「え、ちょ、ま、待って・・」

「誰が待つものか。くるくる回って飛んで行け！！」

「い、いや、ちょっと・・グッギャアアア！！」

まるで伝説の悪狐そのものといった凶悪な笑顔を浮かべて落下してくる不良を待ち構えていた玉藻は、恐ろしいまでに美しいフォームで宙へと跳び上がると、全身のバネを存分に活かした旋風回転蹴りを落ちてきた不良の太った脂肪だらけの腹へと叩きつける。まともにそれを食らうことになった不良は扼殺される寸前の鶏のような泣き声を響かせながら白煙の彼方へと消えて行った。

それを茫然と見送った草原妖精族（グラスピクシー）の少年は、横にしゅたっと降り立った玉藻のほうに視線を移すと、引き攣った笑みを浮かべて礼を言うのだった。

「た、助けてくれてありがとう」

「ああ、いいのよ別に。ついでよついで。どうせ全員蹴り倒すし。一人蹴り倒すのも二人蹴り倒すのも同じだから」

「そ、そうなんですか？」

玉藻の言葉を聞いた少年は更に表情を引き攣らせ強張らせるが、そちらには視線を向けず玉藻は周囲で暴れまわる不良達へ強烈な怒りの視線を向ける。本来、玉藻にしてみれば不良どもがどこで何をどうしようとどうでもいいし興味なんて全くない。それほど他人に対して思うことなどほとんどない玉藻である。自分に関係のないことであればどこで何をしていようが、誰が傷つこうが、どんな悪事が横行していようが、全く全然これぽっちも興味などないのだ。

だが・・

そんな玉藻の唯一とも言える逆鱗に、不良達は直球ド真ん中ドストライク、振っただけで素人でもホームラン的に直触りしてしまっ

たのである。

「他の授業ならともかく、連夜くんが受けている授業を妨害するなんて・・ああっ、そうだ!!　肝心の連夜くんを探さなくちゃ!!」

腹立たしげな様子を隠そうともせず、周囲で暴れている不良達に音もなく近づいた玉藻は、ハイキックやら浴びせ蹴りやら容赦なく大技を叩きつけて次々と戦闘不能にして黙らせていく。しかし、ある程度周囲を鎮圧して周りが落ち着いてくると、ふと我に返り自分の目的を思い出す。そして、きょろきょろと周囲を探し始める。すると、その独り言を聞いていたのか、さっき助けてあげた草原妖精(グラスピクシー)族の少年が玉藻の側におずおずとやってきた。

「あ、あの、おねえさん、ひょっとして宿難(すくな)を探しているの?」

「え!?　ああ、そうよ。どこにいるのか知ってるの?」

その言葉に速攻で反応した玉藻は、必死の形相で少年に顔を近づけてくる。勿論玉藻に他意は全くなかったが、必要以上に美しい玉藻の顔を間近に見ることになった少年は、胸の鼓動を抑えることができず、顔を真っ赤にして咄嗟に答えることができない。しかし、なんとか息を整えると上気した顔のまま詰まりながらも玉藻の質問に答えてみせる。

「い、今はどこにいるかわからないけど、乱闘が始まってすぐ平和主義で抵抗らしい抵抗をしないから特に狙われやすい植物系や、身体的に弱い小人系の生徒達を集めて連れ出して体育館に避難しようとしていたよ」

「そ、そう、教えてくれてありがとうね!!」

少年の言葉を聞いた玉藻はもどかしげに体育館がある方向に身体を向けると、そっちに向かって走り出そうとする。だが、そんな玉藻の背中に少年が慌てたように声をかける。

「あ、ちょ、ちょっと待って、お姉さんはいったい誰なの!?」

その声を聞いた玉藻はちょっと立ち止まって振り返ると、なんとも言えない困ったような表情を浮かべていたが、やがて、引き攣ったような笑顔を浮かべて見せる。

「え、えっと、その・・と、通りすがりの元風紀委員かな?」

「元・・風紀委員?」

「や、やっぱり忘れて、今の覚えていなくていいからね!! ってか、忘れなさい、いいわね!!」

言葉の最後で照れ隠し気味にキレたように絶叫すると、玉藻は草原妖精族(ラスピクシー)の少年を後に残し、白煙渦巻くグラウンド(グ)の中を再び駆け抜けて行った。

「か、かっこいいおねえさんだったなあ・・」

白煙の彼方に姿を消したなぞのおねえさんをしばらく上気した顔で見送った少年だったが、やがて、二つほど頭を横に軽く振ってみせると、不良達にやられてうずくまっている生徒達を助け起こしてまわりはじめた。

もちろん、玉藻にやられて悶絶している不良達のことはまったく助けようとせず、放置したままであったが。

「あ～、もう私としたことが・・何が元風紀委員よ、もっと他に何かあったはずなのに、もう～～！！　ま、まあいいわ。どうせ、あの子も忘れちゃうだろうし、それよりも今は連夜くんだわ。連夜くんを早く見つけ出さないと・・」

自分が口走ってしまった恥ずかしい言葉の内容を思い出して悶絶しそうになる玉藻だったが、悶絶している場合ではないと必死で気を取り直し、白煙の中を駆け巡りながら愛おしい恋人の姿を探そうとした。

だが、そのとき、玉藻の耳に聞きなれた少年達の声が響き渡る。

『待たせたな連夜、他の連中は無事逃がしたぜ！！』

『時間稼ぎとはいえ、おまえ一人に押し付けて悪かった。だが、ここからは俺達の出番だ、おまえはゆっくり休んでろ！！』

『連夜、こんなに傷だらけになってしまって・・許さない、絶対に許さないぞ、貴様ら！！　ボクの心友をよくもここまで傷つけてくれたな！！』

『ああ、クリス、ロム、フェイ、みんなを逃がしてくれてありがとう。だけど僕なら大丈夫。さあ、反撃を開始しよう！！』

いつもの優しく甘い声ではない、その声の響きには凛々しさがあり、頼もしさがあった。玉藻は、その声の主が間違いなく自分の探し人であると確信し、その声のした方向に視線を向ける。

「い、いまの声は・・れ、連夜くんなの！？」

視線の先は相変わらず白煙が立ちこめ、わずか数メトル先すら見通せない視界の悪さ。しかし、その向こうで激しく戦いあっていると思われる複数の『人』の気配に向かって、玉藻は迷わず走り出す。

『くっそ、ざっけんなよ、ちび！！』

『裏切り種族の人間に、奴隷種族のバグベア、もやしみてえなエルフ族にかっこだけの朱雀族で、俺達がどうにかなると思ってんのか、ゴラッ！！』

『なめんじゃねえぞ、全員両腕両足へし折ってだるまにしてやる！！』

耳障りな口汚い言葉が玉藻の耳に響き渡る。玉藻は焦りを含んだ表情で白煙の中を更に速度をあげて突っ切っていく。すると、不意に視界がひらけ、白煙がない場所へと足を踏み入れることに。そこはどういう現象になっているのかわからないが、ドーム状に白煙が晴れていて、中にいる者達の姿をはっきり視認できるようになっていた。

玉藻は体操服姿と学ラン姿の生徒達が入り乱れて戦っている様子をもどかしげに見つめる。

「れ、連夜くんどこ！？　ああ、お願い、無事で・・って、あれ？」

最愛の恋人の身を案じ、乱闘の中に恋人姿を探していた玉藻だったが、その目的の人物を捜し出したとき、自分の予想とは大きく違った展開になっていることを知って思わずあんぐりと口を開けて固まってしまう。

「ぎゃあああっ！！」

「こ、このちび、なんてこと・・をををばばばっぎゃあああああっ！！」

学ラン姿の不良達の間を四人の体操服姿の生徒達が駆け抜けていく。彼らが側を通るたびに不良達はなぎ倒され、あるいはふっとび、あるいは悶絶して倒れていく。小柄な体格のかわいらしい姿のエルフ族の少年が凄まじいスピードで不良達を掻きまわし、あとに続く百九十ゼンチメトル近くあるであろう巨漢のバグベア族の少年が、その剛腕で不良達を叩き伏せる。そして、あとからやってきた少年三人組最後の一人である朱雀族の少年は、不良たちの頭や肩を次々と踏みつけて宙を舞い、華麗な空中殺法で不良たちを地面へと沈めていく。しかし、たった三人で戦うには相手の数はあまりにも多く、普通なら、どこかで疲れ果てる。そうなってしまったら、もう終りである。数に物をいわされてつかまって袋叩きにされてしまうだろう。

だが、この場にいたのは三人だけではなかった。直接拳をふるっているわけではない、直接不良を叩きつぶしているわけではない。だが、しかし、間違いなく不良達にとっては最悪の敵がもう一人存在していた。

決して身体的に優れているとは思えない外見。

エルフ族の少年と同じくらいの身長で、若干エルフ族の少年よりは筋肉がついているものの、だからといって巨人族やトロール族をぶっとばしているバグベア族の少年と同じような驚異的な力があるわけではない。その見た目通り、その人物にそんな力はなかった。

では、エルフ族の少年のように凄まじいスピードで動くことができる敏捷性があるのだろうか。

いや、それもない。他種族が持つ身体的な驚異的運動能力は最後の人物には備わっていなかった。何の能力も持たないことで知られる人間族の平均的よりはちょっとばかり優れているが、驚異という

にははるか及ばない。ましてや宙を華麗に舞い跳ぶ朱雀族の少年のような身体的特殊能力などもあるはずがなかった。

だが、『驚異』はなくとも、彼は十分『脅威』であった。

前線で戦うエルフ族の少年、バグベア族の少年、朱雀族の少年の三人の後ろにぴったりと張り付き、いったいどこから持ち出してきたのか両手の指にズラリと挟み持った親指ほどの大きさの『珠』を次々と戦場にばら撒いて、力ある呪言を唱えて発動させていく。

ある『珠』は地面を柔らかくする効果を発動して不良達を動けなくする、ある『珠』は黄色い煙を噴出させ不良達を咳きこませ隙を作る、ある『珠』からは緑の光が放たれ、それを浴びたエルフ族やバグベア族の少年の傷を治す効果を発揮する。

『珠』は一般的に『道具』と呼ばれているものである。

ある事情から世界で『霊力』や『魔力』といった異界の力を用いた超常的な魔法が使えなくなってから五百年。魔法の代用品の一つとして生み出されたのがこの『道具』で、様々な効果を発動させる『力』を封じ込めた『珠』を使うことで魔法に近い力を使うことができる。

だが、この『道具』を使いこなすには、それなりに技術を磨かねばならず、一年や二年修業した程度では大した効果を発揮させることはできない。

日々たゆまぬ努力を十年以上続けた果てに身につく技術である。

そんな難しい技術であるから、会得しようという者は少数派であり、修行した者でもなかなか思う通りには使いこなせず、専用の補助器具を必要としたりするのだが、黒髪黒眼の人間族の少年は、そんな補助器具を全く身につけぬままに、自由自在に『珠』を・・・『道具』を扱って見せていた。

『道具使い（アイテムマスター）』

賞賛と尊敬と畏怖の意味を込めて『人』々からそう呼ばれる存在、

それが人間族の少年　宿難（すくな）　連夜（れんや）の正体だった。
　決して華麗な動きではない、素晴らしい戦いぶりを見せている仲間の少年達はもとより、相手である不良達の動きと比べてみても、無様でとろくさい。華麗に不良達のパンチを身切ってみせるエルフ族の少年とは違う、豪快に不良達のキックをはじき返すバグベア族の少年とも違う、蝶のように宙を駆け回って敵を翻弄する朱雀族の少年のような動きとも当然違う。地面を転がり、砂を掴んで投げて眼つぶしをし、時には両腕を交差してまともに不良のパンチを受け、痛みに顔をしかめながらもそれに耐える。他の二人の少年に比べれば、全身泥だらけ、体操服から見えている肌は、傷がないところを探すほうが早いくらいに顔も、腕も、足も傷だらけ。それでも、少年は歯を食いしばり、腰をすえ、足を踏ん張って立ち上がり続ける。自分と一緒に戦っている三人の少年達と共に、必死に不良に立ち向かっていっていた。
　そんな連夜の姿を見て、玉藻は一瞬泣き出しそうな表情を浮かべて見せたが、すぐに歯をくいしばってそれに耐えると、きっと怒ったような顔になって少年達の元へと駆け寄って行く。
　そして、大声を上げて乱闘の真っ最中の最愛の少年の名を呼ぶのだった。

「連夜くん！！」

「え、へ？　た、たまっ・・あ、あわわ、いやいや、な、なんであなたがこんなところに！？」

　近寄って来た最愛の恋人の姿を吃驚仰天して見つめた連夜は、あやうく恋人の名前を叫び返すところだったが、なんとか踏みとどまってそれを飲みこむと、バツが悪そうな顔でごにょごにょと何かをつぶやきながら顔を伏せる。
　すると、それを好機と見た不良の一人が、動きを止めた連夜に殴

りかかろうとするのだが。

「ぎゃははは、バカめっ！！　他所見しやがって、ぶっと・・」

「あんた、邪魔よ！！　どけっ！！」

「ぐぎゃあああああつ！！」

連夜に殴りかかろうとしたゴブリン族の不良は、それよりも早く放たれた玉藻の凄まじい回し蹴りを食らって後方へと弾丸のように吹き飛ばされていく。そのとんでもない様子を見ていた周囲の面々は思わず一斉に乱闘を止め、そのままの状態でかたまってしまう。

しかし、玉藻はそんな周囲の様子に気にする風もなくずんずんと連夜に近づくと、涙目になってしばらく連夜のことを見つめ続けていたが、やがて、目にも止まらぬ速さで連夜の顔を平手打ちした。

連夜はしばらく俯いて立っていたが、やがて玉藻の顔を見上げると心から申し訳なさそうに見つめ返す。

「ご、ごめんなさい・・その」

「馬鹿っ！！　あれほど危ないことしちゃ嫌だって言ってるのに！！　なんでいっつもいっつも危険のど真ん中にいるの！？　もし、あなたに何かあったら・・何かあったら私・・」

最初こそ勢いよく怒鳴っていた玉藻だったが、やがて両手で顔を覆っておいおいと泣きだしてしまった。それを見た連夜は慌てふためいて玉藻に駆け寄る。

「す、すいません、本当にすいません、ごめんなさい！！　いや、あの、ここまで大事になるとは思わなかったんですよ。本当に」

「嘘つき!!　あなたに見通せないはずないでしょ!?　どうせ、他の『人』に任せて被害を広げるくらいなら自分だけが傷ついて事態を収拾しようと思ったに違いないわ!!　馬鹿っ!!　ばかばかばかばかばかあああああっ!!」

「あ、あばばば・・す、すいま・・せん・・と、とにかくすいません・・」

そう言って連夜の胸倉を掴んで激しく揺さぶた玉藻だったが、やがて、連夜の顔が泥だらけ傷だらけであることに気がつくと、その顔をそっと手で拭って奇麗にしてやり、その後きゅっと自分の大きな胸に引き寄せて抱きしめる。

「こんなに傷だらけになっちゃって・・でも、無事でよかった。本当に本当にもう馬鹿なんだから!!」

「心配かけてしまってごめんなさい」

「心配かけるかけないよりも、お願いだからもっと自分を大事にして。わかった?」

「は、はい」

怒ったような悲しんでいるような複雑な表情で玉藻に怒られた連夜は、しゅ〜〜んと項垂れて返事を返す。その様子に反省の色が浮かんでいることを確認した玉藻は、ようやく表情を少し和らげると、すぐ側で油断なく玉藻と連夜を守るように立っているエルフ族とバグベア族、そして朱雀族の少年達のほうに視線を向ける。

「クリスくん、ロムくん、フェイくん、ありがとう。私の大事な連夜くんを守ってくれて本当にありがとうね」

「礼には及ばないぜ姐さん。連夜は俺達のリーダーだからよ」

「だけど、あまり叱らないでやってくれないか、姐さん。連夜がいなかったら、クラスの弱いやつらはこいつらにひどいめにあわされていたに違いないんだ。連夜はさ、ずっと差別されて生きてきたから、何のいわれもなく弱いものいじめされたり、差別されたりするやつを放ってはおけないんだ。俺はそんな連夜にかつて救われたからよくわかる」

「そうだな、連夜は基本的に弱いやつに優しい。不器用でも一生懸命がんばってるやつや、辛いことがあってもそれに負けないやつ、どれだけ相手が怖くて勝てないとわかっていても逃げないやつ、そんなやつらを見捨てることができないのが連夜だ。だから・・だからそんな連夜の行動を責めないであげてほしい」

玉藻と連夜の関係を知っている数少ない身内である三人の少年達は、口々に自分達のリーダーを庇う発言をし、それを聞いた玉藻は何とも言えない苦笑を浮かべて見せる。

「わかってるわよ。ちゃんとわかってるの。頭ではね。きっと、やむを得ずこうなったんだろうなって頭ではわかってるんだけど、感情では納得できないの。八あたりに近いってわかってるわ、でもね、これも私の本心なの。できれば危ないことはしてほしくない、どれほど卑怯者になっても、薄情者であっても、連夜くんには安全なところにいてほしいのよ」

「でも、僕は・・」

「わかってる。だから・・そんなあなたを守るために私がいるんだもの。本当はね、あなたが傷つく前に辿りついてあなたを守りたかったのに、あなたが思った以上に頑張っていたからちょっと悔しかっただけ。ごめんね。本当はね、連夜くんが戦ってる姿、かっこよかったって思っていたよ」

そう言って連夜の身体を離した玉藻は、にっこりと笑って見せ、連夜が何か口にしようとするよりも早く素早く顔を近づけてその唇を奪う。横でそれを見ていたエルフ族の少年とバグベア族、そして朱雀族の少年達は顔を見合せて苦笑を浮かべると、二人を見ないように再び不良達に視線を向け直す。

やがて、ゆっくりと唇を離した玉藻は、もう一度連夜に華のような笑みを浮かべて見せると、連夜に背を向けて不良達のほうへと歩きだす。

「クリスくん、ロムくん、フェイくんあとはいいわよ。ほかの怪我した生徒達を体育館前に集めておいてちょうだい。あとで救急セット持って治療しに来るから。そうそう、連夜くんは昼休みに一人で来てね。ゆっくり個人的に治療してあげるから」

振り返って魅力的なウインクをしながら連夜にそう言う玉藻を、一瞬顔を赤らめてびっくりしたように見つめた連夜だったが、やがて苦笑しながら頷いてみせる。その様子を横で見ていたエルフ族の少年とバグベア族の少年がニヤニヤしながら連夜の肩を両側から叩き、朱雀族の少年は『おまえは、いいな』と言わんばかりに笑顔を浮かべて連夜の胸を軽く拳で叩く。そんな彼らに対し連夜はバツが悪そうに顔をしかめてみせたが、結局屈託のない笑みを浮かべて三人を見返すと、彼らを促してそこを立ち去ろうとする。

すると、それまで呆けたように事態を見守っていた不良達が一斉にざわめきだし、立ち去ろうとする連夜達の行く手を阻もうと動きだす。

だが・・

「はいはい、あんた達は、いかなくていいのよ」

「どけや、くそおん・・ぐべばあああっ！！」

立ち去っていく連夜と不良達の間に割って入った玉藻に、不良の一人が拳を叩きつけようとするが、とんでもないスピードで跳ね上がった玉藻の足が不良の顎を蹴り砕く。蹴り砕かれた顎をおさえながら泣き叫んで地面をのたうちまわる不良を面白くもない表情で見下ろしていた玉藻だったが、やがて、その美しい姿を禍々しいまでの『恐怖』のオーラで包み、この場に残った不良達を絶対零度の笑みを浮かべて睨みつける。

「さて、あんた達、覚悟はいいかしら？　悪いお遊びの時間は終わり、これから始まるのはお仕置きの時間よ。あんた達に言いたいことはたった一つだけ」

そう言って自分の足もとの地面をざっざと片足で蹴って固めて、半身に構えた玉藻は凄まじいばかりの闘気を噴出させる。

「人の恋人(いのち)を踏みにじろうという奴らは、狐(あたし)に蹴られて地獄に落ちろ！！」

第三話　『狐の想い』

穏やかな風が窓からゆっくりと流れ込んでくるのを感じて、少年はふと窓のほうへと視線を向ける。眩しいというよりも明るいという程度の優しい光が差し込むその窓の向こうには、城砦都市『嶺斬泊』に存在している四つの高校の中でも最大の広さを誇る広大なグラウンドが見える。そこではたくさんの生徒達が思い思いの遊具を取り出してきてグラウンドのあちこちで遊んでいる。それぞれがそれぞれなりに昼休みの一時を楽しんでいる姿が見えた。

ほんのつい先程まであった激しい乱闘がなかったかのような平和さだ。

その様子をぼんやりと見つめていた少年は、なんともいえない吐息をもらして、かすかな笑みを浮かべて見せる。それは歳相応の少年らしい笑みではなかった。社会に出て様々な経験をしてきたいいも悪いもわかっている大人の笑みだった。

ほんの数分前まで、少年は窓の向こうに広がるグラウンドで、繰り広げられた喧嘩という大嵐の真っただ中に身を投じていたのだ。

大嵐を起こしたのは少年ではない。この学校でも最大の勢力を誇る、ある不良の集団だった。

喧嘩の理由は実にくだらないもので、ただ退屈を紛らわしたかったという実に身勝手なものだった。それはばかりではない。少年が所属しているクラスには、平和主義で喧嘩をしない植物系の種族や、身体能力が極端に劣る小人系や小妖精系の種族の者達が多く在籍している。彼らを一方的に蹂躙し、その憂さを晴らそうというとんでもなく腐った考えで狙ってきたのだ。

少年にとってそれは絶対に許せない理由だった。少年もまた差別される側の種族として生まれ、そして、生まれてからそれほど長くない人生の間に、様々ないわれのない差別やいじめを受け続けてきたものとして、その痛みや苦しみを知る者として、絶対にそんなこ

とをさせるわけにはいかなかった。
彼らが襲撃してきたとき、すぐに彼らの目的を悟った少年は、隠し持っていたありったけの『煙幕珠』を発動させてグラウンド全体を覆い隠した。そして、不良達が混乱している隙を見逃さず、少年が最も信頼している二人の友人と合流して、彼らに不良達が標的することになるであろうクラスメイト達を集めて避難させるように指示した。
二人の友人達は少年一人を残していくことを非常に嫌がったが、時間がないという少年の必死に説得についに折れ、その場にいた植物系や小人系、小妖精系のクラスメイト達をひきつれて安全な体育館へと脱出した。少年の策は見事に的中し、不良達の魔の手からクラスメイト達を無事避難させることに成功。
少年の英断のおかげで、避難したクラスメイト達はほとんど無傷、腕に自信があって残って不良達と戦ったクラスメイト達の中にももも怪我らしい怪我を負ったものはいなかった。かなり大きな喧嘩であったにも関わらず、一般生徒達の負傷者はほとんどいなかったのだ。
もし、そういう大きな負傷者が出ていたら、昼休みどころではない、都市を管理している都市警察が事件と認定して出張ってくるだろうし、負傷者を運ぶために救急念動車だって来ていただろう。大騒ぎになり、こんな平和な時間はなかったに違いない。
先程の少年の笑みは、目の前で繰り広げられている小さな平和の光景が崩れなくてよかったという・・そういう意味のものであった。
だが、全く被害がでなかったわけではない。ごく少数だが、結構な傷を負った者達もいた。ほとんどの者は、学校に在籍している腕のいい保険医の手で傷も残さず瞬く間に治療されたが、流石の名保険医もすぐには治療しきれないほど傷を負った者もいたのだ。
彼らを逃がすための時間を稼ぐために乱闘の真っ只中に残った少年自身だった。
この世界に存在している数百とも数千ともいわれるさまざまな『人』の種族の中にあって、なんの身体能力も、魔力も、霊力も、神

通力も、精霊力も、際立った特別な能力を何一つもたない、自他共に認める最弱の種族、人間族として生まれてきた少年。

その人間族の少年が、自分よりもはるかに格上の種族ばかりで構成された不良集団と渡り合った。時間稼ぎのためで、まともに喧嘩をしたというわけではない。その持てる能力を駆使して撹乱し、戦場をかきまわし続ける戦法をとり続けたわけであるが、だからといって無傷で済むわけがない。相手は人間族などよりもはるかに強い剛腕を誇り、人間族などよりもはるかに素晴らしい敏捷性を備え、人間族などよりもはるかに頑健な鎧のような肉体を持っているのだ。そんな連中を相手にして重傷を負うことなく生き残ったという事実はとてつもなく凄い事である。

彼と同じ人間族の者が彼のやってのけたことを知れば、事の良し悪しはともかくとして、その生き残ったという事実に対しては誰もが素直に称賛していたであろう。

が、しかし、少年の表情は全く晴れなかった。

一番知られたくなかった『人』にこの事実を知られてしまい、一番心配をかけたくなかった『人』に心配させてしまったからだ。

「あ、あの、如月先生？　まだ怒ってます？」

半ば現実逃避するようにグラウンドのほうに視線を向け続けていた少年だったが、自分の目の前に座り物凄く恨めしそうに少年を凝視し続けている狐獣人族の保険医の視線をこれ以上無視することができず、おずおずと前に顔を戻すと恐る恐る問いかける。

問いかけられたほうは、すぐには少年の問いかけに答えることなく、黙々と少年の腕に包帯を巻いたり、少年の傷だらけの顔に薬を塗ったりしていたが、やがて、あらかた少年の治療が終わると、雪のように白い獣毛に覆われた狐の顔をずいっと近づけてきて、くわっと耳まで裂けた口を開いて噛みつくように少年に吠えた。

「な・ま・え！！」

「あうあうあうあう・・いや、だって、誰が入ってくるかわかりませんし、名前で呼ぶのはちょっと」

「扉は鍵閉めてるから誰も入ってこないわよ！！　だから、な・ま・え！！」

拗ねたような怒っているような、そんな複雑な表情で吠える女性の姿を、なんともいえない困り果てた表情で見つめていた少年だったが、やがて諦めたように深い溜息を吐き出す。

「じゃ、じゃあ、玉藻さん・・まだ怒ってます？」

「怒ってないわよ！！」

少年の問いかけに即答する白面の狐。しかし、どう聞いても怒っているようにしか聞こえない吠え声に少年は悲しそうに顔を俯かせると、上目づかいで目の前の狐を見つめる。

「怒ってるじゃないですか」

「怒ってないったら、怒ってない！！　連夜くん、しつこい！！」

「いや、でも、どう見ても怒っているようにしか見えな・・」

「もう！！　怒ってないったら、怒ってないの！！」

再び怒ったように吠えて見せた白面の狐だったが、今度はただ吠えて見せるだけでなく目の前の少年の腕をがっと掴む。そして、自

分のほうに引き寄せてその小柄な体をぎゅっと力いっぱい抱きしめるのだった。少年はしばらく狐のされるがままにされていたが、ふと狐の大きな胸から顔をあげて狐の表情を伺ってみる。すると、そこには黄金の瞳に大粒の涙を浮かばせて今にも泣きだしそうになっている狐の顔が。

「た、玉藻さん、あの、その！！」

「ほら、本当に怒ってないのよ。ただね、あんまりにも連夜くんが傷だらけだから・・グラウンドで見たときは泥だらけでよく見えてなかったけど、泥を払ってみたら思った以上に大きな怪我が体中にいくつもあるし・・あなたに・・あなたに何かあったら・・もし、この怪我のどれかが原因であなたがどうかなったら・・いくら生徒達に怪我らしい怪我がなく、ほぼ無事に事が収まったからって、肝心な連夜くんに何かあっていたなら・・そう思ったら、素直に笑ってなんかいられないもの」

「玉藻さん」

目の前にいる自分の最愛の女性が、自分のことをいつも心配して気にかけてくれているのは知っていたが、少年の予想をはるかにこえて自分を想ってくれているのだと改めてわかり、少年は本当に心から後悔した表情で目の前の女性に頭を下げる。

「ごめんなさい、玉藻さん。僕は、玉藻さんの気持ちをわかっているつもりで全然わかっていませんでした。こんなに僕のことを大事に想ってくれているのに僕は・・」

「そうよ、連夜くん。連夜くんだって、私のこと想ってくれているでしょ？　連夜くんがどんな想いで私を慕ってくれているのか、私

を愛してくれているのか、きっと私の予想よりももっと凄く大事に想ってくれているんだろうけど・・私だって、そうなのよ。私、この世の中で正直怖いものがほとんどないわ。自分よりも強い相手と対峙したときだって怖いと思ったことはないし、この世界最強の生き物である『害獣』だって怖くない、きっと私の育った環境が環境だったから、どこか壊れているっていうのもあるんだろうけど、そんな私でもたった一つだけはっきり怖いと思うことがあるわ」

そう言ってちょっと少年を抱きしめていた力をちょっと緩めて身体を離すと、狐は真っすぐに少年の顔を、いや、その黒い瞳を見つめた。

「あなたよ」

「僕？　僕が怖いんですか？」

「違うわ、あなたが・・あなたがいなくなることよ。私の目の前からいなくなってしまうこと、二度と眼を覚まさなくなること、二度と私の名前を呼んでくれなくなること、二度と私と同じ刻を過ごせなくなること。それを考えると身体の震えを止めることができなくなるの」

玉藻の言葉の意味がはっきりとは理解できず小首を傾げて見せる少年に、玉藻は自分の両手をかざしてみせる。少年は玉藻の促すままにそちらのほうに視線を向け直してみる。すると玉藻のかざした両手が、その言葉通りに小刻みに震えていることを確認して表情を強張らせる。

「た、玉藻さん、その手・・」

「ね。震えているでしょ？　あなたが危険な目にあって傷だらけになった姿をみるたびにこうなるの。あなたと付き合うようになってから、もう何度もあなたの傷だらけの姿を目撃しているはずなんだけど・・一向になれないわ。多分、一生なれることはないと思う」

「そんなに・・そんなに玉藻さんを苦しめていたなんて・・」

事態の深刻さをようやく理解した少年は、愕然とした表情でがっくりと肩を落とす。そんな少年をしばらく黙って見つめていた玉藻だったが、再び少年の身体を引き寄せて抱きしめると、その傷だらけの顔を長い狐の舌でぺろぺろと舐める。

「ごめんね、あなたのしたことを責めたくて言ったわけじゃないの。本当はね、あなたが危険に身をさらすのは、いつも何か止むを得ない何かがあるからだってことはちゃんとわかってるの。でも、やっぱりなれなくて、怖くて」

「玉藻さん、僕はもう今度こそ本当に危険なことをするのはやめ・・」

「ううん、そうじゃないの。ごめんね、勝手なことばかり言ってしまって。本当はね、ちゃんとわかってるんだ。今、私が口にしていることは八つ当たり以外の何物でもないって。あなたが今口にしようとしたことを本当に約束してくれたらあなたはきっと今度こそ危険なことから全て目をそらすようにしてくれるでしょう、ちょっとでも自分の命に関わる可能性があることには近づかないようにしてくれるでしょう。現にあなたはあのときの約束をちゃんと覚えてくれていて、あの『アルカディア』事件の後・・私達が正式に婚約してからは自分から危険に飛び込むような真似は極力しないようにしてくれていた。どうしても仕方ない時にはあなたの頼りになるお友

達を頼ってなんとかしたり、あるいは別の方法を必死に模索して解決していたことも。わかってたわ、本当はあなたがお友達を矢面に立たせるのが嫌で嫌でしょうがなくて、傷つけたくなくて、でも、私との約束があるから自分が矢面に立つことができなくて、それでずっと悩んでいたことは」

玉藻の声音になんとも言えない複雑な感情が入り混じっていることを感じた連夜は、そっと身体を離して玉藻の瞳の奥に宿る光を真っすぐに覗きこんでその本心を知ろうとする。そんな連夜の吸い込まれそうな美しい黒い瞳に一瞬見惚れた後、玉藻は咳払いを一つして再び真面目な表情になると、今度は連夜の瞳に魅了されたりせず、その黒い瞳を真っすぐに見つめ返して真摯に言葉を紡いでいく。

「だけどね。あなたを苦しめたいと思ってるわけじゃないの。そりゃあ、危険を極力避けてはほしいけど・・だけど、ずっと逃げっぱなしでいるなんて、汚いものや危険なことから目をそらし続けるなんてあなたにできるわけないもの。がんじがらめにあなたを縛りつけてどこか遠くの誰も知らない安全なところに連れて逃げたっていいんだけど、そうもいかないでしょ？」

「玉藻さんが行く場所なら、どこにでもついていきますけどね」

「ありがと。その気持ちもちゃんとわかってるけど、でもね、本来のあなた自身を殺したくもないの。私の色で全部あなたを塗りつぶしてしまいたいけど、それは私の好きな『宿難（すくな）　連夜（れんや）』じゃないから。だからね・・だからね、連夜くんはそのままでいてもいいわ。ううん、そのままのあなたでいて。まあ、私のことだから、あなたが傷だらけになったのを見たら、また癇癪を爆発させちゃうだろうけど、でもね、やっぱり今のままでいいわ。今のままがいい。その代わり、これからは私も遠慮しない。あなたが首を突っ込むことに、

私もガンガン首を突っ込んでいくから。そのために私はこの保険医の仕事を引き受けたの。できるだけあなたの側にいるために。側にいることさえできれば、今日みたいなことがあっても、私が守ることができるから。絶対絶対、あなたを守るから」

そう言って玉藻は再び連夜の身体を引き寄せると、連夜が苦しくならないように加減しながらもぎゅ～～っと抱きしめる。そして、また顔を近づけると、連夜の顔のあちこちに点在している傷の一つ一つを丁寧に舐めてやりながら、玉藻は強い意志のこもった瞳で連夜のことを見つめ続ける。そんな玉藻の暖かい想いのこもった言葉を聞いていた連夜は、今にも泣き出しそうな笑顔を作って玉藻の顔を見つめる。

「玉藻さんにそこまで想っていただけるようなモノじゃないんですけどね、僕は」

「それを決めるのはあなたじゃないわ。それを決めることができるのは私だけ。私があなたを大事に想う気持ちは、誰にも否定させない。例えあなたにだってね」

潤んだ瞳を見られないように目を閉じた玉藻は、その鼻面を連夜の顔に押し付けてすんすんと甘えるように鼻をならす。そんな玉藻の身体を強く抱き締め返した連夜は、玉藻の気持ちに応えるように自分の傷だらけの顔を玉藻の白い狐の顔にすりよせる。

そうやってしばらくの間、一つに重なっていた玉藻と連夜だったが、やがて、どちらともなく身体を離し似たような穏やかで柔らかい笑顔を浮かべてお互いを見つめるのだった。

「みんなに知られるわけにはいかないから、いつもどきどきはらはらしているんですけど、でも、やっぱり玉藻さんが同じ場所にいて

くれるっていいですね」

「あら、今頃気がついたの？　私なんか、現役高校生としての学校での連夜くんの姿をいつも見られるから、いっつもどきどきしてるのに。まあ、今日のあの乱闘は別の意味でどきどきしたけど・・あいつら、せっかく連夜くんが体育している姿を生で鑑賞できるチャンスをぶち壊してくれて、もっとシメてやればよかった」

「え、玉藻さん、最初はともかく、後のほうはなんて言ったんですか？　小声でよく聞こえなかったんですけど？」

「ううん、何にも言ってないわよ」

慌てて言い繕う玉藻をきょとんとした表情で見返す連夜だったが、それ以上は言及したりせず、その代りに別のことを尋ねる。

「そういえば、あの不良グループ結局どうなったんですか？　あの後玉藻さんにやっつけられて全員しばらくグラウンドにのびていましたけど、その後戻ってきてみたら、全員きれいにいなくなっていたし。生徒指導室に連れて行かれたんですかね？」

「まさか～」

「ああ、逃がしてあげたんですね」

「そんなわけないでしょ。私の・・いい、私のモノである連夜くんに手を出しておいて、生徒指導室でお説教くらっておしまいなんて、そんな生易しい罰で終わらせるなんて絶対ありえないし、あってはいけないのよ」

「え・・ちょ、ちょっと待ってください・・じゃ、じゃあ、いったい彼らはどこに・・あ！！　そう言えば、さっき学校の外に中央庁の特殊中型車両が何台も止まってましたけど・・ま、まさかあっ！？」

連夜の脳裏に物凄く悪い予想が閃いて弾け、まさか、そんなはずはないと思いながら、僕の予想よ外れていてくれと願いながら目の前に座る最愛の女性に視線を向けた連夜。しかし、無情にも最愛の恋人は、連夜の予想を肯定するといわんばかりに、背筋が凍りそうな恐ろしくも邪悪な笑みを浮かべてみせる。

「う、うそですよね？　玉藻さん、そんなわけないですよね？　ね！　ね！？」

「お義母さまに、今日のこと密告（ちくっ）しちゃった。てへっ」

「えええええええええええええっ！！」

かわいらしくこつんと自分の頭をげんこつでおさえ、魅力的なウインクをしながら舌をペロッと出して見せる玉藻。しかし、玉藻の言葉の意味を完全に理解した連夜は、玉藻のかわいらしい姿に見とれているどころではなく、思わず驚愕に満ちた絶叫を放ってしまうのだった。

「だってだって、あんまりにも腹が立ってしまったんだもん、私の連夜くんを傷つけるような奴らは、一回本物の地獄を見ればいいんだわ。ぷんぷん」

「いやあの、ぷんぷんじゃなくてですね。あああああ、な、なんてことだ、ね、念話・・僕の携帯念話はどこだ・・ああ、しまった教室

に忘れてきた!!　い、急いでお母さんに連絡してやめさせないと、とんでもないことに!!」

「念話しても無駄よ、連夜くん。あのね、お義母さまからご伝言を承っているの」

「で、伝言？」

「そそ、あのね、『レンちゃん、心配しなくても大丈夫よ。この子達はちゃんとお母さんが預かるから。ちょうどよかったのよねえ。この子達運動不足で困ってるみたいだし、ちょっとお母さんのお仕事手伝ってもらおうと思って。『外区』に連れて行って楽しく『害獣』と遊んでくるから。そういうことで、お母さんとお父さんは二、三日『外区』にお出かけしてきます。携帯念話は圏外になってるはずだから、つながらなくても慌てないでね。じゃあ、お留守番よろしくね』ですって」

「な、な、な、そ、『外区』だってえええええええっ!?」

母親からの伝言内容を聞いた連夜は、顔を真っ青にして思わずその場にへたりこむ。そして、それとは対照的に目の前の玉藻は、とんでもなく邪悪な笑みを浮かべて、まるで悪の大ボスのような含み笑いを浮かべ続けるのだった。

連夜の母親は、この都市のあらゆる公的事業を一手に握る統合行政機関『中央庁』の御偉いさんである。それはもう、トップではないものの、トップに近い役職についていて、それなりに権力を持っている。権力ばかりではない、その人望もまた物凄く厚く、政治、経済、芸能、あらゆる方面に極太の人脈を持ち顔が利くわけだが、なかでも特に顔が利くのが軍事関係である。恐らく母親の手のものに拉致された不良グループの面々は、命がけで大暴れしなければ生

き残れないようなところに連れていかれたに違いない。
まあ、あの母親のことであるから、全員無事に帰しはするだろうが、拉致されている間、彼らはとんでもない地獄を見せつけられることになるのはまず間違いない。

「心配ないわよ。だって、連夜くんに耐えられたものが、あいつらに耐えられないわけないじゃない。お義母さまやお義父さまから聞いて知ってるのよ。小さい時、お二人についてよく『外区』のいろいろなところを冒険したってこと。大変だったみたいね。でもね、今よりもずっと小さい連夜くんにできたことでしょ？　それだったらあいつらにできないわけないじゃない。人間族より優れているって自ら豪語していたんだもの。だったら見せてもらおうじゃないの、ねえ。それだけ優秀なんだから、余裕余裕」

「た、玉藻さん、あのとき、あいつらが口にしていたこと全部聞いていらっしゃったんですか？」

「うん、全部聞いてた」

「って、まさか、あの言葉をお母さんに！？」

「勿論、まるっと全部オールえぶりしんぐ伝言しておきました！！」

物凄くいい笑顔を浮かべた玉藻は、ビシッとサムズアップして連夜に応える。そんな玉藻を見て連夜は思わず頭を抱えてしまう。息子を溺愛しいる母親にとって、息子をバカにされたり、傷つけられたりすることはなによりも許せないことであるが、更にそれ以上に激怒させることがある。それは息子がいわれない差別にさらされることである。
もし、その事実があの母親の耳に本当に入っているのだとしたら・

・

「お、お母さん、お願いだから、『人』死にだけは出さないでね、お願い！！」

「大丈夫、大丈夫、手足の二、三本もげても、いまの『療術』の技術は発達してるから、すぐつながるわよ。首がもげたらだめだけど」

「た、玉藻さん、なんてことを！！」

はるか遠くにいるであろう母親に必死に祈りを捧げる連夜に、玉藻はにゃははとお気楽な感じでとんでもないことを口にする。しかし、目の前の恋人が本気で涙目になってるのを見ると、流石に悪のりが過ぎたと感じたのか、近寄ってそっと冷たい床から立ち上がらせると、きゅっとその身体を優しく抱きしめる。

「大丈夫よ、連夜くん。あのお義母さまが無事に帰すって約束したんだから、絶対無事に帰ってくるわよ。まあ、かなり怒っていらっしゃったけど、目の色はかなり冷静だったし、なによりも今日は側にお義父さまがいらっしゃったから、無茶なことはしないはずよ」

「お、お父さんが一緒にいたんですか？　それを早く言ってください！！　あ～、よかった。それなら安心だ」

玉藻が口にしたある重要なキーワードを聞いた連夜は、たちまちほっとした表情になると、玉藻の腕の中で安心したように肩の力を抜く。母親の永遠のパートナーである連夜の父親は、恐ろしい暴れ馬である母親を完璧に操縦することができる名騎手だった。文字どおり都市の中枢で働いている母親とは対照的に、城砦都市『嶺斬泊』の外壁のすぐ外側に畑を作って農業を営んでいる父親は、いつもな

ら仕事が終わる夜にならないと母親と一緒にいることはない。しかし、今日は珍しく一緒にいてくれていたようで、本当に不幸中の幸いというしかない。

恐らく連夜が尊敬してやまない父親なら、母親を暴走させることなく穏便にことを済ませてくれるであろう。

そう予想した連夜はほっと胸をなでおろしたが、そんな姿を見た玉藻は、なんとも複雑そうな表情を浮かべる。

「ちっ、お義父さまが一緒にいらっしゃるとわかっていたら、もうちょっと痛めつけてやったのに。せめて腕の一本か、二本、へし折っておけばよかったわ」

「え、玉藻さん、いま、何かおっしゃいました？」

「ううん、乱闘のときの連夜くんかっこよくてどきどきしたわって言ったの」

「や、やめてくださいよ。自分でもみっともない姿だったなあって自覚しているんですから。それに僕なんかよりも玉藻さんのほうがずっとずっとかっこよかったですよ。まるで一流のバレリーナみたいに芸術的で奇麗でした」

華麗な足技を変幻自在に使いこなし、まるで空中を舞い踊るように戦っていた玉藻の姿を思い出した連夜、うっとりした表情でつぶやく。そんな連夜の言葉を聞いて、玉藻は白い顔を一瞬で真っ赤に染め上げると、にゃ～～っと叫びながら照れ隠し気味に片手でバシバシと連夜を叩く。

「な、何言ってるの、何言ってるの、連夜くんったら、もう！！年上をからかって！！」

「いたたたっ、痛いです、玉藻さん！！　って、別にからかってないですよ、いつも玉藻さんは奇麗だけど、戦ってる玉藻さんも奇麗なんです」

「そ、そう？　本当に？　わ、私、奇麗？」

「はい！！　玉藻さんは僕が知る限りの女性の中で一番美人です！！」

「そ、そっかあ。えへへ、一番奇麗なのかあ」

きっぱりはっきり断言してくれる最愛の恋人からの最上の褒め言葉に、玉藻はいやんいやんと身体をくねらせていたが、またもや連夜の身体を抱き寄せると、今度は牙をたてないように、連夜の顔や首筋をかぷかぷと甘噛みしはじめる。

「ほんとに連夜くんはお世辞が上手なんだから。もうなんて、かわいいんだろう。こうしてやる！！　こうしてやる！！」

「ちょ、ま、た、玉藻さん、タンマ、タンマ！！　や、やめてください！！　噛んだあとはキスマークよりも強烈にあとに残るんですよ！？　まだ午後の授業残っているっていうのに、こんな顔で教室にもどったら大変なことになりますってば！！」

「ああ、それなら大丈夫。担任のティターニア先輩に、連夜くん重傷だから午後の授業は保健室で休ませますって言っておいたし」

「な、な、なんですってえええええっ！！」

慌てふためいて身体を離させようとする連夜をがっちりと抱きしめたまま、玉藻はとんでもないことを口にする。

「だから～、重傷の連夜くんは～、今日は帰宅時間までここにいてくださいね」

「マジですか？」

「マジです」

きっと冗談だろうなあ、いや冗談に違いない、というか、お願いだから冗談といって!!　という一縷の希望を持って玉藻の瞳を覗き込む連夜だったが、その欄々と金色に光る瞳の中に冗談の欠片も見出すことができず、連夜は全て真実であることを悟りがっくりと肩を落とす。

そんな連夜の今の気持ちが手に取るようにわかった玉藻は、益々その行為をエスカレートさせていき、甘噛みだけでなく、連夜の口を直接なめたり、耳の中に舌をいれてみたりとやりたい放題。

「あっ、もうっ!!　玉藻さん、やめ、あ、ああっ!!」

自分の腕の中で顔を赤らめて切なげな声を出す連夜の姿を見ていた玉藻の瞳に、だんだん妖しい光が宿りだす。

「連夜くん、あの・・あのね」

「なんですか玉藻さん？　というか、いい加減にしてくださいってば!!」

連夜の小柄な体をがっちりとホールドして首筋をちろちろとなめ

たり噛んだりを繰り返しながら、玉藻はいつにない艶っぽい声で連夜に呼びかける。しかし、平時ならばともかく、すっかりおもちゃにされていてそれどころではない連夜はそれに気がつかず、じたばたしながら玉藻の問いかけに応じる。

「ここって、保健室なの」

「ええ、よく知ってますよ・・って、くすぐったいです、玉藻さん!!」

「保健室にはベッドがあるの」

「ありますね、目の前にあるから、わかりますけど・・ちょっと、本当にいい加減にしてくださいってば、ああん、もう!!」

「私ね、今発情期なの」

「ああ、そう言えば、そうでした・・ね・・」

「・・」

「・・」

見つめあう二人の男女。しかし、お互いを見るその目に宿る意味は全く違っていた。それは愛し合いお互いを慈しみあうカップルのそれではない。今まさに獲物に襲いかかろうとする肉食獣のそれと、今まさに天敵である肉食獣に襲いかかられようとしている草食動物のそれ。

二人はしばし、それぞれの想いで互いを見つめあい、そして・・

「連夜くんを食べていい？」

「ダメダメダメダメダメ～～～～ッ！！　絶対にだめ～～～～っ！！」

可愛らしく小首を傾げて、しかし、全然目は笑っていない状態で聞いてくる玉藻に対し、連夜は全力で首を横に振ってみせる。

「なんでなんで！？　連夜くん、以前私にこう言ってくれたよね？『玉藻さんが、もし伝説の悪狐になって暴走して僕を食らうことになっても、僕は後悔しません』って言ってくれたよね？　あれはウソだったの？」

「そんな潤んだ瞳で僕を見てもダメです！！　だいたい意味が全然違うじゃないですか！！　そのとき僕が言った意味は僕の命や魂そのものを食べてもいいってことで、今回のこれとは全然全くこれぽっちも同じじゃないじゃないですか！！」」

「違わないわよ、同じよ！！」

「じゃあ、十八歳未満の方はお断りなやらしいことはしないんですね？」

「するわよ！！　私の思いつく限りのやらしいことを全力で行うことを誓っちゃうわよ！！」

「ダメじゃん！！　ってか、そんなこと誓わないでください！！何考えているんですか！？」

「何考えてるって・・そんなこと決まってるじゃない、大っぴらに

言えないやらしいことに決まってるでしょ！！　連夜くんを生まれたままの姿にして・・」

～しばらくお待ちください～

「・・で、最後に赤ちゃんができちゃったとしても、私は後悔しない、するもんですか、むしろ、ばっちこいよ！！　って、連夜くん、何で床に突っ伏しているの？」

玉藻の口から飛び出した数々の十八歳未満お断りな単語の数々に、思わず床に突っ伏して悶絶しそうになる連夜。しかし、なんとか意識を手放すことなく復活を果たした連夜は、不思議そうに小首をかしげている玉藻の両肩をがしっと掴むと、これ以上ないくらいくそ真面目な表情で絶叫する。

「じょ、女性が、仮にも『人』より圧倒的に美『人』な玉藻さんがよりによって、（該当部分において不穏当な言語が流れていますので、削除させていただきます（作者））とか、言うなんて！！　ダメです、そんな単語口にしちゃダメ！！　禁止、絶対禁止です！！」

「なんでなんで！？　れ、連夜くん、ひょっとして本当は私のことキライなの？　一昨日の日曜日、久しぶりに私のことを抱いてくれたと思ったら、たったの二か・・」

「うわあああああああっ!!　ちょ、ちょっと、玉藻さん、なんてことを口にしているんですか!?　ダメです!!　学校でそういう話はタブーです、禁止です、口外無用です!!」

「やっぱり、やっぱり、私のことなんか愛してないんだあああああっ!!」

『人』には絶対に聞かせられないようなプライベートな内容をぼろぼろと口にする玉藻に、怒ったような表情で詰め寄る連夜だったが、そんな連夜の姿を見た玉藻は連夜に背を向けると近くにあったベッドに突っ伏して泣き始める。

「ど、どうしてそうなるんですか!?」

「だってだって、連夜くんが、私のことを拒絶するから・・」

「拒絶するからって、当り前です!!　学校でそういうことするのはダメでしょ!!」

「何言ってるの!?　エロ漫画では、保健室で生徒と先生がそういうことするのは当然で常識のシチュエーションよ!!」

「エロ漫画では当然で常識でも、現実では当然じゃありませんし非常識です!!　ってか、そんなエロ漫画読まないでください!!」

「だって、ミネルヴァが読んで勉強しておかないといざというとき困るからって・・」

「犯人はみ～ちゃんかあああっ!!　なんで、そういういらんことばっかり玉藻さんに教えるんだ、あの姉(ひと)は!?」

玉藻に偏った知識を植え付けた張本人が、玉藻の大親友であり連夜の実の姉であることを知って思わず頭を抱えてしまう連夜。こんな事態を招くような余計な知識を最愛の恋人に植え付けた姉は、帰ってからみっしり説教するとして、とりあえずこの場をどう凌ぐかと、痛む頭を押さえながら立ち上がった連夜だったが、ふと視線を恋人のほうに向け直してみると、いつの間にか狐の顔から、人の顔になっているではないか。

「ちょ、玉藻さん、本当にまずいですから!!　学校の外ならいくらでも『人』の姿になってもらっていいですけど、学校の中ではマズイです!!　現にさっきの乱闘で一部の生徒にその顔を見られていますし、流石に乱闘の時の美人戦士と、学校の狐の保険医さんが同一人物だってすぐには気がつかないでしょうけど・・誰かにみられたら本当にマズイですってば!!」

「き、狐の姿だから愛してくれないんでしょう?　だったら、もう狐の姿にならないもん。人の姿のままでいるもん」

「そんなこと一言も言ってませんてば!!　どんな姿の玉藻さんだって愛していますよ。知ってるでしょう?」

「だってだって・・」

すんすんと鼻を鳴らして泣き続ける玉藻の姿を見た連夜は、流石にかわいそうになりゆっくりと近づいてベッドに突っ伏す玉藻の背中から優しく抱きしめる。

「本当に本当に愛していますよ。どんな姿の玉藻さんだって、大好きなんですから」

「ぐすんぐすん・・本当に？」

「本当ですってば」

「ぐすんぐすん・・どんな姿でも、どんなことをしても許してくれる？」

「当り前じゃないですか、たとえどんな姿になろうとも、たとえどんなことをされようとも、僕は玉藻さんのことを愛し続け・・あれ？　今、『どんなことをしても許してくれる？』って言いました？」

真摯な気持ちで玉藻の問いかけに応えようとした連夜だったが、今の問い掛けの中に無視できない文章があったことに気がつき、背中を向けている玉藻の顔を覗き込むようにして問い返す。するとその声に応えるように、玉藻はゆっくりと連夜のほうへと振り返った。

そこには、獲物をまんまと捕まえて、今にも大きな口を開けて食らわんとしている肉食獣の笑みが。

「つ～か～ま～え～た～～」

「ぎゃ、ぎゃあああ、し、しまったあああああっ！！」

第四話　『狐と龍』

慌てて身体を離して逃げようとする連夜だったが、それよりも早く連夜の身体を捕まえた玉藻は、そのまま裏投げのような要領で連夜の小柄な体を持ち上げてベッドの上に放り投げる。そして、連夜が態勢を立て直してベッドから飛び降りようとするよりも早くその上にのしかかると、完全にその身体に組みついて押さえつけ自分の唇を連夜のそれに重ねるのだった。

「た、たま・・んむ・・だめ・・ああん・」

「ごめんね、連夜くん。最初はちょっとからかうだけのつもりだったんだけど、本当に燃え上がっちゃった。一回だけ、一回だけだから、ね」

「ひ、人が来ちゃいます!!　んむ・・あふ・・どうするんですか、見られたら!!　って、服を脱がさないでください!!」

「大丈夫、お昼休みだし、扉は完全に閉めてるから。ああ、連夜くんの唇柔らかい。連夜くんの体から金木犀のいい匂いがする。本当に食べちゃいたい、きっといい味がするんだろうなあ。でも、そんな連夜くんが痛がるようなことはしたくないし、絶対にそんなことはしないからね。でも、別の意味ではいただきます」

「扉は閉まってても、窓はあけっぱなしじゃないですか!!　外から丸見えです!!」

「大丈夫大丈夫、ここ外からは死角になってるから」

「声は丸聞こえでしょうが！！・・あ、あ、そんなとこなめちゃダメです！！　ああん、あふ、いや、だめ・・」

手慣れた様子であっというまに連夜が着ているカッターシャツのボタンを外したうえに、下に着ているTシャツをたくしあげた玉藻は、連夜の小柄だがよく引き締まった体に舌を這わしたり、唇で吸ってみたり、愛撫したりと思うがままに蹂躙し始める。玉藻の巧みな愛の行為にだんだん頭がぼ～～っとしてくる連夜だったが、なんとか頭の片隅に残る理性を総動員して逃げ出そうと最後の抵抗を試みるが、そのときに漏れる切なげな吐息や、仕草が余計に玉藻を刺激してしまい、逃げ出すどころかますます玉藻はその行為をエスカレートさせていく。

完全完璧にその気になってしまった玉藻は、先程までの優しい表情をかなぐり捨て狂おしいまでの激情を自分が組みしいた相手にぶつけようとする。

「た、玉藻さん、だめ・・だめですったら・・ああ」

「ダメじゃないわ。あなたは私のモノだもの。私だけのモノだもの、どこにあろうとも、いつであろうとも、私だけのモノよ。絶対離さない、離しはしない、だから・・私を受け入れて・・お願い」

「玉藻さん・・」

自分を見下ろしている最愛の恋人の金色の瞳を見返した連夜は、そこに自分しか映っておらず、狂おしいほどの悲しいほどの、そして切なすぎるほどの大きな想いがあることを見てしまい、とうとう最後の抵抗をやめて力を抜く。

「もう、玉藻さんは、ずるいです。見つかったら、大変なことにな

るのに」

「見つかったら、見つかったときのこと。そうなっても、私とあなたの関係は誰にも邪魔させないもの。学校に一緒にいられなくなるのは残念だけど、今の私の愛を貫けないのはもっと嫌なの」

「もっと別のところで貫いてほしかったですけど、しょうがないですね」

「そう、しょうがないの。だから・・ね」

切なげな声でそう呟いた玉藻は、連夜の唇に自分のそれを重ねる。先程とは違い今度は連夜も拒絶したりはしなかった。差し込んでくる玉藻の舌に自分も合わせるように絡ませる。情熱的な玉藻に、それとは対照的にあくまでも穏やかに、しかし、おざなりではなくしっかりした感じでそれを受け止める連夜。

しばらくそうやって重なり合っていた二人だったが、やがて、いよいよ本格的に愛し合おうと、玉藻が自分の白衣に手をかけ脱ぎ去ろうとする。

穏やかな昼の一時、二人の男女がお互いの愛を確かめようとしたその寸前。

「れんやあああああああああっ！！」

『ドガッシャーーーーンッ！！』

可愛らしい少女の絶叫が二人の耳に聞こえたかと思った次の瞬間、何かが破壊される盛大な物音が保健室の中に響き渡る。

呆気に取られて一瞬顔を見合せた二人だったが、その後すぐ、同

時に音のしたほうに視線を向ける。二人が重なり合っているベッドからそれほど離れていない場所、保健室にある唯一の扉が、木端微塵に砕け散り、ただの残骸と化して床に転がっているのが見える。いや、見えていたのは扉だけではなかった。その扉があった場所、保健室と廊下のちょうど境界線の上に仁王立ちする一人の少女の姿が。

「ひ、ひ、姫子ちゃん！？」

その少女の正体を知った連夜がうめき声のような声で少女の名前を呼ぶ。

『龍乃宮（りゅうのみや）　姫子（ひめこ）』

連夜のクラスメイトにして幼馴染にしてこの学校の生徒会長。そして、この学校に通う者達の中で連夜と玉藻が恋人同士であるという秘密を知る数少ない人物の一人。

かつて東方にて『神』として君臨し、隆盛を誇った超上級種族である龍族の少女。一見連夜と同じ人間族のように見えるが、頭から生えている二本の荘厳な角が彼女が人間族ではないことを示していた。

連夜と同じ黒髪、黒眼であるが、あくまでも地味な連夜のそれとは違い、その黒は遠目からでもわかる不思議な輝きを持ち、『人』を惹きつけずにはいられない魅力に満ちあふれている。髪や眼だけではない、健康的な色をしたきめ細かい肌、かわいさと美しさの絶妙なバランスを兼ね備える顔、玉藻よりは小さいものの形のいい大きな胸、くびれた腰、健康的な脚線美。玉藻が絶世の美女なら、こちらは完璧な美少女だった。

その美少女が、今にも泣き出しそうに見えるような、怒り狂って暴れ出しそうに見えるような複雑な表情を浮かべ、肩で息をしながら

ら握り拳を固めて立っていたのだ。

「な、な、なんで姫子ちゃんがここに!?」

「連夜!?　連夜大丈夫なのか!?　不良グループに襲われて重傷だって・・連夜、無事なら返事をして!?　無事なのきゃあああああああっ!!　な、な、何やってるんだ、お主達わあああああっ!!」

扉を蹴破った直後には気がつかなかった姫子だったが、保健室の中をきょろきょろと見回したあと、ベッドの上で折り重なっている連夜達の姿を発見。顔を真っ赤にしながら二人を指さし怒りと羞恥に満ちた表情で絶叫する。

そんな姫子の言葉にはっとなった連夜は、慌てて玉藻の下から抜け出すとそそくさとはだけたTシャツを戻し、カッターシャツのボタンを止め直す。そんな、連夜の姿を見ていた玉藻は、情けなさそうな表情を浮かべて連夜にすがりつく。

「あああ、そ、そんなあ、連夜くん、慌てて服を着なくてもいいじゃないのよおおお」

「慌てるに決まってます!!　この状況で服を着ないでどうしろっていうんですか!?」

「いや、やることやってから・・」

「無理です!!」

本気で泣きながら無茶苦茶な要求をしてくる玉藻に、顔を羞恥で真っ赤にして速攻で拒絶の言葉を口にする連夜。今度こそ完全に拒

絶されてしまった玉藻は、心底情けなさそうな表情で大きく深い溜息を吐きだす。それらの一連の行動が玉藻の美しい顔を完全に台無しにしてしまっていた。

しかし、今の玉藻にとってそんなことはどうでもいいことだった。むしろ、それよりも大事なことがあるといわんばかりに、きっと表情を引き締めると保健室の戸口のところでこちらを睨みつけている少女のほうに視線を走らせ、睨み返す。

「ちょっと、姫子ちゃん、これはいったいどういうことなの!?保健室の扉にちゃんと立札があったでしょ？　あなた字が読めないの？」

「ちゃんと読めるわい!!　それよりもなんじゃ、あの立札は!?何が『本日定休日』じゃ!!　どこの学校の保健室に『定休日』があるというのじゃ!?」

「ここ」

「ここじゃな〜〜い!!　しかもご丁寧に鍵までかけよって・・そ、そうだ、お主達、いったいその、ベッドの上で何をしようと・・」

「決まってるじゃない!!　私と連夜くんはね・・」

〜しばらくお待ちください〜

「・・ってなって最後には連夜くんが私の中に」

「玉藻さん、玉藻さん!!　ちょっともう、ほんとにいい加減にしてくださいってば!!」

十八歳未満お断りの内容を熱烈に気合いをこめまくっていつまでも力説しまくる玉藻を、たまらず連夜が割って入って止める。

「止めないで連夜くん、今度という今度はこの子に私と連夜くんが海よりも深く、山よりも高く、世界よりも広く愛し合っていることを教えてやらなくちゃいけないの!!」

「だからって、その内容はあまりにもアレすぎます!!　姫子ちゃんはまだ高校生なんですよ!?　見てください、玉藻さんのしゃべる内容があまりにも刺激的すぎて、姫子ちゃん固まってしまっています!!」

「あら?」

連夜が指さす方向に視線を向け直してみると、玉藻が語る十八歳未満御断りの世界があまりにもリアルで生臭いものだったせいか、その内容に耐えきれずショックを受けて呆然としてしまっている姫子の姿が。

連夜は慌てて姫子に駆け寄ると、持って来ていた水筒を取って中に入っているお茶をコップの中に注ぎ込み、そっと姫子の口にそれを持って行って含ませる。

「ほら、姫子ちゃん、お茶飲んで落ち着いて、ね?」

「う、うん、ありがと、連夜」

「ほら、しっかり持って、落とさないようにね」

「うんうん。もう大丈夫じゃ」

優しい連夜の言葉にようやく落ち着いたのか、若干顔が青ざめてはいるものの、なんとか復活を果たした姫子は再び玉藻のほうをギラリとした視線で睨みつける。

「なんて破廉恥極まりない狐じゃ！！　こんなのが・・こんなのが連夜の婚約者だなんて・・絶対認められない！！」

「あ～ら、こんな狐で悪かったわね。でも、もう連夜くんは私のモノだものね。ほら見て、この婚約指輪、きれ～でしょう」

ギリギリと奥歯を噛みしめながら唸り声をあげる姫子に対し、玉藻は挑発するように左手を掲げてみせる。その薬指には普段着用するためにと先日連夜に買ってもらった地味だが美しいミスリル銀でできたフリーサイズの指輪がしっかりとはめ込まれている。

それを見ていた姫子は、物凄い悔しそうな表情を浮かべると、横に立つ連夜のほうに視線を移して恨めしそうに睨みつける。

「連夜、あんな狐のどこがいいのじゃ！？　私のほうが・・私のほうがその・・若いし、控え目だし・・いろいろとその・・す、好きなことさせてあげるのに」

「いや、あのね、姫子ちゃん、何度も言ってるけど、そういうことじゃないんだよね。玉藻さんがさっき言った通り、僕はもう玉藻さんのモノで、玉藻さんの側にいることが僕の幸せなんだ。だからその、姫子ちゃんもそろそろ僕のことは忘れて・・」

「いやじゃ！！　絶対に嫌じゃ！！　今は確かに連夜の心はあの狐が握っているのかもしれない。それが連夜にとっての幸せかもしれない。でもでも、ほんのわずかでも私の入る隙間がある限り、私は絶対にあきらめない！！　私は必ずあの狐から連夜の心を取り戻してみせる！！」

自分の想いを絶叫し再び玉藻のほうに視線を向け直す姫子。その黒い瞳には決して消えることがないのではないかと思わせるだけの強く輝く闘志の炎が燃え上がっていた。

そう、龍乃宮（りゅうのみや）　姫子（ひめこ）は連夜のことを愛していた。

幼き頃連夜と出会ってから姫子と連夜の間にはそれはもういろいろなことがあった。敵としてぶつかりあったこともあれば、かけがえのない仲間として共に苦難を乗り越えたこともある。そして、いつしか姫子は、連夜のことを深く愛するようになっていたのであるが、不運なことに彼女が自分の気持ちを自覚したそのときにはもう、連夜の心には別の女性がしっかりと住みついていて、がっちりとその心を握ってしまっていた。

それでも諦めきれずに告白したが、連夜にきっぱりとその想いを受け取ることはできないと告げられた。

こうして、彼女の恋は終わった・・と誰もが思ったのであるが、さにあらず。彼女は諦めなかった。連夜本人に直接拒絶されたにも関わらず、まったく諦めていなかったのだ。

彼女のことを恋愛の対象としては全くみていない連夜であるが、友達としては見てくれている。だとするならば、全く好意がないわけではない。相手は難攻不落であるが、完全に望みは絶たれてはいない、そう思った彼女は再び立ちあがったのだった。（連夜とっては非常に頭の痛いことであったが）

連夜とクラスが一緒であることを最大限に利用し、ほとんど毎日のように連夜にアタックを続けている。勿論、連夜には玉藻という最愛の女性が存在しているわけだから、姫子の想いがそう簡単に報

われるわけはないのであり、その予想通り連戦連敗の毎日を送っている。

だが、彼女は諦めない。連夜に断られても断られても不死鳥のように甦り、何度でもアタックを繰り返すのである。

連夜にアタックを繰り返すばかりではない、最大の恋敵である玉藻にも連日のように挑戦状を叩きつけては拳を交えているのだ。

そして、今日も彼女はその拳を、熱き魂を玉藻へと向ける。

「女狐め、今日こそ成敗してくれる！！」

「そういえば、昨日もおんなんじこと言って私にかかってきて、逆に成敗されちゃった女の子がいたわねえ。あれは姫子ちゃんだったような気がするんだけど」

「馬鹿め、昨日の私と今日の私が一緒だと思うなよ。『龍』は日々進化するのじゃ。己が目指す高みに辿りつくため、風に乗り、雲を掴んで、天へと駆けのぼる！！」

「懲りない子ねえ。言っておくけど、私に勝っても連夜くんの心は変わったりしないわよ。まあ、私が負けるわけないんだけど」

「そんなことはよく知っておる。連夜の心は強い。どんなときでも、どんな場所にあっても、その心は簡単に変わったりはしない。その名前の通りいつも夜のように静かで穏やかだけど、決して変わることのない心」

「それがわかっているんだったら、いい加減諦めなさいよね」

一瞬だけ闘志の炎を消し、切なそうな悲しそうな表情を浮かべて隣に立つ連夜を見つめる姫子。そんな姫子を呆れたように見つめな

がら玉藻は呟いてみせるが、再び玉藻へと視線を移した姫子は再びその闘志をその両目に宿らせる。

「だからこそ・・だからこそ欲しいのじゃ。一度その心を預けたならば決して裏切らぬ強い心、一度その身を預けたならば全力で相手を信じる心、夜のように深くて静かで怖いけれど、心の底から優しくて、心の底から強い『人』。だからこそ、私は連夜に惹かれ・・お主も連夜に惹かれた・・ちがうか？」

「ちがわないわね」

「もし・・もしも、お主と私の立場が逆だったとして、お主ならば諦められたか？」

「諦められないわね」

「手が届かないから、入る隙間がないから・・そんな理由で諦められるほど私は物わかりがいい女じゃない！！　自分が心の底から負けたと思うまで、連夜に対する想いが最後の一滴まで枯れ果てるそのときまで、私は戦い続ける！！」

裂帛の気合と共に放たれた姫子の魂の雄叫び。その闘志に応えるかのように、周囲の空気がびりびりと震える。

並の戦士であれば、今の姫子の姿を見ただけで委縮してしまうだろうが、姫子の眼前に立ちはだかる敵は並の戦士からは程遠い存在であった。姫子の体から噴き出す恐ろしいまでの闘気を見て、委縮するどころか逆に楽しげな笑みを浮かべて見せる。

「連夜くんを狙う恋敵としては決して許せる相手じゃないけど。正直、姫子ちゃんのそういうところキライじゃないわよ。あなたって

私と連夜くんの関係を知りながら、それを盾にして言うこと聞かせる様な卑怯な真似しないし」

「この龍乃宮　姫子、例え死んでもそんな腐り果てたことはしたりしない！！　それにそんな方法で連夜を手に入れても、本当に手に入れたとはいえない！！　私は正々堂々真正面から連夜をお主から奪い取って見せる！！」

「いいわね、その心意気。わかった、受けてあげるあなたの拳」

「試してみるか、私の拳を！？」

「試すだけじゃ済まさないけどね・・連夜くんに対するその想いそのもの諸共に蹴り砕いてあげる！！」

「行くぞ、如月　玉藻ぉ！！」

「かかってきなさい！！」

白衣や巻きつけ型のタイトスカートを取り去って机の上に投げ捨てた玉藻は、再び戦闘用のボディスーツ姿となって独特の半身の構えで姫子を睨みつける。完全に玉藻がやる気になったことを確認した姫子は、不敵な笑みを浮かべてみせると、どこから取り出したのか指抜き型の真っ赤な小手を両手に着装し、同じ真赤な色をした鉢巻を額へと巻きつけて後ろで固く結ぶ。

狭い保健室の中を一気に膨れ上がる二つの闘志。敵意や害意や殺意ではない、ましてや恨みでもないし憎しみでもない、そこにあるのはただただ純粋な戦意のみ。

二人の闘士は己のプライドを賭けて、その牙を剥く。

まるで己の魂を刻み込むむように固く握りしめられた拳は引き金

をひかれる寸前の拳銃のように腰だめに置かれ、そして、己の想いの全てを乗せるかのように引き搾られた足は居合い斬りの前の刀のように静かに大地を踏みしめる。

やがて、その必殺の一撃を秘めた凶悪なその牙が、眼前の敵を屠るために姿を現す瞬間が訪れる。どちらかが合図をしたわけではない、あらかじめ示し合わせていたわけでもない。だが、二人は期せずして同じ瞬間を必殺の好機と定め、同時に動きだす、ただただ目の前に立つ自分の相手を倒すために。

二人は己の牙を最大限の威力で発揮するために、凄まじい勢いで軸足となる一歩を踏みだす。

「吼えろ私の拳!!　嵐となって眼前に立ちふさがる全ての敵を屠り去れ!!　いくぞおおお、如月　玉藻ぉぉぉぉぉ!!」

「龍乃宮　姫子、人の恋路を邪魔する奴は、狐(あたし)に蹴られて地獄に落ちろぉぉぉ!!」

「あ、ちょっとごめんなさいね、はい、ごめんなさいね」

「「えっ？」」

今まさに激突しようとしていた龍と狐。その両者の間を、なんともいえないかわいらしい笑顔を振りまきながら通り過ぎて行く一人の少女。

後ろでくくってポニーテールにした雪のように真っ白で長い髪、頭からは鹿のような二本の角、くりくりとした大きな瞳に、小さな口、玉藻に匹敵するような大きな胸。玉藻や姫子のような際立って美しい少女というわけではないが、平均よりは間違いなく上。

麒麟系の白澤という種族の少女。

その少女は玉藻と姫子の共通の知人であり、連夜ほどではないも

のの二人の心の中で結構大事な位置にいる少女。だから、二人は？き出しにしてお互いに向けて放とうとしていた牙を慌てて止めると、その少女に視線を向ける。

　すると、その少女は二人に本当に申し訳ないといった表情浮かべながら、ある人物の手を引いてその場をそそくさと立ち去ろうとする。

「ごめんね、お取り込み中に本当にごめんなさい。姫子ちゃんも、玉藻姐さんもほんとごめんねえ。すぐに出て行くから、ちょっとだけごめんなさいね、はい、通して通して」

　と、呆気に取られて固まっている二人を尻目に、その白髪の少女はある人物と共に保健室を出て行こうとする。

　だが、二人の人物が部屋から出て姿を消そうとした寸前で我に返った二人は、戦い合うことをすっかり忘れて慌ててその少女に声をかける。

「ちょ、ちょっと待てリン！！」

「そ、そうよ、リンちゃん、ちょっと待って！！」

　姫子と玉藻に同時に呼び止められた少女は、戸口のところで立ち止まるときょとんとした表情で二人のほうに振り返る。

『リン・シャーウッド』

　中学時代から連夜と行動を共にし、連夜が『真友』と呼んで絶大な信頼を寄せている二人のうちの一人。連夜のもう一人の大親友ロムの恋人であり、姫子の大親友でもあり、そして、玉藻と義姉妹の契りを交わした人物。

二人の知己であり、連夜や玉藻や姫子の恋模様の全貌を知る彼女がここにいてもなんの不思議もない、むしろ二人の戦いを止めるために飛び込んできたとしても全然不自然ではない位置に立っている彼女なのだが、明らかに今回彼女の目的はそれではなかった。

それは彼女が手を引いている人物を見ればはっきりとわかる。

「え、何？」

「『何？』じゃないじゃろ！？」

「そうよそうよ！！　あのね、リンちゃん・・」

心からわけがわからないという顔をして小首をかしげているリンを、同じような苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべてみた二人は、期せずして同時に同じことを尋ねる。

「「いったい、どこに連夜くんを連れて行こうとしているのよ！？」」

「あ～、なんだそんなことか」

必死の形相で詰め寄ってくる二人と対照的に、まったく悪びれた様子もなくてへへと笑ってみせるリン。そんな三人の様子を横で見ていた連夜は、あまりにもリンがのんびり会話をしていようとしていることに頭を抱えていたが、やがて溜息をひとつ吐き出して玉藻達の間に割って入り、リンの代わりに説明を始める。

「すいません、玉藻さんと姫子ちゃんが話し合っている間に、リンがやってきて僕はその説明を受けていたんです。緊急事態なんです。どうやらあの不良グループの中で逃げのびた奴がいるらしくて、そ

いつがあの襲撃に参加してなかった残りのメンバーを集めて、うちのクラスに押し掛けてきているらしいんですよ。今はロム達が相手してくれているみたいなんですけど、どうやら何人か手強い奴がいるらしくて」

「それで、ちょっとだけ連夜に手を貸してもらおうかなと思ったってわけです」

連夜のあと引き継いでリンが肩をすくめてみせると、連夜は苦笑しながらも深く頷いてみせる。

「そういうわけで、僕、ちょっと行ってきますね。急ごう、リン！」

「うん。じゃ、ちょっと連夜のこと借りていきますね。お二人は恋人よりも自分達のプライドのほうが大事みたいですから、ここでごゆっくりどうぞ」

早口で玉藻と姫子にそう伝えた連夜は、表情を引き締めるとリンを促して保健室から走り出していく。そんな連夜の声にリンはすぐに応え、後を追いかけようとするが、ちょっと振り返ると意味深に玉藻と姫子の二人にウインクしてみせる。

玉藻と姫子はしばし呆然として、ここから立ち去っていく連夜とリンの後ろ姿を見送っていたが、リンが最後に残したウインクの意味を正確に察するとお互い顔を見合せて苦笑を浮かべる。

「あ～、もう、そこまで言われてやれるわけないでしょ～。ほんとリンちゃんには負けるわ。姫子ちゃんはどう、まだやる？」

「するわけがなかろう。そんなことよりも私には優先すべきことが

ある！！」

「あら、奇偶ね、実は私もそうなのよ」

そう言ってニヤリと肉食獣の笑みを浮かべた二人は、同時に前を向き見えなくなりつつある二つの『人』影に向かって叫ぶ。

「リン、ちょっと待て、私も行くぞ！！」

「連夜くん、待ちなさい、危ないことしちゃダメっていったでしょ！！　ほんとにもうしょうがないんだから！！」

そして、龍と狐は走り出す、自分達にとって唯一無二の大事な少年を守るために。

第五話　『狼と妖精』

今、譲れない何かを賭けて対峙する二つの影がある。
片方は、月明かりに照らされ悠久の氷河のように美しく輝く白銀の獣毛を持つ一匹の雌狼。強い意志を秘めた蒼い瞳はどこまでも澄み切り、ピンと立てられた長い耳は物音一つ逃さないとばかりにくるくるとせわしなく動く、そして、むき出しになった口からは鋭い犬歯が覗き、そこからは聞く者を気圧さずにはいられないような獰猛な唸り声が漏れ聞こえてくる。
体長・・いや身長百八十ゼンチを越える大柄な体格をこれみよがしに見せつけ、相手を存分に威嚇して睨みつける。
それに対する人物は、一見あまりにも脆弱に見えた。
くせのない見るからに柔らかそうでさらさらな亜麻色の髪、妖精族特有のとがってながい耳、大きな宝石のようにきらきらと光る大きな瞳、小さいが整った鼻、そして、まるで桜のつぼみそのもののような魅力的な唇、百六十ゼンチあるかないかの小柄な身長に、華奢で凹凸のない細い体。
姿形はどこからどうみても完全無欠に美少女で、対峙している巨狼からすれば軽く一呑みにしてしまえそうであったが、だが、巨狼はそうしようとはしなかった。いやむしろ強敵を相手にしているといわんばかりにその身を緊張で包み、油断なく目の前の小柄な『人』影を見つめてじっと動かない。そして、少女のような姿をした『人』影は、美しくもかわいい顔をきりっと引き締め大きな目を細めながら、目の前で対峙する巨狼に全く気圧されることなく、それどころか逆に巨狼を睨み返す。その姿からは一流の戦士のオーラが噴き出し続けている。
いったいどれくらいの時間、そうして睨みあっていただろうか。
やがて、焦れたように巨狼が大きな咆哮をあげる。聞いた者全てを威圧し恐怖で縛るような恐ろしい声。だが、しかし、目の前の『

人』影は動じない。その咆哮を涼やかな表情のままに聞き終えたあと、すっと何か紙とペンのようなものを取り出すと、素晴らしい手つきで紙にペンを走らせる。

そして、やがて何かを書き上げた『人』影は、その紙を巨狼に見せつけるように突きだして見せる。怪訝な表情になってその紙を見つめた巨狼であったが、そこに書かれた文字が力ある呪文か何かであったのか、悲鳴を上げてよろよろと後ずさる。

いや、悲鳴をあげたばかりではない、先程までの戦意や闘志はどこへやら、いやいやと首を横に振りながら、明らかに涙目になって激しく動揺し続ける。そして、最後には何かを懇願するかのように、すがりつくかのように、弱々しい声と表情で目の前の『人』影に蒼い瞳を向けるが、それを見た『人』影は瞳に憐憫の情を映しながらも、ゆっくりと首を横に振って拒否の答えを返す。

その様子を見た巨狼は、物凄いショックを受けたようにさらに後ろへと後ずさる。その答えが納得できないといわんばかりに今にも泣きだしそうになりながら首を横にふっていやいやを繰り返すが、いくらそうしても目の前の『人』影が一向に首を縦に振らないことを見てとると、涙でぬれる瞳に怒りの炎を燃え上がらせる。

そして、今度は威嚇ではなく怒りの咆哮をあげると、鉄ですら簡単に噛み千切りそうな鋭い犬歯を?き出しにして『人』影に躍りかかる。

風のように、雷のように、光のように、凄まじいスピードで『人』影に組みつき、そして・・

「く〜〜り〜〜す〜〜、お願い〜〜!!　連夜特製ジャンボチョコレートパフェ食べてもいいでしょ〜〜〜!!」

自分よりも一回り小さいエルフ族の少年に抱きついた巨狼・・いや、狼獣人族の少女は、思いきり甘えた声を出しながら自分の鼻を少年に押し付ける。しかし、抱きつかれたエルフ族の少年は、その

声に心を動かされた様子は全くなく、むしろジト目で抱きついてきた狼獣人族の少女を見つめ、手に持った紙をこれみよがしに少女のほうに見せつける。

「ダメだ。おまえ、ここに書かれている文字を声に出して読んでみろ。なんて書いてある？　ん？」

「は、二十日、三十日は五％オフの日・・」

「それは表面だろうが。わかってるくせに、わざとらしく間違えているんじゃねぇよ。俺が裏面に書いた文字を声に出して読んでみろって。ほら」

顔を背けて少年がつきつけてくる紙の内容をわざと見えないように顔を背けてみたり、自分が見たくない内容が書かれているほうではない表面・・少年は某有名スーパーのチラシの裏面に書いていた・・のほうを読んでみたりした狼獣人族の少女だったが、少年が容赦なくずいずいと紙を自分の顔に押し付けてきてこれ以上逃げ切れないとわかると、不貞腐れたような表情を浮かべてその紙に視線を向ける。

「た・・体重・・キュ・・九十・・こ・・ギロ・・か、なあ？」

「微妙に誤魔化しているんじゃねぇよ、九十五ギロだろ？　狼獣人族の高校三年生女子の平均体重教えてやろうか？」

「い、いや、そ、その、け、結構です」

こめかみに青筋を立ててぴくぴくと頬を引き攣らせるエルフ族の少年の言葉を聞いて、だらだらと冷や汗を流しながらぶるぶると首

を横に振ってみせる狼獣人族の少女。
しかし、少年はどっちが肉食獣かわからないような獰猛な笑みを浮かべてみせると、伏せて聞こえないようにしようとした頭の上の少女の狼耳を引っ張って立たせて聞こえるようにする。

「遠慮するな。聞かせてやる。いいか？　七十五ギロだ！！　な・な・じゅう・ご・ギロだぞ！？　あのな～獣人系は他の種族に比べて比較的大柄だし、筋肉もかなり立派だ。だから多少重いのは仕方ない」

「でしょでしょ、だからね、私の体重もね・・」

「しかしな・・平均よりも二十ギロも重いっていうのは、どういうことだ！？　おまえがスポーツをやってて他の女の子よりも筋肉ががっちりついているのはよ～く知ってる、腕や太ももの筋肉、腹筋、背筋、どれも見事なこともよく知ってる。胸だって平均よりもはるかに大きいのも知ってる、重くて肩がこるって言ってるのは知ってるし、実際おまえはひどい肩こりだ。それもいいだろう。やせ過ぎよりは多少ぽっちゃり型のほうが俺の好みだし、安産型の尻をしているのだってむしろいいくらいだ。だがな、物には限度があるだろう？　おまえスィーツをバカ食いするたびに、カロリーを消費するために必死にスポーツや格闘技やってもりもり筋肉つけていって・・体中そんなに筋肉だらけにしておまえどうすんだよ？　いくら脂肪じゃないっていっても、やりすぎだろう？　完全に筋肉太りしてるじゃねぇか！！！　最終的に『害獣』ハンターか、ボディビルダーにでもなるつもりか！？　それともプロレスラーか！？」

「だってだってだってぇぇぇぇぇ～～！！　スィーツ大好きなんだもん！！　でも、太るのもいやだし・・ほ、ほらほら見て見て、ウエストだってこんない細いし、贅肉なんてどこにもないのよ？　が、

外見的には全然太ってないんだからいいじゃない！！」

「ウエストが細い、太ってないっていっても、おまえ・・なんだこの腕と太ももは！？　ほら、おまえのこの腕、俺の腕の三倍くらいあるじゃねぇか！？　丸太か？」

「い、いやあああああ！！　比べないでえええええ！！　だ、だいたいクリスの腕は細過ぎるのよ、た、ただでさえクリスは平均的なエルフ族と比べてもやせているんだからあ！！　そ、それに三倍もないもん・・に、二・五倍くらいだもん・・」

逃げて行こうとする狼獣人族の少女をがしっと掴んだ少年は、カッターシャツをまくりあげて自分の白く細い腕を外にだすと、ブラウスに包まれてはいるもののはちきれそうになっている少女の腕に重ねてみせる。すると、少年の言葉通りその大きさの対比は明らかで、まるでねぎと大根くらいの差がある。

「あのなあ、スィーツを全然食うなとはいわねぇよ。おまえが三度の飯よりもチョコレートが大好きなのはよ～く知ってる。子供の頃からそうだったもんな。おまえがあまりにも食い過ぎるものだから、心配したブランカ母さんがチョコレートをいろいろなところに隠していたけど、どこに隠してもどうやってか捜し出してはむしゃむしゃ食っていたもんなあ」

「そんな子供の頃の話を蒸し返さないでよ！！」

「いや、子供の頃って、おまえ今でもそうじゃん。この前も、ドナおばさんが城砦都市『刀京』に旅行に行ってこられて『おみやげよ～』ってブランカ母さんに水羊羹持ってきていたけど、おまえ勝手に戸棚から出して食っていただろ？」

「な、な、なんで知ってるのおおおお!?」

「あほか、そんなことするのおまえしかいねぇじゃんかよ」

少年の言葉に目に見えて動揺する狼獣人族の少女。しかし、少年は謎を暴いて勝ち誇ったというよりも、どうしようもないなあという困り果てた表情を浮かべて溜息をつくばかり。

「俺は甘いものキライだし、ロボ父さんはスィーツといえばプリンのみだし、ブランカ母さんが一人で食うわけないしな。消去法で速攻わかるだろうが」

「ど、ど、泥棒が入って食べちゃったのかもしれないじゃない・・」

「どんな泥棒だよ、いねぇよ、そんな泥棒は。ともかくだなあ、もう、今更だから、おまえから甘いものを取り上げようとは思わねぇよ。完全に取り上げちまってストレスで病気にでもなっちまったら目も当てられないからな。だから、食うなとはいわん。しかしだな、もうちょっと加減しろよなあ。いくらダイエットして脂肪は胸以外ない、中性脂肪もないって言ってもだな、いまのままじゃ筋肉太りしていく一方じゃねぇかよ。最終的に狼獣人族じゃなくて巨人族になっちゃうぞ、おまえ」

大柄な体を小さく縮こまらせ、両手の人差し指をかわいらしくちょんちょんとつついて見せる狼獣人族の少女を、なんとも言えない表情で見つめていた少年だったが、やがてよっこいしょと立ち上がるとスタスタと移動を開始。

すぐに目的地へとたどり着く。

そこはよく掃除され、整理されたあるお家のキッチン。そのキッ

チンの中央にはエルフ族の名工の手によって製作されたものと思われる大きめのテーブルが設置されていて、少年はそのテーブルの上に置かれたあるものをじ～～っと見つめる。

かなり大きなガラスの器、その透明なガラスの器の中には、クッキー、アイスクリーム、ホイップクリーム、イチゴやキウイ、オレンジといった色とりどりのフルーツがたっぷりと美しい断層を描いて盛りつけられており、一番上には様々な形をしたチョコクッキーと、真っ黒になるくらいチョコレートソースがかけられたバナナが添えられている。

これぞ、この家の住人の一人である料理の達人が作り出した特製ジャンボチョコレートパフェ。

一目見ただけで凶悪な量の糖分とカロリーが詰まっているとわかるそれを、しばらくの間なんともいえない複雑な表情で見つめていたエルフ族の少年だったが、やがて、短く嘆息をもらして器をがしっと掴んで持ちあげる。

そして、それを持ったまま振り返ると、すぐ横のリビングルームでへたり込んでいる狼獣人族の少女へと視線を向けて口を開くのだった。

「と、いうわけで、このジャンボチョコレートパフェは没収」

「そ、そんなあああああっ！！　な、なんで！？　食うなとはいわないって言ったじゃない！？　なんでまるまる没収なのよおおっ！？」

「加減しろって言っただろ？　おまえさあ、今日一日だけでどれだけチョコレート摂取したよ？」

「え？　な、なんのことかしら？」

「朝にチョココロネ四つ、学校ついてから休憩時間にココア三杯、お昼御飯に弁当食ったあとエクレア八つ、午後の特別課外授業の後、バニラとチョコのミックスソフトクリーム・・って、もう十分だろう？　どんだけチョコレート食うんだよ・・」

「あは・・あははは・・な、なんで知ってるのおおおっ！？」

呆れ果てた表情で呟いて見せる少年を見て、泣き笑いの状態で絶叫する狼獣人族の少女。

「いくら今日がおまえの誕生日で、そのために連夜が作ってくれたと言ってもこれ以上はダメだ。はっきり言って身体に悪い」

「没収するって言ったって、それ、どうするのよ！？　まさか捨てるつもりなの？　食べ物を粗末にするなんて、ダメよ！！　やっぱりここはわたしが・・」

「心配せんでもここにいるみんなに食べてもらえば済む話だ。一人で食べるならすごい量だが、全員で食べるなら大した量じゃない。一瞬で終わる」

「一瞬で終わらせないでえええええええ！！　連夜が気合いを入れて作ってくれた芸術作品なのにいい！！　お願いクリス、明日から節制するから、今日だけは見逃してえええ！！」

「ダメだ」

「捨てないで・・お願いだから捨てないでえええええええ！！」

「だから捨てねえっていってるだろ。全部食べて処理するだけだ」

「結局、私の口には一口も入らないじゃないのよ！！」

「それが目的だからな・・って、ええい、未練がましい！！　放せ、放さないか、それでも誇り高き狼獣人族の元巫女候補か！？」

「関係ないもん！！　今はクリスの奥さんだもん！！　巫女はそういうことを厳しく禁止されてるけど、クリスの奥さんはスィーツをいくら食べても許されるもん！！　だからいいんだもん！！」

「多少は許すが、完全に限度を越えてるわい！！　いい加減にしろ、本当に怒るぞ！！」

「もう怒ってるじゃない！！」

本気泣きしながら少年にすがりつき激しく首を横に振りながら狼獣人族の少女は少年が手にしているチョコレートジャンボパフェに悲しそうな視線を向ける。

今の彼女の顔の上半分は誰が見ても本当に悲しそうで同情したくなること間違いなし、という表情をしていた。大きな蒼い瞳は涙という大海に沈み、そこからはきらきらと夜空を駆ける流星のような美しい涙が流れおちている。獣人系の男性が、今の彼女に泣きながらすがりつかれたら大概のお願いを聞いてしまうだろうというインパクトの強い表情をしていたが、少年はその上半分の部分ではなく彼女の顔の下半分を見てげんなりとした表情を浮かべて見せる。

彼女の顔の下半分、特に口の部分は顔の上半分とは別の意味で大変なことになっていた。口はだらしなく緩み、中からはだらりと垂れさがった長く赤い舌、そして、その口の中からは滝のように涎が流れおちて、せっかくの凛々しくも美しい野生動物の美少女顔が完全で完璧にして木端微塵に砕け散って台無しにして残念無念の状態。

二人はそうしてしばらくの間、激しい言い合いを続け、いつまでたってもお互いの主張が平行線のまま交わることがないことを悟ると、やがて、何を思ったのか今まで以上に真剣な表情になる。そして、二人はその顔をキッチンの中にある流し台の方向に同時に向けると、ある人物の名前を叫ぶのだった。

「「連夜!!」」

日々料理技術を伝授し続けている自分の二人の弟子である少女達と、この家の主に仕えているたくさんの東方猫型小人族（ねこまりも）のメイド達を従えて、流し台に向かって様々な料理を作っていた一人の少年が、自分の名前を呼ぶ声を聞いておっとりと振り返る。すると、二人は凄まじい勢いで少年のほうに寄って来て我こそが正しいとばかりに主張を始めるのだった。

「連夜、聞いてくれ!!　アルテミスのやつ、今日すでにとんでもない量のお菓子食ってるくせに、まだ、これ以上食う気なんだよ!!　いくら運動しているからってこのままじゃあ、糖尿病になっちまう、頼むから止めてくれ!!」

「連夜、聞いてちょうだい!!　クリスったら、せっかく連夜が私のために作ってくれた芸術作品を取り上げようとしているのよ!?　私の為に作ってくれたんだから、私がきちんと全部食べるのが筋だと思わない!?」

「ちょ、ちょ、ちょっと待ってってば!!　二人とも落ち着いて!!」

目を血走らせながら、己の主張こそが絶対に正しいとばかりに唾をとばしながら早口にまくしたててくる二人を、黒髪黒眼の人間族

の少年　宿難（すくな）　連夜（れんや）は、困惑した表情で懸命に押しとどめる。
　連夜にとってみれば二人は、二人ともに掛け替えのない友人で、身内同然の大事な存在。どちらか一方だけに味方するわけにもいかず、引き攣った笑みを浮かべて誤魔化そうとするが、内心では思いきり頭を抱えてしまうのだった。

　深緑森妖精族（ウッドエルフ）の少年『クリス・クリストル・クリサリス・ヨルムンガルド』と、狼獣人族（フェンリル）の少女『アルテミス・ヨルムンガルド』

　幼き頃に狼獣人族の夫婦に拾われて育てられたクリスと、その夫婦の実子であるアルテミスは同い年で、連夜と同じ高校に通うクラスメイト。
　元々二人は乳兄弟のような間柄であったが、いつしか互いに愛し合うようになり、恋人同士に。そして、クリス自身が抱えていた大きなある問題が解決したことで、二人は自分達の両親の許しを得て、去年の九月に結婚し現在は夫婦となっている。
　本来、この都市の条例では十八歳未満の男女は結婚できないのであるが、二人が属している狼獣人族の掟が都市の特別文化保護条例の対象になっていて、その掟上で十五歳以上の男女は結婚を許されるとあるため、特別に許可されて結婚を許されたのだ。

　二人の両親は連夜にサバイバル術や、乗狼術を教えてくれた師匠で、高校で一緒になる以前から二人とは親交のあった連夜。いや、親交どころではない、二人とはある目的の為に共に、文字通り共に死線を潜り抜けた間柄。特にクリスとはそのときのことがきっかけで強い絆で結ばれていて、お互いが『背中を託すことができる血の繋がらない兄弟』と断言し、『戦友』とも『義兄弟』とも呼び合う仲。

また、クリスには劣るものの、アルテミスとの絆も決して浅いものではない。師匠である彼らの両親の元に修行しに通っていたころ、忙しい彼らに代り家事を得意中の得意とする連夜が世話をしてやったこともある。そのためか同い年であるにも関わらず、アルテミスは連夜のことを実の兄のように思い慕っている。そんな風にアルテミスが懐いてくるので連夜としてもかわいくないわけがない。アルテミスのことを妹のように思いかわいがっている。

今日は、そんなアルテミスの誕生日。

連夜はかわいい妹分の誕生日を祝ってやろうと、彼ら二人と彼らと普段から特に親しくしている友人達をを自宅に呼んで誕生パーティを催したのだ。

友人達は快く参加を表明し、学校が終わったあと、パーティ会場である連夜の自宅に集まってきていた。みながみなお互いをよく知る身内同士ということもあって、集まった彼らは思い思いに親しく談笑していたのだが、夕食ができるまで・・つまりパーティを開始するまでにかなり時間があった。

ただしゃべっているだけじゃあ、気の毒だなと思った連夜は、夕食ができるまでのつなぎとなるようにお茶と軽食を御馳走しようと提案したのだが、そもそもこれが間違いだったのかもしれない。

ほとんどのメンバーは、コーヒーや紅茶だけでいいと言ったのだが、一人だけ違うものを要求した『人』物がいた。

それがアルテミスだった。

以前、連夜がアルテミスの自宅に修行で通っていたときにアルテミスに、よく作ってあげたという特製ジャンボパフェが食べたいと言い出したのだ。普段から様々な食材を取り揃えている連夜であったから材料は問題なかったし、作り慣れているのでそれほど手間がかかるわけでもない。なので、快諾して作り上げたのであるが・・まさか、こんなことになるとは。

連夜はすがりついてくる二人をなだめながらなんとか引き離すと、苦笑を浮かべて二人を見つめる。

「二人の主張はよ～くわかったから、とりあえず、落ち着こう、ね」

「「連夜～～」」

「はいはい、わかったわかった。クリスとしてはアルテミスの身体が心配だから、これ以上糖分やカロリーを過剰に摂取する食べ物を食べてほしくないんだよね？　でも、アルテミスとしては誕生日くらい好きにさせてほしいと」

「ああ。こいつスィーツはドカ食いするくせに、肝心の朝昼晩の食事は普通以下なんだよな」

「で、でもでも、ちゃんとしっかり食べているわよ。お肉だけじゃなくて、野菜も、魚も、果物も、穀物も、豆類だってバランスよく、食べているんだから・・ほ、本当なんだから！！」

苦り切った表情で嘆息するクリスの言葉を聞いた連夜が、目を丸くして横に立つ大きな身体の狼獣人族の少女に視線を向けると、少女はすす～～っと顔を横に背けて身体を小さくする。

「う～ん、だったら、多少はいいと思うんだけどね。まだアルテミスは十代だし、主婦業しながらも部活で運動はしっかりやってるしね。」

「でしょでしょ！？　いくら私でも、運動しないで豚にだけはなりたくないもん！！　確かに甘い物は『人』よりも食べているけど」

「でもね～、玉藻さんから聞いたけど、この前、アルテミスやリン達と『サードテンプル』に買い物に出かけてときに、玉藻さんが好

きなものを奢ってあげるっていったら、アルテミス、某有名パフェ専門店で特別ジャンボパフェ注文したんでしょ？　しかもそれを一人でたいらげてたって聞いたけど。あれって確か六人前くらいあるんだよね？」

「な、なにいいいいっ！？」

それについては全くの初耳だったクリスは目を剥いて驚き、秘密をばらされてしまったアルテミスは益々身体を小さくしてクリスと連夜から慌てて目をそらず。

「クリスが心配するのは無理ないと思うよ～。身体を壊しちゃったら元も子もないでしょ？　スィーツ大好きだっていう気持ちはわかるけどね、適度な量にしないと」

「・・はい」

連夜に諭されしゅ～～んとなるアルテミス。そんな姿を見てやれやれと安堵の表情を浮かべたクリスは、手にしたジャンボチョコレートパフェを処理すべくその場を立ち去ろうとする。しかし、そんなクリスを連夜が呼び止める。

「ちょ～～っと待った、クリス。それ持ってどこに行くのさ？」

「へ？　どこにって・・捨てるの勿体ないから、ロムや姐さんや姫子達と食べてしまおうと思ってさ」

「いやいやいや、それはアルテミスの為に作ったものだから、それはあんまりでしょ」

「な、なにっ!?　ちょっと待て、連夜、まさか、おまえ・・」

「うん、それはアルテミスに食べさせてあげようよ」

思いもよらぬ連夜の言葉に驚愕するクリス。てっきり自分の意見に同意してくれているものと思っていただけにその衝撃は大きく、思わずよろめいて手にしたパフェを取り落としそうになる。だが、連夜の言葉で復活を果たしたアルテミスが、音もなくクリスに近づくとその手からパフェが入った器を奪い取ると、満面の笑みを浮かべてそそくさと連夜の後ろに隠れる。

「やった〜〜!!　取り返したわよ!!　やっぱり連夜は私の味方だったのね!!　大好き〜〜!!」

歯ぎしりして睨みつけてくるクリスに見せつけるように連夜の顔をぺろぺろと舐めるアルテミス。そんなアルテミスを苦笑を浮かべてそっと引き離した連夜は、クリスのほうに視線を向け直す。

「おい、連夜、どういうことだこれは!?　おまえ、アルテミスの身体がどうなってもいいってのか!?」

「落ち着いてってばクリス。そんなこと一言だって言ってないでしょ。とりあえず、深呼吸しよう、ね」

「深呼吸している場合か!?　あ、こらっ、アルテミス、食うな、食うんじゃねぇっ!?」

連夜の背後でこそこそとパフェを食べているアルテミスの姿を目撃したクリスが焦ったように怒声をあげるが、アルテミスは幸せそうにパフェを頬張り続ける。クリスは慌てて駆け寄ってその器を取

り上げようとするが、その前に連夜が割って入り、まあまあと両手でクリスを抑える。

「ちょ、何するんだよ、連夜!?」

「いいから、いいから」

「何がいいんだ!?　ちょっともよくねえわっ!!　あれみろ、チョコレートてんこ盛りで、クリーム大洪水じゃねぇか!!　どれだけ糖分とカロリーがあると思っているんだ!?」

「ないよ」

「だろ、ないんだよ!!　糖分とカロリーがないんだ・・って、へ？　ない？」

「ないよ。糖分とカロリーほとんどないよ」

あっけらかんと言い放つ連夜の言葉を聞いて、一瞬怒ることを忘れきょとんとした表情になってクリスが動きを止める。クリスばかりではない。愉快そうに後ろで二人の言い合いを聞きながらパフェを頬張っていたアルテミスもまた、連夜の言葉の意味がわからず、スプーンを口に突っ込んだまま動きを止めてしまっていた。

しばらく口をぱくぱくさせながら連夜を指さしていたクリスだったが、なんとか自分を取り戻すと、どもりながらも連夜にその言葉の意味を問い掛ける。

「お、おい、糖分やカロリーがないってどういうことだ？　チョコレートだろ？　糖分とカロリーの塊だろ？」

「違うよ。そもそも、そこからしてクリスは勘違いしてるんだってば。これ、チョコレートじゃないよ」

「「ちょ、チョコレートじゃない！？」」

第六話　『仲間達』

連夜の言葉にクリスとアルテミスは驚愕の絶叫を放ち、同時にまじまじと食べかけのパフェに視線を移す。しかし、器の中に入っている黒い液体はどう見てもチョコレートにしか見えず、二人は怪訝な表情を浮かべてお互いを見つめあう。

「ど、どうみてもチョコレートにしか見えないんだが・・アルテミス、味はどうなんだ？」

「い、いやあの、私もチョコレートだと思って食べていたんだけど・・言われて見ると確かにチョコレートと比べると若干味が違うかもしれない」

「違う？　どう違うんだ？」

「基本的に甘いんだけど、なんだかほのかに後味が酸っぱい気がするのよ。いや、気のせいかもしれないんだけどね、ほんとに若干で、意識しないとわからない程度なんだけど」

「どれ？」

アルテミスの言葉を聞いて、クリスがパフェの黒い部分を指で少しすくってなめてみる。そうしてしばらくの間口をもごもごとさせて中の味を確認していたクリスだったが、やがて腕組をしてしばらく何かを考え込む。そして、難しい顔を解くと、わからなかった何かが閃いたといわんばかりに表情を輝かせて連夜とアルテミスを交互に見て口を開いた。

「これ・・黒酢じゃねぇか！？」

「えええええっ！？　く、黒酢！？　まさかあっ」

クリスの出した答えが信じられず、アルテミスは苦笑を浮かべて連夜のほうを見つめるが、連夜はニヤリと笑って二人に頷いてみせる。

「正解。よくわかったね」

「「えええええっ！？　やっぱり黒酢なのっ！？」

「うん、勿論ただの黒酢じゃないけどね。東方の玄武族に伝わる秘伝の黒酢なんだよね。酸味がほとんどなく甘味と旨味がすごく強いんだ。勿論、糖分はほとんどないんだよ。健康にも美容にも非常にいいんだ」

「え、え、でも、チョコレートパフェだって・・」

「僕は一言もチョコレートパフェだとは言ってないはずだけど」

「ちょっと待て、じゃあこのパフェはなんなんだ？」

「僕特製のジャンボヘルシーパフェだよ」

「「ヘルシーパフェ！？」」

連夜の口から出た予想だにしなかったパフェの名称に、しばし固まる二人。しかし、アルテミスよりも若干早く回復したクリスは、何かに気がついたようにアルテミスから器をひったくって奪い取る

と、一つ一つの食材を少しずつスプーンですくって食べてみる。
そして、それらを一通り食べた後、驚愕の表情で連夜に視線を移す。

「おまえ、これ、全部、フェイクかよ。すげえな、おい」

「え！　え？　クリスいったいどういうこと？　フェイク（にせもの）って何が？」

「全部、全部だよ！！　このパフェを構成している全てのものが全部よく似せてあるけど違うもの、全く別のものなんだよ！！」

「えええええええっ！？」

「これ、クッキーに見えるけどクッキーじゃない！！　味も確かにクッキーに似せてあるけど違う、なんだこれ。う〜〜ん、わからないけど、なんか『おから』みたいな感じがするな、これ。それにこのクリーム。クリームにしては触感がありすぎる。甘味はしっかりあるけど、どことなく砂糖とかの甘味じゃないんだよなあ・・種類はわからんが豆腐か何かかな。それからこれらのフルーツ。イチゴとか、バナナとか、見た目完全にそうとしか見えないけど、なんか違う。本物と微妙に味が違う・・いや、微妙じゃねぇな、多分、このかけてある黒酢とか、入っているシロップらしきもので本来の味をわからなくしてあるだけで、実際は全然違う味なんじゃないか？
そう言えば、南方にこういうフルーツによく似た野菜があるって聞いたことがあるんだが」

「そ、そんなバカなことあるわけないじゃない。クッキーやクリームはともかく、どうみてもこれイチゴやキウイやオレンジやバナナだよ？　野菜だなんて、そんな・・あれ？　でも、あれ？　あれれ

？　な、なんかやっぱり味が違うような・・だけどそんな・・ねえ、連夜、本当にクリスの言う通りなの？」

　手にしたガラスの器の外側から見えている食材の数々を一つ一つ指し示しながら解説してみせるクリスだったが、その言葉がどうしても信じられないアルテミスは、何度もパフェの中身をすくって口に含んでみる。だが、クリスの言う通りどこか味が違う。しかし、見た目はどうみても普通のフルーツ。混乱する頭のまま、アルテミスは横に立つこのパフェの製作者である連夜のほうに視線を向けて問いかける。

　すると連夜はアルテミスのほうをいたずらっぽく見つめたあと、すぐにクリスのほうへと視線を移し賞賛の色を隠そうともせずにぱちぱちと拍手で応えた。

「そうだよ、アルテミス。その通り、そのパフェの中身はクリスの言う通り見た目とは違うものばかりなんだ。しかし、すごいな、クリスは。中身ほとんどあてられちゃったよ。ほぼ正解だよ。よくわかったね」

「えええええええ、じゃ、じゃあ、これ全部ニセモノなのおおっ！？」

　連夜とパフェを交互に見つめながら驚愕の絶叫をあげるアルテミス。

「そそ、中身については、あらためて説明する必要ないかもしれないけど、一応言っておくね。ほぼクリスの言う通りなんだ。クッキーに見えるものは豆腐を作る工程ででる『おから』、それをね、西域屋敷妖精族（ブラウニー）の秘伝の製法で乾燥させて固めたもの。クリームのように見えているそれはね、やっぱりクリスの言う通り豆腐なんだよ

ね。旧上華（シャンファ）帝国の宮廷料理の一つでね、美容にめちゃくちゃうるさかったある皇妃様が考案させた料理らしいんだけど、ある独特の製法で作りだした『西王母豆腐』っていう豆腐をね、龍族に伝わる製法で崩してクリーム状にしたものなんだ。元々の材料になってる『西王母豆腐』っていうのがすっごい甘くてクリーミィだから、甘味を足したりはしてないよ。それから中に入っているゼリーに見えるものは、『白玉コンニャク』ね。説明いらないと思うけど、コンニャクだから、勿論カロリーはゼロ。で、一番二人が気になっているのがフルーツだと思うんだけど。そうなんだよ、それもフルーツじゃないんだよ。かといって野菜かっていうとちょっとそれも違うかな。それね、サボテンなんだ」

「「さ、サボテン！？　これが！？」」

「そうなんだ。はるか西南にある地域で品種改良されたものなんだけど、そもそも、このサボテンの発祥の地ってね、見渡す限りの荒野らしいんだよね。で、植物らしい植物をほとんど育てることができなくて、育つ植物といえばサボテンくらい。幸い、荒野には食料になる動物がたくさんいるらしいんだけど、だからって、肉ばかり食べるわけにはいかないじゃない。それで、現地の『人』達は苦労に苦労を重ねて唯一育つサボテンを改良し続けたらしいんだ。で、五百年という気が遠くなるような歳月を現地の『人』々は努力し続けて、その結果、実に様々なサボテンが生みだされることになった。その中のいくつかが、これ、『フルーツサボテン』。見たとおり、オレンジや、キウイや、バナナに酷似した姿形をした果肉をしているけど、元々の姿は間違いなくサボテンなんだよね。とげとげがいっぱいついたあの姿の、外側をきれいに剥き取るとこうなるわけ。いや、『人』って本当にすごいよねえ。味とかは流石に本物には遠く及ばないけど、元々がサボテンだからか、クリームとかシロップとかをかけるとスポンジみたいにその味を吸収しちゃうんだよ。ク

リスが言った通り本来の味は野菜に近いんだ」

連夜の説明をただただ呆然と聞き続ける二人。なんとも言えない驚愕の表情を浮かべたまま、しばらくの間呆けたように突っ立っていたが、やがて連夜の説明が一段落つくと、再び自分達の目の前にあるチョコレートパフェもどきへと視線を移し、まじまじともう一度中身を見つめる。

「信じられない・・どうみてもチョコレートパフェにしか見えない。しかも、『サードテンプル』のパフェ専門店のパフェと比べてみても全然遜色ない味だし。連夜がウソつかない『人』だってわかってるけど、やっぱりどこか疑っちゃうわ」

「だよな～。俺も注意して食ってみてなかったら絶対騙されていたわ」

そう言って二人はもう一度顔を見合わせ苦笑を浮かべて見せる。

「まあ、そういうことで、そのパフェに劇的に太るような成分は入ってないはずだよ。食べすぎはあまりおススメできないけど、まあ、そのくらいの量なら問題ないと思う。ってことでいいかな、御二人さん？」

おどけたような仕草で肩をすくめて見せる連夜の姿を見て、二人は表情を和らげる。その後、クリスは表情を引き締めると真剣な表情で真っすぐに連夜を見つめたあと、深々と頭を下げるのだった。

「考えてみれば連夜がアルテミスの身体に悪いものを作るわけがないよな。すまん、連夜。今更だけど、俺の行為はおまえ自身を疑う行為だった。考えなしに騒ぎたてて本当に申し訳ない。許してくれ」

「をいをい、やめてよ、兄弟（ブロウ）。僕と君の仲ジャン。全然気にしてないって。それにクリスにとってアルテミスがどれだけ大事な存在かよくわかってるからね。これくらい当然当然。アルテミスは本当に愛されているよねぇ」

「あ、改めて言うなって！！　恥ずかしいから！！」

「や、やだもう！！　ま、まあ一応自覚しているけど・・」

連夜に茶化された二人は顔を真っ赤にして俯くと、再びお互いに視線を向ける。

「ごめんな、アルテミス。おまえの誕生日だってのに、うるさく言ってしまってよ。おまえだって、ちゃんと考えているのに、一方的に決めつけちまった。本当にすまん」

「ううん、いいの。自分でもわかっていたし、クリスが私のこと心配して言ってくれているのはわかっているから。すぐに甘いもの減らすことできないけど、ちょっとずつ減らしていくね。いつも私の身体を気にかけてくれてありがとうね、クリス」

「当り前だろ、アルテミスは大事な俺のたった一人の奥さんなんだから」

「クリス・・」

「アルテミス・・」

すっかり仲直りした二人は自然と寄り添い合い、そして徐々にそ

の顔が近づいていく・・が。

「ちょ、ちょ、ちょっと待って、二人とも!!　仲直りしてくれてよかったし、二人が本当に仲良しなのはいいんだけど、ここでラブシーンは勘弁してよ!!　僕やリンはともかく中学生の女の子がいるんだからね!!　それにギャラリーもいっぱいいるんだけど」

「「えっ・・」」

連夜の慌てたような声にはっと気がついた二人は、顔を離し周囲を見渡す。すると、先程まで忙しく夕食の用意をしていた、白澤族の少女リンや、東方猫型小人族（ねこまりも）のメイドさん達や、そして、連夜の料理の弟子で玉藻の実の妹である中学二年生の少女　晴美（はるみ）が、その手を止めて二人のラブシーンを・・ガン見していた。

「う、うわわわわわわ!!」

「きゃ、きゃあああっ!!」

今更ながらに顔をゆでダコのようにし、両手をバタバタさせながら慌てまくるクリスとアルテミス。

「ちゅ、『ちゅ～』は？　『ちゅ～』しないの？　熱烈なやつ！　私達に遠慮なくしてくれていいんだけど」

「そ、そうですニャン。私達にはお構いなく」

「どうぞどうぞですニャン」

「よかったら写真撮りますニャン」

「「できるかあっ！！」」

物凄く期待のこもった熱い視線を向けつつ必要以上に熱心な様子で二人にラブシーンの続きを要望するリンとメイドさん達に、二人は焦ったような怒ったような複雑な表情で絶叫する。すると、リビングで談笑していた他のメンバー達がその声を聞きつけてなんだなんだとキッチンへとぞろぞろとやってくる。そして、そのメンバー達も巻き込んで、あっという間にキッチンはカオス状態に。

「何よ～、別に見せたからって減るもんじゃないんだからいいじゃない」

「へ、減るとか減らないとか、そういう問題じゃないでしょ！？　もう、リンったら！！　そもそも私達にやらさなくても自分もちゃんと相手がいるんだから、すればいいじゃない！！」

「う～～ん、だって、私って元々男でしょ。だからなのかもしれないけど、いっつも私から求めてしちゃうのよね。本物の女の子って、男の子のほうからしてもらうことが一般的じゃない？　折角のいい機会だから勉強させてもらおうかと思って。なので、遠慮なくどうぞどうぞ」

「どうぞどうぞって言われても・・ろ、ロムも、黙って見てないでリンを止めてよ！！」

「いや、止めてくれと言われても何がなんだか？　おい、リン、いったい今度は何をしたんだ？」

キッチンの騒ぎを聞きつけて、リビングのほうから燃えるような

赤い髪の朱雀族の少年と共に現れたバグベア族の少年ロムにアルテミスが噛みつくように叫ぶと、ロムは困惑したように自分のすぐ側に立つ小柄な白澤族の少女に視線を向ける。

『ロスタム・オースティン』。

通称ロム。

中学時代からの連夜の友人で、連夜が絶大なる信頼をおく二人の『真友』の一人。

かつて上位の聖魔族が自分達の盾にするために生み出したバグベア族という奴隷種族の少年。裏切り種族と呼ばれる人間族の連夜と同様に壮絶な差別を受けて育ってきたが、ねじ曲がることなく真っすぐに育つ。義侠心に厚く、その勇気、胆力は非常に素晴らしいものがある。

玉藻にはわずかに及ばないものの、連夜にとっては非常に大事な存在。もう一人の『真友』であるリンの最愛の恋人で、事実上の夫。

自分の最愛の恋人にして妻であるリンとは固い絆で結ばれている彼は、彼女のことをよくわかっているつもりであったのだが、流石に今回のこの大騒動がなんのことかわからず、ゆっくりとリンへと近づいて行く。すると、白澤族の少女は、ちょっと小首を傾げてロムを見つめたあと、身体をぶつけるようにしてロムに抱きつき、素早くその唇を少年のそれに重ねる。

「!?」

『おおお～～～!!』

咄嗟のことで反応することができなかったロムは、かわすことができず少女にがっちり首をホールドされて唇を奪われ続ける。しばしの間、両腕をばたばたさせてもがく少年と、うっとりした表情で

唇を重ね続ける少女を周囲のギャラリー達は感嘆の声をあげて観戦していたが、やがて、ロムが少女の身体を力任せに・・しかし、できるだけ乱暴にならない程度の力で引き離す。

「ぷはっ！！　ち、ちょっと待て、リン！？　なんだいったいいきなり！？」

いつもむっつりした表情で動揺する姿など滅多に見せないロムが、顔面を紅潮させ明らかに戸惑っているとわかる表情で目の前の少女に詰め寄る。そんなロムをなぜか嬉しそうに見つめ、えへへと笑って見せたリンは茫然としているアルテミスとクリスのほうに視線を向け直す。

「どうだった？　私達のキスどこかおかしくなかった？　男同士がキスしているように見えたとか、そういうことなかった？」

「い、いや、あの、全然おかしくなかったわよ。どう見ても異性の恋人同士のキスだったけど」

リンの問いかけに、最初どう答えたものかと、横にいるクリスを見たり、ほかのギャラリー達をみたり、後ろで呆れかえっている連夜を見てみたりしたアルテミスだったが、やがてしどろもどろだが答えて見せ、その答えを聞いたリンは、華のような笑みを浮かべる。

「よかった～。あのね、ロムってさあ、なかなか自分からキスしてくれなくて、焦れったいから私からしちゃうのよね。でも、なんかそれって男っぽいじゃない」

「いや、そんなことないわよ。うちだってそうよ。クリスって戦闘

の時とかは男らしいけど、恋愛関係は本当に奥手なのよ。言わないとなかなかしてくれないから、私も自分からしちゃってるわよ」

「あ、そうなんだ。本当はね、結構気にしていたのよ。折を見て玉藻姐さんに相談に乗ってもらおうかと思っていたんだけど、アルテミスにそう言ってもらえると、なんかほっとしちゃったわ」

「何言ってるのよ、自信をもって。全然、大丈夫大丈夫！！　今のリンは本当に女らしいから！！」

「ありがと～！！」

そう言ってリンとアルテミスは手を取り合ってきゃっきゃと嬉しそうに飛び跳ねる。

「お～い、いい加減、誰か俺に説明してくれ～。なんか思いきり置き去りなんだが」

「説明してやりたいんだけど、説明長くなるし物凄くめんどくさいし、内容がすげえくだらねえから、説明したくない」

「なんだそりゃ！？　をい、自分達だけで納得してないでちゃんと説明してくれ！！」

すっかり脱力しきって項垂れているロムの隣に移動してきたクリスが、なんとも言えない嫌そうな顔でそう言うと、ロムは納得できないという表情でクリスに尚も説明を求めようとする。しかし、ロムがクリスの肩を掴もうとするよりも早く再びロムの前に戻ってきたリンがロムとクリスの間に素早く割って入ってきた。

そして、怪訝な表情を浮かべるロムの顔に見せつけるように目を

閉じて唇を突きだす。

「ロム～。お願い～」

「お、お願いって、おまえ・・」

「たまにはロムからちゅ～して～」

「ば、バカっ!!　こんな『人』がいっぱいいるところでできるか!!」

「え～～、そんなあ。さっきはできたじゃない。それともロムは私のこと愛してないの？」

「さっきはおまえが不意打ちでしたからだろ!?　それにそれとこれとは話が別だ。おまえのことはちゃんと愛しているが、こんな『人』前で堂々とき、き、キスできるほど俺の心臓は強くない!!」

「よく言うわよ、ロムくらい心臓の強い『人』もいないと思うけど。あ、そうだ。『人』前でってことならクリスとアルテミスはできるわよね？　だって去年の結婚式の時に、すごい熱烈なやつみんなの前でしていたんだから。って、ことで、やっぱりここは一つお手本をお願いします」

「えええええっ!?　結局そうなるのおっ!?　あ、そうだ。未熟な私達よりも『人』生の大先輩であるセイバーファング御夫妻にお手本をお願いするということで」

再び自分達に振られて『あわわ』と慌てだすアルテミスだったが、ふと自分の視線の先に大きな灰色熊の姿を見つけ、これ幸いと話を

そちらにふる。

「な、なんで俺達に振るんだ！？」

「いいじゃないですか、去年の結婚式の時にかなり熱烈にやっていらっしゃいましたよね？」

「そ、そんな昔のことといちいち覚えているものか！！　え～い、そこのメイド連中、好奇心丸出しで映像記録装置をこっちに向けるんじゃない！！」

「あら、私は別に構わないわよ。他の誰かならともかくあなたとならどこだってできるわ。そもそもいっつも『いってらしゃいのキス』とか『おかえりなさいのキス』とかしてるじゃない」

「ば、バステト！！　こんなところでそんなことバラすんじゃない！！」

真っ赤な顔で慌てる灰色熊の大きな腕に自分の腕をからませてしなだれかかるのは黒豹獣人族の妙齢の女性。

『タスク・セイバーファング』と『バステト・セイバーファング』

連夜の両親の古い知り合いで、連夜の兄大治郎の元傭兵仲間でもある中年夫婦。

大柄な灰色熊の姿をしている男性が、『守の熊（もりのくま）』と呼ばれる獣人種族である夫のタスク・セイバーファング、艶やかな黒い獣毛になかなかのスタイルをしている黒豹獣人族の女性が妻のバステト・セイバーファング。

現在二人は傭兵稼業を引退しており、夫のタスクは養蜂家として

第二の人生を歩んでいて、妻のバステトは専業主婦をしながら献身的にそんなタスクを支えている。

ちなみに連夜達にとって、タスクは養蜂の技術の師匠、妻のバステトは蜂蜜を使った様々な料理技術の師匠。二人とも自分の弟子達をわが子のようにかわいがっていて、今日はそんな愛弟子の一人であるアルテミスの誕生日を祝うためにここにやってきてくれていたのだ。タスクは自分が作った中でも特に高品質な蜂蜜を持参し、バステトは得意の料理の腕をふるって、アルテミスを大いに喜ばせた。

二人とも気が強い性格をしているため喧嘩越しで話をしていることが多いが、本当は非常に夫婦仲が良い。今もタスクは怒ったような焦ったような口調で横の妻に話しかけているが、実際には全然怒っていないことはここにいる面々にはバレバレだった。

当然妻のバステトもそんな夫の内心などとうにお見通しであるから、そんな見せかけだけの怒声など無視して夫の顔を引き寄せると、周囲の面々に見せつけるように夫の鼻づらを優しくぺろぺろと舐めて見せる。

「ちょ、やめんか、バステト！！」

「いいじゃない。それとも、私のこと愛してないの？」

「おま、そういう聞き方はずるいだろ！？」

「いいにゃあ。うらやましいにゃあ」

「もう誰でもいいからガンガンキスしちゃってくださいニャン」

「録画しておきますニャン！！」

『そんなもの録画するんじゃない！！』

「いやそう言われましても、先程のオースティン様とシャーウッド様のキスシーンもバッチリ録画させていただきましたが、何か問題でもですニャン？」

「も、問題大アリだ！！　返せ、コラッ！！　絶対消去してやる！！」

「ダ、ダメですニャン！！」

「消去しないから、みせてみせて～。ロムがどんな顔で私とキスしているのか、一度じっくり見てみたい」

「ちょっと待て、リン、おまえどっちの味方だ！？　おい、クリスもフェイも見てないで、手伝ってくれ！！」

「わかった、おい、猫どもその録画用小型水晶球を返せ！！」

「むう、ちょこまかちょこまかと、こいつら武術の心得でもあるのか？」

「大旦那様から直々に伝授していただきました、またたび流猫忍術ですニャン！！　忍法『溢れるほど大分身』の術！！」

『ニャンニャンニャ～～ン！！』

「キャア、かわいい猫ちゃん、いっぱいだ」

「って、ちょっと待ておまえら、ただでさえ人数多いのにそんなに分身するな！」

「もう何なんだかわからん」

どんどん収拾のつかない大騒ぎになっていくキッチンの様子をしばらく眺めていた連夜だったが、やがて片手で顔を覆って深い溜息を吐きだすと、首を二つほど横にふってやれやれと小さく呟く。そして、疲れたような表情を浮かべながらも再び流しに戻り夕食作りを再開しようとした。

しかし、その流しに戻る途中でふと横を見た連夜は、自分の料理技術の優秀な弟子であり助手であり、そしてかわいい義妹である晴美が熱っぽい目で自分を見つめて立っていることに気がついた。

「何？　どうしたの晴美ちゃん？」

「あのあの、連夜さん」

「うんうん、何々？」

「ん～～」

小首を傾げながら聞いてくる連夜に対し、しばらく恥ずかしそうにモジモジとしていた晴美だったが、やがて意を決したように顔をきっとあげると目を閉じて連夜のほうに唇を突き出してくる。そんな晴美の姿を見た連夜は一瞬ぎょっとした表情を浮かべる。

『如月（きさらぎ）　晴美（はるみ）』

連夜の恋人にして婚約者である玉藻の実の妹で、中学二年生の女の子。

元々は丸薬作りで名を馳せている実家で、祖父母、両親に丸薬作

りの厳しい修行を課せられながら暮らしていたのだが、その修行内容があまりにも酷く、『人』権を無視した虐待同然の無茶苦茶な修行であったため、中学に進級して間もなくついに耐えきれなくなって実家から逃げ出してしまう。そして、ゆくあてもなく都市の中を徘徊し、このまま野垂れ死にするしかないかと絶望しかかっていたところを運良く通りかかった連夜に見つけ出されて拾われることに。

晴美の話を聞いた連夜が、中央庁の実力者である母親に相談したところ、母親が正式に晴美を引き取れるように便宜をはかってくれ、以来晴美は連夜の家で一緒に暮らすこととなった。自分の最愛の『人』の実の妹であり、その最愛の『人』に非常によく似ている晴美。連夜はそんな晴美をとても可愛がり、晴美もまた自分を助けてくれた連夜によく懐いた。

そして、今では二人は実の兄妹のように固い絆で結ばれるようになったのであるが・・連夜が晴美へと向ける愛は、あくまでも兄が妹へ向けるそれであり、それ以外ではない。しかし、晴美のそれは若干それとは違い、むしろ姉玉藻が連夜に向ける想いに近いものがある。

連夜は一応、そのことに気がついてはいたし、やんわりと距離を置いてはいたのであるが、今回のこれは完全に不意打ちであった。

予想外の人物に予想外のアクションを起こされた。これだけでもかなり彼を動揺させるのに十分だったが、更に彼をそれ以上に動揺させることになったのは、まるで中学生時代の自分の最愛の『人』にキスを迫られているような錯覚を起こしたからだった。

晴美は連夜の最愛の婚約者玉藻の実の妹で、非常に玉藻に姿形が酷似していた。恐らくあと数年すれば玉藻そっくりの超美人になるのは間違いない。ただ晴美は金毛白面ではなく、普通に全身金色の霊狐族だし、その性格も全く違うのだが。

連夜は、しばらくそんな晴美の姿を何とも言えない表情で見つめていたが、やがて、そっとその身体を引き寄せて抱きしめると、自分よりもまだ低い位置にあるその頭をそっと撫でる。

「ごめんね、晴美ちゃん。できるだけ晴美ちゃんの望みを聞いてあげたいけど、それはできないかな」

「・・やっぱり駄目ですか」

「うん、ダメ。晴美ちゃんのその唇は、いつか晴美ちゃんが出会うことになる大事な『人』の為にとっておいてあげて」

連夜の答えがわかっていた晴美は、それほど落胆した様子もなく一瞬大人びた苦笑を浮かべて見せたが、すぐにいつもの穏やかな笑顔を浮かべて見せると連夜の胸に甘えるように顔を埋める。

「あの、連夜さん、だったら別のお願いならいいですか?」

「うん、何かな?」

「アルテミスさんに作ってあげていた、連夜さん特製のヘルシーパフェ、私にも作っていただけます?」

連夜の胸の中からちょっと顔を上げて連夜の顔を覗きみるように見る晴美。すると、それを聞いていた連夜はちょっと驚いた表情を浮かべて見せたが、すぐに笑顔を浮かべて見せるとゆっくりと頷いて見せた。

「わかった。夕食の後で出してあげるね。でもアルテミスと同じものじゃ芸がないから晴美ちゃんだけの為の特製で作ってあげる」

「本当ですか!?」

「勿論。だって、晴美ちゃんは僕の大事な妹だからね。それに晴美ちゃんとアルテミスじゃ食べる量が全然違うしね」

「えへへ、やった～。連夜さん、大好きです」

連夜の返事を聞いた晴美はさらに連夜の胸に自分の顔をこすりつけて甘え、そんな晴美の頭を連夜は優しく撫で続ける。お互い複雑な感情を抱えてはいたが、二人の中には間違いなく、兄妹の絆が存在していた。周囲の喧騒をよそに、二人の間に温かくもゆっくりとした時間が流れ続けていた・・が。

その静寂は一人の乱入者によって打ち破られる。

「いいわね、優しいお兄ちゃんにかわいがってもらえる妹は」

何気なく聞いていたならば普通に優しそうな口調に聞こえただろうが、二人はその声の主をよ～く知っていたため、敏感にその声の中にある無視できないトゲを感じ、その声のしたほうへと素早く視線を走らせる。すると、キッチンの戸口の影、見えるか見えないか程度に白い狐の顔が。

「た、玉藻さん、そんなところで何やってるんですか?」

「べっつに～、なにも～」

若干頬を引き攣らせながらも、なんとか笑顔を浮かべて恐る恐る白い狐に問いかける連夜。そんな連夜に問い掛けられた狐はぷいっと顔を背けてぶっきらぼうに答えを返す。そして、戸口の陰から顔を出したり引っ込めたりを繰り返しては、連夜達のほうをまるで蛇のように睨みつけ戸口の壁の部分をぎりぎりと片手で握り続けるのだった。

はっきり言って超こわい。

爪をたてて戸口の壁を握るその片手からは『ミシミシ』という不気味な音が聞こえてくるし、陰から覗くその顔からは『ギリギリ』という奥歯を噛み締めている音まで聞こえてくる。

だが、そんな白い狐の姿を見ても連夜の腕の中の晴美は、全然臆した様子もなく、むしろ、嬉しそうに話しかける。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん、連夜さんがね、私の為に特製パフェ作ってくださるって！！」

「あ、あらそうなの。よ、よかったわね、おほ、おほほ」

「しかもね、しかもね、私だけの為の晴美スペシャルらしいの！！すっごい楽しみ！！　ね、連夜さん？」

「う、うん、まあ、そうね」

「は、は、晴美だけの・・特別メニュー・・」

本当に心から嬉しそうな、キラキラと輝く笑顔をふりまく晴美の言葉を聞いた玉藻は、物凄い衝撃を受けたようによろよろよ戸口の陰へと消えて行ってしまう。連夜は玉藻が見える位置まで急いで身体を移動させ陰になっている場所を探す。すると、そこにはこちらに背を向けて体育座りをし、床に『の』の字を書き続けている狐の姿が。

「た、玉藻さん？　もしもし？」

「べ、べ、別に悔しいとか、私の妹の分際でとか、釣った魚に餌はやらないつもりなのかとか、そ、そんなことは思ってないのよ、ぜ～ん、ぜん・・おも・・ってないんだから・・ぐすぐす」

「玉藻さんにはいつも玉藻さんだけの特別メニュー作ってあげているじゃないですか。お弁当だってちゃんと作ってあげているし。ほら、もどってきてくださいってば」

「そうねそうね、私はいつもしてもらってるもんね。だから、こういうときは後回しにされたって文句いえないのよね。ええ、そうでしょうとも、どうせ、私は一番最後の・・女よ・・ぐすんぐすん・・」

「あ、お姉ちゃん、すねた」

「もう～～、玉藻さんたら～」

どんどんダークサイドに落ち込んでいく玉藻の姿に、連夜と晴美は心底困ったように顔を見合せたが、連夜は晴美の身体をそっと離し、戸口の陰にいる玉藻のほうに近づいて行こうとする。すると、その気配に気がついた玉藻が涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔できっと振り返って立ち上がり、威嚇するように絶叫する。

「もう、ほっといて!!　どうせ私なんか、私なんか!!」

「た、玉藻さん!!」

連夜が駆け寄ろうとするよりも早くその場からだっと駆け出した玉藻は、あっというまに玄関のほうへと走りさってしまう。連夜は一瞬呆気に取られた表情で固まってしまったが、すぐにエプロンを

外すと後ろでいまだに呆然と立ち続けている晴美にエプロンを渡す。

「ちょっと、行ってくるから夕食作りの続きお願いするね。わかる範囲でいいし、わからないところは置いておいて、すぐにもどってくるし」

自分を見上げてくる晴美の頭にぽんと手を乗せて安心させるように言い残して、連夜は玉藻を追いかけて行こうとする。だが、そんな連夜のシャツを咄嗟に掴んで止めた晴美は、なんとも言えない表情である方向を指さして見せるのだった。

「連夜さん、あの、お姉ちゃんが」

「へ？」

晴美が指さす方向に視線を向けてみると、玄関の前でなぜか飛び出さずに仁王立ちしている玉藻の姿が。凄い形相でこちらを睨みつけている玉藻の姿を呆気にとられて連夜が見つめ返す。すると、玉藻が怒ったような表情ながら、どこか恥ずかしそうに絶叫する。

「ほっといてって言ったけど、追いかけてきてくれても別にいいんだからね！！　べ、別にわかりやすい近くの公園で待ってるとかそういうわけじゃないんだから！！　追いついてよしよししてほしいとか、わがまま言いたい放題いわせてほしいとかそういうわけじゃないんだから！！」

「「え、えええええ～～」」

そうじゃないんだからなどと言いながら、誰が聞いてもそうしてほしいと言わんばかりに言い残した玉藻は、とほほ顔で固まってい

る連夜を何度も未練がましく懇願の目で見つめておいて、そそくさと玄関から出て行った。

そんな姉の姿をしばし呆然と見つめていた晴美は、物凄い尊敬の色を瞳に浮かばせてうっとりと呟く。

「お、お姉ちゃん、どこまで、あざといの・・私も見習わなくちゃ」

「いや、晴美ちゃんはお願いだからそういうところ見習わないで。本当にお願い」

顔に縦線をびっしりと走らせたようなとほほ顔のまま、晴美にツッコミを入れた連夜は、溜息を一つ大きく吐きだすととぼとぼと最愛の恋人を追いかけて家を出て行った。

結局このあと、連夜は完全にすねてしまった恋人を慰めるために一時間以上を費やすことになり誕生パーティの開始は大幅に遅れたという。

終章

「連夜くん、連夜くん、連夜きゅ～～ん」

全方位どこから聞いてもこれ以上ないくらい完璧に上機嫌とわかる甘ったるい女性の声が、宿難家の大きく広いキッチンルームに響き渡る。その声の主は、自分よりも小柄な少年の体を後ろから抱きしめ、柔らかい少年の頬に自分の頬をふにふにと摺り寄せ続けながら、いったいいつまで呼び続けるのかというくらい少年の名前を連呼し続けるのだった。

「はいはい、もうなんですか？」

女性にされるがままの状態で、しばらくの間流しに向かって黙々と洗いものをしていた人間族の少年だったが、いつまでたっても女性が自分の名前を呼び続けることをやめないので、少年は苦笑を浮かべて背後の女性に、今日いったい何度目になるかわからないほど投げかけてきた同じ内容の問い掛けをする。

「好き好き大好き、連夜くん！！　世界で一番好き！！　世界で一番愛してる！！」

「はい、僕も玉藻さんが大好きですし、世界で一番愛していますよ」

「うんうん、だよね～。連夜くんの一番は私だよね～、でへへへへ」

苦笑しつつも、真面目な口調で自分の最愛の女性である玉藻に返事を返した連夜は、ちょっとだけ洗い物を中断すると、顔を若干後ろに向かせて、玉藻の頬にそっと口付ける。

すると、玉藻は美しい顔を今まで以上にとろけさせ、紺色のタイトスカートからのびる三本の尻尾を扇風機のようにぶんぶんと振り回しながら連夜の体をきつく抱きしめる。

「連夜くん、連夜くん、連夜きゅ～～ん！！」

「はいはい、だからなんですか？」

後ろから伸ばされている玉藻の腕をぽんぽんと叩き、ちゃんと聞いていますよという合図だけ出しておきながら、連夜は再び流しに向かい洗い物を再開する。

現在連夜は、アルテミスの誕生パーティの後片付けの真っ最中である。

今日は連夜のかけがえのない友人の一人である狼獣人族の少女アルテミスの誕生日。

その誕生日を祝うためのパーティを連夜は自宅にて開催した。

ちょっとしたアクシデントでパーティの開催が若干遅くなってしまったが、参加者全員がみなアルテミスや連夜と仲の良い友人達ばかりであったため雰囲気が壊れることもなく、むしろ温かくて良い雰囲気のまま最後まで続けることができ、そのままパーティはお開きに。

当然ながら大騒ぎしたあとの後片付けは大変なものがあり、参加者達全員が後片付けを手伝うと申し出てくれたが、連夜はこの申し出をやんわりと断った。

メインゲストであるアルテミスとクリス夫妻に後片付けをさせるわけにはいかないというのは勿論当然として、他のメンバー達も連夜からすれば大事なお客様には違いないのでやはり手伝わせるということには少なからず抵抗があった。それにこの程度の後片付けなら、この家の東方猫型小人族（ねこまりも）のメイド達の協力だけで楽勝であった。

幼き頃から、この家の家事一切を取り仕切る父の元で修行し、料

理、洗濯、掃除に裁縫、あらゆる家事の技術を身につけ、連夜はいまや自他共に認める家事のエキスパートである。そんな連夜のことを今日の参加者達はよく知っていたので、後ろ髪をひかれつつも一部のメンバーを残して、みな連夜に感謝しつつ帰宅していったのだった。

で、その残った一部のメンバーの中には、当然のことながら玉藻がいた。

明日は土曜日で学校は休みであるから帰宅して明日に備える必要はない。むしろ、明日からの土日をいかに恋人の連夜と過ごすのかについての備えが重要と考え、後片付けが終わったあとゆっくりとそれについて連夜と話し合おうと思っていたのであるが・・ふと気がつくとキッチンの中は玉藻と連夜の二人きり。

メイド達は全員リビングの後片付けに行ってしまっていて、しばらくはこちらに帰ってこない。この家に同居している妹の晴美は連夜に促されて風呂にいった。晴美は長湯で有名なのでこちらもすぐには戻ってこない。連夜の実兄は有名な傭兵旅団の副団長で、現在はるか南方の戦地に遠征中だし、実姉と実妹は、連夜の母ドナ・スクナーに連れ出されて現在都市の外へと出かけていて、早くても帰ってくるのは明日以降。

明日から確実に二日間は二人きりになれるものの、だからといって今このときその二人きりを楽しんではいけないということはない。

一瞬にして頭の中で即決した玉藻は、体当たりするようにして連夜に後ろから抱きつき甘え始めたというわけである。

最初は後片付けをしながらも律儀に相手をしてくれる連夜の反応を見てそれなりに満足していた玉藻であったが、連夜の華奢な体に密着し、その体臭を嗅いでみたり、柔らかいほっぺたを舐めたり、耳たぶをしゃぶったりしているうちにだんだんとその目に妖しい光が宿りはじめ、いつしか、その息遣いはやたら荒くなっていった。

「はぁはぁ・・あのね、あのね、連夜くんあのね」

「なんですか？　って玉藻さん、息が荒くないですか？　大丈夫ですか？」

「はぁはぁ・・ううん、全然大丈夫じゃないわ。もうダメよ」

最後の洗い物であるサラダ用の大きなガラスボウルを洗い終えた連夜は、そのボウルを念動食器乾燥機に入れる。そして、エプロンで濡れた手を丁寧に拭いてから食器乾燥機の作動スイッチをちょうど入れたところで、自分の耳元に吹きかけられる息がだんだん熱くなってきていることに気がついた。自分の前に回されている玉藻の両腕を優しく掴みながら心配そうに顔を後ろを振り返る。

すると、そこには潤んだ瞳にりんごのように真っ赤に上気した頬の玉藻の顔が。

とろんとした表情でこちらを見詰めている玉藻の顔をいぶかしげに見つめ返してみると、その瞳の中には強烈に妖しい光が宿っている。それを見た瞬間猛烈に嫌な予感が背中を走り抜け、連夜は思わず顔を引き攣らせるのだった。

いや、いくらなんでもそんなことはないだろう、まさか、まさか、こんなところで、と、自分の脳裏に閃いたある可能性を必死に否定しようとする連夜。だが、先程から玉藻はやたらと自分の豊満な胸を押し付けてくるし、そのむっちりした脚を自分の脚に絡ませてきている。ここが玉藻の自宅で連夜と二人きりの状態だというならば、連夜もこれが何の合図なのかわかるし、受け入れることも可能だったのだが。

「ちょ、ちょ、ちょっと、玉藻さん？　もしもし？」

「もうね、我慢の限界なの。連夜くんのことが愛おしくて愛おしく

て、愛おしさが溢れて止まらないの」

「いやいやいや、それは非常に光栄なことですけど、あのですね、玉藻さん？　ちょっと落ち着いてくださいってば、玉藻さん、僕の話聞いています？」

「今週一回もしてないし、保健室では邪魔されてできなかったし、ね、ね、いいよね？」

「いやいやいやいや、ないない。ないでしょう、それは！！」

「食べていい？　食べていいよね？　連夜くんのことおいしくいただきますね、今すぐ」

「いやいやいやいや、ダメです、ダメです！！　メイドさん達や晴美ちゃんもいるんですよ！？」

「大丈夫大丈夫、できるだけ声出さないようにこっそりするから。多分無理だろうけど」

「無理ってわかっているならしないでください！！」

「やってみなくちゃわからないじゃない！！　やるまえから諦めてどうするのよ、ほんのわずかな可能性しかなくても愛と勇気があればきっと乗り越えられる！！　私はそう信じるわ！！」

「いや、うまいことといったつもりでドヤ顔されても、ダメなものはダメですって！！　そもそもこんなところでしなくても明日には玉藻さんの自宅で二人きりになれるじゃないですか！？　なんでここなんですか！？　台所ですよ、ここ！？」

「あ、あの、できれば全部脱いでエプロンだけつけてもらえると、もっと萌えるんだけど・・はぁはぁ・・連夜くんの裸エプロン・・はぁはぁ・・いいわ、すごくいい、想像しただけでも鼻血が」

「出さないでください!!　いったいどこのアダルトビデオですか!?　しかも男の僕がそんなことしたって気持ち悪いだけじゃないですか!!」

「そ、そうだ。私玄関から『ただいま〜』って入ってくるから、裸エプロンの姿で『おかえりなさい、玉藻さん。ご飯食べながら『えっちぃ』ことします？　お風呂で『えっちぃ』ことします？　それともそのままここで『えっちぃ』ことします？　ぽっ』って言ってみて!!　お願いだから、言ってみて!!」

「絶対にいやですよ!!　完全に変態じゃないですか!!　だいたい、なんで全部『えっちぃ』ことと抱き合わせなんですか!?　おかしいでしょ!?」

「え〜〜、でもミネルヴァから借りた『ボーイズラブ』系の漫画だとしょっちゅうそういうシチュエーションが出てくるわよ〜」

「また、み〜ちゃんかあああっ!!　しかも、エロ漫画だけでなくＢＬ系までって!?　帰ってきたら絶対とことんお説教してやるんだから、もう!!　それよりも玉藻さん、お願いですから自重してくださいって。明日、玉藻さんのおうちに行けば二人っきりになれるじゃないですか。そしたらいくらでも付き合いますから」

「いやよ!!　いまがいいんだもん、ここがいいんだもん、今この時この場所ですることが大事なんだもん!!　私は自分の心にでき

るだけ正直でいたいの。特にあなたへの想いを一瞬たりとも誤魔化すような行為はできるだけしたくない。ってか、ゴリゴリ押し通すし、押し倒すけど」

「押し通すのはともかく、ここでは押し倒さないでください！！」

「え～い、こうなったら実力行使よ！！　観念しなさい、宿難　連夜！！　ていっ！！」

「ああっ！！」

玉藻の腕の中からなんとかして逃れようとした連夜であったが、それよりも早く玉藻に足払いをかけられてしまい、踏ん張ることもできずにモロに倒れてしまう。両手両足を玉藻に拘束されたまま受身が取れない状態での転倒。打ちどころが悪ければ大けがをしかねない倒れ方であったが、そのあたりのことは玉藻がよくわかっていて、自分の体を下にしてクッションとなったので連夜には転倒のダメージはなかった。

しかし、そうはいってもクッションとなった玉藻には少なからずダメージがあったはずなので、連夜は慌てて目の前の玉藻に問いかけようとする。

「た、玉藻さん、だいじょ・・むぐっ！！」

理不尽な暴力や差別から連夜を守るために、日夜体を鍛え続けている玉藻にとって、この程度の衝撃は衝撃のうちに入らない。むしろ倒れながらもがっちりと連夜の体をホールドしなおした玉藻は、心配そうな表情で自分のほうに連夜が顔を向けてきたその瞬間を絶好の好機とみて、素早く連夜の唇を奪う。

最初は荒々しく連夜の唇を貪っていた玉藻だったが、徐々にそれ

は優しくなっていき、最後のほうは完全に甘えるようにゆっくりと重ねる。そして、しばらくそうした後、そっと唇を離した玉藻は、連夜が口を開こうとするのをそっと人差し指で抑えて止める。

「ごめんね、連夜くん。いつもいつも強引に私の思うがままにさせてしまって本当にごめんなさい。でも、お願い、こんな私だけど嫌いにならないで、そして、受け入れて。多分、ありのままどんな姿の私でも受け入れてくれるのは連夜くんだけだから。だから、お願い、勝手なお願いだってわかってるけど・・甘えさせてほしいの」

流石の連夜も今日はお説教するしかないとばかりに口を開こうとしたのだったが、すがりつくような潤んだ瞳に、いつにない弱々しい姿の玉藻に懇願されてしまい、あっというまに戦意を消失させられてしまう。

連夜の表情は怒り出す寸前のそれから困惑の表情へと変わり、そして、深い溜息を一つ吐き出した後には、完全に敗北を認めたものの表情となっていた。

「ここでは・・ダメですよ。僕の部屋ならいいです」

ぼそぼそと恥ずかしそうに顔を俯かせながら呟いた連夜の言葉は、非常に聞きづらいものがあったが、霊狐族特有のスーパー聴力でその言葉をしっかりと聴いた玉藻は、思わずガッツポーズを取る。

「よっしゃあっ！！」

「『よっしゃあ』じゃあないですよ、本当にもう・・」

顔を熟したトマトのように真っ赤にし、恥ずかしそうに体を小さくしていく連夜。そんな連夜の姿がかわいくて愛おしくてしょうが

ない玉藻は、益々力を込めてその小柄な体を抱きしめる。そして、もう一度優しく連夜の唇に自分の唇をちょっとだけ重ねて離すと、物凄く嬉しそうに床から身体を立ち上がらせる。

そんな玉藻のあまりにも邪気のない嬉しそうな姿に、連夜も苦笑するしかなく乱れた着衣を直しながら床から身体を立ち上がらせるのだったが、その途中、突如玉藻が厳しい表情になって周囲を見渡し、戦闘態勢を取るのが見えて、連夜は慌てて玉藻に問いかける。

「ど、どうしたんですか、玉藻さん？　何か問題でも？」

「いや、いつものパターンだと、そろそろ邪魔が入ってもおかしくないタイミングだから、一応警戒してみたんだけど」

白地に赤いくまどり模様が特徴の狐の顔に、全身金色の獣毛に包まれた半人半獣の姿に一瞬にして変化した玉藻は、油断なくキョロキョロと周囲の気配を探る。しかし、周囲に自分達を邪魔する気配を感じられずその心配が杞憂だとわかると、再び『人』の姿にもどり、横に立つ連夜のほうににっこりとほほ笑みかけるのだった。

「ごめんごめん。私の杞憂だったみたい」

「そうですか？　でも、玉藻さんの予感って当たりますからねえ・・やっぱり、明日にしましょうか？」

てへへと照れ笑いを浮かべながら連夜に謝る玉藻だったが、連夜のほうはそれですぐには納得せず、腕組みをしながらどこか不安げな表情で考え込み始め、行為の延期をそれとなくすすめたりもしたのだが。

「ダメ。絶対ダメ。やると決めたからには絶対にするの！！」

「いや、でもですね」

「ほらほら、連夜くんの部屋に即行こう、すぐ行こう、今行こう」

連夜の提案をきっぱりと断った玉藻は、若干まだ渋い表情をしている連夜の腕を取って引っ張るとずんずんとキッチンから出て二階にある連夜の部屋へと向かっていく。そして、階段を上りきったところで連夜の身体を先にして押し出す。

「どこどこ？　連夜くんの部屋？　そういえば私、連夜くんの部屋には入ったことないからわからないんだった」

「そういえばそうでしたね、いつも僕が玉藻さんのご自宅にお邪魔する形ですものね」

「あいつさえいなければなあ。私、連夜くんのお義父様もお義母様も大好きだし、なかなかいい関係作れていると思うから、このお家に来るのは問題ないはずなんだけど・・あいつがいたら絶対邪魔するだろうしなあ、何しでかすかわからないし」

「そうですねえ。幸い今日はいませんから大丈夫ですけど。あ、こっちです」

微妙な疲れた苦笑を浮かべて見せたあと、連夜は廊下の一番奥にある扉の前に玉藻を案内する。質素ではあるがなかなか小奇麗な木製の扉には、同じような木でできた小さな立札がかけられていて、達筆な東方文字で『連夜の部屋』と書かれている。

「ここか～。ここが連夜くんの部屋かあ。どんな部屋なんだろ。彼

氏の部屋に入ったことなんてないからどきどきするしわくわくするわ。早く入りましょ、早く早く」

「べ、別に普通の部屋ですよ。それじゃあ、どうぞ」

テンション高くはしゃぎ続ける玉藻に照れ笑いを浮かべて見せながら、ドアノブにを手をかけて扉を開けようとした連夜だったが。何を思ったのか、すぐには開けようとせず、そのまま動きを止めてしまった。そして、不審そうに首を傾げ連夜のほうを見つめる玉藻のほうにちらちらと視線を走らせる。

「ど、どうしたの連夜くん？」

「あ、あの、ちょっとお願いがあるんですけど」

「何なに？　実は鍵がかかっている・・って自分の部屋なのにそれはないよね。じゃあ、部屋が片付いていないからちょっと待ってくれかな？　いやいやそれはないわよね、整理整頓は常に完ぺきの連夜くんだし。あ、わかった!!　お約束でしょ、恥ずかしいエロ本隠すから待ってくれってやつね!!　そうかそうか、連夜くんもお年頃だもんね、そういう本の一つや二つ・・て、そういえばミネルヴァが言っていたけど、どれだけ探しても連夜の部屋にはエロい映像記録水晶どころか、エロ本もエロ漫画もないっていっていたな。じゃ、じゃあなんだろ」

「み、み～ちゃん、僕がいない間にそんなことしていたのか!?　学校から帰ってきたときに僕の部屋がちらかっているときがあったとのはそういうわけかあっ!!　本当にもうしょうがないんだから、あの『人』は!!　って、いや、そうじゃなくてですね、つまりその・・」

「な、なになに、なんなの？」

「きょ、今日はその・・部屋の念気景光灯（サイライト）消したままでいいですか？」

顔を伏せたままで身体をもじもじさせながら小さな声で呟く連夜。そんな連夜の言葉をしばし呆気に取られて聞いていた玉藻だったが、その真意を探ろうとするかのように伏せている連夜の顔をじ～～っと凝視する。すると、連夜は玉藻の視線を避けるようにして目を背けると顔を隠すようにする。よく見ると顔はゆでだこのように真っ赤になっている。

「なんで？　別に明るくてもいいじゃない」

「い、いや、その、やっぱり、は、恥ずかしいじゃないですか」

「なんでなんで!?　だってもう何度も一緒にお風呂に入ってるんだよ!?　しかもあの明るいお風呂場の中でお互いの身体ばっちり見ながらしちゃってるし、今更、恥ずかしがる必要ないじゃない!?　ちなみに私は連夜くんにならどれだけ見られても全然平気よ。周囲に誰もいなかったら道のど真ん中だって素っ裸になれるわよ!?」

「あわわわ。み、道端で素っ裸はやめてください」

「例えよ例え。それとも連夜くんは私の裸なんかみたくもないっていうわけ？」

「違います違います!!　玉藻さんはすっごく奇麗で、それを見れ

るのはすごく嬉しいです。それに僕の身体は傷だらけで、全然奇麗じゃないし、みっともなくて、『人』に見せられるようなものじゃないですけど・・僕も玉藻さんになら見られても別に問題じゃありません。そこじゃなくて・・」

「じゃあ、なに？」

「あの・・僕って、あの、してるとき、ひどい顔してますよね？」

一瞬連夜の言ってる言葉の意味がわからずぽか～んとした表情を浮かべ、連夜のほうをしばらくの間見つめていた玉藻だったが、すぐに我にかえるとぶんぶんと首を横にふってその言葉を否定する。

「は？　ひ、ひどい顔って？　連夜くんは別にひどい顔してないわよ、かわいいわよ、凛々しいわよ、いつも」

「で、でもでも、ぼ、僕、凄い声出してるみたいだし、してる途中からどんどんその・・自分でもわけがわからなくなってきて、でも、一応変な顔しているだろうなっていう自覚はあるんです。だからその、あ、あんまりみられたくないっていうか」

「へ、変な顔って、別に普通に・・ああっ、そういうこと！？」

言葉の内容がやっぱり理解できずに頭を捻りかけた玉藻だったが、唐突に連夜の言っている意味を理解してぽんと左手の手のひらに自分の右こぶしを軽く叩きつける。すると、理解されてしまったことで余計に恥ずかしくなってしまったのか、連夜は益々顔を赤くし身体を小さくしていく。

「さ、最初の頃は何が何だかわからなくて、無我夢中で玉藻さんに

応えるだけで精一杯だったし、今でもそんなに余裕はないんですけど、それでも最近は多少、自分がどういう状態になっているかわかってきたんです。ぼ、僕、すごい声出して、すごいこと言っていますよね。それだけじゃなくて、絶対『人』に見せられないような顔していると思うんですよ。きっと、自分が見たら気持ち悪くてすぐに燃やして捨てたくなるようなそんな顔をしているはずなんです。だ、だから、今更ですけど玉藻さんには見てもらいたくないし、見せたくないなあって。は、恥ずかしいし、格好悪いですし。ね、ね、そういうわけで部屋の念気景光灯（サイライト）消していいですよね？」

顔を俯かせ両手の指を突き合わせながらぼそぼそと小さな声で恥ずかしそうに呟く連夜。そんな連夜の姿を見た玉藻は、『新婚初夜直前の新妻みたいでなんてかわいらしいの、連夜くん！！』と、半ば陶然としながら連夜のお願いをうっとりと聞いていて、思わず『そんなことくらいなら、いいわよ～』と頷きかけたが、口から出かけたその言葉を慌てて飲みこむ。

そして、ぶるぶると首を横に振って土砂崩れを起こしかけていた表情を引き締めると、これ以上ない真剣な表情になって連夜に詰め寄りその両肩を痛くならない程度に強く握る。

「連夜くん、それは・・それはダメよ！！」

「な、なんでですか！？」

「だって、消しちゃったらよく見えなくなっちゃうじゃない！！」

「いや、玉藻さん霊狐族で夜目がばっちり効きますよね？　詳細には見えないでしょうけど、僕が何やってるかとか部屋に何があるかとかは見えますよね？」

「詳細に見えないのが問題なんじゃない！！　いくら夜目が効いても念気景光灯（サイライト）消しちゃったら、してるときの連夜くんの顔が全然見えないもの！！」

「えええええっ！？　そ、それを見られたくないんじゃないですかぁっ！！」

「私は見たいの！！　あの切なそうな連夜くんの顔と声がいいんじゃない！！　もう泣き出しそうなのと気持ちよさそうなのの微妙な表情の連夜くんの様子が一番私の胸にキュンとくるのに、それを見られないなんて、絶対いや！！」

「ぎゃあああああっ！！　そ、そんな説明しないでください！！」

きっぱりと言い放つ玉藻の言葉を聞いた連夜は、思わず愕然とした表情を浮かべて目の前の玉藻を見つめ返す。よく見るとその黒い瞳には若干光るものが浮かびかかっていたし、よく聞くとその声は涙声になりかかっていて、『かわいそうだから、やっぱり念気景光灯（サイライト）消していいよっていってあげようかな』と思ったが、玉藻はぐっと心を抑える。

「連夜くん、聞いて。連夜くんが見せたくないっていう表情だけど、私以外の誰かに見せることってある？」

「あ、あるわけないじゃないですか！！　だ、だって・・あ、ああいうことしているときだけですし」

「でしょ？　他の『人』には見せることのない表情なわけでしょ？　私だけが見ることができる特別な表情なわけでしょ？」

「僕としては一番見られたくない『人』に見られちゃってますけど」

「連夜くんてね、相手がはっきり敵対行為を示したり、連夜くん自身が敵と見定めない限り、誰にでも優しいし親切に接するじゃない。自分が認めた相手に対しては本当にまっすぐに接していると思うし、その『人』のことを真剣に考えていると思う。だけど、そんな連夜くんも、心の一番奥底にある最後の一線だけは踏みこませないよね？」

先程までのふざけた様子や浮かれた様子が一切ない真剣な瞳。決して疑いや信じていないといった負の感情の光ではないが、透き通るような真っすぐな意思で連夜を貫くようにその目は連夜を見つめ続ける。それに対し、連夜はくしゃりと顔を歪ませて慌てたように口を開こうとする。

「た、確かにそうかもしれませんけど、でも僕は玉藻さんには・・」

「ああ、うん。わかってる、わかってるから、そんな泣きそうな顔しないで連夜くん。ちゃんとわかってる、私にはほぼ全部見せてくれているもんね。連夜くんが本当は誰にも見せたくない『闇』の部分も合わせて全部が全部私に見せてくれている。わかってる。連夜くんは他の『人』には見せなくても私には見せてくれていることは知ってるしわかってる。だからあなたに聞きたいの。私がそれを見てたった一度でも連夜くんを拒絶したりしたことがあった？」

「そ、それは・・ないです」

「でしょ？　どんな連夜くんだって私は受け入れるわ。それは『心』の話だけじゃないのよ、あなたのすること、一挙手一投足、そして、

その表情まで全て。見たいの、あなたの全てが。自分で自分が狂っていると自覚できるくらいあなたのことが好きだから、愛しているから、どんな姿のあなたでもずっと見ていたいの」

これ以上ないくらい真剣な表情と口調で自分の想いを告げる玉藻の姿を、連夜はしばらくじっと見つめていたが、やがて顔を俯かせたまま小さな声で問いかける。

「わ、笑ったりしません？」

「絶対しない」

「き、気持ち悪いっていったりしません？」

「絶対言わない。というか、今まで一回も私そういうことしたり言ったりしたことないでしょ？」

「・・はい、確かにそうです。はあ～～・・わかりました、念気景光灯（サイライト）つけてていいです」

そう言ってやっぱり物凄く恥ずかしそうに顔を真っ赤にして俯かせ、もじもじと身体をゆすりながらも、連夜はゆっくり頷いた。それを見た玉藻は、今までの真剣な表情をかなぐり捨てて連夜の身体にむしゃぶりつく。

「もう！！　もうもう！！　連夜くん、なんでそんなに初々しくてかわいいの！？　本当にもうすぐ十八歳！？　かわいいわ、本当にかわいくてかわいすぎるくらいかわいいわ！！　そんな連夜くん大好き！！　こんなガサツな私に、なんで連夜くんみたいな超絶にかわいいお婿さんがいるのかしら！？」

「ちょ、ちょっと玉藻さん、やめてくださいってば」

玉藻に思いきり抱きしめられほっぺをぐりぐりと押し付けられた連夜は、たまらず身体を恥ずかしそうによじりながら抗議の声をあげるが、玉藻はそんな連夜の仕草が余計にかわいく見えてしまい解放するどころか、抱きしめる腕の力をさらに強めてしまう。

「えへへ、私だけの連夜くん。私の腕の中のあなただけが本当のあなただって、私はちゃんと知っているんだから。どこに逃げようとしてもダメなんだから、どこに逃げようとしても絶対に逃がさないんだから、例えそれが地獄だって逃がさない、今度は逃がさない、どこにも行かせない、それでもどうしてもあなたが行くというなら私はついていくもの。どこまでもどこまでも、地の果てまでも。天の河の向こうでも。この世界の向こうだって・・ついて・・いくんだから」

「玉藻さん・・」

連夜を抱きしめて途中まで幸福の絶頂という表情をしていた玉藻だったが、呟くその言葉が進むにつれて徐々にそのトーンは落ちて行く。そして、最後の方にはぽろぽろと涙を流し出し、いつのまにか抱きしめていた玉藻が、逆に連夜に抱きしめられていた。

玉藻のように強い力で拘束するような抱きしめ方ではない。優しくふわりと包み込むように、連夜は玉藻を抱きしめ続ける。そして、想いをこめてその背中をゆっくりと撫ぜ続ける。

「大丈夫ですよ。僕はどこにも行きませんから。玉藻さんの側にずっとずっといますから。玉藻さんがそれを許してくれる限りですけど」

「当たり前でしょ！！　許すとか許さないとかじゃない！！　あなたがいなくちゃ・・あなたがいてくれなくちゃ、もう私は私じゃない！！」

いつもと変わらぬ穏やかな表情にいたずらっぽい口調で玉藻を覗き込む連夜に、玉藻は涙を拭きもせぬまま激しい口調で吠えるように噛みつくように答える。そして、すぐにまたふにゃっと表情を歪めると、連夜の身体を強く引き寄せるようにして抱きしめる。

「・・一年前、あなたが私の想いに答えてくれた日、私はようやく私になれたの。私は絶対にあの日を忘れないわ。あなたが私を私にしてくれたあの日を。あの日が来るまでの私は、ぼんやりと毎日を生きている幻だったような気がする。ガラス越しに自分を見つめて、冷めた目でなんの感動も感慨もないままにだらだらと毎日を過ごしていたわ。でも、あの日あなたが現れた。あなたが私の前に現れて、私を受け入れてくれたあの日から、私の世界に色がついた。目の前にあったガラスが砕けた。そして、この『世界』に物凄く大事なものがあるって気がついたの」

連夜から少しだけ身体を離し、玉藻は万感の想いをこめて自分の宝物を見つめる。血のつながった家族に絶望し、普通の『人』、普通の『家庭』で当たり前に与えられるはずの温もりは一生自分には無縁であると思いこんでいた玉藻の腕の中に突然飛び込んできた掛け替えのない宝物。

惜しげもなく毎日毎日自分に優しく温かい何かを与え続けてくれるそれは、今日も、いや、たった今も玉藻の心を包み込み温めて続けてくれている。

「一年前・・そうですか、もう一年になるんですね、僕と玉藻さん

がこういう関係になってから」

目の前に立つ最愛の女性を見つめながら、ぽつりと、しかし、非常に深くて重い想いを込めて呟く連夜。そんな連夜に玉藻はかすかな笑顔を浮かべて見つめ返す。

「そう、もう一年。それどころか二週間後には私達本当に夫婦になる」

「そうですね。僕もいよいよ十八歳になります。この都市の条例だと十八歳以上にならないと結婚できないから一年待ちましたけど・・本当に長かったなあ」

そう言って顔を見合せた二人はなんともいえない苦笑を浮かべて見つめ合う。

「長かったわねえ、いろいろあったし」

「いや、本当にいろいろあった一年でした。玉藻さんと恋人同士になってからも、婚約してからも、思い返せばよくもまあいろいろとあったもんです」

はふ～～と大きく長い溜息を吐きだす連夜。そんな連夜に心から楽しそうに微笑みかけながら玉藻は言葉を紡ぐ。

「いろいろとあったけど、私は楽しかったわよ。特にね」

目をキラキラと輝かせながらこの一年にあった思い出をしゃべりだそうとする玉藻の唇に、そっと自分の人差し指を当ててストップさせた連夜は、そっと玉藻の片手で掴んで握る。

「あ～、待った玉藻さん、とりあえず、僕の部屋に入りませんか。廊下で立ち話もなんですし」

「そ、そっか、そうね」

「今ふと思ったんですけどね、僕の視点から見たこの一年と、玉藻さんから見たこの一年ってきっと違いますよね。通ってきた出来事は同じだろうけど、見てきたものは微妙に違うと思うんですよ」

「あ～、うん、それはそうね、で？」

「そう言えば僕達って、この一年にあったこと振り返ったことなかったなあって思って。折角だから玉藻さんが見てきたこの一年を聞かせてください。勿論、僕も話しますから。それから布団に入っても、遅くないでしょ？」

連夜の言葉を聞いた玉藻はしばらくう～～んと考え込む。最近ずっと誰かに邪魔されて愛を交わすことができなかったので、欲求不満がおおいに溜まっている玉藻であったが、しかし、連夜の視点から見たこの一年の話を聞いてみたいという気持ちもある。特にいくつかのある事件については玉藻は直接関わることができず、第三者の視点での話しか聞けなかったものがあるからだ。玉藻はそれからしばらく考え込んでいたが、結局、連夜の視点の話に対する興味が勝ってしまい、渋々連夜に頷いて見せる。

「まあ、そうね～。まだ深夜には程遠いし、明日は休みだしなあ・・でも、想い出話しが終わったら絶対するわよ」

玉藻の言葉に連夜はやはり変わらぬ穏やかな笑みを浮かべて頷き

返し、ゆっくりとドアノブを回して部屋のドアを開けると自分の部屋に玉藻を誘う。

この日、二人は夜遅くまでこの一年にあった、たくさんの出来事を話した。

最初に話を始めたのは連夜で、その想い出話は、一年前の玉藻と連夜が恋人同士になる直前から始まった。

序章

ここではないどこかの『世界』。

かつて『世界』にあふれていた天魔、鬼獣、聖霊、魔物、そして、人間といったあらゆる『人』々は、『世界』に元々あらざる様々な力を他の『異界』から取り出す術を発見し、『世界』の理が壊れることも厭わず、自らの気の向くまま欲望のままに使い続けた。

何千年もの間『人』々は、それらの力を垂れ流し、やがて『世界』そのものを自由に変貌させられるほどの力を持つ者まで現れた。

そういう者達は、自らを『神』あるいは『魔王』と称し、あたかも『世界』そのものの創造主ですらあるかの如く『世界』のありようを自分の都合のいいように変化させる。最早『世界』は元の姿を知る者達からは想像できないほど荒れ果て、『人』々以外の生き物にとっては地獄と言っても過言ではなかった。

だが、まさに頂点へと達しようとしていたそういう『人』々の傲慢も、ついに『世界』そのものの怒りが爆発するとともに終焉を迎える。

最初に出現したのは、雲を突くような直立型のトカゲのような姿をした『竜』だった。

この世界に存在する、頭部に角と立派なひげ、蛇のように胴の長い『龍』と呼ばれる種族でもなければ、大きな四足のトカゲに角と背中に蝙蝠の翼つけたような姿の『ドラゴン』と呼ばれる種族でもない。翼もなければ角もなく、真っ黒い岩のような肌に、背中にはいくつもの背びれにも見える角のようなものがズラリとならんだ異様な姿。

はじめてその『竜』と対峙したのは、当時、西域を支配していた聖魔族達であったといわれる。

当時の聖魔族達は、異界の力の一つである『魔力』を子供ですら

自由に使いこなせるほど進化した種族となっており、ましてや世界に覇を成すほどの奇跡の力を持つ十一傑の一人『魔王』を頂点にした一大種族。得体のしれない図体がでかいだけのトカゲの化け物など、敵ではない。

誰もがそう思った。だが・・

聖魔族達の大部分はその図体がでかいだけのトカゲに食われた。

聖魔族だけではない。歴代魔王の中でも五本の指に入るといわれるほどの実力を誇っていた当代の『魔王』も食われた。

そして、図体がでかいだけと言われたトカゲは全くの無傷であったという。

『まさか・・』

『そんなはずはない・・』

『何かの間違いだ・・』

その事実を誰も信じようとはしなかった。

だが、目を背けようとした『人』々はやがて、己の目でもって事実を知ることになる。

『竜』は世界各地を転々とし、片っぱしから異界の力を操る者達を食らっていった。当り前のことではあるが、このとき『竜』に襲われた『人』々はただ黙って食われたわけではない。狙われた『人』々は、勿論、『神』や『魔王』達も持てる力の全てを使って対抗した。

山を動かし、海を裂き、天を轟かせ、時には時空さえも歪め、あらゆる奇跡の力を『竜』にぶつけたといわれる。

だが、そのことごとくはすべて『無』かったことにされた。

『竜』に向けて直接的、あるいは間接的にかけられた『異界』の力による奇跡は、発動しても『竜』に到達する前に『無』かったこ

とにされるか、あるいは例え発動して結果が出たとしても、まるで時計が逆回転するかのように発動する前の状態に強制的にもどされて『無』かったことにされてしまった。

『人』々は事ここに至ってようやく事の重大さに気づき、そして、この現象の意味を知る。

『世界』が『異界』の力を全面的に否定しているのだと。そして、『竜』はこの『世界』の代弁者であると同時に、『異界』の力を使う『人』々への断罪者であると。得意絶頂の高みから、一気に奈落の底へと突き落とされた『人』々の悪夢は終わらない。

『竜』の出現から数年後、『竜』の存在する意味を知り、その存在の移動先から逃げようと世界のあちこちへ飛んで身を隠そうとした『人』々にさらなる絶望が襲いかかる。世界のあちこちに、『竜』と同じような特性を持った生物が出現しはじめていた。すなわち、あらゆる『異界』の奇跡の力を否定する力を持つ生き物が。その姿は実に様々で、『竜』に匹敵する巨大な姿を持つ者もいれば、人間ほどの大きさのものまで。トカゲのような姿から、鳥のような姿のもの、あるいは、ミミズや、昆虫のようなものまで、実に様々。

共通することはただ一つ。

『竜』と同じく、『異界』の力を持つ者、あるいは持つ物を狩り食らうということ。

いつしか『人』々は『竜』を含めた彼らのことを絶望と畏怖をこめてこう呼ぶようになっていた。

『害獣』と

何千年にもわたり隆盛を誇っていた『人』々は、彼らの出現によって、たった十数年で絶滅寸前まで追い込まれた。

だが、『人』々は滅びなかった。偶然なのか、それとも『世界』そのものの情けだったのか、『害獣』から逃げ回っていた『人』々の中に、『害獣』が侵入してこない場所があることに気づいた者が

いた。『異界』の力が流れ込みにくい、あるいは全く流れ込まない場所であったがゆえに、当時の『人』々から開拓されることもなく放置されていた『辺境区』と呼ばれる場所が世界のあちこちに存在しているが、そこには『害獣』の姿が全くなかった。生き残った人々はそこに次々と逃げ込んで、堅固な城壁によって囲まれた（勿論『異界』の力ではなく自らの力で作った城壁）城砦都市を作り、その中の安全地帯に隠れるように住むようになった。

それが五百年近くも前の話。

それから時が経ち、『人』々の文明がこれまでとは全く違う方向へと進歩していって、今に至る。

相変わらず『害獣』達は世界中の至る所を闊歩しており、城砦都市から一歩踏み出した外の世界が危険であることには変わりはないが、それでも、偉大な先人達のおかげで、ある程度『人』々は世界を再び自らの足で歩けるようになり、細々とながらも他の城砦都市との繋がりを築き徐々に人口を増やしつつある。

今年高校二年生になる人間族の少年　宿難（すくな）　連夜（れんや）は、そんな今の世界に生まれてしまった。

この世界最大の大陸である『阿』大陸の北方、南方諸都市との大事な中継都市として名を馳せる城砦都市『嶺斬泊』。

二百年以上も前に『王』や『貴族』と呼ばれる力ある『害獣』達はすでに都市周辺から立ち去り、いまだ残っている『害獣』達もある一定の地域からは出てこないことが確認されていて、他の地域に比べれば比較的安全な場所にこの都市は存在している。

だが、分厚く高い堅固な城壁の一歩外、内部に住む『人』々から『外区』と呼ばれている地域は、完全に安全な場所とは決して言い難い場所であることに間違いはない。『人』類最大の天敵である『害獣』は勿論、元々住んでいた友好的とはとてもいえない危険な原住生物達、あるいは、『害獣』の出現以降、狂った生態系の果てに生まれてきたと思われる未知の野生動物達が今このときも都市を覆

う壁一枚向こうで跳梁跋扈しているのだ。幸いにも城砦都市を守る守護兵達は優秀であったし、『外区』をうろついているそういった危険生物達の活動範囲から外れているのか、彼らが都市に直接攻撃を仕掛けてきたりということは、今だ一度としてないが、この都市の内部に住む者全ては、多かれ少なかれ何かしらの危機感を抱きながら日々生活をしている。

いつ何があっても対処できるように、牙を持つ者はその牙で牙持たぬ同朋達を守るためにそれを磨き続け、牙持たぬ者は、牙持つ者達の力となって支えるために自分達にできることを、自分達にしかできない技術を磨き続けている。

勿論、連夜とてその例外ではない。

彼自身は全種族中最弱である『人間』族に生まれてしまったため、直接戦う為の技術はほとんど会得してはいなかったが、それ以外に役立つあらゆる知識技術技能を日々精進して会得しようと努めている。

彼は彼なりに、自分が生き残る術、あるいは道を探りながら懸命に生きているのだ。

が・・

だからといって連夜自身が『害獣』との激闘の日々を送るわけではない。

『害獣』と戦う『ハンター』でもなければ、城壁に張りついて日々都市を守っている守備兵でもない。まだただの一介の高校生である。一応、将来を考え『外区』との関わりを念頭に置いてはいるが、彼が戦わなくてはならないものは今のところほとんどこの都市内部に存在していた。

彼が戦わなくてはならない最大の敵、それは『日常生活』という。

第一話　お～ぷにんぐ

玉藻：連夜くん、連夜く～ん。

連夜：はいはい、なんでしょう、玉藻さん。

玉藻：呼んでみただけ～。

連夜：え～っ。呼んでみただけって・・まあ、いいですけど。掃除の途中だったので、もどりますね。

玉藻：うん。

十分後

玉藻：連夜くん、連夜く～ん。

連夜：はいはい、なんでしょう、玉藻さん。

玉藻：呼んでみただけ～。

連夜：もう～。とりあえず用事はないんですね。じゃあ、洗濯の途中だったので、もどりますね。

玉藻：うん・・あ、連夜くん。

連夜：はい、なんですか？

玉藻：やっぱり、いいや、なんでもない。

連夜：？

さらに十分後

玉藻：連夜くん、連夜く～ん。

連夜：はいはい、なんでしょう、玉藻さん。

玉藻：呼んでみただけ～。

連夜：またですかあ。しょうがないですねえ。とりあえず、風呂洗いしている途中だったので、もどりますね。

玉藻：うん・・あ、連夜くん。

連夜：はい、なんですか？

玉藻：いや、あの・・ふ、風呂掃除手伝おうか？

連夜：いえいえ、玉藻さん、毎晩遅くまで勉強してて疲れているでしょ？　休みのときくらいゆっくりしててください。

玉藻：え、そ、そう？　・・わかった。

またさらに十分後

玉藻：連夜くん、連夜く～ん。

連夜：はいはい、今度はなんですか、玉藻さん。

玉藻：呼んでみただけ～。

連夜：はいはい。今、晩御飯作ってますから、出来たら一緒に食べましょうね。

玉藻：うん・・その、そのね、あのね、連夜くん。

連夜：ん？　なんですか？

玉藻：邪魔しないから、側にいていい？

連夜：ええ、勿論構いませんけど。・・ぁっ！！　（そういうことか！！）　あ～、そうだ、玉藻さん、結構包丁使えましたよね。よかったら、食材切るの手伝ってもらえませんか？

玉藻：えっ！？　あ、うん！！　任せて！！　よ～し、がんばるからね！！

真・こことはちがうどこかの日常

過去（高校生編）

第一話　『宿難家の朝』

ＣＡＳＴ

宿難（すくな）　連夜（れんや）

城砦都市『嶺斬泊（じょうさいとし りょうざんぱく）』に住む、高校二年生。

十七歳の人間族の少年。

この物語の主人公で、家族全員から愛される家事全般のエキスパート。

「みんな、喧嘩はやめようよ～」

宿難（すくな）　仁（ひとし）

連夜と同じ人間族の父親にして、宿難家が誇る最強の常識人。

家事技術の連夜の師匠でもある。家族全員をこよなく愛しているが、中でも妻のことは、子供達が呆れ返るほど激愛している。

「やあ、連夜くん、おはようございます。今日も早いね」

ドナ・スクナー

世界三大種族の一つ『聖魔』族の中の頂点を極めるある種族の女性で、連夜の母親にして、宿難家を代表する無敵の非常識人。
城砦都市『嶺斬泊』の中のほぼ全ての行政を取り仕切る政府機関『中央庁』のお役人様で、バリバリのキャリアウーマン。
夫同様に家族のことをこよなく愛しているが、中でも夫のことは、子供達がドン引きするほど絶愛している。

「きゃ～、ほんとレンちゃん、かわいい！！」

宿難（すくな）　大治郎（だいじろう）　宣以（のぶため）

筋骨隆々、堂々たる体格のサムライで、宿難家の長兄にして連夜の実兄。二十四歳。
連夜と違って人間族ではなく、獅子頭人体の獣人系種族。婚約者を筆頭にたくさんの恋人や愛人がいるが、最優先なのは弟の連夜という超ブラコン。

「れんやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁ、すぅぅきぃぃだぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ミネルヴァ・スクナー

金髪碧眼のスーパー美女。宿難家の長姉にして連夜の実姉。二十歳。

大治郎同様に人間族ではなく、額に超感覚器官を持つ人型上級種族。いろいろな意味で実の弟である連夜のことを愛している。いろいろすぎて超あぶなかったりするが・・

「かわいい・・かわいすぎる・・ってか、血がつながってさえいなければ・・」

スカサハ・M・スクナー

銀髪紅眼のウルトラ美少女。宿難家の末妹にして連夜の実妹。十五歳。

他の兄姉達同様に人間族ではなく、実は母親と同じ『聖魔』族の頂点を極める種族。他の二人の兄姉と同じく兄のことが大好きであるが、二人に比べればかなりまとも。

「えへへ、そうですか。お兄様にほめられるとうれしいです」

ののやま　さくら

宿難家に仕えるメイド長の少女。十五歳。

直立した猫という姿の『東方猫型小人（ねこまりも）』族という種族で、かつて宿難親子に一族を救われたことを恩義に感じ、彼らに忠誠を誓う。

「このご恩、我ら一族決して忘れませぬニャン。一生かけてお尽し致しますニャン」

だいもんじ　いちょう

だいもんじ　かえで

宿難家に仕える双子の猫メイド。二十歳。
宿難家の主である仁の専属メイドで、彼の仕事である薬草、霊草栽培を手伝っている。

「「恐縮です」」

ののやま　しおん

さくらの姉で、大治郎の従者兼愛人。二十歳。
先祖がえりして生まれてきたおかげで、実妹のさくらをはじめとする同族とは全く違った姿をしており、そのシルエットは頭部以外普通の『人』型種族と変わらない。
大治郎に対し、深い愛情と忠誠を寄せる。

「ご、ごめんなさい若様、私は、あの、その、大治郎様と・・」

玉藻：連夜く～ん、なんか包丁使うの久しぶりだから、ちょっとお肉とかねぎの形がいびつになっちゃった～。

連夜：全然大丈夫ですよ。奇麗に切れているじゃないですか。このくらいの大きさなら炒めるときに火が通りやすくていいと思います。

玉藻：そ、そうかな？　私、役に立ってる？

連夜：勿論です。すっごい役に立ってますよ。

玉藻：そっか～、よかった～。

連夜：それに一人でいるよりも、二人でいるほうが楽しいですしね。

玉藻：あ・・ひょっとして、バレてた？

連夜：さあさあ、さくっと作ってしまいましょう。玉藻さん、そっちにあるキャベツ微塵切りにしてもらっていいですか？　僕、炒め物作ってしまいますから。

玉藻：う、うん。任せて。あの、連夜くん。

連夜：はい？

玉藻：や、やっぱり二人でいるほうがいいよね？　ね、ね。

連夜：勿論です。

玉藻：えへへ～。

連夜：さて、玉藻さんの機嫌が直ったところで、本編を開始させていただきます。第一話『宿難家の朝』です、どうぞ。

玉藻：連夜くん、指切っちゃった～～！！

連夜：えええええっ！？

第一話　『宿難家の朝』　その1

肌に冷たさを感じることがなくなり、ようやくぼんやりとした暖かさが広がるようになってきたゴールデンウィーク前の月曜日の朝。

一人の戦士の一日が始まる。

パリッとした白いカッターシャツに、紅色のネクタイ、紺色のスラックスという典型的な学生服。さらさらの黒髪に、大きくくりくりとした瞳が特徴的な、かっこいいというよりも圧倒的にかわいい感じの顔に、平均的な高校生にしては若干小柄で華奢な体格の持ち主。見るからに優しそうだが、優しいばかりでなくどこか意志の強さを感じさせるオーラをまとっており、平凡な姿ながらどこか人の目を惹きつけるような魅力を持っている。

戦士の名前は『宿難（すくな）　連夜（れんや）』

自宅からすぐ近くにある都市立御稜高等学校（としりつおんりょうこうとうがっこう）に通う高校二年生であり、宿難家（すくなけ）の家庭の平和を守る為に日夜戦い続ける守護戦士。

「さあ、今日も一日がんばるぞ！！」

空気の入れ替えの為に全開にしたサッシから庭に出て大きく伸びをすると、一度深呼吸してから日課にしているストレッチ体操を行なう。念入りに体をほぐし、ごきごきと首を曲げて肩をならす。

「よし、準備体操終わり！」

そう呟くと、再びサッシを通って家の中へともどり、まずは洗面所に向かう。顔を洗って歯を磨くためではない。洗面所についた連夜は、洗面所のすぐ横に置いてある、洗濯かごを手に取った。洗濯

かごは連夜が両手で抱えるようにしないと持てないくらい大きいが、それにもまして今洗濯かごにつまれている洗濯物は倍以上の体積で山積みになっていた。男物女物子供物に、作業着やら下着やら制服やら実に様々なものが雑多に入れられている。それらをよいしょと抱えて、洗面所からちょっと離れた場所にある魔道洗濯機のところまで移動すると、手なれた様子で洗濯機の中に洗濯物を放り込んでいく。

一見無造作に放り込んでいるように見えるが、よく見るときちんと種類を選別して洗濯機に放り込んでいるのがわかるだろう。ある程度まで洗濯物を放り込んだところで、自家製の洗剤と漂白剤を入れてスイッチを押す。

「やっぱり、白霧草と分解石の組み合わせが一番妥当なのかなあ。でも、あんまりやりすぎると色が落ちちゃうしなあ・・」

と、ブツブツと独り言を呟きながら洗剤のブレンドについてちょっと考えてみたりするが、あまり時間もないので、とりあえずここは置いておいてキッチンに向かう。

パタパタとキッチンに入ってきた連夜は、壁にかけてあったかわいいひよこのアップリケがしてあるエプロンを身につけると、昨日のうちに研いで水につけておいた米が入った理力炊飯器のスイッチを押す。そして、氷太刀（ヒダチ）製の大型冷凍霊蔵庫から食材を取り出すと、手際よく調理しはじめた。

愛用の包丁をなれた手さばきでふるい、長ネギや豆腐をちょうどいい大きさに切って鍋の中に放り込んでいく。ちょっと大きめのサンマは三つに切って魚焼き用のコンロへと。魔法のスモーククリーナーのスイッチをいれて、コンロからでている煙の処理も忘れない。サンマが焼き上がるまでの時間を利用して、大根おろしを用意する。大根おろしができあがるころには、サンマがいい具合に焼け上がっており、これ以上焼くと焦げてしまうと寸前の絶妙なタイミングで

引き上げて皿に盛る。もちろん大根おろしを添えることは忘れない。
これだけだとおかずとして寂しいので、霊蔵庫から卵を取り出し、卵焼きを作ることにする。素早くボウルに卵を割ると、あらかじめ作っておいてある秘伝のだしと砂糖を少量混ぜて軽くかき混ぜる。そして、熱しておいた卵焼き用の長方形のフライパンに卵を流し込み、ちょっと焦げ目がつくかつかないか程度に焼き上がった卵を見事な腕でくるくると巻いてしまう。出来上がった卵焼きはきれいに包丁で一口サイズにきられて皿に盛りつけられる。

このままだと野菜が少ないので、あと一品ホウレンソウのおひたしを作ってしまう。

これで朝食は完成したが、家族のみんなの弁当ができていない。

今日はどうしようかなあと、考えながら、とりあえず様子を見るために一度洗濯機のところにもどると案の定第一回目の洗濯は終了していた。洗濯物が入っているものとは別の空の洗濯かごをもってきて、洗濯機から洗ったばかりの洗濯物を取り入れて、代わりにまだ洗濯していない洗濯物を洗濯機の中に放り込む。そして、それを抱えてもどってくると、いつのまにかキッチンに別の人物が立って何やら調理していた。

「あ、お父さん、おはよう」

「やあ、連夜くん、おはようございます。今日も早いね」

人好きのする笑顔を向けてくる自分とよく似た容姿の父親にうれしそうに朝の挨拶をする連夜。

他の兄弟とは全く似ていない自分が正直あまり好きではない連夜だったが、父親と似ていることは素直にうれしかった。自分がもう少し歳をとったら、きっとこうになるに違いないと思わせる目の前の人物は、連夜にとっていろいろな意味で憧れであり目標でもあった。

『宿難（すくな）　仁（ひとし）』

連夜の実の父親で、連夜と同じく人間族。特殊な薬草や霊草の栽培を生業としており、その筋ではかなりの有名人。市場にはなかなか出回ることがない、『人』の手で栽培することは難しい、ましてや自然にあるものを採取することはもっと難しい種類の薬草や霊草を栽培する物凄い技術を持っているため、医療関係をはじめとする実に様々なところから日々注文が殺到しており、とてつもなく忙しい毎日を送っている。

元々、宿難家の家事一切を取り仕切っていたのはこの父親であったのだが、今は彼の最大最強の弟子である連夜がほとんどを任されて行っている。

「今日は僕がみんなのお弁当作るよ。連夜くんは、悪いけど洗濯物ほしちゃってくれるかな」

「了解しました、師匠！」

父親の言葉にふざけて敬礼をしながら了承の言葉を言うと、父親はすっと近づいてきてわしゃわしゃと連夜の頭を撫ぜた。

「ほんと連夜くんはかわいいなあ・・」

「・・男がかわいいっていわれても嬉しくないです！」

父親の言葉にちょっと反発してみるが、父親に頭を撫ぜられるのは嫌いじゃないので、されるままになっておく。というか、むしろお父さん子である連夜は、そうやって頭を撫ぜてもらうのが子供の頃から大好きだったので、久しぶりに撫ぜてもらえて嬉しくて、憎

まれ口を叩きはするものの、その表情は言葉を完全に裏切って笑顔になっていた。

連夜は、小さい頃からずっと父親と共にあった。母親は連夜を産んだときにはすでにこの都市の中枢を握る『中央庁』の御偉いさんで、連夜を産んで一年ほどは連夜の側にいたのだが、周囲に促されてすぐに仕事に復帰せざるを得なくなってしまい、その後父親が後を引き継いで連夜をつきっきりで育ててくれた。

自分と同じ、全種族最弱の人間族に生まれてしまった息子連夜を父親は非常に心配し、常に連夜を自分の側に置き続けた。それは決して甘やかし続けたということではない。父親が連夜を側に置き続けたのは、最弱の種族人間族に生まれてきた息子がこの世界で生き残っていけるように、彼が身につけてきた技術、知識、技能を教え込むためであった。いや、それだけではない。父親は、自分が会得していない、しかし、間違いなく息子の為になると思われる様々な技術の名匠達の所に息子ともども弟子入りし、それらの技術を一緒に学ぶことで息子を見守り続けた。

そうやって父と子は二人三脚でずっと歩み続けてきた。

なので、この二人の親子には他の家族にはない特別な絆があり、二人はとてもそれを大事にしていた。

ここのところ父親の仕事が忙しくなり、連夜もいろいろと一人で活動することが多くなってすれ違うことが多くなっていたが、それでも二人はどこかで通じ合っていた。連夜の頭をなぜることをやめた父親は、その想いを確認するかのように連夜の身体を引き寄せてぎゅっと抱きしめる。連夜もまた自分よりも若干大きい父親の身体を黙って抱きしめ返す。

そして、しばしそうやって抱きしめあたあと、父親は連夜の背中を二つほどぽんぽんと叩き身体を離した。

「じゃあ、洗濯物お願いしますね」

「は～い」

とてとてと父親からはなれて洗濯物をまたよっこいしょと担いだ連夜は、一度振り返って父親のほうに顔を向けにっこりとほほ笑みかける。すると父親も笑顔を浮かべて返し、それを確認したあと連夜は満足そうな表情になって庭にでていくのだった。

庭に出た連夜は、一瞬太陽の眩しさに目を細める。しかし、すぐにその光になれてきて、すたすたと庭の中央まで歩いて行き、そこに置いてある物干しざおに一つずつ、しかし、次々と素早く、そして手際よく洗濯物を干していく。

パンパンと洗濯物を広げてほしながら空を見上げてみると、抜けるような青空の中をいくつもの白い雲がゆっくり流れていくのが見えた。今日もいい天気になりそうだなあと、のんびり思いながらも、その手を休めることなく洗濯物を物干しにかけていく。

そんな感じで、洗濯かごいっぱいあった洗濯物を半分ほどかけ終わろうとしていたとき、何かが近づいてくる気配を察して少年はふとそちらに視線を移す。連夜の視線の先に三つの小さな『人』影が映る。その『人』影はまっすぐにこちらへと向かってこようとしていた。その『人』影が何者なのかすぐにわかった連夜は、慌てることなく優しく温かい笑みを浮かべて見せると、その『人』影達に声をかける。

「おはよう、みんな。今日は早いね」

すると、声をかけられた小さな『人』影達は、一斉に連夜の周囲を取り囲み賑やかに『にゃいにゃい』言い始めるのだった。

「お、おはようございますですニャン、若様！！」

「若様に洗濯をさせてしまうとは、我ら一生の不覚ですニャン！！」

「そのような些事は全て私どもがやりますニャン、若様はどうぞリビングにてお待ちくださいませニャン！！」

身長は一メトルもないであろう。小柄な体格をかわいらしい黒いメイド服に包みこんだ彼女達の姿は、誰が見ても直立した『猫』だった。

第一話　『宿難家の朝』　その2

『東方猫型小人族（ねこまりも）』

『阿』大陸の東の果てにある辺境区にて細々と暮らしていた少数民族。元々は『異界』の力の一つである『妖力』を意のままに操り、それなりに強大な力を持つ一族であったのだが、『害獣』の出現によってその事情は急変する。『害獣』の出現により万能にして強大な『妖力』を使うことを禁じられ、その力を否応なく取り上げられてしまった彼らは、普通の猫よりも頭がよくて、人間並みに力があるというだけの普通以下の種族へとその地位を一気に没落させることになった。

今現在生き残っている他の種族達のように、すぐに別の技術、あるいは技能を会得したり、または、『異界』の力やこの世界に元々あった原始の力をはじめとする超常能力に全く頼ることなく肉体的能力を伸ばすような努力をすれば結果はまた違っていたのであろうが、長い長い年月を『妖力』に頼りきって生きてきた彼らは、すぐにそうすることができず、かといって正面から『害獣』に立ち向かっていくこともできないまま、ただただ天敵である『害獣』から隠れ続けひっそりと暮らし続ける道を選んだ。

彼らが元々住んでいた場所が辺境中の辺境ということもあったせいか、『害獣』達の魔の手が伸びることなく五百年という年月を平和に暮らすことができた。しかし、ついにその土地に染み付いた『異界』の力を、『害獣』達が嗅ぎつける日がやってくる。彼らが生活している辺境に徐々に『害獣』達が姿を見せるようになっていき、やがて、ベテランの『害獣』ハンター達でも倒すことが難しいとされる『騎士』クラスの『害獣』までも目撃されるようになった。

最早、彼らが隠れ住む里が見つかるのは時間の問題だった。『害獣』に見つかれば間違いなく一族郎党皆殺しにされ滅ぼされるだろ

う。しかし、長い年月何もしないまま、ひっそりと隠れ住むだけの生活しかしてこなかった彼らには、『害獣』と戦う術はもちろん、『害獣』に見つからぬように逃げる術さえなかったのだ。
天が彼らに与えた道は『滅亡』のみ・・と思われた。
だが。

「我らがいまここにあることができますのは、大旦那様と、若様のおかげでございますニャン」

三匹のメイド猫達の中で一番背が高い三毛猫のメイドが連夜の前に進み出ると、胸に片手をあてて恭しく優雅に一礼してみせる。するとそれにならうようにして他の猫達も同じように一礼する。

「あのとき無力な我らが、いつ来るかわからない『害獣』達の襲撃に怯えて隠れ里の中でみじめにも丸まっていたとき、お二人は颯爽と現れて我らを『害獣』の包囲網から救い出してくだった。いや、そればかりではありませんニャン。里を失い行き場のなくなってしまった我らをこの都市に導いてくださったうえに、生きる場所まで与えてくださいました。このご恩、我ら一族決して忘れませぬニャン。一生かけてお尽し致しますニャン」

「「いたしますニャン！！」」

当時のことを思い出しているのか、若干涙目になりながらも真摯な表情で頭を下げ続ける猫達の姿を、しばらく困ったように見つめていた連夜であったが、やがて三匹に近づくとそっとその身体を引き寄せて優しく抱きしめる。

「いや、うちで一生懸命働いてくれるのはいいけど、そこまで思いつめなくていいってば。そもそもあのとき僕達が君達の里を訪れた

のは、君達の里に伝わる『猫だまし草』の栽培方法を伝授してもらいたかったからだったって知ってるでしょ？　ほら、『猫だまし草』って美容液作るのに欠かせないでしょ、だからかなり需要が高いんだよねえ。君達の長老にそれを教えてもらうかわりに君達の脱出を手伝った。ただそれだけじゃない。うちで君達を雇ったのも、たまたまお父さんが忙しくなってきて家のことができなくなってきたから、手伝ってもらえる『人』がほしかったからだもん。お父さんの畑のほうも『人』手不足だったし。ちょうどよかったんだよね」

三匹の目をまっすぐに見つめながらえへへとかわいらしく笑みを浮かべる連夜。そんな連夜をしばらく見つめていた三匹の猫達は、その腕の中でなんともいえない困った表情で顔を見合わせる。そして、三匹の気持ちを代弁するかのように、三毛猫のメイドが連夜に口を開く。

「確かにそういう目的があったかもしれませんニャ。しかし、だからといって命を懸けるほどの価値があの草の栽培方法にあったとは思えませんニャン。それに種族というにはあまりにも少人数な我らですが、雇用するというには大人数の我ら。それを受け入れる必要などなかったはず！！」

「そうかな～、僕はあったと思うよ。少なくとも僕はあのときの判断を少しも間違っていたとは思わないし後悔もしていないよ。勿論、お父さんもね」

「ですが！！」

「だって、こんなかわいい妹達ができたし」

そう言って連夜は自分の顔を三匹の猫達の顔に心から嬉しそうに

にすりつける。猫達はしばらく連夜のされるがままになっていたが、やがて嬉しいような恥ずかしいようなという非常に表情に困るという顔をして見せて連夜を見つめる。

「ほんとにもう若様はお人好しですニャン」

「甘過ぎますニャン」

「でも・・嬉しいですニャン」

「「確かに」」

三匹の猫は連夜の腕の中でにっこりとほほ笑んで頷き合うと、一斉に連夜の顔を優しくなめてその腕からすり抜ける。

「さあさあ、若様。残りの洗濯物は私達が干しておきますニャン。こうめ、脚立を持ってきてくださいまし。若様、この量ですとまだ他に洗濯物が残っていますよね？」

「うん、いま洗濯機回してる」

「では、まつこ、手の空いている者を二人ほど呼んでそちらに向かってくださいまし。ここは私とこうめで干してしまいますニャン。よろしいですね、若様」

テキパキと二匹の猫メイド達に指示を出した三毛猫のメイドは、フリルがたくさんついたかわいらしいスカートをひるがえして踊るような優雅な足取りで連夜に近づくと、その洗濯カゴを乱暴にならない程度に連夜から強引に奪い取る。そんな三毛猫メイドに、連夜は困ったような表情を浮かべてみせたが、すぐにそれを苦笑へと変

化させゆっくりと三毛猫に頷いて見せる。

「じゃあ、お願いするね、みんな」

「若様の許可が出ました。二人とも早速行動してくださいまし」

「了解です、さくら姫」

「こらっ！！　こうめもまつこも、何度言ったらわかるのですか？　今の私は『姫』ではなく、『メイド長』ですニャン」

真っ赤な顔で怒りだした三毛猫のメイド　さくらから逃れるように二匹の猫メイド達はその場から駆け出していく。

『ののやま　さくら』

東方猫型小人族の族長『ののやま　こてつ』の次女で、この家の全てのメイド達の頂点に立つメイド長。族長の娘ということもあって、幼き頃から『人』の上に立つ英才教育を受けてきた彼女であり、その物腰や口調は紛れもなく『姫』。いずれは日陰にこもりきった一族を引連れていずこかの都市に移住し、そこで一旗あげようと密かに野望の炎を燃やしていたのだが、宿難親子に救われたことでその心情は一変。今では宿難家の日常を守ることを己の使命とさだめ、自分が今まで培ってきた指揮能力を存分に駆使して、メイド業を爆進中。

自分を救ってくれた家の主である仁と、自分のことを実の妹同然に可愛がってくれる連夜に絶対の忠誠を誓っており、家の中では大概どちらかにくっついて行動している。

ちなみに当初は、ずっと一日中メイド業の彼女であったが、実年齢が十五歳であることが連夜や仁にバレ、ほかの未成年のメイド達

ともども日中は学校に行くことを強制的に義務付けられ日中は家にいない。昼間は他の成人メイドさん達が家の業務を行っている。

「『さくら姫』でいいと思うけどな。かわいくて」

「わ、若様までそんなことを!!　『姫』はスカサハ様お一人で十分にございますニャン」

「あはは、確かにスカサハは『お姫様』って感じだね。でも、『さくら姫』も負けないくらいかわいいと思うよ」

「あわわわ、わ、若様は本当にもう、お世辞ばっかり・・」

「別にお世辞じゃないんだけどね。その洗濯物干したらあとのことは他のメイドさん達に任せて学校行く用意するんだよ？　いいね？」

「は、はい、承知いたしましたニャン」

連夜の言葉に真っ赤になりながらも優雅にスカートのすそを掴んで一礼してみせるさくらに、連夜はもう一度近づいてその小さな体をぎゅっと抱きしめる。すると、さくらはしばらくあたふたとしていたが、きょろきょろと周囲を見渡して誰もいないことを確認すると自分の短く小さい腕を連夜の背中にまわして同じように抱きしめ返す。

「メイド業をがんばるのはいいけどあんまり無理しちゃ駄目だよ、さくら。さくらも僕の大事な家族でかけがえのない妹の一人なんだからね」

「勿体ないお言葉でございますニャン」

お互いが抱いているのは間違いなく恋愛感情ではない。父親との絆とも違う。だが、それでも二人の間には温かい絆があって、二人はそれを確認するようにお互いの身体を強く抱き合う。

相手を抱きしめるのは連夜の癖であった。

いや、誰彼かまわず抱きしめるというわけではない。相手のことを絶対に失いたくない、大事な存在だと思う場合に限り連夜は相手を頻繁に抱きしめる。つまり、連夜が自ら抱きしめた相手は、連夜にとって間違いなくかけがえのない存在であるということであった。

十年近い付き合いで、それをよ～く知っているさくらは、内心喜びに打ち震えながら連夜の身体をうっとりと抱きしめ返す。連夜が自分を抱きしめてくれているということは、自分が連夜にとって特別な存在であると告白されているのと同じだからだ。

恋愛感情ではないとわかっていても嬉しくないわけがない。こうしてさくらの忠誠心はまたさらに深くなっていくわけであるが・・

「あああっ！！　さくら姫様ずるいニャン、また若様にハグされてるぅ！！」

他の猫メイド達と共に脚立を持って帰ってきたこうめが、連夜と抱き合っているさくらの姿を見て騒ぎ出し、みつかってしまったさくらは慌てて連夜から体を離して何事もなかったかのようにふるまおうとする。

「自分ばっかりズルイニャンズルイニャン！！」

「だ、だから『姫』ではありません！！　私は『メイド長』ですと何度言えば・・」

「ごまかしてるニャン！！」

「ゴ、ゴマカシテマセンにゃん！！」

「声が裏返ってるニャン」

「ウ、ウルサイデスにゃん。は、早く脚立を貸しなさい！！」

猫メイド達が大騒ぎしている様子があまりにも可愛らしくて、連夜はしばらくその様子を楽しげに見つめていたがふと腕時計を見て今の時間を確認すると慌てたように家の中へと戻って行く。

「じゃあ、あと任せるけど、みんな、ちゃんと学校に行く用意して遅れないように家を出るんだよ？　ちゃんとみんなの朝食用意しておくからね！！」

『はい、若様』

ちょっと振り返ってメイド達の元気な返事を確認した連夜は、満足気に頷いて今度こそ家の中へと入って行った。

第一話　『宿難家の朝』　その3

再びキッチンにもどってくると、そこにはまた別の人物の姿が。

「ダイ兄さん、おはよう」

「うむ、連夜お早う」

キッチンのダイニングテーブルに座って旭新聞を読んでいた人物は、連夜の姿を見つけると新聞を折りたたみ、重厚な仕草で朝の挨拶をしてくる。

椅子に座ってる状態でもわかる長身に筋肉質で見るからに頑健な肉体、不言実行、泰然自若をモットーとする、まだ若いのにいやに老成した野武士のような人物。特徴的なのはその首から上で、本来人の顔がある場所には、大型肉食獣である獅子の顔が乗っかっていた。危険な仕事をするもの特有の鋭く意志の強い眼差しに、口からのぞくのは獰猛な牙、そして長い金褐色の髪は後ろでポニーテールにまとめられ、額には黒い鉢がねがまかれている。

彼こそ連夜の七つ年上の兄、宿難家の長男。

『宿難（すくな）　大治郎（だいじろう）　宣似（のぶため）』

去年大学を卒業し、『害獣』ハンターというとてつもなく危険な仕事についた彼は、一年のほとんどを『外区』と呼ばれる都市の外で過ごす。そのため連夜も最近は滅多に会えないでいたのだが、久しぶりに昨日の夜のうちに帰ってきていたらしい。事情を知らない人間が見れば、彼こそがこの家の主と間違えてしまいそうなほど貫禄があり、落ち着いた雰囲気を醸し出している。

「『おはよう』よりも、まずは『おかえりなさい』だよね、ダイ兄さん」

「どちらでも構わんさ。だが、そうだな、『ただいま』、連夜」

かすかにほほ笑みながらゆっくりと頷きを返す獅子頭の兄の姿に、心からの笑顔を浮かべて返す連夜。失礼にならない程度に兄の身体全体にすばやく視線を走らせ、少し安堵の息を吐きだす。

「今日も怪我らしい怪我していないね。よかった」

「ああ、おまえがいつも『回復薬』一式を用意してくれているからな。あれだけ全部使い切るような相手とはなかなかやらないさ」

「でも、兄さんが所属する『暁の旅団』が出張るくらいの相手だから、弱くはないよね」

「まあ、そこそこはな」

「そこそこね・・今回も大変だったみたいだね」

「・・・」

ビールの中ジョッキほどもありそうな兄専用の湯呑に兄の大好きな梅こぶ茶を注ぎ、兄の前にそっと差し出す連夜。大治郎は連夜の問いかけに対し『是』とも『否』とも言わぬまま、その湯呑を手にしてゆっくりと口に持って行く。

『暁の旅団』

城砦都市『嶺斬泊』にあまた存在する『害獣』狩りの傭兵旅団の中で、間違いなく五指に入る屈指の超戦闘集団。剣聖と名高いドワーフ族の剣士『坪井（つぼい）　主水（もんど）』に率いられたこの傭兵旅団は数々の輝かしい戦歴を持ち、その武名は近隣諸都市に鳴り響いている。その為、自然と他の傭兵達では手に余る危険極まりない仕事が数多く集まってきてしまう。

勿論、普通の仕事も数多く舞い込んでは来ているはずなのだが・・

「この『嶺斬泊』が無視できない、あるいは無視しては通れない相手を斬る・・のが坪井さんの方針だったよね？」

「うむ。連夜はよく知っていると思うが、普通の『害獣』はどのクラスのものであろうとも自分のテリトリーから出てくることはない。つまり『人』がそこに踏み込みさえしなければ『害獣』が襲いかかってくることはないのだ。極端な話、例え目の前に立っていたとしても、自分の立っている場所がその『害獣』のテリトリーから一歩でも外れていれば襲いかかられることはないということだ。だがな、『人』が生きていくためには奴らのテリトリーを少しずつでも削ぎ落としていかねばならぬ。『人』が増えればそれだけ住む場所が必要となる、住む場所だけではない、日々の生活を営むための場所だって必要だ。遅かれ早かれ今のこの城砦都市の城壁内部だけではスペースが足りなくなってくる。いずれは生活圏を広げていかねばならんのだ。ならば、やれる者がやれることを今やらなければならぬ」

なんとも言えない表情で一気に梅こぶ茶を飲み干した大治郎は、大きく太い溜息を吐きだしながらトンとテーブルの上に湯呑を置く。連夜はその湯呑に黙って梅こぶ茶のお代わりを注ぎながら、困ったようなかすかな笑顔を浮かべて大治郎の横顔を見つめる。

「だけど、身体は大事にしてね、兄さん。兄さんが強いことはよく

知っているけど、もしものことだってありえるんだから。死体で帰ってきたりしたら承知しないからね」

「わかってる。可愛い弟にそんな無様な姿を見せたりはせん。散るときは塵一つ残さずこの世から消えてやるさ」

「そういうこと言ってるんじゃないのに、兄さんはもう。とりあえず、ごはんを入れるね」

「うむ。頼む・・って、ちょっと待て連夜!!」

兄の言葉を聞いた連夜は片手で顔を覆い、大きく深い溜息を一つ吐き出す。しかし、すぐにしょうがないなあという表情を浮かべると、兄の朝食の用意をするために流しに向かっていった。そんな弟の後ろ姿を何とも言えない優しい表情で見送りかけた大治郎だったが、何かに気がついて鋭い声をあげ、それを聞いた連夜は何事かと振り返る。

「な~に、兄さん・・って、なにやってるの?」

呆れたような連夜の視線の先には、両手を大きく広げた兄の姿が。

「え、何って・・おかえりなさいの抱擁は?」

「・・ご飯いれるね・・」

「ちょ、待つのだ連夜!! 兄弟のふれあいは!? ずっとしてくれていたじゃないか!! 久しぶりに我が家に帰ってきた兄に対してその仕打ちはあんまりだ!!」

「何言ってるのさ、それって僕が小学生のころの話でしょ・・僕ももう高校生なんだけど・・」

「いや、関係ないではないか!!　それともあれか？　反抗期か？　それとも、もう兄はいらんということか!?」

すごい悲しそうな目でこちらを見る兄の姿を、しばらく眺めていた連夜だったが、溜息をひとつつくとあきらめたように兄の分厚くて広い胸に抱きついた。

「はいはい、もう・・これでいいの？」

「連夜ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

やたらと感激した声をあげて、大治郎は自分よりも小さな連夜を抱きしめた。滅多に家に帰らなくなってきた兄は、危険極まりない日々を送り続けている反動か、帰還するたびにそのブラコンぶりを悪化させていた。

「ほんとに大治郎くんは連夜くんのことが大好きなんですねえ・・」

家族に持たせる弁当作りに集中していたために、兄弟の会話に参加していなかった父親であったが、自分の背後が賑やかであることに気がついて、振り返ってにこにこと兄弟の触れ合いをみつめる。

「パパ上、連夜は我が命、我が人生そのものなのです!」

「うんうん、そうですか、そうですか」

「ちょっと、ダイ兄さん、苦しい・・」

「れんやぁぁぁぁぁぁぁ、かわいいぞぉぉぉぉぉぉぉぉ」

尚もヒートアップする大治郎に、さすがに苦しくなってきたのか、連夜がばたばたと身をよじって逃げようとする。しかし、スキンシップに相当飢えていたのか大治郎は連夜をがっちりホールドしたまま放そうとしない。

「ダイ兄さん、そろそろ放してって・・」

「れんやぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁ、すぅぅきぃぃだぁぁぁぁぁぁぁ！」

「あさっぱらから、やかましいわぁぁぁぁぁこの筋肉だるまぁぁぁぁぁぁぁ！！」

キッチンに走りこんできた何者かが、左手に持った『真・ナニワハリセンカリバー』・・と書かれた大きなハリセンを大治郎の後頭部に一閃する。

スパーーーーーンと、めちゃくちゃナイスな快音を響かせて着地したその人影の後ろを、頭を抱えた大治郎の巨体がごろごろと転がっていく。

「あいたたたたたたたた」

「あいたたたぢゃないわよ！！　連夜を殺す気なの、ダイ！？」

激痛から立ち直れずにいまだ転がり続ける大治郎を睨みつけるのは、美しい金髪をショートカットにした、海のように碧い色をした碧眼の女性。やや細身ではあるが女性にしては長身で、モデルのよ

うなスタイル、そして、額には大きな第三の美しい目が輝いていた。
そんなわけで十人中十人が振り返るであろう美人であるが、美しいお姫様というよりは麗しい王子様というほうがしっくりくるようなところがあるのは、その漢前な性格のせいなのであろう。

「あ～、助かった。ありがとう、み～ちゃん。そして、おはよう」

「おはよう、連夜。無事でよかった」

苦笑しながら礼を言う連夜に、外では見せない女性としてのというか、優しい姉としての表情を向ける彼女こそ宿難家の長姉。

『ミネルヴァ・スクナー』

連夜の三つ年上で、家からちょっと離れた都心近くにある都市立大学に通う大学二年生。

「大丈夫？　怪我とかしなかった？」

「うん、大丈夫、大丈夫」

「そう、それはよかった・・じゃあ、はい」

「はいって・・・なに、やってるのみ～ちゃん・・」

呆れたような連夜の視線の先には、両手を広げた姉の姿が。

「え、何って・・お早うのハグは？」

「・・・お味噌汁いれるね・・」

「ちょ、待って、連夜!!　姉弟の愛のスキンシップは!?　最近ずっとしてくれないじゃない!!　それともなに、もう姉とは汚らしくてハグできないっていうことなの!?」

「もう・・それ、ダイ兄さんがさっき言ってたこととほとんど同じなんだけど・・」

「そんなの関係ないわよ!!　ってか、こんなゴミの言うことは聞かなくていいのよ!!　それともあれ?　反抗期なの?　お姉ちゃんなんか大っきらいってやつ!?」

すごい哀しそうな目でこちらを見る姉の姿を、あんたもあんたがゴミ呼ばわりしてる人とおんなじじゃんみたいな目で眺めていた連夜だったが、溜息ひとつつくと、あきらめたように姉の緩やかに膨らんだ胸に抱きついた。

「はいはい、もう・・これでいいの?」

「連夜・・ほんとかわいい・・」

胸の中の小柄な弟をうっとりと見つめるミネルヴァ。しばらくよしよしと弟の頭を撫ぜていたミネルヴァだったが、何かに気がついたように連夜の身体をちょっと離し、その身体のあちこちをべたべたと触る。

「え、何?　何?」

「連夜、いつのまにかすっごい筋肉質な身体になってない?　抱きしめるまでわからなかったけど」

「そんなことないよ。まあ、多少は鍛えているけど、それほど大幅には変わってないと思う」

「そうかなあ。いや、やっぱり肉質が変わってると思う。触ってみた感じが若干違うもの。なんていうのかな、昔よりさらに筋肉が柔軟になってる感じがする。連夜って着痩せするけど実際は結構引き締まった体しているよね。お父さんと一緒にあちこち旅をして自然と鍛えられたからかもしてないけど、確かに昔からそこのところは変わらないかな。でも、今触ってみた感じでは、硬質なだけじゃなくて明らかに弾力が凄くよくなってる気がするもの。脂肪がついてぶよぶよになったわけじゃなくて、筋肉そのものが鞭みたいな感じになってる。私の言ってること間違ってる？」

そう言ってミネルヴァは若干自分の身体を屈ませると、覗き込むようにして自分の顔を可愛い弟の顔に近づけじっとその目を見つめる。すると連夜はその問いかけに対し、はっきりとした返答をしないまま曖昧な笑顔を浮かべて見せるだけ。

「もうっ！！　また、連夜は私に何か隠し事してるでしょ？」

「うんまあ、僕も年頃の健全な高校生男子ですので、麗しい姉君に言えない秘密の一つや二つあるのですよ」

「ダメッ！！　絶対にダメよ！！　連夜は私に隠し事しちゃ駄目なの！！　法律でちゃんと決まっているんだから！！」

「いや、決まってないから。そんな個人特定の法律なんてどこにもないから」

連夜が自分の問いかけに答えてくれない様子を見ていたミネルヴァは、半分本気で涙目になりながら連夜の身体を抱きしめ、いやいやと身体全体を横に振って悲しみを表現する。そんな姉のなすがままになりながら、連夜は困ったような苦笑を浮かべて姉の顔を見つめる。

「いや、冗談だよ、み～ちゃん。将来お父さんの薬草菜園を手伝うことになると思うから、それに向けて基礎体力つくりしているだけ。他意はないよ」

「本当に？」

「ほんとほんと」

えへへへへ～と可愛らしい笑顔を浮かべて見せる連夜の姿を、その三つの目で真偽を見抜くように見つめていたミネルヴァだったが、やがて深い溜息をひとつ吐き出すと表情を緩める。そして、自分よりも小さな連夜の身体をぎゅう～～っと抱きしめる。

「連夜、お願いだから危ない真似だけはしないでね」

「大丈夫だってば、み～ちゃん。だいたいさ、僕が行くところって、家、学校、スーパー、あとお父さんの畑くらいだよ？　どこに危ない場所があるの？　考えすぎだよ」

「そう？　わかった。ならいいけど」

「うんうん、わかってもらえてよかった」

尚も問いただしたそうにしていたミネルヴァであったが、これ以

上詮索しても連夜が何も語ろうとしないことを察すると、しぶしぶといった表情で頷いて見せる。そんなミネルヴァの姿を見た連夜はどこかほっとしたような表情を浮かべ、ふ～～っと大きく息を吐きだしながら肩の力を抜くのだった。

「そうやって、なんでも一人で抱え込んで一人で解決しちゃうんだから、連夜は。お姉ちゃんすっごい悲しい」

「そんなことないよ～。み～ちゃんのこと頼りにしているんだから」

「本当？」

「ほんとほんと。み～ちゃんて、勉強できるし、スポーツ万能だし、喧嘩だってめちゃくちゃ強いし、おまけにそこらへんのモデルや女優が束になってかかっても敵わないほどの超美人だもんね」

「でへへへ～、そんなこともあるけど～。もう、連夜は正直なんだから～」

連夜に褒められたミネルヴァは、その表情を脹れっ面からあっというまに上機嫌へと変化させる。そして、先ほどとは違う意味で連夜を抱きしめたままいやんいやんと身体を横に揺らし続ける。姉の機嫌がなおったことにほっとする連夜だったが、流石に人形のように抱きしめられたままでいるわけにもいかないので、そろそろ朝食の用意をしようとその身体をミネルヴァから放そうとしたのだが、そのとき、連夜の視線の先にミネルヴァの瞳が映った。無視できない何かがその瞳に宿っていることを本能的に察知した連夜は、ミネルヴァの碧眼をまじまじと見つめてみる。するとそこにはなんとも言えない妖しげな光が。

「み、み～ちゃん、なに、その目？」

「かわいい・・かわいすぎる・・ってか、血がつながってさえいなければ・・」

「え、ちょ、み～ちゃん？　もしもし？」

「連夜・・」

「なに？　ってか、顔近い！　もう、すっごい近い！！」

「ちゅ～していい？」

ミネルヴァの言っている意味がわからず一瞬硬直する連夜。冗談で言っているのかなと思ってその瞳を見つめ返してみるが、妖しさ爆発の碧い瞳には完全完璧に『マジ』と映っていて、『冗談』の『じ』の字の欠片も見出すことができず、連夜の背筋を超高速で寒気が走る。

「へ、ちょ、ちょっとぉぉ、だめだめだめ！！」

タコのように唇をすぼめて顔を近づけてくる姉を必死で押しのけようとする連夜だったが、女性とは思えぬ予想以上の力でホールドされてしまっており逃げるに逃げれない。無念、ここまでかと連夜が覚悟を決めた、そのとき、猛然とミネルヴァに迫る一つの影が。

「ちぇすとぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

ダメージからようやく回復した大治郎が、両手に正眼に構えた『エメラルドハリセンフロウジョン』・・と書かれた大きなハリセン

をミネルヴァの横っ面に叩き込む。
『バシーーーン』と、もう聞くだけもすっごい痛くてたまらない打撃音を響かせてバシッとポーズを決める大治郎の後ろを、右頬を抑えたミネルヴァの細身がごろごろと転がっていく。

「いたたたたたたたたたた！！」

「いたたたたぢゃないわ！！　ミネルヴァ　貴様、実の弟に懸想するとは何事か！！　恥を知れ、恥を！！」

雪山の頂上から下界を見下ろすかのような厳しい眼差しで、床を転げまわる妹を睨みつける大治郎。そんな上の兄姉の様子を、呆れ果てたように見つめていた連夜は、大きく大きく深く深くため息をつくのだった。

「もう、ご飯入れるから、二人ともいい加減で席についてね・・」

「「は～い」」

お互い凄まじい憎悪の炎を瞳に宿し睨みあって対峙していた二人であったが、愛しい弟の声には素直に応じて、いそいそとキッチンテーブルの自分の席へと向かう。連夜は、そんな上二人の様子を溜息交じりに見つめたあと、棚から兄と姉のお椀を出してきてまず長ネギと豆腐の味噌汁を入れてわたし、ついで、茶碗にごはんをよそって二人の目の前に置くのだった。

「サンマは塩焼きにしてるけど一応ポン酢かけて大根おろしと一緒に食べてね」

「うむ・・いただきます」

「相変わらず、連夜は料理が上手いなあ・・血がつながってなければ絶対お婿さんにして大事にするのに・・」

「まだ言うか、この色情狂め・・いや、しかし、ほんとに旨い。連夜、いつもありがとうな」

「ううん、二人ともご飯おかわりしてね」

もりもりと自分が作った朝食をたいらげていく二人の姿をうれしそうに見つめながら、連夜は横で弁当を作っている父親のほうに目線を向ける。すると、いつのまに来ていたのか、二人の猫メイドが父親の両側にぴったりとくっついて、その作業を手伝っている姿が見えた。

「かえでさんに、いちょうさん、おはようございます」

「「おはようございます、若様」」

連夜の挨拶に応えて、作業を中断した赤と黄色の毛並みを持つ二匹の猫メイドは、優雅にスカートのすそを掴んで一礼し連夜に挨拶を返す。

『だいもんじ　かえで』と『だいもんじ　いちょう』

東方猫型小人族（ねこまりも）の長老の双子の孫娘達で、長老直伝の霊草、薬草作りの腕を買われて父親仁の専属メイドとして働いている。おしゃべり好きなものが多いことで知られている東方猫型小人族（ねこまりも）であるにも関わらず、かえでといちょうは非常に物静かで、こちらから話しかけなければ口を開くことはあまりない。いつも黙々と父親の側で

その手伝いをしていて、今日もひっそりと父親の影で作業を続けていたので、流石の連夜も気がつくのが遅れたのである。
　霊草、薬草栽培の技術が非常に素晴らしいものを持っている二人であるが、それはかりではない。料理技術もなかなかのものなのだ。その証拠に連夜の目の前には、目にも鮮やかな色とりどりのサンドイッチとクラブサンドが。

「うわ、久しぶりにお父さんのミックスサンドに、かえでさん、いちょうさんのクラブサンドですか」

「うん、まあね、簡単なものでごめんね」

「いやいやいや、サンドイッチといってもお父さん達が作ると中身が豪華だもん。僕が作ると、レタスとかハムとかありきたりなんだもんなあ。かえでさん、いちょうさんもありがとう」

「「恐縮です」」

　連夜の言葉通り、小さなバスケットケースに詰められたサンドイッチの具は、タンドリーチキンやら、トンカツやら、アボガドやら、フルーツ各種やら、かなり華やかになっていた。

「これならスカサハも喜ぶなあ・・って、あれ、そういえばまだスカサハまだ起きてきてないよね・・」

　時間を見ると現在七時三十分。
　まだ余裕はあるが、そろそろ起こしにいかないといけないかもしれない。おかわりと、同時に空の茶碗を差し出してきて、俺が先だ、とか、ひっこめ肉だるまとか醜い争いをしている兄姉の相手を父親に任せて呼びに行こうかと連夜が体を動かしかけたそのとき、チェ

ックのブレザーにスカート、赤い棒ネクタイの都立中学の制服を着た美少女がキッチンに入ってきた。

「おはようございます、連夜お兄様」

流れるようなロングヘアーの銀髪、ルビーのように輝く赤い瞳、抜けるような白い肌。音楽のような涼やかな声と、お姫様のような奇麗な一礼で、連夜に朝の挨拶をしたその少女は、そのまま、連夜の体に飛び込んだ。

第一話　『宿難家の朝』　その４

「おはようございます、連夜お兄様」

流れるようなロングヘアーの銀髪、ルビーのように輝く赤い瞳、抜けるような白い肌。音楽のような涼やかな声と、お姫様のような奇麗な一礼で、連夜に朝の挨拶をしたその少女は、そのまま、連夜の体に飛び込んだ。

「おっとと、お早う、スカサハ。今日も吃驚するくらいかわいいね」

「えへへ、そうですか。お兄様にほめられるとうれしいです」

まるで仔猫のように連夜にじゃれつくこの人物は、連夜の二つ下の妹で、宿難家の末妹。

『スカサハ・Ｍ・スクナー』

血がつながってるとは到底思えないような、儚くも美しい姿をしたこの妹は、美しいだけでなく、スポーツ万能、成績優秀、中学校では生徒会長まで務めている超エリート。かっこいいという言葉が似合う美しさを持つ姉とは対照的に、かわいいという言葉が素直に似合うお姫様のような少女。

それがスカサハという少女だった。

ある一面をのぞけばだが・・

「お兄様・・スカサハは・・お兄様とずっとこうしていたい・・」

「いや、でもね、そろそろご飯食べて、学校行く用意しないといけ

ないと思うんだけど」

連夜にしっかりと抱きついた状態から上目づかいで熱っぽく兄を見つめ続ける妹に、困惑しつつも強くでれない兄バカの連夜。そんな二人の様子を物凄く面白くなさそうに見つめていた上の二人は・・

「をい、連夜、そこの二重人格はほっといて、飯いれてくれ」

「そうそう、何がお兄様だ・・気持ち悪いっての」

「あ、いや、ちょっと二人とも・・」

実の妹に向かって暴言を垂れ流す上の二人をたしなめようとした連夜だったが、凄まじい殺気を近くから感じておもわずびくっと身体をすくませる。殺気の発生源をきょろきょろと探してみると、さっきまで自分をみつめていた妹が、目の前で朝食を食べている二人の兄姉に視線を移しているのがわかった。完全に視線だけで人を殺せそうなオーラをにじませながら。

連夜は慌てて妹のほっそりした両肩を掴んで自分のほうに向かせると、引き攣りそうになる顔を強引に抑え込んで笑顔を作る。

「す、スカサハ？　あの、と、とりあえず、ご飯にしよっか、いまお味噌汁とご飯いれるし、ね、ね？」

「あ～、悪い、俺、間違えてスカサハのサンマ食っちゃった。」

「あら、卵焼きなくなっちゃったわ。ごめんごめん。あ、ホウレンソウならあるから」

なんとか場の空気を変えようとする連夜の努力をぶち壊しにする

反省の欠片もない、誰が聞いても上辺だけとわかる謝罪の言葉をいけしゃ～しゃ～とのたまった上二人。そのとき、連夜の耳に『ぶちっ』という誰かの堪忍袋の緒が切れる音が聞こえた。連夜からふらりと離れたスカサハは幽鬼のように兄姉のほうに一歩踏み出した。

「きさんらなにさらしてくれとんじゃ～・・おお？　わしに喧嘩うっとるんかのう～？　わしのことなめとったらのう・・ぶち地獄みせたるさかいのぅぅぅぅぅぅぅ！！」

さっきまでのフランス人形のような美しく気高い表情から一変、まるで『仁義なき戦〇　広島激〇編』の菅原　文〇のようなキレた狂犬のような表情で啖呵を切ったスカサハの銀髪が、みるまに無数の蛇の群れへと変わる。そして、のんびりと椅子にすわってお茶をすすっていた二人に襲いかかった。

「ふむ・・この長兄に喧嘩を挑むその心意気はよし・・しかし、まだまだ甘い！！」

「やれやれ、精神修行がなってないねえ・・生徒会長様だなんだと持ち上げられている割に、おこちゃまということかな」

妹の攻撃を余裕を持ってかわした二人はすかさず態勢を整えて戦闘モードに入り、壮絶な兄妹喧嘩が幕をあげる。

「あ～～、もう、また始まっちゃった！！」

兄、姉、妹が入り乱れ、素人から見ても間違いなく超絶的な武術と思われるとんでもない技を駆使して戦いあうその姿に、連夜は思わず頭を抱えそうになる。しかし、大好きな兄姉妹が戦いあう姿など見たくない連夜は、なんとかそこに割って入って止めようとする。

「ちょ、みんな、やめてやめて！！　ダイ兄さん茶碗投げちゃだめ！！み～ちゃん、お箸を武器にしちゃだめ！！　スカサハ、学生服が汚れちゃうよ、やめなさい！！」

慌てながらも三人の間に入って喧嘩を止めようとするのだが、連夜以外のメンツはみな武芸の達人。いやそればかりではない。連夜自身は全種族中最弱の人間族であるが、彼以外の兄姉妹は違う。人間族の父親の血を受け継いだ連夜と違い、彼ら三人は母親の血を受け継いでいる。

この世界に存在している全種族の中でも特に『人』口が多く、また身体能力も際立って優秀な三つの種族がある。『妖精』族、『神獣』族、『聖魔』族。大概の種族はいずれかの種族に分類される派生一族で、どの種族も非常に優秀な身体能力を持つことで知られているが、連夜達兄弟姉妹の母親は、その中の一つ『聖魔』族の出身で、しかも、あまり大きな声ではいえないが、かなり高位に位置する種族である。その母親の血を色濃く受け継いで生まれてきた三人は、尋常ではない身体能力を持っている。

それはもう、そのあたりに住んでいる上級種族など目ではないくらい、圧倒的な力の持ち主達なのである。そんな彼らの喧嘩に、何の能力も持たないただの人間族である連夜が割って入ってもどうすることもできない。それどころか、彼らは連夜が自分達の戦いの場に飛び込んで来たことを確認すると、さっさとキッチンから戦いの場をリビングに移す。しかし、広い所でやればいいという問題ではない。連夜は三人を追いかけて合戦城になっているリビングに飛び込むが、三人はそんな連夜だけは傷つけないように無駄に超絶的な技術をふるって喧嘩を続行し続ける。

そんな茶碗やお箸や湯飲みや皿がばんばん飛び交い、布団叩きやハリセンを剣刀代わりにして、ガチンコで戦い合う兄姉妹の中を、あっちにおろおろ～、こっちにおろおろ～と、頼りなくふらふらす

る連夜。

「喧嘩しちゃだめだよ～・・みんな仲良くしようよ～！！　だ、誰か、三人を止めてぇ！！」

両手をバタバタさせて、リビングを吹き荒れる嵐を収めようとする連夜。だが、その嵐は一向にやむ気配はなく、思わず頭を抱えて絶叫する。

最早、誰かが力尽きるまで戦いの嵐は止まらないのか、そう思われたそのとき、リビングに小さな影が次々と現れ戦いの渦中へと飛び込んで行く。

「我々にお任せくださいませニャン、若様！！」

「えっ！？」

チェックのブレザーにスカート、そして赤い棒ネクタイという、スカサハが通う中学校の同じ制服に着替えた猫メイドの群れ。スカサハと同学年で同じクラスメイトでもあるメイド長さくらに率いられた、中学生猫メイド隊の面々だった。

「いきますわよ、みなさん！！　またたび流猫忍術！！」

『あふれるほど大分身、特売セールバージョン！！　名付けて、『あふれてこぼれちゃったごめんね、ちょっとアダルティック大分身！！』』

「ながっ！！　技の名前、すっごいながっ！！　しかも意味がよくわからないし！！　ってか、それ本当に叫ぶ必要あるの！？」

大治郎、ミネルヴァ、スカサハのちょうど真ん中に飛び込んで行った制服姿の猫メイド達が、小さい手で印を結びかわいらしく呪文を唱えると、瞬く間にリビングルームが猫メイド達でいっぱいになる。あまりにもいっぱいすぎて天井まで猫メイドでいっぱい、外に続くガラス戸は部屋いっぱいの猫メイド達に押されてみしみしいってるし、何匹かの猫メイド達はキッチンに続くところから溢れて転がり出てしまっている。

流石の超人達もこの猫団子の中では戦うことはできなくなっていたが、戦うどころか動くことすらままならなくなっていた。

「ちょ、ちょっと待ておまえら!!　人数多すぎるだろ!?　それにひっつくんじゃない!!　熱くてかなわん!!　え～い、そろそろ術を解除しないか、バカ者!!」

「きゃああっ!!　大治郎様、何をなさいますか!?　そ、そこは私のお尻ですニャン!!」

「な、なにっ!?　い、いや、すまん、しかしだな!?」

「ひゃあっ、大治郎様のエッチ、そ、そこは私の大事な・・もうお嫁にいけませんニャン!!」

「ぬううっ、ち、違う、決してそういうつもりでは・・」

「大治郎様、どこを見ていらっしゃるのですか!?　そんなスカートの中を・・言ってくだされればいつでもお見せいたしますニャン」

「あほかああっ!!　動けないんだからしょうがないだろうが!!　そもそもこの事態を引き起こしたのはおまえらで・・連夜ぁぁっ、頼む、なんとかしてくれえええ!!」

「ミネルヴァ様のお胸、思ったよりもふにふにですニャン」

「ちょ、あんたどこ触ってるのよ!?」

「ミネルヴァ様、ちょっとお尻が垂れていませんかニャン?」

「垂れてないわ!!　ちょっと待て、いま垂れているって言ったのは誰だ!?　さくらじゃないのはわかってるけど、誰が誰だかわからない、卑怯者!!」

「ミネルヴァ様、凄い腹筋。こんなに筋肉ニクニクしていたらお嫁にいけないのではないですかニャン?」

「余計なお世話よ!!　もういやああ!!　れ、連夜、助けてぷり～ず!!」

猫団子に拘束されて身動きが取れずたまらず悲鳴をあげる大治郎とミネルヴァ。術が発動する寸前、かえでといちょうの双子メイドの手でキッチンに避難させられて無事だった連夜は、その悲鳴が聞こえたほうに助けに行こうとするが、なんせ、部屋全体が猫メイドで埋まっているからなんともしようがない。

どうしたものかとおろおろしながら思案していると、キッチンとリビングをつなぐ襖の部分がからりとあいて、そこからメイド長のさくらとスカサハが何事もなかったように姿を現す。

「姫様、お怪我はございませんかニャン?」

「ええ、大丈夫よ、さくら。やはり持つべきものは親友ですわね。ありがとう、助かりましたわ。ところでいい加減その『姫様』はや

めてちょうだいってば。私はあなたを部下とか下僕とか思ってはいなくてよ。あなたは私のかけがえのない大親友ですもの。そう思っているのは私だけなのかしら？」

「いいえ、さくらも・・さくらにとってもスカサハ様は大事なかけがえのないお友達にございますニャン」

「じゃあ、『姫様』はやめて・・」

「ですが、同時に我らが忠誠を誓う大旦那様の大事なご息女様であり、私が敬愛する若様の大切な妹姫様にございますニャン。よってスカサハ様は我らの『姫様』ですニャン」

「もう、さくらはほんとに頑固者なんですから」

怒ったような顔を浮かべて睨みつけるスカサハと、しら～～っとした表情でそれを受け流すさくら。二人の主従はしばしそうやって真剣極まりない空気を醸し出して対峙していたが、やがて、この空気に耐えきれなくなったのか、同時に『ぷっ』と噴き出してしまう。そして、二人して歳相応の屈託のない笑みを浮かべてほほ笑みあう。

そう、スカサハの言葉通り、さくらは十年来になるスカサハの大親友なのだ。本来さくらは全メイド達を統括指揮するメイド長である。この家の主である仁は最重要人物で別格として、彼以外の家族の面々に対しては平等に接し仕えなくてはならない立場。しかし、実年齢がバレて、平日の昼間学校に通うようになってからというもの同学年のスカサハと行動を共にする時間が大幅に増え、自然と彼女の専属メイドのようになってしまったのだ。

最初は義務感のようなもので学校にいる間のスカサハの世話をしていたさくらであったが、スカサハの高潔な性格を知るにつれ次第と彼女に惹かれいつしか自ら進んで仕えるようになっていた。

さくらのほうだけではない。あまりにもかわいい容姿と出来すぎる能力のせいで下僕志願者や恋人志願者は多くても友達が極端に少ないスカサハにとっても、さくらは特別な存在である。学校以外の場所でなら、連夜という心強い存在がスカサハにはいる。苦しい時、悲しい時、辛い時、いつでもすぐにそんなスカサハの内面を見通して連夜は黙って側にいてくれるし、困っている時にはすぐに手を差し伸べてもくれる。

だが、学校には連夜はいない。

完璧超人で学校でもあらゆることをそつなくこなしてみせるスカサハであるが、時にはへこむこともある。壁にぶつかって思い悩む時もある。そんなときに一緒にいてくれるのがさくらであった。連夜のようにスカサハの内心を魔法のように見通して助言してくれたり、困っていることを見透かして的確な助言をしてくれるわけではないが、一緒になって悩み、手伝ってくれる本当に心強い味方であった。

そんな二人の関係であるから、兄姉妹喧嘩が勃発した場合さくらが誰の味方をするかは至極明白であった。

連夜は猫メイド達が、リビングに飛び込んで行った理由がスカサハの援護であったことを今更ながらに理解し、なんとも言えない困った表情で目の前に立つ二人の妹達を見て、深い溜息を吐きだす。

「二人とも仲がいいのは結構だけど、そろそろダイ兄さんとみ～ちゃんを解放してあげてくれないかな、お願いだから」

大好きな連夜の言葉を聞いて二人は顔を見合せる。そして、揃ってわざとらしく腕組みをして思案顔をしてみせると、ゆっくりと首を横に振る。

「お言葉ですがお兄様。それはできません」

「えええっ、なんでさ、スカサハ！？　そんなこと言わないで助けてあげてよ。ちょっとさくら、笑ってないで早く術を解いてあげてってば」

「私も若様のご命令は承服しかねますニャン。他でもない若様のご命令故、すぐにでもお応えしたいところですが、この喧嘩の原因は大治郎様、ミネルヴァ様の大人げない挑発行為にあると愚考いたしますニャン。確かにそれに乗ってしまったスカサハ様の行為を軽率と言われればそれまででございますが、挑発されなければこのような大喧嘩になることはなかったわけですから、どちらの非が重いかは明白と存じますニャン。そして、今、我々の手で戦闘状態が停止しておりますが、これは一時的なもので終結したわけではございません。もし、今、我々が拘束を解いてしまっては、これ幸いとお二人がスカサハ様に報復行為にでないとも限りませんニャン。なにせ、お二人は共にこの城砦都市にその名を鳴り響かせる超闘士。かたや、城砦都市最強と名高い戦闘集団『暁の旅団』の鬼副長にして、『天剣絶刀獅皇帝』の二つ名を持つ大治郎様。かたや、フリーの傭兵として北方諸都市に名を響かせる絶世の美女戦士コンビの片割れ、『絶対佳人戦天女』の二つ名を持つミネルヴァ様ですからね。くわばらくわばらですニャン」

わざとらしく身震いしながら説明してみせるさくらの言葉に、重々しい表情でうんうんと頷いてみせるスカサハ。そんな二人を連夜は呆れたように見つめる。

「よく言うよ。二人とも全然怖いと思っていないくせに」

「「そんなことないです～」」

ブ～と可愛らしく唇を突き出して膨れて見せる二人の姿に、連夜

はやれやれと片手で頭をかいていたが、溜息を一つ吐き出して猫団子状態になっているリビングのほうに視線を向ける。

「ダイ兄さんもみ～ちゃんも今の聞いていたでしょ？　スカサハとさくらが、ちゃんと謝って反省してくれたら解放してあげるって」

「「絶対に謝らない！！」」

半ば予想してはいたが、即答で連夜の提案を却下する二人。しかし、連夜は諦めずに説得を続ける。

「謝らないって・・でも、さくらの言う通り挑発したのは二人なんだから」

「ふん、あの程度のことを言われて腹を立てるとは、ましてや口で返すならともかくスカサハは手を出してきたであろう」

「それに私達二人いるってわかってて仕掛けておいて、危なくなったらさくら達メイドに加勢を頼むなんてすっごい卑怯じゃない？」

「な、なんですってぇ！？　そうまで言われて黙っていられますか！！　さくら、いますぐ二人の拘束を解いてちょうだい、実力であの二人に思い知らせてやるんだから！！」

「ひ、姫様落ち着いてくださいましニャン。あれはお二人の挑発ですニャン」

「はっはっは、どうせ、言葉だけだろう？　本当にこの拘束を解いて正面から俺達と戦う勇気はスカサハにはあるまいて」

「そうね～。スカサハはなんせ温室育ちのお嬢様だしね～」

「もう、絶対に許さない！！　さくら、離して、あのバカ兄とスケベ姉をぶん殴ってやるんだから！！」

「なりません、姫様！！　って、なりませんてば、スカサハ、コラッ、落ち着きなさいニャン！！　ほんとにもう猪突猛進なんだからぁ！！」

連夜の説得などどこ吹く風、言葉の応酬だけではあるが、第二次兄姉妹喧嘩勃発にリビングとキッチンはまたもや嵐に包まれようとする。

しかし、流石に今回ばかりは連夜の堪忍袋の緒が切れた。日向のような温かな笑顔を浮かべていた表情から一変、真冬の夜のような寒々しい無表情になった連夜は、兄姉妹達に聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声でぼそりと呟く。

「わかった。好きなだけ喧嘩すればいいよ。その代わりもうみんなとは二度と口をきかない」

キッチンとリビング、いや、それどころかこの家全体に広がる範囲の空気が一瞬にして凍りつく。つい今しがたまで言い合いをしていたはずの兄姉妹達は一斉に黙りこみ、周囲を痛いくらいの静寂が支配する。

やがて、なんの感情も見せない絶対零度の表情のままリビングの部屋に背を向けた連夜は、流しのほうに向かってスタスタと歩いていく。そして、すっかり出来上がった弁当を弁当袋に入れて最後の用意を仕上げようとしていた父親の横につき、一緒になってそれを手伝い始める。

「おやおや、連夜くん、もういいんですか？」

「みんなやりたいと言うんだから、やればいいんじゃないでしょうか。僕の意見は聞いていただけないとわかりましたので、今後は意見を挟むのをやめようと思います」

なんともいえない苦笑を浮かばせた父親は、隣に立つ最愛の息子に話しかけるが、息子は変わらぬ絶対零度の声音で返事を返す。そんな息子をやれやれと見つめたあと、父親は後ろを振り返り、そこにいる者達に声をかける。

「って、連夜くんは言っていますが。どうしますか、みなさん？」

『私達が悪うございました』

いつのまに術を解いたのか、大治郎、ミネルヴァ、スカサハ、さくら、そして、分身の術に参加していた中学生猫メイド達が全員そろって連夜の後ろに正座し、見事なまでの土下座姿で謝っていた。

しかし、連夜はその姿をちらっと見つめただけで、何も語ろうとはせず、やがて弁当の用意が終わるとエプロンを外し、隣にいる父親に話かける。

「お父さん、今日はお母さんと一緒に出かけるんですよね？　でしたらすいませんが、この後のみんなの朝食の給仕をお願いできますか。僕が一緒だとみんなご飯がまずくなるでしょうし」

『ちょ、ちょ、ちょっと、待ったぁぁぁぁぁ！！』

絶対零度の仮面の奥、その瞳にうっすらと何かを光らせながら父親にしょんぼりとこのあとのことを頼んだ連夜は、その場から逃げ

るように立ち去ろうとするが、その連夜に土下座メンバー全員がすがりついて引きとめる。

「ほ、ほ、本当に悪かった、連夜！！　悪い、本当に俺は悪いお兄ちゃんだった、反省してる！！　な、な、ごめん、すまん、許してくれ、頼む！！」

「私達のことでそんなに傷つかないで連夜！！　あ～～、ごめんなさい！！　本当に本当にごめんね！！　違うのよ、ほんとは喧嘩じゃないの、じゃれあってるだけだったの、誤解させちゃってごめんね」

「そうですそうです、連夜お兄様が気に病まなくてはならないようなことは何一つございませんのよ！！　ちょっと調子に乗り過ぎちゃったのですわ！！　ね、さくら」

「そ、そうですとも、そうですとも。一般市民の皆様に強大な術をぶちかますわけにはいきませんから、そのお相手をしていただけですニャン！！　若様は無理矢理謝らせたと思って自己嫌悪されていらっしゃるのかもしれませんが、決してそうではないのですニャン。みんな、若様を傷つけてしまって申し訳なくて謝っているのですニャン。そ、それにこれから若様の優しい言葉をかけていただけないなんてことになったら・・」

『耐えられませんニャン！！』

最後のさくらの言葉を引き継いだ中学生猫メイド達の集団が、連夜の体中にしがみついて『ブニャ～～～』と盛大に泣き始め、ようやく連夜の表情が元に戻る。

「僕こそごめんね、みんな。子供みたいな拗ねかたして。みんなに気を使わせることになっちゃって、ほんとだめだよね、僕」

『そんなことないない！！』

がっつり落ちこんでいるとわかる連夜の言葉を聞いたメンバー達は、どこかで練習していたんではないかと思わせるような一糸乱れぬ統率力で一斉に首を横に振ってそれを否定してみせる。

「本当に？」

『本当本当！！』

「じゃあ、僕がみんなの朝食の準備してもいいかな？」

『是が非でもお願いいたしまする』

泣き笑いのような表情ではあるが、ようやくいつもの調子にもどってきた連夜の姿を見て、一同は一斉に安堵の吐息を吐きだす。

「あ、危ない。危うく連夜の信頼を失うところだった」

「ほんとだわ。あんた達の信頼なんかどうだっていいけど、連夜の信頼を失ったら私生きていけないわ」

「それは私だって同じです。なんだかんだ言っても、連夜お兄様は特別な存在、特別な方。ね、さくら」

「はい、ですニャン。若様は大事な大事な方ですニャン。姫様と比べられると困ってしまいますけど・・」

「いいのよ。私にとってもさくらにとっても大事なかけがえのないお兄様ですもの、それにしてもお兄様は・・」

そこまで言って言葉を止めたスカサハは、忙しく自分達の朝食の準備をしてくれている連夜の姿を見つめる。すると、それに倣うように大治郎やミネルヴァ、さくらや中学生猫メイド達も揃って同じように連夜を見つめ、彼らはそろってなんともいえない吐息をもらすのだった。

しばらくそうやって彼らが連夜のことを居た堪れなくなるくらい暖かい眼差しでじ～～～っと見つめていると、それに気がついた連夜が非常に居心地が悪そうに彼らを見つめ返す。

「あ、あの・・みんな?」

「連夜が一生懸命働いている姿はいつ見ても・・なんというか・・その・・かわいいなあ・・」

大治郎が表現に困り果てた末に出した結論を口にすると、それを聞いていたメンバー全員が揃って頷きを返す。

「ほんとあれは凶悪にかわいいわよねえ」

「お兄様、かわいすぎます・・なんか生まれたばかりの子犬がぷるぷるしている姿みたいで抱きしめたくなります」

「私はどちらかというと、お母さんの背中みたいに見えて抱きつきたくなりますニャン」

「あ～、それもあるかも!!」

『あるある』

連夜を除く兄弟達の中に妙な連帯感が生まれていた。そんな兄弟たちをジト目で見つめて、なんとなく釈然としない気持ちを残しながらも、連夜はやれやれとため息一つついて肩を竦めてみせ、まあ仲良くしてくれているなら、もうなんでもいいかと自分を納得させる。

そして、大治郎やミネルヴァのご飯を装い直し、スカサハやさくら達中学生猫メイド達の朝食の準備がすっかりテーブルの上に整いなおしたことを確認すると、今だに連夜の雰囲気談義をあ～だこ～だとしている面々に声をかける。

「じゃあ、朝食の用意できたから、みんな食べてね。僕はリビングの後片付けしてくるから」

「そんな、お兄様、私も手伝います！！」

「そうですニャン、そういった雑事は全て我々メイドが・・」

「いいからいいから。そんなことよりみんな学校に行く時間が迫っているから、先に朝食とってしまって。あ、先に言っておくけど朝食を抜くなんてダメだよ。ちゃんと朝は食べないとね。いいね」

座ったばかりの椅子から立ち上がり、連夜を手伝うためにリビングに赴こうとするスカサハや、さくら達中学生猫メイド達を押しとどめ、連夜は一人さんざんに荒れ果てたリビングへと足を踏みいれる。

「それにしても本当によく暴れてくちゃったもんだなあ。いや、兄

さん達の実力からすれば全然可愛いものか。本気でみんな暴れたらこんな家なんか一分ももたずに木端微塵だよね」

「ごめんね～、レンちゃん。いつもいつもみんなの世話をレンちゃんに押し付けちゃって。御片付け手伝うから許してね」

飛び散らかった皿や茶碗を拾っていると、妙齢の女性と思われる声が聞こえてきて、連夜が声のしたほうに目を向けるとそこには妹スカサハを成長させたような人物が。

「あ、お母さん。おはよう、今日ははやいね」

第一話　『宿難家の朝』　その5

「おはよう、レンちゃん。今日はちょっと中央庁で早朝会議があるのですよ」

あでやかな薔薇のような大人の笑みを連夜に向ける連夜の母親は、深い紅色のビジネススーツの上からでもわかる、抜群のスタイルの持ち主。はっきりいって、出るところは物凄いでてるのに、しまってるところはむちゃくちゃしまってて、あふれ出ている色気が尋常ではない。しかし、そのなんとも言えない気高いオーラのようなものがそれを淫らなものではなく、女性の清廉な魅力へと昇華させていて不思議と見る者をいやらしい気分にさせない雰囲気をまとっていた。

『ドナ・スクナー』

連夜達兄弟姉妹を産んだ実の母親で城砦都市『嶺斬泊』の行政の全てを取り仕切る『中央庁』で働くバリバリのキャリアウーマン。一応戸籍上はありふれた中級以下の『聖魔』族ということで登録されているが、勿論、ただの『聖魔』族ではない。事実が公表されれば都市全体が間違いなく大騒動になるであろう超上級『聖魔』族。

しかし、本人はそういう人種的な上位下位には全く興味がない。味方となればわけへだてなく、その恐怖に満ちた拳を振るう。母親のそういうところに連夜は多大に影響されてしまったわけだが、それだけに連夜は母親を非常に尊敬していたし、母親も自分とよく似たところを持つ連夜がかわいくて仕方ないのだった。

そんな母親は連夜と一緒にテキパキと後片付けをしてしまうと、茶碗や湯飲みを洗い出した連夜の横に立って、彼の父親と同じよう

に連夜の頭をわしゃわしゃと撫ぜた。

「ほんと、レンちゃんはいい子ね～。若いころの旦那様そっくり」

「え？　そうなの？　やっぱり僕ってお父さんに似てる？」

「似てる似てる。レンちゃんが持ってる強さとか価値観とかは私にそっくりだけど、弱い者に優しいところとか、家族思いなところとかがほんとうちの旦那様によく似てるわぁ。今も優しいけど、当時の旦那様も優しかったのよお」

「そんなに？　でも、僕はそんなに言うほど優しくないよ？」

「誰かれ構わずってわけじゃないのよ。自分が大切に思う『人』にだけね。たとえ、それが自分のことを殺そうとする相手であったとしても、絶対に優しさを失わないの。あのときの旦那様の優しさがね、お母さんの胸にきゅんきゅん来ちゃったのよねえ」

昔を思い出しているのか、まるで恋する少女のように瞳を輝かせ、豊満な胸の前で両手を組んだ母親は顔を赤らめながらいやんいやんと身体をよじる。すると、いつの間にかリビングに来て一緒に片づけの手伝いをしていた父親が、なんともいえない苦笑を浮かべて母親に声をかける。

「いやいや、僕は連夜くんほどかわいくも優しくもなかったですよ。奥さん、おはようございます」

「あら、旦那様、おはようございます。でもね、旦那様。お言葉ですけど、あのとき旦那様が命をかけて私に示してくれた愛を、私は一生忘れませんわ。あの行動が正しかったとは今でも思いませんけ

ど、でも、それが私の胸を打ったのは間違いないですもの。ほんと、殺してしまわなくてよかった」

「え、ちょっと待って、お母さん？　今、さらっととんでもないこと言わなかった？」

うっとりと当時に想いを馳せる母親の独白を、片づけをしながら聞いていた連夜だったが、最後のほうに何か聞き捨てならない単語が入っていたような気がして思わず聞き返す。しかし、そんな連夜の言葉が聞こえていないのか、父親と母親はお互いを見つめて自分達の世界をすっかり作り上げてしまっていた。

「そうですね、本当に殺されなくてよかった。おかげで僕はこうして毎朝あなたを抱きしめることができますもの」

「あら、抱き締めるだけですか？　それではちっとも満足ではありませんわよ」

そう言って連夜の目の前で自然と当り前のように抱き合った二人は、見ていられないほど熱烈で強烈な口づけを交わす。

「ちょ！！　お父さんもお母さんも、思春期の息子の目の前でそういうことしないでくださいって、何度言えばわかるんですか、もう！！」

慌てて連夜が背を向けて抗議の悲鳴をあげると、父親とのおはようのキスを終えて満足した母親が、いたずらっぽい表情で息子の背中から抱きつく。

「あらやだ、レンちゃんもお母さんと朝のキッスする？」

「謹んでご遠慮させていただきます。それよりもお母さん、早くご飯食べちゃってください。早朝会議があるならゆっくりしていられないでしょ？」

拒否されることは予想していたが、あまりにも息子の返事がそっけなくて、少なからず傷ついた表情を浮かべる母親。そんな母親を父親がよしよしと慰めて、ダイニングテーブルへ座らせる。母親の座った対面の席では、味噌汁に手をつけていたスカサハが、サンマをめぐって兄とちょっとした問答を繰り広げている。

「そういえば私の分のサンマはどうしたんですか？　確か大治郎兄様が食べてしまってなかったはず。ひょっとして、これはお兄様の分ではないですか」

「ううん、僕はお父さんが作ってくれていたサンドイッチの材料のあまりものとかつまんでいたからそれほどお腹すいてないんだよね。それよりも、スカサハは今日は午前中体育の授業がある日でしょ、食べておかないと」

「お兄様・・」

上のガサツな二人と違い、細やかな配慮を忘れない連夜のことが大好きでたまらないスカサハは、結局素直に連夜の言うことを聞いてサンマをもらって食べるのだった。

「ほんと、レンちゃんとスゥちゃんは仲がいいわね。なんか、二人を見ていると昔のお父さんとお母さんを見ているみたいで不思議な気分になるわ」

父親に淹れてもらったコーヒーを飲みながら、どこか懐かしそうに二人を見つめる母親。

「そうですね、連夜くんとスカサハくんは、本当に若い頃の僕達にそっくりだから」

「やっぱりそうなんだ。スカサハがお母さんに似ているのは見ただけでわかるけど、そうかあ、僕もやっぱりお父さんに似ているのか」

「ええ、似ていると思いますわ。ね、さくら」

「はい、ですニャン。大旦那様と若様、奥様と姫様は本当によく似ていらっしゃいます」

力強く頷いて断言するさくらの言葉に、両親と連夜、スカサハは互いに顔を見合わせなんともいえない優しい笑顔を浮かべあう。すると、それを横で見ていた大治郎とミネルヴァが非常に嫌そうな表情を浮かべて両親に食ってかかる。

「どうせ、私はお父さんにもお母さんにも似てませんよ～だ。お母さんほど胸も大きくないし、お父さんみたいに家事全般できるわけじゃないしね～。あ～あ、仲間外れは悲しいなあ～」

「おまえはまだいいではないか、曲がりなりにも『人』の姿をしておるのだ。俺なぞ頭がライオンだぞ。パパ上にもママ上にも似るはずがないではないか」

「あら、何いってるのよ。ダイちゃんも、み～ちゃんも姿形こそ似てはいないけど、ちゃんと私と旦那様の特徴をそれぞれ持ってるじゃない。ダイちゃんは旦那様譲りの剣の才能と私譲りの身体能力、

み～ちゃんは私譲りの統率力と旦那様譲りのあらゆる方面に通じる多彩な才能」

「そうだよ。ダイ兄さんやみ～ちゃんはお父さんやお母さんからそういうすごいものを譲り受けているじゃない。表面だけ似ているだけの僕なんかとは違う。兄さん達が持っているものは僕がいくら望んでも手に入れることはできないものなのに・・」

自分の言葉にどんどん落ち込んでいく連夜の姿を見て、大治郎とミネルヴァは慌てて立ち上がると、小さな自分達の弟に駆け寄ってその身体を抱きしめる。

「あああ、連夜、わかった。悪かった!!　ちょっと家族の輪に入れなくて面白くなかっただけなのだ!!」

「ごめんね、ごめんね。これ以上望むのはわがままだよね。お願いだから、そんなに落ち込まないで。ね、ね」

「あ、うん、いいんだ。大丈夫だよ。でも、お父さんやお母さんは、決してダイ兄さんやみ～ちゃんのことをないがしろにしてはいないし、僕やスカサハも二人のことを仲間外れにする気はないってことはわかってね」

兄と姉に抱きしめられてくすぐったそうに笑顔を浮かべた連夜は、それぞれに真摯な瞳を向けてそう断言する。すると、大治郎とミネルヴァもまた真剣な表情でうなずき返すのだった。

「わかってるって、おまえが俺のことを邪険にするはずがないってことはそれはもう、よ～く承知しているさ」

「うんうん、連夜だけは絶対私のこと裏切らないって知ってるし信じているわよ。これっぽちも疑ったことはないわよ」

「いや、そう言ってもらえるのは嬉しいけど・・二人とも、なんで僕限定で信じているのさ」

ジト目で連夜が問いかけると、二人はわざとらしく目を背けて口笛を吹いてみたりしてあからさまに誤魔化そうとする。

「ほんとにもう・・」

「連夜くん、大丈夫だよ。なんだかんだいってもうちの長男と長女は優秀だからね、口ではそう言ってもちゃんと家族の絆を信じているよ」

「そうなの？」

「そりゃそうだよ。だって、君のお兄ちゃんとお姉ちゃんだよ」

父親の言葉を聞いた連夜は、もう一度振り返って全く邪気のないきらきらした視線で大治郎とミネルヴァを見つめる。すると、何故か大治郎とミネルヴァは物凄く気まずそうな表情で顔をささっと背けるのだった。

「いや、そんなくもりのない瞳で見つめないでくれ連夜。なんか汚れた自分を再確認させられているようで辛い」

「そ、そうね。自分があんまりいいお姉ちゃんじゃないって自覚しているだけに、かなりきついわね」

「あ、一応お二人とも自分達が出来のいい兄と姉ではないって自覚してはいたんですのね」

「よかったですわね、姫様」

「「おまえらが言うな！！」」

再び睨みあう兄姉同盟軍と、スカサハ率いる猫メイド帝国軍。今のところお互い威嚇するように獰猛な唸り声を出すだけだが、またいつ大戦争が勃発するとも限らない一触即発の状態。しかし、それを見ていた母親はころころと笑い声をあげる。

「みんな、仲がいいわね」

「お母さん、笑ってないで止めてよ！！」

「無理無理。だって、みんな私の子供だもん。血の気が多いのは私譲りなのよ。ぶつかりあって傷つけあって、互いの魂を確認するの。牙が折れていないか、闘志の炎は消えていないか、今日の次に進む気力は十分にあるか。幾千幾万の言葉よりも、己の魂をかけた拳の一撃のほうが重い。私達はそういう生き物だもの」

「極端すぎるでしょ！？　たかが兄姉妹喧嘩で魂かけないでよ！！　僕にはそういう考え方わからないし、一般的じゃないと思うんだけど！？」

「どちらかといえばあなたが異端なのよ、レンちゃん。いや、一般家庭じゃなくて、我が家の場合ね。ほんと今でも不思議なのよ。半分は旦那様の血を引いているとはいえ、血の一滴まで戦士の魂みたいな暴れ者の私の身体からあなたみたいな優しい子どもが生まれて

くるなんてね。だからね・・」

コーヒーカップをテーブルの上に置いてそっと立ち上がった母親は、連夜の側に近寄るとその身体を引き寄せてそっと抱きしめる。

「だからこそみんなレンちゃんが大事なの。どんな荒々しい魂であってもそうやって恐れることなく近づいて、手を差し伸べて、黙って側にいてくれるそんなあなたが、みんな大好きなのよ。恐らくあなたは戦士達が帰る場所そのものなの。ダイちゃんにとっても、み～ちゃんにとっても、スゥちゃんにとってもね。多分、これから先の『人』生で、あなたはいろいろな『人』に出会うでしょう。そしてね、その出会った『人』達の中であなたに共感を覚えた『人』達はあなたをその帰るべき場所に定めていくんだわ、きっと。まあ、それにあなたが応えるかどうかはあなた次第なわけだけど。ふふふ、この先レンちゃんの『人』生にはどんな出会いがまっているのかしらね？」

「お母さんお願いだから、波瀾万丈な『人』生が待っているみたいな言い方しないで。お母さんが言うと、本当にそうなりそうだから怖いんだけど」

「あはは、ごめんごめん。でもね、きっと大丈夫よ。さっきも言ったけど、『人』が安息を得る星降る夜のように静かな、だけど温かい優しさを持つあなたに共感を覚えて集まってくる『人』達がきっとレンちゃんの力になってくれるから」

「いや、なってくれるのはいいんだけど、結局波乱には巻き込まれるんでしょ？　僕としてはできるだけ普通で穏やかな『人』生が送りたいんだけど」

「それも無理。だって、あなたは私の息子だもん。きゃ～、ほんとレンちゃんかわいい！！」

「わわわっ、お母さん、痛い、苦しい、力いれすぎです！！」

豊満な自分の胸に連夜の顔を押し付けるようにしてぎゅ～～っと抱きしめた母親は、少女のようにはしゃぎながら連夜の頭をなぜまくる。母親の胸は柔らかくて気持ちいいものの、締め付けてくる力が尋常ではないので、プラスマイナスで考えると圧倒的にマイナス部分が大きい。せっかく母親がその溢れる愛情で抱きしめてくれているので、もうしばらくやりたいようにさせてあげたかったが、このままでは自分の身体が壊れてしまいかねないので、遺憾ながら連夜は両腕をジタバタさせて母親の万力のような腕を振り切ると、かろうじて脱出することに成功したのだった。

「もう～、何よ、レンちゃんたら。もうちょっとかわいいかわいいしたかったのにい」

「かわいいかわいいはもういいですから、早くご飯食べちゃってください。さっきからコーヒーしか飲んでいないじゃないですか。ダメですよ、ちゃんと朝食食べないと。食べずに出勤するなんてダメですからね」

「ぐすん、レンちゃんに怒られちゃいました」

「よしよし。じゃあ、これ以上怒られないように僕と一緒に朝ご飯食べましょうね」

「旦那様、食べさせて」

「はいはい」

またもや二人の世界を作り上げて入り込んでしまったバカップル夫婦の姿を、なんともいえない微妙な表情で見つめていた連夜は、はあ～っと疲れた吐息を吐きだす。そして、ぱんぱんと手を打つと、まだ睨みあっている兄姉妹達に声をかける。

「みなさ～ん、そろそろお開きにしてくださいね～。今度こそ本当に怒りますよ～」

『は～い、わかりました～』

連夜が拍子ぬけするほど、あっさりと剥き出しの闘気を霧散させ、兄姉妹達はぞろぞろと再び自分達のテーブルについて何事もなかったかのように朝食をとりはじめる。

「お願いだから最初からそうしてよね～、もう」

がっくりと肩を落として嘆息する連夜であったが、すぐに気を取り直して兄姉妹と中学生猫メイド達の給仕を再開する。テーブルに座っている面々のほとんどがみな食べざかりの育ち盛りということで、次々とご飯やみそ汁のおかわりの催促が飛ぶ。しかし、それらを見事な手際でてきぱきと連夜は処理していき、ある程度テーブルの様子が落ち着いてきたところで、途中から連夜の手伝いに参加した父親専属メイドのかえでといちょうに後を任し、一旦自分の部屋がある二階にあがっていく。

そして、それほど時間を置かず再び二階からバタバタと戻ってきた連夜。何やらやたら大きなボストンバッグを二つ両肩に担ぐようにしてよろよろとよろめきながら歩いて来て、先に食事を終えてリビングに移動していた兄、大治郎のもとへと赴くのだった。

ふと何気なくその様子を見ていたスカサハとさくらは、連夜が纏っている雰囲気、その周囲の空気が若干変わっているような気がして顔を見合わせる。

「い、今、連夜お兄様怒っていらっしゃるような顔していらっしゃらなかった？」

「いえ、お顔そのものは変わらぬと存じませぬが・・オーラが少しそういう感じだったような気がしますニャン」

二人ともはっきりとそうだと断言できるわけではない。しかし、他の兄姉以上に二つ年上の兄と過ごす時間が多い二人には、敏感に察するところがあった。二人は何かがあると無言で頷きあうと、お行儀が悪いと思いつつも素早く朝食を口の中に放り込み始めるのだった。

第一話　『宿難家の朝』　その6

「ダイ兄さん、ちょっといいかな？」

「なんだ？　連夜」

キッチンから南に位置するリビングにあるソファで新聞を広げている兄に声をかけた連夜は、ボストンバッグらしきものを二つ両肩に担いでぱたぱたと兄の側に近づいて行く。大治郎は連夜が担いで来た物を流し見しそうになったが、何かに気がついて怪訝な表情になる。しかし、そんな兄に気づいているのかいないのか、表面上は何事もなかったかのように兄の側までやってきた連夜は、兄が座るソファの前にある小さなテーブルの上に二つのうちの一つを下ろし、もう一つは兄の足元に下ろす。

大治郎は連夜が持ってきた片方のボストンバッグを見て、どこかで見たようなと首をひねってみせるが、やはり連夜はそれに気がついた様子もなく、テーブルの上に置いたほうのバッグに手を伸ばすと一気にそのジッパーを開いて中に入っているものを大治郎に見せる。

「これ、渡しておくね」

「む、これは」

「畑で採れた薬草をお父さんに手伝ってもらって調合しておいたの。兄さんに説明は必要ないかもしれないけど、一応バッグの中身の説明しておくね」

そういって連夜はボストンバッグの中から手のひらに乗るくらい

の小さな薬瓶を次々と取り出し、リビングのテーブルの上に大治郎に見えるように並べながらその薬瓶の内容を説明していく。

それらは全て、連夜自身が自ら調合した『飲み薬』の数々だった。『飲み薬』は危険な傭兵稼業では絶対欠かすことのできない大切な命綱。『異界』の力が全盛であった五百年前と違い、今は瞬時に己の傷を回復したり、病気を治したりする便利な魔法を使うことはできない。もし、そんなものを下手に使用しようものなら、危険極まりない『害獣』を呼びよせることになってしまうからだ。だからこそ、それらを呼び寄せることなく傷ついた体を回復させることができる『飲み薬』は欠かすことができない。魔法と比べればその効果は格段に落ちてしまうが、なによりも安全に自分自身を回復させることができる。

『飲み薬』は大きくわけて全部で三種類存在している。

傷を回復させることを目的に調合された『回復薬』。病気や麻痺、あるいは毒を解毒することを目的として調合された『治療薬』。疲労を取り除き精神力を回復させることを目的に調合された『快方薬』。

細かくいえば現在この世界には実に千差万別様々な『飲み薬』が存在しいるが、どの『飲み薬』も間違いなく前述にある三種類のいずれかに属している。各薬品会社が自分達のブランド名をつけているだけで、実際の内容は大して変わらなかたりするのだが。

今回連夜が用意したものは、市販で売られている物とは大きく違う。父親と連夜が独自に栽培している特殊な霊草や薬草を使用して作成され、市販のものよりも格段に優れた効能を誇る『飲み薬』ばかりである。ただの『回復薬』一つとっても、普通に傷を治すだけの市販のものとは違い、軽傷であれば傷跡まで完璧に消してみせる効能を持っている。『回復薬』だけではない、『治療薬』だってそうだ。市販のものではカバーしきれない、かなりマイナーな種類の毒や病気にまで効果を持っているのだ。そんな連夜特製の『飲み薬』であるが、中でも特に際立って優れている薬が二つある。

「中身が白色に光ってる薬、これが『神秘薬（アメージングアクア）』。黒色に光っているこっちのが『特効薬（バイオセイバー）』。瓶が似ているから間違えないでね」

『神秘薬（アメージングアクア）』と『特効薬（バイオセイバー）』

『神秘薬（アメージングアクア）』は死にいたる重傷であったとしても瞬時にその傷を治すことを可能とする現在世界に存在している『回復薬』系の中でも間違いなく最高の効能を誇る『飲み薬』。さすがにちぎれた腕や足を元通りにしたりはできないし、重傷者がこの薬を飲むことができなければどうすることもできないのではあるが、それでも素晴らしい薬であることは間違いなかった。

そして、『特効薬（バイオセイバー）』は既存の病気や麻痺の毒の治療だけではなく重度の疫病や、石化でも瞬時に治すことができるという文字通の特効薬。勿論全部が全部治せるわけではないが、それでもこれ一本で、身体に異常をきたす症状のほとんどを治療できる。特にこの薬のすごいところは他の薬と違い飲まなくてもいいというところである。身体のどの部分でもいいからかけることができれば、瞬時に効果を発揮するのだ。

これだけ素晴らしい効能を誇る薬である。当たり前であるが他の薬の効能などほとんどこの二つだけでカバーできてしまう。であれば、この二つだけを大量に持って行けばいいじゃないかという話なのだが、そうはいかない大きな理由があるのである。

「ごめんね、兄さん。今回これ二本ずつしか作れなかったんだ。本当はもっと作りたいのだけど、材料が圧倒的に不足していてね。『神秘薬』を作る為に絶対に必要な『イドウィンのリンゴ』は物凄く栽培が難しくて、お父さんと僕とがんばって挑戦してみたんだけどほとんど枯れちゃってさ。『特効薬』を作るために必要な『神酒』は・・最近ほら、アルカディアとの交易が『害獣』のせいで断絶し

てるじゃない。『神酒』ってあそこの特産品だから、手に入らなくて・・なんとか一本分だけ確保したんだけど。二本ずつじゃあ、全然足りないよね、本当にごめんね」

心の底から申し訳ないという表情で半泣きになりながら大治郎に頭を下げる連夜。そんな出来すぎた弟に、大治郎は無言で首を横に振る。

「連夜、十分だ。十分すぎるほどだ。いつも苦労かけてすまんな、ありがとう」

いつも傷だらけで帰ってくる自分を心配して、恐らく寝る間もおしんで作ってくれたに違いない。そう思うと不覚にも目頭が熱くなってしまって、これ以上何も言えなくなってしまう大治郎だった。そんな大治郎の心境を知ってか知らずか、出した薬瓶を再び丁寧にボストンバッグになおし、連夜は大治郎が座るソファの横にそっと置く。

「僕、これくらいしかできないけど・・なるべく気をつけていってきてね」

「連夜」

本当に真剣に自分のことを心配してくれる家族がいるというものが、どれだけ大事で大切かということをあらためて噛みしめながら自分の真横に置かれたボストンバッグを万感の思いで見つめる大治郎。最愛の弟の真心があまりにも嬉しく、不覚にも涙がこぼれそうになる。感謝の言葉を口しようとしても、溢れ出る思いが多すぎて逆にそれは言葉にならず、また抱きしめようとして動けば涙が堪え切れなくなるのでそれもできず、ただただ大治郎は連夜の小さな体

を見つめ続ける。
　しかし、やはり感謝の言葉を何一つ言わないまま終わるなどあってはならない。大治郎は目頭を押さえて無理矢理涙をひっこめると、目の前にいる最愛の弟に感謝の言葉を告げようと口を開きかけた。と、そのとき。
　絶妙なタイミングで先に連夜が先に大治郎に声をかける。

「ところで兄さん、ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「む。あ、ああ、いいともいいともなんでも聞いてくれ」

　機先を制されてしまった大治郎であったが、咳払いをしてすぐに気を取り直すと目の前に座る弟に鷹揚に頷いて見せる。大治郎の許可を確認した連夜は、大治郎の足元に置いていたもう一つのボストンバッグを重そうに持ちあげてテーブルの上にどすんと置く。ここころなしか、弟の笑顔が引きつっているような、どこか怒っているような気がするのは気のせいであろうか？
　急激な弟の変化は、今持ってきた目の前の大きなボストンバッグが原因になっていると察し、そのボストンバッグがなんだったのか思いだそうとする。幸いにも、ほどなくしてそのボストンバッグの正体に気がつくことができた。それは、大治郎が大学時代に使っていたバッグであった。大学の剣術部に所属していた大治郎は、部で使う武具を運ぶためにこの大きなバッグを使用していたわけだが、傭兵旅団に所属してからは使っておらず確か今はベッドの下に片づけておいたはずであるが。

「ダイ兄さんに聞きたいのは、これについてなんだけど・・これはいったいなんなのかな？」

顔はあくまでもにこやかで、その口調も非常に柔らかであるが、その背後から発せられているオーラは尋常ではないプレッシャーを大治郎に与えてくる。今まで数々の恐ろしい『害獣』を相手にしてきた歴戦の戦士である大治郎であるが、目の前の小さな弟から放たれるこのプレッシャーは、どの『害獣』からも感じたことのない凄まじい恐怖を否応なく大治郎に刻み込んでくる。いったいこれは何事かとだらだらと冷や汗を流しながらも、とりあえず弟の問いかけに答えなくてはと、強張りそうになる口を懸命に動かして答える。

「い、いや、何と言われても大学時代に使っていたボストンバッグだが、それが何か？」

「あのね兄さん。一応僕は目が見えないわけじゃないから、これがボストンバッグだっていうのはわかるよ。そうじゃなくて、このバッグの中身はなんなのかってことを聞いているの」

「な、中身？　い、いや、中身は入っていないはずだが・・」

「ふ～～ん。じゃあ、いまここで開けてみてもいいの？」

物凄く白い目で見つめてくる弟の姿にたじろぐ大治郎。その気配から非常に嫌な予感が体中を駆け巡ったが、どうしてもその中身に思い至らず頷きかける。しかし、ふとあることに気がついて頷くのをやめ、慌てて目の前の連夜に逆に問いかける。

「ま、待て、連夜。おまえ、そのバッグをどこから持ってきた？」

「勿論、兄さんの部屋からに決まっているでしょ」

「お、お、俺の部屋？　俺の部屋だと！？　俺の部屋に入ったのか、

おまえ！？」

大治郎の問いかけにあっさりと頷く連夜。そんな連夜の答えを聞いて、大治郎は顔面を真っ青にしながら絶叫しながら、さらに問いかける。すると連夜はまたもやあっさりと頷きを返すのだった。

「入ったよ。兄さん昨日帰って来ていたくせに洗濯物全然出してないんだもん。あやうく兄さんのものだけ洗濯しないまま学校に行くところだったよ」

「せ、せ、洗濯物？　あ、ああ、洗濯物を取りに入っただけな」

「勿論、ベッドのシーツとかも洗濯に出しておいたけど」

「べべべべべべ、ベッドのシーツ！？」

連夜の答えが自分の予想と若干違っていたからなのか、大治郎は少しほっとした表情を浮かべたが、続いて発せられた連夜の言葉にまたもや顔色を青ざめさせて絶叫する。

「な、な、な、ななななっ！？」

「だって、物凄い汚れていたから洗わないと汚いじゃない。兄さん、昨日はお風呂にも入らずベッドで寝たんだね。お願いだからちゃんとお風呂に入ってから布団に入ってね。なんだかすっごいカピカピになっていたし。でもおかしいんだよね、一応、いつ兄さんが帰ってきてもいいように一週間に一度はシーツを洗濯していたんだけどなあ」

「れ、れ、れ、れれれれ、連夜、連夜くん、いや、連夜様」

「なに？　連夜『様』って、どうしたのさ、兄さん？」

身体を硬直させ、ゴーレムのようなぎこちない動作で語りかけてくる兄に、あからさまに不審そうな視線を向ける連夜。しかし、今の大治郎にはそんな連夜の視線には構っているような余裕は全くなく、全身から大量の汗をどばどば流しつつ声を詰まらせて目の前の弟に聞きたくないけど聞かざるを得ない質問をぶつける。

「べ、べ、ベッドで何か目撃されませんでしたか？」

「何かって何を？　別にベッドの上には何もなかったけど」

「い、いや、その・・何も見なかったのならいいんだ。ふ～～、そうか、何もなかったか」

連夜の言葉を聞いて、太い安堵の息を吐きだしながら、顔から出ている大量の汗を拭う大治郎。青ざめた表情に若干生気が戻ってきたように見えたが、しかし。

「ベッドの上には何もなかったんだけど、下にはこれがあったからさ。話を元に戻すけど、ダイ兄さん、これはいったいなに？」

再び白い目で兄を見つめる連夜。一瞬気を抜きかけた大治郎の背中に再び猛烈な嫌な予感が走り抜ける。

「な、な、なにと言われても、中身は何も入ってはいないは・・ず・・」

困惑した表情でそう呟きかけた大治郎であったが、目の前のボス

トンバッグの大きさを見てある可能性に気がつく。目の前のボストンバッグの大きさが、小柄な女性くらいであれば、足を折りたためば入れそうな大きさだなと。

その考えに思い至ったとき、大治郎の顔から血の気がざ～～っという音をたててひいていき、青から白へと変化する。

しばし、無言で見つめあう連夜と大治郎。しかし、それは対等の状態で対峙しているわけではない、明らかに蛇に睨まれた蛙、もしくは、旦那の浮気を見破った奥さんと夫の構図であった。どちらがどちらであるかは言うまでもない。

すると、キッチンで朝食を取っていたメンバー達が二人の様子に気がついて、何事かとリビングにやってくる。ミネルヴァやスカサハはもちろんのこと、さくらをはじめとする猫メイド達、それに仁とドナの両親に父親専属メイドのかえでにいちょう、他の場所で働いていた成人メイド達までもがどやどやと騒ぎながら集結してくる。

その様子を横目で見ていた大治郎は、いまや卒倒寸前になっていた。

「何よ、何よ、どうしちゃったのよ、ダイったら。顔が真っ白よ？　大丈夫？　いったい連夜と何があったのよ」

「な、なんでもない。なんでもないから、おまえらみんなもどれもどれ！！」

「まあ、ミネルヴァ姉様が珍しく心配してくださてっているというのに、その言種はあんまりじゃありませんか、ダイ兄様」

「そうだ、そうだ、もっと言ってやってよスカサハ。って、自覚しているけど、一応珍しくってつけないで、お願いだから」

「いいから、散れ！！　頼むから散ってくれ！！」

「あらあら、ダイちゃんたら反抗期なのかしら？　もうとっくに終わっていたと思ったけど。ねえ、旦那様」

「懐かしいですねえ。そういえばそういうこともありましたねえ」

「あああ、パパ上もママ上も、キッチンで遠慮なくらぶらぶしておいてください。お願いだからこっちに来ないでください！！」

周囲に群がってくる野次馬達をなんとか追い払おうとする大治郎であったが、全く効果はなく、むしろその騒ぎにつられて屋敷中の面々がどんどんリビングへと集まってきてしまう。

そして、家中の面々があらかたリビングに集結し終えた頃、完全に優位に立っているほうがゆっくりと動きだした。まるでカエルを呑みこもうとする蛇のように

「とりあえず、開けるね、兄さん」

小さくほっそりした手をテーブルの上に置いたボストンバッグのジッパーへと伸ばし、それを開けようとする連夜。そんな連夜に手を伸ばし大治郎はその動きをやめさせようとする。

「ま、ま、まままま、待て待て待て、連夜、頼む、待ってくれ！！」

「待てません。み～ちゃん、スカサハ、さくら、それにメイドのみなさん。ダイ兄さんを押さえつけておいてくれるかな？」

『ヤルッツェ　ブラッキン！！』

「ちょっと待て、おまえら！！　放せ、放さんかあああっ！！」

連夜の言葉に、いったいどこのロボット軍団だといわんばかりに整列して答えて見せた面々は、一斉に大治郎に飛びかかっていく。大治郎は襲いかかってきた襲撃者達を撃退しようとしたがあまりにも多勢に無勢。あっというまに取り押さえられてミネルヴァ、スカサハ、さくら、そして大量の猫達の下敷きになって床へと沈められてしまった。

その様子を面白くもなさそうに確認した連夜は、す～～っと手を動かしてボストンバッグのジッパーを開ける。そして、バッグの口を大きく開いて、全員によく見えるようにと一歩さがり、その後、周囲に集まっていた野次馬達はバッグの中を我先にと覗きこんだのであるが、その中を見た面々は一斉に顔を真っ赤にして両手で口を蔽い隠す。

全員、バッグの中身があまりにも突拍子もないものであったため、大いに驚いていたが、中でも目を限界まで見開いて驚き悲鳴にも似た絶叫をあげたのはさくらであった。

「し、し、しおん姉さま!?」

「え、えへへ、ば、ばれちゃった」

バッグの中からバツが悪そうな顔と声で現れたのは、黒いブラジャーとパンティだけという艶めかしい半裸姿の半獣人族の女性。

『ののやま　しおん』

『東方猫型小人（ねこまりも）』族の族長の長女で、さくらの実姉。直立した猫という姿が特徴的な一族の中にあって、唯一他の獣人族同様に『人』のシルエットをした猫という姿をしている。それは彼女が母方の血である『東方化け猫』族の血を引いているからであり、いわゆる先

祖返りした姿で生まれてきたからである。
　全身淡い紫色の獣毛に包まれているが、その獣毛の上からでもわかるなかなかのスタイルの持ち主。頭はもちろん猫のそれでアメジストのような瞳に、ぴんとたったひげ、肉食獣にしては小さめの口をしていて、スタイルだけでなく顔もなかなかの美形。身体的に劣る他の同族とは違い、非常に優秀な運動能力を持ち、一族の中で唯一ちゃんとした近接戦闘能力を有している。
　連夜達に救われてこちらに引越してきた当初は、妹のさくらと共にこの家のメイドとして働いていたのであるが、その戦闘能力を買われて大治郎のサポートを担当することになり、やがて、大治郎と共に傭兵になる道を選んだのであるが。

「お、お、御姉さまは、そんなところで何をしているのですかニャン！？　っていうか、帰っていらしたのなら、帰っていらしていると仰ってくだされば・・」

「い、いやあの、そうしようかなとも思ったんだけど、その、そうできない理由があってというか、なんというか、その」

　妹の問いかけに対し、なんとも恥ずかしそうな表情で両手をつんつんとつつき合わせて顔を俯かせたしおんは、ちらちらと抑え込まれている大治郎のほうに視線を走らせながらごにょごにょと言い訳になっていない言い訳を口にする。すると、二人のやりとりを聞いていた面々は一斉に大治郎に視線を向ける。向けられた大治郎は慌ててあさっての方向に視線を向け、冷汗を大量に流しながらわざとらしく口笛を吹いてみたりなんかしているではないか。自分に都合の悪いことを誤魔化そうとしているのは誰が見ても明白であった。
　そんな兄の様子をなんとも言えない表情で見つめていた連夜は、片手で顔を覆って溜息をひとつ吐き出すと、あらかじめ持って来ていた白いガウンを後ろから近づいてしおんの身体に着せてやる。

するとしおんは、最初自分にガウンを着せてくれた『人』物が誰であるかわからずきょとんとした表情を浮かべて見せていたが、それが連夜だとすぐにわかりなんともいえない罪悪感でいっぱいといった悲しそうな表情になる。

「ご、ごめんなさい若様、私は、あの、その、大治郎様と・・」

何かを言わなくてはいければというような表情で言葉にならない想いを懸命に言葉にしようとするしおん。そんなしおんの口に、連夜はそっと自分の人差し指を持って行って黙らせると優しい顔で首を横に振ってみせる。

「とりあえず、込み入ったお話はまた夕方に改めて。そのときにしおんさんが話したい、話してもいいと思うことだけを話してくだされればいいです。それよりも、しおんさん、おかえりなさい。できれば東方野伏風(ニンジャ)じゃなく普通に帰ってきてほしかったですけどね」

そう言っていたずらっぽい笑顔を浮かべた連夜は、しおんの身体をぎゅっと抱きしめてぽんぽんとその背中を優しく叩く連夜。すると、しおんは連夜の肩に顔を埋め、ぼそぼそと小さい声で『ただいまかえりました』とだけ呟いて身体を小さく震わせるのだった。

そんなしおんの様子をしばらく優しい表情で見つめて抱きしめていた連夜だったが、再び絶対零度の仮面を張り付けると抑え込まれている大治郎にその氷の視線を向ける。

「で？　兄さんは、いつになったら僕の質問に答えてくれるの？」

聞いただけで凍りつきそうな声音で尋ねられた大治郎は、思わず小動物のように全身を震わせて再び全身から滝のように汗を流し始める。それは戦場での豪胆な彼からは考えられない姿で、それを知

る屋敷の面々は意外そうな顔を隠そうともせずにまじまじと彼を見つめるのだった。

「い、い、いや、どういうことと言っても、しおんが勝手に俺について帰ってきたうえに自分の部屋に帰らず俺の部屋に押しかけてきたからで・・」

「そんなこと聞いていないでしょ?」

必死になって言い訳しようとする大治郎であったが、その言いわけを途中でぴしゃりと遮って、連夜が物凄く怒った表情で兄を睨みつける。大して大きな声で叫んだわけではない連夜の怒声に大治郎は縮み上がって怯えた表情で弟を見返すが、弟の問いかけの意味がわかってないのか、そのまま固まってしまい無言になってしまうのだった。

そんな兄の姿を見て完全に呆れた表情になってやれやれと首を横にふった連夜は、物わかりの悪い小さな子に言い聞かせるようにゆっくりと口を開くのだった。

「あのね、兄さん。僕が聞きたいのは、しおんさんが何故咄嗟にギリギリ入れるか入れないかの狭いボストンバッグに身を隠さなくてはならなかったかってことだよ。ここはしおんさんの家同然の場所だよ? 妹のさくらだっている、親友のかえでさんやいちょうさんもいる、他にも同族のみんながいるんだよ? それどころかしおんさんがメイドの時に使っていた部屋だってそのままにしてあるし、別に普通に堂々と玄関から帰ってきても何の問題もないんだよ? それが何故、兄さんの部屋で、しかも兄さんのベッド下にあった今は使ってなくて埃まみれのボストンバッグに身を隠さなくてはならなかったかってことだよ? さあ、これはいったいどういうことなんだろうね?」

怒ったような責めるような口調で話す連夜の言葉を黙って聞いていた大治郎であるが、やはり全然意味が理解できていないのか、ぽか～んとアホのように口を開けて連夜を見返すだけでうんともすんとも答えようとしない。その兄の様子を見て『はあ～～』っとため息を吐きだした連夜は、ダメだこりゃという顔で兄から視線を外すと、兄に向けていた白い視線とは全く違う、いつもの優しさ溢れる目でしおんのほうに視線を向ける。そのあと困惑しているしおんのその手を取ってそっとその身体を立ちあがらせると、周囲にいるメイド達に視線を向け、何かを探すような様子でさくらのほうに視線を向けかけたが、すぐに視線を移動させて父親の後ろに控える双子のメイド達に声をかける。

「とりあえず、しおんさんはお風呂に入ってきてください。どれくらいボストンバッグに隠れていらっしゃったのかしりませんけど、せっかくの奇麗な毛並みがすっかり埃まみれです。さくら・・は学校があるから駄目だね。じゃあ、かえでさんと、いちょうさん。すいませんけど、ちょっとしおんさんに着替えとか用意してあげてもらえますか？」

「「承知いたしました」」

「さあさあ、久しぶりにうちに帰ってきたというのに『東方野伏（ニンジャ）』の真似ごとは大変だったでしょ。とりあえず、ゆっくりお風呂に入って、そのあと朝ごはんを食べてください」

「いや、あの、若様、私は・・」

「いいからいいから。とりあえず、ややこしいことは後回しにしましょう。いいですよね、お父さん、お母さん・・あ～、ついでにダ

イ兄さんも」

最後のところで絶対零度の声音になっていたりしたが、連夜の言葉に両親は苦笑を浮かべて頷いてみせ、大治郎はなんともいえない苦渋に満ちた表情で頷きを返す。そんな連夜の気遣いに感激したしおんはくすんくすんと泣きだしてしまうのだった。そんなしおんを見て優しくほほ笑んだ連夜は、近づいてきたかえでといちょうにしおんを任し、バスルームへと連れて行かせる。

ゆっくりと去っていくしおんの後ろ姿をしばらく優しい瞳で見つめていた連夜だったが、再び視線を兄のほうに向けたときには、またもや絶対零度の白い目に変わってしまっていた。

「兄さん。兄さんは僕よりもずっと大人だし、すでに独り立ちしているも同然だから、どんな恋愛をしようとも一向にかまわないと思う。『人』を愛することと言ってもいろいろな形があると思うからね。うちのお父さんやお母さんのように運命の『人』はお互いだけっていう『人』もいれば、複数の女性、あるいは男性と付き合ったり、伴侶にしたりっていう形もあるだろう。その形によって真実の愛があるとかないとかなんてことは言わないよ。婚約者のラヴレスさんとそのまま結婚しようとも、旅団秘書のセリーヌさんと大人の恋愛を続けようとも・・ましてや、自分の専属メイドと深い仲になっていたとしても、ああ、僕は何も言わないよ」

「！！」

『え、えええええええええっ！？』

その場に居合わせて連夜の衝撃的な言葉の内容を理解した面々はみな一様に驚愕する。大治郎は今にも死にそうな土気色の表情となって絶句してしまうし、横で連夜の言葉を聞いていたこの家の面々

はたまらず絶叫の声をあげるのだった。
しかし、驚愕に目を見張っている『人』々をその鋭い視線ですぐに黙らせた連夜は、絶句している兄に視線をもどし言葉を続けていく。

「でもね、その専属メイドさんが『自分の主に恥をかかせてはいけない。自分との関係をいずれ正妻になられる婚約者の方に知られるわけにはいかない。自分は日陰の身分でいい』なんて思い悩んでこそこそと関係を続けなくてはならなくて、ましてや自分の知り合いにも知られないようにボストンバッグに隠れて東方野伏（ニンジャ）の真似事までしなくてはならない恋愛をさせてしまっているのだとしたら僕は絶対に許さないんだけど。仮にも僕の尊敬する兄さんがそんな恋愛をしているなんて・・ましてや、今僕に指摘されるまで全然気がつかなかったなんて、絶対にないよね？」

まるで菩薩のような輝くばかりの笑顔を浮かべて兄　大治郎を見つめる連夜。しかし、その瞳は全く笑っていなかった。笑ってないどころかその視線を見ただけで軽く十回は殺されそうなほど物騒な光が放たれていた。
いや、物騒な光を放っていたのは連夜だけではない。連夜の言葉を聞いていた周囲の女性陣から、とてつもなく巨大な殺意の波動が大治郎へと放たれ続ける。特に凄まじい光を放っているのはしおんの実の妹さくら、その親友のスカサハ、しおんと同級生のミネルヴァ、そして、それら全てのオーラよりも尚、大きな波動を放っていたのは・・

「ダイちゃ～ん。ちょっとお母さんとあっちでお話しましょうか」

「ま、まままま、ママ上！？」

いつのまにかすると音もなく近寄ってきた母親が大治郎の前に立ち、妖しい笑みを浮かべて眼下の息子を睨みつけるようにして見つめる。そこには底冷えのするような冷たい光が宿っていて、それをまともに見ることになった大治郎はたまらず悲鳴をあげる。

「まままま、待ってください、ママ上!?　ママ上にお話ししなくてはならないことは、な、な、何もございませんし、あの、その・・そ、そうだ!!　ママ上は本日早朝会議があるのでしたよね?い、急いで出かける準備をしなくてはいけないのではないですか!?」

「あらあら、確かに今日は早朝会議がある日だったわね〜。でも、心配しなくても全然大丈夫よ。いざというときに私の代行指揮権を詩織に与えているし、必要なことはみんな私の専属秘書の美咲が心得ているはずなの。うちのブレーンはみな優秀だから、私がいなくてもちゃんとやっていけるのよ〜。それに家族の一大事だってときに、早朝会議になんかのんびり出ていられないもの〜」

必死になって逃れる術はないものかと思いついたことを口にしてみる大治郎であったが、それを聞いていた母親は怖いくらいに優しい笑顔を浮かべて大治郎が出した提案をあっさりと踏みつぶす。そして、大治郎を抑えつけているミネルヴァ達に、同性から見ても実に魅力的なウィンクを一つして合図を送って拘束を解かせる。大治郎は自分の身体から重石が消え、身体に自由が戻ってきたことを知ってほっとした表情でやれやれと身体を立ち上がらせようとするが、次の瞬間、何かが大治郎屈強で大柄な体に巻きついて再び身体を拘束。しかも今度は妹達や、猫メイド達にのしかかられていたとき以上に身体の自由が利かないほどがっちりと締め付けられてしまっているではないか。

改めて自分の身体を拘束しているものに視線を向けた大治郎は、

絶望の色を瞳に浮かび上がらせる。その視線の先に映るのはテラテラと美しくも妖しい銀色の光りを放つ鱗。その鱗が表面をびっしりと覆う丸太ほどの太さがあるロープのようなものは、大治郎の身体をぐるぐる巻きにして拘束している。眼を動かして自分を拘束しているロープの先はを辿っていった大治郎は、それが母親のスカートの中へと続いていることを確認して何とも言えない恐怖のうめき声をあげる。

「さあ、ダイちゃん、あっちでゆっくりお話しましょうね」

「う、うあああああ！！　ま、ママ上お許しくだされ！！」

上半身が『人』、下半身が『大蛇』という半人半蛇の姿になった母親にずりずりと引きずられて、大治郎はこの屋敷の最深部にある部屋へと連れていかれてしまった。子供達から通称『お母さんのお説教部屋』として知られている恐怖の部屋に。

泣き叫び助けを求め続ける声が徐々に遠ざかって行くのを見送っていた一同は、それが聞こえなくなるとなんともいえない溜息を一斉に吐き出すのだった。

「やれやれ、自然界に住むライオンのオスはハーレムを構築するものですが、大治郎くんにもそういう習性があったとは」

何とも言えない困り果てた表情で両腕を組み俯いてしまう父親。しかし、すぐに顔をあげて苦笑を浮かべてみせると子供達に視線を受けて口を開く。

「とりあえず僕も行ってきます。どうも、ドナさん感情的になっているみたいですから、冷静に話し合いができているか非常に怪しいですからねえ。それに全く味方がいないのは大治郎くんがかわいそ

うすぎますからね」

やれやれといった風に肩をすくめてみせる父親。しかし、連夜以外の子供達はあまりいい顔をしない。

「お父さんはダイに甘すぎるよ。あいつ、一回徹底的にガツンとお母さんにやられたほうがいいと思う」

「残念ながら、私もミネルヴァお姉さまと同意見ですわ。ダイお兄様は女性をなんだと思っているのでしょう。馬鹿にしています！！」

と、ぷりぷりと怒りをあらわにし、彼女達の周囲にいる猫メイド達も一斉にそうだそうだと頷きを返す。そんな自分の娘をはじめとする年若い女性達の反応に、父親はますます苦笑を深めていくのだった。

「まあ、とりあえず、今のところは連夜くんの推理だけで何一つ真実ははっきりしていないから。しおんくんや大治郎くん双方の話を全て聞いた上で判断しましょう。物事にはいろいろな見方がありますからね。一方向からだけみて物事を判断するのはあまりよくないことですから。さて、それじゃあ僕も奥の部屋に行ってきますね。お見送りできませんが、みなさん、くれぐれも気をつけて学校にいってらっしゃい。あと、学校に行かないみなさんは自分のお仕事に戻ってくださいね」

穏やかでやんわりとした口調でそういって微笑みを浮かべた父親は、ぱんぱんと手を打って集まって来ていた成人メイド達を解散させ、その後妻と長男が消えた奥の部屋にのんびり歩いて行った。

連夜達はしばらくの間、なんともいえない空気が流れるリビングで黙りこんでいたが、ふとあることに気がついたスカサハが連夜に

声をかける。

「そういえばお兄様は、どうしてしおんさんがご帰宅されていたことにお気づきになられたのですか？」

完全に不意打ちだった為、その質問に対し全然心の準備ができていなかった連夜は一瞬にして顔を紅潮させる。

「い、い、いや、それはその・・」

「そうですニャン。私達ですら気がつかなかったお姉さまのご帰宅がどうしてわかったのですかニャン！？」

スカサハばかりではなく、さくらをはじめとする中学生猫メイド達も興味津津といった風に連夜に詰め寄ってくるが、質問をぶつけられた連夜はしばし、ぱくぱくと口を開け閉めするだけですぐに説明しようとはしなかったが、やがて、顔を真っ赤に染め俯きながらぼそぼそと答えだす。

「そ、その、昨日の夜中、猫の鳴き声が聞こえてきてね、耳を澄ますとどうもそれは兄さんの部屋からしいってことはわかって、近所の野良猫が迷い込んできたのかな程度に思っていたんだけど。なんだか、その声が普通の鳴き声とは違う、なんだか物凄い艶めかしい感じのする声だったから気になっていたんだけど、そのときは眠くて眠くて。朝になってから調べようと思ってそのまま寝ちゃったんだ。で、洗濯物を取りにいくついでに兄さんの部屋に入って猫が迷い込んでいないかちょっと探してみたら・・」

「しおん姉様が入ったボストンバッグがあったわけですニャン」

「うん」

「だ、ダイ兄様ったら、よりによって連夜お兄様のお部屋のすぐ隣でなんていうことを!?　は、破廉恥ですわ、助べえですわ、軽蔑しますわ!!」

『いや～ん』

幸か不幸かそろそろお年頃で、既に大人の関係についての知識が身についてしまっていたスカサハや、さくらをはじめとする中学生猫メイド達は、連夜の説明で昨日の夜、大治郎の部屋でいったい何があったのかを察し一斉に顔を赤らめる。

なんとも言えない表情で溜息を吐きだし、しばし苦笑というにはかなり苦すぎる笑みを浮かべて彼女達を見つめていた連夜であったが、ふと何気なく壁に掛けてある時計を見て顔色を変える。

「ま、まずい、もうこんな時間だ。みんな、急いで支度して。急がないと遅刻だよ!!」

「ひゃあっ、本当ですわ!!　さくら!!」

連夜の声にすぐにスカサハが反応し、横に立つさくらに視線を走らせる。すると、さくらはすぐにスカサハに頷きを返し、自分の後ろに整列している中学生猫メイド達に号令をかける。

「は、はい、姫様。みなさん、すぐに出発の準備をしますニャン!!」

『了解です!!』

「あ、みんな、お父さんとかえでさんといちょうさんが作ってくれたお弁当を忘れずに持ってね」

さくらの指示のあと、一斉に学校に行く準備をするためにバタバタと動きだした中学生猫メイド達。そんな彼女達に連夜は声をかけておいて、自分自身もエプロンを外して学校に行く準備をはじめる。

「洗い物はいかがいたしましょうニャン！？」

「さっき、かえでさんといちょうさんがやってくださるって仰ってくれたからお任せしましょう。ところでみ～ちゃんは、用意しなくて大丈夫なの？」

スカサハの準備を手伝いながら、自分も学校に行く準備をテキパキと進めているさくらが、リビングの中を簡単に片付けて目立つところだけささっと念動掃除機をかけている連夜に心配そうに声をかける。すると、連夜はさくらに優しく首を振ってみせて、自分達の準備を優先するように促す。そうして、あらかたリビングとキッチンが片付いたのを確認して、ソファに置いておいたカバンを持って出かけようとしたが、ふと、そのソファに座ってのんびりテレビを見ている姉の姿を見つけ、怪訝そうに声をかける。

声をかけられた姉　ミネルヴァは、連夜のほうに余裕の笑みを浮かべて見せ、パタパタと片手をふる。

「今日の授業はお昼からで～す。なので、みなさん、いってらっしゃいませ。あ～、大学生は気楽でいいわ～」

う～～んと両手を伸ばして、解放感いっぱいな姿を見せつけるミネルヴァをスカサハとさくらがなんとも言えない白い目で見つめるが、ミネルヴァは全然堪えた様子なく、わざと見せつけるようにソ

ファに寝転がってまたもやテレビに視線を向ける。スカサハとさくらは、呆れ果てたように吐息を同時に吐き出すと、隣に立つ連夜に声をかける。

「お兄様、ぐ～たらな『人』はほっておいて、さっさと出かけましょう」

「ですね、もう出発しないと本当に遅刻してしまいますニャン。若様、さ、参りましょう」

二人の妹達が焦ったように連夜に声をかけ、時計を見るように促す。しかし、連夜は何かが引っかかるのか首をかしげたまま考え込んでソファに寝転がる姉のほうを見つめている。そんな連夜の姿をちょっとの間見守っていたスカサハとさくらだったが、顔を見合せて頷きあうと同時に連夜の腕を両側から掴みその手を引っ張ってリビングから強引に連れ出していく。

連夜は一瞬戸惑った表情を浮かべて二人を見たが、すぐに表情を和らげると、すぐに自分の足で歩きだしリビングから外へと歩きだす。しかし、何かを思い出したのか、一瞬立ち止まって振り返った連夜は、リビングのソファでのんびり寝そべっているミネルヴァに声をかける。

「そう言えばみ～ちゃん、朝一番で追試がある日があるっていってなかったっけ？　確か、今日だったような気がするけど違ったの？」

「つい・・し？」

連夜の言葉にきょとんとして振り返ったミネルヴァであったが、連夜の放った言葉の意味が理解できるとそのふにゃけた顔が一瞬にして強張り青ざめる。

「わ、わ、わすれてたあああああああっ！！」

絶叫してソファから飛び上がったミネルヴァは、連夜達の横を弾丸のように走りぬけ自分の部屋がある二階へと向かっていく。そんなミネルヴァの後ろ姿を見送った三人は顔を見合わせ、苦笑を浮かべあうと今度こそ玄関に向かって走り出すのだった。

次回予告

非情な一族の元から抜け出し、都会の真ん中で孤独に生きる霊狐族の美女　如月（きさらぎ）　玉藻（たまも）。

灰色の世界の中、ただただ漠然と時だけが流れ、その流れに身を任せて流れて行くだけの生活を繰り返す玉藻。

そんな玉藻の前に一羽の鴉が舞い降りる。

城砦都市『嶺斬泊』最大の歓楽街『サードテンプル』周辺に出没する正体不明の怪人『祟鴉（たたりがらす）』。

『祟（たたり）』の一文字が刻まれし仮面を身に着け、玉藻の前に幾度となく姿を現す謎の人物。

闇夜から現れしその者は、果たして玉藻に福をもたらす優しい『聖鴉』か、それとも凶をもたらす『怪鳥』なのか。

次回

真・ここことは違うどこかの日常

過去（高校二年生編）

第二話『狐と鴉』

灰色の世界、蹴り砕け玉藻！！

玉藻：どうでもいいけど、なんでミネルヴァ（あんた）が予告ナレーションやってるのよ？

ミネルヴァ（以下ミネ）：いいじゃん、これくらい。私、本編じゃいまいち影薄いし。ところで前から気になっていたんだけど祟鴉（たたりがらす）の正体って誰なのよ？　玉藻、本当は知ってるんじゃないの？

玉藻：・・・えっ

ミネ：『えっ』って、何その間は。やっぱ知っているんでしょ？そうでしょ？

玉藻：・・・

ミネ：・・・

玉藻：じ、次回もお楽しみに！！

ミネ：めっちゃ、誤魔化した！？

第二話　お～ぷにんぐ

玉藻：連夜くん、連夜くん、あっそび～ましょ～。って、何してるの？　部屋の中、物で溢れかえっちゃってるけど？

連夜：箪笥やクローゼットの中を整理しようと思ったんですけど。いや、もう、全部出してから片づけようと思ったのが大失敗でして。出してみたのはいいのですが、予想をはるかに上回る物凄い量だったんですよねえ。

玉藻：ほんと、よくもまあこれだけ広げ散らかしたものねえ。ってか、この部屋の中にこれだけの物が眠っていたってことのほうが驚きだけど・・ともかく、片付けないと終わらないわね。私も手伝ってあげるね。

連夜：すいません、足もとに気をつけてくださいね。

玉藻：うん、大丈夫大丈夫。しかしまあ、いろいろなものがあるわねえ。

連夜：ええ、この部屋は僕が倉庫兼作業場として使っていた部屋ですからねえ。使わなくなった物とかいっぱい放り込んでいたんですねえ。

玉藻：あ、この子供服は連夜くんが小さい頃に着ていた服ね。あたしも見覚えがあるのがいくつかある。

連夜：そうですね、玉藻さんと最初に出会った頃に着ていた服とかもありますね。

玉藻：にしても、なんかどれもこれもボロボロね、まるで集団で殴られたり蹴られたりしてこうなったみたいな・・

連夜：あは、あははは（汗）　まあ、子供でしたからいろいろとやんちゃに遊びまわっていたので、そうなっちゃっただけですから。あ、あまり気にしないでください（汗）

玉藻：連夜くん。

連夜：は、はい。

玉藻：あとで詳しく説明するように。

連夜：えええええっ、は、はい・・（ど、どう言ってはぐらかそうかな）

玉藻：言っておくけど、肝心なところはぐらかしたら、許さないからね。

連夜：う、うひぃっ！！　（にゃあああ、よ、よまれてるぅぅぅぅっ！！）　と、ともかく、今は片づけに専念しましょう、そうしないといつまでたっても終わらないですし。ね！　ね！

玉藻：まあ、確かにそうね。わかったわ。

連夜：ふ～～～。とりあえず、玉藻さんは、そっちのほうお願いします。小学校や中学校の時に使っていた教科書とかノートとかなんですけど、もう使わないので、廃品回収に出そうと思います。それでまとめておいてもらっていいですか？

玉藻：おっけ。しかし、この小学校の教科書懐かしいわねえ。私も同じ教科書使っていたわあ。あら？　中学校の教科書は私が知っているのと違うわね。

連夜：ええ。僕、中学生の時は城砦都市『通転核』に住んでいましたから。

玉藻：そうなんだ。あれ？　でもミネルヴァはずっとこっちだったわよね？

連夜：両親と一部のメイドさん達、それに僕の数人だけが三年間向こうに行っていたんです。み～ちゃん達はこっちに住んでいました。

玉藻：お義母様の事情かしら？

連夜：両方ですね。お母さんの事情もあったし、お父さんの事情もありました。お父さんの仕事のほうで助手が必要だったので、兄弟姉妹の中で僕だけがついていくことになったんです。

玉藻：そっか～、そんなときからすでに連夜くんはお父さんの片腕だったのねえ。

連夜：えへへ、まあ、まだまだ修行中なんですけどね。

玉藻：で、それはともかく、私の注意をこっちに向けておいた隙に、そっちに隠したそれはいったいなんなのかしら？

連夜：！！（げげっ！！　バレてた！？）　・・い、いやいやいや、隠しただなんてそんな、大したものじゃありませんから、御気にな

さらないでくださいませませ。

玉藻：ふ～～ん、でもさ、一瞬しか見えなかったから確証はないんだけど・・それってアルバムよね？

連夜：ぐふっ！！

玉藻：うふっ！！　み～～、せ～～、て～～

連夜：あああああ、これだけわあ、これだけわあああああっ！！

真・ここは違うどこかの日常

過去（高校二年生編）

第二話『狐と鴉』

ＣＡＳＴ

如月（きさらぎ）　玉藻（たまも）

城砦都市『嶺斬泊』に住む、大学二年生。二十歳。
上級種族の一つである霊狐族の女性。金髪金眼で、素晴らしいナイスバディを誇るスーパー美女。
この物語のヒロインであると同時にヒーローでもある。

「あんたたちみたいなのはね、『狐（あたし）』に蹴られて地獄に落ちろ！！」

ミネルヴァ・スクナー

玉藻の幼馴染にして大親友。同じ大学に通う大学二年生。二十歳。
玉藻に匹敵する美女であるが、玉藻に比べるとややスレンダーで、モデル体型。
玉藻の初恋の相手の秘密を知っている。

「い、いやいや、本当なのよ。うん。か、かわいそうだけど、あの子のことはお願いだから諦めて。ね、ね」

ブエル・サタナドキア

玉藻やミネルヴァが通う都市立与厳大学の教授で、玉藻が敬愛してやまない『療術』の師匠。年齢不祥。『聖魔』族の中でもかなり上位に位置する種族の男性。
一族に虐げられていた玉藻を、後見人となることで救い出し、以後、影になり日向になって彼女を支えている。
『祟鴉（たたりがらす）』の正体を知る数少ない人物の一人。

「ズルしちゃいかんな、玉藻くん」

『崇鴉（たたりがらす）』

城砦都市『嶺斬泊』最大の歓楽街『サードテンプル』周辺に出没する謎の怪『人』。

全身を特殊な黒装束に身を包み、顔は『崇』の一文字がデカデカと書かれた白い仮面で隠しているため年齢、性別、種族、全てが一切不明。

事件のあるところに姿を現し、予測できない行動で場を掻き廻すため、「『サードテンプル』の『招かれざる乱入者（トリックスター）（スクランブル）』」と呼ばれて恐れられている。

『勅令！　【散布】！！』

玉藻：・・・（唖然）

連夜：・・・

玉藻：・・・（呆然）

連夜：・・・

玉藻：・・・え、マジで？　マジでそうなの？　ここに映っているの

って、本当に本人なの？

連夜：・・はい。

玉藻：『崇鴉（たたりがらす）』の正体を知った時も驚いたけど、こっちのほうがはるかに吃驚ドッキリだわ！！　えええええええっ、マジっすか、本気っすか、マジっすか、本気っすか！？　このかわいらしい小学生時代の連夜くんの横に立っているこれって、え、え、えええええっ！？

連夜：そうです。間違いなく現在うちの高校でナンバーワンスーパーアイドルとして君臨している彼女です。

玉藻：あんびり～～ばぼ～～～っ！！

連夜：玉藻さんにだけは見せないでくれって頼まれていたんだけどなあ。と、ともかく、本編いってみましょう。第二話『狐と鴉』です、どうぞ。

玉藻：こ、これが姫子ちゃんって・・絶対ありえな～～い！！

連夜：世の中とはそういうものです。

第二話　『狐と鴉』　その1

彼女はいつも思う。

朝目が覚めた時、ご飯を食べている時、学校に行く時、授業を受けている時、学校からの帰り道にある時、そして、眠りにつきその夢の中にある時ですら思うのだ。

自分のことを心の底から理解して側にいてくれる者はいないと。

彼女には祖父がいる、祖母もいる、父も母もいれば、普通の家庭以上に兄弟姉妹もいるし、親戚もいれば血の繋がった彼女に近しいもの達はたくさんいる。みんな病気一つせず元気に生きているし、なんの問題もないはずだった。

しかし、この世界に生を受けてから二十年という月日の間のほとんどを彼女は孤独に過ごしてきた。

彼女が生まれた家は特殊な丸薬作りの大家であり、そこに住む人々の価値観は実に世間から大きく外れたものであった。その家の頂点に立つ一部の長老達にとってこの家に生きる大人達は丸薬を作るための大事な機械の一部であり、その家に生まれてきた子供達はいずれその大事な機械になる部品。

そこで生きる者達のほとんどが『人』として扱われることがない。生まれてきたそのときから、機械として生きることを徹底して教育され、物心がつく頃にはそれが当たり前になってしまう。

だが、幸か不幸か、彼女にはその洗脳が全く通用しなかった。

長年そうやって子供達を調教してきた一族の特殊教育係がどれだけ手を尽くそうとも、彼女だけは頑としてその洗脳を受け付けなかったのだ。特殊な軍隊に所属し、そういった精神操作に対抗する訓練を受けてきた歴戦の戦士ならともかく、生まれてまもない子供にまったくその精神操作術、洗脳術が通じないのである。

やがて、彼女のことを知った一族の長老達が、一族に伝わる記録を調べた結果、彼女が何百年に一人生まれてくるか否かの非常に強

力な力を持った稀な存在であることを突き止める。本来であれば洗脳できない子供など秘密裏に処理されてしまうはずであったが、その潜在能力に目をつけた長老達は彼女をそのまま育て続けることを命じる。

そうして、彼女はその異質な世界で育てられることになったのであるが、紛れ込んだ異分子は、紛れ込んだほうも紛れ込まれたほうも受け入れられはしなかった。

周囲の親戚たちどころか、親兄弟達までもが彼女を最初からつまはじきにしたのだ。里の絶対権力者である長老の命令であるので、表だってことを起こすものはほとんどいなかったが、裏では陰湿ないじめが続く。それも本来なら自分の子供を守らなくてはならないはずの親や、かばわなくてはならないはずの兄姉達が率先して行うのである。そんな彼女の居場所などどこにもあろうはずもなかった。

しかし、そこまでされても彼女は壊れなかった。歯をくいしばって日々を耐え、自らの身体を鍛え、外の世界に自分の助けとなる者を密かに作り、その牙を研ぎ続けた。

そして、中学生に進級する日が間近に迫ったある日、彼女は自らが生まれた里と決別する。全寮制の学校に進学し、もう里には戻らないと長老達に告げたのである。

長老たちは何をバカなことをとその提案を一蹴しようとした。だが、彼女は自分達が洗脳した他の子供達とは違っていた。もしそれを許さないというのなら、この里の実情を中央庁に洗いざらいぶちまけると長老達に告げたのだ。

これを聞いた長老達は慌てふためいた。自分達の里の中では最強の絶対権力者であり逆らう者などいない王様の長老達であるが、流石の長老達も自分達が住む都市の頂点に君臨する中央庁にはかなわない。しかも里の中では合法であっても、中央庁側からすれば長老達が里の中でやっていることは許されざる違法なのだ。それも軽犯罪とかいう生易しいレベルではない、史上稀に見る大犯罪であり、公になれば歴史に間違いなく残ってしまうだろう。

長老達は一瞬、目の前に座る小娘をきれいさっぱり処分して証拠隠滅をとも思ったが、その小娘はそんな浅知恵が通じる相手ではなかった。どうやってかはわからないが、ある大学の高名な『療術師』の弟子となり、その後ろ盾をいつのまにか得ていた彼女は、もし、自分が戻らない場合はその師匠を通じて中央庁に連絡がいくと告げたのである。

里に引っ込み世間のことになど無関心の長老達も、その『療術師』の名についてはよく知っていた。長老達は北方諸都市に存在しているいくつもの製薬会社と取引をしているが、その製薬会社達がこぞって自分達の会社の特別顧問として在籍を求め、名前だけでもいいからとラブコールを送っているという超有名凄腕『療術師』。それが彼女の今の師匠だという。

寝耳に水の彼らは、信じられんと彼女に詰め寄ったが、彼女は酷薄な笑みを浮かべて傲然と呟いた。

『だったらあなた達が知る製薬会社に連絡を取り、あの『人』の念話番号を聞いて直接念話をかけてみればいい。すぐにわかること』

言われるまでもなく長老達はそれを即実行に移し、そして、彼女の言ったことが完全に真実であったことを知る。こうして長老達は完全に敗北を認め、彼女は里を出た。勿論その際、彼女が成人にいたるまでに必要な学費や生活費もろもろを、慰謝料代わりにごっそり払わせることも忘れずに。

こうして彼女は自由を得たわけであるが、自由を得ても彼女を理解してくれるものを得ることはほとんどできなかった。

いや、皆無であったわけではない。片手の指ほどであるが彼女を理解してくれる者がいないわけではない。彼女が尊敬してやまない師匠、小学校時代からの腐れ縁で大親友の少女、血の繋がった肉親の中で唯一心を許し理解し合うことができた妹。

みな、彼女のことを理解してくれ、味方となってくれる者達であ

るが、いずれは彼女の側を通り過ぎていくものであることを彼女はよくわかっていた。しかし、彼女が真に望んでいるのはそういうものではない。彼らだけでも非常にありがたい存在であることに間違いはない、しかし、自分の心が、魂が、求め続ける何かがあるのだ。常に渇きつづけているこの心を潤してくれる何かがほしい。

そう思ったとき、いつも彼女の脳裏に一人の少年の姿が思い出される。

ぼろぼろのフード付きのパーカーを目深にかぶり、ジーンズについたどろをはらいもせずに穏やかな気配で自分を見つめ続ける一人の少年の姿。目深にかぶったフードのせいで口元しかいつも見えなかったが、その口元にはいつもいつも笑みが浮かんでいた。

その姿を思い浮かべると、あのときに少年が自分に言った言葉が必ずよみがえり思い出してしまうのだ。

『お姉ちゃん、僕のお嫁さんになってくれる?』

それは彼女が中学校に進級する直前のときのこと、その言葉を口にしたのはその彼女よりもさらに年下の小学生の子供で、その意味の重要さを知ることなく口にしたのではないか、いや普通はそう考えるだろう、まだ小学生の彼が結婚して二人で生きていく本当の意味をわかっていたはずがない。しかし、彼女はそう思わなかった。あのとき、あの少年は間違いなくその意味を知っていて自分を求めたのだ。フードの奥底に光る二つのあの目。真っ暗な夜に星が輝いて闇をわずかに照らしだすような光。それは強烈な光ではない、しかし、その強い意志は間違いなくそこにあって、揺るぎなく自分を見つめていた。

あの瞳を思い出すたびに自分の心が鷲掴みにされたようになる。何か過去になくした大事な大事な何かに巡り合えたような、そんな歓喜にも似た溢れるような激情。しかし、幼い自分はそんな自分を誤魔化して、返事をはぐらかしてしまった。

『もっといい男になったら考えてあげてもいいよ』

恥ずかしくてそれだけ言い残して駆け去るようにその場を立ち去った。

それまでも彼とは何度も会っていた。学年が違っていて、同じクラスだったわけではない。それどころか同じ学校ではなかったのかもしれない。彼と会うのはいつも学校の外。彼女の大親友の少女と共に、弱い者苛めをするどうしようもない悪ガキどもを標的にして鬱憤晴らしに大暴れしていると、いつもどこからともなく彼が現れるのだ。

悪がきどもに加担するわけでもない、かといって彼女達に加勢するわけでもない。ただ静かに自分達のしていることを見守り、事が終わると双方を簡単に治療して立ち去っていく。

実は、今の彼女の師匠である『療術師』と引き合わせてくれたのは彼なのである。あるとき彼女が悪がきどもをあまりにもぼこぼこにし過ぎて、洒落にならないほどの怪我を負わせてしまった時に、どこからともなく現れた少年が、その現状を見て師匠を連れて来てくれたのである。

やってきた師匠はあっというまに悪がきどもの怪我を跡形もなく治してしまったわけであるが、治療後あまりにも度がすぎる暴力をふるう彼女に説教しているうちに、彼女が置かれている現状を知った師匠が、自分が後ろ盾になってやるから里を出ないかと申し出てくれたのだ。その後、何度か師匠とやりとりをして正式に弟子になり、やがて彼女は里から離れることに成功することになったのである。

彼女の真の姿である『金毛白面』の姿は、当時から恐怖の象徴だった。彼女の容赦のない苛烈な武は、あまりにも凄まじすぎ、悪がきどもだけでなく普通の同級生達からも恐れられていたほど。実家のことでただでさえ荒れていた彼女は、心に抱え込んだ負の感情を

隠そうともしなかったため、大親友以外のクラスメイト達はほとんどよりつこうとしなかった。

しかし、そんな彼女を目の前にしても、少年は全く動揺しなかった。それどころか嬉しそうに彼女に近寄ってきて、よく話しかけてきたものだった。

あまりに『人』に親しく接してもらったことがない彼女にとって、非常に対応に困る相手であったが、決して嫌な相手ではなかった。子供の言葉とは言え、『お嫁さんになってほしい』といわれたことだって嫌だったどころか、物凄くうれしくさえあった。

だが、その言葉を聞いたそのとき、その日が彼との最後の別れとなった。

それ以降、彼女は全寮制の学校に進学したため、今まで通っていた小学校付近にいくことができなくなり、彼と会っていた場所からはしばらく遠ざかっていたのであるが、ある日、彼のことをよく知っているという大親友に彼の近況を聞いてみた。あの日以降、ずっとずっと気にかかっていたのだ。そして、冷静に自分の気持ちを考え続けてやはり、自分もまた彼が好きだと自覚して、今更で照れくさくもあったが、思いきってそのことを大親友に告げて、彼のことを教えてもらうことにしたのだ。

だが、大親友の答えは

『えっと、その、つまり・・あ～、そうそう！！　し、死んだらしいよ、交通事故であっけなく』

『嘘！？　嘘でしょう！？』

『い、いやいや、本当なのよ。うん。か、かわいそうだけど、あの子のことはお願いだから諦めて。ね、ね』

自分でも想像以上にショックを受けてしまった彼女は、その後一

週間寝込んでしまった。改めて少年に対して持っていた自分の気持ちの大きさに愕然とした彼女であったが、それも最早今更であった。

もう、自分の想いを告げるべき彼はこの世にはいないのだから。

世界は灰色のままだった。彼女から見た世界はずっと灰色のままだ。

気持は全然整理できてはいなかったが、それでも生きていかなくてはならず彼女は再び立ちあがって学校に通ういつもの日々を送り始めた。いつもの灰色の世界を今日も彼女は歩いて行く。

高校に入り、大学に入り、そして、彼女は今年二十歳になった。

彼女を求める男達、あるいは女性がいなかったわけではない。恋人になってくれ、妻になってくれ、愛『人』になってくれ、ためしに付き合ってみよう、結婚しよう、様々な言葉が彼女に投げかけられる。しかし、それらは彼女の表面か、あるいはその異質な能力のみを求める声だけで、彼女の心はあのときにのように一度として震えたことはなかった。

それら全てに丁重にお断りの言葉を返し、言葉が通じない相手に対してはそれなりに対応する。

いま、この瞬間のように。

「くるくる回って飛んで行け！！」

「ぎゃあああっ！！」

都市営念車『サードテンプル』駅のちょうど裏手にある空地に年若い男性の絶叫が響き渡る。もともとは中央庁念気通信社の本社ビルがあった場所で、現在本社は隣町の『ルーツタウン』に移設新築され、使わなくなったビルは取り壊され、その後、次の買い手がなく空き地のままで放置されている。

そんな場所に集まっているのは、だらしない服装の地元の高校生らしき集団と、その彼らを睨みつけて立つ一人の女性の姿。

おもいおもいに自分達が格好いいと思って改造したガクランを着こんだ異質な姿の高校生と違い、彼らと対峙して立つ女性はこざっぱりした服装をしていた。大きめのブルーのシャツに、少し濃い紺色のパンツ、そして、ブルーのスニーカー。

しかし、その中身は地味で普通の服装とは全く対照的。流れるような輝く金色のロングヘアー、吸い込まれそうな金色の瞳、とがった顎、鮮やかな朱色の唇、頭からはぴんとたった狐の耳。百八十ゼンチメトルに届きそうなスラッとした長身は、出るところが出て引っこむところが引っこんでいて、その形のいいお尻からは二本の長い狐の尻尾が生えている。

どこからどうみても完全無欠の美女である彼女は、自分のことをいやらしい目で見つめ続ける目の前の高校生達に怒りに満ちたまなざしを向けて決然と吠える。

「悪いけど、私はあんたたちみたいに数にモノを言わせて『女』を自由にしようっていう低俗な奴らが大嫌いなのよ。あんたたちみたいなのはね、『狐(あたし)』に蹴られて地獄に落ちろ！！」

霊狐族の大学生　如月(きさらぎ)　玉藻(たまも)は不良達に向かって疾駆していく。

小学生の頃から変わらぬ荒ぶる魂そのままに。

第二話　『狐と鴉』　その2

城砦都市『嶺斬泊』に存在するエリアの中で最大のビジネス街である『サードテンプル』。平日の朝ともなればその都市営念車駅は近くの学校に通う学生や、会社に向かうサラリーマン達でごった返し、大変な状態になっているのであるが、それはあくまでも駅の南に位置する表側の話。北の歓楽街に続く裏側は表と対照的に静まり返っており、『人』通りはほとんどない。しかし、今日は少しばかり事情が違っていた。駅の建物からそれほど離れていない路地裏の一画。この都市の通信機能一切を取り仕切っている中央庁が経営する念気通信社の本社ビルがかつてあった場所。今は隣町の『ルーツタウン』に本社を移し、ビルそのものは取り壊され空き地となったその場所で、今、凄まじい死闘が繰り広げられていた。

「この、くそアマァァッ！！」

「そういう女性蔑視の言葉やめてもらえる？　あんたみたいな頭の悪そうな奴に言われると本当に腹が立つから」

頭に三角錐型の大きな二本角を持つ鬼族と思われる大柄な高校生が、その丸太のような剛腕を叩きつけてこようとするのを余裕でかわし、嘲るように呟いた玉藻は、そのまま美しいフォームでスラッと長い足を鞭のようにしならせる。その足は風を巻いて空を斬り、鬼族の高校生の後頭部に吸い込まれる。豪快な打撃音などはない。しかし、その一撃をくらった鬼族の高校生は白眼を剥いて泡を吹き、固い地面の上へとその身を沈めるのだった。

そのあまりにも華麗で圧倒的な武力をまざまざと見せつけられることになった残りの不良達は、一瞬玉藻に殴りかかることを忘れ、怖れるように一歩後退する。次々と殴りかかってくるものと思い、

半身の迎撃態勢で身構えていた玉藻は彼らのあまりの不甲斐無さを見て、思わず呆れた表情を浮かべる。

玉藻とタイマンを張るような根性のある奴がいないことは最初からわかっていたが、大勢で一斉に向かってくるわけでもなければ、攻撃にできる隙を狙って攻撃を仕掛けてくるわけでもない、やられた仲間を助けにくるわけでもない、いったいこいつらは何がしたいのかと、本気で首をかしげてしまうのだった。

当たり前であるが、この喧嘩は玉藻から仕掛けたわけではない。そもそも玉藻は喧嘩をするためにここ、『サードテンプル』にやってきていたわけではないのだ。

玉藻には小学校以来の大親友であり、大悪友であるミネルヴァ・スクナーという友人がいる。彼女とは共に同じ大学に通う仲であり、共に上位の成績を誇る優秀な学生であるのだが、二人の学生生活は全く違うものであった。

すべての授業に真面目に出席して日々勉強を怠らない玉藻に対し、ミネルヴァはほとんど授業に出ず、怪しげなサークル活動やバイト三昧の日々を送っている。一応単位を落とすつもりだけはないらしく、玉藻からノートを借りて帰っては家でそれなりに勉強してはいるようなのであるが、そもそも授業に出席していないのであるから、いくらテストでいい成績を残しても出席日数が足りず単位はもらえるはずがない。しかし、玉藻と違い恐ろしいほどの人脈を持つミネルヴァは自らのシンパ達を存分に利用し、影武者を擁立して代返で切り抜けようと画策。呆れ果てる玉藻を尻目に、ミネルヴァは去年、その方法で見事に全ての授業の単位を取得し切り抜けた。

・・かに見えた。

だが、そうは世の中うまくいかないものである。実はミネルヴァのその作戦はとっくの昔に教授達に見抜かれていた。当たり前である、学内でも一、二を争うほどの美貌の持ち主であるミネルヴァが本当に授業に出席しているかどうか、ちょっと部屋の中を見ただけ

で一目瞭然である。いくら声だけで誤魔化そうとしても誤魔化し切れるものではない。にも関わらず単位が取得できたのは、ミネルヴァの成績があまりにも優秀であったことと、大学で最大級の権威を誇る二人の教授が彼女を擁護したからだ。

一人はミネルヴァの師匠であるラファエル・ラー・ファミル教授。そして、もう一人は玉藻の後見人であり、小学生の時に弟子入りしてからずっと追いかけ続けている憧れの大師匠ブエル・サタナドキア教授。

その二人の援護射撃のおかげでミネルヴァはなんとか単位を取り上げられることはなかったのだが、代わりに追試を受けさせられることになってしまったのである。

もちろん、その内容はかなり厳しいもので、受けなければ当然単位は即没収だし、受けても教授達が示した合格点を越えることができなかったらやっぱり単位は没収である。で、今日がその運命の追試の日。本当なら今日の玉藻のスケジュールとしては午後から大学に行けば済む話であったのだが、ミネルヴァ本人に泣きつかれてしまったのである。

『たまちゃ～～ん、お願いだから、ついてきて～～！！』

『い、嫌よ。なんで、あんたの追試の付添しないといけないのよ！？　歯医者を怖がる子供かあんたは！？』

『お願いお願いお願い～～～～！！』

『え～い、抱きついてくるな！！　あんたがそうやってむやみやたらに抱きついてくるから、あんたと私がデキテいるなんてとんでもない噂が大学中に飛び交うことになるんじゃないのよ、もう！！　離れろ離れなさいったら、この妖怪こなきじじい！！』

『いやよ、ついて来てくれないなら絶対離れないから!!　ふっふっふ、そうやっていつまでも首を縦に振らないとちゅ～しちゃうわよ!!　そんな場面を見られたら今度こそ本当に私とたまちゃんが恋人同士ってことになっちゃうかもね・・』

『ぎゃ～～!!　やめんかあああ!!　気色悪い!!』

『ほらほら、ちゅ～～しちゃうわよ～～』

『いやあああ!!　わかったわかった、わかりました!!　いけばいいんでしょ、いけば!!』

『やったあ、やっぱりたまちゃんは私の大親友だわ、大好き』

『だから、離れろっちゅ～とるんだ、この馬鹿ミネルヴァ!!』

なんとか断ろうとした玉藻であったが、結局こうして強引に押し切られてしまいミネルヴァの付き添いで行かなくてもいい時間に大学に行くことになってしまったのだ。ミネルヴァを送り届けるだけで午後の授業までの時間どうしようかと思っていた玉藻であったが、不幸中の幸いかすぐに午後の授業までの時間をどう使うについておもいあたる。本来授業のある日以外は学校に来ない玉藻の師匠ブエルが今日はミネルヴァの追試の為に大学に来ているはずで、ミネルヴァを追試会場に送り届けたあと師匠の元で行き詰っている研究内容について相談しようと決める。

そんなこんなで追試の日がやってきて、玉藻は待ち合わせの『サードテンプル』駅構内でミネルヴァが来るのを待っていたわけであるが、ミネルヴァよりも先に別の『人』物達が玉藻に声を掛けてきたのだった。

見ためからしてもろに『不良です』といわんばかりの高校生の一

団。トロールや巨人族、リザードマン族やオーク族など非常に雑多な種族の集まりであったが、判で押したかのようにガラが悪そうで頭も悪そう、口にする言葉まで『おい、ネエちゃん俺達と付き合えや』と常套句しか口にせず、玉藻を舐めるように見つめてくるその目には性的欲求を満たすためだけの醜い光が見えるだけ。

玉藻はこういう輩が大嫌いであった。生みの親たちから理不尽な扱いを受けて育ってきた玉藻は、力づくでどうこうする輩や、『人』をモノ扱いする輩が大嫌いであり、そういった奴らを決して許すことができなかった。

なので、思い知らせてやるべく人気のない路地裏にわざと誘い込んだのであるが。数で押し切ってけしからん行為をしよう、これだけの人数がいれば好きなことができると思ってホイホイついてきた彼らはすぐに、自分達が獲物と定めたものがか弱い小動物ではなく、自分達には逆立ちしても手に負えることができない猛獣であることを思い知らされることになった。

空地に着くや否や玉藻に躍りかかろうとした不良達を、見事な蹴り技で文字どおり一蹴し、ついでにその周囲にいた不良達も薙ぎ倒す。その間わずか数秒足らず。玉藻の足元にはすでに玉藻に声をかけてきた不良集団の約三分の一近くが倒れて動けなくなっていた。

不良達は続けて玉藻に襲いかかっていくことができず、玉藻の放つとてつもない『武』のオーラに完全に気圧されてしまいその場で委縮するばかり。玉藻はしばらくの間あまりにも弱すぎる不良集団に呆れ果てた視線を向け続けていたが、すぐに表情を引き締めて獰猛な肉食獣の笑みを浮かべるとゆっくりと彼らに歩みを進めていく。

「あんたたちのような輩はね、本気で痛い目にあわないと性根が治らないのよね。悪いけど見逃さないわよ」

バキバキと両拳を鳴らしながら不良達に近づいて行く玉藻。そのあまりの迫力に不良達は徐々に後ずさって行こうとし、そのうちの

何人かはうまく後ろに下がることができずにお互いの身体がぶつけあい、体格が小柄なものは押し出されて尻もちをついたりと実に無様な姿であったが、玉藻は全く容赦する気配をみせずに一気に彼ら目掛けて疾駆する。

『ひ、ひいっ！！』

玉藻の進行方向にいる一番近くにいた何人かの不良が悲鳴を上げ、自分の顔の前に泳ぐように両腕を伸ばし玉藻の攻撃を防ごうとする。しかし、玉藻の攻撃はそんな素人防御で防げるものではない。玉藻は酷薄な笑みを浮かべると、怪鳥のような叫び声をあげて宙へと飛び上がる。そして、身体ごと回転させながら目の前の不良達に開脚させた足を叩きつける。

その一撃でふにゃけた不良達は木端のように蹴散らされるはずであった。

だが、玉藻の予想とは違い、その足には岩を叩くような硬い感触。自分の足がいったい何を蹴ったのかはすぐにはわからなかったが、しかし、このままの状態でい続ければ間違いなく不利になると判断した玉藻は、その硬い何かを踏み台にするようにして力強く踏みこんでもう一度宙を舞う。

すると、その一瞬あとをとてつもなく嫌な風が通り過ぎ、月面宙返りしながら後方へと間合いをあける途中、自分の足先にあったものへと視線を向ける。

そこには、明らかに二メトルを越えていると思われる二人の巨漢の姿と、その間に立つ小柄な魔族の少年の姿があった。

二人の巨漢は黒い獣毛を持つ直立した虎の姿、恐らく西域黒虎族（ノーブルノワール）と思われる男達で、周囲にいる他の不良達と同じようなガクランを着こんでいる。しかし、ほかの者達と明らかに違い、その身のこなしから判断して武術の心得がある。ある程度手を抜いていたとはいえ、玉藻の旋風脚を防いでみせたのはこいつらに間違いなかった。

だが、玉藻がもっと気になっていたのは、巨漢の間に立っている小柄な魔族の少年のほう。一見すれば爽やかな笑みを浮かべた美少年。透き通るような白い肌に、華奢な体、かわいいと美しいの挟間にある非常に絶妙に整った顔。普通そんな美少年が厳つい不良達の中にいれば違和感を感じずにいられないはずなのだが、玉藻は全く違和感を感じなかった。

その美少年の瞳に宿る光が非常に気に入らなかった。『人』を見下し、『人』を蔑み、『人』を『人』としてみていないその目、玉藻が今まで嫌というほど見てきたその目の光、色は、絶対に見間違えようがなかった。

玉藻は表情を一層険しくして少年を睨みつける。ふと視界の中に不気味に光り輝くものがあることに気がついてそちらに視線を移すと、その視線の先は美少年の両手へと到達する。

そこには都市内では携帯を禁じられているはずの片刃の長剣が一本ずつ握られているではないか。恐らく、先ほど玉藻が感じた嫌な風の正体は、この少年が放った斬撃が生み出したもの。この少年もまた武術の心得がある。それを理解したとき、玉藻の中の闘士としてのスイッチが入る。

「あらあら、雑魚ばかりかと思ったら、ちゃんと中ボスと大ボスがいるじゃない」

「登場が遅れて申し訳ありません。ですが、遅れた分はしっかりと取り戻しますのでご期待ください」

嫌になるくらい様になる美しい一礼を玉藻に向かってしてみせた魔族の美少年は、爽やかな笑みの仮面をかぶったまま狂気を瞳に宿らせてその両手に握る長剣をこれ見よがしに玉藻に見せつける。

「そう言って期待外れでしかなかった奴らを何人も見てきたけど・・

まあいいわ、かかってきなさいよ。同じように踏みつぶしてあげるから」

「できますかね？　あなたに」

「できるわよ。私にはね」

「では、お見せしていただきましょうか」

余裕たっぷりの様子で足を踏み出した美少年は、玉藻目がけて疾駆を開始し、少年の両脇に控えていた巨漢達も少し遅れて走りだす。玉藻の顔が精悍な歴戦の戦士の表情のそれにかわり、三人を迎撃すべくきっと彼らの姿を睨みつける。四つの影が間もなく激突する。その場にいた誰もがそう思ったが、激突の瞬間、突然三人が何かに気がついて驚愕の表情になって動きを止める。そして、すぐに玉藻の間合いからとびのくと、何かに怯える様な表情で玉藻がいる方向を凝視する。

玉藻は自分が放つ武のオーラに慄いて引いたのかと思ったが、すぐに彼らの視線が微妙に自分から外れていることに気づく。三人だけではない、ほかの不良達も全員がある方向を、恐怖に満ちた瞳で見つめていた。それは玉藻のすぐ真横。

玉藻は慌ててそちらに視線を移す。

すると、そこには黒づくめの異様な風体の『人』物の姿が。

「た、た、『祟鴉（たたりがらす）』！？」

「『サードテンプル』の『招かれざる乱入者（スクランブル　トリックスター）』」

「な、な、なんでここに」

その『人』物は身長百八十ゼンチ近くある玉藻よりもかなり低く、せいぜい百六十ゼンチあるかないかくらい。その小柄な全身を真っ黒でぼろぼろで見るからにぶかぶかのコートで覆い隠し、目深にかぶったフードの中には達筆な東方文字ででかでかと『祟』と書かれた仮面。

男なのか女なのか、若いのか年寄りなのか、一切不明の怪しさ爆発の怪『人』物。

『祟鴉（たたりがらす）』

このあたり一帯の不良達はもちろん、普通の一般高校生の間でも最近知れ渡るようになった謎の怪『人』。城砦都市『嶺斬泊』きってのビジネス街であると同時に、最大の繁華街である『サードテンプル』周辺に出没し、この近辺で起こった事件には何らかの形で必ず関わってくるという。

その形は実に様々で、時には中学生、時には大学生、時には普通の一般学生、時には不良集団の前に現れ、ある者は本当に危ない所を助けられたといい、ある者は嵌められてひどい目にあわされたという。

どういった者を助け、どういったものを陥れるのか、その法則性はさっぱりわからず、確実なことは現れれば必ずその場に風雲が巻き起こるということだけ。

いつも全身ぼろぼろの黒装束に身を包み、素顔を仮面に隠して一言もしゃべらないこの『人』物を『人』はいつしかその仮面に刻まれた一文字と、その真黒な姿とを合わせ『祟鴉（たたりがらす）』と呼ぶようになった。

気の荒い者達の中には、この招かれざる乱入者（スクランブル トリックスター）を捕まえてひどい目に合わせてやろうと試みた者もいた。しかし、結果は全くの無駄骨でこの怪『人』の正体を掴むことはおろか、むしろ逆に手玉に取られてみなさんざんな目にあわされてしまったという。

非公式ではあるが、その手玉に取られて散々な目にあわされたという連中の中には不良達の間で名をはせていた中央地区の拳豪ブルータスや、城砦都市『嶺斬泊』高校生武術大会優勝者である小覇王ユンファ、あるいは北方都市剣術大会大学生の部で準優勝を勝ち取った剣公子フィリップなどなど、この城砦都市『嶺斬泊』でそれと知られた歴戦の猛者達が名を連ねており、その凄まじい戦歴ゆえに『崇鴉（たたりがらす）』はこの『サードテンプル』で何をしでかすかわからない超危険人物として恐れられているのであった。

そのとんでもないプロフィールを持つ『人』物は、素人ですら感じることができるドス黒いオーラを垂れ流しながら目の前の不良達にその顔を向け続けていたが、不意にそのオーラを引っこめると隣に立つ玉藻へと顔を向け直す。

そして、今まで放っていた威圧感からは考えられないような軽くフレンドリーな感じで、シュタッっと片手を玉藻に上げて見せるのだった。

「あ、あんたねえ。いっつもいっつも、よくもまあこういうタイミングで現れるわねえ」

心底呆れ果てたという感じで玉藻が呟くと、『崇鴉（たたりがらす）』は参ったなあ、照れちゃうなあといわんばかりに身をよじりながら頭をぽりぽりとかいてみせる。

「いや、褒めてないから！！　全然褒めてないから、ちょっと、何照れているのよ、もう！！　って、何今更驚いているのよ、え？　全然気がつかなかった？　気づきなさいよ！！」

玉藻と『崇鴉（たたりがらす）』のあまりにも場違いなやりとりを茫然と見つめ続ける不良達。そして、困惑しているのは不良達ばかりではなかった。

つい今しがたまで物凄く殺伐とした雰囲気が流れていたこの場所に、なぜか玉藻は温かな空気を感じている自分に気がついて、不良達同様に困惑の表情を浮かべて見せる。

それは、かつて自分に『お嫁さんになって』と言ってくれた少年が放っていた空気と同じ匂いだった。

第二話　『狐と鴉』　その3

玉藻がこの黒づくめの怪『人』　『祟鴉（たたりがらす）』と知り合ったのは一年前のこと。尊敬してやまない師匠ブエルが勤務している都市立与厳（としりつよげん）大学（だいがく）にめでたく合格し、その合格を報告すべく大学内にある師匠の部屋を訪れた玉藻だったわけだが、そのとき師匠と一緒にいたのが全身黒づくめの怪人『祟鴉（たたりがらす）』であった。

最初にその姿を見たときはそのあまりにも異様な風体に呆気にとられてしまった玉藻。しかし、尊敬する師匠に襲いかかろうとしている強盗の類かなにかとすぐに判断を下し、侵入者を排除すべく素早く戦闘態勢へと移行する。

自分に自由を与えてくれた大恩人である師匠を守らなければ！！

という使命感の元、自分がスカートをはいて来ていることも忘れ、椅子に座ったまま玉藻のほうにぼんやりと顔を向けている黒装束の怪『人』に必殺の回転中段蹴り。大輪の花のようにスカートを翻し、そのスラリと長い足を惜しげもなく晒しながら凄まじい勢いで殺人キックが怪『人』へと吸い込まれる。

しかし、蹴りを叩き込む寸前になって、目の前の相手に敵意とか害意とか悪意とかいったものが一切ない、それどころか何か自分を見つめてくる気配が非常に正の気配であることに気がついて慌てて蹴りの軌道を修正。なんとか『祟鴉（たたりがらす）』を蹴り倒さずにはすんだのだが、代わりに隣にあった師匠のテーブルを木端微塵にしてしまい平謝りすることになってしまった。

「あははは、あははははは、ご、強盗だと思ったのかね？　あはは、玉藻くんらしいね」

「そ、そんなに笑わないでくださいよ師匠！！」

テーブルの残骸を片付けながら玉藻の突然の回し蹴りの理由を聞いた師匠は、その癖毛だらけの乱れまくった長髪と顔の下半分を覆い隠す鬚のせいで目と鼻しか見えていない顔を破顔させて大爆笑する。そんな師匠の姿を恨めしそうに見つめ、羞恥で顔を赤く染めながらも、玉藻は手を止めることなく自分が壊してしまったテーブルの残骸の後片付けを続ける。

「いやいや、ともかく強盗なんかじゃないから安心したまえ。その子は君と同じで私の弟子の一人だ。古い古い友人・・いや、友人というのはあまりにもおこがましいな。私の大恩人のお子さんでね。君よりも年下ではあるが、君の兄弟子にあたるんだよ」

「え、これから大学一年生になる私よりも年下ってことは、この大学の生徒じゃないんですか？」

「うむ。だが、ここの大学の生徒達よりもずっと優秀ではあるがね。まあ、君ほどではないが」

自分の隣でテーブルの破片を片付けている黒装束の怪『人』の肩をぽんぽんと優しく叩く師匠。そんな師匠の紹介を聞いていた玉藻は、思わず手を止めると自分の目の前で片づけを続けている怪『人』をまじまじと見つめてしまうのだった。

全身を覆う真っ黒でぼろぼろのコート、同じく真っ黒でぼろぼろのズボン、そして、白地に赤い東方文字が一字書かれた仮面。自分よりも小柄であるということ以外は全く外見がわからない姿、年齢も、性別も、そして、種族も当然ながらわからない、全くの謎。そんな謎だらけの怪『人』はやたら手慣れた様子でテキパキと後片付けを行っている。一緒になって手伝っている師匠や玉藻など、全然

役に立ってないんじゃないかと思わせるくらい、素晴らしい手際で部屋の中をあっという間に片付けていき、最後は壊れたテーブルをすぐにでも燃えないゴミとして出せるように分別して部屋の片隅にまとめてしまうと再び二人の元へと戻ってきた。

玉藻はしばらくそのプロのハウスキーパーのような鮮やかな手際に見惚れていたが、はっと何かに気がついた表情を浮かべる。粗相をしてしまった相手に自分がまだ謝っていなかったことを思いだしたのだ。玉藻はきちんと直立すると深々と頭を下げて奇麗な一礼を作る。

「謝罪が遅れて本当にごめんなさい。強盗と間違えてしまうだなんて、私、そそっかしくて。しかもついつい力に頼ってしまうからいつも師匠に怒られているんですけど、未だに治らないんです。本当に本当に申し訳ありませんでした」

いくら紛らわしい姿を相手がしていたからといってそれは理由にはならない。目の前の怪『人』はただ椅子に座っていただけで、確かに師匠に害を加えようとするようなことは一切していなかったのだ。完全に自分が悪いと思った玉藻は誠心誠意を込めて謝罪を口にする。

すると、目の前の怪『人』は慌てたように近寄ってきて玉藻の頭を上げさせる。そして、片手をぶんぶんと勢いよく横に振ってみせる。

「全然気にするなってこと？」

玉藻が恐る恐る聞いてみると、うんうんと首を縦に振る怪『人』。そして、続けざまに何かを伝えようと再び複雑なジェスチャーをはじめる。

「え？　え？　むしろ、ラッキーだった？　何が？　白紙がなに？　白紙を見れてよかったってこと？」

なぜか近くに落ちていた何も書かれていない白紙を取り出して指さした怪『人』はそれと玉藻とを交互に指さして、ガッツポーズを取って見せる。

「白紙が見れてよかったって変な『人』ね。私別に白紙なんて持ってないのに。え、白紙じゃなくて、『白』い色ってこと？　で、私のスカート？　じゃなくて、その中？　ああ、つまり、私の下着が白で、それを見れてよかったってことなのね。な～んだ、そっかそっかぁ・・って、ばかあああああっ！！　な、な、何言ってるのよ、あんた！！」

ようやく怪『人』のジェスチャーの意味を悟った玉藻は、今度は別の意味の羞恥で顔を真っ赤にし、目の前で無邪気に喜んでいる怪『人』に怒声をあげる。

「馬鹿！　ばか！　バカッ！！　何考えているのよ！？　え、白がよく似合ってるって？　そ、そんなことどうでもいいのよ！！」

思わず怪『人』の側に駆け寄った玉藻は、そのフードに包まれた頭をぺしっと叩き。そして、若干涙目になりながら怪『人』を睨み付けるように見詰める。しかし、怪『人』は相変わらずのほほ～～んとした雰囲気を崩すことなく玉藻の方に顔を向け続けるだけ。そんな怪『人』の様子を見ていると段々怒っているのが馬鹿馬鹿しくなってきて、玉藻は深い溜息を一つ吐き出して肩の力を抜く。

正直言ってやりたいことはいっぱいあったが、この目の前の怪『人』物に何を言っても無駄なような気がして玉藻は師匠へと顔を向け直しかけた。そのとき、玉藻の脳裏に誰かの声が木霊した気がし

た。

『お姉ちゃんはやっぱり白が似合うよね、うんうん』

「え？」

師匠に向けかけた顔を慌てて戻し、キョロキョロと周囲を見渡す。だが、いくら周囲を見渡してみてもここにいるのは、自分と師匠と、そして、黒装束の怪『人』の三人だけ。玉藻は違うとわかってはいたが、側にいる怪『人』に声をかける。

「あなたじゃないわよね、今の？」

「？」

「ああ、いいの、いいの。ごめん、私の気のせいだった」

きょとんとしている怪『人』にすぐに謝罪して見せた玉藻だったが、フードをすっぽりとかぶった怪『人』の姿を見ていて、はっとあることを思い出す。以前、彼女が出会った『人』の中に、同じようにフードを目深にかぶった『人』物がいたことを。

「そっか、そういえばそういうこともあったなあ」

中学校に進学する日を間近に控えたあの日、生まれ故郷と訣別する日の直前、夕日が照らし出す公園で彼女に『お嫁さんになってほしい』といってくれた少年と、ちょうど今のようなやり取りをした記憶があることを、玉藻は今はっきりと思い出していた。きっと、その外見が少し似ているような気がして思い出してしまったのだろう。今思い出しても赤面してしまう思い出だが、もう会うことはで

きない少年との大切なエピソードの一つには違いない。玉藻は目を伏せてそっともう一度だけその思い出を思い出したあと、再び心の奥底へと沈めた。そして、怪訝そうな表情を浮かべている師匠になんでもないと笑顔を浮かべて告げようとしたのであるが、師匠の視線が自分ではなく隣の怪『人』を向けられていることに気がつき、そちらに視線を向けてみる。すると、何やら両腕を組んで物凄くわかったような感じで何度も頷いている怪『人』の姿が。

「って、なんであなたが頷いているのよ」

玉藻がツッコミを入れると怪『人』は、『な～に言っているんですか、あのときのことでしょう?』なんて言いたいような感じにパタパタと片手を振ってくる。

「いや、だから、なんであなたそういうわかったようなリアクションとるわけ? それとも、ひょっとして私が何を思いだしているかわかってる? まさかね～、そんなわけないわよねえ」

「???」

「あなたとは今日が初対面なのに」

「!!!」

すると、怪『人』は目に見えて『し、しまったあああああ!!』みたいな感じに大いに慌て始め、玉藻はそんな怪『人』を物凄い不信感一杯な感じで見詰めたのだった。

結局、その日は怪『人』の思わせぶりな態度がなんだったのかわからないままに終わってしまったのだが、怪『人』との付き合いそのものがそれっきりで終わりになったわけではなかった。それから

後も玉藻はこの黒装束の怪『人』と奇妙な交友を続けていくことになったのである。

最初に出会った時のように師匠の部屋に訪れたときにばったり出会うということも勿論あったが、それ以上に玉藻がこの黒装束の怪『人』と遭遇したのは、ここ『サードテンプル』周辺であった。しかも、遭遇するタイミングは大抵玉藻に何かがあったとき。

その何かは様々であるが、ほとんど玉藻がよくない状態の時に怪『人』は現れるのである。例えば、親友や知り合い達と喧嘩してしまったときや、試験が思うようにいかなかったとき、あるいは知り合いが亡くなったときや、体調が悪いときなどなど。

玉藻が自分の心を整理できず、気持ちがささくれだって、イライラし大暴れしそうになったり、あるいは落ち込んで一人誰もいないところで泣きそうになったりしているそんなときに、いつもののほほ〜〜んとした様子で姿を現し、何をするということもなく、黙って玉藻の側にいる。

しゃべるのはいつも玉藻のほうで、自分の中の怒りの気持ちをぶつけるときもあるし、落ち込んで悲しい気持ちを吐きだすときもある。しかし、怪『人』は余計なことを何も言わず玉藻の話を黙って聞き続けてくれるのだった。そして、玉藻が自分の気持ちを吐きだしきって落ち着いてきたとき、さりげなく玉藻を慰めるような何かを残して去っていく。

それは今まで食べたことがないくらいおいしいお弁当やケーキであったり、あるいは自分が必要だと思っていたけれど稀少すぎて手に入らなかった『療術』の専門書だったり。物ばかりではない、時にはそのとき玉藻が頭を悩ませている対人関係を解消する方法のヒントのようなものが書かれたメモだったり、玉藻が知りたがっていることを知っている誰かを紹介してくれたり、そして、あるいは玉藻が手強い不良達と大立ち回りをしているときに突然現れて、絶妙な援護をしてくれたりもしたのである。

しかし、それだけのことをしてくれていながら、『祟鴉（たたりがらす）』は玉藻

に対して何も代償を要求しようとはしなかった。いつもいつも一方的に自分だけが何かを玉藻に与え、自らは何も受け取らずに去っていく。

最初の頃は何らかの下心があってのことだと思い、徹底的に利用するだけ利用してやろうと思ってその好意を何の感謝も抱かずに受け取っていたのだが、半年もそういったことが続くと、いくら『人』の機微に疎い玉藻でも相手には本当に下心がないのだとわかる。そうなってくると今度はなぜ自分にそれだけのことをしてくれるのか気になって気になって仕方なく、また今まで散々相手の好意を食い散らかしてきた自分の浅ましい行為が嫌々で仕方なくなってしまい、玉藻はなんとか今まで『祟鴉（たたりがらす）』に受けてきた恩の分だけでも返せないかと真剣に考えるようになった。そこで、あの怪『人』の素性を知っているはずの師匠に、半年も経ってからどうかとも思ったが、このままでいるよりはよっぽどましと恥を忍んで教えてもらおうとしたのだが、師匠の答えは・・

『ズルしちゃいかんな、玉藻くん。君には目も口も耳もある、自分で立って歩く足も、引きとめるための手だってあるだろう？　ちゃんと自分の力を使って、本人に教えてもらいなさい。『療術』のことならいくらでも教えてあげるし、きちんと答えを出そう。しかし、その問題は君自身が君自身の力で解かなければ意味がない』

と、すっぱり突き放されてしまった。

途方に暮れかけた玉藻であったが、すぐに気を取り直して思いなおす。確かに師匠の言う通りで、本当に自分が恩を返そうと思っているのなら自分の力でなんとかすべきなのだ、ならば己の全力を尽くしてでなんとかするまで。そう決意した玉藻は『祟鴉（たたりがらす）』に今まで受けてきた借りを返すべく、黒装束の怪『人』を自力で捜し出すことにした。

と、いうのも素性がわからないため住所がわからず、連絡先も知

らないとあって、このままでは自分からはあの怪『人』に会いに行くことができないからである。勿論、向こうから会いに来てくれるのを待つというのも一つの手であろうが、その手段なら自分が捜索しながらでも兼ねることができる。少しでも怪『人』と遭遇する可能性をあげるためにも自分からのアプローチも行っておきたかったのだ。

ただ、時間が無限にあるわけではない。玉藻とて、いろいろと他にやらなければならないこともあるので、いくら恩を返すためとはいえそちらに集中することはできない。なので、大学からの帰り道の二時間ほどを割いて捜索することにした。

こうして、黒装束の怪『人』の姿を探して『サードテンプル』周辺をしらみつぶしにまわろうとしたのであるが、ここで思わぬ落とし穴が玉藻を待っていた。

第二話　『狐と鴉』　その４

怪人『祟鴉（たたりがらす）』の捜索開始から一週間ほどたったある日のこと。
連日『サードテンプル』の治安の悪いところをうろついていることを、大親友のミネルヴァがどこからともなく嗅ぎつけて心配して詰問しにやってきた。
最初は適当なことをいって誤魔化そうとしたのであるが、流石に長年付き合いのある大親友である。今までの経緯などの大部分はなんとか隠し通したのであるが、巧みな誘導尋問で誰を探しているのかだけはとうとうバレてしまったのだった。

『はあっ！？　『サードテンプル』に出没する黒装束の怪『人』を捜しているって・・それって『祟鴉（たたりがらす）』のことじゃないのっ！？』

恐ろしく険しい表情で怒声に近い大声をあげるミネルヴァ。
玉藻が知る親友は、いつも飄々としていてどんなときでも笑みを絶やさず、こんな風に声を荒げることなど、滅多にない。というか、長い付き合いであるが、彼女がここまでヒートアップした姿を見るのは実に久し振りのことである。
そんなミネルヴァの姿に圧倒されていた玉藻であったが、彼女の口にした固有名詞が気にかかり、恐る恐る尋ね返す。

『た、『祟鴉（たたりがらす）』？　あいつってそんな風に呼ばれているの？』

『何言ってるのよ、玉藻。あんたが今言った人相風体で『サードテンプル』に出没する奴っていったらあいつくらいしかいないじゃない。ひょっとしてあんた知らないで捜そうとしていたの？』

『う、うん、今、初めて聞いた。そっか、あいつ『祟鴉（たたりがらす）』って呼ば

れていたのね』

心底呆れたような表情を浮かべて自分を見つめてくるミネルヴァに、戸惑った表情で応える玉藻。

実は玉藻、『サードテンプル』周辺で暗躍し続ける怪人『祟鴉（たたりがらす）』についての噂話を、今の今まで全く知らなかったのである。それどころか『祟鴉（たたりがらす）』という呼び名ですら、初めて聞いたばかり。

誰が見ても『完全に知りませんでした』という表情を浮かべているとわかる玉藻の姿を見て、大きくため息を吐きだしたミネルヴァは大いに呆れ果てた様子を見せたが、それでも巷で流れている怪人の噂話について自分が知っている限り玉藻に教えてやった。

玉藻はミネルヴァが話す噂話の数々をしばらく黙って聞いていたが、いくつかの噂話について首を傾げる。

いい噂については置いておく。恐らくそれは真実に違いない。

あの心優しい怪人ならありえる話ばかりだ。しかし、悪い噂話にはいくつも引っかかることがあった。

確かに、あの怪『人』は人畜無害な生き物ではない。その証拠となる現場を何度か目撃している玉藻には、納得できる噂話もあることはあったのだが、なんとなくそういう話には裏があるような気がしてならない。

ひょっとしたら自分が知らない腹黒い何かをあの怪人が持っているのかもしれないが・・

ミネルヴァの話す噂話をすべて聞き終えた玉藻はしばらくの間、複雑な心境で考え込む。

自分が恩を返そうとしている相手は、実はとんでもない大悪党かもしれない、あるいはひどい卑劣漢かもしれないと。

しかし、心の中であの黒装束の怪人の姿を思い浮かべた玉藻はすぐにその考えを打ち消した。

（ないわ。やっぱりどう考えてもない。あいつが無暗に『人』を陥

れるとは考えられない。と、いうことはやっぱり何かあったんだわ。あいつがそうせざるを得なかった何かが相手側に）

そう結論付けると、玉藻の心中は不思議と穏やかになった。

何故かはわからないが、今、自分が出した答えが真実であるという確信があった。

しかし、やはり気にはなるので、今度会ったらそれらのことについて聞いてみようと決意する。その内容次第では手を貸せるかもしれないし、それが恩を返すことにつながるかもしれないからだ。

そうと決まれば善は急げとばかりに玉藻はその場からそそくさと立ち去ろうとする。

『よし、そうと決まればとりあえず行きますか。じゃあ、ミネルヴァまたね』

『待て待て待て。ちょっと待ちなさい』

当たり前だが目の前の親友はそう簡単には解放してはくれなかった。すぐさま玉藻の動きを察知して強引に腕をつかんで引きとめる。

『多分、あたってると思うけど一応聞いておくわね。どこに行くつもりよ玉藻！？』

『まあ、いろいろと、その『サードテンプル』まで野暮用を済ませに行きたいので、放していただけませんこと、ミネルヴァ嬢？』

『お上品ぶって誤魔化そうとしてもだめ！！　ともかく、あいつの捜索については私、絶対手伝うからね！！』

『え？　え！　て、手伝ってくれるの！？』

なんとかミネルヴァの手を振りほどこうとしていた玉藻は、ミネルヴァの言葉を聞いて一瞬呆気に取られた表情で目の前の親友を見つめ返す。すると、ミネルヴァは玉藻に『任せろ!!』と言わんばかりの頼もしい表情で深くうなずいて見せるのだった。

『あったり前じゃない、こっちからお願いしたいくらいだわ!!』

思わず感激して目を潤ませる玉藻。

やっぱり持つべきものは親友だ。

そう思って瞳を潤ませている玉藻の手をしっかりと握ったミネルヴァは、とてつもない決意と何かの覚悟に燃える瞳で玉藻を見つめ返す。

そんなミネルヴァの姿を見た玉藻は、『なんて友情に厚い友人なんだろう、今まで誤解してごめんね』と、心の中でめちゃくちゃ感謝したりしたのであるが、その想いはミネルヴァが発した次の言葉で木端微塵に砕け散る。

『玉藻も捜していたなんて、なんて好都合なんだろう。見つけ次第ぎったぎたの全殺しにしてやるんだから』

『そうね、見つけ次第全殺しに・・って、え？　何？　ぜ、全殺し!?』

『そうよ、絶対許すわけにはいかないもの!!　玉藻だってそうなんでしょ？　あいつにひどい目にあわされたか、それに近い何かをされたからあいつのことぎったぎたにするために捜しているのよね？』

『えええっ!?　ミネルヴァ、なんかひどい目にあわされたの?』

一瞬いつもの笑えない悪い冗談炸裂か？　と思って相棒を見つめた玉藻だったが、目の前の親友は完全に目が据わっていて、今回に限っては一部の隙もなく大真面目。百パーセント本気で怒り狂っているとわかりみるみる顔を青ざめさせる。

確かに『祟鴉（たたりがらす）』は無抵抗主義の無害な生き物ではない、普段はのほほ～～んとして虫も殺さないような平和なオーラを身にまとってはいるが、あの怪『人』の逆鱗に触れるような出来事が起きたときは、とてつもない危険な生き物に激変することを玉藻はよく知っていた。

ひょっとすると何かの手違い勘違いで自分の相棒と激突することになったのかもしれない。

悪い予感に表情を強張らせながら玉藻が問いかけると相棒は首を横にふってみせる。

『いや、私自身じゃない。ほら、アポロや、フィリップや、小町のこと覚えてる？』

『あ～、あんたの高校時代の取り巻き達ね。それが？』

『やられたのはそのアポロ達よ。もうさんざんな目にあわされたらしいのよ。衆人環視の元で大恥赤っ恥をかかされてね。その内容は言えないんだけど、本当に破廉恥極まりないことやってくれちゃったみたいでさ。私の大事な友達にしてくれたことの落とし前だけはつけてやらなきゃ。そうしないとどうしても気が済まないのよ！！』

玉藻の予想とは違いミネルヴァ自身との激突はなかったのだ。

そのことに大いに胸をなで下ろす玉藻。

いくら恩人であるとはいえ、自分の大事な親友を傷つけられたとあっては玉藻も心穏やかではいられないところだった。

しかし、問題はそのミネルヴァの友人達であった。ミネルヴァ自身は非常に怒り狂っていて、その友人達の仇を討つと息巻いている。そして、玉藻自身にもその加勢を求めてきているのだが・・

玉藻はそれに迎合する気には到底なれなかった。他でもない大親友ミネルヴァの頼みだ、普通なら二つ返事で『よし、わかった！！』と請け負うところだが、今回ばかりはどうしてもその気になれない。

いや、正直に言えば、絶対に加勢したくなかった。

むしろ、ミネルヴァの友人達をひどいめにあわせたという怪『人』に『よくやった！！』と言ってやりたいくらいなのだ。

そう、ミネルヴァの友人達が玉藻は大嫌いであった。

玉藻の友人ミネルヴァは実に魅力のある『人』物である。

中学時代、高校時代どちらのときも生徒会長に立候補し、その輝く太陽のような魅力を存分にふるい、中学の時も高校の時も他の候補達をぶっちぎって当選。彼女の周りには実に様々な人材が集まったものであるが、その中には良い者もいれば悪い者もいた。

ミネルヴァはどちらの者でも受け入れることができる大きな器の持ち主だったので、みな喜んで彼女の元に馳せ参じ彼女の為に働いた。それ自体に問題はない、ミネルヴァの下にいる限り彼らはみなその光に照らし出されて同じように光り続けることができたから。

だが問題はそこではない。

大きな問題は彼女という太陽の元を離れたときに現れた。

元々自ら光り輝くことができないもの達のいくつかが、太陽が見ていないとき、見ていない場所で自身が持つ闇を周囲へと吐き出して撒き散らしたのだ。

自分達が上級種族に生まれたことを鼻にかけ、傲然と差別的な行動を繰り返す。しかし、ミネルヴァの元へと戻ると彼らは自分の闇を隠し、ミネルヴァという太陽の光に迎合してみせる。彼らはミネルヴァの前では決して自分達の闇を見せようとはしなかった。

玉藻はそんな彼らが大嫌いであった。

玉藻自身は霊狐族という上級種族に区別される種族に生まれていたが、その辛く悲しい生い立ちから、いかにそれが空しく最悪な物の考え方であるかを身をもって知っていた。だからこそ彼女からすれば、ミネルヴァの友人達が影に回ってしていることは歓迎できることではなかったし、決して許せるものではないと思っていた。だが、そんな彼らでも大事な親友の友達である。非常に苦々しくはあったが、気に入らないからと手を出すことはできなかった。なにせミネルヴァ自身が全くそのことに気がついていないし、彼らを信じ切っているため迂闊に動くことができなかったのだ。

その後高校卒業と共に、彼らとは会うことはなくなった。

玉藻とミネルヴァは卒業後同じ大学へと進んだが、彼らは別の道へと進み、自然と疎遠になっていったのだ。そのことに内心ほっとしていた玉藻であったのだが、まさかここに来てその名前が出てこようとは。

結局、なんとかその場はミネルヴァの提案を退けることができたのであるが、自分からあの怪『人』を探し出すことはできなくなってしまった。大学からの帰り際、ちょっとでも玉藻が怪しい行動をしようとするとミネルヴァが勘付いて一緒についてこようとするようになってしまったからだ。内心大いに辟易した玉藻であったが、無下にすることもできず、その案は諦めざるを得なかった。

とはいえ、それで恩を返すこと自体を諦めたわけではない。

自分で探すことはできなくともあの怪『人』に会う方法が全てなくなったわけではない。消極的だし、この日と定めることはできないが方法はあるのだ。そのやり方は単純明快。今まで通り向こうが会いに来てくれるのを待っていればいいのである。それまでの半年間、黙っていても向こうは玉藻に会いに来てくれるはず。

はたして玉藻の予想通り、『祟鴉（たたりがらす）』はそれ以降も何度も玉藻に会いに来てくれた。そして、いつも通り、玉藻に利になる何かを残し

て去っていくという行動を繰り返す。玉藻はこの機会を逃さず今までの恩を返そうとした
しかし・・

（ど、どうすれば恩を返すことになるのかしら・・）

そう、肝心要の恩を返す具体的な方法が何も思い浮かばなかったのだ。しかも会う機会はその後も何度もあったが、そのタイミングはいつも突然であり、その状況というのがいつもいつも玉藻が精神的に余裕がないときや、別の考え事で頭がいっぱいのときに現れるので『恩を返す』という目的そのものを忘れて、怪『人』がその場を去ってしまってから思いだすということもしばしば。

そうしてまごまごしているうちに、何の恩返しもできないままにまた半年という月日が流れて行った。

（あれほど恩を返すって固く決意したのに、あたしって奴は・・）

半年間どうすることもできなかった、あるいはしなかった自分が腹立たしいやら悔しいやら。いっそのこと下心満載で手助けしてくれていたら気楽なのにとか、出会いそのものがなければこんなに悩むこともなかったのにと・・そんな考えが脳裏を一瞬よぎることもある。しかし、玉藻はそんな考えが思い浮かぶとすぐにそれを否定し、そんな考えを抱く自分を叱りつける。

この一年間、いろいろとあったが、間違いなく自分は今までとは比べ物にならない、いや経験したことがないくらい穏やかな一年を過ごすことができた。全部が全部あの怪『人』のおかげとは言わないが、大きな大きなウェイトを占めているのはまず間違いない。

それらのことを忘れ、しかも自分の不甲斐無さを棚にあげておいて、身勝手な考えを抱くことが許されていいはずがない。

（あきらめちゃダメだ。受けた仇には仇で、受けた恩には恩で返すのが私の流儀だったはず！！　そうだ、一度に全部返そうとするから駄目なのよ、少しずつ返していけばいいじゃない。小さなことでもそのとき自分にできる最善のことをコツコツ積み上げていくのよ！！）

心の中でそう呟き、玉藻は再び恩を返すことを固く決意する。そうして恩を返すチャンスをじっと待つことにしたわけであるが、どういうわけか大学二年生に進級してからしばらくの間、ぱたりと怪『人』が現れなくなってしまった。

それまでは早ければ三日に一回、遅くとも二週間に一回のペースで遭遇していたにも関わらず今回は一カ月近くも間が空いてしまっていた。

（とうとう、私・・愛想を尽かされたか。そりゃそうよね、私は相手から一方的に搾取するだけで、何もしようとはしなかったもの）

心の中で自嘲気味にそう呟く玉藻。自分とあの怪『人』は顔見知りの『知り合い』で、同じ師匠に学ぶ『兄妹弟子』ではあるが、『友達』ではない。勿論、血の繋がった『親兄弟』でも『親戚』でもなければ、会社の『同僚』でも『上司』でも『部下』でもない。

会えなくなったとしても別段不思議な関係ではないのだ。

（本当にもう会えなくなっちゃうのかもしれないなあ）

しかし、そう心の中で呟いて、改めてあの心優しい怪『人』ともう会えないかもしれないと思うと、なぜか涙が零れそうになる。いつの間にかあの怪『人』の存在が玉藻の心の中で大きくなっていたことに愕然とするが、どうすることもできない。

無理矢理にでも忘れてまた灰色の日々を生きていくしかないのだ、

そう思って半ば諦めかけていたのであるが。

そんな玉藻の前に、黒装束の怪人『祟鴉（たたりがらす）』は姿を現した。

一カ月ぶりの再会であった。

第二話　『狐と鴉』　その5

相変わらず見事なまでにボロボロの黒装束で全身を覆い隠し、いつもと変わらぬ穏やかで飄々としたオーラを発しながら自分の目の前に立つ小柄な『人』影を玉藻は見詰める。

全身見えている箇所はほとんど黒一色、ぶかぶかのコートと白い仮面のせいで年齢も性別も顔も名前も体型もわからない、そればかりか住んでいる場所も知らず、いつもどこからやってきていつもどこへと帰って行くのかもわからない。玉藻に関わってくるその本当の理由もわからず、なぜ代償を求めることなく玉藻を手助けしてくれるのかということも当然わからない。

わからないことだらけ、知らないことだらけの全てが謎の怪『人』。

なのにどうしてこうして再会できたことがこんなにも嬉しく感じてしまうのか、どうして自分の胸を打つのかわからない。

そんな玉藻の複雑な胸中を知ってか知らずか、久しぶりに玉藻の前に現れた怪『人』は、いつにもましてハイテンションでウキウキした様子で、『よっ、久しぶり、元気!?』みたいな感じで玉藻に片手をぶんぶん振ってみせてくる。

愛想を尽かされたのではないか、自分のことが嫌いになったのではないかと真剣に悩んだ自分がバカバカしく思えるくらいにいつも通りのフレンドリーな態度。八つ当たりとわかっていながらもついつい恨めしそうな表情になって目の前の怪『人』を見つめていると、怪『人』はそんな玉藻の様子に気がつき、慌てて近寄ってきて心配そうに顔を覗きこんでくる。

玉藻はその後もしばし同じように恨めしそうに怪『人』を見つめていたが、やがてふっとその表情を和らげる。

「大丈夫よ。確かにちょっと今日は体調がそれほどよくないけど、

そういうのじゃないのよ。ただの八つ当たりだから気にしないで」

ところが、そんな玉藻の言葉を聞いても怪『人』はすぐに納得した様子を見せず、『本当に？　本当に大丈夫？』という風に玉藻の身体の隅々に顔を向けて玉藻の身体に異常がないか調べようとする。

「大丈夫だってば。私だってブエル師匠の弟子の一人、『療術師』のはしくれよ。自分の体調管理くらいちゃんとしてるわよ。　え？　今までもそう言って何度も身体を壊しているって？　わ、悪かったわね、こ、今度は本当に大丈夫なんだから」

『本当かな～？　信じられないな～』という風に両腕を組んで真っすぐに玉藻の顔のほうに視線を向けてくる怪『人』に玉藻は不貞腐れた表情を浮かべて見せ、二人はしばし睨みあう。しかし、そんな状態は長くは続かず、二人は互いの顔を見つめたまま噴き出してしまい、何の拘りもなくただただ笑い続ける。そこにあるのはいつもの二人の空気。一カ月顔を会わせない日が続いたが、二人の間に流れる空気は何も変わってはいなかった。

それを肌で感じた玉藻は心の底からほっとしている自分に気がつく。いや、肌で感じるだけではない、今、目に見えているもの、今、耳に聞こえてくるもの全てが日々の暮らしの中であるものと同じようで違うような気もするのだ。ここだけにある何か、ここだけで感じることができる小さいけど自分にはとても大きな何かが自分を包みこんでくれている気がする。

玉藻はそれをもっと感じていたくてそれらの空気を作り出しているものに無意識に手を伸ばす。

それは自分の目の前に立つ何かで、玉藻はその何かの黒いボロボロのコートから出ている小さな手を掴みとる。黒い革の指抜き手袋に包まれた自分よりも小さな手、女性というには固い、しかし、男性というにはあまりにも優しさにあふれた温かいその手をそっと自

分の両手で包みこむ。

「今までどうしていたの？　一カ月近く会えなかったけど」

身体を屈みこみ、フードに包まれた白い仮面をじっと覗きこむと、怪『人』は心底困ったようにおろおろとその顔をあちこちに向ける。

「あ、ごめん。別に責めているわけじゃないの。いろいろとあなたに世話になっている私が、言えることじゃないよね。でも、ちょっと、気になってね」

包み込んだ怪『人』の小さな手に視線を落とし、その温かみを感じながら自嘲気味な笑みを浮かべて見せる玉藻。そんな玉藻の様子を見ていた怪『人』は本当に心配そうな様子を見せると、そっと片手を玉藻の両手から抜き取ってその額にあてる。

「ね、熱なんかないわよ。失礼ね。確かに私は他『人』に対して無関心なところがある。ううん、どっちかというとほとんどの他『人』に興味がないわ。でも、特別な『人』がいないわけじゃないのよ」

ちょっと怒ったように玉藻が見つめると、怪『人』は『わかってる』という風に深く頷いてみせ、その後『不躾な真似をして本当に申し訳ない』とばかりにぺこりと頭を下げる。

「や、やめてよ、そういうつもりじゃないんだったら。あ～、もう本当になんかやりにくいなあ、そうじゃなくて、また会えて嬉しいことなの！！」

顔を真っ赤に染めながら慌てて怪『人』の頭を上げさせると、怪『人』は心底吃驚した様子でしばらく固まっていたが、やがて、玉

藻のほうにちらちらと自分の顔を向けたり逸らしたりを繰り返しながらやたらもじもじし始める。しばらくその行動の意味がわからずぽかんとしていた玉藻であったが、どうやら怪『人』が照れているのだとわかると、なんだか物凄く嬉しくなってしまい、思わずその小柄な体を引き寄せてぎゅっと抱きしめてしまう。

「！？」

「あなたって、本当にときどき妙にかわいいわよね。あなた、女の子なの？　にしては身体つきが若干固い気がするし。あ、ごめん、本当に女の子だったら失礼なこと言ってるわよね、わたし」

抱き締めた怪『人』の身体にぺたぺたとその手を這わせてその感触を確認する玉藻。すると怪『人』はわたわたと大いに慌てて両手をぶんぶんと振り回してみせるが、邪険に玉藻を振りほどこうとはしなかった。そして、しばらくの間、玉藻の好きなようにさせ、やがて落ち着いてくると片手を玉藻の背中に優しくまわし、ぽんぽんと叩いてみせる。

そうして抱きしめ返してもらうことで更に落ち着いた気持ちになった玉藻は、若干の未練はあったものの怪『人』の身体からその腕を離し、もう一度その白塗りに東方文字の刻まれた仮面を見つめる。

達筆な筆跡で『祟（たたり）』の一文字。

不吉極まりない文字であるが、この文字を背負って立つ目の前の『人』物からこの意味合いに相当するようなことをされたことは一度たりともない。むしろ玉藻がいつももらっているのは『祟（たたり）』ではなく、間違いなく『福（ふく）』のほうである。何故目の前の『人』物が己を指し示す文字としてそれを選んだのかはわからない。しかし、玉藻にとって目の前の『人』物は『祟（たたり）』を下すべく不気味な闇夜を飛ぶ怪鳥ではなく、『福（ふく）』をもたらし優しい夜空を駆け巡る聖鴉だった。

それは玉藻の中で絶対に間違いえようにない事実。だが、それは玉藻の中の事実であり、他『人』にとってのイコールではない。

いつになく安らいだ気持ちで目の前の怪『人』を見つめていた玉藻であったが、ふと怪『人』の片手がせわしなく動いていることに気がついた。何やら片手をボロボロのコートの中に突っ込み、中から小さな珠をいくつも取り出しては親指で弾いて自分達の周辺にさりげなくばらまいている。

いったいなんの呪(まじな)いだと思って不審そうな表情を浮かべた玉藻だったが、すぐにその表情が引き攣る。西域黒虎獣人族(ノーブルノワール)の巨漢二人と、魔族の少年が怪『人』の背後にいつのまにか肉薄していたからだ。

久しぶりの怪『人』との再会で舞い上がってしまい、今自分が戦闘状態にあったことを完全に失念してしまっていたのだ。玉藻はすぐに怪『人』をかばって三人組を迎撃しようとするが、自身が武術の達人であるが故に今から動いても最早間に合わない距離であることを悟って絶望の声をあげる。

「や、やめてえぇぇぇぇぇっ！！」

「伝説の怪『人』と言えど、所詮この程度ですか！？　無様に沈め『祟鴉(たたりがらす)』ううううっ！！」

凶気の叫びと共に迫りくる二本の刃と二つの拳。怪『人』にとって完全な死角、今更振り返って防御の構えを取るには遅すぎ、飛びすさってかわすには三方向全て塞がれていて飛び退くスペースもない。絶対絶命の大ピンチ。

だが、仮面の怪『人』慌てることなく自身の片腕を真っすぐに伸ばし二本の指を立てて何かの印を斬る仕草を取った。

『勅令！！　【散布】』

バシュッと周囲で何かが弾ける音が次々と連続で響き渡る。そして、その直後、怪『人』の背後から必殺の一撃を叩きこもうとしていた三つの『人』影が、なんとも滑稽な姿で一斉に宙を舞う。

「な、なんだとおおおっ！？」

くるりと空中でそれぞれ一回転した彼らは見事に後頭部から地面に着地し、激痛が走る頭を抑えて地面の上を転がりまわる。周囲を固めて事態を見守っていた不良達は、自分達のリーダーがどうしてそうなってしまったのかわからず、ぽかんと口をあけて無様に地面に沈み転げまわるリーダー達の姿を見つめるばかり。

いや、不良達ばかりではない、すぐ間近で事態を見つめていた玉藻ですら一瞬何が起こったのかがわからずしばし呆気に取られていたのであるが、すぐに自分の周囲からやたらいい匂いがしていることに気がついて表情を引き締める。そして、素早く周囲に視線を走らせると自分と怪『人』が立っている以外の場所が、すべて何かの液体でびっしょりと覆われていることに気がついた。

玉藻はその場にしゃがみこみ、すぐ手近の地面に手を伸ばしそこにある液体をそっと触れて感触を確かめ、次いで濡れた指先をくんくんと匂う。そして、その指先にある液体の正体がわかると、愕然とした表情を浮かべて怪『人』のほうへと振り返る。

「こ、これってローション？　ひょっとしてさっきばらまいていた『珠』って、このローションをばらまくための・・」

玉藻の言葉を聞いた怪『人』は、『大正解』と言うように親指を立てた拳を玉藻のほうにぐっと突き出してみせる。そう、襲いかかってきた三人組は最後の踏み込みの瞬間、ローションの中に思いきり足を踏みこんでしまい、力一杯滑って転ぶことになってしまったのだ。最初ローションは『珠』の中に収容されていて周囲は普通の

地面であった。それゆえに不良三人組はなんの警戒も抱かぬままに怪『人』へと襲いかかったわけだが、それを完全に見透かしていた怪『人』が、絶対に避けることができない、気がついてもどうすることもできない絶妙なタイミングで『珠』の中のローションを解放したため、必殺の威力を生み出すための踏み込みの足力そのものをローションによって受け流されてしまい、見事に宙を舞うことになってしまったというわけである。

「あんたたちさあ、最初の時点で素直に私にやられるか、この子と私がしゃべってる間に逃げたほうがよかったのにね」

未だに激痛がとれないのか地面の上をごろごろと転がり続けている不良達を見つめた玉藻は、なんとも言えない呆れ果てたとも憐れんでいるともとれる表情を浮かべて呟く。自分達の豪力そのものをそっくりそのままローションで跳ね返され、地面という絶対防御壁に叩きつけられたのであるから、その痛みは半端なものではない。むしろ気絶しなかった彼らの根性を褒めてあげるべきかしらなどと、のんきに考えこんでいると、玉藻の側に立っている怪『人』が不意にびくっと身体を震わせた。新手の敵がまた現れたのかと思いバッと武術の構えで周囲を見渡す玉藻だったが、周囲にいるのは未だに呆気にとられて立っているだけの不良集団ばかり。不審に思って怪『人』のほうに視線を向けてみると怪『人』は、自分の腕にはめているごつい腕時計を見てぷるぷると震えているではないか。

「え、え、何？　時計がどうしたの？」

困惑した玉藻が怪『人』に話しかけると、怪『人』は自分の腕時計を玉藻に見せながら焦ったように指先を時計へと向け続ける。

「時間がないとか、時間が迫っているとか、そういうこと？」

玉藻が自信なさそうにそう呟くと、怪『人』は『それだ！！』とばかりに激しく頷いてみせ、次いで何か机に向かうような姿勢を作って、ペンを走らせるようなジェスチャーをしてみせる。

「試験？　試験があるの？　あなたに？」

すると怪『人』は『違う違う！！』と首と片手を振って見せ、指先を玉藻へと向ける。

「わ、私？　私には試験なんてないわよ！！」

慌てて玉藻も首を横に振って見せるが、怪『人』は玉藻の横に近づくと、玉藻の横に人のシルエットを描くように両手を描いて見せる。玉藻と同じくらいの身長、胸は玉藻よりも小さい、足は長い、髪の毛短い、そして、やたら賑やかそうに騒ぐジェスチャー。

しばし怪『人』が指し示す人物について小首をかしげて考え込んでいた玉藻だったが、すぐに思いあたってぽんと拳を自分の掌に軽く叩きつける。

「ミネルヴァかしら、ミネルヴァだと思うんだけ・・あああああっ！！　そ、そうか、そう言えば今日はミネルヴァの追試の付添だった！！」

自分が今日何をしに『サードテンプル』に出てきたのかをようやく思い出した玉藻が絶叫をあげると、怪『人』は『それそれ！！大正解！！』と言わんばかりに指先をぶんぶんと振り回し、次いでぱちぱちと拍手してみせる。

「いやあ、よかった思い出して。ってそんなこと言ってる場合じゃ

ない、そろそろ約束の待ち合わせの時間じゃない！！　あいつ自分が相手を待たせたときは軽く謝って終わりにするくせに、自分が待たせられるのは大嫌いですっごい根に持つっていう超我がまま女だからなあ。急がないといけないんだけど、それはそれとして、なんであなたがそんなこと知ってるの！？　どういうこと？　あなたミネルヴァの知り合いなの？　え、『とりあえず、それはこっちに置いといて』って？」

あたふたと大いに慌てながらも目の前の怪『人』に詰問しようと詰め寄っていく玉藻であったが、怪『人』は何かを両手で持ってそれを横によっこいしょと置き直すジェスチャーで応え、そのあとコートの中に手を突っ込んで中から何かを取り出して玉藻に渡す。

「何よこれ？　獣人用のヘッドフォンと、サングラス？　つけろって言うの？」

手渡された物と目の前の怪『人』を交互に見つめて不審そうな表情を浮かべて見せた玉藻であったが、結局その指示に従ってヘッドフォンとサングラスをつける。

「つけたわよ。え？　よく似合ってるって？　も、もう、それはいいから、これがなんなのよ」

玉藻がしっかりとヘッドフォンとサングラスを身に着けたことを確認した怪『人』は、『ちょっと待っててね』という風に片手で玉藻を押しとどめるようなジェスチャーをして見せたあと不良達のほうへと向きなおる。

「や、やってくれましたね『祟鴉（たたりがらす）』。もう許しませんよ・・」

ようやく激痛がおさまってきたらしいリーダー格の魔族の少年が、怪『人』のほうに激しい憎しみの籠った視線を向ける。そして、立ち上がろうとするのだが周囲がローションだらけのため立ち上がることができず、立ち上がろうとするたびにつるっとすべって地面にへたり込み、また立ち上がろうとしてはつるっと滑ってへたり込むということを繰り返す。

それは西域黒虎獣人族（ノーブルノワール）の二人も同じで、リーダーの少年よりもバランス感覚が悪いのか、立ちあがろうとしては盛大に転んでどこかを打ち、走る痛みでまた地面を転がるということを繰り返している。

そんなピエロのような彼らのほうに顔を向けていた怪『人』だったが、やがて両手を真上にあげてパンパンと手を叩き他の不良達の視線を自分へと向けさせる。不良達は怪人のその行動の意味がわからず一瞬顔を見合せたが、すぐに緊張の色を浮かべて油断なく怪『人』のほうへ一斉に視線を向けた。

それは周囲の不良達ばかりではなく、今だに地面を這いずっているリーダー達も同じで、警戒の色を浮かべて怪『人』を見つめる。怪『人』は周囲の不良達がみな一様に自分の方に視線を向けたことを確認すると、ぐっと右の拳を突き出してみせる。

そして、一体何が起こるのかと不良達が固唾をのんでその拳に注目した次の瞬間、怪『人』はその拳を開いてみせる。そこには小さな珠が。

『勅令！！　【閃光】』

開いた拳の上に乗っていた一つの小さな『珠』から激烈な閃光が発せられ、それをまともに見た不良達はたまらず悲鳴をあげる。

「ぎゃ、ぎゃあああ！！」

「め、目が、目がみえねえええ！！」

対閃光防御用のサングラスをかけていた玉藻と、閃光を生み出した張本人である怪『人』を除く全ての者が自分の目を両手で覆ってその場に蹲る。

「おのれ、『祟鴉（たたりがらす）』、眼潰しとは卑怯・・」

『勅令！！　【轟音】』

まんまと怪『人』の術中にはまってしまったリーダーの少年が悔しさに満ちた怨嗟の声をあげようとするが、すぐにそれは別の音によって遮られてしまう。両目を押さえて蹲る不良集団のど真ん中めがけて左手に持っていたいくつかの珠を怪『人』が投げ込み右手で印を斬る。すると次の瞬間凄まじい轟音が響き渡り、その音を聞いた不良達はバタバタとその場に崩れ落ちて動かなくなった。

「うっわあ。相変わらずえげつないコンボねえ。視力を奪われれば、いやでも『人』は別の器官に頼ろうとする。『目』がダメなら『耳』。『目』が見えなくなったことで聴力が鋭敏になっているところにあの『轟音』食らったらそりゃひとたまりもないわ」

あっという間に不良達を完全沈黙させてみせた怪『人』の鮮やかすぎる手際の良さをを、呆れる様な賞賛するような複雑な表情で見つめて呟く玉藻。そんな玉藻の言葉に一瞬照れるようにぽりぽりと頭をかいて見せた怪『人』だったが、すぐに玉藻に近づくとその身体をひょいっとすくい上げるようにしてお姫様抱っこする。世間一般の同年代の女性に比べいろいろなところに筋肉がついているぶん重いことを自覚している玉藻は、まさか自分よりも小さな怪『人』に抱きあげられるなどとは思っていなかったので、一瞬何が起きたかわからずきょとんとしていたが、すぐに自分の現状に気がついて

盛大に慌て始める。

「ちょ、ちょ、ちょっとおおっ！？　あ、あなた何やってるのよ！？　え、地面？」

もがいて怪『人』の腕から飛び降りようとした玉藻だったが、怪『人』が自分の足で足元をバシャバシャといわせている音を聞いてはっと気がつく。そう、さっき怪『人』がばらまいたローションが自分達の周囲をばっちり侵食していて迂闊に足を踏み出せばひっくり返ること間違いなしの状態なのだ。

「いや、確かに歩けるような状態じゃないけど、なんで私があなたに抱きあげられていなくちゃ・・えええええっ！？　うそっ！？　あなたこのローションだらけの中歩けるの！？」

盛大に文句を言おうとした玉藻であったが、そんな玉藻の声などどこ吹く風。怪『人』は足もとに置いていた玉藻のショルダーバッグを玉藻を抱いたままの状態で器用に拾い上げると、力強い歩みでローションだらけの地面に足を踏み出す。全く危なげのない様子でひょいひょいと歩みを進めていき、あっというまにローションだらけの危険地帯を渡りきってしまった。

そして、駅の裏手からそのまま駅の表通り近くまで移動して、駅の改札口まですぐそこというところで玉藻を地面の上に下ろす。

どうにも照れくさいという表情で下に降りた玉藻はすぐには礼の言葉が出てこず、しばらく恨めしそうな表情で怪『人』を見つめ続ける。すると、怪『人』は口笛でも吹いて誤魔化しそうな雰囲気で玉藻視線を避けるように斜め上の空を見つめ続けていたが、はっと何か気がついて再びコートの中に手を突っ込む。

そして、中から品のいい薄緑色の布に包まれた箱を取り出して見せ、それを押し付けるようにして玉藻に手渡すのだった。

「何これ？　バスケットケース・・って、ひょっとしてお弁当？」

玉藻の言葉にうんうんと頷いてみせる怪『人』。

「い、いいわよ、別に。学食とかあるし、外食したっていいんだから。え？　どうせ偏った栄養の食事しかとってないだろって？　ビールとつまみだけの生活ばっかりするなって？　な、なんでそんなこと知ってるの！？」

手渡された弁当を返そうとした玉藻であったが、怪『人』がしてみせる複雑なジェスチャーの意味を悟って愕然とした表情を浮かべて見せる。そして、尚も弁当を返そうとしたのだが、結局怪『人』の熱意に折れてありがたくいただくことにした。これまでも何度か弁当をもらったことがあるが、いずれも玉藻が今まで食べたことのない素晴らしく美味しいものばかりで、今回もそれに違いないという下心が後押ししたせいもあるが。

玉藻はそれを大事そうに自分のショルダーバッグに直し、怪『人』に改めて礼を言おうと顔をあげた。

「あの、いつもいつもありがと・・って、待て待て待て！！　ちょっと待ちなさいって！！　いっつもいっつもそうやって逃げるように去っていくんだから、もう！！」

ちょっと眼を離した隙に、怪『人』が駅の建物の影に溶け込むようにして去って行こうとしていたことに気がついた玉藻は、怪『人』が消え去る寸前の危ういタイミングでその腕を掴むことに成功し、ほっとした表情を浮かべてみせる。

そして、ちょっと怒ったような視線で怪『人』のほうを見つめると、怪『人』は慌てたように自分の腕時計を指し示してみせる。

「わかってるってば、時間がないことは。もうあいつが来る時間だった言いたいんでしょ？　それはわかってるの、だから間に合うようにそっちに行くから、ちょっとだけ私の話に付き合いなさいって」

　すると、途端に怪『人』は身体の力を抜き、『いったいなんだろう？』という感じに玉藻を見返してくる。玉藻は改めて怪『人』に顔を見つめられてなんとも照れくさくなってきたが、しかし、今ここで自分の目的を果たさないと次にいつ機会が来るかわからないからと照れくささを押し殺して怪『人』の顔をまっすぐに見つめる。

「あの、いつもいつもいろいろとしてもらって本当にありがとう。いや、あなたには本当に心から感謝しているのよ。この一年であなたの手助けがなかったら立ち直れなかったり、解決できなかったこともいっぱいあったから、本当に本当に感謝してるの。それでね、今日の晩、できたらもう一度会ってくれないかな。大したことできないけどお礼がしたいのよ」

　しかし、玉藻の言葉に怪『人』はゆっくりと首を横に振ってみせる。『必要ない。自分がしたいからしてるだけ』。言葉にしなくても怪『人』がそう言っていることはよくわかっていた玉藻だったが言葉を紡ぎ続ける。

「うん、あなたが何の見返りも要求していないことはわかってるのよ。でも、このままだと私の気が済まないの。借りっぱなしでいられる厚顔無恥な性格だったらよかったんだけどさ。私ってほらめんどくさい性格してるから。だから、その、今日は私の流儀に付き合ってくれないかな？」

　玉藻の言葉を聞いていた怪『人』はしばらく腕を組んで考え込ん

でいたが、やがて自分の腕時計を玉藻のほうに突き出して見せて指先で数字を示す。

「『六』？　ああ、夕方の『六時』ならいいってこと？」

玉藻が確認すると、怪『人』は深く頷いてみせる。

「わかった。じゃあ、今日の夕方『六時』にここでまた」

念押しするように玉藻が言うと怪『人』はこっくりと頷きを返し、そっと玉藻の腕を自分の腕から離させると今度こそ建物の影の中へと姿を消していった。

玉藻はその姿をしばらく見送っていたが、怪『人』からもらった弁当が入っているショルダーバッグを大事そうに抱きしめながら地面に視線を落とす。

「『六時』かあ。って言っても何も考えていないんだよねえ。勢いであああ言っちゃったけど、どうしようかな」

深く溜息を吐きだしながらそう呟いた玉藻だったが、その表情はそれほど悲嘆しても困惑してもいなかった。むしろ遠足に行く前の日の子供のように無邪気な笑みが顔全体に広がっていて、誰が見ても楽しそうで幸せそうに見える、そんな笑顔だった。

「『六時』まで結構時間あるからゆっくり考えよっと・・って、やばい、ミネルヴァが来る時間だ！！　いそがなきゃ！！」

そう言ってその場を駆け出す玉藻。焦りの色を浮かべながらも、どこか楽しげな表情を浮かべながら。

玉藻はいつも思う、世界は灰色だと、彼女が見る世界はいつもガラス越しの世界だと、自分を理解して側にいてくれる者はどこにもいないと。

しかし、玉藻自身は気がついていない。自分がすでに灰色の世界に住んではいないことを。

ガラス越しに世界を見ていないことにも気がついていないし、そして、彼女を心から理解しずっと側にいてくれる者がすぐ側にいることにも気がついていなかった。

それに気がつくのはもう間もなくのこと。

次回予告

連夜くんが通う御稜高校に群れ集うのは、恐るべき三頭の龍神達。

文武両道の才女にして学園のスーパーアイドルでもある龍乃宮姫子（りゅうのみやひめこ）。

姫子の異母妹で、『祟鴉（たたりがらす）』に想いを・・想いを寄せるぅ！？（怒）

・・美少女　龍乃宮（りゅうのみや）　瑞姫（みずき）。

二人の実兄であり、学園きっての喧嘩の達人でもある熱血少年

龍乃宮（りゅうのみや）　剣児（けんじ）。

三つの魂が揃うとき、静かな学園に嵐が吹き荒れる。

そして、そのとき連夜くんは！？

次回

真・こことは違うどこかの日常

過去（高校二年生編）

第三話

『姫龍と貴龍と黄龍』

荒れ狂う嵐、駆け抜けろ連夜くん！！

連夜：あれ？　今日は玉藻さんが予告ナレーションなんですね？

玉藻：うん、ミネルヴァから奪い取った。だって、私、このあとしばらく登場しないんだもん！！

連夜：ああ、そういえばそうでしたね。このあと、高校の中のお話になりますから玉藻さんはしばらく休憩なんですねえ。

玉藻：そうそう。ところで連夜くん？

連夜：はい、なんですか？

玉藻：ナレーション読んでいる途中、あまりの衝撃に思わず噛んじゃったんだけど、この『瑞姫』って子はなんなの？

連夜：・・え？

玉藻：『・・え？』じゃなく、どういうこと？　姫子ちゃんはわかるけど、この『瑞姫』っていう子については一言も私聞いてな・・

連夜：次回もお楽しみに！！　じゃあっ！！（シュタタタッ！！）

玉藻：あああっ！！　誤魔化した！！　ちょっと、連夜くん、待ちなさい、こらあああああっ！！

真・恋する狐の華麗なる日常　そのいち

彼女は『夜』が好きだ。
昼間や太陽が嫌いというわけでは決してないが、どちらかというと『夜』のほうが好きだ。
賑やかな昼間とは違い、優しい静寂に満ちた夜。
全てを照らし出す太陽と違い、静かにひっそりと地上を照らす月。
澄み切ってどこまでも青い空と違い、闇の中に小さく姿を現すいくつもの星。
今日という一日に別れを告げ、明日を迎えるための穏やかで安らぎに満ちた時間。
そんな夜が彼女は大好きなのだ。

それは決して・・

それは決して、『闇』が好きだという意味ではない。

それは決して、醜い何かを照らし出す『光』がないことを言いことに、好き勝手絶頂できる時間が好きという意味ではない。

彼女は自分が『闇』に生きる住人であることを十分に理解していた。

自分は『光』に生きる者にあらず。

自分は『正義』に生きる者にあらず。

よくわかっている、そんなことはよくわかっていた。

彼女は純粋に『力』を信奉しているし、それを使うことになんの躊躇いも持たない。奇麗事を言う奴は大嫌いだし、世の中に絶対的に正しいことなんかありはしないと思っている。理想と夢想は違う、生き残るためには美しいことばかりしてはいられないのだ。

しかし、だからといって『闇』そのものが好きということではないし、『光』がキライというわけではない。

ただ、彼女が好きなのはあくまでも『夜』だということなのだ。

自分が属する『闇』よりも、栄光に輝く『光』よりも、生命に溢れる『昼』よりも。

『夜』が大好きだった。

いいや、好きなんてものじゃない、愛しているのだ、心から、魂から、自分の存在全てで。

だから・・

だからこそ。

今日も彼女は戦う、静かな夜の安息に満ちた時間を守るために!!

「ってことで、この夜の平穏と静寂は私が守るから安心してね、連夜くん!!」

今年二十一歳になる霊狐族の美女にして、新婚ほやほやの新妻である玉藻(たまも)は、目の前に立つ最愛の『人』の姿を見つめながら、力強く断言する。

しかし、その言葉を聞いていたつい最近十八歳になったばかりの人間族の少年にして、彼女の夫である連夜(れんや)は、非常に微妙な笑顔を

浮かべて目の前の美女を見つめ返す。

「いや、あの、玉藻さん？」

「え、何？　はっ、ひょっとして不穏な気配を感じるとかそういうこと！？」

連夜の微妙な視線に気がついた玉藻は、どこか緊張した面持ちで問い返し、周囲をきょろきょろと見渡す。

「いえいえいえ。そんなの感じませんから。ただでさえ、僕、『人』の中で最弱の種族である人間ですし、もしそういう気配があるなら玉藻さんのほうが先に察知できるはずですよ」

「え、ああ、そっかそっか。んじゃ、何？」

苦笑交じりに呟く連夜の言葉に、玉藻はふ～～っと肩の力を抜くが、すぐに顔を引き締め、いまだ微妙な視線をこちたに向けている連夜のほうを見つめる。

「いや、あの、大変いいにくいんですけど」

「うんうん、いいから構わずに言って。私と連夜くんはもう他人じゃないのよ。名実共に『夫婦』なんだから！！　『夫婦』よ、『夫婦』！！　『夫婦』と書いて『めおと』と読むのよ、きゃあああ～～、いやあああ～～、恥ずかしい！！」

自分で言っておきながら、顔を真っ赤にして『いやんいやん』と心から嬉しそうに身をよじる玉藻。そんな玉藻の姿を見た連夜は、ますますその視線の色を微妙にし、笑顔を強張らせていくが、なん

とか立ち直ると、物凄く言いにくそうにしながらもある事実を玉藻に指摘しようとするのだった。
だが・・

「た、玉藻さん、あのですね」

「ひやあああ～～、『めおと』だって！！　連夜くんと『めおと』だって！！　きゃ～～、ひゃあ～～、恥ずかしい、でも嬉しい～～！！」

「玉藻さん、もしもし？　すいません、お願いだからそろそろ帰ってきて僕の話を聞いていただけませんか？」

「え、あ、ごめんごめん。ちょっと幸せと愛にどっぷり浸りきってしまったわ。で、話って何？　あ！！　ま、まさか、愛の告白なの？　だ、だめよ、私には連夜くんという大切な人が・・あ、でも、本人だからいいのか。や、やだ、もう連夜くんったら、私に愛をささやいてこれ以上どうするつもりなの？　いや、どうしてくれてもいいけど・・いや、むしろいろいろしてほしいというか、あんなことやこんなことでも私は受ける準備できているというか」

「もしも～～し！！　玉藻さん、そろそろ本気でもどってきてください～～い！！　ってか、本当にもどってきて～～！！」

「はっ！！　あ、危ない危ない、愛の底なしブラックホールに呑み込まれてしまうところだった」

「ほ、本当に頼みますよ、玉藻さん」

果てしない愛の妄想ワールドからようやく帰還した玉藻を見て、

心底疲れた表情を浮かべながらも安堵の溜息を吐きだす連夜。そんな連夜に対し、てへへとかわいらしく照れ笑いを浮かべて見せた玉藻は、今までの自分の醜態を誤魔化すように連夜に話を促す。

「で、で、それで、話って何なの？」

「いや、ですから～、玉藻さんが僕を守ってくださるというお心遣いはとてもとても頼もしいし嬉しいんですけど」

「うんうん、私はいつでもどこでも連夜くんを守るわよ」

「ここ、僕と玉藻さんの家の中なんですけど」

「うんうん、私はいつでもどこでも連夜くんを守るわよ」

「で、もって、ここは僕の部屋なんですけど」

「うんうん、私はいつでもどこでも連夜くんを守るわよ」

「一応、僕と玉藻さんの寝る部屋は一緒だけど、仕事関係とかプライベートな部屋は別々ってことで話しあいましたよね？」

「うんうん、私はいつでもどこでも連夜くんを守るわよ」

「僕、これから掃除とか洗濯物の後片付けとか、夕食の用意とかしないといけないし、その後仕事のこととかもあるんで、作業着に着替えるつもりなんですけど」

「うんうん、私はいつでもどこでも連夜くんを守るわよ」

「いや、ですから～、着替えている最中まで守っていただかなくても大丈夫なので・・着替えが終わるまで部屋から出て行っていただけませんか？」

こめかみを押さえながらも、なんとか笑顔を崩すことなく最後まで自分の希望を言い終えることができた連夜は、どこかほっとした表情で玉藻のほうを見つめる。連夜にしてみれば当然、ここまで言ったんだからわかってくれるだろうと思い、玉藻が頷いてくれるのを待っていたのであるが。

三十秒経過しても。

一分経過しても。

五分経過しても。

玉藻は頷こうとはしなかった。

微妙な空気が流れる中、どこか引き攣った笑みで見つめあう一組の男女。しばらくそうして見つめあっていた二人。しかし、あまりにもしょうもない沈黙に痺れを切らした連夜が、さらに顔を強張らせながら口を開く。

「あ、あの、玉藻さん、ですから、着替えが終わるまで部屋の外に～」

「ひどい！！　連夜くん、ひどすぎるわっ！！」

「えええええええっ！！」

連夜が口を開くや否や、『うわあああん』と泣きながら突っ伏し

て泣き始める玉藻。

「あれほど、『絶対に離れない、いつまでも一緒、死ぬまで一緒』ってお互い誓いあったのに、あの言葉はウソだったの！？」

「いやいやいや、ちょっと待ってください。着替えている間だけ部屋の外に出ていてくださいって言ってるだけなんですが」

「そんなの、ダメよ！！　私がほんの少し目を離した隙に連夜くんに何かあったらどうするの！？　ひょっとしたら窓から強盗が襲ってくるかもしれないじゃない！！」

「こんな何もない家に強盗に入ってどうするんですか？」

「あるいは異次元から三つの顔を持った異次元人や、鳥みたいな顔をした宇宙人がやってくるかもしれないじゃない！！　どうするの真っ赤な星に連れて行かれて十字架に張りつけられちゃったら！？」

「異次元人に宇宙人って、いったいどこの特撮巨大変身ヒーローの敵怪獣ですか？　『害獣』だけでも十分脅威なのに、『怪獣』まで出てくるようじゃあ、本当にこの世界終わっちゃいます！！」

「ま、まさかとは思うけど勇者として他の異世界に召喚されちゃうかもしれないじゃない！！　しかも召喚されるだけじゃなくて、関わる女性キャラ全部オトしてハーレム的な展開に・・そ、そんなのいやあああああっ！！　私以外の女といちゃいちゃするなんて絶対許さないんだからね！！」

「いろいろな意味で、その展開が一番ありませんから。異世界に召喚ってどこのライトノベルですか。どうでもいいですけど、なんで、

そんな荒唐無稽な理由ばっかり・・はっ、ま、まさか!!」

痛む頭を押さえながら目の前の玉藻を見つめていた連夜であったが、玉藻の顔の中のある部分の異変に気がついて顔を引き攣らせる。

玉藻の目、耳、頬は別に普段とあまり変わらないが、ひとつだけ大きく変わっているところがあった。

それは口だった。

玉藻の薄いさくら色の美しい唇の間からは・・

盛大に涎が垂れ流されていたのだ。

ここにきっぱりと食べ物はない。それどころか夕食だってまだできていない状態である。

しかし、食べ物以外で玉藻が普段から食しているある大好物は存在していた。

連夜は、ひくひくと頬を引き攣らせながら最愛の女性を見つめていたが、急に口調を改めると、怪訝な表情を浮かべている玉藻のことを褒め始めた。

「た、玉藻さん、そんなにも僕のことを心配してくださっていたなんて!!　感激です、玉藻さんってなんて優しい女性なんでしょう!!!」

「え、う、うん、そんな、当たり前じゃない、連夜くんは私の命と同じくらい大事なんだから!!」

「流石です、玉藻さん!!　玉藻さんはまさに僕の守護神なわけですね!!　いや、勝利の女神です、美の結晶です、天頂の華そのも

のです」

「や、やだ、連夜くんたら、本当のことばっかり。当然よ、連夜くんを守るのが私の使命、宿命なんだから！！」

「・・で、本音は？」

「連夜くんの生着替えを見るために決まってるじゃない！！　そして、あわよくばその着替えを手伝うか、気分によってはそのまま畳の上に押し倒して全部脱がす！！　そしてそして、エロ漫画でもやらないようなあんなことやこんな過激なやらしいことを・・あ」

「玉藻さん」

持ち上げられ持ち上げられ持ち上げられまくった挙句、見事に連夜の罠に引っ掛かった玉藻は、思わず隠していた本音を漏らしてしまう。

そのことに気がついた玉藻は、『しまったあああああっ！！』という表情を浮かべ慌てて口を噤むが、時すでに遅し。

表情は笑顔を形作っているものの、とてつもなくものすっごい冷たい視線で玉藻を見つめる連夜。そんな連夜の絶対零度の視線を受けた玉藻は、顔中から冷や汗をだらだらを流して顔を背け、わざとらしく口笛なんか吹きながら必死に誤魔化そうとする。

「な、な、な～～んちゃって。そ、そ、そそそ、そんなこと私が考えているわけないじゃない、や～ね～、連夜くんったら。てへっ」

「ですよね～、玉藻さんがそんなこと考えているわけないですよね～」

「うんうん、ないない。わかってもらえてよかったわ～」

「じゃあ、わかったところで、部屋から出て行ってくださいね～」

「うん、わかった～」

にこやかな表情で部屋のドアを開ける連夜。そんな連夜に促されて玉藻は部屋から出て行く素振りを一瞬だけ見せたが、肯定の言葉とは裏腹に連夜の足にひしっとしがみつくと、涙目になりながら嫌々と首を横に振り続ける。

「ちょ、玉藻さん、何しているんですか!?」

「邪魔しないから～、ぐすんぐすん。絶対、邪魔しないから、いいでしょ～」

「何言っているんですか、もう!!　ちょっとの間、着替えている間だけなんですから、離れてくださいよ!!」

「や～～!!　ちょっとの間も離れていたくな～い。寂しくて死ぬ～～!!」

「いつからウサギになったんですか!?　玉藻さんは『狐』でしょう!?　それに昼間は大学行っていらっしゃってずっと僕と離れているじゃないですか。それに比べたら一瞬じゃないですか」

「大学に行ってる『昼』間は我慢してるけど、ほんとは離れていたくないもん!!　帰宅した後の『夜』の間はできるだけ、ううん、ずっと一緒にいたいんだもん!!」

「その気持ちは大いにわかりますけど、着換える時くらい一人にさせてくださいってば！！」

「いやあああああっ！！　私がパンツ脱がして新しいパンツはかせてあげるからああっ！！」

「そんな局部のみ着替えを手伝うのはやめてください！！　ってか、ほんとにズボンを下ろさないでください！！」

狭い部屋の入口の前でドタバタと大騒ぎの二人。

『宿難（すくな）　連夜（れんや）』と『宿難（すくな）　玉藻（たまも）』夫婦。

北方の一大交易地点である、城砦都市『嶺斬泊』に住む最近結婚したばかりの新婚夫婦。

夫の連夜（れんや）は都市内の高校に通いながら父と共に薬草、霊草の栽培を行って生計を立てている半社会人。

妻の玉藻（たまも）は、この世界の医者である『療術師』になることを目指し、都市内の大学に通う大学三年生で、現在はある事情から連夜の通う高校の臨時保険医として赴任中。

大恋愛の末に結婚し、お互いのことを非常に大事に想っている二人であるわけだが、その想いが少々大きすぎるせいか、いつもいつも些細なことで大騒ぎになってしまうのだった。

しかし、そういったことも含めて二人は毎日を幸せに暮らしている。

「ちょ、玉藻さん、夕食できていないし、お風呂も終わってないし、洗濯物の後片付けやらいっぱいやらないといけないことがあるんですから、いい加減にしてくださいよ！！」

「ちょっとくらいいいじゃない!!　もうとっくに夏休みに入って高校も大学もお休みなんだから!!　それに一食くらい抜いても、お風呂に入らなかくても、洗濯物畳まなくても死なないもん!!むしろ連夜くんの『愛』を摂取できないほうが死んじゃうもん!!」

「あ〜〜、もう!!　いっつもいっつもそう言って強引にいろいろするんだから、玉藻さんは!!　今日は絶対流されませんからね!!　流された結果、夕食が夜食になっちゃったり、お風呂に入るのが深夜越えちゃったり、洗濯物翌日になってから片づけなくなっちゃたりするんだから、もう!!」

「何言ってるのよ、それもこれも連夜くんがかわいすぎるからいけないのよ!!　私はいっつも一回くらいでやめとこうかなあって思っているのに、いちいち私の胸にキュンキュンくるようなドストライクな反応するから、止まらなくなっちゃうんじゃない!!」

「じゃあ、もうしません」

「いやあああああああっ!!　連夜くんのいじわるううううっ!!」

「って、いいながらズボンおろそうとしないでくださいってばっ!!　・・あ、あれ?　僕の携帯念話鳴ってる。ちょ、ちょっと玉藻さん、ストップです」

ベルトを外してスラックスをずり下ろそうとする玉藻から必死に逃れようとしていた連夜は、自分のポケットから着信音が鳴っていることに気がつき、ズボンの中から折りたたみ式の携帯念話を取り出す。

そして、真面目な目線で玉藻に休戦を告げておいて携帯の通話ボタンを押下した連夜は、携帯を耳に当てて念話をかけてきた相手に

応対する。

「もしもし、連夜です・・え、あ、お久しぶりです！！　お元気でしたか？　え？　え！　えええええええっ！？　ちょ、ちょっと待った、落ち着いてください。大丈夫です、ちゃんと話を聞きますから、順序立てて話してください」

最初、物凄く嬉しそうな顔で念話に出た連夜。しかし、すぐにその表情は強張り、やがてそれはいつにない真面目で緊張したものへと変化する。

その様子を見ていた玉藻は、最愛の夫の様子がただ事ではないと察して同じような緊張したそれへと変わる。

そんな硬質な空気が流れる中でどれくらい通話していただろうか、やがて、相手の話を聞き終えたらしい連夜は、何か決意したような、しかし、優しさに溢れる表情で力強く頷いて見せる。

「事情はわかりました。あなたにとって彼が大事な『人』であるように、僕にとってもケンジは失いたくない大事な友達です。大丈夫です、行先については少々心当たりがありますから。必ずという御約束はできませんが、ええ、できるだけあなた達の元に連れ戻せるよう、全力で努力すると約束します」

そう言ったあとまだ少し念話の相手と何かを話していた連夜であったが、やがて静かに念話を切り携帯念話を握りしめてしばし無言で何かを考え込む。連夜の横に立つ玉藻は、その様子を黙って見守り続けていたが、やがてそっとその背後に回り込み、自分よりも小さな夫の身体を包み込むようにして後ろから抱き締める。

「さてさて、今度は誰のピンチなのかしら、旦那様？」

いたずらっぽい声で話しかけてくる最愛の妻の言葉で、思考の海から戻ってきた連夜は、なんともいえない苦笑を浮かべて妻の腕を握りしめる。

「かけがえのないの僕の友達で、同じ師匠の元で修行した兄弟弟子で、そして、共に死線を潜り抜けた戦友でもあります。理由はよくわからないんですが、なんか家を飛び出していってしまったらしくて・・僕なんかよりもずっとずっと強いやつなんですけど、なんせお人好しで世間知らずで本当に騙されやすい性格なんですよね」

「ああ、つまり親御さんか誰かがその子を探してくれって、連夜くんに頼み込んできたわけね？」

「ええ、まあ。僕自身お世話になったこともある方ですし、無下にはできません」

期せずして同じタイミングで深い溜息を吐きだす新婚カップル。そして、なんとなく顔を見合せた夫婦は、同じような苦笑を浮かべて見せるのであった。

「ま、しょうがないよね。連夜くんと結婚したときからこうなることは覚悟はしてたけどぉ。ほんと連夜くんのお友達達は、私達のことを二人っきりにさせてくれないわね～～」

「ごめんなさい、玉藻さん。それでその、早速明日からで申し訳ないんですが・・」

「わかってる。その子のことを探しにいくっていうんでしょ～。でも言っておくけど、置いて行こうと思ったって・・」

「玉藻さんも一緒についてきてくれませんか？　多分、今回のことは僕一人だと無理だと思うんです。玉藻さんの力がどうしても必要なんです」

不貞腐れたような、それでいて怒ったような口調で何かを言おうとした玉藻であったが、それよりも早く連夜が真剣な口調で訴えかける。一瞬、何かを疑うかのように連夜のことを見つめようとした玉藻。だがさらにそれよりも早く、すがりつくような眼をして連夜が頭を下げたことに仰天するのだった。

「お願いします。これから行こうとしているところは、『害獣』が闊歩している『外区』と同じくらい危険なところなんです。そんなところに最愛の妻を連れて行こうするなんてまともな夫なら絶対にしませんし、どう考えても正気の沙汰ではありません。でも、玉藻さんにどうしても一緒についてきてほしいんです。お願いします」

真摯な態度で頼み込んでくる連夜の姿を見ていた玉藻は、慌てて連夜の頭を上げさせた後、不自然に顔を背けて見せる。そして、気を抜けば歓喜のあまり土砂崩れを起こしそうになっている顔を必死に難しそうに見えるように調整し、できるだけぶっきらぼうに聞こえるように答えて見せる。

「しょ、しょ、しょうがないなあ～。そ、そこまで言うなら、ついていってあげてもいいわよ。しょうがないから。ほ、ほんとに連夜くんはしょうがないんだから～。い、いろいろとしょうがないなあ、連夜くんは～」

「ありがとうございます、玉藻さん！！」

承諾の言葉を聞いた連夜は、心から嬉しそうな顔を浮かべて見せ

る。そんな最愛の夫の可愛らしい様子をわざとらしいしかめっ面でしばらく黙って見ていた玉藻だったが、それほど時間を待たずして彼女の中の『連夜くん好き好きメーター』は阻止限界点をあっさりと突破した。

背中から軽く回していた腕に、これでもかと力を入れて連夜の小さな体を抱きしめた玉藻は、その男の子らしくないほっそりしたうなじやら耳やらほっぺやらを『狐』に変化させた顔で舐めまくり始める。

「もうもうもう!!　連夜くん、かわいい～～ん!!　かわいすぎ～～!!　食べちゃいたいくらいかわいい～～!!　ってか、『食』を満たす為に食べるんじゃなくて、『色』を満たす為ならいいよね!?　食べちゃお～～っと!!」

「えええええっ!!　玉藻さん、ストップストップ!!　明日から出かけるって今いったばかりでしょ!?　旅行の用意しないといけないし、ロムやクリスやフェイ達にも念話して協力してもらわないと・・あ、ちょ、だめですってばあああああっ!!」

静寂が支配する広大な『夜』の薄闇の中、その片隅のほうで若干静寂が乱された様子が見受けられたが、すぐにまた他の場所同様に静かになり、穏やかな『時』が流れて行く。

しかし、静寂を乱した新婚夫婦はよくわかっていた。

やがてくる『朝』、そして、そこから続く『昼間』が決して静かでも穏やかでもないことを。

きっと波乱に満ちた時間がやってくることを。

でも、同時に二人はよくわかっていた。

二人でいる限り、間違いなくそれを乗り越えていけることを。

だからいつも二人は一緒に生きていく。
いつまでも一緒に。

「って、だからって、いっつもいっつも、押し倒すのはやめてくださいってばっ!!　玉藻さん、ちょっと、もう、あああん!!」

「よいではないか、よいではないか」

「ちっともよくな〜〜い!!」

第三話　お～ぷにんぐ

玉藻：「ねぇ、連夜くん。以前から聞きたいことがあったんだけど、ちょっと聞かせてもらってもいい？」

連夜：「はいはい、なんですか？」

玉藻：「今年から私、臨時保険医に就任して連夜くんの高校に一緒にいることができるようになったわよね」

連夜：「ええ、一緒にいられる時間が増えて本当によかったです」

玉藻：「うん、私もそう思う。そう思うんだけど・・」

連夜：「だけど？　なんかあったんですか？　ま、まさか、変な奴らに因縁つけられているとかですか？　うちの高校って『害獣』ハンター目指している奴らが多いから他の高校に比べて格段に柄が悪いんだよなあ」

玉藻：「違う違う。連夜くん忘れているみたいだけど、私、この高校のＯＧなのよ。それについてはよ～くわかってるから。心配してくれるのはありがたいけど、不良生徒程度対処できないようじゃこの高校じゃやっていけないもの」

連夜：「そっか、そういえばそうでしたね」

玉藻：「ってか、そういう連中なら赴任初日から一週間のうちに問答無用で体育館裏に連れて行って、ほとんどフルぼっこに・・」

連夜：「・・え？　た、玉藻さん、い、今、なんて仰いました？」

玉藻：「ううん、なんでもなんでもない！！　そういうことじゃないのよ、私が不満に思っているのはそういうことじゃなくて・・」

連夜：「そういうことじゃないとすると、あっ！！　玉藻さんってすっごい美人だから、他の男性教師にモーションかけられているとかですか！？　くっそ～、そんな教師がいるなら絶対許さない！！　どんな手段を使ってでもブッ潰す！！　そして、この学校から叩きだしてやる！！」

玉藻：「あん、怒った連夜くん、カッコいい！！　そして、嫉妬してくれる連夜くん、超愛おしい！！　って、違う違う。そうじゃないのよ。確かにモーションかけてくる『人』達がいなかったわけじゃないけど、全部きっぱり御断りしたし」

連夜：「あ、そ、そうですか」

玉藻：「うん、連夜くんの名前こそ出してはいないけど、ちゃんと婚約者がいるからって職員室で公表しておいたし、今はそういうのはないわよ」

連夜：「でも、やっぱり心配だから、できるだけ早く手を出してきた教師が誰なのか調べあげて、手を打っておこう・・ふっふっふ、僕の玉藻さんに手を出したらどうなるのか思い知らせてやらなくちゃね」

玉藻：「連夜くん、こわっ！！　でもそんな黒い連夜くんも素敵、愛してる！！　じゃなくてっ！！　そうじゃないのよ、私が聞きたいのは私のことじゃないの、あなたのことよ、連夜くん！！」

連夜：「へ？　ぼ、僕ですか？」

玉藻：「保険医になって同じ高校の中にいられるようになったのはいいんだけれど、学生にもどったわけじゃないし、ましてやあなたのクラスの担任になったわけでもないじゃない。お昼休みとか放課後とかはなんとか一緒に過ごすことができるからそこはいいんだけど、授業と授業の間の休み時間とか、授業中とかは一緒にいられないでしょ？」

連夜：「ええ、まあ、それは無理ですね。って、まさか、一緒に授業受けようと思っていらっしゃるんですか？」

玉藻：「いや、それは諦めたわ。学生服に着替えて潜り込もうとしたら、速攻でティターニア先輩に見つかって止められちゃったし」

連夜：「学生服に着替えてって、玉藻さん、どれだけアグレッシブなんですかっ！？」

玉藻：「先輩ったらひどいのよ。私のかっこ見て、『あんたはどこのＡＶ女優だっ！？』って・・ぐすん」

連夜：「いや、玉藻さんてただでさえスタイル抜群のとんでもない美人だし、しかも大人の色気がむんむんしているんだから、そんな格好したらそうなりますよね」

玉藻：「ともかく、なんとかしてそういう時間も潜り込めないかなっていろいろ画策してみたんだけど、ことごとくティターニア先輩の妨害工作にあって挫折しちゃったのよ。先輩たら、『私だって、ナイトといちゃいちゃしたいのを我慢して仕事しているんだからね

！！　昼休みや放課後ならともかく平時はしっかり仕事してもらいます。私の目の黒いうちは絶対にいちゃいちゃなんてさせるもんか！！！』って、鬼みたいな形相でくどくどたらたらお説教してくるのよ。もう、いやになっちゃう」

連夜：「どう聞いても誰が聞いてもきっぱり玉藻さんが悪いと思いますけど・・」

玉藻：「ともかく！！　連夜くんの授業中やその合間の様子がわからない！！　私のいないところでどんな風に連夜くんが学校生活をしているのかがまったく見えない！！　ってかね、もうぶっちゃけて聞くんだけどさ、連夜くん」

連夜：「は、はい、なんですか？」

玉藻：「誰かに迫られていたりしないよね？」

連夜：「・・え？」

真・こことは違うどこかの日常

過去（高校二年生編）

第三話『姫龍と貴龍と黄龍』

ＣＡＳＴ

宿難（すくな）　連夜（れんや）

言わずと知れた本編主人公。
都市立御稜高校に通う高校二年生。人間族。男性。十七歳。
周囲のほとんどが敵という環境の中にありながらもそれに負けることなく逞しく日々を生きる。

「さて、今日も一日楽しく過ごせるといいな」

龍乃宮（りゅうのみや）　姫子（ひめこ）

連夜のクラスの委員長で、御稜高校が誇る最高にして最強のスーパーアイドル。上級龍族。女性。十七歳
上級種族中の上級種族である龍族のお姫様でもある。
連夜のことを最高の友達として慕っているが・・

「本当に連夜はいろいろとあるのう」

龍乃宮（りゅうのみや）　瑞姫（みずき）

姫子の腹違いの妹。上級龍族。女性。十七歳。

姉の姫子に比べるとやや細身ですっきりしたスタイルの持ち主の美少女。
以前、自分を助けてくれた『崇鴉（たたりがらす）』を慕う。

「あの方は私の騎士様なんです。白馬の王子様なんです。スーパーヒーローなんです」

水池（みずち）　はるか

姫子と瑞姫に仕える二人組の従者の一人。中級龍族。女性。十七歳。
ややぽっちゃり系。一見温和そうに見えるが、実は結構腹黒で策士。情報収集能力はピカイチ。

「だって宿難くんが間に入ったほうが何かと穏便に事が済むんだもの」

東雲（しののめ）　ミナホ

姫子と瑞姫に仕える二人組の従者の一人。下級龍族。女性。十七歳。
スレンダーな体系で、西隣にある城砦都市の方言『通転核（つうてんかく）』弁（関西弁）でしゃべる。武術の達人。

「いざとなったらうちら二人でなんとかするから、とりあえず、間に入ってや宿難はん」

龍乃宮（りゅうのみや）　剣児（けんじ）

姫子と瑞姫の腹違いの兄。上級龍族にして上位の王位継承権を持つ少年。上級龍族。男性。十七歳。
御稜高校三大実力者の一人にあげられるほどの武術の達人であると同時に、三人の美少女達を恋人に持つハーレムマスターでもある。
連夜の幼馴染。

「み、みんなお願いだから走りながら喧嘩するのはやめてくれ！！」

陸（ルー）　緋星（フェイシン）

剣児のことをライバル視する少年。朱雀族。男性。十七歳。
龍族の三兄姉妹とは浅からぬ因縁があり、複雑な思いを抱いている。それがゆえに彼らの幼馴染である連夜のことを敵視しているのだが・・
三大実力者のうちに入ってはいないが、剣児に匹敵する武力の持ち主である。

「毎朝毎朝三人もとびきりの美少女を侍らせて登校してきやがって！！　どこの王侯貴族様だ？」

玉藻：「姫子ちゃんのことは聞いているし知ってはいるんだけど、な～んか、それ以外の気配を感じるのよ。それも複数の影を感じるというか・・」

連夜：「えっと、あの、その・・あっ、そうだ！！　玉藻さん、人物紹介終わったみたいですよ！？　いつものやつそろそろお願いします。ほら、カメラ回ってます」

玉藻：「え？　あ、あら、やだ。コ、コホン。皆様、お待たせいたしました。第三話『姫龍と貴龍と黄龍』どうぞ！！」

玉藻：「ふ～。ちゃんと映っていたかしら。一応メイクしておいてよかったわ～。って、そうじゃなくて、連夜くん、私の質問に対する答えはどうなったの！？　あれ？　連夜くん？　連夜くん、どこ？　・・って、逃げやがったわねえええっ！！　こらああっ、連夜くん、でてきなさ～い！！」

第三話　『姫龍と貴龍と黄龍』　その1

北方に位置する城砦諸都市の中でも特に広大な敷地面積を持つ『嶺斬泊』の中には、全部で五つの居住エリアが存在している。

四方どのエリアに行くにももっとも交通の便がよく、この都市に住む大部分の『人』達のベッドタウンとなっている中央エリア。最も広いエリアを誇り、農地や酪農専用地域が広がっている西エリア。一般家念製品や念気自動車、あるいは医療関係の生産工場が多く密集している北エリア。北とは逆に食品や衣服関係の生産工場が密集している南エリア。そして、都市の行政一切を取り仕切る中央庁をはじめ、この都市の各企業の本社が存在しており、最も賑やかなエリアとして知られる東エリアの五つ。

その五つの中の一つ、東エリアの西の片隅に都市立御稜高等学校はある。

都市最大のビジネス街であると同時に最大の歓楽街であり、都市の中心地として知られる『サードテンプル』。その『サードテンプル』の都市営念車駅から念車に乗り込み、ごとごとと揺られて運ばれながら待つこと二十分。九つ目の駅『ネームバレイ』で下車し、徒歩で五分ほど歩くとそこにたどり着くことができる。

二つ先の駅まで行けば、そこはすでに中央エリアという東エリアの西の果てにある高校である。

逆に言えば最も人口が多い中央エリアから二駅で来れる非常に立地条件のいい場所にある高校であると言えるわけで、その為か毎年この学校に進学を希望する学生は数多く、都市内最大のマンモス校でもある。

全校生徒数九百人。

一クラス四十人前後で構成され、一学年の平均クラス数は七クラス前後。当然そうなると生徒達を指導する教師も通常の人数では賄い切れないから増えることになり、教師の数も都市内最大。

在籍している人数がすごいだけではない。それに加え、学校に通う生徒教師達の種族も膨大なものがある。その種類は実に種々雑多であり、その登下校の様子はまさに『百鬼夜行』そのものだ。

三メトルはあるだろう巨大な体格を持つ巨人族系一つとってみても、一つ目の者もいれば三つ目の者もいる、額から一本角を生やした者もいれば、両方のこめかみからそれぞれ一本ずつ計二本の角を生やした者もいるし、頭頂部から三本の角を生やした者もいる。かと思えば四本腕の者、六本腕の者、中には十二本も腕が生えている者もいる。

巨人族とは全く逆に一メトルにも満たない身長の小柄な小人族系の生徒もいる。直立したトカゲや双頭の蛇といった爬虫類系、シルエットこそ『人』型をしているが全身は獣毛に覆われ、腰からは尻尾、、そしてなによりもその頭は狼や猫、あるいは牛の頭そのものという半獣人系の生徒、ガラス細工のように儚くも美しい姿をした妖精系の生徒、まるで無骨な鎧甲冑か、あるいは特撮ヒーローのスーパースーツでも身にまとっているようなギラギラと光る外骨格で構成された昆虫系の生徒、大きく分類しても数えるのに一苦労な数の種類だし、ましてや細かく追っかけていくと到底数えきれるものではない。

これだけバラエティ豊かな姿形でありながら、登校してくる彼らはみな一様に同じ学生服を着ているのだからこれまた面白い。

男子学生達は濃い紺色の背広に赤いネクタイ、そして同じ紺色のスラックス。女子学生達は男子と同じ濃い紺色のブレザーに赤い棒ネクタイ、そして男子の穿いているスラックスよりも弱冠明るい紺色のスカートを着用していた。

そんな幻想的な、しかし、いつもと変わらぬ朝の登校風景を第一校舎四階の一番端っこにある教室の窓からぼんやりと眺める一人の女子生徒の姿があった。

窓際にある自分の席に座り頬杖をついていかにもアンニュイといった感じで眼下に流れていく『人』の流れを見つめ続ける。一見そ

の表情は憂いを帯びていて何の感情も読み取れないようにみえるが、見る『人』が見ればはっきりわかる強い光がその瞳には宿っていた。

そう、その強い光が宿った瞳は何も見ていないようにみえて、実はずっと何かを探してせわしなくさまよい続ける。

しかし、いくら探しても探しても自分の探しものはみつからなかったようで、女子生徒は深い溜息を吐きだして窓から視線を外す。

そんな女子生徒の様子を、クラス内はもちろん、教室の外にまで集まったたくさんの男子生徒達が熱っぽい視線で見つめ続けるが、女性生徒はそんな男子生徒達から向けられる秋波を全く感じた様子もなく、また視線を窓のほうへと向け直す。気づいてもらえなかった意中の女子生徒に全く気がついてもらえなかった男子生徒達から一斉に溜息が吐き出される。

その女子生徒は非常に見目麗しい姿の持ち主だった。

きらきらと朝の光に反射するつややかな見事なまでの黒髪は背中くらいまであるロングヘアー。頭からは上級龍族の証である長く伸びた二本の角、切れ長の眼はあくまでも涼やかで、鼻はすっと高く、その唇は桜のような淡いピンク色。身長は百六十ゼンチあるかないかくらいで高くもなければ低くもないが、そのスタイルは椅子に座っていても、絶妙であるとわかる。大きめの学生服の上からでもわかる大きな胸、しかし、だからといって太っているという言葉からははるかに程遠いウエスト、形のいいお尻、このまま大人になったら凄まじい美人になることはもう間違いない人物であった。

そんな容姿に加え性格も非常にいいことで知られており、勉学も優秀、スポーツ万能、格闘技の腕はプロの傭兵並、だからといってガサツな性格ではないが、どんな種族の者が相手でもわけ隔てすることなく接する度量も持ち合わせている。

まさに完璧超人のような彼女であるから、この学校で彼女を知らないものはいない。

学校随一のスーパーアイドルが彼女なのだ。

その彼女がいつになくアンニュイな感じで沈みこんでいる。いつ

もなら、登校してきたクラスメイト達に大輪の華のような笑顔を振りまきながら挨拶をしてくれる彼女が、今日に限って全くそれがない。いったいどうしたのかと、男子生徒達ばかりではなく、クラスの女子生徒達までもが心配そうに見つめていたのであるが。

クラスメイト達の誰もが思いもよらぬことで、突如として彼女の機嫌が激変するのだった。

「ごめんね、ごめんね。ちょっと通してね。はい、ちょっとそこ通りますよ失礼しますよ」

そう言って一人の男子生徒が教室へと駆け込んでくる。途中、窓際に座るスーパーアイドルを見るために集まって来ていた野次馬どもに通路を塞がれて教室に入るのに若干難儀していたようだが、なんとか押し通って中に入る。そして、まっすぐ自分の席へと移動してカバンを机の上におろした彼は、深い深い溜息を吐きだすのだった。

「あっぶな～。着替えるのに手間取って遅刻しちゃうところだったよ、もう。やっぱり駅のトイレを使うのは考えものだよねえ。サラリーマンの『人』達が個室に入るとなかなか出てこないんだもん。中でたばこ吸ったり新聞読んだりしてるんだもんなあ。どこか落ち着いて着替えられるところを探さないとやばいよねえ」

などと訳のわからないことをブツブツと呟きながら、もう一度溜息を吐きだしてその男子生徒は自分の席へと座り込む。そして、物凄く疲れたような感じで机に置いた自分のカバンを開けると、中から筆記用具とノート、それに分厚い辞書のような専門書らしきものを取り出してそれを机の上へと広げる。

その後中身を取り出したカバンは机の側面にあるフックにかけて机の上に視線をもどすと、専門書らしきものをゆっくりと開いて中

を読み始めようとする。

「さてと、いつも通り必要なところを抜粋してメモしないと。今日は夕方からいろいろとあるしなあ」

またもやブツブツと独り言を漏らしたその人物は、広げたノートに専門書の内容を書き写そうとし始めたが、何かが思い浮かんだのか非常に幸せそうな表情になってその手を止める。

「えへへ、何があるのかなあ、楽しみだなあ」

「夕方に何があるというのじゃ？」

「いやあ、僕も何があるかわからないんだよねえ」

「わからないのに楽しみなのか？　いったい何をウキウキしているのじゃ、連夜？」

「はじめてなんだもんウキウキもするよ。それにわからないから楽しみなんじゃな・・って、うわああっ！！　ひ、姫子ちゃんなにに！？」

専門書を前にうっとりと何かを夢想していた連夜だったが、いつのまにか自分の前の席に美貌のクラスメイトが座っていて、しかも、とてつもなく不機嫌そうな表情でこちらを見つめていることに気がついて大きくのけぞる。

「『なになに』ではないわ。朝来たらまずすることがあるのではないか？」

「え、あ、そ、その『お早う、姫子ちゃん』」

「『お早う、連夜』と返したいところだが、全然早くないではないか。登校途中で何か起こったのではないか、困ったことになっているのではないかと心配してヤキモキして待っていたというのに、なんだその弛み切った顔は」

不機嫌極まりない様子の幼馴染に対しとりあえず朝の挨拶をする連夜であったが、幼馴染の機嫌は更に悪くなる一方。いったい何がそんなに気に入らないのかわからず、顔をしかめて問い質そうとした連夜であったが、怒り顔の幼馴染の目に光るものをみつけて一旦口を閉ざす。本当に自分のことを心配してくれていたのだと察し、表情を改めると静かに頭を下げる。

「ごめんね、姫子ちゃん、心配かけちゃって。ちょっと来る途中でいろいろとあってさ、来るのが遅れちゃったんだ。でも、別に大したことじゃないんだ。ちょっと途中でお腹が痛くなっちゃってね、駅のトイレに籠っていて遅れちゃっただけ」

いや、参った参ったという感じにバツが悪そうに笑う連夜の顔をしばらくじっと見つめていた幼馴染だったが、やがてふっと表情を和らげると優しい笑顔を浮かべて見せる。

「わかった、何もなかったのならよいのだ。それよりも腹のほうはもういいのか？」

「うん、すっきりさっぱりさ。それにしても、慌てて家を出るところくなことがないよね」

なんとか幼馴染の機嫌が上向きに変わってくれたことに内心大い

にほっとしながら、連夜は苦笑を浮かべてまだ若干心配そうな様子を見せている幼馴染に笑いかける。

「何か家であったのか？」

「久し振りにダイ兄さんが帰ってきたんだけど、ちょっと一悶着あってね。まあ、詳しい話はまた家に帰ってからになるんだけど、ちょっと根が深そうだよ」

「そうなのか。そう言えば大治郎殿には久しくお目にかかっておらぬが、お元気なのか？」

「元気元気。でもまあ、夕方には元気でなくなってるかも。今、こってりとお母さんに絞られているはずだから」

「大治郎殿はいったい何をしたのじゃ？　連夜のご母堂を怒らせるということはなみなみならぬことだと推測するが」

「お願いだから聞かないで。できれば間違いであってほしいと願っていることなんだけど・・多分、間違いじゃないことだから」

「本当に連夜はいろいろとあるのう」

心底ぐったりした表情で机に突っ伏す連夜の背中を優しく撫ぜて慰める美貌の幼馴染。

彼女の名は『龍乃宮（りゅうのみや）　姫子（ひめこ）』

連夜の幼稚園時代からの知り合いで、非常にいろいろと紆余曲折があった後に友達になった人物。はっきり言ってしまえば出会った

当初は連夜の『敵』であった彼女であるが、小学生時代にあったあることをきっかけとして連夜に対する認識を百八十度変えることになり、今は『敵』ではない。

下級中の下級種族であり、差別されやすい種族トップテンに常に入るといわれている種族『人間』族に生まれた連夜と違い、姫子は上級種族中の上級種族の一つで、かつて大陸の東方一帯に覇を成し、数々の『神』排出したという伝説の『龍』族の生まれ。しかも一族をまとめ導く定めを背負う王族でもあるという姫子の周囲はいつも『人』で溢れている。姫子自身の魅力に惹かれる者、『龍』族の力に惹かれた者、王族である姫子に取り入ろうとする者、集まってくる者はそれぞれ様々でその思惑も千差万別であるがともかく姫子はいつも『人』に囲まれている。

そして、対照的にいつも一人でいるのが連夜だ。

種族的に差別されやすい人間族であることが一番大きな原因で、人間族の連夜と仲良くすれば理不尽な差別に巻き込まれるかもしれないという思いから、多くのクラスメイト達やそのほかの学生達はみな連夜に近づこうとしない。連夜もまた、それをよくわかっているので、自分から友達を作ろうとはしない。自分のせいで友達達が窮地に陥ることになってしまうのは嫌だったからだ。

学校のクラスメイト達で表立って差別的な行為をしてくる者はごく少数ではあるが、表だってではなくそれとなく敬遠している者となると大部分ということになる。

そんな微妙な位置にいるのが連夜である、普通は誰も彼と友達になろうとはしない。多くの者達は関わりになろうとはせず、目を閉じ、耳を塞ぎ、そこにまるで誰もいないかの如く扱う者ばかり。

しかし、そんな中にあって全く躊躇することなく連夜に接する少数派の者達がいる。

その少数派の一人が姫子だ。

それも軽く挨拶を交わすだけという軽い接し方ではない。授業の合間の休み時間、昼休み、放課後の一時と、あらゆる時間暇さえあ

れば『連夜、連夜』と纏わりついて懐きまくるほど連夜に執心しているのだ。だが、だからといって二人が恋人同士かというとそういうわけでもなく、今のところはあくまでも仲の良い友達の関係で、当人達自身もお互いについてそれ以上の関心を持っていないような風に見える。今のところは。

高校に入学した当時は二人が恋人同士ではないかという噂が広がり、一時期大変な騒動に発展したこともあったが、結局、誤解であることがはっきりと判明しそれ以降事態は沈静化している。とはいえ、姫子に秋波を送っている男子生徒達からすれば、すぐ側で仲良くしている連夜の姿を見ているのは当然の如く面白いものではなく、それ相応の騒動が裏では巻き起こっていたりもする。勿論、そのことを聡い姫子が気がつかないわけがない。

これまで自分のせいで大好きな友達が何度もひどい目にあいそうになっていたことはちゃんとわかっていた。そのうちの何度かには姫子自身が飛び込んで行って文字どおり身体を張って事態を鎮静化させたこともある。しかし、それもこれも学校の中にいる間ならではで、学校の中にいる間ならば、姫子独自が持つ彼女のシンパ達の情報網を駆使して連夜を守ることができると思っているし、誰にも手出しはさせていないと思っているのだが、学校の外のことになると流石の姫子もカバーしきれない。

だからこそ、今日は本気で心配していたのだった。いつもなら自分よりも早く登校し、自分の机で静かに専門書を読んでいる連夜。そして、姫子達が登校してくるとあの穏やかな笑顔で出迎えてくれるのだ。その笑顔を見ることが姫子は何よりも大好きだった。優しく包みこむような連夜の温かい笑顔。今日もそれが自分を待っていると思ったのに、肝心の本人はそこにはいなかった。最初はちょっと遅れただけかなと思っていたのだが、十分待っても二十分待っても連夜はやってこず、窓際に座って連夜が登校してくる姿が見えないかとやきもきしながら待っていた。

きっと連夜のことだから大丈夫、心配することなど何もないとい

う自分に言い聞かせてみるが、どうしても不安は拭いきれず、いっそ学校を抜け出して探しに行こうかとまで思いつめていたというのに、どうやって登校してきたのか姫子が目を皿のようにして見つめていた中をすり抜けるようにしてやってきた連夜は、何事もなかったかのように自分の席へ。

何事もなく登校してきたこと事態にはほっとしたが、自分に対していつもしてくれているはずの挨拶がなかったのは非常に面白くなかった。

しかもしかも、何かわからないが、見たことのない連夜の嬉しそうな表情がめちゃくちゃ癇に障ったのだった。自分でも何がなんだかわからないが、物凄く面白くなく、腹が立って腹が立って仕方なく、正直なところその場で怒鳴り散らして喚き散らしてやりたいところであったが、なんとかそれを腹の中に押し込んでとにもかくにも連夜の前に行ったというわけであった。

どうやら登校が遅れた理由は姫子が考えていたような危険なモノではなかったようだし、朝にあったという連夜の兄上絡みの騒動もウソではないようなのだったが、どうにも先程の連夜の笑顔が気になる。

いまだに大治郎のことで頭を悩ませて机に突っ伏している連夜の背中を撫ぜてやっていた姫子だったが、やっぱり何か胸のもやもやが晴れないので思い切って自分の疑問を口にすることにする。

「あの、連夜」

「ん～？　な～に姫・・子ちゃんって、どうしたのっ!？　まだ、僕のこと心配してるの？　それとも僕、また何かした？」

姫子の口調がいつもと違う声音であることに気がついた連夜が、むくりと身体を起こしてみると、そこにはとてつもなく不安そうな表情をした姫子の姿。それを見てびっくりした連夜は慌てて姫子に

問いかける。

「いや、あの、さっき夕方がどうのこうのって言ってたけど・・何かあるの？　誰かと会うの？」

「げっ・・聞かれてたのね・・」

目に見えて狼狽する様子を見せる連夜を見て、姫子の心にさらに大きなざわめきと不安が広がる。これ以上聞けば、自分が聞きたくない聞いてはいけない事実がわかってしまうような、そんなとてつもない嫌な予感。そんな姫子を見つめながら、連夜は何度か口を開けようとしては閉じ、また開いて言葉を紡ごうとしては閉じるということを繰り返していたが、やがて何かを諦めたような表情を浮かべると今度こそ言葉を紡ぎ始める。

第三話　『姫龍と貴龍と黄龍』　その２

「あのね、姫子ちゃん」

「うむ」

連夜が思いつめているようでいて、それでいてとても恥ずかしそうな、そして嬉しそうな顔で何かを告白しようとしだすと、姫子はずいと連夜に向かって身体を乗り出す。

「恥ずかしいからあまり言いたくないんだけど」

「うむうむ」

「実は今日僕ね・・」

「うむうむうむ」

「夕方から・・って、ちょっと待って、姫子ちゃん、顔近い！！めっちゃくちゃ近い！！」

伏し目がちな状態で話していたため、今まで気がつかなかった連夜であったが、ふと視線をあげてみると姫子の顔が自分のすぐ目の前にあるではないか。それもあとわずかで自分の顔に接触してしまうほどの超至近距離。連夜は泳ぐように両手をバタバタとさせながら慌てて椅子を引いて姫子から離れる。

すると姫子も自分がいつのまにか連夜の顔に急接近していたことに今更ながらに気がついて、顔を真っ赤に染めながら慌てて顔を引っ込める。

「す、す、すまぬ、連夜。その、あの、れ、連夜の声がよくき、聞こえなかったから、その」

熟したトマトのように真っ赤に染まった顔を伏せ、両手を組んでもじもじしながら小さな声で言い訳を続ける姫子。そんな姫子の言い訳を聞いていた連夜は、どこかほっとした様子で胸を撫で下ろし、苦笑を浮かべて見せる。

「ああ、そっか。ごめんね。でも、あまり大声で言いたくない内容だったからさ、自然と声が小さくなっちゃったというか」

そう言ってしばらく腕を組んで考え込んでいた連夜だったが、やがて顔をあげると困ったような笑顔を浮かべながら姫子のほうに視線を向ける。

「姫子ちゃん、ごめん。やっぱり恥ずかしいから勘弁して。なんだかんだ言って僕一人舞い上がってるだけで、僕が期待しているようなことは何もないのかもしれないしさ。もし、そうだったら僕すっごいみじめだから」

「えええええっ!?　な、なんじゃそれは!?　そこまで言われたら逆に気になって仕方ないではないか!!」

「ご、ごめんね、思わせぶりしちゃって。でも、ほんとに僕も何があるか知らないんだ。待ち合わせだけはしているんだけど・・」

「待ち合わせ?　誰と?」

「それはもちろん」

「もちろん誰じゃ？」

しばし見詰めあう連夜と姫子。片方は『しまった、また口が滑ったあああああっ！！』という焦りまくった表情で。もう片方は『それはいったいどこの誰なのよ！？』という怒りまくった表情で。

戦う前からすでに勝敗が決した状態で睨みあう二人であったが、やがて敗者は視線をつつ～～っと逸らし、苦し紛れの一言を口にする。

「も、黙秘権を行使します」

「れんやあああああっ！！」

最後の一言で完全に何かが切れてしまった姫子は、連夜の襟首をガシッと掴むと、縦に横にとぶんぶん振りまわしながら涙目になって怒声をあげる。

「誰！？　誰なの！？　言いなさい、言いなさいよ！！　女？　もしかして女なの！？　女と待ち合わせしているのね！？　そうなのね！？」

「ちょっ、ひめっ、ぐるしっ、やめっ、ちぬっ、ちんじゃうっ」

「いやっ、連夜の不潔！！　女と、女と待ち合わせしているだなんて！！　汚れてる！！　連夜だけはあいつのようなことはないと思っていたのに、あんなスケベの権化のような奴と違って私を裏切ったりしないと思っていたのに！！　はっ！！　ま、まさか、もう汚れちゃったの！？　大人の階段を上っちゃったの！？　うそでしょ？　ねえ、連夜、嘘よね？　そんなの嘘よね！？　嘘と言ってええ

えええっ！！」

「う、うぷっ、は、吐きそう、ひ、ひめっ、ちゃん、やめ、もう、げんか、はいちゃう」

上級種族中の上級種族である龍族のありあまる身体能力でぶんぶん振り回され続けた結果、連夜の顔色は完全に真っ青に。しかし、当事者の姫子は全くそれに気がつかず、泣き叫びながら連夜の身体をシェイクし続ける。人間族にしてはかなり頑丈で精神的にも非常にタフな連夜であるが、物には限度があり、お腹の中から徐々にせり上がってくる酸っぱい何かを押し留めておくのは最早限界に近い状態。このままでは目の前の美貌の幼馴染にとんでもないものをぶちまけてしまいかねないと、連夜が本気で危惧し始めた、まさにそのとき、三人の救い主が姫子の身体に飛びついて、連夜からひっぺがえしてくれたのだった。

「いけません御姉様！！　正気に返ってくださいませ！！」

「姫子様ストップ、ストップ！！」」

「これ以上はあかん！！　姫子様、ええ加減にしとかんと宿難はん死んでしまうで！！」

音もなく姫子に近づいた三人の女子生徒達は、姫子の両肩、腰、足に組みついて完全にその動きを封じにかかる。そんな状態であるにも関わらず、姫子はまだ『連夜のばかあああああっ』と泣き叫びながら自慢の馬鹿力で三人の手を振りほどこうと大暴れを繰り返すが、流石の姫子も一対三の劣勢を跳ね返すことはできず、やがてがっくりと肩を落として力を抜くとその場にうずくまってしまうのだった。

「はぁ、はぁ、う、うぇっぷ。あ、あぶないところだった。助かったよ、龍乃宮さん、水池さん、東雲さん」

新鮮な空気を存分に吸い込み、せり上がって来ていたものをなんとか胃の中に押し戻すことに成功した連夜は、自分の救い主達に視線を向けてぺこりと頭を下げる。すると、救い主のリーダーらしき少女はなんとも困ったような表情を浮かべ、姫子と連夜を交互に見つめながら深い溜息を吐きだしてみせ、そのまま目の前にうずくまる姫子に何かを言いかけたが、はっと何かに気がついたという表情をしたかと思うと、姫子からついっと視線を外す。そして、どこか拗ねたような視線を連夜に向けて責めるような口調で話しかけてくるのだった。

「礼など必要ありませんが、それよりも何か忘れていませんか、宿難くん？」

「え、忘れていることって・・ああ、そっか。龍乃宮さん、お早うございます。それに水池さんも、東雲さんもお早うございます」

一瞬きょとんとした顔をして見せた連夜であったが、すぐに朝の挨拶がまだであったことを思い出して三人の少女達に慌てて挨拶をし、連夜の挨拶を受けた三人の少女達はにっこりとほほ笑んで挨拶を返す。

「おはようございます、宿難くん」

「おはようさん、宿難はん」

「はい、お早うございます、宿難くん。ところで朝からいったいな

んの騒ぎですの？　御姉様がここまで取り乱すとは、宿難くん、あなたいったい御姉様に何をなさったの？」

詰問というほどきつい口調ではないが、明らかに責めているとわかる口調で連夜に穏やかならざる視線を向けてくる少女。

『龍乃宮（りゅうのみや）　瑞姫（みずき）』

姫子よりも三カ月遅く生まれてきた異母妹で、姫子と同じく龍族の王の一族に名を連ねる者。

母違いの妹ではあるが、彼女は姫子に非常によく似た美少女だった。瓜二つというほど似ているわけではない。しかし、一つ一つのパーツが本当によく似ている。

姫子とはっきり違うと言える部分は、目と髪ぐらいだろうか。黒眼の姫子に対し、瑞姫のそれは鮮やかな碧色、漆黒で肩よりも若干長いくらいの髪の姫子に対し、瑞姫の髪は深い碧い色で、腰のあたりまで伸びているほど長い。身長は姫子と同じくらいで、スタイルもまた姫子とよく似ていて抜群であるが、若干姫子よりはボリュームがなく、その分すっきりしている感じがする。

以上のように外見的には双子と言っても過言ではないほど姫子とよく似ている瑞姫だが、内面となると姫子と決定的に違うところが二つある。

一つはそのにじみ出るオーラの質の差。遠く離れた場所からあっても絶対に見間違えようのないような強烈極まりない眩しいオーラを放ち続ける姫子と対照的に、瑞姫が放っているオーラはあくまでも控えめで静かに輝くオーラ。同じような麗しい容姿の美少女達であるが、並んで立つと太陽と月くらいはっきりとその輝き具合が違っていた。

とはいえ、姫子同様に実に優秀な人材であることは間違いなく、魅力や武術に関しては姫子に大きく及ばないものの、学力、スポー

ツに関しては姫子を凌ぎ、学校のスーパーアイドルである姫子人気に隠れてわかりずらいが、学校内での実際の瑞姫の人気はかなりのものがある。そんな瑞姫であるから、姫子同様連日のように男子生徒達から秋波を寄せられているわけだが、ここでもう一つの違いが現れる。

もう一つの違い、それは、完全フリーで未だ意中の人はいないと公言している姫子と逆に、瑞姫は既に意中の『人』物がいることを公言していることである。

相思相愛になっているわけではないが、今のところはその『人』以外の『人』とお付き合いすることは考えられないと周囲の知人達にきっぱり断言していて、それが故に、姫子のほうと違って直接あるいは間接的にも瑞姫に告白してくる男子生徒はほとんどいない。

告白してもほぼ百パーセント断られるのがわかっているからだ。実際、まだそのことを公言していなかった高校一年生の時に、告白した者達は全て奇麗に玉砕した。

その中には学校で十指に入るような美少年や、天才的武術家の生徒、学年トップスリーに常に入る秀才、あるいは学校でかなりの実力を誇る不良など、錚々たるメンバーが顔を連ねていたが、瑞姫はいずれの告白を受けても決して首を縦に振ろうとはしなかった。

それだけのメンバー達を退けてしまうほど、瑞姫が強く想う相手とは。

みながみな、その意中の『人』物について知りたがったが、最初瑞姫は恥ずかしがってそれを明かそうとはしなかった。しかし、異母姉の姫子がそれに興味を示し、半ば強引に彼女の口を割らせてその正体が判明する。

『瑞姫、お主の好きな殿方はいったいどこのどなたなのじゃ？　将来私の義弟になるのかもれないのじゃから、教えておくれ』

『もう～、御姉様は本当に強引なんですから。でも、別に隠してい

るわけではないのですよ。私が一方的にお慕い申し上げているだけで、正式にお付き合いをさせていただいたことなどないものですから、私はその方のお名前を知らないのです』

『な、なに？　名前を知らない？　いや、しかし、この学校の生徒なら名前くらいはわかるじゃろ？』

『いえ、この学校の生徒ではないかもしれません。あるいは私よりも年下かもしれませんし、年上かもしれません。何せ、ちゃんと姿形を確かめたわけではありませんしね。そうそう、男性かどうかもわからないんですの。あはは、おかしいでしょ』

『『あはは』じゃないわ！！　お主は私をからかっておるのか！？　いったいなんじゃそれは！？　ひょっとしてお主ペットか何かに恋しているとかそういうのじゃないだろうな！？』

『違います。れっきとした『人』ですわ。その方は『サードテンプル』周辺に気まぐれに現れる黒装束の仮面の騎士』

『黒、装束の、仮面の、騎士？　な、な、なんじゃとぉっ！？　そ、それはもしや『崇鴉（たたりがらす）』ではないのか！？』

驚愕の声をあげる姫子に対し、瑞姫は自分が恋に落ちた顛末を恥ずかしそうに語って聞かせた。

それは瑞姫が中学校三年生の時のこと。瑞姫は『サードテンプル』にある進学塾に通っていたのだが、その帰り道、気まぐれでいつもと違う道を通って帰ってみようとしたところ、見事に迷って『サードテンプル』の裏通りに迷い込んでしまったのだった。賑やかで華やかで治安も行きとどいている表通りと違い、裏通りは文字通りのスラム街。あっというまにチンピラ達に囲まれて衣服をむしり取ら

れた瑞姫は、女性として最大の屈辱と恥辱と、そして、恐怖を味わうところであったが、そこに颯爽と現れて彼女を救いだしてくれたのが黒装束姿の謎の怪『人』であった。

『なるほど、そのとき自分を助け出してくれた彼奴に惚れたとそういうわけか』

『ええ、そうなんです。あのときのことが忘れられなくて。本当にカッコよかったですよ。あの方は私の騎士様なんです。白馬の王子様なんです。スーパーヒーローなんです』

『そうか、そんなことがあったのか』

『ええ、そうなんです』

『ところで瑞姫。さっきから気になっていたのだが』

『なんですか、御姉様?』

『なんでさっきから連夜のほうを向きながら話しておるのだ? 』人』と話をするときは相手の顔をちゃんと見ながら話せっていつも言ってるくせになんじゃその態度は』

『あ、ごめんなさい。ちゃんと『人』の話を聞いてくださっているか気になったものですから』

『いや、だから聞いているのは私で、連夜じゃないだろう?』

『ああ、そういえばそうでしたね。そうでしたそうでした。御姉様に私の話を聞いていただいているのでした。間違っても私の意中の

『人』にわざと聞かせるように話しているのではないのでした』

『なんじゃそれは？　どうした、連夜、なぜお腹を押さえておる？　腹痛か？』

『うう・・胃が・・胃が痛い』

若干拗ねたような、しかし、どこか物凄く照れまくっているようなそんな表情でじっと連夜のことを見つめる瑞姫と、その視線をわざと見ないようにするかのように背中を向けて冷や汗をだらだら流しながらお腹を押さえてうずくまる連夜を不思議そうに見つめるばかりの姫子。

ともかくその時の会話が瞬く間に学校中に広まることになり、『祟鴉（たたりがらす）』の伝説がまた一つ増えてしまったわけであるが、その会話があってからなんだかんだと一年が過ぎた今も瑞姫と意中の『人』である『祟鴉（たたりがらす）』の間に進展があったとは伝えられていないが、瑞姫は今も『祟鴉（たたりがらす）』への想いを抱き続けていると明言し続けていて、たまに現れる告白者に対しては一貫してその態度を崩していない。

そして、自分に近づこうとする男子生徒達をやんわりと拒絶し続け、公的なこと以外で基本的に自分から男子生徒に関わろうとすることはほとんどない。

たった一人の男子生徒を除いてはであるが。

その瑞姫にとっての特別な例外にあたる男子生徒を、瑞姫は優しい色に満ちた視線でじっと見つめ続ける。そんな瑞姫の姿を連夜は眩しそうに、しかし、どこか寂しそうで悲しそうに見つめ返す。や

がて、何かを振り切るかのように首を二つほど横にふった連夜は、今まで自分の瞳に浮かべていた複雑な色をそっと消し去ると、曖昧な笑顔を浮かべて彼女に向ける。

「いや、実に説明しにくいんだけど、その、僕の今日の夕方の予定についてね」

「はあ？　宿難くんの夕方の予定？　それだけのことで御姉様はあれだけ取り乱されたというのですか？」

「『それだけのこと』じゃないもん！！　私にとっては大事なことだもん！！」

ついさっきまでの輝かしい荘厳な美しさはどこへやら、すっかり拗ねてしまった姫子はぐしゅぐしゅと子供のように泣きながら隣に立つ瑞姫を恨めしそうに睨みつける。そんな姫子の様子を見て苦虫を噛み潰したような表情でこめかみを押さえていた瑞姫だったが、やがてキッと姫子を睨みつけてビシッとその美しい指を突きつける。

「『だもん』じゃありません！！　龍族の将来を背負って立とうという者がなんたる醜態ですか。いいですか、御姉様はいずれ龍族の三大権力者の一つ『乙姫』になられるお方なのですよ。『人』の上に立てば、個人の予定など気にしていられる場合ではなくなるのです。公『人』として常に大局を考えて行動しなくてはならないというのに」

「そんな先のことは知らないもん、今は連夜の夕方の予定のことのほうが重大なんだもん」

「だから、『だもん』じゃありません！！　なんですか、その口調

は！！　いいからちょっとそこに正座してください！！　早く！！
いますぐに！！」

未だにぐしゅぐしゅ言っている姫子に対し、物凄い剣幕で詰め寄った瑞姫は、有無を言わさず彼女を冷たい床の上に正座させ、自分自身もその対面に正座して座る。そして、『龍族の誇りや貴き身分の者の責任について御姉様はいったいどうお考えなのですか』などと語り始め、姫子は姫子で瑞姫に対して『瑞姫は真面目で厳しすぎるのじゃ』と反論し、双子のようによく似た二人の美少女は己の主張こそ正しいとばかりに激論を交わし始める。

第三話　『姫龍と貴龍と黄龍』　その3

姫子と瑞姫は決して仲の悪い姉妹ではない。むしろお互いがお互いを深く信頼していて、異母姉妹であることを決して感じさせないほど実に仲の良い姉妹なのである。しかし、信頼しすぎているせいなのか普段からあらゆることに対してお互いがお互いに遠慮することはほとんどなく、喧嘩ともなるととことんまでぶつかりあい、言いたいことを全て吐き出しあうまで止まらなくなる。

とはいえ、お互いがお互いを本気で案じるが故の本音であるとわかっているので、どれだけ激しい喧嘩になっても、最後にはちゃんと仲直りするのであるが。

「それだから御姉様は緩いのです！！」

「瑞姫こそ融通が利かない！！」

「あ～、また始まってしまいました。宿難くん、いい加減なところで止めてもらえませんかね？」

「え～～～、また僕がその役目なの～？　それは僕なんかよりも付き合いが長い水池さん達の役目だと思うけどなあ」

姫子と瑞姫の激しい舌戦をすぐ側で見守っていた小太りの女子生徒が、ふと連夜のほうに視線を向けて口を開き、連夜はなんとも困り果てた表情でその小太りの女子生徒を見返すのだった。

『水池（みずち）　はるか』

龍乃宮家に代々仕えている中級龍族の一族の娘で、姫子と瑞姫の

友達兼軍師兼お付き世話役をしている人物。ふわふわとした女の子らしいウェーブのかかった肩まである茶色の髪に、中級龍族の証であるちょっと短い角、愛嬌のある満丸の顔、人畜無害と書いてありそうなほどいつも絶えされることのない笑顔。身長は連夜や姫子よりも弱冠低いが、その体はどこもかしこもボリューム満点。まあ、太っているというほど太っているわけではないが、まあ、平均的な女子高生の体型ではないことは確かだ。とにかく普段からおっとりとしており、陽だまりの中でのんびりしている乳牛のような人物なのだが。いざトラブルが起こったときあるいは巻き込まれたときと飯のときだけは、恐ろしい運動能力と情報収集力と、そしてなによりも悪知恵を発揮する。

「だって宿難くんが間に入ったほうが何かと穏便に事が済むんだもの。お願い、先生が来る前になんとか一つ」

「勘弁してよ。さっきだって姫子ちゃんにうまく話ができなくて、あやうく今日の朝ごはんの残骸を机の上にお披露目するところだったんだから」

両手を合わせて拝むようにして二人の仲裁をしつこく頼みこんでくるはるかに対し、連夜は本気で困惑した表情を浮かべて見せる。すると、はるかの横に立っていた背が高くスレンダーな体格のもう一人の女子生徒が、ずいっと連夜にその顔を近づけてくる。

「いざとなったらうちら二人でなんとかするから、とりあえず、間に入ってや宿難はん。さっきも助けてあげたやんか」

「それはまあ、そうなんだけどね」

もう片方の『人』物は連夜の肩に自分の腕をがしっと巻きつける

と、片手をひらひらと振りながら困惑している連夜に面白そうな視線を隠そうともせずに言葉を紡ぐ。

『東雲（しののめ）　ミナホ』

龍乃宮家に代々仕えている下級龍族の一族の娘で、姫子と瑞姫の友達兼秘書兼ボディガードをしている人物。

ベリーショートの赤毛に、他の二人と違い角はないものの、耳が魚の鰭のような形で伸びていて、銀ぶち眼鏡、見るからに委員長か風紀委員みたいな雰囲気を持つ。身長は連夜や姫子よりも高く、クラスの男子と比べても高いほうに入ると思われる。細見だが、引き締まった身体をしており古流武術の使い手で、学内でも屈指の実力者。頭も非常に良くて成績優秀な優等生なのだが、いつもはるかのツッコミ役になってるせいか、周囲の友人達からはそういうふうには見られていない非常に損な役回りの少女である。

「な、な、ええやろ？　姫子様も瑞姫様もなんやかんや言うて、宿難はんが本気で言うことには素直に聞きはるから」

「いや、そんなことないでしょ。二人とも同じように頑固一徹で、自分の道をひたすらどこまでもどこまでも真っすぐの『人』達なのに、僕ごときの言葉でどうこうなるわけないじゃない」

「もう～～、ほんとに宿難くんは自分のことわかってないですねえ。うちの姫君達に絶大な影響力を持っているというのに。しょうがない、こうなったら最後の手段です。ミナホ、あれいくわよ！！」

「よっしゃあ、わかったで！！」

「？」

椅子に座った状態できょとんとしている連夜の両側に、素早く移動したはるかとミナホは、呆気に取られている連夜の身体をガシッと掴んで拘束する。

「え、ちょ、水池さん？　東雲さん？　なんなの、なんなの？」

「ちょっとだけじっとしててね、宿難くん、ん～～」

「すぐ済むからな、宿難はん、ん～～」

「なになになに!?　ちょっ、顔近い!!　水池さんも東雲さんも顔近い!!　めちゃくちゃ近い!!　やめやめやめ!!　ちょっと、やめてってばあああ!!」

いったい何が起こるのかと連夜は両側で自分を拘束する二人を交互に見守っていたが、突如として二人は両側から顔を近づけると、口をタコのようにすぼめて連夜の頬に近づけていく。それに気がついた連夜はたまらず悲鳴をあげる。そして、ばたばたと両手を振り回して懸命に二人を振りほどこうとするが、龍族特有の馬鹿力でがっちり拘束されてしまい、見動きが全く取れない状態。

一縷の望みをかけて、悪い冗談だよねと両側に視線を走らせてみるが、唇を近づけてくる二人の表情は妙にうっとりしていて冗談とも本気ともつかない状態でその判断すらつかない。

またもや絶対絶命のピンチが訪れ連夜は再び顔を青くする。

どうすることもできないまま、連夜のほっぺは二人にちゅ～されてしまうのか、と思われたそのとき。

「「やめんかあああっ!!」」

凄まじい怒声をあげて飛びこできた姫子と瑞姫が、連夜の前にある机を見事なコンビネーションの強烈なダブルキックで天井へと蹴り上げて三人の間合いへと踏み込むと、二人に拘束されている連夜を力づくでひっぺ返して救出する。

「あああ、連夜、大丈夫か？　なんともないか？」

「なんてことでしょう。宿難くんのほっぺ汚れてないかしら？　何か悪い病気でもうつっていたらどうしましょう」

「み、瑞姫、連夜を今すぐ保健室に連れて行って消毒じゃ！！　手遅れになる前になんとかするのじゃ」

「そうですわね、御姉様。それがいいですわ」

連夜の身体を横抱きにした姫子が物凄く心配そうな顔で連夜を覗き込み、その横に立つ瑞姫は連夜の顔を両手ではさみこみ、真剣な表情を浮かべて怪我や何か変わったところがないかとチェックして回る。先程まで壮絶な舌戦を繰り広げていたとは思えない見事な連携ぶりに、それを見ている周囲の者達は呆れるやら感心するやら。

「よしっ、私の読み通り仲直り作戦成功！！　のはずなんだけど・・ちょっと、姫様達、あんまりじゃありませんか！？　悪い病気にうつるってどういうことですの！？」

「そうやそうや！！　ちょっとほっぺにちゅ～したくらいなんやっちゅ～ねん！！

自分達の目論見通り二人を仲直りさせることに成功し、ひっくり返ったまま同時にサムズアップし満面の笑みでお互いの顔を見合せ

たはるかとミナホ。しかし、聞こえてくる二人の言葉があまりにもあんまりな内容だったので、反り返るようにして一気に立ち上がると、姫子と瑞姫に対して猛然と詰め寄って行く。

「ちゅ、『ちゅ～』だなんて！？　み、未成年の私達がそんなことは早すぎます！！」

「何言ってるんですか、瑞姫様。お隣の城砦都市『ゴールデンハーベスト』では成人の年齢十五歳なんですよ？　その向こうの『ストーンタワー』だと十三歳で成人で結婚もできるっていうのに」

「こ、こ、こここここは『嶺斬泊』で、ここでの成人は二十歳で、け、け、結婚できるのは十八歳なのじゃ！！　なのじゃったら、なのじゃ！！」

「成人になるのは二十歳で間違いないけど、結婚許可年齢は女性は十六歳やで、姫子様。十八歳にならな結婚できへんのは男だけ。つまり十七歳のうちらはもうそういうお年頃やねんで。少女のままではいられへんねんで。大人の女になって、あんなことやこんなこともせなあかんねんで」

「あ、あんなことや・・」

「こ、こんなことだなんて・・」

ミナホの言葉にかなりのショックを受けた姫子と瑞姫は一瞬よろよろと後ずさったが、何故かすぐに顔を赤く上気させると、二人同時に連夜のほうへと顔を向け熱っぽい視線を送るのだった。

「れ、連夜もあ、あんなことしたいのか？」

「し、宿難くんもこ、こんなことしたいんですか？」

「えっ！　うっ？　なんで僕個人特定！？　しかもそれってどう答えても撃沈確定、正解なしのひどい質問じゃない！？」

半分傍観者になりかけていた連夜だったが、思わぬ方向からきわどい質問を投げかけられることになり、目を白黒させてあわあわと口ごもる。しかし、二人はそんな連夜の様子を間近で見ているというのに、素で全く気がついていないようで、どんどん顔を近づけてきて質問を投げかけ続ける。

「ほ、ほんとはやっぱりしたいんじゃな？」

「ひ、否定しないってことはそうなんですね？」

「いや、ちょっと、二人ともなんか目が怖い！！」

「れ、連夜が望むなら・・その、連夜は一番の親友だし、どうしてもっていうならその・・」

「し、宿難くんが我慢できないっていうなら・・あの、宿難くんには今まで散々お世話になってきているから、その、私は・・」

「いやいやいや、二人ともどういうつもりで言っているのかわからないし、わかる努力をするつもりは全くないし、今聞いた恐ろしい質問についてはこのまま心の奥底にそっとしまって淡い青春の思い出の一ページとしてしまうので、今日のところはこのままお開きということで一つよろしくお願いします」

「「しまいこむな!!　お開きにするな!!　よろしくお願いしますじゃないでしょ!!!」」

姫子の腕からそっと抜け出して床に降り立った連夜は、ガンガン詰め寄ってくる二人の美少女の顔をなるべく見ないようにして自分の席へと立ち去ろうとしたが、二人の美少女達はそんな連夜の腕をすばやく両脇から掴んで『絶対に放すもんか!!』とばかりに連夜の小さな体を自分達のほうへと引き寄せる。

「ちょ、二人ともお願いもうそろそろ勘弁して!!」

「いいえ、勘弁できません。何が青春の一ページですか!?　勝手に『人』を思い出にしないでくださいませ!」

「そうじゃそうじゃ!!　それに恐ろしい質問とはどういうことじゃ!?　私達の質問をまるで呪か何かのように言いおって!!　こらっ、わざとらしく怯えた表情を作ってこっちを見るな!!」

「いや、だって、ほら、僕ってか弱い男の子だし」

「「自分でか弱いっていうな!!」」

ぐすんぐすんとわざとらしい嘘泣きをしてみせる連夜の姿を見て、二人の美少女達の目がますます吊り上がる。

「全く連夜はふざけたことばっかり。そんなのはあのバカ剣児だけでいいのじゃ。あっ、そうじゃ、バカ剣児のことで思い出した。連夜、いったい今日の夕方何があるのじゃ!?　いったい誰と待ち合わせをしていることを隠そうとしているのじゃ!?」

「また御姉様は宿難くんのスケジュールについてですか？　もうそんなことどうでもいいじゃありませんか。宿難くんだって、待ち合わせをして『人』と会うことだってある・・え？　隠そうとしたですって？」

再び先程の話題を思い出した姫子が連夜に詰問を開始するが、そんな逆上気味になっている姫子の様子を見た瑞姫は返って冷静になることができ、表情を再びいつもの穏やかなものへと変化させる。そして、やんわりと姫子の腕をとって連夜から引き離し、まあまあと落ち着かせようとしたのであったが、彼女が冷静でいることができたのはそこまでだった。

姫子が口にした最後のフレーズが瑞姫の女の奥底にある怖い何かに直撃したのだ。

そんなこととは露知らぬ連夜は、やれやれようやくこの騒動も終局かなと、胸を撫で下ろし大きく息を吐きだしていたのだが、何気なく向けた視線の先には般若になった美少女の姿が。

「ひ、ひいいいっ！！　り、龍乃宮さん、何、その顔!?　こ、怖い、ちょ～怖いんだけど！！」

たまらず悲鳴をあげて後ずさる連夜であったが、そんな連夜に構うことなくドス黒いオーラを周囲にまき散らしながら連夜に近づいてきた瑞姫は、ガシッと両手で連夜の襟首をつかんでその小柄な体を持ち上げると、縦に横にとぶんぶん振りまわしながら涙目になって怒声をあげる。

「どなた!?　どなたなんですか!?　隠れて会おうとしている相手はいったいどこのどなたなんですか!?　言ってください、言ってくださいよ!!　はっ、まさか女性?　まさか女性なんですか!?　女性と待ち合わせしているんですか!?　そうなんですね!?」

「ちょっ、りゅうっ、ぐるしっ、やめっ、ちぬっ、ちんじゃうっ」

「いやっ、宿難くんの浮気者!!　女性と、女性と待ち合わせしているだなんて!!　ひどい、ひどすぎる!!　宿難くんだけはうちの兄のようなことはないと思っていたのに、女性の敵のようなあんな兄と違って私の想いを受け止めてくれると思っていたのに!!　はっ!!　ま、まさか、もうそういう関係にある方なんですか!?　平日のお昼によく流れているあんなことやこんなことでドロドロってしちゃうようなドラマみたいな関係なんですか!?　うそでしょ?　ねえ、宿難くん、嘘よね?　そんなの嘘よね!?　嘘と言ってええええええっ!!」

「う、うぷっ、は、吐きそう、り、龍乃っ、さん、やめ、もう、げんか、はいちゃう」

上級種族中の上級種族である龍族のありあまる身体能力でぶんぶん振り回され続けた結果、連夜の顔色は再び真っ青に。しかし、当事者の瑞姫は全くそれに気がつかず、泣き叫びながら連夜の身体をシェイクし続ける。人間族にしてはかなり頑丈で精神的にも非常にタフな連夜であるが、先程の姫子が行った同じ攻撃のせいで既にかなり精神力を消耗している状態。お腹の中から徐々にせり上がってくる酸っぱい何かを押し留めておくのは最早限界に近い状態で、このままでは目の前の美貌のクラスメイトにとんでもないものをぶちまけてしまいかねないことも気になったが、それと同時に意識が遠のいていく感覚にも襲われ本気で『あ、僕、今度こそ死んじゃうかも』と思いだした、まさにそのとき、三人の救い主が瑞姫の身体に飛びついて連夜からひっぺがえしてくれたのだった。

「落ち着け瑞姫!!　何が原因でキレているのかさっぱりわからん

がとりあえず落ち着くのだ！！」

「瑞姫様ブレイク、ブレイク！！」」

「これ以上はあかん！！　瑞姫様、その辺にしとかんと宿難はんのこと殺してしまうで！！」

慌てて瑞姫に組みついた三人の女子生徒達は、瑞姫の両肩、腰、足に組みついて完全にその動きを封じにかかる。姫子と違い瑞姫は武術の腕がさほどでもないためあっさりと組伏せられてしまったが、三人の身体の下で『宿難くんのばかあああっ』と泣き崩れてしまう。

そんな瑞姫の姿を見て、もう暴れる気配がないと判断した三人は速やかに瑞姫の身体から離れる。そして、一人瑞姫の側に残った姫子は優しくその身体を立ちあがらせ、身体についた埃を払ってから抱きしめてやるのだった。

「よしよし。何かわからんが元気を出せ瑞姫。私はおまえの味方だぞ」

「何かわからないまま慰めないでくださいまし。それになんか御姉様に慰められるとまだ勝敗が決していないはずなのに妙な敗北感に襲われます」

「なんじゃそれは。そもそも瑞姫は何かで私と勝負しているのか？」

異母妹の言っている意味がわからず、抱き締めていた腕の力を抜いて異母妹の顔を思わずまじまじと見つめる姫子。すると瑞姫は妙に大人びた笑顔を浮かべて姫子を見つめ返し、その後、後ろを振り返る。

そこには先程姫子達に蹴られた机を元にもどし、何食わぬ顔で朝

の授業の用意をしている連夜の姿が。その連夜の姿に、様々な感情の入り乱れた複雑極まりない色を浮かべた視線を向け続ける瑞姫。その色は見る人見る角度によって色とりどりに輝きを変え光を放ち続ける。

そんな不可思議な光を放ち続ける異母妹の姿をしばらくぼんやりと見つめていた姫子だったが、やがて自分自身も同じ方向に視線を向ける。

第三話　『姫龍と貴龍と黄龍』　その４

姫子が見つめる先にあるのはいつもと変わらぬ大好きで大好きでたまらない幼馴染の姿。一見おとなしく、まるで愛玩用の小動物のように見えるその少年は、しかし、自分の美貌にも、才能にも、財力にも、権力にも決してなびくことはないことを姫子はよく知っている。己の信念をいつもまっすぐに貫き、そして、ぶれることはない。だからこそ、彼は等身大の姫子の姿をいつもまっすぐに見つめてくれるのだ。周囲が勝手に作り出す性格のいいお嬢様で美少女の姫子ではない、本当の本物の姿の姫子と向き合って接してくれる。

手を伸ばせばすぐにその手を掴み返してくれる。しかし、自分の元へ引き寄せようとするとすぐにその身をかわしいずこかへと去って行ってしまう。さりとて、姫子が窮地に陥れば再び姿を現し、例えそこが危険のど真ん中にあったとしても迷うことなく飛び込んできてくれる。

かけがえのない姫子の大親友。決して失いたくない大切な『人』。しかし、彼のことを見つめれば見つめるほど、彼のことを考えれば考えるほど胸が切なくなってしまうのは何故なのだろうか。できることならそれを考えることなく、このままいつまでも、いられたらいいのにと思う反面、もっと深く彼のことが知りたいとも思う。だけど、あと一歩踏み込めば全てが終わってしまう。間違いなく今の関係ではいられなくなってしまう。そんな不吉な予感が姫子をがんじがらめにして動けなくする。

そこに考えが行きついてしまうと、姫子の目から勝手に水が溢れ出てきてしまう。止めようとしてもなかなか止まらない水が。姫子は自分の心がそこに行きつく前に、頭をぶるぶるとふって脳裏の考えを慌てて打ち消そうとする。

しかし、不意に心にわき上がってきた何かに突き動かされて横に視線を向けた姫子は、そこに、自分と同じように首を振って見せて

いる異母妹の姿を見つけ、呆気に取られてそちらを凝視する。

「み、瑞姫、何をしておるのじゃ？」

「ふ、ふぇ？　あ、そ、そのなんでもないですわ。御姉様こそ、その目、真赤ですけど」

「ええっ！？」

お互いの声で自分達の今の状態に気がついた二人は、慌てて自分の目をゴシゴシと拭い、その後バツが悪そうな表情で笑い合う。そして、同時にもう一度今まで自分達が見つめていたものに視線を向けなおす。なんとなく、なんとなくではあるが、今、二人は同じことを考えているような気がしたが、敢えてそれについては触れず、ただ、自分達の大切な友達の少年の姿を万感の思いをこめて見つめ続ける。

すると、その少年は、なぜか物凄く気まずそうな表情を浮かべ、口をパクパクと動かしながら何かを言いたそうにしてしきりに指先を自分達に向けていることに気づく。二人はきょとんとして顔を見合せた後、再び連夜のほうに視線をもどし、同時に『私？』と自分を指さして見せる。

だがすぐに連夜は『違う違う！！』と片手と首をぶんぶんと横に振って見せ、先程よりも強く指先を自分達に向けてつつくようなジェスチャーをしてみせる。そして、ゆっくりと大きく口を開け閉めして何かの言葉を伝えようとする。

その様子をじ～っと見つめる姫子と瑞姫。

「「う・し・ろ？　ってこと」」

二人が同時に問いかけると、連夜は『正解、その通り！！』と言

わんばかりに指先を二度ほどもう一度姫子達に向けた後、うんうんと大きく頷いて見せる。しかし、その言葉の意味がイマイチまだよくわかっていない二人は小首をかしげながら怪訝な表情を浮かべて顔を見合せたが、お互い意味がわかっていないのだとわかると肩を竦めあい、ともかく後ろを振り返ってみるかとばかりにゆっくりと自分達の背後に視線を向け直す。

すると、そこにはいつも見慣れた大きな黒板と、いつも見慣れた教壇と、そして、いつの間にやってきていたのか、いつも見なれた担任の女性教諭の姿があった。

女性教諭は一見いつも通りの爽やかな笑みを浮かべて立っているように見えたが、こめかみに青筋がいくつも走っているし、その頬はぴくぴくとひきつっていて、どうみてもその笑顔通りの機嫌のよさでないことは一目瞭然。

姫子と瑞姫は思わず引き攣った顔でその女性教諭を見つめ返すのだった。

「ア、ア、アルフヘイム先生!?」

「はい、そうですよ。影が薄いかもしれないですが、あなた達の担任のアルフヘイムです。よかったわ、このまま最後まで気がついてもらえないんじゃないかと心配していたのよ」

頬を引き攣らせながらもなんとか笑顔を保ったまま姫子達に言葉を紡ぐ女性教諭。

『ティターニア・アルフヘイム』

連夜達の担任を受け持っている年若いエルフ族の女性教諭。星の輝きそのもののような美しい金髪を腰まで伸ばし、肌が白いことで有名なエルフ族の中にあってもはっきりとわかるくらい美しい真珠

色のすべすべした白い肌、若干垂れた目は深いダークブラウン、スレンダーなすっきりした体格でボリュームにはかけるが、間違いなく美人に分類される『人』物。

まだ教師になってから三年しか経っていないが、温和で穏やかでありながら、言うべきことはしっかり言う性格のせいか生徒達からの人気や信頼はそれなりに高い。

「龍乃宮　姫子さん、龍乃宮　瑞姫さん？　青春を謳歌するのはとても大切なことだけど、時と場所と場合を考えてもらえないかしら？　もう始業のベルが鳴ってから五分以上たつんだけど」

「「えええっ！？」」

呆れたように言うアルフヘイムの言葉に、二人は吃驚仰天して黒板の上にかけられた時計へと視線を向ける。すると、確かに時計の針はしっかり一限目の始業時間である八時三十分を越えてしまっているではないか。

「ちなみに、宿難くんの前の席は確かに空いているし、『龍乃宮』のネームプレートが貼ってあるけど、あなた達の席じゃないわよね？　姫子さんと瑞姫さんの席は窓際の一番前と二番目だったと記憶していたんだけど、違っていたかしら？」

「「いえ、違っていません、すぐに戻ります！！」」

直立不動でアルフヘイムに即答した二人は、ばたばたと慌てて自分達の席へと走って行ってそこに飛び込むようにして座る。そして、教壇の上から白い視線を自分達に向けてくる女性教諭に誤魔化すようにひきつった笑みを返す姫子と瑞姫。

（ほんとに私達が横でさんざん注意しているのに聞いてくださらないんですから、お二人は！！）

（ほんまやほんまや）

姫子達の隣の席から小声で文句を言ってくるはるかとミナホ。そんな二人に姫子とを瑞姫はキッと視線を向け直す。

（声をかけても私達が気がつかないんだったら、強引に引っ張っていってくれてもよかったではないか！！）

（そうですわ、自分達は私達を見捨ててちゃっかり席にもどっているし、あんまりじゃありませんこと？）

（自業自得です）

（そこまでつきあいきれまへん）

（だいたいお主たちは、だな・・）

小声で怒り声をあげる姫子と瑞姫に対し、はるかとミナホはしれっとした表情で明後日の方向にぷいっと顔を向け知らん顔。そんな二人の態度に腹を立てた姫子は、続けて怒りの言葉を発しようとしたのだったが。

「あ、あ～、ごほん、龍乃宮さん？　龍乃宮　姫子さん？　龍乃宮委員長、私の声が聞こえているかしら？」

「ふ、ふぇ！？　あ、アルフヘイム先生！？」

突然頭上から聞こえてきた声に吃驚仰天して椅子の上に飛びあがった姫子は、慌てて前を向き、声の主である担任の女性教師ティターニア・アルフヘイムのほうを見つめる。自分が近寄って行くまで全然気がつかないという珍しい失態を起こした姫子の姿を見たティターニアは、その仰天する様子があまりにもかわいらしくておもしろくて、怒らないといけない状況でありながら思わず声をあげて笑ってしまうのだった。やがて、その笑いを収めたティターニアは、パタパタと片手を振りながら姫子に話しかける。

「クラスメイトと仲良くするのは大変結構なことではあるけど、そろそろおしまいにしてね」

「も、申し訳ありません」

「授業時間と休み時間のケジメはしっかりつけてね。じゃあ、そろそろ授業始めるわよ。あ、そうだ、委員長。今日はカミオ副委員長はお休みだから」

「え、そうなんですか？」

「うん、なんか登校途中で気分が悪くなったらしいわ。さっき学校に念話があったの。悪いけど今日はそういうことでよろしくお願いするわね。じゃあ、号令よろしく」

「は、はい、わかりましたアルフヘイム先生！！　ぜ、全員、起立！！」

ばたばたと慌てながら立ち上がり号令をかける姫子に続き、教室の生徒達が一斉に立ち上がる。そして、続く『礼』の号令と共に一斉に頭を下げるのだった。

そんな中、他の生徒達と同様に立ちあがって頭を下げようとした瑞姫は、何気なく少し離れたところに立つ連夜のほうに視線を向けた。そのとき、瑞姫は大した意味はなく連夜の表情を見ながら頭を下げたのだが、自分同様に頭を下げている連夜が浮かべている表情がいつもと違うものであることに気がついて目が離せなくなってしまった。

頭を下げていたのはほんのわずかな間。しかし、そのわずかな間に連夜は、笑みを浮かべていた。いつもの穏やかで優しい笑みではない。それとは全く逆、不敵で凄まじく邪悪な感じがする笑みであった。

しばし呆然と頭を下げた状態でそのまま固まっていた瑞姫。そのことに横に座るミナホがいち早く気がついて、慌てて瑞姫を席に座らせる。

「ど、どないしたん、瑞姫様!?　みんなもう座ってるで？　何見てたん？」

「え、あ、いやその」

心配そうに自分を見つめてくるミナホに瑞姫はなんと説明しようかと迷う素振りをみせたが、結局、何も言わずに曖昧な笑みを作って誤魔化す。そして、釈然としない想いを抱えながらノートと教科書を広げて授業に集中しようとしたのであったが、ふとあることを思い出して斜め前に座るはるかにそっと小声で話しかける。

「はるかさん？」

「え、あ、はい、なんですか瑞姫様？」

「こんなこと聞くのはなんなんですけど、確かカミオ副委員長には

『サードテンプル』周辺で悪い噂が流れていなかったかしら？」

「あ～、それ噂じゃありません、事実です。うちのクラスの副委員長殿は『サードテンプル』周辺を縄張りにしてる工業高校の不良達と付き合いがあって、結構悪いことしていますね」

「そう・・そうですのね、『サードテンプル』周辺でね。もしかしてカミオ副委員長って、『サードテンプル』を通って通学していたりする？　それでその通学途中で他の学生さんにその、悪いこと仕掛けたりとかしちゃうってこともあるのかしら」

「え、ええ、そうです。流石に顔がバレルのを恐れてこの学校の生徒には手を出さないようにしているみたいですけど、他校の生徒達の何人かがひどい目にあわされたらしいって・・なんでわかったんですか？」

「いや、そういうことなら納得したわ。そう、それで登校途中で気分が悪くなったのね」

いったいどこから仕入れてくるのかわからないが、この学校で一、二を争う情報通として知られるはるか。そのはるかが言うことであるから、恐らくいま言った情報はほぼ間違いではないだろう。自分が知りたかった情報を聞きだした瑞姫は、なんとも言えない笑みを浮かべるとくすくすと小さな笑い声をあげ、やがて再び視線を横に逸らし、離れた場所の席でノートを書いている連夜のほうを見つめる。そこには先程見せていた邪悪な笑みはどこにもなく、いつもどおりの穏やかな表情があるばかり。しかし、瑞姫は知っていた。あの顔もまた連夜が持つ様々な顔の中の一つであることを。

「今度はいったいどこの誰を助けたのかしら？」

誰にも聞かれないようにそっと小さくつぶやき、どこかうっとりした表情で連夜を見つめていた瑞姫であったが、そんな瑞姫の様子に気がついたはるかが、怪訝そうに問いかけてくる。

「あの、瑞姫様。それで副委員長のことがどうかしたんですか？」

「なんかさっきから変やなあ、瑞姫様」

「え、ええっと！？　あ、いえ、なんでも。なんでもありませんわ。あはは、ささ、勉強勉強。集中していないとノート書ききれませんわよ」

そう言ってわたわたと両手を振り回し、引き攣った笑みを浮かべて見せた瑞姫は、誤魔化すように黒板のほうへと視線を移し直す。そしてわざとらしいくらい真剣な表情で授業を聞き始めるのだった。

そんな瑞姫の姿に、はるかとミナホは『なんのこっちゃ？』という表情を浮かべて顔を見合わせて肩を竦めて見せると自分達もまた授業を続けているティターニアのほうへと視線と耳を向ける。

少しばかり騒がしくはあったが、いつもと少しだけ違った朝は、やがていつも通りの時間の流れへと軌道を修正し合流しいつもの時間となって流れていく。

そんな緩やかな時間の流れを感じながら、連夜はふと窓の外に広がる青い空へと視線を向ける。どこまでも抜けるように青い空にはいくつもの白い雲。

いまこの場を流れる時間と同じく変わらない、変わることのない光景。たまには雨の日や曇りの日もあるが、その雲の彼方にはやはり同じ光景が広がっていて、いつかその雲は晴れてまた青い空が姿を現すのだ。

しかし、連夜は予感していた。もうすぐ自分の世界観そのものが

変わる時がくることを。
　それが連夜にとっていいことなのか、それとも悪いことなのかはわからない。しかし、ようやく何かが終わるのだと確信していた。長い長い間、自分はそこに辿りつくために生きて来たような気がする。どんな結果になってもきっと自分は満足だと思う、たとえその結果によってこの世界と決別することになるのだとしても、後悔だけはしないだろうと思っている。
　決して長い『人』生ではなかったが、それでも連夜は自分が恵まれていたと思う。尊敬し目標である父、優しくどこまでも強い母、大事な兄姉妹達、強い絆で結ばれた二人の真友達、共に死線を潜り抜けた掛け替えのない戦友、そして、自分に生きる道を教えてくれたたくさんの師匠達。連夜は自分ほど『人』に恵まれた人生を歩んできたものはそうはいないと思い、そんな『人』達と関われた自分を誇らしく思う。
　そして、もう間もなく今の自分と決別の時が来る。
　しかし、それはあと少しだけ先のこと。そんなに長く時間があるわけではない、だけどそれまではまだ今の自分、いつもの時間。
　だからもう少しだけいつものこの穏やかな空気の中にいたかった。
　そんな連夜の切なる想いに応えるかのように、今日もいつもと変わらぬ学校生活が始まる。

　連夜は机の中から教科書を出してきて、ノートを広げティターニアが黒板に書きだした内容をいつもと変わらぬ調子で書き写しはじめる、そして、なぜかすぐに後ろを振り返ってみる。
　その視線の先には教室の後部扉。連夜は自分の腕時計を出して時間を見つめる。
　いつもの朝を締めくくるのは、いつもの大騒動。それがもうすぐ『嵐』となってやってくる。

「そろそろかな」

教壇に立つティターニアに見つかれば叱責されること間違いない行動だが、なぜか叱責の声は飛んでこず、それどころか他の生徒達も同じように教室の後部扉を注視している。そこに浮かんでいる表情は、何かを期待しているものや、にやにや笑いを浮かべているもの、呆れているもの、明らかに軽蔑しているような表情をしているものと様々であったが、その視線の先だけは同じ。そうして教室の全生徒達が見つめていると、ほどなくして何かが扉をぶち破って飛び込んでくる。

それは『嵐』。『人』の形をした『大嵐』だった。

「剣児くんはあんたみたいな貧乳とは付き合わないのよ！！」

「はん、その大きな乳に全部養分吸い取られて、頭くるくるぱ～のおまえとはもっと釣り合わないっての」

「・・とりあえずこの二人はほっといて、私とどこかにデートしに行きましょうか、剣児くん」

「「ちょっとまてい！！」」

「み、みんなお願いだから走りながら喧嘩するのはやめてくれ！！今日だけは遅刻を免れないと一カ月連続で遅刻ってことになるんだぜ！？　って、てめぇ、フェイシン、遅刻するから仕掛けてくんなっつってんのがわかんねぇのか、コンニャロ！！」

「うるさい、色ボケ剣児、さっき始業のベルが鳴っていたのに気がつかなかったのか？　もう手遅れだっつ～の！！　それよりも毎朝毎朝三人もとびきりの美少女を侍らせて登校してきやがって！！どこの王侯貴族様だ？　今死ね、すぐ死ね、ボクの拳で死にやがれ

！！」

「誰が死ぬか！！　おまえこそいい加減くたばりやがれボケフェイシン！！」

「おまえがくたばれ、エロ剣児！！」

後部扉を盛大な破壊音と共にぶち破って教室に飛び込んで来たのは三人の美少女と、二人の凛々しい少年。

全員一応『人』型の種族ではあるが、その種族は全員バラバラ、共通するのは全員常『人』以上に整った容姿をしていることだけだろうか。そんな彼らは教室に入ってからもすぐには自分達の席につこうとはせず、美少女三人は大声を張り上げての口喧嘩をやめようとせず、むしろそれをヒートアップさせていっているし、二人の少年達は傍目から見ても凄まじい技量とわかる武術の技の限りを尽くして拳を交わし合う。

自分達がすでに目的地に到着しているという自覚は五人共に全くないようで、教室に入ってからかなりの時間がたってもやはり自分の席につこうとしない。それどころか、美少女達はどこから取り出したのかカードを出して、誰が意中の少年の恋人になるかを賭けて勝負を始めてしまうし、少年達は背中に隠し持っていた木刀を取り出して戦いを激化させていく。

そんな乱痴気騒ぎをクラスメイト達は半ば諦めたような視線で見つめていたが、やがてその『大嵐』を吹き飛ばす特大の『大雷』が鳴り響くことを予感した彼らは一斉に耳を塞ぐ。

そして、その直後、『大雷』は予想通り『大嵐』の中心地点へと落とされるのだった。

『やめなさ～～～～い！！』

力のある言葉を声に乗せて発することで様々な能力を発揮することができるという特殊技能の使い手『声紋使い（スペルユーザー）』。

その『声紋使い（スペルユーザー）』の中でも特に強い力を操ることができる上級技能者に与えられし字名『言霊使い（ボイスラッガー）』を持つティターニアの『言霊（ことだま）』を、不意打ち同然の状態でまともに食らってしまった遅刻者五人組は、教室の床の上に無様にひっくり返る。

しかし、相当な武術の腕を持つと思われる少年二人はすぐさまよろよろと立ち上がると、痛む頭を押さえながら恨めしそうに教壇の上に立つティターニアのほうへと視線を向ける。

「ちょ、先生、いくらなんでもか弱い生徒に向かって『言霊（ことだま）』は、やりすぎじゃねえ？」

「あ～、ちっくしょう、まだ頭ががんがんする」

「黙りなさい、龍乃宮くん、陸（ルー）くん。毎日毎日喧嘩しながら登校してきて、しかも毎日遅刻じゃありませんか。いい加減にしなさい！！」

「「だって、こいつが！！」」

ティターニアの言葉を聞いた二人は同時に互いを指さし、互いを威嚇するようにして睨みあう。そんな二人の様子を見ていたティターニアは、深い溜息を一つ吐き出すと両手を腰にあてて再び腹から絞り出すようにして『言霊（ことだま）』を発する。

『やめなさいって言ってるでしょ！！』

「「ぐあああっ！！　せ、先生、『言霊（ことだま）』は反則！！」」

またもやまともに『言霊（ことだま）』を食らうことになってしまった少年二人は、頭を抱えて床の上を転がりまわる。

「何が反則ですか。あなた達に普通の声や言葉が通じないことはこの一カ月で嫌というほど学ばせてもらいましたからね。ほらほら、いつまでも床の上に転がってないで、壊した扉の修理をしなさい」

「「は～い」」

「それからクロムウェルさん、ボナパルトさん、黄（ホワン）さん、さりげなく誤魔化して自分達の席に着こうとしてもだめですよ。あなた達は今すぐバケツに水を汲んできて、両手に持って廊下で立っていなさい！！　今すぐ！！　バケツを両手に持ってです！！」

「「「は、は～い。ごめんなさ～い」」」

少年達が怒られている間にこっそり自分達の席に行こうとしていた三人の美少女達だったが、あっさりとティターニアにみつかって撃沈。持って来ていたカバンを自分の席に置くと、後ろにある掃除用具入れからバケツを取り出してすごすごと教室から出て行く。

そんな彼らの様子をしばらくくすくすと笑いながら見守っていた連夜は、満足気に頷いて呟くのだった。

「騒がしくも楽しい朝。さて、今日も一日楽しく過ごせるといいな」

次回予告

御稜高校に武名を轟かす龍乃宮　剣児に対し、憎悪の炎を燃やす一羽の鳳。

陸（ルー）　緋星（フェイシン）

いく度となく繰り返される宿敵との戦いで鳳はその翼を痛めるが、それでも尚立ち上がり龍へと拳を向ける。

果てない憎しみ、果てない恨み。

だが、そんな鳳を夜は優しく包みこみその身体をそっと癒す。

鳳は龍をも癒す夜を突き放そうとするが・・

目の前に立つ優しい夜に宿る、悲しい闇を知ったとき、鳳は己が飛ぶべき空を見つけ舞い上がる!!

次回

真・ここは違うどこかの日常

過去（高校二年生編）

第四話

『燃えよ、緋の鳥!!』

優しき夜空、守りぬけフェイ！！

玉藻：「あ～あ」

連夜：「どうしたんですか、玉藻さん？」

玉藻：「だって、次回も出番なしなんだもん。その他大勢（モブ）でもいいから、でたいなあ」

連夜：「いや、玉藻さんをその他大勢（モブ）にするのは無理があるでしょ。物凄い存在感だし」

玉藻：「やっぱり、学生服を着て教室に潜り込むしか・・『人』の顔はまだバレていないから、いけるわよね」

連夜：「無理です！！　ってか、本気でやめてください！！　現在と違って、このお話は過去なんで、まだ玉藻さんとそういう関係になってませんから！！　タイムパラドックスが起きちゃいますから！！」

玉藻：「大丈夫大丈夫。えへへ、愛さえあれば何でもできるのよ！！　1、2、3、ダーーーッ！！」

連夜：「いやいやいや、無理ですから。マジで。どこのプロレスラーですか・・と、ともかく、次回もお楽しみに」

第四話　お～ぷにんぐ

玉藻：連夜くんってさあ、本当にいろいろな料理が作れるけど、一番好きな料理ってなんなの？

連夜：旧八幡朝廷領（この世界の日本に似た国）料理か、旧上華帝国領（この世界の中国に似た国）料理ですねえ。どっちも作るのも食べるのも好きだけど、やはり上華料理のほうが好きかなあ

玉藻：そうなんだ。上華帝国の料理っておいしいよねえ。

連夜：ええ。あの国は世界中の国の中でも特に古い歴史を持つ国でしたから、食文化も物凄く発達していたんですよねえ。『害獣』の出現で滅ぼされてしまったことで、数多くの珍しい料理のレシピが失われてしまったのは、本当に残念なことです。

玉藻：そうねえ。まあ、あの国に限ったことじゃなくて、他の国々も似たような状況になっちゃったんだけどね。

連夜：そうですねえ。でも、国は滅んでも、まだ人は生きていますから、失われた料理を復活させるチャンスは残っているわけです。生き残った料理人のみなさんにはがんばっていただいて、是非復活させていただきたいものです。

玉藻：うんうん、そうねそうね。ところで、今日の夕御飯はなんなの？

連夜：今日は玉藻さんの大好きなチャーハンに、レバニラ炒め、それに上華風あっさりサラダに、上華風玉子スープです。

玉藻：おお、今日は上華料理なのね。にしても、本当に連夜くん、上華料理を作るのが好きよねえ。

連夜：ええ、玉藻さんがおいしそうに食べている姿を見るのがなによりも大好きですからね。

玉藻：え

連夜：だって、玉藻さん上華料理大好きなんでしょ？

玉藻：え、え、なんで？　なんでそんなことを知って・・

連夜：特にビールや、紹興酒なんかとあう焼餃子とか、茄子味噌炒めとか、レバニラ炒めとかだと、大皿に何杯も召し上がるし、お酒も浴びるほど飲まれるとか。

玉藻：ちょっ！？

連夜：でもなあ、確かに玉藻さん、明らかに上華料理を作ったときは通常よりもたくさん召し上がっていらっしゃるけど、なんか僕が聞いている話よりも明らかに量が少ないんですよねえ。玉藻さん、いつも遠慮なさっているでしょ？　僕と玉藻さんの仲なのに、今更ですから遠慮なさらないでくださいね。ちゃんと多めに追加ですぐ作れるように材料用意しているし、お酒だっていっぱい買い置きしているんですから。

玉藻：待って待って待って！！　何それ、何それ！？　なんで！　なんで？　なんで！？

連夜：え、違うんですか？　上華料理のファミリーレストラン『皇軍』に大学のお友達のみなさんと食事に行かれた時に、一人でビール大ジョッキ十杯以上空けられて、餃子も二十皿近く召し上がられたって・・

玉藻：いやあああああああああっ！！　誰！？　誰なの！？　私の知られたくない黒歴史を暴露したバカは！？

連夜：いや、あの、み～ちゃん・・ですけど、あれ？　これってひょっとして秘密だったのかな？

玉藻：み～～ね～～る～～ば～～！！　殺す！！

真・ここは違うどこかの日常

過去（高校二年生編）

第四話『燃えよ！！　緋の鳥』

ＣＡＳＴ

宿難（すくな）　連夜（れんや）

言わずと知れた本編主人公。

都市立御稜高校に通う高校二年生。人間族。男性。十七歳。
高校内に存在している不良グループのほとんどから標的とされている不幸な少年。
しかし、それに負けることなく今日も彼は過酷な日々を生き抜く。

（さて、どう戦うかな？）

陸（ルー）　緋星（フェイシン）

剣児のことをライバル視する少年。朱雀族。男性。十七歳。
休み時間のたびに自らがライバルと目している剣児と拳を交え続ける。
三大実力者のうちに入ってはいないが、剣児に匹敵する武力の持ち主である。
剣児と仲の良い連夜のことを敵視していたが、その瞳に宿る深い闇を知り・・

「今度はボクが君の為に飛ぶ、この力の限り！！」

アマデウス・アンソニー・アンデルセン

通称【ＡＡＡ（トリプルエー）】。中央飛蝗族。男性。十八歳。
御稜高校随一の情報屋。特殊な楽器を調整手入れする能力に長けており、普段は第三音楽室に常駐している。
現在学校内で窮地に立たされている連夜の現状を、緋星に伝える。

「情報を売りたくないときもある」

龍乃宮（りゅうのみや）　姫子（ひめこ）

連夜のクラスの委員長で、御稜高校が誇る最高にして最強のスーパーアイドル。上級龍族。女性。十七歳
上級種族中の上級種族である龍族のお姫様でもある。
男女共に人気があるせいでいつもひっぱりだこ。

「今日こそは連夜と食べられると思ったのにいいいいっ！！」

龍乃宮（りゅうのみや）　瑞姫（みずき）

姫子の腹違いの妹。上級龍族。女性。十七歳。
姉の姫子に比べるとやや細身ですっきりしたスタイルの持ち主の美少女。
以前、自分を助けてくれた『祟鴉（たたりがらす）』を慕う。

「私は宿難くんとご一緒したいのにいいいいいいっ！！」

龍乃宮（りゅうのみや）　剣児（けんじ）

姫子と瑞姫の腹違いの兄。上級龍族にして上位の王位継承権を持つ少年。上級龍族。男性。十七歳。
御稜高校三大実力者の一人にあげられるほどの武術の達人であると同時に、三人の美少女達を恋人に持つハーレムマスターでもある。

何人もの女性と関係を結んでいる自他共に認める女好きだが、実はそれは求めても手に入れることができないある人物に対する気持の反動からくるもので・・

「女だったらよかったのに。そしたら俺はこんなに渇くことも他の誰かに求めることもなかったのに」

連夜：な～んだ、じゃあ、み～ちゃんのいつものいい加減なウソだったわけですね。

玉藻：そそ、そう～なのよ。やだわ、連夜くんったら、もう～～。おほほほほほ

連夜：そっかあ、いくらなんでもビール大ジョッキで十杯とか、焼餃子二十皿とかありえないって思っていたんですよねえ。

玉藻：でしょ～。いくら私でもそんなに食べるわけないじゃない。

連夜：ですよね～。しかし困ったなあ。

玉藻：何が？

連夜：てっきり玉藻さんがそれくらい食べるのだと思っていっぱい作り過ぎちゃったんですよね。あと、ビールもたくさん用意しちゃったし、このままだと勿体ないしなあ。あ、そうだ。そういえば、今、兄さんが家に帰ってきているんだった。兄さんならたくさん食

べるからちょっと持って行ってきますね。

玉藻：待って待って、連夜くん、いったい何人前くらい作ったの？

連夜：え？　チャーハンもマーボー茄子も十人前くらいずつですけど。あとビールも十本くらい買いこんできてます。

玉藻：あ～、な～んだ、それくらいなら私一人で楽勝よ。持って行かなくていいってば。

連夜：なんだ、そうでしたか・・って、え？

玉藻：・・あ。

連夜：・・・

玉藻：・・・

連夜・・た、玉藻さん？

玉藻：・・げほ、ごほ、え、えとえと。皆様、お待たせいたしました。それでは第四話『燃えよ！！　緋の鳥』です。どうぞ！！」

連夜：た、玉藻さん、さっきのはみ～ちゃんが言っていたいい加減な嘘だって・・

玉藻：いっただきま～す！！（やけくそ）

第四話　『燃えよ！！　緋の鳥』　その1

そこにあるのは憎しみでも恨みでもない、戦わなくてはならない宿命なんていう大仰なものは当然ないし、過去にあった何かの因縁でもない。

無理に戦う必要なんてないし、ぶつかりあう必要もない。いがみあうことも、罵り合うことも、そして、拳で殴り合って互いを傷つけあう必要なんてどこにもないのだ。

しかし、それでも二つの猛き魂は、その激しさゆえに互いにぶつかりあう。

互いの身体に渾身の力で拳を叩きつけ、蹴り飛ばし、己こそが勝者となるべく戦いあう。そこには理由なんてない。ただ、相手が気に入らない、とてつもなく気に入らない。しかし、無視しあって互いの存在をないものにもできないし、どちらかが道を譲って通り過ぎることもできなかった。

だからこそやりあうしかなかった。とことんまでぶつかりあうしかなかった。お互いがお互いを心から理解できるようになるときがくるか、あるいは、どちらかを完全に潰してしまうそのときまで。

今日も二つの魂はぶつかりあう。

「はあああああっ！！」

真紅のまるで真っ赤に燃える炎のような色をした髪の少年は、深蒼色の髪の少年が放った岩をも砕く必殺の蹴りを見事な後方月面宙返りでかわし、そのまま天井に着地。重力によって地面に引き戻されるよりも早く、少年は天井を強く蹴って自ら床めがけて急降下する。まるで獲物を狙う鷹のように、地面で待ち受ける最大のライバルめがけて一直線に向かっていく。

「勝負だぁっ、龍乃宮（りゅうのみや）　剣児（けんじ）！！」

まるで一本の弓矢のように真っすぐに空中を駆け抜けながら少年は自らの拳を大きく振りかぶり、眼前に立塞がる宿敵に雄叫びをあげる。

「来いっ、陸（ルー）　緋星（フェイシン）！！」

教室の床の上にどっしりと足を踏ん張って立ち、腰に右拳を当てて左の掌を前に突き出した構えで、空中から迫りくる真紅の髪の少年を見据えた深蒼色の髪の少年は、彼と同じ猛々しい咆哮をあげて彼を睨みつける。

そして、次の瞬間、二人の拳は赤と青の炎を発して互いの身体へと吸い込まれる。戦場となった教室の中に、凄まじい打撃音が鳴り響き、その場でその音を聞いたと思った次の瞬間には、二人の少年の身体は弾丸のように別々の方向へとすっ飛んで行く。

再び教室中に響き渡る轟音。今度は肉体を打つ打撃音ではない、何か固い壁に激突した破壊音。

廊下で二人の壮絶な戦いを見守っていた人々は、その音が戦いの終幕を告げるゴングであることを悟って一斉にほっとした表情を浮かべるのだった。

「あ～、やっと終わった」

「やれやれ、毎回毎回昼休み始まると同時に教室の中でおっぱじめるのやめてほしいよなあ」

「まあなあ、食ってる最中にやられるよりかはマシだけど、終わるまで飯食えないもんなあ」

「でも、美少年同士の戦いって、なんか美しくていいわよねえ」

「うんうん、互いを傷つけあう姿がなんか、エロいというかそういうの見てるとちょっと、ゾクっとしちゃう」

「わたし陸(ルー)くんが戦ってる姿みるの結構好き。だって、陸(ルー)くんってさ空中を自由自在に飛び回るじゃない。なんかすっごいそれが奇麗で好きなの」

「そうお？　私は龍乃宮くんの流れるような連続攻撃がいいわ。まるで踊ってるように見えるじゃない」

『いいわよね～』

「でも、できれば運動場でやってほしいんだけどなあ」

口々にそんなことを呟きながらクラスメイト達は避難していた廊下からゾロゾロと教室の中へと戻ってくる。そんな中には当然のことながら連夜や姫子達の姿もある。

「まったく、毎度毎度暑苦しいわ鬱陶しいわで、救いようのないやつらよのう」

「本当ですわ。しかも陸(ルー)くんはともかく、もう片方は我々の身内だというのですから」

「赤の他人ならまだ、心の平穏を保てるのじゃが」

「実の兄ですからねえ」

教室の黒板の前でひっくり返って伸びている剣児と、教室後ろの掃除用具入れの横でひっくり返って伸びている緋星（フェイシン）を交互に見つめた姫子と瑞姫は、深い溜息を吐きだす。そんな二人の会話を横で聞いていた連夜は、苦笑を浮かべながら首を横に振ってみせる。

「いいじゃない、あれはあれで。僕は二人のこと嫌いじゃないよ。ああいう二人がいてもいいと思う。同じ男の僕だけど、今二人がやっていたようなことは逆立ちしたってできないから、むしろちょっと羨ましいかな」

少し寂しそうな、そして、どこか羨ましそうな表情で二人の少年達を見つめる連夜。そんな連夜の姿を見た姫子と瑞姫はぶるぶるぶると激しく首と片手を横に振って詰め寄ってくる。

「「ダメダメダメ。君は絶対に真似しちゃダメ！！　むしろあんな奴らの真似なんかできなくていいの！！」」

「ええ～～～」

「そ、それよりも連夜。ようやく馬鹿どもの馬鹿騒ぎが終わったことだし」

「そ、そうですそうです、楽しくお昼ごはんをご一緒に」

そう言って目をキラキラさせながら連夜のほうに歩み寄ろうとした二人の美少女。しかし。

「り、龍乃宮さん、僕と一緒にお昼ごはんを！！」

「いや、俺と！！」

「いやいや、私と！！」

「姫子様、私達とお昼ご飯を食べましょ、ね、ね！！」

「むさい男ども散りなさいよ！！　瑞姫様は私達と一緒に食べるんだから！！」

「おまえらこそどけ」

「そうだそうだ！！」

「きゃあああああああっ！！　ち、ちょっと、今日こそは連夜と食べれると思ったのにいいいいいっ！！」

「ひゃあああああああっ！！　し、宿難くんと、私は宿難くんとご一緒したいのにいいいいいいっ！！」

姫子達同様に、乱闘騒ぎが終わるのを待っていたと思われる姫子と瑞姫の無数のファンの波が、あっというまにやってきて二人を巻き込むと、いずこかへと連れて行ってしまった。剣児達の乱闘と同じ毎日行われている恒例行事の一つであり、別に昼ご飯を食べるだけで無事に戻ってくるとわかっているので、連夜は苦笑を浮かべて彼女達を見送る。そしてその後、溜息を一つ吐き出して、自分の席へと戻って行くのだった。

二人の少年の乱闘騒ぎですっかりめちゃくちゃになった教室。しかし、この教室を使っている生徒達はもう慣れっこになってしまっていて、あちこちでひっくり返っている自分達の机や椅子を何事もなかったかのように手際よくあっという間に元の場所に戻してしまうと、喧嘩が始まると同時に一緒に持って出ていたカバンを開けて、

中からお昼ご飯を取り出し思い思いの場所に集まって昼ごはんを取り始めるのだった。

「さっちゃん、今日のお弁当は何？」

「いつも通り、色とりどりの季節の野菜と食用花のお弁当。マリーは？」

「鳥そぼろ弁当！！」

「なんか、いっつもそれのような気がするわね、あなたのお弁当」

「俺なんか売店で買ってきた焼きそばパンなのに・・」

「俺、焼きそばパン買えなくて売れ残りのあんパン」

「あんパンなんかまだマシじゃねぇか、俺なんか食パンしかなかったのに・・」

「あれ？　良子今日はお弁当ちっちゃいね？　どうしたの？」

「お願いだから聞かないで。しばらく、ダイエットしないといけなくて・・っていってるのに、あんた何、人の弁当の中にカロリー高そうでおいしそうなから揚げいれてくれてんのよ！？」

「ふとれ～、ふとってしまえ～」

「じゃあ、わたしもコロッケいれちゃう」

「私は、焼売入れちゃう」

「私、ブロッコリー嫌いだから、いれちゃう」

「ちょっと待て、あんたたち！！　人がダイエットしてるっていってるのに、ジャンジャン盛りつけて豪華にするな！！　それに誰だ、自分の嫌いなモノをさりげなく押しつけてくる奴は！？」

教室のあちこちからわいわいと賑やかな話し声が聞こえてきて楽しそうな昼食模様が繰り広げられていく。種族がバラバラであるせいで、その持参してきた弁当の中身も実に様々。『人』型種族が食べている一般的な内容のお弁当もあれば、植物系種族のように植物を使った料理か特殊な肥料が混ぜてある飲料水を持ってきているものもいれば、生きた虫がうじゃうじゃ入った弁当を美味そうに食べている獣人系の生徒もいる。かと思えば、売店で売っている普通の菓子パンを食べていたり、インスタント麺を食べているものもいるし、中身が全くなんなのかわからないドロッとした緑色のスライムのような何かを食べているものもいる。

食べているものこそ、実にバラエティに富んではいるが、どこの高校にもあり、どこの高校でもみることできる普通のお昼休みの光景。特別なものなど何もないその光景を、連夜はしばし眩しそうに、そして、優しさに溢れる視線で見つめていたが、すぐにその色を消して深く大きなため息をひとつ吐き出すと、自分の作業を再開するのだった。

そう、連夜は今昼食をとっていない。連夜とてお腹が減っていないわけではなく、昼食をとりたいのはやまやまなのではあるが、そうもいかない事情というものがあるのである。

「連夜～、すまん～」

床の上から聞こえてくる世にも情けない響きの声に気がついた連

夜がそちらに視線を移すと、そこにはぐったりとして床の上に転がる深蒼色の髪の少年の姿。
連夜は、その姿をなんとも言えない表情でしばらく見つめていたが、呆れ半分の苦笑を浮かべてみせつつ口を開く。

「もう慣れたからいいけどね。ほんとに二人とも毎日毎日飽きないよねえ」

連夜はそんな風に少年に声をかけながら自分のカバンの中から数本の薬瓶と、いくつかの珠を取り出すとそれを持って少年の横にかがみ込む。そして、優しい手つきで少年の上半身をそっと持ち上げて、蓋を開けた薬瓶を少年の口に持って行って飲ませてやるのだった。

「ほら、零さないようにゆっくり飲んでね」

「いつもいつも世話になっちまって済ま、ごぼぐぼっ！！」

「もう何やってるのさ、飲んでいる最中にしゃべらないの」

飲んでいる最中に無理してしゃべってしまったせいで薬が気管に入り、盛大にむせかえる剣児。そんな剣児の口から慌てて薬瓶を離した連夜は、まるで出来の悪い弟を見守る姉のように優しくその背中をさすってやり、胸に零れた薬をハンカチでぬぐってやるのだった。

『龍乃宮（りゅうのみや）　剣児（けんじ）』

名前からしてわかるように、姫子や瑞姫の異母兄の少年。
ただし、姫子や瑞姫の母親達と彼の母親では身分が大きく違う。

前王弟の双子の娘で、現龍王の左右を守る王妃である姫子と瑞姫の母親達と違いごく普通の下級龍族の娘であった剣児の母親。元々は現龍王の護衛役を務めていた彼女であったが、いつしかその龍王と情を交わし合う間柄となってしまい、その果てに生まれてきたのが剣児であった。

龍王は剣児の母親に後宮に入るように勧めたが、自由を愛する彼女はそれを断り、幼い剣児を連れて龍族の宮殿をあとにした。

一応剣児は龍乃宮の姓を名乗ってはいるが、事実上龍乃宮本家とほとんど接点はない。しかし、『龍乃宮』の姓は宮殿を去ることになった剣児の母親に対して、龍王が送ったせめてもの形見であり、この姓を与えられたことにより剣児と彼の母親は正式に龍の王族として公認された形となっている。

次期龍王候補の一人として、それなりに注目される存在である剣児。しかし、本人は堅苦しい王侯貴族様の生活なぞこれっぽっちも望んでおらず、自分を連れて王宮の外に出てくれた母親に感謝しているくらい。母親と同じくなによりも自由を愛し、これからもその道を突き進むつもりでいる。

そんな自由人の彼であるがその性格は、見た通りの熱血漢で御人好し。

姫子とよく似た容姿をしていて、美男子の部類に入る人物ではあるのだが、むしろ、彼の魅力はその起伏の激しい性格にあり、くるくると変わる表情は見る人を惹きつけてやまない。

前述したように血筋からいえば、姫子のほうが龍族としての能力は高いはずなのだが、突然変異なのかそれとも武術の達人たる母親の血のせいなのか、歴代龍王に匹敵する武力と神通力をこの歳ですでに身につけており、御稜高校の『嵐の三武神』と呼ばれる三大実力者の一人でもある。

おさまりの悪いばさばさの深蒼色の髪に、頭から生えた二本の角は大きすぎず小さすぎず見るからに立派、太いまゆげに、らんらんと光る蒼い双眸、百八十ゼンチメトル近くある身長に引き締まった

肉体。

とにかく目立つ、そして、モテる、異様にモテる。

歴代の男性龍王は色好みで有名であるが、どうやら彼もその血をばっちり受け継いでしまっているらしい。いつも彼の周囲には女性達の姿があり、実に華やかであるのだが、反面、男性の友人はほとんどいない。

常に複数の女性を連れて歩く剣児を好意的に見る男子生徒はほとんど皆無。友達としてではなく、ぶちのめす対象として近づいてくる者達ばかりだった。

そんな中にあって、剣児の数少ない男性の友人の一人が連夜だった。それもただの友人ではない。連夜は敵だらけの剣児の側に平気でいることができるただ一人の『人』物であり、剣児にとって連夜は『友人』なんて安い言葉で片づけられるような存在では決してない。

毎日毎日喧嘩に明け暮れ傷だらけの日々を送る剣児。そんな剣児の側に連夜はいつのまにか現れて、時には彼の傷を治療し、時には彼と共に戦い、そして、時に親に言えないような悩み事を聞いてくれてよりよい解決方法を教えてくれる。

そして、今日も連夜は彼の側にある。

第四話　『燃えよ！！　緋の鳥』　その2

「小学校の頃からちっとも変わらないんだから剣児は。中学校で別になってその間にちょっとは成長したかと思っていたのに、全く変わってないし」

「俺が変わるわけねぇだろ。きっと死ぬまでこのままさ。俺は俺だ」

呆れ果てた表情を隠そうともせぬまま、連夜は剣児の喧嘩で傷だらけになった手に丁寧に包帯を巻いていく。そんな連夜の視線から目を逸らすようにそっぽを向いた剣児は、どこか不貞腐れたような表情を浮かべてブツブツと呟く。全然反省の色を見せようとしない剣児に困ったような視線を向ける連夜だったが、すぐにその表情を優しさに溢れたものへと変化させる。その目に浮かぶのはやんちゃな弟を優しく見つめる姉のような慈愛の光。

「まあ、そうだね。器用に立ち回れる剣児なんて想像できないものね。剣児はいつまでも剣児だもんね」

「おうよ。俺は俺だ。死ぬまで他の誰かになんてなれるものか、器用に立ち回るなんて死んでもやだね。俺が避けないと前に進めない壁があるっていうのなら、いっそぶつかってその壁が砕けるまで前進してやるさ！！　それで俺の『人』生が終わるならそれはそれでいい。ぜってぇ、後悔なんかするものか！！　あ、いてて、痛いって連夜！！　もうちっと優しく治療してくれ」

「調子に乗り過ぎ。まったくもう。龍の一族はみんな頑固一徹の『人』ばっかりなんだから。でも、だからこそ強く優しくなれるのかもね」

包帯を巻いている途中で両手を振り回して力説しようとするものだから、傷口がモロに連夜の手にあたってしまいたまらず悲鳴をあげる剣児。そんな剣児に再び呆れた視線を向けた連夜であったが、すぐに視線を和らげまた包帯を巻き続ける。

剣児は連夜の言葉を聞きながら、バツが悪そうな、それでいて不機嫌そうな顔をわざと作ってみせる。その姿は傍から見ていると、大好きなお姉ちゃんにかまってほしくてたまらない弟そのもの。本人自身は全然それに気がついていないが、誰が見ても一目瞭然の態度。幸い、他の生徒達は自分達の昼食で忙しく、剣児に日頃から纏わりついている美少女三人組は何か言い争いをしていて誰もそんな彼の態度に気がついていなかったわけだが。しかし、その不機嫌な表情と違いその視線に映っている光は心から嬉しそうな、優しそうな、しかし、どこか切なそうないろいろな感情が浮かんでは消えていく。

「俺はそんなに優しくねえよ。優しくしてやりたいやつなんて片手の指ほどもいねぇ。俺のことを本当に理解してくれる奴もそうだ」

「そうかな？　そんなことはないと思うよ。剣児が気がついていないだけで、姫子ちゃん達と同じで、剣児の周囲にも『人』はいっぱいいるよ」

「ふん、上辺だけみて近づいてくる奴らなんぞに側にいてほしくないね。俺が、俺が本当に側にいてほしいのは」

そう言って剣児はしばらく連夜のことを熱っぽい視線で見つめる。しかし、連夜は剣児の足に包帯を巻いていてその視線に気がつかない。剣児はそれでもしばらく何かの想いを込めて連夜を見つめ続けていたが、連夜が全然気がついてくれないとわかると、本当に不貞

腐れたような顔になってぷいっとそっぽを向いてしまう。そして、小さく、本当に小さい声で誰にも聞こえないようにそっと呟く。

「連夜が、女だったらよかったのに。そしたら俺はこんなに渇くことも悩むことも他の誰かに求めることもなかったのに」

「え？　剣児何か言った？」

「な、なんでもねぇよ！！」

剣児がぼそぼそという声が若干耳に入り、連夜はきょとんとした表情を剣児のほうに向ける。すると、剣児は両手をバタバタとさせて慌てて首を横に振ってみせる。剣児のその滑稽な様子を見た連夜は、なんとも言えない笑顔を浮かべ声を上げて笑う。剣児は一瞬顔を顰め壮絶に仏頂面を作って見せたが、結局最後まで続けることができず相好を崩して一緒になって笑ってしまうのだった。

そして、しばらくの間二人が他愛なく笑いあっていると、不意に剣児の顔が強張り、連夜の背後に向けて鋭い視線を向ける。

それに気がついた連夜が、振り返って自分の背後に顔を向けてみると、そこには真紅の髪の少年が腕組みをして仁王立ちし、こちらを睨みつけているのが見えた。

「ふん、まだ立ち上がれないのか。相変わらず軟弱者だな貴様は、剣児」

「なんだとおっ！？」

剣児を見下ろしたまま、口の端をにいっと釣り上げて不敵な笑みを浮かべる真紅の髪の少年。そんな少年の挑発じみた言動を聞いた剣児は、まだ痛む身体に鞭打ってすかさず立ち上がると、よろめき

そうになる身体に無理矢理力を入れて半身に構える。それを見た真紅の髪の少年もまた、両手を前に出してだらりとさげる独特の武術の構えをとり、応戦の意思があることを無言で伝える。

そんな一触即発の状態の二人の間に座る連夜は、きょとんとした表情で両者を交互に見つめていたが、やがて、柔らかい笑みを浮かべて真紅の髪の少年に視線を向ける。

「やあ、陸(ルー)くん。もう立ちあがって大丈夫なの？」

「当たり前だ。ボクは誇り高き朱雀族の陸(ルー)　緋星(フェイシン)。軟弱極まりない爬虫類の攻撃如きで倒れるほど軟ではない」

「てっめぇ、誰が爬虫類だ!？　焼き鳥にしてやろうか!？」

連夜の問い掛けに対し、ニヤリと笑って傲然と呟く少年。その言葉を聞いていた剣児は怒りの咆哮をあげて突撃しようとしたが、それよりも早く立ちあがった連夜が、剣児に近づいてその額にビシッと手刀を振り下ろす。

「はいはい、みんなご飯食べているんだから暴れないの」

「い、いてっ!!　れ、連夜なぜ、俺を殴る!?」

ちょうど瘤になっているところを殴られた剣児は涙目になって連夜に抗議の声をあげるが、連夜はそんな剣児の声などどこ吹く風。すぐに剣児に背を向けると、すたすたと歩いて対面に立つ少年のほうへと歩いていく。

「な、なんだ？　宿難(すくな)　連夜(れんや)、ボク達の勝負を邪魔する気か!？もしそうなら、容赦は」

「足震えているよ」

「え？　ん、んぎゃあああああああっ！！」

近づいてくる連夜に威嚇の声をあげる少年だったが、その声に全く恐れる様子もなく少年に近づいた連夜は、すっと屈みこむと少年の足をつんつんとつつく。大した力でつつかれたようではなかったというのに、少年は床に倒れ込むとその場で転げまわって苦痛の声をあげる。そんな少年の姿をしばらくじっと見つめていた連夜であったが、やがて深い溜息を吐きだしその少年の身体に近づいてガシッと足をつかみ取る。

「本当にもう、剣児といい、君といい、なんでそうやせ我慢が好きで、格好つけたがるのかねえ、昔とちっともかわらないんだから」

「だ、誰がやせがまんなぞ、うわあああああっ、ちょ、待て、宿難、そ、そこは！！　ん？　今変なこと言わなかったか？」

「なんでもないの。それよりもいいから、ちょっと黙ってなさい。あ～、ほら、こんなに腫れあがってるじゃない」

床を転げまわる真紅の髪の少年に近づいてその足をむんずと掴んだ連夜は、嫌がって抗議の声をあげる少年を無視してスラックスをまくりあげる。するとそこには元の倍ほどの太さになるまでパンパンに赤く腫れあがった足が。よく見るとその足は微妙に歪み、普通は曲がらない方向に曲がっているではないか。

「よくもまあこんな折れた足でここまでやって来たね。後で治療してあげるつもりだったのに」

「余計なお世話だ!!　貴様の施しなぞ受けるものか、悪党の仲間め!!　ボクのことは放っておいてもらお、ぐあああああっ!!　そ、そんなに強く触るな、貴様ああっ!!」

「はいはい、治療したら放っておいてあげるから、ちょっと大人しくする」

「治療なぞいらんと言っているのがわから」

「このまま飛べなくなってもいいの？」

憎しみに満ち満ちた表情で連夜を見つめる真紅の髪の少年だったが、自分を見つめ返してくる連夜の瞳の中に深い哀しみの色を見つけ思わず口を閉ざす。そして、連夜が口にした言葉の意味が自分の死を意味することを悟って悔しげに顔を背ける。そんな少年の姿を見て、少し表情を和らげた連夜は持ってきていた薬瓶を開けると中身を自分の掌に落とし、それをよく伸ばして少年の腫れあがった足に優しい手つきで丁寧に塗って行く。

「やせ我慢で漢を貫きたい気持ちはわかるけどね。だけどその行為に、自由に宙を舞う君の翼である足を引き換えにするだけの価値があるとは僕には到底思えない」

「大きなお世話だ。ボクの翼はボクのものだ、誰のものでもない、どう使おうとボクの勝手だ!!」

「まあそうだね、その通りだと思うよ。君の翼で君の足だ。天を駆けるのも、地を疾るのも君の自由だ、そして、足を自ら壊してそれをやめるのも君の自由。ただね、僕は君が宙を自由に舞い飛ぶ姿を

見るのが好きなのさ」

「男にそう言われても嬉しくもなんともない」

「そうだね、でも、本当に君が宙を翔ける姿は楽しそうでいいよね」

「こっちは必死で飛んでいるというのに気楽なことを・・」

連夜の言葉にいつものように毒づこうとした緋星（フィエシン）であったが、そのとき脳裏にある光景がフラッシュバックする。それは仲が良かった二人の友達と一緒に遊びまわった頃の大切な思い出。

そのとき友達の一人がまっすぐに自分を見つめて言った言葉、そしてその姿がはっきりと甦る。

『ふぇいくんが宙を自由に飛ぶ姿を見るのが僕は好きなんだあ。だってふぇいくん、本当に楽しそうに空を飛んでいるように見えるんだもの』

父親の仕事の関係でもう一人の友達と一緒に南の城砦都市『アルカディア』に引っ越すことになり、それ以降会わなくなってしまった緋星（フェイシン）の大事な友達。

いつもいじめっこにいじめられてぼろぼろにされて、傷だらけあざだらけで、でもいつもいつも笑顔を浮かべていたあの友達。

激しい気性のせいで、昔から友達を作ることが苦手だった緋星（フェイシン）。

そんな緋星（フェイシン）の側には、いつも彼の姿があった。優しくて温かくて、いっつも緋星（フェイシン）がわがままで馬鹿なことを言ってもいやな顔一つせず聞いてくれて、だけど、緋星（フェイシン）が間違ったことをしようとすると体を張ってでも止めてくれて。彼とともに遊んだ日々の記憶は、全て緋（フェイシン）

星の大切な想い出。
そんな彼の種族は確か。

「まさか、そんなわけないよな」

「何、陸(ルー)くん？　僕の顔に何かついている？」

何か重大なことを思い出し何とも言えない愕然とした表情で連夜を見つめる緋星(フェイシン)であったが、すぐに頭を振ってそれを否定する。
そんなわけはないのだ。今自分が想像した通りに連夜が幼き頃に別れたあの友達だというのなら、龍乃宮　剣児の友達であるはずがないのだ。
龍乃宮　剣児は忘れてしまっているようだが、緋星(フェイシン)は忘れない、絶対に忘れるわけにはいかないのだ。幼き頃の自分達を思う存分になぶりいたぶってくれた、不倶戴天の敵を。
当時、自分達をいじめてくれた相手はかなり太っていて今の姿とは大分違っているようだが、恐らく間違いないはずだった。小学校の頃、近所の悪がき達の総大将として君臨していた最悪のいじめっ子。下の名前は忘れてしまったが、姓が『龍乃宮』だったことと、自分と同い年だったことだけははっきり覚えているのだ。
本人にはっきりと確認したわけではないが、ほぼ間違いあるまい。緋星(フェイシン)は、自分や、優しい友達が受けたあの屈辱の日々を一日たりとも忘れたことがない。
当時から身体能力が高く、ある程度腕に自信があった緋星(フェイシン)は果敢にやり返そうとしたが、そんなときいつも優しい友達が彼を止めた。
そして、いつもいつもこういうのだ。

『やられたからやり返すの？　そして、それを繰り返すの？　それじゃあの子たちと一緒だと思わない？』

そして、緋星達（フェイシン）を安全なところに避難させておいて自分が身代りになり、いつもいつも一方的に殴られ蹴られし、彼らがあきるまで耐え続けるのだ。

それを見ているのがつらくてつらくて、悔しくて悔しくて、緋星（フェイシン）は引っ越してから武術を真剣に学び始めたわけだが。

ともかく、そこまでされた相手と友達になれるわけがないのだ。そんな相手と友達になっているわけがないのだ。だから、宿難（すくな）　連夜（れんや）は絶対にあのときの優しい幼友達ではない。断じてない

そう結論づけて緋星（フェイシン）湧き出した考えを胸の奥底に封印する。

そして、いつもと変わらぬ憎たらしい表情を浮かべて連夜に毒づくのだった。

「あまりにも君の顔が間抜けに見えたから茫然としてしまっただけだ」

「そう？　君のぱんぱんに腫れあがった足とどっちが間抜けに見えるかな？」

そう言って連夜は黙々と少年の足を治療し続け、少年は舌打ちしながら顔を背けるのだった。

『陸（ルー）　緋星（フェイシン）』

ほぼ絶滅に近い幻の『火の鳥（エターナルフォリナー）』種の一族の一つ、朱雀族の少年。

燃えるような炎のような真紅の髪とルビーのような美しい真紅の瞳、それにエルフ族のように長くとがった耳が特徴的。肌は健康的な小麦色で身長は百七十五ゼンチメトル前後と普通。性格はその真紅の髪と同じく、真っ赤に燃え盛る炎のように激しい。曲ったことが大嫌い、群れて無法を働く不良は更にキライ、女にモテル奴はもっと嫌い、そして、一番嫌いなのは彼が悪と判断する行為を行う者。

己が信じる『正義』と『信義』を絶対と信じ、それを曲げることを良しとしない。基本的に話し合いよりもまずは拳を持って語り合おうとする熱血直情型。

そんな性格であるから剣児よりもさらに友達が少ない。決して頭が悪いわけではないし、容姿も誰が見ても魅力的であるため、彼が少しでも融通がきく性格であったならば、あっという間に彼の周りが『人』で溢れるのであろうが、本人が決して『人』に道を譲ろうとしない性格の為、彼はいつも一人である。

自分が心に定めた『正義』と『信義』に固執する余り『人』を側に近づけることができない、しかし、それなのに『人』を求め『人』のあるところにその身を置こうとする非常に不器用な性格の少年。それが陸（ルー）　緋星（フェイシン）という少年であった。

連夜はそんな彼のことが嫌いではなかった。暴力的で、『人』の言うことをちっとも聞かない緋星（フェイシン）であるが、緋星（フェイシン）はウソをつかないからだ。

連夜も基本的に嘘はつかない。しかし、肝心なことをはぐらかしたり、わざと完全な情報を話さないで『人』を煙に巻くことはしょっちゅうやっている。だが、緋星（フェイシン）は愚直なまでに自分の気持ちに正直で、強いところも弱いところも、いいところも悪いところも常に全部見せている。

それは別に彼が意識して行っているわけではない、本人自身は一応隠そうとしたり強がってみせたりするのだが、誰が見てもわかるくらい単純で、悲しいくらいに全部態度や言動に現れてしまう。そんな彼のことを連夜は嫌いにはなれなかった。いや、どちらかと言えばかなり好きだった。ねじ曲がった性格の自分とは違い、どこまでも真っすぐにどこまでも自分に正直に生きている緋星（フェイシン）が眩しくて魅かれてしまうのだ。

ただ、残念ながら緋星（フェイシン）は連夜のことが好きではないようだった。恐らくそれは彼が宿敵と定める剣児の幼馴染であるためだからだろうと連夜は考えている。剣児と喧嘩をするたびに満身創痍になる緋（フェイシン）

星。そのたびに連夜は、剣児を治療するついでに彼の治療も行ってやっていたが、彼は決して連夜に心を許そうとはしない。
それでも連夜は気を悪くすることなく治療を続ける。
それが緋星（フェイシン）という生き物だと思っているからで、今日も連夜は彼の治療を行うのだった。

「これで貸しを作ったと思わんことだな、宿難　連夜。ボクはこの程度のことでは恩義には感じないからな」

苦虫を噛み潰したような表情でそう呟く緋星（フェイシン）に対し、連夜は気を悪くした様子もなく肩をすくめて見せるばかり。しかし、それを横で聞いていた別の『人』物が怒りの声をあげる。

「おい、連夜。もうこんな奴治療してやらなくていい、ほうっておけって。何が『正義』だ、何が『信義』だ。どんな理由があるとしても、『人』から受けた恩を恩と思わないなんて言う奴のどこにそれがあるっていうんだ!?　おまえは最低だ、緋星（フェイシン）!!」

「もういいって、剣児。僕が勝手にやっていることで、貸しを押し付けるつもりでやってるんじゃないもの」

「連夜、おまえ甘すぎるぞ!!　こんな奴を助けたって一文の得にもなりゃしねぇのに!!」

「得とか損とかでやってるわけじゃないの。ほんとに剣児は怒りっぽいんだから。カルシウムちゃんととってる？」

「何言ってやがる!?　あのなあ、俺はおまえの為を思って」

「はいはい。わかったわかった。それよりもさ、後ろの方達がおま

ちかねみたいなんだけど、僕のことよりもそっちを優先しなくていいの？」

「へ？　後ろ？」

連夜の指摘に一瞬呆けたような表情を浮かべて見せた剣児であったが、すぐに何かを悟り慌てて後ろを振り返る。すると、そこには三人の美少女達の姿が。三人の少女達はそれぞれ胸に大きな弁当箱を抱え、恨めしそうな表情で剣児をじっと見つめている。

「あ、あはは、み、みんな、もうちょっとだけ待っていただけませんか？　男同士の大事な話が」

「剣児くん、いい加減にしてください。お弁当食べる時間なくなってしまいます！！」

「そうだぜ剣児、いつまでやってるんだよ」

「待ちくたびれましたよ～～。さあ、キリキリ行きますよ。今日こそ誰のお弁当が一番おいしかったのかちゃんと聞かせていただきますからね」

「ちょ、ま、待ってくれ、みんな。まだ、俺、緋星（フェイシン）や連夜と話が、いてて、引っ張らないでくれ、そこまだ回復してないんだってば！！」

あっという間に剣児を取り囲んだ少女達は、剣児を両脇からがっちりとホールドすると、疾風のように素早くいずこかへと連行していってしまった。その様子をしばし呆気に取られたように見つめていた連夜であったが、すぐにくすくすと笑いだす。

「羨ましいような、そうでないような。果たして剣児は本当にあれで幸せなのかな？　陸（ルー）くんはどう思う？」

「知らん。あんなスケベ野郎は地獄に落ちてしまえばいい」

「あはは。まあ、普通はそう思うよねえ。でもね、ただでは落ちないと思うよ剣児のことだから。なんかいっぱい美少女や美女を侍らせながら落ちていきそう。そんな感じしない？」

「ちっ」

意味深にニヤリと笑って緋星（フェイシン）の顔を覗き込むと、緋星（フェイシン）は舌打ちしながらぷいっと横を向いてしまう。そんな緋星（フェイシン）の姿を見た連夜は、剣児に向けていたのと全く同じのとても優しく和やかな笑みを浮かべる。その後はしばらく連夜は何もしゃべることなく緋星（フェイシン）の傷だらけの足の治療を続け、やがて、すっかり治療し終えると最後に包帯をしっかりと巻いて結んで立ち上がる。

「これでとりあえずは大丈夫。ただ、僕は専門療術師じゃないから、一度きちんと診てもらったほうがいいよ。まあ折れた脚はうちの師匠特製の回復薬で一応くっついてはいるけど、完全に回復するには今日一日はあまり動かさないほうがいいかな。って、いっても君は聞かないんだろうけどね」

「ボクはボクのしたいようにする。例えこの足を失い宙を翔けることができなくなっても、ボクは後悔しない」

連夜の言葉を肯定するように、立ちあがった緋星（フェイシン）は真っすぐに連夜を睨みつけて呟く。そんな緋星（フェイシン）の姿を眩しそうに見つめた連夜は、

どこか寂しげで儚げな笑みを浮かべて見せたあと、緋星（フェイシン）に背を向けて歩きだす。

緋星（フェイシン）は少しの間無言で連夜の背中を見送りその後いずこかへと立ち去ろうとしたが、ふと自分の視線の先の連夜が教室の自分の席ではなく教室の外で出て行こうとしていることに気がつき、思わず歩みを止めて連夜に声をかける。

「お、おい、宿難」

「ん？　なに、陸（ルー）くん？」

ちょうど教室の戸口を潜り、廊下に出て行こうとしていた連夜だったが、緋星（フェイシン）の声に気がつききょとんとした表情で振り返る。

「おまえ、教室で飯を食わないのか？」

「うん、僕はいつも別のところで食べているよ」

「何故だ？　ああ、そうか龍乃宮姉妹と仲が良いんだったな。あいつらのところに行くのか？」

「ううん、行かないよ」

「じゃ、じゃあ剣児のところか？」

「そっちにも行かないよ。というか、僕なんかがいったら、剣児はともかく、剣児の彼女達がいい顔するわけないでしょ」

「ちょっと待て、まさかこのクラスで一緒に飯を食うような仲のやつはいないのか？　そう言えばおまえが龍乃宮姉妹や剣児と一緒に

飯を食ってるところも見たことがないが」

「あ～、そのこと。大したことじゃないんだけど、僕が一緒だといろいろとほら、迷惑がかかってしまうかもしれないからね」

「なんだそれは？　迷惑って何がだ？」

本当にわけがわからないという表情を浮かべて聞いてくる緋星（フェイシン）の姿を、苦笑を浮かべて見つめていた連夜だったが、そっと緋星（フェイシン）の側に歩み寄り教室の中のクラスメイト達に聞こえないくらいの小声で話しかける。

「僕は友達が少ないってことだよ。最下級の最下級、底辺中の底辺に位置する種族の人間族だからね。自分から友達になりたがる酔狂な『人』はあまりいないかな。あ、言っておくけど一応友達が全くいないわけじゃないからね。ただ、この教室の中にはほとんどいないってだけ」

「そんなバカな!?　友達がいないって・・だ、だが、少なくとも龍乃宮達はおまえの友達なんだろ？　違うのか？」

「さあ、どうなんだろうね。陸（ルー）くんはどう思う？」

「どう思うって、おまえ」

連夜の言葉に一瞬馬鹿にされているのかと思って盛大にかみつこうとした緋星（フェイシン）であったが、おどけて肩を竦めて見せる連夜の瞳の奥に隠しようのない真っ暗な闇を確認してしまいそのまま絶句してしまう。深い、深いという言葉すら生ぬるい漆黒の闇。引きこまれれば二度と抜け出せなくなってしまうのではないかと思わせる無明の

空間。

いったい何を見て、どんな経験をすれば『人』はこれほどまでに深くて黒い『闇』を己の身体のうちに作りだすことができるというのか。

何かをしゃべらなくてはと思い口を動かすが、頭の中には何も言葉が浮かんでこずただただ口をバカみたいにパクパク動かすばかり。そんな緋星（フェイシン）の様子を見ていた連夜は、瞳の中の闇を再び心の奥底に封じ込め、和やかで淡い笑みを浮かべて緋星（フェイシン）を見つめる。

「ごめん、つまらないこと聞いちゃったね。今言ったことは忘れちゃってよ。じゃあ、僕行くね、今日は弁当忘れちゃったから食堂で食べないといけないんだけどさ、急がないと食堂しまっちゃうでしょ？」

先程まで見せていた『闇』などなかったかのような穏やかで温かな光を宿す瞳で緋星（フェイシン）のほうを見つめながら、連夜は片手をひらひらと振ってみせ今度こそ教室から出て行った。結局その後緋星（フェイシン）は、その小さな背中に何も言葉を発することができず、視界から消えてしまったあと、深い深い溜息を吐きだししばらくその場に立ち尽くしていた。連夜が治療してくれた包帯の巻かれた足を静かにじっと見つめながら。

第四話　『燃えよ！！　緋の鳥』　その３

連夜達が普段授業を受けている第一校舎の北に、巨人族の生徒でものびのびと運動することができる巨大な体育館があるのだが、そのすぐ隣に大型の学生食堂は存在している。

体育館同様、大柄な種族の生徒でも快適に食事ができるようにと広いスペースが割り当てられているわけであるが、広いだけが特徴では決してない。様々な種族の食生活に対応できるようにとそのメニューも豊富で、肉食、菜食、魚類、穀物、豆類は勿論のこと、虫や特殊な生き物の体液を扱った料理まで実に様々。販売形式は基本的に単品メニューと定食がメインであるが、一週間に一回はバイキング形式の食事も選べるようになっている。

しかも、この高校が都市の行政機関である中央庁によって運営されているため、食事代は全額中央庁が負担してくれるため、御金に困っている学生達にとっては実にありがたい場所になっていた。そのため、朝昼晩すべてここで食べてしまう学生も決して少なくはない。

実に至れり尽くせりのありがたい施設であるわけでだが、しかし、全く欠点がないわけではない。

種々雑多な種族にあわせ、膨大な種類の品を作るため、どうしても味はそれなりになってしまっているようで質よりも量という感じはどうしての否めないのだ。

まあしかし、ただで飲み食いできるわけであるから文句を言うのは贅沢というもので、それについて殊更苦情を申し立てる生徒はいないのだが。

連夜はよりよい精神状態を保つためには、それなりに日々きちんとした食事を取る必要があると信じている。そのため、あまり大味な学食を使うことはなく、できるだけ食事のバランスを考えて弁当を作って持ってきているわけであるが、だからといって御稜高校の

学生食堂が嫌いというわけではない。

と、いうのも高校生活の中で一番連夜がリラックスできるのがこの時間だからである。

その生い立ちから十七歳という年齢の割にかなり老成している連夜であるが、一応彼も思春期真っただ中の高校生である。二十四時間孤独でいて平気というわけではない。勿論家に帰れば彼を愛してくれる温かい家族の絆が存在しているが、だからといって家の外でずっと一人でいることが全然平気というわけでは決してないのだ。

クラスの大部分の生徒達から敵視、あるいは緩い無視の状態にある連夜が、この高校の中にあって羽を伸ばしリフレッシュできる場所の一つがこの学生食堂である。

連夜はいつもこの学生食堂に弁当を持ちこんできて食事を取る。と、いっても一人で黙々と食べるわけではない。連夜はここで彼が最も心を許している三人の大親友の一人といつも食事を取っているのである。

真友の名は『ロスタム・オースティン』

通称『ロム』

生まれて間もなく両親を失くし、両親に代って彼を育ててくれた祖父母も中学校卒業の時にそろって他界。天涯孤独の身である上に、連夜同様に最底辺に位置する下級種族である彼は幼いころから凄まじい差別にさらされて生きてきた。

本当ならば、親を恨み、世間を恨み、この世の全てを恨んでとんでもない『悪』に育っていたとしてもなんらおかしくはない。

しかし、その本来の性格のせいなのか、あるいは彼を育てた祖父母が余程に偉かったのか、彼は全くねじ曲がることなく強くまっすぐに育った。義侠心に厚く、信義を重んじ、弱い者には優しく、強い者には厳しい。口べたで、世渡りが下手で、不器用で、察しが悪く要領も悪い。寝癖でぼさぼさの髪をしていても、めやにがついていても、着ている服がよれよれでも全然自分の外見に気を使わない。がさつで大雑把極まりない彼だが、連夜とは違う『優しさ』を持つ

彼のことが連夜は本当に大好きで心から信頼しているのだった。
今日も彼と過ごす時間を楽しみにしながら食堂へと入ってきた連夜であったが、彼がいつも座っている食堂の一番奥の席が空席になっていることを見て、唐突にあることを思い出す。

「あ～、そっか。そういえば、今日は『外区』の仕事があるから学校休むって言っていたなあ」

連夜の真友ロムは苦学生である。一応両親や祖父母が残してくれた幾ばくかの遺産を持ってはいるが、何年もそれで生きていけるような金額ではない。なので彼は働きながら高校に通っているのだ。彼の祖父母の死後、彼の将来を心配した連夜が両親に相談したところ連夜の頼れる両親はすぐさまロムの後見人となってくれた上、大学を卒業するまでの援助すると申し出てくれたのであるが、ロムはその申し出のほとんどを断った。
連夜の『真友』であることを誇りとしていると常々口にしている彼にとって、連夜に迷惑をかけるような行為は絶対にできないことらしい。しかし、それは決して迷惑なことではないと連夜と彼の両親が説得に説得を重ね、今はなんとかある程度譲歩しこちらの援助を完全にではなくても受け入れてくれている。
ただ、やはり借りっぱなしでいることはできないからと、実入りのいい『外区』の仕事がみつかると学校を休んででもそちらに行ってしまうのだ。

『高校卒業するまでは、そんなことしなくていいのに』

そう言って彼を諭そうとした連夜だったが、結局それについて真友は決して首を縦には振らなかった。

『それでは俺の気がすまん。俺はな、連夜、いつまでもおまえの『

真友』でいたいと思っているし、いつまでもおまえの『真友』でいたいんだ。そして、胸を張って俺は宿難（すくな）　連夜（れんや）の真友だと言える『人』であり続けたいんだ。そのためには、今のままではダメだと思うのだ。俺の為にも、おまえ自身のためにも』

『ほんと真面目なんだから、ロムは』

『そうでもない。ただ、そうしたいからそうしているだけだ。言っておくがおまえやおまえのご両親には本当に感謝しているんだぞ。城砦都市『通転核』のスラムから俺を連れ出して、城砦都市『嶺斬泊』に連れてきてくれて、しかも住む為の新しい住まいまで用意してもらった。それだけじゃない、今では生活費や学費まで肩代わりさせてしまっている。俺はおまえやおまえのご両親に何もできないというのにだ。ありがたいことだと思う。しかし、ありがたがって何もしないというのはどうしても我慢がならんのだ。だから頼む。頼むから俺の好きにさせてくれ』

そこまで言われてしまっては流石の連夜もそれ以上言葉を続けることはできなかった。結局大きく嘆息しつつも真友の好きにさせることにしたのだった。

そして、ロムは高校生活を送りながら仕事をすることになったのであるが

「ほんとにロムは真面目だよねえ。でも、また危ないことしているんじゃないかなあ。ロムって報酬がいいと危険な仕事でも平気で引き受けちゃうからなあ」

連夜はそう小さく呟くと両腕を組んで考え込む。

彼の真友ロムはバグベア族と呼ばれる種族である。バグベア族は種族的には人間族と同じで最下級に位置する種族であるが、種族と

しての身体能力だけならば全種族の中でも間違いなくトップクラス。霊力や魔力、神通力といった異界の力は全く持ってはいないが、肉体的な能力は凄まじいものがある。

それゆえに異界力が全盛期であった五百年前は最劣等種であったわけであるが、今は話が百八十度違う。差別されている現状は五百年前と大差ないが、その能力だけで見れば、彼の種族は今の時代に最も適応した種族であるといえるだろう。

だからなのであろうが、少々危険な仕事であったとしても見返りの大きい仕事には手を出してしまっているようなのだ。それもこれも人一倍責任感が強く真面目な彼の性格故であるのだが、連夜はそんな彼が心配で心配で仕方なかった。

「無茶していなければいいんだけど。何度言っても無茶しちゃうからなあ、ロムは」

いつか取り返しがつかないような事態になるのではないかと、友人の身を案じるあまり寝られなくなる時もある。今のところ傷だらけでボロボロの姿になっていることはあっても、手足を失ったり、重傷を負って帰ってくるようなことはないのではあるが。

「できるだけ早くなんとかしなきゃね。でないといつか本当に僕の最悪の予想が現実になりそうで怖い。そんなことになったらリンに会わせる顔がないよ」

そう呟き深い嘆息を漏らす連夜。

しかし、二つほど首を振ってそういった陰鬱な考えを振り払う。

食事のときはできるだけそういう暗い考えはしないように心掛けているので、とりあえずそのことについては昼食が終わるまで一旦保留にしておくことする。

連夜はとてとてと食堂に入っていき、入口近くに山積みでおいて

ある四角いお盆と朱塗りの箸を取ると、料理が並べてある壁際へ移動。紫の振りかけられた並盛のごはん、トン汁、茄子の味噌炒め、サラダを次々と取ってお盆に載せて窓際のあいている席についた。

もう半分以上昼休みの時間が終わってるせいか、食堂に残っている人もまばらで、連夜が座った長テーブルには他に誰も座ってる人もおらず、ゆっくりと食べることができそうな雰囲気に、少しほっとする。

「やれやれ、まあ、たまには食堂もいいよね」

と、苦笑しながら茶碗を持ち、茄子の味噌炒めに箸をつける。

やはり、思った通りの平凡な味であったが、まあ、普通においしいレベルなのでとりたてて文句を言うこともなく食べていく。当り前のことであるが、しゃべる相手がいないと、ただ黙々と食事を進めて行くことになるので、そのスピードはかなり早くなる。そうして五分もたたないうちに大半を食べ終わってしまい、このあと残った休み時間をどう使おうかとぼんやり考えていると、不意に複数の人影が目の前に現れたことに気づいた。

目線を前に移すと、明らかに優等生と真逆に位置するだらしない姿格好の方々が、にやにやと見るに堪えない嘲笑を浮かべながら連夜を見下ろしているのが見える。

「おい、みんな、くせえくせえと思ったら、ここに人間がいるぜ」

この集団のリーダーと思われる牛頭人身のミノタウロス族の巨漢が、連夜の対面側から片手をテーブルについて、その牛顔を近づけてきた。

「力も、魔力も、地位も、名声もねえ人間がよお、何、俺たちに交じって堂々と飯食ってるのかねえ、ええ?」

気の弱い学生だったら、気絶しそうな凶悪なオーラを纏わせて恫喝してくるミノタウロス。しかし、連夜はむしろきょとんとした表情で見つめるだけで、もぐもぐと食べることをやめようとしない。

「おい、てめえ、聞いてるのかよ!!　おまえだよな？　二年生のとびきりかわいい龍族の美少女二人をいつも侍らせている生意気な人間っていうのはよ」

その姿に苛立ったミノタウロスは、その大きな掌をテーブルに叩きつける。

ところが、その掌が叩きつけられる瞬間、絶妙なタイミングで連夜はひょいとご飯の乗った自分のお盆を持ち上げて衝撃をやりすごすと、またお盆を元に戻し何事もなかったかのように昼御飯を再開する。

自分の行動が不発に終わったことが一瞬わからず、『へっ!?』みたいな間抜けな表情を浮かべたミノタウロスだったが、すぐにその意味を知ってぶるぶると震えだした。

「な、なめてんだろ、人間のくせに、俺達のことなめてるよな、おまえ!?」

「えっと、念のために聞いておきたいんだけど、僕に言ってるんだよね？」

怒りのボルテージをどんどん上げていくミノタウロスとその仲間達の様子に、むしろ困惑したかのような表情で見つめる連夜。一応きょろきょろと周囲を見渡し自分以外に人間種の生徒がいないことを確認してみせる。すると、その態度を見てなめられていると思ったミノタウロス達はますます激昂し、今までの侮蔑に満ちた視線か

ら完全に怒り一色に満ちた眼差しへと変化させて連夜を睨みつける。

「てめぇ以外に人間なんて、いねぇだろうがよ!!　ふざけてんじゃねぇぞ、こらぁっ!!」

「う〜ん、やっぱりそうかあ・・こういうシチュエーションて実に久し振りだったから、間違ってたらいけないと思ってさ。ごめんごめん」

てへへと、笑ってミノタウロスを見たあと、連夜はいつの間にかきれいに平らげたお盆の空の食器に御馳走様でした静かに両手を合わせて瞑目する。そして、そのあと、上着の内ポケットに手を突っ込み、中から一冊の小さなメモ帳を取り出してパラパラとめくり始める。いったいこいつ何をやっているんだという顔をしているミノタウロス達を尻目に、しばらくの間メモ帳とにらめっこしていた連夜であったが、やがて、自分が探していたページがみつかったのか、メモ帳のページをめくることをやめてそのお目当てのページをじっと読み続ける。

それほど長い間メモ帳を凝視していたわけではないが、すっかり無視されてしまっている形になっているミノタウロス達にとっては、そんな連夜の態度がおもしろいわけがなく怒りの咆哮をあげようと口を開こうとした、まさにその絶妙なタイミングで連夜が先に口を開いた。

「えっと、一年生のジャック・ブルータスくん・・だよね?」

「な、なに!?　なんでおまえ俺の名前を知ってる!?」

「あ〜、よかった。ちゃんとあっていたんだね。えっと、嶺斬泊南中学校出身。『黒大牛(ブラック・ビック・ブル)』の異名を持つ怪力自慢。普段は主に同じ南

中学校出身の生徒達と行動を共にしている。ってことは君の後ろにいるのは君の中学校時代からの子分ってことなのかな？　僕の情報あってる？」

　無邪気な笑顔を浮かべ、かわいらしい仕草で小首を傾げて見せながら目の前に立つ牛頭人体族（ミノタウロス）の少年ジャックに問いかける連夜。そんな連夜の問いかけに対し、ジャックは慌てたように怒声をあげる。

「て、てめぇ、俺のことを調べたのか！？」

「うんまあ、一応ね。『敵を知り己を知れば百戦危うからずや』って、別世界の兵法家の方も仰っておられるから、この学校に通う生徒達の中で扱いに注意が必要な『人』物はそれなりに調べておいたんだけど・・」

「はあ？　別世界？　おまえ頭おかしいのか？」

「ああ、ごめんごめん、そこは聞き流しておいて。それよりもさあ、ほんとに君がジャック・ブルータスくんなの？　自分が調べておいてなんなんだけど、どうしても実物と情報が一致しないような」

　不良達にはさっぱりわからない謎の独り言をブツブツともらしながら、片手に持つメモ帳を真剣に読んでいた連夜だったが、やがて顔をあげて目の前の厳ついミノタウロスに問いかける。

「しつこいようだけど本当に君がジャック・ブルータスなんだよね？」

「ほんとしつこいな、おまえ。そうだよ、俺が元南中の総番ジャックだ！！」

「『黒大牛（ブラック・ビッグ・ブル）』の？」

「そうだ」

「中学時代に格闘選手権大会ジュニアの部で三位入賞の？」

「そうだ」

「三年生のお姉ちゃんがこの学校の現生徒副会長のジェーンさんで、二年生のお姉ちゃんジェリーさんは槍斧（ハルバード）部のエースで次期キャプテンの？」

「そ、そうだ・・って、ちょっと待て、おまえ！！　ひ、『人』の家族構成にまで探りを入れやがったのか！？」

「いや、探りやがったのかって言われても、そもそも情報の提供源は君のお姉さんのジェリーさんなんだけどね。なんか、すっごい仲が悪いんだって、君達？」

「ほ、ほっとけ！！　『人』の家庭の事情はどうでもいいだろうが！！」

「いや、それで君の麗しの姉君からいろいろと君のことを聞かせてもらったんだけど、どうしてもよくわからないのが、この君の趣味なんだよね。なんか今見ている実物の君と合致しないというかなんというか」

「し、し、趣味だと！？」

首を捻って心底わからないという表情を浮かべてみせている連夜。しかし、対面に立つミノタウロスは連夜が悩んでいる内容に心当たりがあるのか、先程連夜が発したある単語に劇的に反応を示しみる顔を青ざめさせていく。

そんなジャックの反応にしばらく気がつかなかった連夜であったが、ふと顔を見上げたときにジャックの表情が目に映り、ぽんと片手をもう片方の掌に軽く叩きつける。

「ああ、その反応からするとやっぱりこの情報は事実なんだね。いやあ、流石の僕もいくらなんでもそれはないだろうと思っていたんだけど、『人』って本当にいろいろな側面があるよねえ。びっくりだ」

「な、な、な、なんの情報だという・・」

「いや、君の趣味がミカちゃん人形のコレクシ」

「うわわあああああああああああああっ!!」

絶対に誰にも知られたくない秘密を連夜が口にしようとしていることに気がつき、連夜の声をかき消すべく慌てて大声で絶叫するジャック。そんなジャックの様子をしばらくぽか〜〜んと口を開けて見つめていた連夜であったが、やがて生暖かい表情を作ると片手をひらひらとふってみせるながらわかったように口を開く。

「もう、そんなに照れなくてもいいのに」

「照れてないわ!!　てめぇ、いい加減にしろよ!!」

「いいじゃない、別に男の子がかわいいミカちゃん人形を集め」

「ぎゃあああああああっ！！　どさくさ紛れにまたしゃべろうとするな、貴様！！」

「わかったよ、もう言わないよ。でも別にいいと思うんだけどなあ。そういえば君のお姉さんが言っていたけど、集めたミカちゃん人形でおままごとごっこをたまにしてるって聞い」

「ぶあああああああああっ！！　しゃべるなというとるんじゃああああっ！！」

あまりにも連夜がしつこく聞いてくるものだから、とうとうキレてしまったジャックは、両手を振り回しながら暴れ出してしまう。

しかし、肝心の連夜はすでに素早くそこから退避したあと。とばっちりはすぐ近くにいた子分達に振りかかり、何人かがジャックの剛腕の犠牲になって床の上にたたきつけられることに。

そんな彼らの様子を『人』の悪い笑みを浮かべて眺めていた連夜だったが、ジャックが暴れたせいで子分達だけでなく食堂のテーブルや長椅子にまで被害が及んでいるのを見て顔を顰める。

「まったくもう、ジェリーさんの言ってた通りだ。キレると見境がなくなるって情報も本当か。やれやれ、お～い、ちょっと君達、外で遊ぼうよ。ここは遊ぶところじゃないんだよ？」

とジャック達にいうと、お盆を持って立ち上がる。すると、そんな連夜の声を聞いてジャックがようやく我に返り、そちらに鋭い視線を向けて咆哮する。

「ま、待てよ、逃げる気か！？」

「へ？　いや、ここだと食堂のおじさんやおばさん達に迷惑かかっちゃうでしょ。すぐそこに誰も来ない体育館裏があるわけだし、そこでお話しようよ。ちょっとお盆返してくるから」

そうにこやかに告げると、連夜は食堂の食器返却口に向かってお盆を返しに行く。ミノタウロス達は、そのまま連夜がとんずらするのではないかと、注意して連夜の行方を追っていたが、そんな気配は微塵もみせずにとっとこちらにもどってきた。

「さ、行こう行こう。もう昼休みあんまり残ってないし」

「・・あ、ああ、きっちり話させてもらうぜ」

物凄く釈然しないながらも、連夜の後に続いて食堂を出ていくミノタウロス御一行。しかし、食堂から出て行く途中、連夜がふと振り返りミノタウロスに顔を向ける。

「なんだ、まだあるのか？」

「ああ、いや、大したことじゃないんだけど、僕に声を掛けてきた理由って何？　三つほど思い当たる理由はあってそのどれかだろうとは思っているんだけどね。思い当たる理由その一つ目、さっき君が言っていたけど僕が人間族で気に入らなかったから」

そう言って連夜はじっとミノタウロスの瞳を見つめる。ミノタウロスは『何をガンたれてくれてんだ！！』と怒鳴りかけたが、連夜の瞳が恐ろしいまでに真っ暗で、その中にどこまでも底の見えない『闇』が広がっていることに気がつくと、思わず絶句して立ち尽くしてしまう。そして、まるで蛇に睨まれた蛙のようにその巨体を硬直させ、ただただ冷や汗を大量に流しながら自分を支配する得体の

しれない恐怖に怯え続ける。
そんなジャックの様子を見つめながら、連夜は自身が発する『闇』のオーラを収めようとはせず何かを見透かすかのようにますますその瞳、いや、全身にまとう『闇』を深めていく。

「あらら、違うのか。人間族が気に入らなくて僕に声をかけてきたわけじゃないみたいだね。それじゃあ、思い当たる理由その二つ目、僕個人が弱そうに見えて八つ当たりで捻りつぶすのにちょうどよかったから」

「な、な」

「あれ？　これも違うの？　ちょっと待ってよ。またなの？　まさかとは思いたかったんだけど、君もなのかい？」

目の前のミノタウロスだけでなく、不良達全員が認識できるほど嫌な感じのプレッシャーを周囲に発し、ジャックのことをじっと見つめていた連夜だったが、やがて何かに気がついてそのプレッシャーを緩める。そして、なんともいえない嫌そうな顔を浮かべて見せるのだった。

「あ～、えっと、思い当たる理由その三つ目。龍乃宮　姫子ちゃんか、龍乃宮　瑞姫さんかどっちかわからないけど、僕が二人と仲良くしているのがおもしろくなかったから？」

「！！」

その言葉を聞いた瞬間、厳ついミノタウロスの顔が一瞬にして真っ赤になり、それを見た連夜の顔がうんざりしたものへと変化する。

「もう〜〜、なんか最近そればっかりだなあ。僕に声をかけてくる連中のほぼ全ての理由がこれだよ。まったくもう、そんなにあの二人のことが好きなら、告白するなりなんなりするなりして自分からアプローチかければいいじゃない。なのになんで僕を排除することを優先させるのかなあ。ただの友達でしかない僕を排除したところでなんにも変わらないのに。やれやれ、もういい加減にしてほしいなあ」

盛大に嘆きながらがっくりと肩を落とす連夜。そして、首をゆっくりと横に振ってみせながら連夜はジャックやその子分の不良達のほうに視線を向けると、いつにない真面目な表情で口を開く。

「そうやってなんでもかんでも力づくでなんとかする、なんとかなるっていう考え方。昔の誰かとそっくりで、妙な親近感がわくけどさ。だからと言って僕は君の思うようにはならないし、なってはあげないよ」

「うっせえうっせえ!!　てめぇはおとなしく俺達にボコられていればいいんだよ!!」

自分達に纏わりついていた『闇』のプレッシャーが緩んだことで、いつもの威勢を取り戻したジャックが、自分よりも小さな連夜に向かって威嚇の怒声をあげる。しかし、連夜は全く動じる様子もなくちょっとの間ジャックの顔を見つめていたが、呆れたような表情を浮かべてスタスタと先に体育館裏に向かって歩きだす。

「ちょ、まて、このちび!!」

「はいはい、昼休みの時間もうそんなに残っていないんだから、ちゃっちゃと行く。それでちゃっちゃと済ませよう」

ジャックに背中を向けたまま連夜はそう呟き、その言葉を聞いてますます怒りを募らせたジャック達は慌てるように連夜の後を追いかける。しかし、ジャック達は全く気がついていなかった。前を向いている少年の顔が、とてつもない邪悪な笑みを作り出していることを。。

そして、彼らはこのあと存分に思い知ることになる。

自分達がからんだ相手が、彼らにとんでもない『祟り』を下す荒御霊であることを。

第四話　『燃えよ！！　緋の鳥』　その４

今まで陸（ルー）　緋星（フェイシン）が宿難（すくな）　連夜（れんや）という少年に抱いていた印象は龍族の手下という感じであった。

龍族の姫達や王子に媚び諂い（こびへつらい）、さも忠実なる下僕ですと無駄にアピールを続ける非常に嫌な奴。恐らく龍族の権力や、その強大な影響力の恩恵に与れないかといういやらしい計算の元に行われていたに違いない。

と、つい先程まではそう思い、自分の考えに全く疑いを持ってはいなかった。

しかし、その考え方そのものが間違っていたのではないかと思わせる出来事が起きてしまった。

今まで緋星（フェイシン）は真正面から連夜を見ようとしたことがない。腐った心の持ち主を真正面から見れば、己自身がその腐った心に犯されそうで嫌だったからだ。勿論、叩き潰すべき相手というのであれば真っ向からその心と対峙することも厭いはしない。だが、始末に悪いことに宿難（すくな）　連夜（れんや）という少年を敵として確定するにはあまりにも敵意、害意がなさすぎた。連夜が緋星（フェイシン）に敵対行動とみなされるようなことをしたことはただの一度もない、それどころか剣児とやりあった後、毎回傷だらけになる自分の怪我を治してくれるのだ。当然それは龍族の心証をよくするためのポーズであり、心の中では嫌々やっているに違いない。そう思っていた。

そして、いつもいつも彼は連夜の瞳をまともに見ようとはしなかった。

ところが、今日、高校入学してから初めて連夜のその瞳を真正面から見た。いや、見てしまった。

そこには彼が思い描いていたものとは全く違うものが宿っていた。

そこにあったのは『打算』でも『虚偽』でも『敵意』でもない。

ただただ吸い込まれそうなくらいに真っ暗で底なしの『闇』。黒

く暗い空間がどこまでも広がっていた。最初は何もかもを呑み込もうとする飽くなき『欲望』が顕現したものかと思った。だが、その『闇』はそこに静かにあるだけで、緋星（フェイシン）を見守っているばかり。彼を引きづり込もうとか、その心を『闇』に染めようとかしようとしているのではない。本当に静かに、どこまでも静かにそこにあるだけなのだ。

そのことに気がついた緋星（フェイシン）は心を落ち着けて彼の瞳をもう一度よく見た。すると、完全なる『闇』に覆われていると思った彼の黒い瞳に、いくつもの小さな優しい『光』が宿っていることに気がつく。

まるで漆黒の夜空を照らす星の海のように。

太陽のように激しい『光』ではない、周囲が暗いからこそ光り輝きその存在を初めて知ることができる小さな小さな『光』。そんないくつもの小さな『光』達が、気を抜けばあっというまに無明の『闇』に陥ってしまいそうな連夜の瞳の中で懸命に輝いていた。

それを見てしまった緋星（フェイシン）は、自分の心の中で何かが巨大な音を立てて崩れていくのをはっきりと感じ、初めて自分が重大な何かを勘違いしていることに気がついたのだ。

（ち、違う、これは違う。彼はボクが思っているような最低の『人』物ではない）

これまで緋星（フェイシン）は傲慢極まりない何人もの『人』物を見てきた。彼らは自分こそが正しいと信じるあまり狂気ににも似た盲信的な『光』を瞳の中に宿す。それだけではない、己の欲望を満たすことのみにしか関心を持たない何人もの『人』物も見てきた。彼らは自分の醜い心を満たしてくれる何かを常に求め続けるあまり淀み濁りきったタールのようなドロドロとした気持の悪い『闇』を瞳に宿す。

どちらにせよ、ロクなものではない。

見ているだけで胸糞の悪くなる光景であり、見ているだけで自分の心までその色に犯されそうになり、そんな瞳を見てしまうと緋星（フェイシン）

は二度とそんな汚れた『色』を周囲に撒き散らせないためにその瞳の持ち主を叩き潰してしまいたくなってしまう。

だが、連夜の瞳はそれらの瞳のいずれとも違っていた。

それらの汚い心が映った瞳とは全く違う。星の大河が流れる美しい冬の『夜』空のようなその瞳。怖いけど美しい、深く見通せないような黒、しかし、よく見ればその黒は黒ではなく、見通そうと思えばどこまでも見通せそうな不思議な色。強くて優しくて温かくて、だけど、どこか切なくて悲しい色。

それに気がついた時、緋星（フェイシン）は今まで連夜に行ってきた自分の所業を思いだして、今すぐその場に土下座したくなった。勝手に自分の中で『悪の龍族の忠実な下僕　宿難（すくな）　連夜（れんや）』という虚像を作り上げ、暴言を吐き、冷たい仕打ちをし、それどころか助けてもらったことに感謝の言葉を口にしなかったどころか心の中ですら舌を出していたのだ。

宿敵　龍乃宮（りゅうのみや）　剣児（けんじ）はそんな自分を最低だと言った。

言われたそのときは、意にも解さなかったが、今ならばよくわかる。自分は本当に最低で最悪だった。

本当なら緋星（フェイシン）はその場で床に頭を打ちつけて土下座して連夜に謝りたかった。許してほしいからではない、これまでさんざんなことをやっておいて許してもらえるなんて虫のいいことは考えていない。しかし、せめて自分が心から感謝していることを伝えたかった。そして、今までの自分の最低の行いだけでも謝らないと気がすまなかった。

だが、緋星（フェイシン）はそうしなかった。

いや、やらないと言っているわけではない、必ず謝罪は実行する。しかし、その前にどうしてもやっておかないといけないことがあった。

（ボクはあまりにも宿難（すくな）　連夜（れんや）という少年のことを知らなさすぎる）

昼休み、剣児との激闘の後、自分を治療してくれた連夜を見送った緋星（フェイシン）は昼食として持って来ていたいくつもの菓子パンが入った袋を持って教室を出た。そして、ある場所へと向かう。それはいつも彼が昼食を取っている中庭ではないし、そこには昼食を取る為にいくわけではない。

（謝る前にボクは知らなくてはならない。宿難（すくな）　連夜（れんや）が本当はどういう『人』物であるのかを）

御稜高校に三つ存在している校舎の中で最も奥に存在している第三校舎。理科室や家庭科室といった専門科目用の教室と、それぞれの学年の末尾にあたるクラスが存在している建物。その第三校舎の一階入口からすぐにある小さな部屋に緋星（フェイシン）は足を踏み入れる。部屋の中にはトランペットや太鼓、ギターなど様々な楽器が所せまし整然と並べられていて、緋星（フェイシン）はそれらを崩さないように慎重に歩みを進めて行く。

この学校には三つ音楽室が存在しているが、ここは第三音楽室すぐ横にある楽器倉庫だった。

音楽室が学校に三つあるのには当たり前だがちゃんと理由がある。一つは生徒達の感受性を高めるための一般的な音楽の授業を行うための第一音楽室。二つ目は『原初の歌』や、『言霊』といった『人』の『声』を使用して学ぶために作られた第二音楽室、そして、三つ目はこの世界に満ちる『力』を引きだすことができる特殊な楽器を使用する方法を学ぶための第三音楽室だ。

そう、そんな第三音楽室の授業で使用される為に揃えられたこの倉庫にある楽器は、全て普通の楽器ではない。どの楽器も正しい方法で使用することができれば様々な特殊な『力』をこの世に顕現させることができるものばかり。

当然、目が飛び出るほど高価なものばかりなので、流石の緋星（フェイシン）も慎重にならざるを得ない。うっかり壊して『弁償しろ』なんていわ

れたら洒落にならないからだ。緋星（フェイシン）は顔を顰めながら、部屋の中を何かを探しながら進んで行く。すると、楽器と楽器が整然と並んでいるちょうど間に埋もれるようにして、一人の昆虫系種族の学生が座りこんでいる姿が見つかった。

「久し振りだな、情報屋。相変わらず楽器の手入ればかりしているのかい？」

目的の人物が見つかったことにほっとしながらも、こちらに目も向けず一生懸命楽器を磨き続けている昆虫系種族の学生の姿に苦笑を浮かべて見せる緋星（フェイシン）。

「勿論たよ。楽器（かっき）は毎日手入れしてやらないと、すくに音か悪くなる。そうなってから元に戻そうとすると、大変たからね」

ちょっと聞いただけでは言葉ではなく、音楽そのもの聞こえてしまいそうな独特のイントネーションで緋星（フェイシン）に答えを返す昆虫系種族の学生。

『アマデウス・アンソニー・アンデルセン』

通称ＡＡＡ（トリプルエー）。顔の三分の一を締めるほど大きな二つの複眼、額からはピンと長く伸びた二つの触覚、そして、何でも噛み切ってしまいそうな凶悪な顎。全身は見ただけで強固とわかる淡いライトグリーンの外骨格に包まれ、両肩から出ている二本の腕とは別に、その下にさらに同じような腕が二本突き出ていて、その四本の腕を器用に使って一度に二つの管楽器を丁寧に拭き続けている。

キリギリスが『人』に進化したような姿の彼は昆虫系種族の一つ、中央飛蝗人族（アインライダーフェイカー）の三年生。一族全体が優れた音感を持っている中央飛蝗人族（アインライダーフェイカー）。その一人として生まれてきた彼もまた他の親兄弟達同様に

人並み以上の音感を持って生れて来たのであるが、なぜか自らの力で音楽を生み出すことよりもその音楽を生み出す道具を作り出す道に興味を示してしまい、音楽を志すのではなく、楽器作りの道へと踏みだしてしまった。

そして、いつも学校中の楽器が管理されているこの第三音楽室に常駐するようになってしまったのである。

元々人付き合いが好きなほうではなかった彼であるが、この部屋の中の普通ではお目にかかれないレアな楽器に囲まれるようになってからはますますその傾向が強くなり、今では一日の大半をここで過ごしている。

もちろん大事な授業には出ているようであるが、卒業に関わらない授業となると完全にボイコットしてしまい出ようとしない。普通なら親ともども呼び出されて滅茶苦茶怒られるのであるが、そうできない弱みが学校側にはあった。

先程も前述したがここに管理されている大半の楽器は実に高価な代物で一般的には出回っていないものばかりである。当然そういうものであるから普段から手入れをしておかなくてはならない。そうしないと折角の高価で貴重な楽器も肝心な時に『力』を発揮することができないからだ。ところがである、そんな重大なことであるにも関わらず学校側にはそれができる者が全くいないのだ。

いや、当初はいたのだ。全ての楽器を手入れできる優秀な人材を雇っていたのであるが、現教頭に代替わりしてすぐにその者は解雇されてしまった。それというのもその楽器の管理者が下級種族の出だったからで、差別主義者として知られる現教頭がそれを嫌い独断で解雇してしまったのだ。

それについては相当に強い反発が内外からあったが、結局いろいろな理由をつけて教頭はそれを押し通してしまった。『人』徳に優れ内外共に絶大な支持を受けている現校長のたっての願いでこの高校にやってきていて、ほぼボランティア同然で楽器の手入れを行っていた管理者にしてみれば、別にここに留まる理由もなく特に異論

をあげることもなくあっさり辞めてしまったことも原因の一つなのであるが、ともかく学校は優秀な管理人を失ってしまったのである。

教頭はすぐに代わりがみつかると教職員達にうそぶいていたのであるが、はたしてその目論見通りにはいかなかった。教頭が連れてきた新しい管理人達のことごとくが倉庫に眠る見たこともない特殊な楽器の数々の手入れの仕方がわからず、みなすぐに辞めていってしまったのだ。

教頭はそのあとも諦めずに新しい管理人を探し続けたが、すべて失敗に終わった。結局前任者以上の腕を持つ者などいなかったのである。そうして、せっかくの高価で貴重な楽器の数々はしばらくの間手入れをされることなく放置されることになったのだが、そんなときに入学してきたのがＡＡＡであった。

いったいどこで学んできたのか、ＡＡＡは放置されて使い物にならなくなっていた倉庫の楽器のことごとくを再調整して甦らせてみせた。これに大喜びし味をしめた教頭は、これからもＡＡＡを利用しようと、教師達にある程度のことは目をつぶるようにと密かに、いや、全然密かにではなかったが、ともかくそういった通達を回したのだ。

こうしてＡＡＡは自分が出たくない授業には出ずに済むという免罪符を手に入れ、この部屋に常駐するようになったというわけである。一日のほとんどの時間をこの部屋の中で過ごし、日によっては一日中この部屋からでることなく楽器の手入れをするだけの日もあった。

倉庫に一日中籠り切る日々、外のことになど興味を示さない。と、いう風に思われそうであるが、実はそうではない。九畳ほどの部屋の中にあって、彼はこの学校の中で起こっている大半のことを把握していた。それは彼が持つ『頂聴力（ライダーイヤー）』に秘密がある。そもそも中央飛蝗人族（アインライダーフェイカー）は常『人』をはるかに超える『超聴力（ハイパーイヤー）』を種族特性として持っていて、ある程度離れた場所の話声や物音を聞きわけることができるのであるが、ＡＡＡが持って生まれてきたその能力は

一族が持っているもののはるか上をいく。

平均的な中央飛蝗人族（アインライダーフェイカー）が持っている『超聴力（ハイパーイヤー）』がはっきりと拾うことができる音の範囲は、自分を中心として半径百メトル以内くらいであるが、ＡＡＡが持つ『頂聴力（ライダーイヤー）』の範囲はその何倍にも及び、調子のいいときだと半径二ギロメトルもの広範囲の音を拾うことができてしまうのだ。そのため、彼は倉庫にいながらにして学校内で起こっている大概のことを知ってしまうことになる。

勿論、全方位に意識を拡散してしまうと何を聞いているのかわからなくなってしまうので、自分が興味を惹かれた音が聞こえてきた方向にのみ意識を向けるようにしているわけだが、それでもいつも膨大な量の情報が彼の耳に入ってきていた。彼は当初、自分の耳に入ってくる情報を他に漏らすつもりはなかったのであるが、いったいどこから知られたのかいつのまにか彼の能力のことが学校中に知られてしまっていて、いつしか彼が潜む倉庫には彼が知る秘密の情報を欲しがる生徒達によって長蛇の列ができるようになっていた。

こうして彼は学校でも一、二を争う情報屋となっていったわけであるが。

「今日は珍しく客が少ないじゃないか」

「情報（しょうほう）を売りたくない日もある。そういう日は、誰（たれ）か来ても何もしゃへらないよ」

「む、それは困る。ボクにも情報を売ってくれないのか？」

いつも長蛇の列が並んでいる彼の棲家にあっさり入れたことにほくほくしていた緋星（フェイシン）であったが、今日は情報を売る気がないと言われて大いに慌てだす。そんな緋星（フェイシン）の様子を見ていたＡＡＡは、面白いものを見つけたと言わんばかりの光をその大きな複眼に宿しながら彼のことを見つめる。

「心配しなくてもルーくんはへつよ。君には危ないところを助けてもらった恩かあるからね。報酬はもらうけと、情報は売るよ」

第四話　『燃えよ！！　緋の鳥』　その5

「助かった。今日だけはどうしても君の情報を買いたかったんだ」

そう言って安堵の吐息をもらす緋星（フェイシン）の様子を面白そうに見つめていたＡＡＡだったが、ふと何かを思いついて楽器の手入れをしている手を止める。

「そういえは、僕の記憶か確かなら君か情報を買いに来るのははしめてしゃないかな？」

「ああ、そう言えばそうだね。でもどうしても知りたい情報があるんだ」

「他『人』にほとんと興味を示さない君かとうしても知りたい情報かあ。そりゃ興味深い。いったいなにかあったの？」

「まあ、いろいろとあってね。とりあえず、これで足りるかな」

持っていた楽器をそっと元の場所に戻し、身体ごと緋星（フェイシン）のほうへと向きなおるＡＡＡ。そのＡＡＡに近づいた緋星（フェイシン）は菓子パンがズシリと入った袋をＡＡＡのほうへと差し出してわたす。

「おや、随分な量たね。それほとまてに貴重な情報ということか。いったいなんたろ？　やはり君の最大の宿敵てある龍乃宮　剣児くんのことかな？　意外と龍乃宮姉妹の想い人のことかな？　いやいや、それともこの学校の最大の勢力てあるチャン一派の内情についてかな？」

「そのどれでもないよ」

「しゃあ、いったいなんの情報かほしいのかな？　さっきもいったけと君には危ないところをチャン一派から助け出してもらったという恩義かあるから情報をたしおしみする気はないけと、いくら私ても持ってない情報は出せないよ」

そう言って首を傾げて見せるＡＡＡ。相手が昆虫系という全く自分達とは姿形の異なる種族であるため表情がわからないが、どうやら彼は本気で困惑しているようであった。一年生の時に知り合って以来の仲であるが、そんなＡＡＡの表情を一度も見たことがない緋星（フェイシン）はちょっと驚いた表情をしてみせたが、すぐにその表情を引き締め、自分が知りたい情報を口にする。

「ボクが知りたいのはボクのクラスメイトのことなんだ」

「君の？　君のクラスメイトというと龍族三兄姉妹といい有名人か多いけと、いったい誰のことか知りたいのかな？」

「それは、宿難（すくな）　連夜（れんや）のことだ。彼のことが知りたいんだ」

緋星（フェイシン）はほんのわずかに逡巡をしてみせたが、すぐにそれを消し去ると自分が知りたいと思っている『人』物の名前を口にする。すると、一瞬ＡＡＡは実に珍しいことに、いや、というよりも、今まで一度も見せたことがない、異種族の緋星（フェイシン）ですらもはっきり吃驚しているとわかる表情で呆けたように口をあけ続ける。

そして、しばらくその凶悪な顎を開けたり閉めたりしていたが、やがて、深く嘆息してみせると一度受け取った菓子パンが入った袋を再び緋星（フェイシン）に返そうとする。

「な、なぜだ？　宿難のことは教えられないってことなのか？」

「違うね、逆たよ陸（ルー）くん。よりにもよって宿難（すくな）　連夜（れんや）たって？　この学校一番の超有名人しゃないか。彼のことなら別に私に聞かなくても誰たって知っているしゃないか。それこそ君のクラスの誰に聞いても大体のことは教えてくれるはすたよ」

「こ、この学校一番の超有名人？　宿難（すくな）　連夜（れんや）が？　なぜ？　失礼なことだと思うが、彼くらい地味な奴はいないと思うんだが」

「確かに地味かもしれないね。ても、問題はそういうことしゃないよ。たくさんの生徒達から支持を受けている現生徒会長と完全に逆の意味て彼はひとく目立ってる」

肩を竦めて見せながらそう呟いたＡＡＡは、首を横に振りながら再び管楽器を手に取りその手入れを再開しようとする。しかし、それに気がついた緋星（フェイシン）が慌てて駆け寄ってその手を止めさせ、もう一度菓子パンが入った袋を押し付ける。

「ちょ、ちょっと待ってくれＡＡＡ。途中で話すのをやめないでくれないか」

「いや、そう言われても彼に関しては別にとりたてて話すような内容はないんたけと」

「それでもいいから、頼むよ！！　自分で言うのもなんだけどボクは友達が少ないんだ。いくらみなが知っているといっても聞けるような間柄の友達が他にいないんだ。この菓子パンは全部食べてくれていいし、聞いた内容についてつべこべは絶対言わないから！！」

「う〜〜ん。本当に特別なことは何もないんたけと、そこまで君かいうならわかったよ」

必死にすがりついてくる緋星（フェイシン）の姿に困惑した様子を見せたＡＡＡだったが、やがて諦めたように菓子パンが入った袋を受け取ると、ゆっくりと話始めた。

「学年たとか、成績とか、趣味とか別にとうてもいい情報については省かせてもらうね。彼を語る上て一番重要たと私が思っていることについて話すよ。さて君のクラスメイト宿難（すくな）　連夜（れんや）たけと、彼はこの学校始って以来の、最も多くの敵を持つ生徒た。各学年に存在しているメシャーな不良クループから、二、三人規模のマイナーな小集団に至るまて、この学校に在籍しているほとんと全ての不良達は表立って敵対を表明し、すてにいくつかのクループは実際に喧嘩も仕掛けている。不良たけしゃない、一般生徒達の中にも彼のことを敵対視している者達も多くいるし、それところか、教師の中にも彼を敵対視している存在かある。その一番の筆頭は下級種族嫌いの教頭て、あのおっさんの息かかかった教師達はみなれん・・いや、宿難のことをよく思っていない」

「なんでだ？　なんでそこまで嫌われて狙われるんだ？　彼が何かしたのか？」

「何も。何もしていないよ。彼は何も悪くない。悪いはすかない。ただ、彼は二つの大きな爆弾を抱えていて、それか引き金になってる」

「二つの大きな爆弾？　いったいそれはなんなんだ？」

「一つは彼か人間族てあること。君は知らないかもしれないけと人

間族は過去に他の種族を裏切り、自分達人間以外の種族全てを滅ほそうとしたという黒い歴史を持ってる種族なんた。その歴史的事実から人間族はどの都市においても非常に迫害の対象になりやすい種族になってる。この城砦都市『嶺斬泊』てはそういう差別的行為は固く禁じられているし、それを破ったものには重い罪が課せられるようになっているけと、それても差別はなくならない。特に学校という閉鎖された空間たと尚更たよ」

「そんな」

「人間族てあるという大きなハンテかある上に、それ以上に大きなハンテがもう一つ彼にはある。それはこの学校のアイトルてある龍乃宮姉妹に非常に好かれていて仲良くしてもらっているという事実。私は実際に見たわけてはないけど、いつも彼の側には姉妹のとちらか、あるいは両方かいるんてしょ？」

「あ、ああ。しかし、それは宿難（すくな）が自分から近づいているわけではないように見えるんだが」

「うん、らしいね。執心しているのは彼のほうてはなく、姉妹のほうたと私も聞いているよ。てもたからこそ、あの姉妹に想いを寄せる者達にとっては面白くないことなんたよね。自分達がとうやっても懇意になれない憧れの姉妹に対し、下級種族中の下級種族てある人間族の平凡な少年か二人の側にいて毎日仲良くしているんたから。それはもう嫉妬の炎はメラメラ燃えちゃってるてしょ」

「それはそうかもしれないが」

自分が知りたかった情報ではあるが、あまりにも自分の想像とかけ離れた内容に思わず顔を顰める緋星（フェイシン）。そんな緋星（フェイシン）の様子を横目で

見ながら、ＡＡＡは宿難（すくな）　連夜（れんや）についての話を続ける。

「ともかく、この大きな二つの理由から彼はいろんな『人』達から絡まれ続けているわけたけと、彼にとってさらに不利なのか、敵の多さに見事に反比例して味方が非常に少ないんたよね。と、いうか彼の味方たとはっきり断言てきる人物は私か知る限りて片手の指ほともいないよ。よくもまあ、そんな状況て毎日やっていけるなあと感心するくらい、味方か全くといっていいほといない」

「数少ない味方というと龍乃宮三兄姉妹と、あの二人のお付きのことか？」

あまりにもひどい内容にショックを隠しきれない様子を見せながらも、なんとか当り前の事実を確認するように問いかける緋星（フェイシン）。しかし、ＡＡＡはあっけらかんとした軽い感じでそれを否定する。

「まさか～。彼らは味方しゃないよ」

「な、なにっ！？　そんなバカな！？　あれだけ毎日仲よさそうにしているというのに、味方じゃないって！？」

「今のところ敵しゃないかもしれない。多分、本当に敵対心はないたろうし、好意も持っているのたろうけと、私に言わせれは、あれたけひとい厄病神はいないよ」

「な、な、なんだって？」

仰天する緋星（フェイシン）に、追い討ちをかけるようにＡＡＡはさらにとんでもない事実を暴露する。

「あまり知られてはいないことだけど、宿難は意外と強いんた。そりゃそうたよね、あれたけの不良達に毎日のように絡まれているのに平気て学校に通ってくるんたから、それなりに強くなきゃやっていけないし、それか当たり前たと思う。しかも強いたけしゃない、とうやったら後に引くことなく荒事を収められるかもよくわかっていて、いくつかの不良クループに対してはすでに対処して二度と自分にちょっかいたしてこないようにしていたりもするんた。正直、あの手腕なら一年もあれは十分この学校の不満分子達を押さえられたはすなんたけとね。ところか、悲しいかな彼には潜在的なとんてもない敵かいて、その敵か彼の用意した策のほとんとを潰してしまったものたから、未だに宿難　連夜に不満反感を持つ者達かこの学校に溢れている。いや、むしろ当初よりも圧倒的に増えてしまったくらい」

「ちょ、ちょっと待ってくれないか、ＡＡＡ。潜在的な敵っていったい誰のことなんだ？」

「たから、それかさっき言っていた龍乃宮三兄姉妹のことたよ」

「えええええっ！？」

「本人達はよかれと思ってやっているんたろうけと、彼らのやってることははっきりいって逆効果もいいところたね。毎度毎度乱闘の最中に宿難　連夜を助けに飛ひ込んていっている彼らたけと、実際は一度も間に合ってないんた。彼らか到着したときには宿難か仕掛けた数々の罠や策略によって不良達はほほ無効化している。なのにそこにわさわさ割って入って、トトメをさして回ってるんたから。恐らくたけと、宿難にしてみれは、自分に仕掛けてもひとい目にあうたけて割に合わないと思わせることが重要て別に本気て全ての不良クループを叩き潰すつもりなんかないんたと思う。そこそこ痛い

目にあわせるたけというのか彼の立てた作戦の本分たったんたと思う。実際、龍乃宮三兄姉妹か介入しなかったケースて、宿難に痛い目にあわされた不良クループは二度と宿難(すくな)に手を出していない。ところかそういう風にことか運ふことはほとんとなくて、大部分は龍乃宮達か介入して必要以上に不良達を痛めつけて終わるケース。そうなった場合、不良達は自分達を必要以上に痛めつけてくれた龍乃宮達よりも、なるへく穏便に済ませようとした宿難を恨むんたよね。権力も腕力もある龍乃宮達に仕返しするよりか、何の後ろ盾もなくて、弱そうな宿難のほうか仕返ししやすいと思うからなんたろうけと」

「そ、そんな。それじゃあ、むしろ宿難にとって龍乃宮達は」

「巨大てあまりにも重い足枷たねえ。自分達はいいことをしていると思っているから尚更始末に悪い。自分達が周囲に与えている影響ってのものを全くわかってないんたと思う。昆虫系種族である私には龍乃宮姉妹の美しさや、剣児くんのスター性については全くわからないか、もし私か宿難なら、これたけ自分に不利な要素を持ってくる彼らとの縁をすっぱり切るね。大きな権力を持っている一族て、普通以上にきらひやかな容姿をしているからといっても、彼らと付き合うことか絶対に割りにあっているとは思えないもの」

重い溜息を吐きだしながらそう語るＡＡＡを、緋星(フェイシン)は愕然とした表情を浮かべて見つめ続ける。

「そんなひどい状態に彼は常にいるというのか？　そんなバカな！？　彼は・・彼はいつも笑っていて楽しそうで、そんな素振りは一度も」

「クラスの中て彼かとう振舞っているのかまては私は知らないけと

ね。少なくとも彼か今四面楚歌の状態にいることは間違いないよ。しかし、彼は本当に不思議な『人』たよね。誰か見てもとてつもなくひとい状態にあって、『人』にかまっていられるはすないなのに彼はこの学校ていろいろな『人』を助けているんた。不良クループにからまれている生徒達を見かけれはわさと自分のほうに注意を向けさせて逃かしてやったり、困っている生徒にさりけなく手を貸してやったり。いやいや、手を貸すはかりてはないよ。彼は実に博学てね、下手をするとここの能なし教師達よりも知識か豊富で、その知識や経験て知恵を貸すことたってある。現生徒会メンハーかいい例さ。去年彼らが当選てきるように影からいろいろと手を貸してやったりもしていたよ」

「せ、生徒会に手を貸してやっていたって、学校で最大の権力を持つ集団じゃないか。なぜ彼らの力を借りてどうにかしないんだ！？」

「彼かそれを望んていないからたよ。現生徒会長達は彼を助けたかっているけとね。たけと宿難は現生徒会長か彼に肩入れすることてこの学校の生徒達の人望を失ってしまうかもしれないからと言って他人の振りを貫くように言ってる。現生徒会長はかりしゃないよ。彼か助けた他の生徒達にも同しようなことを言って回ってる。自分と関わりかあるって周囲にハレたらたたて済まないから、てきるたけ他人の振りを貫けってね」

重い、あまりにも重い溜息を吐きだしいったん言葉を切るＡＡＡ。外骨格に包まれたメタリックなその表情は相変わらず読めず今どういう感情を抱いているのかわからないが、しかし、どこか悲しそうに見えるのは緋星（フェイシン）の気のせいだろうか。

「たから宿難（すくな）　連夜（れんや）はいつも敵たらけた。敵はもちろん敵たし、味方も実際には敵、教頭の息のかかった教師達も敵、味方になるはす

の生徒達はそれぞれのしからみかあって彼に手を貸すことかてきない、そして、それ以外の生徒達は巻き添えになることを恐れて彼の味方にはならない。全方位見事に全て敵と、敵てはないか味方てもないものしかいない」

「なんだそれはぁぁぁぁっ！？」

その話の内容のひどさに緋星（フェイシン）は思わず両手を振り回して激昂し、ＡＡＡはそんな緋星（フェイシン）から楽器を守るように慌てて立ちあがって彼を止めにかかる。

「お、落ち着いてくれたまえルーくん、そして、頼むからここて暴れないてくれないか、大切な楽器か壊れちゃうよ」

「これが落ち着いていられるか！！　ふざけるなっ、ふざけるなっ、ふざけるんじゃないっ！！　こんなバカなことがあるか、あってたまるか！！　敵だらけだと？　味方も実際には敵だと？　その上彼に助けてもらっておいていざとなったら自分を守って知らんぷりのその他大勢か！？　くそくらえだ！！　何もかもくそくらえだちくしょう！！」

もうどうにも耐えられなくなってしまった緋星（フェイシン）は悔し涙を隠そうともせぬままぼろぼろと流し続け、声を枯らして叫び続ける。そして、がっくりと肩を落とすと顔を俯かせたままＡＡＡに背を向ける。

「取り乱して悪かった。それと貴重な情報をありがとう。よくわかったよ」

「ルーくん。もういいのかい？　また彼に関する説明は全部終わってないけと」

「もう十分だ。自分のやるべきこと、進むべき道は十分わかったよ。だから、ボクはもう行くよ」

ＡＡＡに背を向けたままゴシゴシと片手で目のあたりを乱暴に拭き取った緋星（フェイシン）は、強い決意の光をその瞳に宿らせて部屋から出て行こうとする。そんな緋星（フェイシン）の背中を黙って見送ろうとしたＡＡＡだったが、彼が戸口をくぐろうとしたところで思い出したように声をかける。

「ルーくん、君は宿難（すくな）に・・いや、連夜（れんや）に手を貸してやってくれるのかい？」

最初緋星（フェイシン）はその声に応えぬままに姿を消そうとしたが、不意にＡＡＡが今までと違い、宿難（すくな）　連夜（れんや）のことをファーストネームで呼んだことに気がついて驚いた表情で振り返る。すると、ＡＡＡは明らかに悲しみの光を宿しているとわかる複眼で緋星（フェイシン）を見返す。

「私はね、彼に助けられたものの一人なんた。留年することなくこてこうして好きな楽器の手入れをしていられるのは彼のおかけさ。彼か私の特技のことか教頭にそれとなく伝わるように画策してくれたおかけて、私はこうしてすっとここにいることかてきるようになった。しかし、それたけのことをしてもらったにも関わらす私は堂々と彼の友達と名乗り出す、こそこそとここに隠れ続けている卑怯者た。彼かとれたけ大変な目にあっているか一番よくわかっているのに何もしようとしない卑怯者さ。怖いんた。怖くて仕方ないんた。彼を助けにいけは殴られたり蹴られたりするかもしれない、それところかもっとひといめにあわされるかもしれない。そう思うと身体か竦んてしまうんた」

「ＡＡＡ、君は」

「頼む、ルーくん。こんな臆病者て卑怯者の私か言えた義理ではないとわかってはいるか、とうか頼む。とうか連夜に手を貸してやってほしい。連夜は完全に孤独というわけしゃない。本当に頼れる仲間もいるんた。たけと圧倒的に数か少ない、少なすきる。彼らたけてはいすれカハーしきれなくなる。そして、きっと取り返しのつかないことになる。それところか今もすてに大変なことになろうとしているんた！！」

「今も！？　今もって・・まさか、宿難に何かあったのか！？」

「一年生の『シャック・フルータス』が率いている不良クループ達が連夜に絡む声か食堂のほうから聞こえてきたんた。それてさっきからそっちに聴力を集中していたんたけと、連夜かあいつらのこと挑発して始めて、結局一戦やることになっちゃったみたいなんた。とうやら連夜はあいつらを迎え討つつもりらしい。いつもの彼なら心配ないんたけと、今日の彼の歩くリスムを聞いているといつもと違う気かするた。なんか妙に浮かれているような感しかして・・やっぱり今日の連夜は危うい！！　いつも冷静てとんな時もそのペースを崩さないはすの彼か、今日に限ってらしくないリスムた。たから・・たから頼む、ルーくん！！　連夜に手を貸してやってくれないか。情報料の報酬は返すから！！　たのむ！！」

　たまらず駆け寄ってきたＡＡＡは手にしていた菓子パンが入った袋を緋星（フェイシン）に押し付け、その頭を何度も下げて見せる。そんなＡＡＡの姿をじっと見つめていた緋星（フェイシン）は、菓子パンが入った袋をそっとＡＡＡに押し返し頭を上げさせる。

「君に言われなくてもそのつもりさ。それに思いだしたんだ」

「え？　なにをたい？」

きょとんとして問い返すＡＡに、緋星（フェイシン）はこの学校に来て以来初めてみせる心からの笑顔を浮かべて見せる。

「そう、思いだしたんだ。ボクが・・ボクが武術を覚えたのは大事な友達を守るためだったから。小さい時のボクは友達の後ろにこそこそ隠れて、友達がいじめっ子に殴られていても助けに行かない卑怯なやつだった。そんな自分が嫌で、そして、ボクを守ってくれた優しい友達のようになりたくてボクは武術を倣ったんだ。仕返しをするためじゃなかった、仕返しをするために身に着けた武術じゃない。こんな大事なことを今の今まで忘れていたボクはなんてバカなんだろうね。でも、もう忘れないし、間違わないよ。今こそこの力を正しく使うときなんだ。だから、ボクは行くよ」

己が羽ばたく空を見つけた朱雀は舞い上がる。優しい夜空を守るため、その身に宿る激しい炎を燃やして舞い上がる。

強く、どこまでも強く高く。

迷いの果てに見つけた本当の空へ、今、緋の鳥が羽ばたく。

第四話　『燃えよ！！　緋の鳥』　その６

澄み切った抜けるような美しい青空には眩しい太陽が輝き、その太陽の下ではたくさんの生徒達が思い思いに昼休みの一時を楽しんでいる。中庭にあるベンチに座って仲のいい友達同士でおしゃべりをしているものもいるし、携帯ゲームを持ちこんで必死になって今話題のゲームに夢中になっているものものいる。運動場ではボールを使って何人もの生徒達が楽しそうに遊んでいたり、鬼ごっこのようなことをして走り回っているものもいる。

みな実に楽しそうだ。連夜は体育館裏にある小高い丘の上からその光景を見つめ続ける。その瞳には若干の羨望の色が浮かんでいて、ほんの少し寂しげな笑顔を浮かべていた。しかし、すぐにそれらを消してしまうと温かくて優しい色を浮かべて見つめ、その後首を横に振って表情を引き締め直す。

そして、自分を取り囲む全然楽しそうに見えない者達へと視線を向け直すのだった。

御稜高校の一番奥にある体育館裏。そこは他の場所よりも一段高い小高い丘となっており高校の全体が見渡せる景色のいい場所となっているのだが、『人』が寄り付くことはめったにない。と、いうのもここは不良達が気に入らない奴を連れ出して私刑（リンチ）にするために使う場所として有名であるからだ。

連夜達がここにやってきたのは勿論景色を楽しむためではない、どちらかと言えば後者のほうの理由でここにやってきたわけだが、かと言って連夜は不良達におとなしく私刑にされるつもりはさらさらなかった。

「おい、このあたりでいいだろう。たった一人で俺達についてくる度胸は褒めてやるが、手加減する気は全然ねぇから覚悟しろや」

偉そうなことを言って両手の拳をわざとらしくボキボキと鳴らして見せるミノタウロス族の巨漢の少年。連夜はその姿を呆れ果てた表情で見つめて嘆息する。

「あのねぇ、ついてきたのは僕じゃなくて君達でしょ？　牛に見えるけどひょっとして君って本当は鳥なの？　三歩歩くと全部忘れちゃうってやつ？」

「う、うっせぇうっせぇ、こまけぇことはどうでもいいんだよ！！」

連夜の鋭いツッコミに、ミノタウロスの少年ジャックはだんだんと地面を踏み鳴らしてそれを誤魔化そうとする。そんなジャックの様子を侮蔑の色を隠そうともせずにじっと見つめ続ける連夜。挑発するかのように口を吊り上げ、邪悪極まりない笑顔を浮かべた連夜は、取り囲む不良達を舐めるようにして視線を走らせていく。血のめぐりが悪い不良達でもそんな連夜の態度が自分達を挑発するものだとわかったようで、みな怒りの表情を浮かべ中心に立つ連夜を睨みつける。

「この薄汚い人間のちび」

「なめた態度しやがって！！」

「二度とそんな態度ができねぇように念いりに叩き潰してやるぜ！！」

恫喝の言葉を口々に叫ぶ不良達を見て連夜はビビるどころか益々邪悪な笑顔を深くしていく。

（聞きあきたよ、その手の脅し文句はさ。本当に独創性がないよね、

この手の『人』種は。みんな同じようなことしか言わない、いい加減うんざりだ）

表面上の底なしの邪悪な笑みとは違い、心の内では何とも言えない苦笑を洩らす連夜。毎日のように不良達に絡まれ続け、一年間通して学校に登校した日で全く絡まれずに済む日など、数えるほどしかない連夜。これまでに彼が戦って来た不良達は様々で、それはもう実にバラエティ豊かなもの。そこら辺にいる口だけのチンピラのような奴、群れなければ何もできない大人数だけが頼りのグループ、かと思えばたった一人で『武』を貫き通していた『東方武人（サムライ）』のような剛の者もいたし、連夜なみに頭がキレて統率力があり手下達を自在に操る強敵もいた。

しかし、それはむしろわかりやすい『敵』であり、戦いやすい相手であった。こういった表面上明らかに『私達は不良です』と喧伝しているような奴らはまだいいのだ。厄介なのは一般生徒のフリをして直接的な攻撃は仕掛けてこず、間接的に攻めてくるような相手。体操服や教科書を隠す程度ならまだかわいいほうで、椅子の上にノリをぶちまけておいたり、他の生徒や先生にひどいことをしておいてそれをさも連夜がやったかのように偽装したり、ひどいときだとカバンごと焼却炉に放り込んだりしておいて知らん顔している者もいる。

内も外も敵だらけ。そんな中で連夜はずっとずっとず～～っと生きてきたのだ。そういったことが日常茶飯事の毎日を過ごしてきたのだ。連夜にとってそんな生活はすでに当たり前で、いつものことにすぎない。ところが目の前の不良達ときたら、叩き潰してやるだの、なめた態度しやがってなどと言っているだけで未だに仕掛けてこない。

連夜が怯える様を見てから仕掛けてくるつもりなのだろうか？実に悠長なものである。連夜という生き物をちょっとでも知っている奴らなら、そんな悠長なことはしていないだろう。とっくに連夜

に対して仕掛けてきているはずだ。それもあらゆる手段を使って潰しにかかってきているだろう。

目の前に立つミノタウロス族の少年は、体格こそ実に立派なものであるがまだ高校に入ったばかりの一年生。恐らく連夜がどういう生徒なのか知らないで仕掛けてきたに違いない。

貧弱そうな人間族のくせに生意気で目ざわり、ちょっと捻れば紙屑のように吹っ飛ぶから一つしめておこう、そう気楽に考えていたに違いない。心の中で何を考えようとそれは個人の自由だ、思う存分想像の世界を楽しんでくれればいい。しかし、それを現実のものとして押し付けられるのは御免こうむるというものだった。

（さて、どう戦うかな？）

相手は今まで連夜が相手にしてきた不良達の中でも間違いなく最低ランクに位置する奴ら。取り立てて注意しなくてはならないところはないず。そして、何よりも地の利は圧倒的に連夜に有利。どうとでも料理することができるはずだった。

身内に対しては決して向けることがない邪悪極まりない笑顔を浮かべて不良達を見つめる。身体中から溢れ出る禍々しい『闇』の気配を隠そうともせず、懐から取り出したいくつもの『珠』を両手の指にはさんで取り出し、目の前でバツの字に組んで構える。

連夜は何の武術も会得してはいない。巨人族のような怪力も、獣人族のような俊敏性も、ましてや上位種族が持っている様々な身体的な特殊能力を何一つとして持っていない。敵を噛み砕く鋭い牙も、敵を引き裂く爪も持ってはいない。しかし、それでも連夜は戦う。自分には何もないから、どうすることもできないからと諦めることは絶対にない。

どんなことをしても、どんな手段を使ってでも彼は自分の肉体が動かなくなるそのときまで諦めることなく戦い続ける。

連夜は鋼の意思を秘めた黒い瞳を不良達に向ける。そんな連夜が

放つドス黒いプレッシャーに不良達は一瞬たじろぐ様子を見せたが、リーダーのジャックがそれを打ち消すように凄まじい雄叫びをあげてみせると、その雄叫びで我に返る。そして、それを合図にして次々と連夜へと殺到していく。

「死んどけ、人間!!」

「うざいんだよ!!」

「おとなしくボコられとけやぁ!!」

飛びかかってくる不良達を嘲笑するようにして見ていた連夜だったが、すぐに大地を蹴って自ら不良達の中へと飛び込んで行く。四方八方から飛んでくる拳の雨を地面を転がりながら避けると、彼らの足元に手にしていた『珠』を投げ付けてばらまく。一瞬連夜の姿を見失った不良達がきょろきょろと周囲に視線を走らせている間に、ヒルトロール族の巨漢の大きく開いた足の間に飛び込んで抜けると、連夜は片膝を立てた状態で振り向いて『珠』が無くなって空いた片手で印を斬る。

『勅令!!　【破裂】!!』

連夜の言葉に反応して地面にばら蒔かれた『珠』が次々と破裂し、不良達の足元を何かの液体が埋め尽くす。不良達は自分達の足元にいったい何の液体がばら撒かれたのかわからず、不安になって一瞬棒立ちになる。

「な、なんだこりゃ!?」

「やばい液体か!?　毒か!?」

「い、いやなんかただの水みたいに見えるぞ？」

「水？　ただの水か！？」

自分達の足元をバシャバシャさせて大いに慌てまくる不良達だったが、自分達の足元から何の異臭もせず、自分達の身体になんの変化もないことに気がつくと、そっと屈みこんでばら撒かれたものを確認する。するとそれが正真正銘ただの水であることに気がつき、騙されたという表情を浮かべて少し離れたところに立つ連夜に怒りの声をあげる。

「てっめえ、くだらねぇいたずらしやがって！！」

「水ばらまいたからなんだっていうんだ！？」

「脅かしやがって、絶対ボコってやる！！」

そう叫ぶと再び連夜に殺到しようとする不良達。しかし、そんな不良達の様子を見た連夜は怯えるどころか、とてつもなく邪悪な笑みを浮かべてみせる。そして、殺到してくる不良達の足元目がけもう片方の手に持った『珠』を投げつけると、近くにある大きな木の枝に飛びつき片手で自分の体重を支えながらもう一方の片手で印を斬る。

『勅令！！　【電撃】！！』

『ぎゃ、ぎゃあああああああっ！！』

連夜があとから地面に投げ付けた『珠』から飛び出たのはとてつ

もない威力の電気。地面にばらまかれた液体の上全体を一瞬にして走り抜けたそれは、その上にいる不良達に容赦なく襲いかかりあっというまに黒こげにしてしまうのだった。

「おやおや、いい色に焼けたねえ。でも、安心していいよ、見た目ほどダメージ受けていないはずだから。一応電力は抑え目にしておいたんだ。ただ、無理すると内臓に障害が出るかもしれないからおとなしく寝ておいたほうがいいけどね」

ぶら下がっていた枝から飛び降りた連夜は、水溜りの中でぴくぴくと痙攣して倒れている不良達をバカにしきった表情で見つめると皮肉気な口調で必要以上に優しく語りかける。そんな憎たらしい連夜の姿を水溜りの中から見つめる不良達は、激しい怒りの唸り声を発しようとするが出てくるのは弱々しい呼吸音ばかり。連夜に襲いかかるどころか全身を駆け巡る激痛で全く動けない状態で、ちょっとでも触られれば火傷の痛みに失神してしまいそうだった。

そんな不良達の姿をしばらく見つめていた連夜は顔を横に背けて俯かせると、不良達に見えないようにこっそりと溜息を吐きだす。

（やっぱり気持ちのいいもんじゃないね。こういうの。いつまでたっても馴れないなあ）

これまでの経験からこういった手合いの前で甘い顔するのは厳禁だということはよ～くわかってる。それをしてしまった為に手痛い教訓を体で支払ったことも一度や二度ではない。しかし、どうしても連夜という少年は最後の最後で非情になれない性分なのだった。

（終わったあと、こっそり『療術』をかけておこう。このままでも身体に異常が出るとは思えないけど、念の為にかけておいたほうがいいよね。折角今日は夕方からあの『人』に会えるっていうのに心

に屈託を残しておきたくないもんね）

自分を私刑（リンチ）しようとした相手に対して甘いも甘い、大甘な考えだとわかってはいたが、それが自分だと半ば諦めるように心の中で呟く。しかし、このときの連夜は別の意味でも甘い考えに陥っていた。いつもなら決してしない大失敗をここで犯していた。

夕方から会える自分の想い『人』とのことが頭のどこかにあり、連夜の思考回路を微妙に狂わせていたのだ。しかし、それに気がついた時には最早手遅れ。連夜が不良達に再び視線を戻したときには、目の前に巨大な壁が迫っていた。

「なっ！？　しまっ！！」

「ふっとべや、チビ！！」

肩から突進してきたミノタウロスの一撃が、まともに連夜の小さな身体を直撃し、宙へと舞い上げる。咄嗟に両腕を交差して十字ブロックを作ったが、怪力で誇るミノタウロスの一撃をまともに受けてしまったのだ。宙へと舞い上げられる瞬間、連夜は自分の左腕からビキッという嫌な音がするの聞き、そして、それが決して曲がらない方向へと折れ曲がるのが見えた。

「ぐふっ！！」

それぱかりではない、両手越しに伝わってきた凄まじい衝撃が連夜の身体を貫き、連夜はたまらず口から空中に血を噴き出してしまう。くるくると宙を舞い、血できた虹を作り出す連夜。しかし、それで彼らの攻撃が終わったわけではない。ミノタウロス同様に連夜の電撃から逃れることができた何人かの獣人系の不良達が、その驚異的な身体能力で連夜を追って空中へと飛びあがり、その小柄な

身体に容赦ないドロップキックを浴びせて更に吹っ飛ばす。

『さらに飛んで行け、くそ人間！！』

「ぐあああああっ！！」

弾丸のように一直線に宙を走りぬけ、連夜はその行く先にあった大木に激突してようやく止まる。そして、連夜の全身を襲う凄まじい激痛。それは頑丈なドワーフ族でも耐えられずに失神してしまいそうなほどのもの。しかし、連夜は意識を手放すことなくそれに耐えきると、地面を転がりながら不良達との距離を開けると折れていない右手を背中にまわし、一本の小さな棒のようなものを取り出す。

それは『金剛杵（ヴァジュラ）』といわれる法具で様々な『珠』や『薬品』といった『道具』の効果を増幅させる能力を持つ。連夜は片手に持った『金剛杵（ヴァジュラ）』を空中で複雑に何かの印を描くように振り回し念を込める。

普段連夜は『道具』を使用する場合にこう言った補助器具をほとんど使用しない。そんなものを使用しなくても十分に『道具』の効果を発揮させるだけの技量を持っているからである。しかし、そんな連夜がわざわざ補助器具である『金剛杵（ヴァジュラ）』を出した。それには勿論理由があった。

「させるかぁっ！！」

連夜の不振な動きに気がついたミノタウロス達が、そうはさせじと雄叫びをあげながら肉薄してくる。それを横目で見つつ焦りの表情を浮かべる連夜。彼が行おうとしているのは『薬品』の効果を増幅させて力を解き放つ『療術』と呼ばれる術。『薬品』は普通に飲んだり塗ったりするだけでも病気を治したり、傷口を塞いだりすることができるできるが、『療術』によって効果を増幅させることに

よって、一人にしか効果がないものを複数にまで効果を及ぼしたり、『薬品』を飲んでも治るまでに一週間かかるものをわずか一日で治してみせたりと、更なる効果を発揮させることができる。

特に今連夜が印を描いているものは、肉体を元の健康状態に復元させるというかなり難しい術で、この術を発動させることができれば、骨折を治し打撲を瞬時に治すことができるが、複雑な印を空中に描かなくてはならず、発動させるために必要な集中力も並大抵ではない。

いつもの連夜であればそれほど苦労することもなく術を発動させることができるのであるが、いくら並はずれた技能を持つ連夜とはいえ、ここまで傷ついた体でこのような高等技術を完遂させるのはなかなか難しいものがある。しかし、ここで回復することができなければ、ミノタウロス達の餌食になるだけ。

なんとしても己の肉体を回復させて反撃するために、連夜は普段使わない補助器具を出し、失敗するリスクを少しでも減らすことにしたのであった。

『金剛杵（ヴァジュラ）』は連夜が『道具』の使い方を学び始めたときに、尊敬する父親がプレゼントしてくれた補助器具。一般で市販されている補助器具とは比べられない能力を持ち、どんな難しい術であったとしても連夜はこれを使ったときに失敗したことがない。だからこその『金剛杵（ヴァジュラ）』なのだ。

とはいえ、どれだけ完璧に術を唱えても、どれだけ素晴らしい補助器具を使っても途中で攻撃を食らってしまっては術は失敗し、その効果は霧散してしまう。

連夜は自分に迫りくる凶悪なミノタウロスの姿を睨みつけながらも、逃げることなく術に集中する。どのみちここまでやられてしまっては、ある程度回復しないと反撃どころかまともに動くことすらままならない。

（諦めちゃダメだ！！　最後まで戦うんだ！！）

鋼のような意志を込めた瞳を燃え上がらせて、連夜は迫りくる不良達を睨みつけ回復の印を空中に描き続ける。微妙なタイミング、印を描き切るのが早いか、不良達が辿りつくのが早いか。時間にしてわずか十秒前後のごく短い時間。しかし、その場にいる者達からすればひどく長く感じられる時間の流れの果てに、双方は同時に訪れる結果を悟ってそれぞれの声をあげる。

「くそっ、間に合わない！！」

「はっはあっ！！　死んどけ人間！！」

悔しげな声をあげつつも、それでも諦めることなく印を描き続ける連夜と、その巨大で凶悪な拳の射程距離に連夜が入ったことを悟って勝利の雄叫びをあげるミノタウロス。

今、理不尽な暴力が、それに抗う小さな魂を踏みつぶす。大した理由もなく踏みつぶす。力さえあれば正義なのだと、力のないものは死ねばいいと、そう叫んで小さくも気高い魂を無残に踏みつぶす。

それでも連夜は最後までミノタウロスを睨みつける。自分を踏みつぶそうとしている理不尽の象徴のようなその巨大な拳を睨みつける。例えここで倒れても決して踏みつぶされたままでは終わらないという意思を込めて睨みつける。

「つぶされとけやあああっ！！」

凶悪で無慈悲な咆哮が響き渡り、破壊の拳が連夜の眼前に迫る。

食らえばただでは済まない、全種族の中でも特に強大な怪力を誇る西域牛頭人体族（ミノタウロス）が繰り出す一撃。下手をすれば二度と起き上がれない体になるかもしれない。

だが・・

そのとき絶望の大地に一羽の鳥が舞い降りる。
自らが飛ぶべき空を見つけた緋色の鳥が舞い降りる。
優しい夜を守るために、鳥が、緋色の鳥が、魂を燃やして戦うことを決意した鳥が。

そして、緋の鳥は舞い降りた。

「うおおおおおおっ！！　理不尽粉砕！！」

連夜の頭上で一人の少年の雄叫びがあがる。

連夜は見た。

自分の顔のすぐ間近で止まるミノタウロスの巨大な拳を。

自分の前で勝利を確信していたミノタウロスの顔が絶望と苦痛に歪むのを。

ミノタウロスの腹に深々と突き刺さる紅蓮の炎に包まれた拳を。

「あ、あ、君は」

呆然と連夜が見詰める中、ミノタウロスの腹から拳を引き抜いた『人』物は連夜のほうへとゆっくりと振り返る。燃えるような真紅の髪、凛々しい顔、引き締まり鞭のような筋肉に包まれた鋼の長身。

「宿難（すくな）、遅くなって済まん。大丈夫か？」

どこか悲しげな、しかし、連夜のことを心から案じているとわかる優しい笑顔で語りかけてくるのは、あの陸（ルー）緋星（フェイシン）だった。

連夜の幼馴染の一人、龍乃宮　剣児の宿敵。連夜とはクラスメイトの間柄だが、剣児と仲良くしている連夜のことを毛嫌いしていたはずで、つい先程も連夜に対して決して友好的とは言い難い態度で接してきていたというのに、この変化はいったい何事なのか。

連夜は自分が今絶対絶命の大ピンチであることも忘れて、思わず目の前の緋星（フェイシン）をまじまじと見つめてしまう。しかし、緋星（フェイシン）はそんな連夜の視線に気がつかず、それよりも連夜の身体の状態に先に気がついて顔を悲痛に歪める。

「け、怪我をしているじゃないか、宿難!?　その腕、折れているのか!?」

「あ、う、うん。でも、いつものことだから」

「いつものこと!?　これがいつものことなのか!?　こんなボロボロになるのがいつもの状態だというのか!?」

つい先程までの非友好的な緋星（フェイシン）とは全く別人のようになって、連夜の身体を我がことのように心配してくる目の前の『人』物に、どう接していいかわからず、思わずあまり考えることなく答えてしまった連夜であったが、その言葉が緋星（フェイシン）の表情をいつもの激しいものへと変える。

しかし、それはいつものようでいつもとは全く違う激しさ。それに気がついた連夜は、ますます困惑の色を強める。

「る、陸（ルー）くん、なんだよね？」

「すまん、すまん、宿難。いくら謝っても足りない、足りなすぎる。

ボクは本当に目が見えていなかった。何も見えていなかったんだ。見なくちゃいけなかったのに、それから目を逸らしてきたんだ。すまない、本当にすまない。こんな状態にいつもなっている君に対してとてもじゃないけど許してくれなんて言えない、だけど、だけどボクは！！」

顔を俯かせ声を詰まらせて涙をぼろぼろと流しながら、頭を下げ続ける緋星（フェイシン）を連夜はしばらく呆然と見つめていたが、すぐに表情を引き締めるとその手を掴んで身体ごと強く引っ張って横へと飛ぶ。すると、その数瞬あと、先程まで緋星（フェイシン）がいた場所をミノタウロスと、数人の不良達が繰り出した凶悪な拳が凄まじい勢いで通り過ぎていくのが連夜達の目に映る。

「うわあ、あの拳を受けてまだ戦えるんだ。すごいね、君。僕、君のことを侮っていたよ」

「ふ、ふざけんなよ、人間。一人が二人になっても状況はかわらねぇんだよ・・ごほ、げほっ」

折れた片腕を治しながら半分呆れて半分称賛するという奇妙な表情でミノタウロスを見つめる連夜。そんな連夜に対し追撃しようとしたミノタウロスであったが、先程緋星（フェイシン）に受けた一撃がまだ治らないのか激しく咳き込んでその場にうずくまる。

ミノタウロスの両脇で彼を守るようにして立っていた側近と思われるジャッカル型獣人族の三人の不良達が、その様子を見て慌てて駆け寄る。

「じゃ、ジャックさん大丈夫ですか！？」

「俺に構うな、早くあいつらをやっちまえ！！」

「し、しかし」

「ミノタウロス族の耐久力をなめんじゃねぇ！！　こんなもん唾つけときゃなおる！！　それよりもてめぇらがぐずぐずしているもんだから、あのやろう折角折ってやった片腕治しちまったじゃねぇかよ！！」

巨大な拳を地面に叩きつけて悔しがるミノタウロスの様子を少し離れたところで見ていた連夜は、やれやれと肩を竦めて見せる。そして、その後治った左手をぐるぐるまわして調子を確かめ、問題ないことを確認すると横に立つ緋星（フェイシン）のほうへと視線を向けるのだった。

「ともかく助けてくれてありがとう、陸（ルー）くん。だけど、これ以上ここにいるとロクなことにならないから、早く離れて教室にもどって。後は僕一人で大丈夫。な～に、いつものことだからさ」

そう言ってにっこりと緋星（フェイシン）に笑って見せた連夜は、再びミノタウロス達のほうへと視線を向け直す。自分を害そうと、いや、隣にいる少年共々害そうと迫りくる不良達の姿を邪悪な笑みを浮かべて睨みつける。一応笑みを作ってはいるが、その目は全然笑っていない。その黒い瞳に宿るのは彼の表情を覆う邪悪な笑みと同じ色の意志ではない。そこに映るのは大事なものを絶対守りぬくという鋼の意思。悲しく切ないほどの決意。

ついさっきまでの緋星（フェイシン）ならそれに気がつかなかっただろう。連夜のことを知らなかった緋星（フェイシン）だったら、何も言わずここを立ち去っただろう。だけど、もう緋星（フェイシン）は知っている。知っているのだ。その瞳に宿る決意や想いが深いものであるかを。だからもう気がつかない振りはできない。絶対にだ。

緋星（フェイシン）は、不良達を迎撃するために一歩踏み出そうとした連夜の腕

を掴んで止める。

「え、ちょ、陸(ルー)くん」

緋星(フェイシン)の行動の意味がわからず、再び困惑の表情を浮かべて見つめる連夜。その連夜の黒い瞳を、緋星(フェイシン)は真っすぐに見つめ返す。今度は決して逸らしたりはしない。その悲しいまでに優しい心が宿った夜空のような黒い瞳をどこまでもまっすぐに万感の想いをこめて見つめる。

「君には君の考えがあって、やり方があると思う。それを邪魔するつもりはない。君が思うようにしたらいい。君は君の翼で飛べばいいんだ。だけどボクも一緒に君と飛ぶ。君を守るために飛ぶ、君が進もうとしている道を邪魔しようとする者達から君を守るために」

「何言ってるのさ!?　き、気持ちは嬉しいけどダメだよ、そんなの!!　そんなことしたら僕と一緒に狙われちゃうよ!?」

「別に構わないさ。もうボクは逃げないし隠れないって決めたんだ。ボクは見えない振りも聞こえない振りもしない。例え・・例え君がボクのことを友達だって認めてくれなくても、ボクは君の側を飛ぶ。君がずっとボクにしてくれてきたように、今度はボクが君の為に飛ぶ、この力の限り!!」

涙で潤んだ瞳、しかし、その瞳は真っ赤に燃えあがり忽ちにしてその涙を燃やしつくす。決意に満ちた連夜の黒い瞳に負けないくらいに強い炎の光に彩られた緋星(フェイシン)の真紅の瞳を見つめていた連夜は、やがて深々と溜息を吐きだし苦笑を浮かべる。

「ふぇいくんは昔からほんとに変わらないよね。一度言い出したら

絶対に曲げないんだから。ほんとに頑固者だよねえ」

「ほっとけ、どうせボクは融通の利かない頑固者だよ」

「しょうがないねえ。ここで断っても、ふぇいくんのことだからきっとついてきちゃうものね。わかった、手伝ってよ。僕のことをまだ友達だと思っているならだけど」

「ば、バカッ!!　くだらないことを聞くな!!　君とは昔からの・・え、いま、君、ボクのことを『ふぇいくん』って」

先程から連夜が自分のことをファミリーネームではない呼び方で呼んでいることに気がついた緋星（フェイシン）。しかもそれはたった二人だけしか使わない緋星（フェイシン）の呼び名。緋星（フェイシン）の脳裏に蘇る幼き頃に遊んだ二人の親友との大事な思いで。いつもフードを目深にかぶった心優しい人間族の友人。その姿が目の前の人物と重なる。何かにはっきり気がついた緋星（フェイシン）が呆然と連夜を見つめていると、連夜は顔を真っ赤にしながら照れ笑いを浮かべる。

「ごめん、ほら、僕いま、こんな状態だからさ、僕と友達だってことがバレたらマズイかなって思って、言いだせなかったんだあ」

「な、なんで？　なんで、もっと早く・・」

「他にもまあいろいろとあるんだけど、ともかく昔話は後回しにしよ。とりあえず、あいつらをなんとかしてからね」

「いろいろとって、ボク、君が君だって知らなかったから君にいろいろひどいことを・・あ～～、もう!!　あとでちゃんと話を聞かせろよ!!　絶対だぞ!!　聞かせないと許さないからな!!」

「うんうん、わかったわかった。僕もふぇいくんといろいろ話がしたかったんだあ」

「え～い、相変わらず君は昔と同じでこんなときでも緊張感がな～い！！」

怒ったような、しかし、どこか楽しそうに見える表情で叫ぶ緋星（フェイシン）の姿を嬉しそうに見つめて頷いた連夜は、視線で合図を送って緋星（フェイシン）と共に不良達めがけて疾駆する。

緋星（フェイシン）は戦う。連夜と共に戦う。もう迷わない、力の限り彼のすぐ側を飛び、そして、彼を守る。

今、一羽の緋の鳥が大空へと駆け上がる。優しい夜空を守るために、己の魂を燃やして。

次回予告

たった一人だったはずの優しい夜。

己自身と、そして、なによりも大切な人達を守る為に一人でいることを選んだ夜。

だが、そんな夜を照らすために、少しずつ星が集まり始める。

強く頼もしい星達が、傷つき疲れ果てた夜を守るために、今、立ち上がろうとしていた。

次回

真・ここは違うどこかの日常

過去編（高校二年生編）

第五話

『心友と戦友と』

雌伏の時は過ぎた、友よ、今こそ立ち上がれ！！

玉藻：いま気がついたけど、連夜くん、これまでずっと一人で戦ってきたの？

連夜：僕に関わるとロクなことになりませんし、なによりも、人質にでもされたらね。

玉藻：でも、危ないときもあったんじゃないの？　一人しかいないとできることも限られてくるでしょ？

連夜：まあ、なんとかなるもんです。ならなかったこともありますけど、今、生きていますから、それはそれでよしということで。

玉藻：・・連夜くんをいいようにやってくれちゃった不良達は、絶対いずれフルボッコにする。

連夜：お気持ちは嬉しいですけど、やめておいてください。玉藻さんがいくら強いと言っても、何が起こるかわかりませんから。もし万が一、玉藻さんに何かあったら、そっちのほうが嫌ですよ。

玉藻：連夜くん。そこまで私のことを・・

連夜：さて、次回も僕の大切な友人達のお話です。お楽しみにっ！！

玉藻：でも、やはり、連夜くんをいじめた奴らには地獄を見せてやらねば・・

連夜：た、玉藻さん？　もしもし？

第五話　お～ぷにんぐ

連夜：さてと、食器の後片付けは終わったし、洗濯も終わった、リビングの掃除も完了。折角のお休みだし、今日は自分の部屋の模様替えでもしようかな。

（がちゃっ）

玉藻：きゃ、きゃあああああっ！！　ま、まだ着替え中なのに！？
連夜くんの、えっちぃっ！！

連夜：あわわわわ、た、玉藻さん、ご、ごめんなさい！！

（ばたん）

連夜：しまった、僕としたことが。玉藻さんの部屋を開けてしまうなんて・・って、あれ？　表札はちゃんと『れんやのへや』になってる。あれ？　あれれ？

（かちゃ）

玉藻：きゃ、きゃあああああっ！！　ま、まだ着替え中なのに！？
連夜くんの、えっちぃっ！！

連夜：・・

玉藻：・・・

連夜：・・・

玉藻：・・・

（ばたん・・かちゃり・・スタスタスタスタ）

玉藻：え、え、れ、連夜くん!?　ちょ、ああっ!?　外側から鍵がかけられているぅっ!!

連夜：よし、今日は自分の部屋じゃなくて、リビングのほうの模様替えにしよう。そうしようそうしよう。

玉藻：れ、連夜くん、ちょっと、ひどい!!　スルーしちゃいやあああっ!!　扉に鍵をかけて封印しようとしないでえええええっ!!

真・こことはちがうどこかの日常

過去（高校生編）

第五話　『心友と戦友と』

CAST

宿難（すくな）　連夜（れんや）

言わずと知れた本編主人公。
都市立御稜高校に通う高校二年生。人間族。男性。十七歳。
全種族の中で最も差別されている人間族であることから、学校中の不良達の標的となっている。
これまでは親しき者達に害が及ぶことを恐れて積極的に自分から動くことはなかったが、心友フェイとの間に絆を取り戻したことで、その心境に変化が。

「と、いっても油断はできないんだけどね」

陸（ルー）　緋星（フェイシン）

御稜高校三大実力者の一人と言われる武術の達人龍乃宮　剣児に匹敵する武力を持つ少年。朱雀族。男性。十七歳。通称フェイ。
連夜が小学校時代に親交を結んだかけがえのない大切な心友であることをようやく知り、連夜の為に力を尽くすことを誓う。

「聞こえないフリも、見えないフリも、そして、『死んだフリ』もしない。絶対にだ」

クリス・クリストル・クリサリス・ヨルムンガルド

連夜の戦友。妖精族。男性。十七歳。通称クリス。
一年前、『人』の手で倒すことは不可能と言われる『貴族』クラスの『害獣』を倒した英雄達の一人。
美少女のような姿をしているが、れっきとした男性である。アルテミスとは男女の深い仲で、九月に結婚する予定。

「おまえが腹をくくるの待ってたつ～んだよ」

アルテミス・ヨルムンガルド

連夜の戦友。狼獣人族。女性。十七歳。
一年前、クリス、連夜をはじめとする英雄豪傑と共に、『貴族』クラスの『害獣』を討伐した勇士の一人。
白銀の美しい獣毛をした美しい狼で、獣人系の中では間違いなくトップクラスの美少女。クリスを溺愛している。

「えへへ、ありがと、クリス。大好き」

龍乃宮（りゅうのみや）　姫子（ひめこ）

連夜のクラスの委員長で、御稜高校が誇る最高にして最強のスーパーアイドル。上級龍族。女性。十七歳
上級種族中の上級種族である龍族のお姫様でもある。
不純同性交友に反対していることを表明。

「連夜は私の手で正しい異性交際の道に戻すからお主は引っ込んで

おれ」

龍乃宮（りゅうのみや）　瑞姫（みずき）

姫子の腹違いの妹。上級龍族。女性。十七歳。
姉の姫子に比べるとやや細身ですっきりしたスタイルの持ち主の美少女。
姉同様に不純同性交友にはやっぱり反対派。

「ここは私が引き受けますからどうぞ御姉様はその奇麗な身体を守ってくださいませ」

龍乃宮（りゅうのみや）　剣児（けんじ）

姫子と瑞姫の腹違いの兄。上級龍族にして上位の王位継承権を持つ少年。上級龍族。男性。十七歳。
御稜高校三大実力者の一人にあげられるほどの武術の達人であると同時に、三人の美少女達を恋人に持つハーレムマスターでもある。
何人もの女性と関係を結んでいる自他共に認める女好きだが、実はそれは求めても手に入れることができないある人物に対する気持の反動からくるもので・・

「連夜は・・連夜はなあ！！」

玉藻：連夜くんのいぢわる！！　連夜くんのはくじょうもの！！

連夜：まったくもう、僕の部屋で何やってるんですか、玉藻さん。

玉藻：せっかくどっきりドキドキハプニングごっこしていたのに！！　連夜くん、ノリが悪いんだから！！

連夜：どっきりドキドキって、それならほぼ毎日どっきりドキドキさせられていますよ。もうお互いいろいろ恥ずかしいところ知ってるのに、今更じゃないですか。

玉藻：それはそれ、これはこれなの！！

連夜：そ、そうですか。それよりもいいんですか？　もうじきレポート提出期日なんでしょ？

玉藻：え？　レポートってなんだっけ？

連夜：もう～～。臨時保険医の研修レポートですよ。二か月に一回ブエル師匠に提出しないといけないんでしょ？　たしか、一回でも忘れたら他の方と交代させられちゃうんでしたよね？

玉藻：い、いやあああああっ！！　忘れてたあああああっ！！

連夜：お願いしますよ、ほんとに。ちょっと噂で聞いたんですけど、玉藻さんがもし臨時保険医から外されることになったら、み～ちゃんがその交代要員に任命されるかもって。

玉藻：げえええええっ、それだけは絶対にいやだあああああっ！！　あ

いつが保険医になったら、間違いなく保健室に連夜くん連れ込まれてしまう。そうなったら連夜くんの貞操が・・

連夜：いや、そうなるまえに全力で逃げますけどね。

玉藻：甘い！！　甘すぎるわ、連夜くん！！　あの変態が、一度や二度失敗したくらいで諦めるわけがない！！　○交するまで・・ああ、いや成功するまで何度でも何度でも襲いかかるに違いない！！　諦めるってことを知らないんだから。

連夜：うんうん。ほんとそういうところそっくりですものね。（じ～～っと玉藻を見つめる連夜）

玉藻：でしょ～。って、誰と？

連夜：こほん。さて、それでは、そろそろ本編いきます。第五話『心友と戦友と』です、どうぞ。

玉藻：連夜くん。誰とそっくりなのかしら。私の目を見て話してくれる？

連夜：え～っと、あ、そうだ、玉藻さん、レポート書かないと。

玉藻：あああああ、そうだったあっ！！

第五話　『心友と戦友と』　その1

午後の授業が始まる五分くらい前に、連夜（れんや）と緋星（フェイシン）は教室に駆け込むことに成功した。

「あ～、間に合った、セーフ！」

「やれやれ、間に合わないかと思ったがなんとかなったな。全くあの牛野郎ときたら、弱いくせにやたらと耐久力だけ無駄にあって悪あがきするから時間を思いきりとってしまった。本当ならもっと早く終わって、残りの休み時間いろいろと君と話がしたかったのに」

「ああ、うん、それについては残念だけど、想い出話をする機会はこれからいくらでもあるしね。どっちかというと僕からしたら無事に片がついたことにほっとしてるよ。あのままだったら、片をつけるどころかいいようにやられちゃっていたからね。それもこれもふぇいくんのおかげだよ、ありがとね」

「何度も言うが、礼はいらない。君が今までボクにして来てくれたことから比べればこんなの大したことじゃない」

安堵の吐息を吐きだしながら、自分の席に戻った連夜と緋星（フェイシン）は鞄から教科書とノートを取り出して次の授業の準備を始める。ちょうど二人はお互いが前後に位置する席であるため、先生が到着するまでのあとわずかな時間、そのまま話を続けることができる。連夜は授業の準備を素早く済ませたあと、くるっと身体を反転させて緋星（フェイシン）のほうに向きなおり、穏やかな笑顔を浮かべて緋星（フェイシン）を見つめる。

「ううん、改めてお礼を言わせてよ、ふぇいくん。君が来てくれな

かったら、僕は間違いなく保健室直行か、下手をすれば入院コースだったんだから」

「いいって、そういうのキライだって知ってるだろ？」

連夜が穏やかな中にも真剣な色をにじませた瞳で真っすぐに緋星（フェイシン）を見つめ、その後ゆっくりと頭を下げる。すると、緋星（フェイシン）は顔を真っ赤に染めてぷいっと横を向いてしまい、それを見た連夜は優しい笑みを深くしていく。それは、ごく一部の身内にしか見せない心からの笑顔。嘲笑ではない、憐憫の笑顔でもない、若くして老成してしまった、いやせざるを得なかった彼が大人として浮かべる笑顔でもない、恐らくこのクラスの誰一人として向けられたことのない正真正銘本物の連夜の、高校生としての等身大の連夜の笑顔だった。

それを眩しそうに、しかし、心から嬉しそうに誇らしそうに見つめる緋星（フェイシン）。連夜のその笑顔がどれだけ貴重か、今の緋星（フェイシン）にはよくわかるから。そうしてその笑顔に緋星（フェイシン）が見惚れていると、やがて連夜がゆっくりと右手を差し出すのが見えた。

何をするために差し出されたかはもちろんわかっている。だが、それを自分が握っていいものかどうかわからず、彼はその小さな右手と連夜の顔へ交互に視線を走らせる。

「今更だけど、久しぶり『ふぇいくん』。小学校三年生の三学期にお別れして以来だよね。それから、もう一つ今更だけど、あのとき僕は、自分のあだ名だけで本当の名前を君に教えてなかったよね。だから初めまして、僕の名前は　宿難（すくな）　連夜（れんや）。よろしくね」

懐かしい声、懐かしい匂い、懐かしい気配。何故自分は今まで気がつかなかったのだろう？　あの日、小学校三年生三学期の終業式、小学校の校門で彼と別れたときに必ず大きくなったら会いに行くと約束したのに。どれだけ変わっていても絶対に見つけてみせるから

と誓ったのに。

それを思い返すとどうにも素直に目の前の手を握り返すことができず、緋星（フェイシン）は差し出された手と穏やかな笑顔を浮かべている連夜の顔を交互に何度も見つめ返す。すると、緋星（フェイシン）の様子を見ていた連夜は小首をかしげ、一瞬本当に悲しそうに表情を浮かべたが、すぐにどこか無理していると思える取り繕った笑顔を浮かべてみせる。

「あ、ごめん。やっぱり馴れ馴れしいよね」

「ち、違う、そうじゃない！！　そうじゃなくて・・いくら君が素性を隠していたとはいえ、あれほど君を忘れないと言っていたのに、ボクは君のことを完全に忘れていた。それどころかさんざん君にひどいことも言ってしまった。そんなボクにその手を握る資格があるのかなって思ってさ」

「え、そんなこと気にしていたの？　相変わらずだなあ、ふぇいくんは」

暗く思い悩む緋星（フェイシン）を一瞬吃驚したように見つめた連夜だったが、すぐに優しい笑顔を浮かべると何の躊躇いもなく緋星（フェイシン）のゴツゴツした手を取って握る。その連夜の行動を呆気に取られたような顔をして見つめる緋星（フェイシン）に、連夜はその笑顔同様の優しい声で語りかける。

「ひどいこととか、資格とか、償いとかそんなことどうだっていいよ。それよりも僕は嬉しいんだ。昔の友達が僕の所に戻ってきてくれたことが本当に嬉しいんだ。しかも僕はその友達に僕が僕だってことを明かしていなかったのに、それでも僕を助けに来てくれた。嬉しかった、本当に嬉しかったよ」

本当に、心から本当に嬉しそうにほほ笑む連夜に対し、それでも

尚、自分の中の割り切れない葛藤を口にしようとした緋星（フェイシン）だったが、言葉を発する瞬間連夜の瞳が潤んでいることに気がついて絶句してしまう。それだけで目の前の大事な友達がどれだけ自分との再会を喜んでいるかがわかってしまった。緋星（フェイシン）は自分の胸の中を熱い何かが駆け抜けるのを感じ、そして、瞳に何かがせり上がってくるのを止められず、思わずそれを見られないように俯いてしまう。

「ふぇいくん？」

「な、なんでもない。ま、まったく、君はいくつになっても底なしにお『人』好しだなあ。どれだけ邪悪な仮面を被ってもその裏側がそんな砂糖菓子のようじゃ、いつか今日のあの頭の悪い牛みたいな奴に食われるかわからないぞ」

緋星（フェイシン）の異変に気がついた連夜は心配そうに見つめてくるが、緋星（フェイシン）は握手していないほうの片腕でごしごしと涙を拭うと、きっと表情を引き締めて顔を上げる。その瞳にある固い固い決意の色を宿して。

「だから。だから、これからはボクが側にいる。側にいて君を守る。君はすぐにいらん仏心を出して危険に突っ込んでいくからな。せめて学校にいる間だけでも側に張りついていないと心配で仕方ない」

「ひ、ひどいよ、ふぇいくん。それじゃあなんか僕が、いつも考えなしに行動しているみたいだよ」

緋星（フェイシン）の言葉を聞いた連夜が、わざとらしく傷ついた表情を浮かべて見せると、緋星（フェイシン）は呆れ半分の苦笑を浮かべて目の前の幼馴染を見つめ返す。

「ボクが見ている限りではそう見えるな。小学校のときもそうだっ

たし、高校に入ってからもそうだ」

「ええ～～！！　そ、そんなことないよ」

「でも、それが君だものな。弱い者を見捨てることができないんだから。小学生の頃は、そんな君に何度も助けられたから、今更その行動自体を否定するつもりはないよ。ただ、今度はボクが君を守る」

「ふぇいくん」

浮かべていた苦笑を消した緋星（フェイシン）は、彼が今まで見せたことがないような優しく穏やかな表情になって目の前の連夜を見つめると万感の思いを込めて言葉を紡ぐ。そんな緋星（フェイシン）の言葉に秘められた決意を敏感に感じ取った連夜は、胸が詰まって咄嗟に言葉を返すことができず、再びその瞳を潤ませて緋星（フェイシン）のルビーのように美しい瞳を真っすぐに見つめる。すると、緋星（フェイシン）は困ったように視線を逸らし、ぶっきらぼうにぼそぼそと呟くのだった。

「あ～、それからその『ふぇいくん』はやめろ。なんか子供の頃をモロに思い出すから変な気分だ。ボクのことは呼び捨てで『フェイ』でいい」

「うん、わかったよ、フェイ。その代り、僕のことは『連夜（れんや）』って呼んでね。僕も昔のあだ名で呼ばれるのはちょっと恥ずかしいと思っていたから」

「昔のあだ名か。今思えば君のあだ名は・・あれはひどいものだったな」

子供の頃を思いだしたフェイは、顔を顰めて自分の目の前に座る

幼馴染の姿を見つめる。あの頃、この大事な友達はいじめっ子達の標的であった自分ともう一人の友人を庇っていつもいつも全身傷だらけになっていた。そんな姿からつけられた不名誉極まりないあだ名。

しかし、そんなあだ名で呼ばれても、この優しい友達はいつも温かく笑っていて、決して盾になることをやめようとはしなかったのだ。

その記憶が脳裏に鮮やかに蘇った時、フェイの瞳に再び真紅の炎燃え上がる。

「フェイ？　どうかした？」

急に無口になってしまった自分を心配して尋ねてくる連夜に、フェイは静かに笑ってみせると、安心させるようにゆっくりと首を横に振ってみせる。

「大丈夫、なんでもない。子供の頃に自分自身に誓った約束をもう一度思い出して確認していただけだ」

「約束？」

「ああ。大事な約束だ」

怪訝そうな表情を浮かべてフェイを見詰める連夜。明らかにその約束の内容を知りたがっている様子であったが、フェイは静かに笑みを浮かべ続けるだけで話そうとはしなかった。この約束は自分だけが覚えていればいい、もう二度と忘れさえしなければ、それでいいのだ。

連夜と別れることになった小学校三年生の終業式のあの日、彼は誓ったのだ。次に彼と再会するときまでに自分は絶対に強くなって

おくのだと。いじめっ子なんかに絶対負けないように。そして、彼の大事な友達が、再会したその時にもしもまだいじめっ子にいじめられているか、あるいはその身体を犠牲にして誰かを守っていたとしたら、そのときは・・

『そのときは、そのときこそは・・今度はボクが盾になるんだ！！』

その為に会得した『武』だった。そして、それは気に入らない相手とくだらなくじゃれあう為に会得した『武』ではないのだ。誰かを傷つける理不尽な『戈』を『止』める為の『力』。それが『武』だ。

今こそそれを正しく使う時。

改めてそれを固く誓ったフェイは、大事な友達の手を握る手に力を込める。

「ともかく改めてよろしくな、連夜」

「うん、よろしくね、フェイ」

力強く握られている自分の手と友人の手をしばし優しい視線で見つめていた連夜であったが、フェイの言葉にすぐに気がついて大きく頷いて見せる。二人は子供の頃と全く同じ、しかし、以前よりもずっと強くなったと思わせる笑顔を浮かべてほほ笑みあう。

本当の意味での再会を果たした二人に、なんともいえない温かくて優しい時間が流れて行く。

はずだったのだが。

疾風のような速度で突然乱入してきた何者かがしっかり握りあう二人の手に容赦のない手刀の一撃を叩きつける。完全に虚をつかれ

る形になってしまった二人はモロにそれを食らう形になってしまい、たまらず悲鳴をあげてお互いの手を引っ込めてしまうのだった。

「いてぇっ!!　だ、誰だ、いきなり攻撃してくるやつは!?」

「いたたた。いきなりチョップはひどいよ、って、うわわわわっ!!」

手刀を叩きつけられてヒリヒリと痛む片手をもう片方の無事な片手で押えた二人は、手刀を食らわせてくれた不埒な犯人を探そうと周囲に視線を走らせるが、それよりも早く連夜の身体を何者かが物凄い力で引っ張っていく。

連夜は、先程やっつけた筈のミノタウロス一派の逆襲かと思って身体を硬くしたのだが、背中と両腕に当たるふにふにぽよぽよとした物凄く柔らかい何かの正体をすぐに察して身体の力を抜く。そして、自分が思い当った『人』物達に文句を言おうとしたのであるが、それよりも早く両脇から超絶的に二人の美少女達の顔が迫ってきて連夜は首を動かすことすらできなくなってしまうのだった。

「ちょ、何!?　いったいなんなの!?　姫子ちゃんも、龍乃宮さんも、何の遊びな・・」

「連夜ぁぁぁぁぁっ!!　なんでじゃ、なんでなのじゃ!?　どうして陸殿(ルー)なのじゃ!?」

「そうですそうです!!　ひどいです、あんまりです、そんなのってないですよおおっ!!」

「はあっ!?　一体全体なんのことなの!?」

辺り憚らず涙をぼろぼろと流して泣き叫びながら詰め寄ってくる二人の美少女姉妹。しかし、二人の美少女姉妹の言動の意味がさっぱりわからない連夜は、頭の上にハテナマークをいくつも浮かべて困惑するばかり。そんな連夜の姿をどう受け取ったのか、今度は泣き顔から怒り顔に変化させて美少女達が連夜に食ってかかる。

「とぼけるんじゃない！！　い、い、今、陸（ルー）殿と、その、手を握り合って・・」

「しかも、しかもですよ、その状態で見つめあったりなんかしちゃったりなんかして、いやっ！！　宿難くんの不潔！！」

「いやじゃ、そんなのいやじゃ。女にだらしない連夜を見たくない、バカ剣児みたいになってほしくないとは確かに言ったけど、だからと言って、男同士だなんて」

「やおいですわ、不毛ですわ、非生産的ですわ、そんな愛なんて見たくないですわあああああっ！！　そんな世界は同人誌だけで結構ですわあっ！！」

「あのさ、二人とも物凄い誤解してるよね？　完全に僕達のこと凄い方向に誤解しているよね？」

怒っていたかと思えばまた泣き始め、泣き続けていたかと思うとまた怒りだすというなかなか愉快な百面相を続ける二人の美少女達の姿をなんとも言えない困り果てた表情で見つめていた連夜であったが、だんだん二人の言っている内容がわかってきて穏やかだった顔が引き攣り始める。

しかし、そんな連夜のうんざりしきった声が聞こえていない美少女達は、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔をどんどんと連夜に近

づけていく。連夜はそれに気がついて慌てて二人から逃れようとするが、二人の瞳をよく見てみるとそこには見たこともないような妖しい光が。

「ふ、二人とも顔近い！！　物凄い近い！！　ってか、何、その目は！？」

「誤った道に進もうとしているかけがえのない友達を見捨てることはできん。緊急事態ということだし、相手は連夜だし、しょ、しょうがないから、本当にしょうがないから私の大事な初めては連夜にあげる。それで正しい道にもどしてあげるからね！！　ん～～～」

「血迷って正気を失ってしまった大事なクラスメイトを見放すことはできません。事が事ですしやむをえません、それにその相手は宿難くんですし。し、仕方ないですね。ほ、本当に他に方法がありませんし、仕方ないので私の大事な最初の相手は宿難くんで我慢してあげます。そして、正気に戻して差し上げますわ。ん～～～」

「待て待て待て、僕は誤った道に進んでないし、正気を失ってもいないってば！！　ってか、正気を失っているのは君達のほうでしょうが、ちょっと、やめなさいってば！！」

「正気を失っているものはみんなそう言うのじゃ。それよりも、瑞姫、いい加減連夜の腕を放さぬか！！　連夜は私の手で正しい異性交際の道に戻すからお主は引っ込んでおれ」

「何を言っているのですか、御姉様こそその手を放してくださいませ。御姉様は学園の男子生徒達の心の拠り所となっておられるマドンナ的存在。そんな御姉様にこのようなことをさせるわけにはいきませんわ。ここは私が引き受けますからどうぞ御姉様はその奇麗な

身体を守ってくださいませ」

「お主、そんなこと絶対思ってないであろう？　完全に上辺だけ取り繕って言っているであろう？」

「いやですわ、御姉様、どうして私をお疑いになられるのですか？　私はいつも御姉様のことを思っているというのに。あ、宿難くん、顔だけでいいですからこっちに向いてくださいませ」

「ちょっと待て、どさくさ紛れに連夜の顔を自分のほうに引き寄せるでないわ！！　連夜、瑞姫のほうを向いてはいかん！！　こっちを向くのじゃ」

「宿難くん、そっちを向いてしまったらできませんわ！！　こっちを向いてくださいませ！！」

「うわ～～、二人ともいい加減にしてえええっ！！　あ、そうだ、フェイ！！　いまこそ僕の窮地を救って・・」

二人の美少女達の壮絶な争いに巻き込まれてたまらず悲鳴を上げる連夜。どうにかして逃げようとするが、上級種族中の上級種族たる龍族の腕力は、少女と言えども軽く連夜の腕力を上回っていて実質力づくでの脱出は不可能。ならばと、ついさっき改めて友としての契りを交わした頼れる旧友に助けを求めようと、そちらに視線を走らせた連夜であったが。

「姫様達の邪魔はさせへんでぇっ！！　奥手でなかなか自分から動こうとしない姫様達がいつになく積極的になっているんや！！　ここはうちらが体を張ってサポートするんや！！　いくではるか！！」

「ええ、よくわかっていてよ、ミナホ。陸（ルー）さん、申し訳ないけれどそういうことで、いくらあなたが宿難くんの最愛の恋人だとしても、ここから先には行かせるわけにはいきません！！」

「だ、誰が、最愛の恋人だ、気色悪い！！　それよりもそこをどかんか貴様らああっ！！」

連夜の視線の先では、このクラスで最大の味方となってくれた旧友のフェイと、姫子達の腕利きボディガードである東雲　ミナホ、水池　はるかの二人が凄まじいバトルを繰り広げていた。御稜高校随一の武術家として知られるのが連夜の幼馴染龍乃宮　剣児であるが、その剣児タイマンを張ることができる数少ない人物の一人がフェイである。

つまり、フェイはこの高校の中でトップクラスの武術家であるということなのであるが、そのフェイを相手にして一歩も引かないミナホ、はるかの武術の腕は相当なものがある。二対一というハンデもあるし、相手が女性ということでフェイが多少手加減している部分もあるということもあるが、それを差し引いても二人は明らかに強いことがわかる。

普段姫子や瑞姫の影に隠れてあまり目立たない二人であるが、まだ若いとはいえ流石龍王家に代々仕える守護一族ということだろうか。

連夜は思わず自分が窮地であることを一瞬忘れ、しきりに感心して頷いて見せる。

「東雲さんも水池さんも凄いな。女性相手でかなり手加減しているとはいえ、フェイを完全に足止めしてこちらに近づけさせないんだもの。二人とも見事、実にお見事な手並みだよ！！　って、褒めてる場合じゃなかった、僕はピンチのままじゃん！！　うわ～～、フェイ、なんとか頑張ってぇぇぇ！！」

「わかってる、わかってはいるんだ！！　しかし、こいつら思った以上に強い。くっそおお、連夜、連夜ぁぁぁぁぁっ！！」

「フェイ、フェイいいいいいっ！！」

絶対絶命の連夜を救うべく孤軍奮闘するフェイであるが、彼の眼前に立塞がる敵は思った以上の強敵で思うように進むことができない。目的の場所はすぐそこだというのに辿りつけないもどかしさ。フェイは龍の姫達に捕えられた連夜の姿に届かぬとわかりながらも大切な友人の名を呼びながら手を伸ばし、それに応えるように連夜もまた過剰なくらい悲痛な表情で大事な旧友の名前を呼ぶ。

当人同士は迸るような男同志の熱い友情からやっていることなのだが、傍から見ていると、どうみても引き裂かれた恋人同士がお互いを求め合っているようにしか見えない。この大騒動を少し離れた場所に避難しながら見守っているクラスメイト達はめちゃくちゃ微妙な表情で二人のことを見守っているし、龍族の女性陣達に至っては苦虫を噛み潰したような仏頂面になって連夜を睨みつけるのだった。

「やっぱりそういう関係なんじゃないか、連夜！！　そんなのダメじゃ、絶対ダメじゃっ！！」

「宿難くん、どうしてそうなんですか！？　ふ、不純同性交友は認められませんわ！！」

「だから、僕とフェイはそういう関係じゃないんだったら！！」

「やっぱりここはショック療法しかない。クラス委員長として、わ、私の熱い想いのこもった、その、唇で」

「いえいえ、ですから、そんなことを御姉様にさせるわけにはいきませんわ、ここは私が引き受けますから御姉様は引っ込んでいてくださいませ」

「お主こそ引っ込んでおれ！！」

「御姉様こそ！！」

「痛い痛い痛いってばっ、ちょっと僕はモノじゃないんだよ！！いい加減に二人とも放してよおおおっ！！」

いくら美少女に挟まれているとはいえ、彼女達は連夜よりもはるかに身体能力に優れる種族。そんな種族の超絶的力で振り回され続ければ、いくら鍛えているとは言え、最弱種族でしかない連夜が耐えられるはずもない。しかし、そんな連夜の現状に全く気がついていない二人は自分達の思うように連夜を振り回し続け、このままでは連夜は無事では済まなくなってしまうのは誰の目にも明らかであった。

最初のほうはまだ余裕のあった連夜の顔色が次第に青くなって悪くなりはじめ、脂汗がはっきりわかるほど顔中に浮かび上がる。ただでさえ先程骨折したところを無理矢理薬で繋ぎ直したばかりで完全に回復しきっていないというのに、これだけの負担を身体に強いられることになった連夜の身体は、すでにレッドゾーンに突入していた。

（だめだ・・意識が遠ざかっていく）

精神力には絶対の自信がある連夜であるが、流石にこれではどうしようもなかった。痛みと疲労で徐々に意識が薄れて行く。いや、

それどころか、自分のすぐ横に見たこともないような大型犬が寄り添ってくる幻覚まで見え始めた。
連夜は、だんだんと身体から力からなくなっていくのを感じながら、まるで誰もいない真冬の教会にいるかのような気分で幻覚の犬に話しかけるのだった。

（パトラッシュ、僕はもう疲れたよ）

『いったいいつの間にその名前になったの!?』とか、『その犬とどこで知り合ったの?』とか、『話的に全然関係ないよね?』とかツッコミどころ満載な内容であったが、流石に連夜の心の声を正確に把握してツッコミを入れてくれる人は存在せず、連夜はその幻覚の犬と共に静かにその目を伏せていく。
高校生になってから一年と一カ月。様々な生徒達に敵視され、嫌がらせを受けたり喧嘩を売られてきたりしてきた連夜であるが、最後のトドメはまさか親しい仲であると思われた龍乃宮姉妹であったとは。教室中の生徒達がやや意外な展開に驚きはしているものの、助けようともせずに黙って静かに成り行きを見守っている中、いよいよ最後の時が訪れようとする。
二人の美少女達に振り回され続ける連夜の腕から徐々に力がなくなって行き、その目から光が失われようとした。

まさにそのとき。

思いもよらぬ救世主が姿を現す。

「おまえら、いい加減にしろ!!」

第五話　『心友と戦友と』　その2

一喝しながら姫子達の間に割って入ったその人物は、連夜を拘束していた彼女達の腕を素晴らしい技量でふりほどく。そして、自由になったものの、半分意識を失って倒れ込もうとする連夜の身体を捕まえて支え、そっと自分の後方へと避難させるのだった。

「け、剣児」

「兄上」

自分達から連夜を奪い取った人物の正体を知った姫子と瑞姫は一瞬茫然とした表情を浮かべたが、すぐに怒りのそれへと変化させて彼を睨みつける。しかし、目の前に立塞がる『人』物は、二人以上の怒りの炎をその瞳に燃え上がらせて更なる一喝を二人に放つ。

「つべこべ言う前に連夜の姿をよく見てみやがれ、このクソ馬鹿コンビ！！　こんなによれよれになるまで弱らせるのが、てめぇらの好意ってやつなのか！？　それともあれか、自分達は超絶的な美人だから、多少無茶やっても許されるってか！？　ふざけんじゃねぇし、思いあがるのも大概にしろや！！」

今まで見たことがないくらいに本気も本気。宿敵であるフェイとタイマンを張る時でもここまで本気の怒りを見せたことがない剣児が二人の妹に見せるのは、地獄の業火にも似た大激怒。それを真正面から炸裂させられた二人は、その強大な気迫にしばし圧倒されて声を出すことができず、銅像のようにその場に固まってしまう。そして、その後なんとか自分を取り戻した二人は、剣児の後ろに匿われている連夜のほうに視線を向けてまたもや固まってしまう。そこ

には剣児の言葉通りにぼろぼろに弱ってしまった連夜の姿。
誰のせいでそうなってしまったかは確認するまでもない。二人は美しい顔をくしゃりと歪ませて連夜のほうに静かに頭を下げる。

「す、済まぬ連夜。ま、また私はやってしまったのか。本当に申し訳ないことをした」

「ご、ごめんなさい、宿難くん。一番冷静にならなければいけない立場にいるというのに私はなんということを」

「いやいや、謝らなくてもいいよ。別になんとも思ってないから。ああ、それから剣児、ありがとうね。助かったよ」

まだ回復しきっていないため、顔色はまだ青いままであったが、連夜はそれでも二人に笑顔を向け片手をひらひらさせてみせ、その後すぐ前に立つ剣児にぺこりと頭を下げて礼を言う。すると、剣児はそんな連夜の姿を痛々しそうに見つめた後、すぐにまた怒りの表情を浮かべて二人の妹達と、そのお付きの少女達へと向ける。

「礼なんかいい。それよりも朝も言ったが連夜は甘すぎる。そんなんだからこいつらは思いあがって自分達は何をしてもいいなんて勘違いをするんだ。だいたいこうなった原因があまりにもくだらねえ。連夜とフェイシンが恋人同士だと？　そんなことあるわけねぇだろ！！」

「た、確かに私が思いあがっていたことに関しては間違いない、そこに対しては素直に謝る」

「それに宿難くんにひどいことをしてしまったことも間違いない事実、それに対しても謝ります。しかしですね！！」

「そうじゃそうじゃ、連夜とフェイシン殿が手と手を握りあって見詰めあっているのを見たら・・」

「そうですそうです、誰だってただならぬ仲に違いないって思います！！」

「黙れ！！　おまえら、いったい普段から連夜の何を見ていたんだ？　そもそもおまえらだって手を握ったり顔を近づけたりしょっちゅうやってるじゃねぇか！！」

「そ、それはその、大切な幼馴染だし」

「そ、それにその、大事なお友達ですし」

「じゃあ、フェイシンは連夜の友達じゃねぇとでも言いたいのかよ？　バカタレ！！　連夜はそんなやつじゃないってことはおまえらが一番よく知ってるだろうが！！」

「「仰る通りです」」

未だに怒りが冷めぬ実兄に対し、なんとか言い訳しようとする姫子と瑞姫。非常にちゃらんぽらんで大雑把でいい加減な性格をしている実兄のことを嫌というほどよく知っている二人は、すぐに事態を有耶無耶にできるだろうとタカをくくっていたのであるが、ところがどっこいさにあらず。剣児は二人の苦しい言い訳を、いつにない真面目でまともな言葉で返り討ちにしてしまうのだった。二人は素直に頭を下げながらも、今まで見たこともない実兄のまともな様子に大いに驚きながら顔を見合わせる。

（け、剣児の奴どうしてしまったのじゃ？　なんかいつになくまともなことを言っておるが）

（ほ、本当ですわね。ひょ、ひょっとして今までお馬鹿のフリをしていただけなのでは？　『能ある鷹は爪を隠す』と申しますし）

（ふ～む武術の腕だけならそういうこともあるかもしれんが・・しかし、剣児じゃぞ？　奴の性格から言ってそんなこと本当にあると思うか？）

（いえ、自分で言ってて、それは流石にないな～って思っていました）

（じゃよな～。剣児じゃからな～）

頭を下げて顔が見えない状態でこそこそと内緒話をしていた姫子と瑞姫であったが、やがて自分達が出した結論に憂いを帯びた大きく深い溜息を吐きだす。するとその様子に気がついた剣児が、再び眦を吊り上げて二人に怒号を浴びせ、二人は一斉に身体を縮ませる。

「何をごちゃごちゃ話してやがる。おまえら全然反省してないだろ!?　連夜のことをこんなにしておいて、全く反省の色が見えねえ!!」

「「ご、ごめんなさい」」

「け、剣児くん、ちょっとヒートアップしすぎよ」

「そうだぜ、剣児、ちょっと落ち着けってば」

「剣児くんらしくありません。お友達が大事って気持ちはわかりますけど、姫子さん達も悪気があってしたことじゃないんですから」

激しい怒りを一向に鎮めようとしない剣児の姿に、たまらず彼のことを慕う三人の美少女達が割って入る。そして、口々に剣児に声をかけ彼の怒りを鎮めようとするのであったが、剣児は怒りを鎮めるどころか益々その怒りのボルテージをあげていってしまう。

「悪気がなかったら何をしてもいいっていうのかよ!?　そもそも、なんで連夜とフェイシンが恋人同士だなんて、とんでもない勘違いするんだよ!?　絶対納得できねぇ!!」

「だから、それについては本当に申し訳なかったと言ってるじゃろうが」

「いいや、謝ったからって終わりって問題じゃねぇ!!　よしいいか、ここではっきりさせておくぞ!!」

「何をはっきりさせるというのですの?　というか、兄上先程からいったい何をヒートアップされていらっしゃるのですか?　いくらなんでも怒り過ぎではございませんか?」

「これが怒らずにいられるかっていうんだ。いや、そんなことはどうでもいい。そんなことよりも、姫子、瑞姫、はるか、ミナホ、それに教室にいる他の連中もちょっと俺の話を聞いてくれ!!　まず連夜はフェイシンと恋人同士じゃない!!　二人がそういう関係じゃないってことは連夜の幼馴染で、フェイシンの宿敵である俺が一番よく知っている。だから、これを真に受けて変な噂を流さないでくれ、頼む!!」

真摯な表情で、しかし、物凄い威圧感を放ちながら剣児が周囲を見渡すと、それを聞いていた生徒達は怯えたように一斉にこくこくと頷きを返す。それを確認した後、剣児は尚も言葉を続ける。

「それから、姫子と瑞姫が少々はしゃぎまわっていたようだが、これも連夜と特別な関係にあるわけじゃない。二人とも連夜とは兄妹のように接しているだけで他意はない。そこも勘違いしないでやってくれこれだけひどいめにあわされておいて、さらに嫉妬に狂った姫子と瑞姫のファンクラブの連中に連夜が襲撃でもされたらかわいそうでみてられん」

一瞬剣児の言葉に反論しようと口を開きかけた姫子と瑞姫であったが、最後の下りで見事に撃沈。自分達も薄々そうなる可能性があると気がついていただけに余計にがっくりと落ち込んでしまう。そんな姫子達と対照的に、フェイに介抱されながら剣児の演説を聞いていた連夜はほっとした表情を浮かべて見せる。

なんせ、つい先程も姫子達にご執心という不良グループに襲撃されたばかりなのだ。ある程度はもう慣れてしまったが、それでもまたさらに敵が増えるというのは歓迎できない。

「ふ～む、物凄い女たらしで、普段いい加減で調子のいいことしか言わない奴が珍しくまともなこと言ってるな」

「あはは。でも、剣児にああ言ってもらえると助かるよ。ただでさえ、姫子ちゃん達のファンって全学年に存在していて、物凄い数がいるからなあ。不良達みたいに目に見えて敵対してくれると対処できるけど、いかにも敵ではないって顔して、隠れてこそこそやられると本当に始末に負えないもの。姫子ちゃん達や現生徒会長ほどじゃないけど、なんだかんだ言って剣児も結構な有名人だからね。その剣児がああ言ってくれるだけでも、僕と姫子ちゃん達がそういう

関係じゃないって、ある程度広まると思う」

「なるほど。馬鹿でも使い道はあるもんだな」

弱った連夜に手を貸してそっと椅子に座らせてやりながら、フェイは目の前に立つ宿敵の背中をなんともいえない複雑な表情で見つめる。いつもいつもふざけたことしか言わない宿敵の姿を見ている為、珍しくまともなことを言っているその姿が違和感ありありで戸惑ってしまっているのだ。

そんなフェイの複雑な視線に気がついているのかいないのかわからなかったが、ともかく剣児は今まで以上に熱の籠った大声で言葉を続ける。

「いいか、あと一つだけみんなに言っておくことがある。これが一番大事なことだから、頼むからよく聞いてくれ。連夜は、連夜はなぁ！！」

剣児はそこまで言った後、一旦言葉を切り、その熱い視線を見せつけるようにして周囲にいる『人』々を見つめて行く。姫子を、瑞姫を、はるかを、ミナホを、自分を慕う三人の美少女達を、教室のクラスメイト達を、そして、自分の宿敵であるフェイを見つめ、最後にきょとんとしている連夜に視線を移す。そして他の者達に向けていた以上の時間をかけて熱く連夜の姿を見つめた後、剣児は自分の心の内にひた隠しにしてきた熱い想いの全てを全力全開でぶちまけるように絶叫した。

「連夜は・・連夜は俺の嫁だあああああああっ！！」

心の底の底、一番奥にあるところから絞り出すようにして放たれた魂の絶叫が教室中に響き渡り、その声、その言葉を聞いた者達は

一瞬にして凍りつく。まるで伝説の魔王『メデューサ』の石化視線を浴びてしまったかのように、教室にいる者全てが絶叫を放った人物のほうを向いて固まってしまっていた。

連夜が、フェイが、姫子が、瑞姫が、はるかが、ミナホが、剣児を慕う三人の美少女達が、その他のクラスメイト達が、そして、午後の授業を始めようとちょうど教室に入って来ていた担任のティターニア教諭までもが、あまりにもくだらない、くだらなさすぎる、これ以上くだらないことはないというくらいの衝撃によって完全無欠に『埴輪（ハニワ）』になってしまっていた。

そんな教室の様子をなんとも言えない満足そうなドヤ顔で見渡した剣児は、後ろを振り返ると不機嫌そうにも見えるし照れている様にも見えるし、どこか嬉しそうにも見える。そんな表情を浮かべて連夜へと近づくと、そっとその手を両手で取って握りしめる。そして、ショックのあまり『埴輪（ハニワ）』になったまま立ち直れないでいる連夜に、気持ち悪いくらい優しく真摯な口調で語りかけるのであった。

「連夜。俺、絶対おまえを幸せにするからな」

目の前の幼馴染とはそこそこ長い付き合いがあるが、そんな連夜でも今まで一度として聞いたことがないくらい、真剣で誠実さのこもった声。いや、それは連夜ばかりではない。同じ一族内で付き合いのあるはるかやミナホも、生まれたときから一緒にいる実の兄姉妹である姫子や瑞姫も、剣児と恋愛関係にある三人の美少女達ですら、そんな声は一度として聞いたことがない、そんな声。

本人にすればこれ以上ないくらい真剣な気持ちから出た言葉なのであるが、それだけにその声、その気持ちは、その場でそれを聞いてしまった関係者全ての何かへと一斉に火をつける。『埴輪（ハニワ）』になって固まっていた一部の者達は己の内に宿った小さな火を起爆剤にして一瞬にして巨大な闘志の炎へと変化させると、その力を以て自身を縛る呪縛を打ち砕く。そして、ゆらりと身体を揺すりながらス

カートのポケットの中に手を突っ込むと、なんのために持っているのかわからない禍々しいカイザーナックルを取り出してそれぞれの利き腕の拳に装着。

ぶるぶると震える己の拳を確認した後、彼女達は示し合わせたかのような絶妙なタイミングで一斉に連夜と剣児の間合いへと踏み込む。これ以上ないくらいに無駄のない動き。流れるように優雅に、しかし、空を賭ける稲妻のようなスピードで、相手の懐へと飛び込んだ怒れる女神達は、地面そのものが踏みぬけるのではないかと思えるほどの力で最後の一歩を踏みこむ。そのときになって剣児は初めて自分自身に迫る危機に気がついた。目の前の少年に想いを告げることに必死でそれどころではなかったのだ。

剣児は、目をいっぱいに見開きながら自分に迫る女神達にフレンドリーな感じに声をかける。

「いま、忙しいから後にしてくれないかな?」

ブチッ。

いろいろと何かがキレる音が教室に鳴り響き、そして、最後の審判の時が訪れる。

『いっぺん死んでこ〜〜い!!』

「くぅぅぅぅるまだまさみぃぃぃぃぃぃぃっ!!」

姫子、瑞姫、はるか、ミナホ、剣児と恋愛関係にある三人の美少女達、そして、クラス担任のティターニアが渾身の一撃で放った見事なコンビネーションアッパーをまともに食らうことになった剣児は、意味不明の絶叫をあげながら仰け反るようにして宙を舞い、天井にぶち当たってバウンドした後、頭から床へと落ちる。

まさに必殺の一撃、誰が見ても倒せないものはないとわかる豪快無比のトドメ技。しかし、そんな技を食らってもまだ剣児は意識を失ってはいなかった。額からだらだらと出血しながらも、なめくじのように床をずりずりと這い、愛する少年へ手を伸ばす。

「お、俺、まだ連夜に自分の想いを全部伝えていない。だから、だから、俺、生きて帰ったら自分の想いを全部伝えるんだ。絶対生きて帰って俺が一番あいつを愛しているって、抱き締めて・・うぎゃあああっ！！」

どう聞いても死亡フラグにしか聞こえないうわ言を口にしながらずりずり床を進んでいく剣児の元に駆け寄ってきた女神達は、しぶとい剣児に容赦のないストンピング攻撃を仕掛けていく。

「え～い、まだ死なないのか。我らの即席合体究極コンビネーション奥義『大銀河天馬死鏡拳（ギャラクティカガサスデスミラージュ）』を受けてもまだ動けるとは、どれだけ耐久力が高いのじゃ、こやつわ、えいっえいっ！！」

「途中まで本当にいいこと言っていたのに、何が『連夜は俺の嫁だ』ですか、気色の悪い。宿難くんは男ですから兄上の嫁にはなりません。というか、今すぐ死んでくださいませ。そうすればお嫁さん必要ないですよね。このこのっ！！」

「ごめんやで剣児はん。本来王族に手をかけるのはご法度なんやけど、剣児はんがいると姫様達の御威光に傷がつくねん。せやから往生してや！！」

「私はどっちでもいいんですけど、姫様達が『殺れ、殺ってしまえ』って言うから、しょうがなく。でも、楽しいですね、これ。ていていっ！！」

「剣児くん、私達というものがありながら、どういうことなの!?
私達とのことは遊びだったってこと!?」

「剣児、もがいてないではっきりしやがれ!!」

「そうですそうです。床を転がりまわってないで、私達のこと本当はどう思っているのかちゃんと説明してください!!」

「みんなダメよ!!　えいっえいっ!!　どんな事情があるにしても喧嘩はよくないわ!!　このこのっ!!　みんな落ち着いて頂戴、先生悲しくなっちゃうわ!!　そろそろ、動かなくなったかな?」

姫子達と一緒になって容赦のないストンピング攻撃をしていたティターニアであったが、足もとの剣児が動かなくなってきたのを確認すると、両手を交差させてレフェリーストップの合図を出して攻撃をやめさせる。そして、襤褸雑巾のようになってぴくぴくと痙攣している剣児の姿を一瞬気持ち悪そうに見つめたあと、ティターニアはすぐにそれを誤魔化すように明るい笑顔を作ってぱんぱんと手を打ちながら教室にいる生徒達に声をかけるのだった。

「はいはい、お昼休みは終わりです。授業を始めますから、みなさん自分の席についてちょうだいね。そうそう、龍乃宮　剣児くんは邪魔だか・・ああいえ、このまま放置するわけにはいかないから、クロムウェルさん、ボナパルトさん、黄(ホワァン)さんの三人で保健室に連れていってくれるもらえるかしら?」

「「「了解しました!!」」」

「はいはい、じゃあ自分の席についた『人』は授業の準備をしてく

ださいね」

一番自分がヒートアップしていたにも関わらずしれっとした表情で、剣児を連行して教室から出て行く三人の教え子達の姿を見送ったティターニアは、手にはめていたトゲトゲつきのカイザーナックルを丁寧にハンカチで拭きながら自分自身も教壇へと戻ると、溜息を大きく一つ吐き出しながらさりげなくカイザーナックルをスカートのポケットの中にしまい込み、物凄く悲しそうな表情で生徒達を見渡して口を開く。

「みんな、授業を始める前にこれだけは言っておくけど、争いはいけないわ。力では何も解決できないのよ」

最初から最後までティターニアがしていたことをばっちり目撃していた生徒達は、ティターニアの言葉に一斉にドドッと椅子から転げ落ちる。一番最初に立ち直った瑞姫は、そんなティターニアのほうに視線を向けると、呆れ果てたという表情を浮かべながら鋭いツッコミを入れる。

「いや、その争いに先生自身が率先して参加していましたよね？しかも私達はトゲとかついていない拳を守るためのカイザーナックルだったけど、先生だけ攻撃用のトゲ付きカイザーナックル使ってましたよね？」

「何言ってるの、トゲ付きカイザーナックルは淑女のたしなみよ？」

「いや、そんな淑女いませんから！！　ってか、御姉様も先生の言葉に頷かないでくださいませ！！　御姉様、本当にこのクラスの委員長ですの！？」

「もう、龍乃宮さんは本当に細かいんだから。わかったわ、トゲじゃなくて今度はばっちり刃のついたカタールを用意しておくから。それでいいわね？」

「はい、それなら、問題ありません・・って、問題ありまくりでしょ！？　刃付けたらもっとダメじゃん！！　そんなので殴ったら死にますから！！」

「大丈夫じゃ、瑞姫。剣児ならその程度で死にはせん。というか、いっそ死んでくれれば・・」

「こわっ！！　御姉様こわいですわっ！！　本心駄々漏れしてますわっ、隠して隠して！！　って、先生も御姉様の言葉に頷かないでください！！　アルフヘイム先生本当に教師ですの！？」

「龍乃宮さん。いつまでも過去を引きずっていてはダメ。過去に悲しいことが起きてしまったかもしれない。でも『人』は忘れることができる動物だから、過ぎてしまったことは水に流して、明日に生きるのよ」

「そこだけ聞くとすごいいいこと言っているように聞こえますけど、誤魔化すためだけに今思いついたことを適当に言ってるだけですよね？」

「チッ・・さ、みんな。そろそろ授業始めるわよ」

「し、舌打ち！？　今、先生舌打ちしませんでした！？」

鋭いツッコミを続ける瑞姫のほうを一瞬忌々しげな表情を浮かべて見つめ、舌打ちをしたティターニアだったが、すぐに晴れやかな

笑顔を浮かべて他の生徒達を見渡しそそくさと授業を始めようとする。瑞姫はそんなティターニアに尚も言い募ろうとしたが、前の席に座る姫子が振り返ってその肩を掴んで止め、何かを悟ったような表情で首を横に振ってみせる。

周囲を見渡すと、姫子だけでなく、はるかやミナホ、それに他の生徒達までもが同じように何かを悟ったような表情を浮かべて瑞姫を見つめ、首を横に振って見せる。それを見ていた瑞姫は、怒ったような表情で口を開きかけたが、結局溜息を大きく一つ吐き出して口を閉じると、どこか悔しげな表情でノートと教科書を広げるのであった。

そのやりとりを少し離れたところにある自分達の席で見守っていた連夜とフェイは、同時に顔を見合せてなんとも言えない苦笑を浮かべる。

「やれやれ、君の周りは本当に騒がしいな。敵でも味方でも全然油断できない、それどころか生徒ばかりか中立と思われる教師までがあれでは油断する暇もないじゃないか」

「まあ、おかげで鍛えられているよ。社会に出ればもっといろいろなものがグレーになっていくと思うしね。今日味方だったものが明日には敵、そうかと思えば今日敵だったものが明日には味方なんてザラにある。白から黒に変わったと思うと、今度は黒から白へ、くるくるくるくるめまぐるしく変わる。そのめまぐるしさに誤魔化されそうになるけど、結局ほとんどのものはそのどちらでもないグレーだ。みんなそれぞれに立場があるし、考え方もいろいろある。仕方ないさ」

何かを諦めたような寂しそうな笑顔を浮かべて呟く連夜の顔をしばらく黙ってじっと見つめていたフェイであったが、ずいっと顔を近づけると、固い決意をその真紅の瞳に浮かべて連夜の黒い瞳を覗

き込む。

「言っておくが、ボクは変わらない。変わりようがない。昔も、今も、そしてこれからも」

「そうだね。知ってる」

「そして、君も変わらない、嫌になるくらい昔と全く同じだ。。多分、ずっとこれからもそのままなんだろうな」

「そうだね。それも知ってる」

一瞬真剣な表情で睨み合った二人だったが、やがてどちらともなくニヤリと不敵な笑みを浮かべてみせ、その拳をぶつけあう。そして、今度は連夜がフェイのほうに顔を近づけてきて、二人にしか聞こえないほどの小さな声で語りかける。

「放課後、フェイに僕の『友達』を紹介するよ。といっても、全部で四人にしかいないうえに今日は半分の二人しか来ていないんだけどね」

連夜の口から出た意外な提案に目を丸くするフェイだったが、すぐにいたずらっぽい笑顔を浮かべて頷きを返す。

「どうせ君やボクと同じような頑固者なんだろ？　楽しみだ」

「下手すると僕や君よりも頑固一徹かもね」

第五話　『心友と戦友と』　その3

「俺を殺してくれ」

すべてが終わった時、妖精は横に立つ一匹の雌狼にポツリと呟いた。

「やっと終わった。やっと討ち取ったよ。これで心おきなくゆっくりと眠れる。」

満身創痍のボロボロの体。

身に纏う黒い戦闘用コートはほとんど襤褸切れと化していてその用をなしておらず、その下に着用している白いレザーアーマーにはあちこちに何かの獣の爪痕と見られる物がいくつも走って血で出来た紅の線をいくつも作っていた。

コートやアーマーから見えている腕や首、顔など地肌の見える部分で傷がないところは一つもなく、それどころか左腕と右足は肘と膝から先がなくなってしまっている。

幸か不幸か、妖精の両手両足は義肢であったため、斬り落とされていてもそれが致命傷になることはないのだが、それでもひどい状態であるのは間違いなかった。

そんな状態で力なく地面にその身を横たえた妖精は、首を横にまわして自分が、いや、自分達が成し遂げた復讐の成果をぼんやりと見つめる。

小さな妖精の視線の先にあるのは巨大な一匹の獣の亡骸。

五百年前、驕れる浮かれる『人』類に裁きの鉄鎚を下すために、『世界』そのものがこの世に解き放った断罪者『害獣』達の中の一匹。

どこかの巨大神殿を支えている支柱のごとき大きな八本の足を持

つ、サイのような姿をした化け物。
二十メトルを越える巨体を存分に駆使して近隣の村や都市を襲い、あまたの災厄をこの世に振り撒き続けてきた呪われし生き物。
このバケモノに奪われた命は数知れぬ。
平和に暮らしていた一般の人々は勿論、彼らを守ろうとした村や都市の守備兵達も、このバケモノを討伐しようとした腕利きの傭兵達も。
その中には妖精の両親や、妹、友達がいた。
優しかった両親、おとなしくてかわいかった妹、いたずら好きだった友達。
『害獣』は妖精の大事な全てのものを呑み込んで破壊した。
許せなかった、許すわけにはいかなかった、そして、許されてはいけなかった。
例えどんな理由があったとしても、例え相手にどれだけ正当性があったとしても。
だからこそ妖精は復讐の刃を握った。
一方的に虐殺されてしまった一族の無念を晴らすために、自分と同じように嘆き苦しみ続ける生を歩まねばならない者達をこれ以上増やさせないために。
そして、妖精はついに、復讐を果たしたのだ。
長い長い旅路の果てに。
右腕を失い、左腕を失い、右足を失い、左足を失い、両腕両足が全て義肢に変わり果てても、妖精は決して諦めずに仇を追い続け、そして、宿願を果たした。
倒すことは絶対に不可能、ただ、通り過ぎるのをただただ黙って見送るしかないと言われた不可侵の相手を、妖精はかけがえのない戦友達の手を借りてついに討ち取ったのだ。
長い長い、途中何度も逃げ出したくなるほど辛く厳しく悲しい激闘の果てに・・

「疲れた・・本当に疲れた。もういい、何もかも本当にもういい、もう十分だ。これで胸を張って父さんや、母さん、妹や友達がいる場所にいける」

両の目から熱い涙をはらはらと流して仇敵の亡骸を見つめながら、妖精は隣に立つ彼の最大の理解者である雌狼に語りかける。

六つの時に目の前で一族郎党を皆殺しにされ、たった一人生き残ってから十年。

いつの日か必ず仇をとる、いやとって見せると心に誓い、ずっとその『害獣』と戦うために牙を研ぎ続けてきた。

自分に宿る闘志は果てない。

そうずっと思い戦ってきた妖精。

しかし、思いを遂げた今、もうその闘志は必要ない。

いや、それどころか残りの人生すら必要とは思えなかった。

自分はこの日の為に生きてきたのだ。

絶対に自分は誰にも傷つけられない、誰にも倒されるはずはないと思い、本能のままに暴虐の限りを尽くすあの畜生の首筋にこの牙を突きたてるために。

奴に無残に殺された人々の悲しみと、憎しみと、そして、怒りのありったけをその牙にのせ、奴の喉笛をかっきるために。

そして、それは見事に果たされた。

もう二度と、この暴虐の徒が眼を覚ましてこれ以上の悪夢を作り出すことはない。

少なくとも目の前で地獄に落ちたこの畜生の手によって妖精と同じ想いをする者は出ることはないのだ。

復讐は果たされた、そして、妖精がこの世に留まり続ける理由もなくなった。

血にまみれ、屈辱にまみれ、過去の怨念と憎悪をその身に宿らせて生き続ける必要はもうない。

ただただ眠りたかった、厳しいけれど優しかった父や、穏やかで

美しかった母や、かわいい妹や、一緒に森を駆け巡った友のいる場所に自分もいきたかった。

「頼む、もう眠らせてくれ。できればおまえの手で俺を両親や、妹や友のいる場所に送ってほしい」

妖精は自分が最も心を許している雌狼に嘆願する。

彼が最も信頼しているのは復讐を手伝ってくれた黒髪の人間の少年だったが、その心を許し愛しているのは目の前に立つ美しい白銀の獣毛の雌狼だった。

『人』型の種族である妖精族の彼とは違い、雌狼は『獣』の姿形をした全く違う種族。

復讐に固執し、血と泥にまみれ闇の中を這いずりまわる彼とは違う。

彼女が属する狼獣人族の中にあっても一際大きく強く、そして美しく輝く次代の『巫女』。

弱きものに優しく、強きものに厳しく、高潔な精神を持つ生き物。

そんな彼女に妖精はいくどとなくその命を助けられ、いくどなくその心を救われてきた。

ここまで来ることができたのは彼女のおかげと言っても過言ではない。

どれだけ彼が断っても彼女は頑としてそれを聞かず、彼について彼を助けてくれた。

両手、両足を『害獣』に食われた時、彼が死なずにすんだのは常に彼の側に彼女がいてくれたから。

一族を失い、行き場を失った彼を引き取ってくれたのは、名のある狼獣人族の戦士の夫婦。

その夫婦の一人娘が彼女だった。

彼女は、自分達とは全く違う種族の集落で暮らすことになり、そ

の生活習慣になかなか慣れることができず戸惑い続ける妖精になにくれとなく世話を焼き、支えてくれた。
いやそればかりではない、成長した彼が復讐の為に旅に出ようとこっそりと狼獣人達の集落をあとにしたとき、何も言わずに一緒についてきてくれたのだ。
もちろん、彼の復讐を手伝うためだった。
以来、ずっと彼女は影になり日向になって彼を支え続けてくれている。

だが、もういいのだ。もう一緒についてくる必要はない。
彼女は自分の一族の元に帰り、自分は一族の者達が待つ天へと還る。
それでいい。いや、それがいい。

そう思って妖精は横に立つ愛しい雌狼に視線を向けるが、雌狼はどこか怒ったような、それでいて呆れて果てているような視線でこちらを見続けており、むっつりと口を閉じて開こうとしない。
妖精は自分の願いが叶えられそうにないことを悟ると、大きく一つ溜息を吐き出す。

「それが無理ならこのまま俺を放置しておいてくれ。見ての通りのこの傷だ、放っておいてくれれば失血でいずれ死ぬ。おまえは、連夜達と一緒に『嶺斬泊』にもどれ。そして、『巫女』としての務めを果たせ。今日まで頼りない俺を支えてくれてありがとうな、アルテミス。おまえは弱い奴を放っておけない性格だ、だから今日まで俺についてきてくれたんだろ？　でももういいんだ。もう俺を助ける必要も支えてくれる必要もない。今まで本当にありがとうアルテミス」

万感の思いを込めて自分の想いを口にする妖精。

そんな妖精の姿をなんとも言えない表情でじっと見つめていた雌狼であったが、ふと別の視線を感じそちらに顔を向け直す。
すると、二人からちょっと離れた場所に黒髪黒目の同じくらいの年齢の人間族の少年が立っているのが見えた。
少年は雌狼と同じように、怒ったような、それでいて呆れたような表情で地面に横たわる妖精の姿を見つめ続けている。

「連夜、このバカチン、こんなこと言ってるんだけど」

本当に呆れ果てたというような口調で雌狼が人間の少年に話しかけると、人間の少年はさもありなんと深く頷いてみせる。

「究極のバカだね。馬鹿すぎて何も言えないんだけど」

「どうしたらいいと思う？」

「いや、どうしたらも何も、さっき『殺してくれ』ってアルテミスに言ったよね、そこの大バカ者くんは」

「うん、言った。それで困ってる」

「なんで？　困る必要ないじゃない」

心底困るという表情で雌狼が溜息を吐きだすのを、逆に少年は不思議そうに見つめて問いかける。

「まさかと思うけど、望みどおり殺してやれっていうんじゃないでしょうね？」

「いいや、そのまさかだよ。望みどおり殺してやれば」

「連夜！！」

あっさりと非情な言葉を吐きだす人間の少年に、雌狼は本気で激昂してその獣毛を逆立てる。

しかし、人間の少年はそれに全く動じることなく、むしろ無邪気な笑顔を浮かべてみせると、お気楽そうに片手をひらひらとさせて言葉を紡ぐのだった。

「いいじゃない、殺してやれば。『害獣』に滅ぼされた深緑森妖精族最後の生き残りで、怨念の結晶であるクリス・クリストル・クリサリス・クロスロードを殺してやればいい。というか、彼を殺せるのはアルテミスだけだと思うよ。クリス・クリストル・クリサリス・クロスロードを殺して、本当の意味でクリス・クリストル・クリサリス・ヨルムンガルドに新生してあげられるのはね」

人間の少年が語る言葉をしばらくの間ぽか～んとして聞いていた雌狼であったが、その言葉の意味を正確に把握すると一瞬にしてその怒りを鎮静化させる。

そして、その白銀の顔を羞恥で真っ赤に染めるとモジモジしながら、その視線を人間の少年と妖精の間でいったりきたりさせる。

「あ、あの、それってつまり、その」

「別に今すぐってことじゃないよ。クリスだって、仇を討つのに何年もかかったんだ。アルテミスも焦ることなく時間をかけて殺してやれば・・」

「そんなの待っていられない。今すぐ殺す」

「え？」

何かを悟りきったような表情で語りかけてくる人間の少年の言葉をバッサリと途中で打ち切った雌狼は、妙に何かを覚悟したような表情になって地面に横たわってぐったりしている小柄な妖精の少年の身体を横抱きにしてひょいと持ち上げる。

「え？　え！　ちょ、ちょっと待ってアルテミス。あのね、落ち着いて聞いてほしいんだけど、僕は別に今すぐどうこうということを言おうとしたんじゃなくてね・・」

雌狼が何をしようとしているのかいち早く気がついた人間族の少年は、慌てて雌狼のほうに駆け寄ってその行動を止めようとするが、雌狼は妙に血走った視線で人間の少年をギラリと睨みつけて威嚇する。

「私は十分待った。うちにクリスが引き取られて来てから十年。ずっとずっと私は待った。クリスの復讐が終わるのを、クリスの中に凝り固まっているいろいろな何かが終わるのをずっと待っていた。だから・・もはや問答無用！！」

「いや、問答無用すぎるから！！　ってか、決断はやっ！！　僕らまだ未成年だから、もうちょっと落ち着いて考えてよ、お願いだから！！」

「大丈夫。『嶺斬泊』の都市条例で女の子が結婚できる年齢は十六歳だけど、うちの部族の掟では十三歳以上で結婚可だから」

「いやいや、そういうことじゃなくてね・・って、なにこの手？」

妖精族の少年を片手で横抱きにした状態で、大きな手を人間族の少年のほうに差し出してくる雌狼。大きな掌にあるピンク色の肉球を見て気持ちよさそうだなあ、なんて暢気なことを思っている人間族の少年に、ずいずいと掌を押しだして催促を繰り返す。

「『回復薬』ちょうだい」

「『回復薬』って・・本気なのね」

「私はいつでも本気。何かあったら困るからクリスが受けている傷を最低限は回復しておきたい」

「ああ、そう」

相変わらずギラギラと血走った目で見つめてくる雌狼の姿を見て、やたらぐったりと疲れ果ててしまった人間族の少年は、もそもそとコートの内ポケットを探って緑色の液体が入った瓶を取り出して渡す。

「確かに煽った僕が悪いんだけどさあ、もう一度考え直さない？いや、個人的には大賛成なんだけど、いろいろと世間体というか、アルテミスのご両親に申し訳がたたないというか」

「もう決めたことだから。それに両親には集落を飛び出すときに『クリスと生きていくから』って言ってある」

「あ～、そうですか・・」

こりゃもう無理だなと、さらに肩を落とす人間の少年に、追い討ちをかけるように妖精族の少年が全然見当違いなことを口にする。

「止めないでくれ、連夜。アルテミスが決意してくれたことだ。今回のこと、本当に世話になったな、連夜。これだけ大きな借りを作っちまったというのに何一つ返せないままというのは本当に心苦しいが、今生ではこれでお別れだ。天界にある戦士（ヴァルハラ）たちの楽園からおまえのことを見守っているからな」

「いやいやいや、クリス、何言ってるの!?　君、本当に戦闘以外のことに関しては鈍いね、鈍チンだね!!　自分が今から何されようとしているか全然気がついてないよね!?」

「え？　一応トドメを刺されるために連れていかれるんだよな？」

「いや、うん、まあ、そうね。男としてトドメを刺されちゃうよね。多分。ってか、もう知らんわ、好きにしてよ」

完全に説得を諦めた人間の少年は、妖精族の少年と雌狼が森の奥に消えていくのをなんとも言えない表情で見送り、溜息を大きく一つ吐き出す。

そして、二人が消えた方に背を向けた人間族の少年は、巨大『害獣』との戦闘の後始末のためにこちらに仲間達がやってこようとしていることを気がついて慌てて大声を張り上げるのだった。

「みんな、しばらくこっちに来ちゃダメ～～ッ!!　こっちから先は立ち入り禁止!!　絶対禁止!!　もどってもどって!!　って、あ～、もうもう、なんで僕がこんなことしなきゃいけないのさあああああっ!!」

そして、そのときから一年と数カ月後の時が流れ、舞台は『害獣』との死闘を演じた『不死の森』からすぐ近くにある城砦都市『嶺斬泊』内部に移る。

都市内東エリアの西の片隅にある都市立御稜高校の第三校舎の屋上。

そこにある給水塔の上に胡坐をかいて坐った朱雀族の少年フェイは、黒髪黒眼の人間族の幼馴染が語る一大冒険譚を手に汗を握って一心に聞き続けていたが、やがてその話が終わると同時に一気に力を抜いて息を吐きだした。

「そうか、一年前にあったあの『貴族』クラスの『害獣』討伐にはそんな経緯があったのか」

「うん、あれは一人の妖精族の少年の復讐の物語であり、同時にそんな彼に心を奪われた一人の狼獣人族の少女の愛の物語だったんだ」

「・・ちょ、待ておまえら」

遠くを見つめながら感慨深げに呟く連夜のほうを見詰めたフェイは、何度も深く頷きを返す。

途中、横からなんだか物凄い羞恥心でいっぱいの第三者の声が聞こえてくるような気がしたが、二人はあえてそれを黙殺して話を進める。

「なるほど～。いや、新聞や雑誌やテレビで討伐されたことそのものは大々的に報道されてはいたが、その内容は傭兵集団の『暁の旅団』がいかに活躍したかとか、近隣諸都市に住む狼獣人族が全員一丸になって加勢したとか、あるいは害獣にトドメを刺したっていう最強剣士『天剣絶刀獅皇帝（てんがあたえしまもりがたな）』の話とかばかりだったからなあ。まさかそんな深い話があったとは夢にも思わなかったよ。ましてや、連夜がそれに参加していて、しかも、討伐の要になったそのカップルと知り合いだったとはなあ」

「どうしてもほっとくことができなかったんだ。二人ともさ、滅茶苦茶不器用でさ。なんかもういろいろと意地になっちゃって、最後のほうなんかほとんどやけくそ気味だったからねえ。さっさと素直になればいいのに、男のほうは男のほうで、自分だけが幸せになるのは亡くなった一族のみんなに申し訳ないとか、男の意地がどうとか言ってるし、彼女のほうはせめて無事復讐を果たすそのときまで、自分の気持ちは封印してとかいじらしいこと言ってるし。特に彼女のほうなんてほんとにかわいそうなんだよ。あれだけモーションかけているのに、俺のことは忘れて幸せになってくれとかトンチンカンなこと言われちゃってさ。そういうつもりならさっさと見限ってるつ～の。なのにさ、一生懸命男に尽くすわけよ。いつ命を落とすかわからない危険な『外区』についていってだよ、男の為に食事作ってあげたりとか、洗濯してあげたりとか。もう、かわいそうでかわいそうで」

「なんか、報われない話だなあ」

「・・あ、あの、連夜？　もしもし？」

熱く語る連夜の言葉に、激しく同意して頷きながらもらい泣きな

んかしちゃったりしているフェイ。
　途中、横からなんだか物凄いいたたまれない様子の第三者の声が聞こえてきているような気がしたが、二人はやっぱりそれを黙殺して話を進める。

「でもさ、ついに『害獣』を倒して復讐を果たしたそのときに二人はようやく結ばれたわけよ。あのときは本当に感動したなあ」

「うんうん。連夜はそんな二人をずっと見守ってきたんだもんな。ところで連夜、肝心の森の中で何があったのかのところを話してもらってないんだが」

「え～、そこのところは秘密なんだけどなあ。しょうがないなぁ。フェイは心友だから特別だよ？　二人には僕が話したってことは内緒にしてね。てへっ」

「「『てへっ』じゃないわ！！　いい加減にしろっ！！」」

　フェイの求めに応じて、連夜がとんでもない話を口にしようとしたそのとき、とうとうそれに耐えかねた二人が怒りの絶叫をあげる。

「あれ？　クリスとアルテミスいたの？」

「いたのじゃね～～わっ！！　最初からいたわっ！！　人が昼寝している横でとんでもねぇ話を始めやがって！！」

「わ、私、恥ずかしくて死にそうだった」

「ごめんごめん、わざとじゃないよ、わざとじゃ」

「「うそつけっ！！」」

無邪気な笑みを浮かべながら頭をかいてみせる連夜に詰め寄る男女のカップル。

それは、連夜が今語った話に出てきた妖精族の少年クリスと、狼獣人族の少女アルテミス本人達であった。

第五話　『心友と戦友と』　その４

爽やかで気持のいい緩やかな風が吹き抜けていく学校の屋上にある給水塔の上。
円形になった屋根の部分に向かい合って車座に座る四人の生徒達の姿がある。
放課後になるまであとわずかと迫った平日の午後の一時。
彼らの眼下に見える運動場では、この日最後の体育の授業が行われている風景が見えていたりする。
しかし、今のところ彼らはそちらには全然興味を示していない。
彼らが今、興味をもって注目しているのは、相対して座っている自分以外の者達。
特に四人中三人は、ある一人の人物に視線を向けていた。
黒髪黒眼の人間族の少年。
彼らの共通の友人である宿難（すくな）　連夜（れんや）に。

「二人ともとりあえず落ち着きなよ。ほら、ニョロリチョコあげるから」

自分以外の三人、特に寄り添って座る妖精族の少年と狼獣人族の少女のカップルから並々ならぬ強い視線で見つめられた連夜は、頭をかきながらズボンのポケットに手を伸ばすと、その中から一口サイズのチョコレートを取り出して、そっと二個ずつ二人に握らせる。

「わ～い、ありがと～。って、小学生じゃあるまいし、こんなもんで誤魔化される奴がいるかあっ！！」

「もぐもぐ、チョコレート大好き。クリス、いらないなら、私にちょうだい」

「すぐ側にいたわぁっ！！」

ちっちゃなチョコレート一個で完全に誤魔化されている恋人の姿を見て、膝をついてがっくりと項垂れる妖精族の少年クリス。

「よかったら、『チョッキー』もあるし、『マッシュルームの丘』や『ピットハット』もあるよ」

「わ～い、ちょうだいちょうだい」

「ちょっ、おまっ、アルテミス！！」

「ちょこれーといっぱいで幸せ～」

「も、もういいわ」

連夜のスラックスのポケットから次から次へと出てくる様々な種類のチョコレート菓子を受け取った狼獣人族の少女アルテミスは、幸せいっぱいという表情でそれらの封を開けると、大きな口に放り込んでバリバリむしゃむしゃと食べ始める。

普段は必要以上に大人びて物静か、冷静沈着で何があっても動じない、昔の野武士のような性格の白銀の美狼。

しかし、そんな頼れる相棒にして最愛の恋人にもいくつか弱点がある。

その中の一つが、甘いお菓子だ。

そう白銀の美狼はスィーツが大好物、中でもチョコレートは大好物中の大好物であり、これを使ったスィーツが絡むと途端にどこにでもいる普通の女の子にもどってしまう。

クリスにしてみれば頭の痛いところであるのだが、これまで自分

が彼女にかけてきた苦労を思い返すとあまり強くも言えず、苦虫を噛み潰したような表情で嘆息すると、肩を落としながら小さく呟くのだった。

「また太っても知らんし、ダイエットにも付き合わないからな」

「太らないもん。ちゃんと運動してるから大丈夫だもん」

「ぜって～、あとで体重増えたって大騒ぎするくせに。あ～、もう、なんだその口は。チョコレートで真っ黒じゃないか。食べるなとは言わないからもっと奇麗に食べろよなあ」

にこにこと満面の笑顔でチョコレートを頬張る恋人の顔をしばらくの間どうしようもないという風に見つめていたクリスだったが、やがてもう一つ嘆息すると、ポケットから奇麗なハンカチを取り出してチョコレートまみれになってしまったその口の周りを優しく拭いてやる。

そんな最愛の恋人の優しい気遣いにしばらく成すがままになっていたアルテミスであったが、やがて感極まったように小さなクリスの身体を引き寄せて抱きしめる。

そして、自分の腕の中にある小さな顔を嬉しそうにぺろぺろと盛大に舐めまくるのだった。

「えへへ、ありがと、クリス。大好き」

「ちょっ、アルテミスやめろって、そのチョコレートまみれの舌で俺の顔をなめるんじゃない」

「相変わらず仲がいいねえ、二人とも。うちの両親に匹敵するバカップルぶりだよ」

呆れたような、しかし、どこか嬉しそうな表情でしばらく二人のことを見詰め続ける連夜。その瞳は目の前の二人の恋人達の姿を映していながら、同時に過去の何かを映しているようでもあったが、やがて、二つほど頭を振って表情を改めると、横に立って自分のことを黙って見守ってくれている頼れる友人の方へ視線を移し直す。

「さて、冗談はこれくらいにしておいて、そろそろ本題に入ろうか。ごめんね、フェイ、待たせちゃって」

「いや、構わないさ。久々にいろいろと面白かったしな」

「あはは、そりゃよかった。お～い、クリスとアルテミス。仲がいいのは大変結構だけどさ、そろそろこっちに注意を向けてくれないかな」

連夜がパンパンと両手を何度か合わせ乾いた音を響かせ、それに気がついたクリスとアルテミスが顔を連夜達のほうへ改めて向ける。

「注意を向けてくれも何も、おまえのせいでこうなってるんだろうが。だいたいなんで、人の恥ずかしい過去をべらべらとしゃべっているんだよ」

「だって、久々に会いに来てみれば、二人して給水塔の上で仲良くぐ～ぐ～寝ているんだもん。起こすのもかわいそうだし、だからといってぼ～っとしてても暇だから、君達のことをフェイに先に説明しておこうかなと思って」

「いや、もうちょっと他になにかあるだろうが！！　よりによって一番恥ずかしくて人に聞かれたくない話をおまえ。ってか、そもそ

もそっちの奴はいったい誰だよ？」

怪訝そうな表情で連夜の横に立つ朱雀族の少年フェイを見つめるクリス。

そのクリスの言葉に得たりとばかりに連夜は頷きを返す。

「そうそう、そのことなんだよ。今日はフェイを君達に会わせたくて来たんだよね。改めて紹介するね、フェイ。一年前、僕と一緒に死地を潜り抜けた戦友のクリス・クリストル・クリサリス・ヨルムンガルドと、その恋人で今年九月にクリスと結婚する予定になっているアルテミス・ヨルムンガルド。二人のご両親であるロボ・ヨルムンガルドさんとブランカ・ヨルムンガルドさんは『外区』でのサバイバル術の僕の師匠でね。その関係でクリスやアルテミスとも知り合ったんだ。クリス、アルテミス、こっちは僕の小学校時代の友達の陸（ルー）　緋星（フェイシン）」

「陸（ルー）　緋星（フェイシン）だ、よろしくな。ボクのことはフェイと呼んでくれ」

連夜の紹介の後、かすかに微笑みながら左手を差し出すフェイ。

しかし、クリスとアルテミスは、ぽかんと口を開けたままでその握手に応じようとはせず、何か信じられないものを見るかのように連夜とフェイを交互に視線を移動させ続ける。

「あ、あのさ、クリスもアルテミスも。フェイはきちんと挨拶しているのに、スルーって。それはないんじゃないの？」

なんともいえない気まずい表情で連夜が二人に注意するが、それでも当事者達はまだ握手に応じようとせず、視線を連夜とフェイに交互にいったりきたりとさせていたが、やがてアルテミスのほうが先に我に返って連夜に問いかける。

「あ、あの、連夜」

「ん、何？」

「い、今その子のことを『友達』って言った？」

「うん、言ったけど」

「「えっ、えええええええっ！？」」

狼獣人族の少女が恐る恐る口を開いて問いかけてくるのに対し、あっさりと首を縦に振ってこたえる連夜。

その返事を聞いたクリスとアルテミスは、まるでありえない答えを聞いたかのような悲鳴をあげるのだった。

「き、聞いた、クリス！？　連夜、今『友達』って言ったわよね！？」

「あ、ああ、聞いた。ってか、一瞬聞き間違いかと思った」

「何回か話には聞いたことあるじゃない、ほら、『通転核』にいたときに地元の不良を相手にして、一緒に暴れまわっていたことがある二人の『真友』の話とか」

「うんうん、あと、ちっちゃいときに、連夜が迫害対象の人間族だってことがわかっても何も変わらないまま『友達』でいてくれた二人の『心友』の話とかな」

「いや、二人とも驚きすぎじゃない？」

「「全然驚きすぎじゃないわっ！！」

「うわっ！！」

呆れたように口を開く連夜に対し、クリスとアルテミスは物凄い真剣な表情で反論し、そのあまりの激しい剣幕に連夜は思わずのけ反って給水塔から落ちそうになる。

しかし、その様子を黙って横で見つめていたフェイがすぐに反応して連夜の身体を支え事なきを得たが、流石の連夜もちょっと焦ったようで、大きく胸を上下させながら非難の目を二人に向けるのだった。

「あぶな～、あやうく給水塔から落ちるところだったよ。フェイ、ありがとね」

「気にするな。君を守るのはボクの役目だからな。これくらい当然だ」

「えへへ、ありがとね。それにしても、二人とも大袈裟すぎるって」

危ないところを助けてくれた赤毛の少年に嬉しそうにぺこりと頭を下げたあと、連夜は顔をしかめてクリスとアルテミスのほうに向きなおる。

しかし、二人は困惑した表情を浮かべたままで、やはり連夜とフェイの顔へと交互に視線をいったりきたりさせ続けている。

「いや、今のに関しては謝るが、俺達が驚いていることに関しては全然大袈裟でもなんでもねぇぞ。な、アルテミス」

「え、ええ、本当にそうよ。だって、私もクリスも、あなたから『友達』を紹介されたことなんてただの一度もないのよ？」

「な～に言ってるのさ。そんなことあるわけが、あれ？　あれあれ？　そうだっけ？」

二人の言葉を笑い飛ばそうとした連夜であったが、自分でも思い当たるところがあるのか、両腕を組んで首をひねり始める。

「この学校におまえの『通転核』時代のダチが一人いることは知っているけどよ。未だに会ったことねぇしな」

「いや、紹介したくないわけじゃないんだよ。ボクだって二人を会わせたいけどさ、会わせようとしたときに限ってどちらかがいないだもん。ロムは『外区』の仕事、クリスは実家の手伝いで、学校サボってばかりなんだもんなあ。今日は、一応、クリスが唯一まともに授業を受けている『工術』の授業がある日だから絶対学校に来てるってわかってはいたけどさ、いざ教室に行ってみたら案の定いないし。クラスの人達に聞いたら『工術』の授業が終わったあと姿を消したっていうから、帰っちゃったんじゃないかって焦ったよ」

「だってさ、一般教養の授業はかったり～じゃん。数学とか全然わかんねぇもん。それに俺、大学行く気ないし。高校卒業したら親父の跡を継ぐつもりだから、卒業できる程度に単位取れればいいよ」

「その気持ちはわかるけどさ。僕もそれに近いスタンスでいるから、『人』のこと言えないんだけど。この学校で教えてくれている授業内容のほとんどって、僕もクリスも他の師匠のところで既に学んでいる内容ばっかりだもんね」

「だろ～？　聞いているのがあほらしくてさ～。まあ『工術』はさ、この都市でも屈指の名工の一人である万理・ラオム先生が教えてくれるから、真面目に出てるけど、ほかの授業はなあ。ラオム先生以外でまともに聞けるような内容の授業をやってるといえば、図書館の主エンキ・ドード卿、おまえのクラス担任のティターニア・アルフヘイム嬢、特別体育で『護術』の応用の仕方を教えてくれているヘイムダル・ミッドガルド氏くらいか。他のは、あのアホ教頭の息のかかった教職免許もってるだけの木偶ばっかだろ？　もうやってられないからすぐに帰ろうと思ったけどさ、すぐに帰ると授業さぼってることが親父たちにバレて大目玉くらっちまう。しょうがないから放課後まで寝てようと思ってここにフケてきていたんだよ」

「うん、まあそうかなと思って教室に行ったあとすぐにこっちに来たんだけどね。そしたら、見つかったのはよかったけどアルテミスと抱き合って仲良く寝てるんだもん」

なんとも言えない呆れ果てたと言わんばかりの口調、しかし、その表情、視線は口調とは裏腹にひどく優しいもので、その視線を受けたクリスとアルテミスは真赤になった顔を急いで背ける。

「お、大きなお世話だっつ～の」

照れ隠しのつもりなのだろうか、ぶっきらぼうな口調で連夜に言い放つ妖精族の少年だったが、そんな彼を奇麗に無視して連夜は隣に座る狼獣人族の少女に問いかける。

「よかったね、アルテミス。今、幸せかい？　クリスは優しくしてくれてる？」

「うん、ありがとう連夜。とっても幸せよ。昨日も寝る前にクリス

がね」

「うあああああっ、ちょっ、待て待て待て、アルテミス、余計なこと言うなってば！！　そ、それよりも、連夜の『友達』の話だろ」

連夜の話の流れで物凄いプライベートな内容を口にしようとした白銀の獣毛の恋人に組みついたクリスは、大慌てで話を元に戻そうとする。

抱きついてきたクリスの小さなを身体をやんわりと受け止めながら、きょとんとした表情で腕の中の恋人の顔を見返したアルテミスだったが、すぐに話が脱線していたことに気がついて、クリスの言葉に大きく首肯する。

「あ、ああ、そうだわ、そうだったわね。連夜、本当にその朱雀族の子はあなたのお『友達』なの」

「そそ、さっき二人も言っていたじゃない。小学校の頃に僕と仲良くしてくれていた『友達』が二人いたって。そのうちの一人がフェイなんだ」

連夜の言葉を聞いた二人は、何かを納得したような表情で顔を見合せて頷きあうと、フェイのほうに同時に視線を向ける。

「そうか、そういうことか。おまえさんがそうだったのか。だったら連夜が『友達』っていうのもわかる」

「連夜から話は聞いているわ。私達の大事な義兄弟と仲良くしてくれて本当にありがとう」

「大袈裟だな。そもそも子供の頃の話だし、つい最近まで、ボクは

連夜が幼き頃に一緒に遊んだ友だと気づかなかったんだ。そんな言葉をかけてもらえるような立場じゃない」

お世辞ではない、心からとわかる二人の言葉に、思わず赤面しながらぶんぶんと首を横に振ってみせるフェイ。

しかし、そんなフェイの態度に二人はますますその微笑みを深めて言葉を紡ぐ。

「おまえは知らないかもしれないが、連夜は誰かを紹介するにあたって軽はずみに『友達』という言葉を使わない。『知り合い』、『幼馴染』、『クラスメイト』、まあ、大概はどれかで、呼び方はいろいろとあるけどどれも似たようなもの。いずれも連夜の中ではそれらの存在は軽い。だが、『友達』だけは違う。それは連夜にとって『友達』という存在が、『家族』や『兄弟姉妹』同様に特別な絆と縁を感じる大事なものだからだ」

そう言った後、クリスとアルテミスはその場に立ちあがり、眼下の運動場で体育の授業を行っている生徒達のほうに視線を向ける。

「見ろよ、この学校で勉学する生徒達の姿を。たった一クラスだけでも、二十種類以上もの種族の者達が同じ場所で日々を暮らしている。だけどよ、これだけの数の種族の者達がいるっていうのに、『人間』っていう種族を差別しない種族は本当に少ないんだ。『人間』と同じ立場にある下級種族の者達の中にですら、『人間』にだけは色眼鏡を外そうとしない種族まであるくらいだ。それだけ『人間』っていう種族への迫害は厳しいものがある」

「一応この都市で、そういった差別はご法度ってことになってるわ。でもね、閉鎖された学校という空間の中では平然とそういう行為が行われているし、それが当り前のように罷り通っている。そんな中

で、連夜が赤の他『人』を信頼なんてできると思う？　私だったら、すべての生徒が敵に見えて、一日ももたずに自主的に退学する道を選ぶ」

「でも、連夜はそんな中で生きている。この厳しい環境を自分を鍛えるための修行場と考えて日々を生き抜いているんだ。そんな連夜が『友達』という言葉を使ったんだ」

「つまり、連夜はあなたにそれだけの価値を感じているってこと」

「つまり、連夜はおまえにそれだけの価値があると俺達に伝えているってことだ」

「私や」

「俺と」

「「同じ存在なんだって」」

再びフェイに視線を戻したクリスとアルテミスは、それぞれ左右から歩みよると、フェイの左手と右手をそれぞれ自ら取って固く握手し微笑みかける。

「改めて自己紹介させてもらう。俺の名はクリス・クリストル・クリサリス・ヨルムンガルド。連夜の義兄弟にして『戦友』。連夜から聞いたかもしれんが、生まれは妖精族だが、俺を拾い育て戦士にしてくれたのは狼獣人族で、今の俺は彼らと同じ一族だと思っている。そう思って接してくれると嬉しい。よろしくな」

「私はアルテミス・ヨルムンガルド。一応クリスとは乳姉弟ってこ

とになるのかしら。今は内縁だけどこの『人』の妻みたいなことをやっているわ。九月には正式に妻になるわけだし、そう思って接してくれると嬉しいかな。よろしくね」

「あ、ああ、あの。ボクに君達がいうそれだけの価値があるかどうかわからいが、二人ともよろしく」

やんちゃな美少女といった風貌の妖精族の少年が握る左手とは激しく、白銀の獣毛が美しい大柄な狼獣人族の凛とした少女が握る右手とは静かに握手を交わし、フェイはなんとも言えない複雑そうな笑みを浮かべる。

すると、二人はゆっくりと首を横に振って似たような深い笑みをフェイに向ける。

「『其のものいかなる苦難の前にも逃げることなく『共』に『立』ち、いかなる障害が立ちはだかろうとも『友』の『太刀』となって其を切り裂き進む者、故にそのものを『ともだち』と呼ぶ』、連夜がいう『友達』とはそういう者なの」

「それは俺達に『害獣』との戦い方を教えてくれた連夜の父上である宿難老師が、教えてくれた言葉」

「多分あなたは、連夜と共に歩む覚悟を決めたんでしょ？　だからこそ、連夜は私達のところにあなたを連れてきた」

「いや～、覚悟を決めたというよりも、もう結構ド派手な何かをやっちまったんじゃねぇか？　そこのフェイが連夜とツルんでいるってことが大々的にこの学校に広まってしまうような何かをさ」

「そうなの、連夜？」

美少女顔には全然似合っていないニヒルな笑みを作る恋人の言葉を聞いたアルテミスは、フェイの横に佇む黒髪黒眼の人間の少年のほうに視線を向ける。
すると、そこには物凄く困り果てたといわんばかりに乾いた笑みを浮かべた連夜の姿が。

「あは、あはははは。わ、わかっちゃう？」

「わからいでか。で、何、やらかしたんだ？」

「今日の昼休みにね、一年生とちょっとしたレクリエーション活動を」

「いつものことじゃねぇか？　いつもどおりに片づけたんだろ？」

「うんまあ、結果から言うとそうなんだけどさ、そのときにフェイに手伝ってもらっちゃってね。まあ、多分そのことがすぐに広まっちゃうだろうなと」

「ほほお、珍しいな、おまえが誰かの手を借りるなんて。それならそれでいつもどおりに口を封じてしまえばよかったんじゃねぇのか？　おまえなら一人でやったことにできるだろ？」

「いや、それがね」

「ボクがそれをやらせなかった」

今までずっと黙って二人の話を聞いていたフェイが割って入る。
連夜は、フェイに対して何かを言おうとしたが、決意に満ちたそ

の表情の前に結局何も言うことができず、苦笑を浮かべて口をつぐむと、クリスに会話の交代を視線で告げ、フェイに一つ頷いて見せる。

フェイは連夜の無言の了承を確認すると、静かに口を開いて自分の想いを語り始めた。

「これまで連夜は、自分の大事な人達を巻き込まないために、ずっと一人で抱え込んできた。抱えこんで自分一人で解決してきた。どれだけ自分が傷つこうともだ。だけどこれからは違う。ボクが連夜を守る。少なくとも学校にいる間はずっと連夜の側にいて、連夜を守る」

「連夜から『死んだフリ』してろって言われなかったのか？」

「言われなかった」

「連夜？」

「言って聞くような『人』なら言ってるってば。でもねえ、フェイは僕の『友達』の中で一番聞きわけが悪い頑固者なんだよねえ。しかも、幸か不幸かボクと同じクラスだし、どのみちフェイと僕が親しくしていることはすぐにバレることになるだろう。それにさっきフェイが言っていたけど、これからはボク一人が絡まれて済む問題じゃなくなるだろうしね。なんせ、フェイは昔から一度口にしたことは絶対に実行する『人』だから」

「勿論だ、ボクが誓った。ボク自身に誓った。だから、絶対に誓いは破らない。聞こえないフリも、見えないフリも、そして、『死んだフリ』もしない。絶対にだ」

「ほらね？」

心底呆れたと言わんばかりの表情、しかし、そのわざとらしい表情の中に隠された本当の気持ちがわからない愚か者はここには一人もいなかった。

「いずれ、僕一人じゃフォローしきれないことがでてくる。フェイは僕よりもはるかに強い、あの剣児と正面から殴り合いができるほどだからね。だけど、純粋すぎるし実直すぎる。『人』が持つ底がない深い深い悪意と戦う方法についてはほとんど知らない」

「だから、俺達のところに来たってわけだ」

「ごめん」

「なんで謝る。というか、いずれこういう日が来るとは思っていたさ。いや、違うな。来る日を願っていたよ。で、俺達の元にフェイを連れてきたってことは、俺達の『死んだフリ』ももう終わりってことでいいんだよな、『義兄弟（ブロウ）』」

ニヒルな笑みを消したクリスは、今までにない真摯で真剣な表情、瞳で連夜を見つめ、アルテミスもまたそれに倣う。

何かを覚悟した強い決意、強い想い。

そんな四つの瞳に見つめられ、連夜はバツが悪そうに顔を背けると、ポリポリと頭をかく。

「ご、ごめんね。二人とも。できれば卒業まで『死んだフリ』を続けてほしかったし、君達を巻きこみたくなかったけど」

「あほうっ。つまらねぇこと言うなって。こっちはずっと待ってた

つ〜の。戦闘態勢をとったままでずっとずっと、おまえが腹をくくるの待ってたつ〜んだよ。なのに一年以上も待たせやがって」

「そうよ、連夜。やっと私達を頼ってきてくれて本当に嬉しいわ。それにフェイくんは誠実で頼りになりそうな『人』みたいだし。本当によかった」

「クリス、アルテミス。ごめん、それから、ありがとう」

予想以上に頼もしい二人の言葉を聞いて、思わず瞳を潤ませる連夜。

そんな連夜に近づいたクリスは、連夜の身体を引き寄せてがっしりと抱きしめると、その背中を思いきりバンバンと叩き、アルテミスはその鼻面を連夜のほっぺになすりつけながら目を細める。

「だけど、結局一年もの間、誰一人として現れなかったのね。連夜と『友達』だって、正面切って言い切れる覚悟を持った『人』が」

「上級種族で、一族を始めとする取り巻きに守られている奴らなら何人かいるけどな。けどよ、そういう奴らは、土壇場でどう掌を返すかわからねぇ。本人自身はそうじゃなくても、周囲はそう思ってないってことはよくあることだ。いま思い出したけどよ、フェイってどっかの喧嘩馬鹿としょっちゅうやりあってるんだよな？　なら、そこんとこよくわかってるんじゃないか？」

「ああ、そうだな。本当によくある。よくあることだ」

クリスが言いたい相手が誰のことなのか瞬時に悟ったフェイは、深く頷いてみせる。

「実際ボクは何度か闇討ちを受けたことがあるよ。あいつの同族は目立つからな、すぐにわかる。まあ、あいつの指示じゃないんだろうが、取り巻きどもからしてみれば、ボクは大事な後継者様の周囲をうろつく目障りなハエなんだろう。排除したかったんだろうね」

「そう言うやつらは信用できねぇからなぁ。気を許した途端、後ろからバッサリなんてよくある話だ」

「まったくだ。なのに、連夜ときたら奴らに気を許しすぎだ」

クリスとフェイの二人から意味深にジト目で睨みつけられた連夜は、冷や汗を流しながら気弱に笑い返す。

「あはは。ま、まあ、彼ら自身はそれほど悪い『人』じゃないからさ。と、言っても油断はできないけどね」

最後の部分で急に表情を改めて真剣な口調でぼそりと呟く連夜。

それぞれが思い当たるところがある他の三人は、それぞれの理由から連夜に頷きを返す。

先程と変わらぬ爽やかな風が四人の間を吹き抜けていく。

しかし、四人は四人ともよくわかっていた。

風はどこまでも自由であり、どこまでも気まぐれであることを。

いま、ここで吹いている風が爽やかで人に快いとしても、一歩先ではどうなっているかは誰にもわからない。

風は、いとも簡単に嵐へと変わるのだから。

四人は四人とそれぞれの想いでしばらくぼんやりと空を見上げて頬にあたる風を感じていたが、やがて、その視線をお互いへと向け直す。

「さて、それじゃあ、明日からのことを打ち合わせるのも兼ねて親

睦会といくか。『ルートタウン』に焼き肉のいい店があるんだよ。『行列ビビンバ』っていう店なんだけどさ、親父さんが砕けた『人』でよ、たまに酒も飲ませてくれるんだよなあ」

ニヤリと笑いながらさらりととんでもないことを言う、クリスを呆れたように見つめる連夜とアルテミス。

「おいおい、未成年なのにお酒飲んだらダメじゃん」

「そうよそうよ。だいたいクリスあんまりお酒強くないじゃない。すぐにひっくり返るくせに」

「白けることというなって。フェイも酒飲めるだろ？」

「キライではない。というか、どちらかというと好きだし、焼き肉はもっと好きだ」

「話せるねぇ。行こうぜ、行こうぜ」

やたら意気投合してしまったクリスとフェイは肩を抱きながら早速歩きだしてしまうが、その背中に連夜が声をかけて止める。

「あ、ちょっと待って、ごめん。明日にしてくれないかな。今日はこれから『人』と会う約束があってさ」

「なに？　マジかそりゃ。う〜ん、残念だな」

言葉だけでなく本当に残念そうに唸るクリスに、連夜は申し訳なさそうに合掌して謝って見せたあと、給水塔の梯子があるほうに向かって歩き出す。

「ごめんね～。明日、僕が奢るから許してよ。今日の用事だけはちょっと外せないんだ。まあ、そういうことで僕はここで失礼するね」

「そっか、じゃあ、また明日な。フェイはどうするんだ？」

「これから授業にもどっても、あと十分ほどで終了だしな。それよりも、一年前の『害獣』討伐の時の話をもっと詳しく聞かせてくれないか？　折角当事者の英雄がいるのだから、直にその話を聞いてみたい」

「おいおい、やめてくれよ。英雄なんて柄じゃないぜ。それよりもなんの話が聞きたいんだ？」

「それはもちろん、『害獣』討伐後の森の中で何があったのかだが」

「「そ、それはもういいのっ！！」」

羞恥心に満ちた絶叫が放課後間近の屋上に響き渡る

そんな賑やかな声の聞こえるほうをちょっと振り返った連夜は、なんとも言えない嬉しそうな笑顔を浮かべてしばし見つめたあと、扉を開いて屋上から静かに出て行った。

次回予告

長い長い時の果て、いくつもの世界の挟間を流れ流されて辿りついた二つの魂。

『きゃあああああ』

今ではないはるか昔、この世界とは違う世界で、死別した二つの魂。

『いやあああああ』

その魂が再び巡り合・・

『キタコレキタコレキマシタコレーーーーーーーーッ!!』

ちょ、た、玉藻さん、騒ぎすぎです、あ、ちょっと、まだ予告途中なんですってば、マイク奪わないでくださ、あああっ!?

『宿難　連夜を愛するために、生まれ落ちたる無敵の身体。陰を以て恋敵を蹴倒し、陽を以て不良共を蹴散らし、太極を成して愛を貫く!!　もう、誰にも邪魔はさせない、誰にも渡しはしない!!　私は玉藻!!　三千世界の夜に飛ぶ聖鴉　宿難　連夜の妻!!　永遠の伴侶!!　我は、私こそは宿難　連夜の最強の守護神、だあああああああっ!!』

玉藻さん、お願いですから、マイク返してくださいってば!!

『次回、真・ここは違うどこかの日常　過去編（高校二年生編）

第六話　『そして、二人は巡り合う』　巡り合った今、二度と離れはしない！！　誰であろうと、人の恋路を邪魔する奴は、狐（わたし）に蹴られて地獄に堕ちろおおおおおおっ！！』

あ、やっと、マイク戻してもらったって・・え、なんで姫子ちゃんやみ～ちゃんがここにいるの！？

力づくで次回の話を変更させるって、何考えているの、二人とも！？　うわわわわ、玉藻さんも喧嘩を買わないでください！！

ひ、非常事態！！　非常事態発生！！　ロム、クリス、フェイ、ともかく手の空いている者は全員、玉藻さん達の喧嘩をとめてええええっ！！

第六話　お～ぷにんぐ

玉藻：久しぶりに今日は二人っきりね、連夜くん。

連夜：そうですね。珍しく今日はみんな出払っていますからねえ。

玉藻：お義母さまとお義父さまは毎年恒例になってる結婚記念日のイベントでご旅行に出発なされたし。

連夜：ダイ兄さんは『害獣』狩りの仕事で出張中、み～ちゃんはお友達の結婚式に出席するために城砦都市『ゴールデンハーベスト』に出かけましたしねえ。

玉藻：スカサハちゃんと晴美は、猫メイドさん達の研修合宿につきあって城砦都市『アルカディア』に行っちゃったし。

連夜：みんな、しばらくは帰ってこないから、玉藻さんと二人っきりの日が続きますね。

玉藻：そうね、二人だけ。私と連夜くんの二人だけ。連夜くんのお部屋で私と連夜くんの二人っきり。

連夜：ですね～、夕食も終わったし、お風呂にも入ったし、あとは寝るだけですね～・・って、あれ？　なんか僕大事なことを忘れている気が。

玉藻：二人っきりの部屋の中、私達の目の前には二人で眠るには十分の大きさの蒲団が一つ。まくらは二つ。

連夜：あっれ～。なんだろ、なんか、思いださないといけないことが。物凄い重要なことがあったんだけどなあ。ここまで。ノドのところまで出てきているんだけど、出てこない。

玉藻：玄関の扉の鍵は閉めた、その他の部屋の窓も扉もばっちり閉めたのを確認済み。勿論、この部屋の扉の鍵もさっき閉めたし、窓もがっちり閉めている。今日という今日は流石に誰も邪魔できないはず。

連夜：なんだったかなあ。絶対思い出さないといけない気がするんだけどなあ。それも今、思いださないと大変なことになるというか。あ～～、なんだっけ!?

玉藻：この前愛を確かめあってからすでに一カ月。倦怠期の夫婦じゃあるまいし、いくらなんでも期間あきすぎだっつ～の!!　だいたいね有象無象のお邪魔虫が多すぎるのよ。ミネルヴァとか姫子ちゃんとか、ミネルバとかスカサハちゃんとか、ミネルバとか晴美とか。あと、ミネルバとかミネルバとか。

連夜：な～んか、しないといけないんだよなあ。なんか途中になってる作業があったはずなんだけど。食器の後片付けは終わったし、洗濯物は取り入れたし、明日の朝ごはんの用意もちゃんとしたしなあ。

玉藻：あ～～、もう日替わりで私達の『愛のうふんあはん』を邪魔しにくるのは本当に勘弁してほしい!!　朝まで酒盛りしようとか正々堂々拳で勝負しろとか、今から酒盛りしようとかお兄様に勉強教えてほしいとか、これから酒盛りしようとか連夜さん料理教えてくださいとか。あと、とりあえず酒盛りしようとか意味なく酒盛りしようとか。

連夜：掃除はきちんとやったはずだし。トイレ掃除か？　いや、それも朝のうちに終わらせた。朝のうちにといえば畑仕事だけど、特に今日のところは特別しないといけない作業はなかったよなあ。『法蓮草』の収穫は永倉さんと、らっさんがきっちりやってくれていたし。

玉藻：って、こうして冷静に考えてみるとほとんどミネルバが酒盛りしにきているせいじゃないのよ！！　あいつどんだけ酒飲みたいのよ！？　ってか、律儀にそれに付き合ってる私もどうなのよ！？

連夜：あっれ～？　他に何かあったはずなんだけど、ほんとに思い出せない。

玉藻：まあ、いいわ。これまでの反省については明日の朝にでもゆっくりするとして、とりあえず、今日のところは久しぶりの『愛のうふんあはん』に集中よ、集中。はい、はい、連夜くん、念気蛍光灯消しますよ、はい、消した。

連夜：あ、ちょっと、玉藻さん、まだ、思いだせないんですよ、だから消さないで・・って、消されちゃったし。

玉藻：はいはい、悩むの中断ですよ、中断。いろいろと考えないといけないことあるかもしれないけど、それは明日にして今は私に集中してください。はい、パジャマ脱いで脱いで。

連夜：え～、もういきなりですか。あ、ちょっと玉藻さん、いきなりのしかからないでくださいって。

玉藻：あ、ごめん。どこかうった？

連夜：ああ、いえ、蒲団の上に倒れたから大丈夫ですけど、脱ぎかけのパジャマが絡みついて腕の自由が。

玉藻：ごめんごめん。ほんっと久しぶりだったから我慢できなくてちょっと強引になっちゃった。

連夜：いいんですけど、ほんと真っ暗ですよね、カーテンも何も締め切ってるから何も見えない。おかげでパジャマがうまく脱げないというか、これほんとに絡まってる！？

玉藻：私が脱がしてあげる。優しく脱がしてあげる。そして、ついでに全部脱がしてあげる。ぐふ、ぐふふふふ。

連夜：いや、ちょっと、流石にそれは自分でやりますから、ってか、玉藻さん、なんか地味に怖いんですけど！？

玉藻：いいから、私がするから、連夜くん無駄な抵抗はやめなさい！！　もう、一カ月以上お預けくらってこっちは辛抱たまらん状態なんだからね！！　連夜くんはいつも通り、『ダメです、玉藻さん、でも、もっと』とか、『いやですそんなとこ舐めちゃ。でも、あ、だんだん気持ちよくなって・・』とか、私が燃えるような喘ぎ声を出すことに専念してください！！

　よろぴく！！

連夜：よろぴくじゃないし！！　いやん、ちょっと、玉藻さん、いきなりどこ触ってるんですか！？

玉藻：げっへっへ。一カ月貯めに貯まったエロパ・・いや、愛のパワーを、今こそ見せるとき！！　リミッターを解除した私の全力を

受けてみなさい！！

連夜：きゃ～～、玉藻さんが本気モード全開だあ！！

玉藻：よいではないか、よいではないか。いつものように私にかわいい声を聞かせておくれ、げ～っへっへっ・・へぐばっ！？

連夜：え？　『へぐばっ』って、どうしたんですか、玉藻さん？

玉藻：いたたたたっ！？　な、なんかいきなり私のほっぺに『ぷにゅ』っとした柔らかいものが物凄い勢いでぶつかってきた！！　何これ？　なんなのこれは！？

？？：いい加減にしなさいよ、このエロ狐。あなた、どんだけエロいのよ。

玉藻：え！　え？　ちょ、ま、まさかこの声は！？

？？：人がぐっすり眠っているところにずかずか入ってきて、安眠妨害した上に何しようとしてるのよ。ってか、どういうこと？　あなた、さっきとんでもないこと口走っていたわね？　私の連夜にいったい何を言わせているのよ！？　なんて羨まし・・いや、なんて恥ずかしい狐なのかしら。想像しただけで濡れ・・いや、背筋が凍ったわよ。いい、よく聞きなさいよこのケダモノ！！　私がここにいる限り、十八歳未満お断りなことは絶対にさせない、いや、させやしない！！　連夜は・・連夜の貞操は私が守る！！

玉藻：やっぱりこれは、姫子ちゃんの声！？　な、なんでここに！？　相変わらず真っ暗で姿は見えないけど間違いない！！

連夜：あ～、そうでしたそうでした。今更ですが、思いだしました。
そういえば、今日は姫子ちゃんが来ていたんだよなあ。

玉藻：な、な、な、なんで!?　なんでここに姫子ちゃんがいるの!?　どういうことなの!?　ここ、連夜くんの御実家なのよ?
しかも連夜くんのお部屋なのよ!?　それなのになんで姫子ちゃんがいるの!?　いったいなんでなのおおおおっ!?

姫子：ふっふっふ、衝撃の事実に怖れ慄くがいい、この馬鹿狐め。
私と連夜はそういう関係なのよ!!

玉藻：なんだってえええええええっ!?

真・ここことはちがうどこかの日常

過去（高校生編）

第六話　『そして、二人は巡り合う』

CAST

如月（きさらぎ）　玉藻（たまも）

城砦都市『嶺斬泊』に住む、大学二年生。二十歳。
上級種族の一つである霊狐族の女性。金髪金眼で、素晴らしいナ

イスバディを誇るスーパー美女。
この物語のヒロインであると同時にヒーローでもある。
長い長い悠久の時の果て、ついに運命の人を見つけ出す。
「『狐(あたし)』に蹴られて地獄に堕ちろおおおおお！！」

龍乃宮(りゅうのみや)　姫子(ひめこ)

連夜のクラスの委員長で、御稜高校が誇る最高にして最強のスーパーアイドル。上級龍族。女性。十七歳
上級種族中の上級種族である龍族のお姫様でもある。
高校入学以来隠し続け来た暴虐の牙を『祟鴉(たたりがらす)』に向ける。
「やめじゃ。もう、飽きた。思ったよりもおまえはおもしろうなかったな」

龍乃宮(りゅうのみや)　剣児(けんじ)

姫子と瑞姫の腹違いの兄。上級龍族にして上位の王位継承権を持つ少年。上級龍族。男性。十七歳。
御稜高校三大実力者の一人にあげられるほどの武術の達人であると同時に、三人の美少女達を恋人に持つハーレムマスターでもある。
姫子同様、高校入学以来ずっとその残虐な性格を隠してきたが、ついにその正体をあらわにする。
「そうだな例えて言えば、捕まえて引き裂けばとてもいい声で哭い

てくれる、そんな獲物の匂い」

ミネルヴァ・スクナー

玉藻の幼馴染にして大親友。同じ大学に通う大学二年生。二十歳。
玉藻に匹敵する美女であるが、玉藻に比べるとややスレンダーで、モデル体型。
いろいろな意味で今回、致命的に出遅れてしまった『人』。

「とりあえず、家に帰って連絡を待つか」

『崇』鴉

城砦都市『嶺斬泊』最大の歓楽街『サードテンプル』周辺に出没する謎の怪『人』。
全身を特殊な黒装束に身を包み、顔は『崇』の一文字がデカデカと書かれた白い仮面で隠しているため年齢、性別、種族、全てが一切不明。
事件のあるところに姿を現し、予測できない行動で場を掻き廻すため、「『サードテンプル』の『招かれざる（スクランブル）乱入（トリック）者（スター）』」と呼ばれて恐れられている・・人物の影武者。
本物と違い、武術の心得があり、総勢九名からなら護衛衆を引連れている。
本物と区別をつけるためか、自らを『小夜啼鳥（ナイチンゲール）』と呼ぶ。

「たくさんの心をくれた大切な大切なあの『人』の為に・・私は戦

う！！」

『申』

『崇』鴉を守るようにして現れた巨漢戦士。
『申（さる）』の一文字がでかでかと書かれた覆面をしていて、正体は不明。
凄まじい戦闘力を誇る。

「あんたの知っているあいつと、俺の知っているあいつが同じなら、間違いないと思うがな」

『雲』、『雨』、『霧』、『電』、『霞』、『雫』、『雹』、『雷』、『零』

『崇』鴉を守る九人の女性護衛戦士。
『雲』が隊長、『雨』が参謀、『電』は偵察係と、それぞれ役割を持つ。

『うちの姫様は本当にもう、からかいがいがあるというかなんというか』

『崇鴉（たたりがらす）』

城砦都市『嶺斬泊』最大の歓楽街『サードテンプル』周辺に出没

する謎の怪『人』。
　全身を特殊な黒装束に身を包み、顔は『崇』の一文字がデカデカと書かれた白い仮面で隠しているため年齢、性別、種族、全てが一切不明。
　事件のあるところに姿を現し、予測できない行動で場を掻き廻すため、「『サードテンプル』の『招かれざる（スクランブル）乱入（トリック）者（スター）』」と呼ばれて恐れられている。
　ある人物と待ち合わせの約束をし、それを守ろうとしたためにかつてない窮地に陥る。

（む、無理してるわけじゃないですよ。無理してるわけじゃなくて、本当に楽しくお話したいだけなんです。多分、これが最後ですし）

玉藻：うそよ・・そんなのウソよ、デタラメだわ！！

姫子：ふっふっふ。動揺しているわね。だけど嘘じゃないわ、如月玉藻。よく、聞きなさい。私と連夜はね、一緒にお風呂に入ったり、一緒の蒲団で寝たりする仲なのよ！！

玉藻：いやあああっ！！　そんなことあるわけないじゃない！！嘘よね。姫子ちゃんが言ってることはウソなんでしょう、連夜くん！？

連夜：いや、きっぱり事実です。

玉藻：な～んだ、やっぱり事実じゃん。あ～、よかった、びっくりした。てっきり事実かと思って、心配なにゃあああああっ！？

姫子：お～っほっほっほ、お～っほっほっほ。ほ～ら、ご覧なさい。嘘じゃなかったでしょうが。

玉藻：そんな・・連夜くんは・・連夜くんだけは私を裏切らない、そう信じていたのに・・

姫子：残念だったわね、如月　玉藻。残酷だけど、これが現実！！　これが真実！！　そして、これが結果なのよ！！　私と連夜の仲がわかったでしょ？　とっとと出て行きなさいよ、この泥棒狐！！

玉藻：そんな、そんな～～！！　どうして、どうしてなの連夜くん、なぜなのおおおっ！？

姫子：決まってるじゃない。それはもちろん、連夜が私のことを、あい・・あい・・きゃあっ、恥ずかしい！！　いやんいやん。

連夜：あのさ、いい気分で勝ち誇っているところ悪いんだけど姫子ちゃん。そろそろ全部しゃべっちゃってもいい？　このままだと、僕、玉藻さんに誤解されたままになるんだけど。

姫子：ダメ。

連夜：ダメって・・あのね。いや、力づくで勝てないから、こういうところで仕返ししてやろうという気持ちはわからなくはないよ。わからなくはないけど、とりあえず、玉藻さんは僕の大事な大事な妻なわけですよ。このままだと嫌われちゃうので、誤解を解いておきたいんで、しゃべっちゃいますが、いいよね？

姫子：絶対ダメ。

連夜：いやいやいや、ダメって言われても困りますよ、姫子さん。一応、僕、玉藻さんの夫なので、妻に対して説明責任があるわけですよ。それを放棄するというわけにはいかないんですが。

姫子：絶対絶対ダメったら、ダメ！！　この狐にだけは、このエロいケダモノにだけは、私の秘密をしゃべっちゃダメ！！　ってか、しゃべったら、私死ぬ！！　この狐に私の秘密を知られるくらいなら死んでやるんだから！！

連夜：もう～～。じゃあ、そういうあとで収集つけられなくなるようなこと言わないでよね～。だいたいさ、なんでいっつも僕の部屋で寝てるわけ？　いや、確かに君のメンテを途中で中断して忘れちゃっていたのは悪かったよ。悪かったけどさ、予備用の『Ｚ－Ａｉｒ　ＩＩＩ』のボディもあるわけだから、それ使ってくれてもよかったのに。

姫子：だってだって、悔しかったんだもん！！　最近連夜ったら、ずっとそこの狐にべったりでさ、私のことなんか全然かまってくれなくさ。狐は狐で自分だけ連夜とイチャイチャいちゃいちゃしちゃってさ！！　私だって、私だって、連夜とイチャいちゃしたいもん！！　いいじゃない、一緒に寝るくらい。いいじゃない、一緒にお風呂に入るくらい。そこの狐とは、もっとエロいことしてるんでしょ。ぐすんぐすん。わ、私だって、そういうのしたいのに。したいのに～～！！

連夜：したいのに～～じゃないでしょ。まったくもう。そもそも、そういう行為を姫子ちゃんと行うのは物理的に無理だから、いい加減諦めてください。

姫子：いや、無理したらなんとかなるでしょ？　ね？　連夜の頑張

り次第では。

連夜：いや、無理です。不可能です。誰がどう見ても、僕と姫子ちゃんは『ありえない』ですから。

姫子：う、うわ～～ん！！　また、拒否られた～～！！　連夜のばかあああああっ！！

玉藻：いや、あの、ちょっと、二人とも、そろそろ私に説明してほしいんだけど。

連夜：玉藻さん、ほんと、すいません。うちの『ひ～こ』がわがまま言いまして、ほんと申し訳ないです。

姫子：『ひ～こ』って言うなあっ！！

玉藻：まあ、その、とりあえず、私が考えている関係とは全然違うんだなということだけはわかりました。と、いうかさ、ちょっと動揺していたせいで気がつくのが遅れたんだけど、さっきからこの部屋の中で姫子ちゃんの独特の気配は掴んではいるんだよね。いるんだけど、ところが私と連夜くん以外の『人』の気配がしないんだよね。

姫子：どきっ

連夜：流石、玉藻さん、鋭いです。

玉藻：これっていったいどういうこと？　今までずっと黙っていたけど、姫子ちゃんと何度か手合わせしたときに『人』の感触がなかったのよ。気配そのものは『人』なんだけど、なんていうか、まる

で意志のある自動人形か、ゴーレムと戦っているみたいな、そんな感じがしていたんだけど。

姫子：どきっ、どきっ

連夜：ぶら～ぼ、玉藻さん、ぶら～ぼ！！（ぱちぱちぱちぱち）

玉藻：あ、だんだん暗闇に目がなれてきた。さて、姫子ちゃん、そろそろかくれんぼやめて、念気蛍光灯の下でじっくり私とお話しましょうか？　どうも、あなたの話には大きな穴があるみたいだし。だいたいね、本当に連夜くんがあなたとそういう関係だったら、もっと慌てているはずなのよね。なのに、めちゃくちゃ余裕ぶっこいていられるってことは、私を納得させられる何かがあなたにあるってことでしょ？　あと、私の勘なんだけど、多分、話を聞くよりも、あなたの姿を見るだけで話が完結する。そんな気がするのよねえ。ねえ？　どう思う姫子ちゃん？

姫子：う、うわ、探すな探すな！！　私を探すんじゃない！！

玉藻：ふっふっふ。どうしてやめられようか。私と連夜くんの愛と希望と夢のいちゃくらタイムを木端微塵にしちゃってくれちゃったくせに、往生際が悪いわよ！！　出て来なさい、姫子ちゃん、こらっ！！　どこに隠れているのよ！？

姫子：いやあああっ！！　絶対見つかるもんかあああっ！！

連夜：あ～～、もう。とんでもないことになってしまったなあ。まあ、でもいつものことと言えばいつものことか。さて、では、とりあえず、本編いってみましょうか。第六話　『そして、二人は巡り合う』です。どうぞ。

玉藻：くっそ～。どうして？　どうして、みつからないの？　間違いなく気配は掴んでいるのに！？

姫子：そ、そう簡単に掴まってたまるものか！！　き、今日のところはこれくらいで許してあげるわ、如月　玉藻。でも、次はないから。絶対、あなたから連夜を奪い取ってみせる！！

玉藻：むうっ、自分は姿を見せずに一方的に言いたいこと言っちゃって。せめて姫子ちゃんの秘密がどういうものかわかっていればなあ。って、そうか。連夜くんに聞けばいいんだった。連夜くん、連夜くん。姫子ちゃんの秘密を教えてちょ。まさか、隠したりしないよね？

連夜：勿論です。僕の中で最優先人物は玉藻さんですから。喜んで説明させていただきますです。

玉藻：ですよね～～。

姫子：連夜の裏切り者～～！！

第六話　『そして、二人は巡り合う』　その1

頭が痛い。
眩暈がする。
胸が苦しい。
朝から体調は良くなかったが、少なくとも大学に来るまでは悪いというほどでもなかったのだ。
それが大学にやってきてから、体調が激変した。
いや、違う、大学に来てからではない、大学に来る直前、ある瞬間を境にして体調がどんどん悪くなりだしたのだ。
最悪と言っていいほどに良くない、というか、はっきり悪い。
気分が悪いなんてものじゃない、お昼に食べたものを今にも全部吐き出してしまいそうなくらい絶不調だ。
辛い、切ない、悲しい、苦しい。
様々な負の感情が自分の心の中で渦を巻き、次第に大きくなっていく。
朦朧とし混濁する意識の中、自分ではない誰かの叫びが聞こえてくる。

（確認する必要がある、いや、絶対確認しなくてはいけない）

いったい、何を確認するというのか、己の心のうちで叫び声をあげるのは自分とは違う誰かの声。

（何故気がつかなかったのか？　どうしてわからなかったのか？）

狂おしくも激しい何かを秘めた声が響き渡る。

（声を一度も聞いたことがないからか？　その顔を一度も見たこと

がなかったからか？　永い永い時の果てに全てを忘れ諦めてしまっていたからなのか？）

自分を責めるように何度も何度もその声は、彼女の心の中で響き渡り続ける。

（いいや、違う、忘れてなどいない。忘れるものか。あの懐かしい匂い、そして、この腕に抱きしめた時の感触）

彼女の心の中にいる自分とは違う誰かが、願うように祈るように何かを、いや、誰かを想う。

その想いはあまりにも重く切ないもので、彼女はとうとう耐えきれなくなり心の内の誰かに問いかける。

『いい加減にして！！　『人』の心の中でわけのわからないことを叫び続けないで頂戴！！　あなたが誰だかわからないけれど、叫ぶなら自分の心の中でやってよ。あなたの声を聞いているとおかしくなりそうだわ！！』

（わけがわからない？　本当にわけがわからないというのか？　いいや、わかっている。おまえはとうにわかっている）

『わかるわけないでしょ？　あなたいったい何者なのよ？』

（わしが何者なのかなど、どうでもいい。そんなことはどうでもいいことなんだ。それよりももっと大事なことがある。おまえだってわかってるはずだ。わからないはずがない。気がついているんだろ？　わしと同じように思っているんだろ？）

問いかけたつもりが逆に問いかけられてしまい、彼女は戸惑いの

表情を浮かべる。
そう、彼女はわかっていた。
心の内の誰かが、いったい誰のことを気にしているのか、わかっていた。よ～くわかっていたのだ。

『そ、それが、あ、あなたとどういう関係があるのよ』

（わしとだけではない。かといっておまえだけの問題でもない）

『なにそれ』

（そうこれはわしの問題であり、おまえの問題でもある。つまり、わしと）

『そして、わたしの問題なんだ』

「この世界に生きている、如月（きさらぎ）　玉藻（たまも）の問題なんだ」

静寂に支配されている大学の図書館の中、音楽にも似た一人の女性の呟き声が響き渡る。
借りてきた本を閲覧するために用意された長テーブルの前に座り、頭を抱えて唸っていた玉藻は、自分の耳に聞こえてきた声が、自分が発したものだとしばしの間気がつかなかった。
しかし、周囲から向けられるいくつもの視線でようやくそれに気がつくと、隠すようにして顔を下へと向ける。

『わ、私どうしちゃったんだろ？　体調悪いせいでおかしくなっちゃったのかな？』

（おかしいだと？　そんなものならとっくの昔になっている。あれを失ったときから、我らがまともであったときなど一度もない。我らとあれは一対なのだ、あれは我らになくてはならないものだ）

『意味不明なことを言うのはいい加減やめてよ！！　なんなのよ、あなた！？』

（わからないフリをするのはやめろ。いや、ひょっとするとわしよりもおまえのほうが・・）

『な、なにもわからないわよ』

苛立ったように心の内に潜む誰かに叫ぶ玉藻。

だが、玉藻はわかっていた。

心の内の誰かが求めているものがなんなのかを、そして、心の内に潜む誰か以上の強さで、自分がその何かを求めているということを。

玉藻はそれに気がつくと、深く大きな溜息を静かに吐き出すのだった。

大学の授業を代返で誤魔化そうとしていたことがバレてしまい、追試を受けることになってしまった小学校時代からの親友ミネルヴァ。

バイト三昧の日々を送りロクすっぽ授業に出ていないミネルヴァと違い、玉藻は真面目にきちんと授業に出ているため追試などとは全く縁がないわけで今日は取得している授業もなく本来は休みの日。

ところが、悪友であるミネルヴァに泣きつかれてしまったため、

大学に来なくてはいけない用事など何もないというのに付き添って出てこないといけなくなってしまったのだった。

正直、朝起きた時点で体調の悪さを自覚していて、大人しく家で寝ていようかとも思ったのであるが、なんとかなるだろうと軽い気持ちで出てきてしまったのが失敗であった。

ミネルヴァと合流して大学に到着してから、『人』が少なくて静かな大学構内の最深部にある図書館に移動して体調の回復を待っていたのであるが、良くなる気配は一向にない。

いや、それどころか悪くなる一方で、幻聴までも聞こえてくる始末。

今のところ、周囲に『人』が少ないから助かっているが、街のど真ん中で幻聴に対して返事を返すなんてことをしでかしたら、間違いなくどこかおかしい『人』とみられるのは必至だった。

（おかしい『人』なのは、間違いないのだからいいではないか）

『冗談じゃないわよ。私はまともよ』

（どちらでもいい。そんなことよりも、今は重要なことがある。おまえ、なぜわかってて話しを逸らす）

『べ、別に逸らしてはいないわ。わかってないし』

（隠しても無駄だ。関係あると思っているんだろう？　おまえ自身特別な縁を感じているはずだ）

『あ、あの子のことは関係ないでしょ？　そりゃ、いろいろと私によくしてくれたけど、それだけ。そ、それだけの関係よ、あなたがいうような大袈裟な何かがあるとは思えないわ』

（わしは、まだ具体的に何とも言ってないし、ましてや誰とのことも言ってない。なのに、あの子なのか？）

『うぐっ』

鋭い指摘に思わず言葉を詰まらせる玉藻。

思わぬ大失態により相手に絶好の攻撃チャンスを与えてしまった玉藻は、相手の大攻勢に身構えるが、玉藻の予想に反して心の中の誰かはそうしようとはせず、むしろ気遣うような懇願するような口調で溜息交じりな感じで語りかけてくる。

（あのな。否定するならそれでもよい。しかしな、今回だけは頼む。本当に頼むよ）

『な、何がよ！？』

（誰に意地を通してもいいし、心を閉ざすなとも言わん。凶暴で冷淡で依怙地で嘘つきで誰のことも信用しない、それがわしであり、おまえだ。今更本性を変えようもない。しかしな、あいつにだけはそれはいかん。頼む、本当に頼むから、あいつの前でだけは自分を偽るな、隠すな、素直に自分の気持ちを吐きだせ）

『な、な、なにそれ！？　べ、別にあんたに言われなくても、そ、そんな簡単なこと私ができないとでも』

（できなかったんじゃ。それができずに、わしは失敗したんじゃ。自分の気持ちはわかってくれているはずだから、別に言わなくてもいいや、なんて思ってな。自分の気持ちを伝えない、相手の気持ちを知ろうとしない。あいつはわかってくれている。自分はあいつのことをわかっている。だけど結局、全部、自分の思いこみだった。

あいつはいつも自分の気持ちを伝えてくれていたのに、あいつはいつもわしの気持ちを知ろうとしてくれていたのに、わしはそれに甘えて自分からはしようとはせず、そして、全てを失った。それに気がついたのは失ったあと。もう二度とその目を開くことがなくなったあいつの躯を前にしたとき）

『や、やめて、思いださせないで！！』

自分の記憶ではない誰かの記憶が頭の中に流れ込んでくる。

そこにあるのは一人の少年の姿。

質素な茣蓙の上に寝かされた十代後半と思われる人間族の黒髪の一人の少年。

なんともいえない安らぎに満ちた表情で目の前で眠っている。

声をかければすぐにでもその目を開いて起きてくる、そう思わせるような穏やかな表情。

しかし、玉藻にはわかっていた、少年が二度と目を覚ますことがないことを。

その優しさに満ちた瞳で自分を見つめることも、自分への想いで溢れた声で語りかけてくることも二度とないことも。

認識したくない、しかし、自分はそれをとっくの昔に認識し受け入れてしまっていた。

だが、だからといって、何も感じないわけではない、むしろ、受け入れてしまったことが、新たな悲しみと苦しみを生み、彼女を襲う。

『いやあ、いやあ、いやよおおおっ！！　目を開けて、私を呼んで、置いていかないで、置いていかないでよおっ！！』

自分が体験したことではないはず、こんな記憶は自分の中にはない、幻だ。

そう思いこみ否定しようとしても、別の自分がすぐに肯定する。
悲しみと苦しみの濁流があっというまに玉藻の心を押しつぶし、玉藻の瞳からあっというまに熱い何かが噴きこぼれ流れおちる。

（もう二度とこんな想いをしたくない）

『もう二度といやよ、あんな想いは）

（わかっているのなら動け。なぜここで止まっているのだ?）

『そ、それは』

（おまえはわしとは違う。違うのだ、如月　玉藻。わしは、何もわからぬままにあいつに出会い、何もわかっていないままにあいつに甘え、そのままあいつを壊してしまった。だけどおまえは違う。もし、わしやおまえが予想している相手があいつであるならば、きっと大丈夫だ。きっと・・きっとわしやおまえが気がつくずっとずっと以前から、あいつはきっと気がついていたに違いない。わしがわしであることに、おまえがおまえであることに。わしのときとは違う。わしとおまえが違うように、あのときのあいつと、今のあいつは違う。だから、だから大丈夫だ）

『で、でも』

（みよ、如月　玉藻。我らの周囲に群がるやつどもの目を。あの欲望に満ちた瞳を）

心の声に促されるままに顔をあげた玉藻の瞳に、自分の席を取り囲むようにして座る男達の姿が映る。
種族はみな様々。『人』型種族の者もいれば、『獣』型種族の者

もいる。
　みな一様にそれなりに整った顔立ちに、容姿をしていて、優男風のほっそりしたいかにもなイケメン風の者もいれば、それとは対照的にがっちりした体格で男らしい姿をした者もいるのだが、彼らの視線は全てテーブル中央に座る玉藻に向けられていて、そこには異様な熱が込められていた。
　『人』の姿にも、『獣』の姿にもなることができる上級獣人種族『霊狐族』。
　五百年前、他の上級種族同様に隆盛を誇り、栄華を極めていたためなのか、その血筋に連なる者達は総じて美形が多いのだが、中でも玉藻は突きぬけた容姿の持ち主であった。
　『人』の顔でも『狐』の顔でも美麗なうえに、その身体は大抵の男がふるいつきたくなるような凹凸の効いたプロポーションを誇っている。
　それゆえに、玉藻を狙っている男性は多く、彼女の側には常に男達が群れ集うようになっているわけだが。

（澱み濁った瞳ばかりよ。上っ面の顔が気に入ったのか、それともこの肉体か、あるいは力や血筋か。いずれにしてもロクなものではない）

『そうね』

　侮蔑を隠そうともしない心の声に、玉藻は冷めきった心で同意し、嫌悪感でいっぱいになった視線を周囲へと向ける。
　しかし、そんな玉藻の視線に気がついていないのか、周囲の男達は大学きってのクールビューティが自分に関心を向けてくれたと都合のいいように捉え、愛想笑いを浮かべながら親しげに話しかけてくる。

「如月さん、具合悪そうだね、大丈夫？　よかったら、車で送って行こうか？」

「いやいや、俺が保健室に案内するよ」

「待て、如月さんは都市病院に私が連れて行く」

口調こそ心配しているようであるが、我こそがと次々と話しかけてくる男達の表情には隠し切れていない醜い欲望が浮き彫りになっており、玉藻は痛む頭とムカムカする胸を左右の腕で押さえながら苦々しげに男達を睨みつける。

（変わらぬな。わしがわしであったときとなんら変わらぬ。自分の頭の中で思い描き作り上げた都合のいい女として見つめる濁った瞳ばかりだ。おまえをおまえとして、如月　玉藻として、本当のおまえとして見つめる瞳は、ただの一つも見当たらぬ）

『そうね、それも変わらないわね。生まれたときからそうだったけど、何も変わらない。私を私として真っすぐにみてくれる瞳なんて見たことないわ。世界は灰色のままよ』

（それは嘘だ。一度だけある。それはおまえもよくわかってるはず）

『でも、その瞳の持ち主はもういない』

（だから、すぐに動かないのか？　真実を知ったときに絶望しないようにか？　あいつに今までの恩を返すとか返さないとか、いちいち理由をつけて動くことを否定したりはしない。だがな、ほんのわずかな刻でも、目を離した隙に二度と手の届かなくなるものもあることを思い出せ。また今度会った時に、そう思っておまえは二度と

そいつと会えなくなったのではなかったのか？）

『うっ』

心の声は、具体的に誰とは言わなかったが、玉藻にはそれが誰のことか瞬時に理解できてしまった。

『お姉ちゃん、僕のお嫁さんになってくれる？』

子供の戯言、しかし、そう言いきれない何か強い想い、強い覚悟に満ちた言葉。

今でもはっきり思い出せる。

なぜ、あのとき一言、『いいよ』って言ってあげられなかったのか。そして、側にいてあげなかったのか。

後悔してもあのときは二度と戻らない。

（仮面の奥に隠れたあいつの瞳をわしは一度も見たことがない。それどころか声すら一度も聞いたことがない。だから、わしはあいつかどうか、判断できぬ。だけど、見ればわかる。聞けばわかる。いや、わしでなくてもわかるはずだ。おまえならわかるはずだ。わからないわけがない、だから）

『あ～、もうっ、わかってる。わかってるわよ！！　でもね、私の勘違いだったら、ほかの奴と一緒だったら』

玉藻は思いきりテーブルを両手で激しく叩いて立ちあがると、心

の中の声に絶叫する。
突然の玉藻の行動に、周囲の男達が唖然とした表情で見つめて来ていたが、そんなことにかまっていられなかった。

『怖いのよ、知るのが、怖いの。わかる？　今までさんざん裏切られてきたわ。身内にすら裏切られてきたの。裏切らなかったのなんて、ブエル師匠やミネルヴァも含めて両手の指の数ほどもいないのよ？　あいつも・・あいつも、もし、そうだったら。それなら、返せる恩を返して距離を置いて、今まで通りの関係でいるほうが』

（あ～、話の途中腰を折ってすまんがさえぎらせてもらうぞ。わしの思念もここらあたりが限界だ。そろそろ消える。元々、消えるのが前提だったのに、最後の力を振り絞って無理に無理を重ねて刷り込んだ残留思念。長くはもたないのはわかっていたが、ここまでのようだ。まあ、消えるのは構わない、消えると言っても完全には消えるわけじゃない。おまえとして生きていくだけのこと、それだけのことだ。しかしな、折角おまえとわしに別れている今の状態であるから、置き土産を残して消えようと思う。わしがわしで、おまえがおまえなら、この意味がわかるじゃろうから）

『え？　置き土産？』

心の声に不吉な感じを覚えた玉藻は、一瞬心の中で問い返してみたが、その不吉な感じの正体はすぐに目の前に姿を現した。

「へっ？」

凄まじい勢いで迫りくる右拳。
周囲に群がる男達のうちの誰かのものではない。
それは、紛れもなく自分自身の拳。

気がついた時には、見事に自分の右頬に拳はめり込んでいた。

「げ、げふっ」

長年の修練によって鍛え上げられた拳の威力を存分に味わう羽目になり、一瞬意識が遠のきかける玉藻。

そんな玉藻に、心の声が楽しそうに話しかける。

（目が覚めたか？）

『い、いたたた、あ、あんたねぇ、ちょっと人の身体をなんだと』

（ぐだぐだ言ってないで早く行け。そもそも思い悩むような性格じゃないじゃろうが。行って、捕まえて、確認して、間違いなかったらさっさと自分のモノにしろ。いいか、誰にも渡すなよ。そして、誰にも害させるなよ。それからそれから・・）

『もう、あんたいちいちうっさいわ！！　わかったわよ、行けばいいんでしょ、行けば！！』

（ははは、期待してるぞ、如月　玉藻。今度こそがっちり捕まえて逃がすなよ、ずっと・・ずっと見てるから・・な）

心の声は玉藻の中で徐々に小さくなり消えていった。

玉藻はしばらくテーブルの前に棒立ちしたままで空虚に天井を見上げていたが、心の声が今度こそ聞こえなくなったことを確信すると、大きく息を吐きだして肩を落とす。

そして、頭を片手で押さえながら首を横に二つほど振ってみたが、そのときになって、自分の頭痛や吐き気がなくなっていることに気がついた。

相変わらず体調は良くなくて身体はダルイままであったが、気分はそれほどでもない。
むしろ、何かやけに高揚している自分がいる。

「私らしくないか・・それもそうね」

自嘲気味にそう呟くと、すぐ横にいた何人かの男達がその言葉に反応して一斉に口を開き玉藻に声をかけてくる。

「た、玉藻さん、大丈夫ですか?」

「何かお悩みのことでも?」

「よかったら、僕と一緒に外の空気を吸いに行きませんか・・」

「だまれっ!!」

男達の声で喧騒に包まれる図書館に、玉藻の物凄い一喝が響き渡る。
ただの一喝ではない、武術の達人である玉藻が、『気』を乗せて放つ必殺の一喝である。周囲でその一喝をモロに浴びせられることになった男達の口は一瞬にしてフリーズ。
再び図書館に静寂が戻る。
玉藻は、そんな図書館の様子を満足気に見つめたあと、吹きすさぶ冬山のような冷たい視線で周囲の男達をねめつけ、その場を離れていくのだった。

「え、ちょ、た、玉藻さん、いずこへ」

「貴様らには関係ない」

かろうじて玉藻の一喝から立ち直ることに成功した剛の者が、立ち去っていく玉藻に果敢にも声をかけるが、玉藻はその言葉をバッサリ一刀両断して見せる。

そして、背中から強烈な武のオーラを放ち、追いかけて来ようとする男達を無言で牽制すると颯爽と図書館を後にするのだった。

「そうだ・・おまえらには関係ない。興味もない。私が用があるのは、私が用があるのはな」

図書館から外に出た玉藻は、周囲を歩く学生達が視線を向けてくるのも構わず、次々と身につけている服を脱ぎ棄てていく。

その異様な様子に男ばかりではなく、女性達も目を丸くして足を止めるが、玉藻は全く意に介す様子を見せぬまにあっというまに全裸になり、そして、凄まじい勢いで大学の外に向かって走り出した。

「待ってなさい、すぐに。すぐに会いに行くからね」

美しい碧眼がみるみるうちに鮮血に似た赤へと変わって潤みを帯び、凹凸がはっきりしたプロポーションは徐々に崩れて巨大化。

やがてその姿は全身を金色の獣毛で覆われた一匹の美しい大狐へと変化する。

大狐は何かを決意した瞳で、ある方向をキッと見つめると、身を一陣の風と化して走り出す。

そして、たくさんの学生達が呆気に取られて見守る中、大狐は大

学の高い塀をあっという間に乗り越えて姿を消してしまったのだった。

そして、それから数分後。

「あ～、やっと追試終わった。たまちゃん待ってるだろうなあ、だいぶ待たせちゃったからなあ。よし、今日は私が奢るか」

と、ようやく追試が終わったミネルヴァがのんきな表情で試験会場の校舎から姿を現したのであるが。

あらかじめ玉藻との待ち合わせ場所にしていた図書館へ足を向けようとしたミネルヴァは、外の様子がなにやら騒がしいことに気がついて足を止める。

「ねぇねぇ、何があったの？」

騒いでいる学生達から少し離れた場所に、自分の顔見知りの同級生達を見つけて捕まえたミネルヴァは、騒ぎの原因を聞きだそうとしたのだが。

「あ、スクナーさん。いや、それが、如月さんが・・」

「え？　この大騒ぎの原因って玉藻なの？　あ～、あれでしょ。またどこかのサークルかなんかが玉藻を合コンか何かに誘おうとしてしようとして蹴られたんでしょ？」

「いえ、それならいつものことなんですけど」

「違うの？」

同級生達はミネルヴァの予想に頷きを返そうとはせず、非常に微妙な表情を浮かべるばかり。

てっきり自分の予想通りだとばかり思っていたミネルヴァは、同級生達の微妙な反応を見て少しばかり驚いたが、驚いてばかりもいられず、ともかく騒ぎの本当の原因を聞きだそうと、さらなる質問をするために口を開く。

「え～～っと、結局何があったの？」

「それが・・私達もわからないんです」

「はぁ！？　わからない？」

「ええ。突然図書館から出てきた如月さんが、歩きながら服を脱ぎ出したと思ったら」

「その、下着も何もかも全部脱いじゃって」

「そのあと狐の姿に『獣化』したと思ったら、大学の塀を乗り越えて外に飛び出して行っちゃったんです」

「えっ、えええええええっ！？」

一部始終を目撃していたという同級生達の証言を聞いたミネルヴァは、しばし呆気に取られたようにその場に立ち尽くしていたが、

やがてのろのろと特に騒ぎが大きくなっている方向に視線を向け直す。

すると、そこにはたくさんの男性学生達が群れ集っており、道に落ちていた玉藻の着用していた衣服をめぐっての大乱闘の真っ最中。

どうみても本気の殴り合いであることから、間違いなくこの大学で一、二位を争う美女で、男性達の秋波を毎日一身に受けている玉藻の着衣をめぐってのことと確信する。

ミネルヴァはその乱闘に参入して大親友の着衣を取り戻そうかとも思ったが、落としていったのはどうやら衣服だけで貴重品は含まれていないことを見てとると、参戦を見送り、代わりに携帯念話を取り出して彼女のルーン番号をかける。

しかし、予想通り、玉藻の持っている携帯念話に着信はしているようなのだが、出る気配が全くなく、ミネルヴァは溜息を吐きだしながら諦めて携帯を懐に戻す。

「たまちゃんに何があったんだろ。う～ん。とりあえず、家に帰って連絡を待つか。私の力が必要なら絶対遠慮せず念話してくるだろうしね」

小学校時代からの付き合いがあり自他ともに認める大親友である玉藻のことを信頼し、待つことに決めたミネルヴァは、その場を後にして家路につくことにした。

後にミネルヴァはこの日の夕方に起こることになったある重大事件の顛末を知り、何故、このとき親友の自宅前で張り込んでおかなかったのかと、人生最大の後悔をすることになるのだが、それはまた別の話。

第六話　『そして、二人は巡り合う』　その2

太陽はとっくに西の果てへと姿を消し、薄闇が支配するようになったころ。

城砦都市『嶺斬泊』最大の繁華街『サードテンプル』に潜む闇の世界がゆっくりと目を覚ます。

都市営念車の駅の南側、有名デパートや商店街が立ち並ぶ華やかな表通りのちょうど真逆。

駅の北側、『サードテンプル』が持つ都市最大の歓楽街という闇の世界。

そこは眩い光で溢れている表通りとは逆に、派手派手しい光と光の合間に、いくつもの深い闇を内包した世界。

人のあらゆる欲望が形となり、混ざり合い、表通りとはまた違うエネルギーを生み出してその闇を深めていく。

そんないくつもの闇が作り出されていく狭間を、一羽のカラスが駆け抜けていく。

カラスはこの闇の世界の住人の一人。

同じ闇に潜む住人達からしてみれば、カラスがこの地を訪れ大きく羽ばたき騒ぎを起こすことは別段珍しいことではない、むしろ、普段通り、いつものことだ。

だが今日に限っていえば、それはカラス自身の思惑と大きく違っていた。

今日は、派手に動くつもりは全くなかったのだから。

何故なら、今日はカラスの今後の人生に関わるかもしれない重大な出来事がある日だったから。

だから、今日だけは大人しくしていよう、そう固く心に誓い、闇の中の闇へと身を潜め、影と影の間を慎重に進んでいたというのに、人生はままならぬものである。

とてつもなく不本意であったが、カラスは全力で闇と闇の狭間を

駆け抜けなくてはならない状況へと追い込まれていた。
狩人達がカラスを狩るためにに現れたからだ。
闇の世界の住人達の中でも、特に多くの敵を持つカラスにとって、彼を狙う狩人の出現は特別なことではない。
しかし、今回は少しばかり事情が違う。
今、カラスを追いかけてきている者達は、これまでの敵とははっきりと違うのだ。
間違いなく、今までカラスが相手をしてきた者達の中でも最強に近い位置にいるであろう者達。
このあたりで息巻くチンピラや、近隣の高校や中学を根城にする不良達とは完全に別モノで、その実力差は歴然、舐めてかかるわけには決していかない。
しかも、その実力者とやらは一人ではない。
頭の痛いことに二人も存在していた。

一人は、現役高校生でありながら、プロの『害獣』ハンターとして第一線で活躍しているツワモノ。
在籍している高校の中では三大実力者としてあげられ、彼に正面から喧嘩を売るだけの胆力を持つ者は片手の指ほどもいない。
城砦都市『嶺斬泊』に所属するあまたの傭兵旅団の中でも十指に入る強さを誇るという『剣風刃雷（けんぷうじんらい）』に所属。
大人顔負けどころか、ベテランの『害獣』ハンターですら舌を巻くという凄まじい武力と胆力を誇り、若干十七歳にして旅団の副団長となったという恐ろしい戦士。
中学時代にプロになってからこれまでの五年間であげてきた戦績は華々しいものばかりであり、この城砦都市最強と言われ傭兵達の頂点に君臨している英雄『天剣絶刀獅皇帝（てんがあたえしまもりがたな）』に、近いうちに並ぶのではないかと目されているスーパールーキー。

そして、もう一人は、城砦都市『嶺斬泊』東地区に存在している

都市立御稜高校内で、スーパーアイドルとしてその名を轟かせている超美少女。
美しいばかりではなく、学校の成績も優秀、スポーツ万能、性格も非常にいいとまさに完璧超人の彼女。
しかし、高校内では決して明かされることのない凄まじい暗黒面が彼女にはある。

『不良潰しの不良（アウトローイーター）』あるいは『龍姫虎侠（ダブルインパクト）』

中学時代に不良達が彼女につけた二つ名。
彼女こそ、この城砦都市『嶺斬泊』東地区の不良達の頂点に君臨したという伝説の不良集団『ＧＴＧ』をまとめあげていたという二人のリーダーの内の一人。
当時、近隣の不良達に片っ端から喧嘩を売って完膚なきまでに叩き潰し続け、東地区の不良達はみな『ＧＴＧ』の傘下に組み入れられたか、あるいはそれをよしとしないものたちは息をひそめて彼女達の前には決して出ないようにしていたという。
高校生になると同時にそれらの行為からすっぱり足を洗ったものの、その腕は全く落ちてはいない、いや、むしろ、中学時代のときよりも真面目に武術に取り組むようになった分、さらに磨かれているといっても過言ではないだろう。
『外区』に住むバケモノ相手の実戦経験こそないが、対人戦闘においては間違いなくもう一人よりも実力は上。

彼らは御稜高校にその名を轟かせる二人の魔『人』

『龍乃宮（りゅうのみや）　剣児（けんじ）』と『龍乃宮（りゅうのみや）　姫子（ひめこ）』

元々、今日二人はこの『サードテンプル』に出張ってくる予定はなかった。

剣児は三人の恋人達といつものように遊びに出かける予定だったし、姫子は生徒会に用事があるという妹の瑞姫に付き合う予定となっていたのだ。

いつものように退屈だが平和な放課後の一時が流れるはずだったのに、剣児が気まぐれに発した一言が事態を急変させる。

『姫子、今日さ、腕試しに『カラス狩り』に行ってみようぜ』

前々から『サードテンプル』に出没する謎の怪人『祟鴉（たたりがらす）』に興味を持っていた剣児が、放課後になってから腕試しがしてみたいと言い出したのだ。

正直、剣児にしてみれば、断られるのを承知の上で、軽い気持ちで言ったつもりだった。

ある理由からそういった行為からはすでにきっぱり足を洗っている姫子である。妹である瑞姫の手伝いの予定もあったことだし、当然断ってくるだろうと思って待ちかまえていたのであるが、なんと、姫子はすぐに了承してしまったのだった。

あまりにもあっさり了承されてしまい、戸惑う剣児。

いや、それどころか、他にも戦力を連れてくるといって、中学時代につるんでいた自分の元配下達（姫子自身は元と思っているが、当人達は今でも姫子の部下だと思っている模様）まで連れてくる始末。

いったいどういう心境の変化なのか、荒事からはもう足を洗うと言って、ここ一年ほどは自分からそういう行動を起こすことはなかったというのに。

妹の突然の心変わりがわからず、頭を捻りまくる剣児。

しかし、剣児の恋人達はどうも姫子の心境がわかったようで、何故かうんうんと頷きあっていたりしたが。

『ああ、あれでしょ。今日、朝、騒いでいたとかいう件でしょ』

『うんうん。なんか彼、『サードテンプル』で『人』と待ち合わせていることをうっかり姫子さん達にしゃべっちゃって、大騒ぎになっちゃったって聞いたわ』

『多分、『崇鴉（たたりがらす）』に勝負を挑むとかいうのは、口実だよなあ』

『カラスを探す振りで、彼のことを探すつもりなのね～。だから、元部下の人達連れて行くのね～』

『複雑な乙女心ってやつよね～』

『ねぇねぇ、うまく彼のことみつけられたらどうするのかしら？』

『そりゃ、勿論、姫子さんのことだから間違いなく乱入するでしょ。『カラスに勝負を挑もうと思って探していたら偶然出会っちゃったの』とかなんとか言いながら』

『それで、相手が女性だったなんかしちゃったりなんかしたら』

『血の雨が降るわね～。間違いなく、修羅場よね～』

『『『どっちかというとそっちの勝負がみてみた～い』』』

『なあなあ、俺にもわかるように説明してくれよ。なになに、なんなんだよ？』

『『『剣児くんには絶対教えない』』』

『なんでだあああああっ！？』

このあともしつこく何度も食い下がってみたが、結局、恋人達は頑として口を割らず、剣児は妹の真の参加理由を知ることはできなかった。

その後、やたら張り切る姫子によって『カラス狩り』計画は仕切られ、きっちりパーティは完成。

予想外の展開に唖然とする剣児を強引に引きずり、姫子はカラス特別討伐隊と共に狩場となる『サードテンプル』へと出撃する。

こうして剣児によって気まぐれに提案された『カラス狩り』計画は発案者の予想とは違う方向へ転がりだした。

それも凄まじい勢いで、しかも変則極まりない転がりかたでだ。

彼らが『カラス』と呼ぶターゲット、『サードテンプル』の怪人『崇鴉（たたりがらす）』は、彼のテリトリーである『サードテンプル』の裏街に常駐しているわけではない。

その行動パターンは実に変則的であり、神出鬼没。

いつその姿を現すかは誰にもわからないし、予想できない。

それだけに狙って遭遇するのは非情に困難なことで知られている。

そんなレアターゲットを狙うわけであるから、当初討伐隊リーダーの剣児は、そう簡単には見つからないだろう、いや、下手をするとさんざん探して無駄足ということもあるだろうなと考えていた。

特に今回の相手は異様に警戒心が強く、用心深いことで知られる『崇鴉（たたりがらす）』である。ちょっとやそっとで彼を捕まえることはできないだろう。そう思っていたのであるが・・彼の予想はまたもや裏切られる。

カラスを討つ前には、まず彼を見つけ出さなくてはいけない。そのための捜索作戦については事前に学校で打ち合わせをしていたわけだが、念には念を入れて、今一度現地で作戦内容の刷り合わせをしておこうと、立ち寄ったのは都市営念車『サードテンプル』駅の駅前にあるファーストフード店『魔空・ド・鳴門』。

それぞれ注文を済ませ、店内の一番奥にある大テーブルのところに陣取り作戦会議を始めようとした、まさにそのとき。

彼らが座る大テーブルのすぐ横にある男性用トイレからフード付きのぼろぼろの黒いコートを着用した小柄な人影がひょこひょこと姿を現した。

最初にその人物に気がついたのは、姫子が連れてきた武闘派集団『ＧＴＧ』時代の元配下の一人である黒猟犬（オルトロス）型獣人族の少年エシルリスト。

トイレ側の通路に背を向けて座る剣児や姫子達主要メンバーとは逆に、通路側を向く形で座っていた彼は、捜索作戦の概要を今一度詳しく説明していた自分達の元リーダーである姫子の声にじっと耳を澄ませていたのであるが、ふと自分の視界の中に人影が入ることに気がついて何気なくそちらに注意を向けた。

すると、通路を歩いて通り抜けようとしていたその人影も、エシルリストの視線に気がついたのか、エシルリストに合わせるようにして顔だけをこちらに向けてくる。

一瞬交錯する四つの視線。

次の瞬間、二人はそれぞれに何かを悟って動揺し、身体を仰け反らせる。

エシルリストは、人影の顔に張りついている『崇』の仮面で、自分の目の前にいる人物が誰なのかを理解してしまったがゆえに。

人影のほうは、テーブルに座る面々が思いきり自分の知りあいであることを悟ってしまったがゆえに。

二人は、それぞれの思惑からすぐに決断し、行動へと移る。

黒いコート姿の人物は、すぐにテーブルのほうに背を向けると、猛ダッシュで店の外へと走り出し、そして、エシルリストは。

『か、カラスだ！！　カラスですよ、リーダー！！　剣児さん！！』

『な、なに！？』

姫子と剣児にそう叫ぶや否やテーブルをひとまたぎで飛び越え、外に飛び出していった人影・・自分達のターゲットである『祟鴉（たたりがらす）』を猛然と追いかけ始める。

仲間の突然の行動をしばし唖然として見送っていた姫子と剣児であったが、やがてぼんやりと顔を見合せる。

『あいつカラスっていったよな？』

『うむ、言ったな』

『カラスって、空を飛ぶカラスじゃないよな』

『多分違うと思うぞ。一瞬だけエシルリストの前を走り去っていく人影の姿が見えたが、真っ黒なコートを着ているように見えた』

『あ～、それってターゲットの『祟鴉（たたりがらす）』じゃね？」

『うむ、私もそう思う』

『『って、ぼんやりしてる場合じゃない！！』』

ようやく事態を把握した姫子と剣児は、未だに事態を把握できていない他のメンバー達を促して慌てて席を立つと、先に追跡したエシルリストを追って店を飛び出していく。

『やっべぇ、俺としたことが完全に出遅れちまったぜ。おい、姫子、先に追いかけていったおまえさんのところのエシルリストとかいうツレは一人で大丈夫なのか？』

「心配いらん。黒猟犬型獣人族（オルトロス）はあまたの種族の中でも特に鼻が利く種族で、そして、奴は一族の中でも特に優れた追跡能力の持ち主だ。任せておいて問題ないだろう。ちょっと待て、一応確認してみる』

走りながら懐からシルバーメタリックのなかなか渋い携帯念話を取り出した姫子は、携帯のアドレスから一つのルーンナンバーを選び出し念話をかける。

ほどなくして相手と繋がり、短いやりとりをしたあと、携帯の通話を切って再び剣児のほうへと顔を向け直す。

『すまん、剣児。姿を見失ってしまったらしい。相手はエシルリストの能力を知っていたのか、強烈な匂いを発する何かを散布して自身の匂いまで消してしまって追跡することは不可能ということだ』

先程までの自信満々だった様子はどこへやら、自分の配下の思わぬ失態に落ち込んだ様子で口を開く姫子。

その報告に剣児は小さな溜息を吐きだすが、すぐに嬉しそうな表情へと変わる。

『やはり一筋縄ではいかんか。が、そうでなくては面白くない』

『うむ、まあ確かにな。で、どうする剣児？』

『どっち方面に逃げたのかわかるか？』

『北のほうらしい』

『ああ、廃ビルや空き地がいくつも存在しているエリアだから、奴が隠れるには絶好の場所か。よっしゃ、それじゃあ、二手に分かれ

て捜索しよう。まだそれほど遠くには行っていないはずだ』

『それはいいが、戦力を分散させるのか？』

捜索の範囲を広げるためにも、別れるのは間違いなく得策だ。

しかし、その分、集中している戦力が二手に分かれることで文字通り半減する。

相手からしてみれば各個撃破する絶好の機会になるわけであるから、それを懸念してのことだったが、剣児は首を横にふたつほど振ってニヤリと笑みを姫子に返す。

『おまえのところのチームも、うちのチームも一騎当千のメンツだぜ。あいつが仲間を呼んだとして負けると思うか？　そもそも俺達の目的はなんだ？　腕試しだろ？　手強いほうが燃えるってもんだぜ』

『ふむ。まあ確かにそれもそうか。わかった。とりあえず、見つけたらお互い携帯に必ず連絡を入れるように。まあ、おまえのことだから、どうせ私を待つ前に仕掛けるだろうがな』

『よく言うぜ。おまえだってそうだろうが』

呆れたような口調で返す剣児に対し、姫子は目の前の異母兄とそっくりな獰猛な肉食獣の笑みを作って見せる。

そして、二人は同時に頷きを返すと、自分達のメンバーを連れて左右へと別れる。

夜の鳥を追いつめるために。

第六話　『そして、二人は巡り合う』　その3

龍乃宮兄妹は自他共に認める根っからの喧嘩好きであり、生れながらの喧嘩屋である。

龍という種族が元々持っている荒々しい特性のせいということもあるだろうが、それをさっぴいても二人とも戦うことが純粋に大好きであり、特に強いと言われている相手と戦ってそれを圧倒的な力で強引にねじ伏せることを至上の喜びと感じていた。

今まで二人は数々の相手をその剛腕、あるいは剛剣でねじ伏せて来た。

時には一人で、時には仲間達と共に、自分達と近い年代の少年少女限定ではあったが、彼らの中でも特に腕っ節の強い者達とは大抵拳を交え、ほとんど撃破している。

中には剣児のライバルである陸（ルー）　緋星（フェイシン）などのように、正面から彼らを退けた強敵がいないわけではなかったが、まあ、ほぼ全勝といって差し支えないほどの戦績を誇っていた。

そんな彼らであるから、『サードテンプル』で悪名を轟かせる怪人『祟鴉（たたりがらす）』のことが気になっていないわけがない。

『祟鴉（たたりがらす）』の武勇伝が一つ、また一つと耳に入ってくるたびに、二人の胸にふつふつと何かが込み上げ燃え上がっていく。

『戦ってみたい』

二人がはっきりそう自覚するようになるまでにそれほど時間はかからなかった。

『祟鴉（たたりがらす）』は今までに二人が出会ったことのないタイプ。

噂話に登場する彼の戦い方を聞く限り、単純に拳で語るタイプでないことはないようだ。勿論、集めた数に任せて圧倒する相手でもない。

どうやら、こちらが思いもよらぬ奇策を駆使して戦うタイプのようなのであるが、それが具体的にどういった戦法であるかは噂話の内容だけではしかとはわからなかった。
しかし、それが逆に二人の好奇心を刺激するのだ。
自分達が今まで戦ったことのない相手。

『戦ってみたい、どうしても戦ってみたい』

口には決して出さないが、二人の胸の奥底では闘志がぐつぐつとマグマのように煮えたぎり、どんどん大きくなっていく。
しかし、一応今の二人には立場というものがある。

一人は将来を期待され、徐々に世間から注目を浴びつつある超新星の『害獣』ハンター。
もう一人は、龍族の三大権力者の一つ『乙姫（おとひめ）』の次代になることを定められた才色兼備のスーパーアイドル。

流石の二人も相手から売られるならばともかく、無頼者同然に自分から喧嘩を売るのには少々抵抗がある。
しかも、さらに二人を気おくれさせたのが、異母妹瑞姫のことだ。
縁は誠に奇なもので、どういうわけか件の怪人は彼らの妹である瑞姫の恩人であり、想い人でもある。
それを考えると、どうしても積極的になることはできず、今までなんのアクションも起こすことなくやってきたわけだ。

ところが、今回、いろいろなことが偶然重なり、二人は件の怪人と戦う為に飛び出して来てしまっている。
怪人に喧嘩を吹っ掛けるにあたり自分達に何の大義名分もないことは、二人自身がよくわかっていた。
だが、一度『戦う』と決めてしまった以上、それを翻すつもりは

今の二人の心の中には微塵も存在しない。

そこにあるのは、ただひたすらに『喜』であり、『楽』であった。

『財力』、『権力』、そして、『暴力』。

全ての力を兼ね備えた『龍』族という超上級種族に生まれてきた二人であるが、その力を存分に振う機会はなかなかに与えられない。

『財力』を使いきるほどに欲しいものがあるわけではない。

『権力』は持っているだけでほとんどの相手に膝をつかせてしまう。

そして、身に着けた『暴力』を戯れにでも行使すれば、大概の相手は壊れてしまうのだ。

実に面白くない、非常に面白くない。

与えられた力を存分に使ってみたい、何の遠慮もなくただひたすらに何かにぶつけてみたかった。

そして、今、それができるかもしれない相手がすぐ目の前にいる。

剣児は闇と影とが支配する『サードテンプル』のさびれた裏街の中を疾駆しながら、己のうちにわき上がってくるどろどろとした真っ赤で真っ黒な感情を隠そうともせずに、そのままそれを『笑み』として浮かび上がらせる。

「剣児くん、楽しそうですわね」

三人の恋人の内の一人、金髪の陽光樹妖精族（サンエルフ）の少女が横を走る剣児の顔を見て、呆れとも苦笑ともとれる表情で声をかける。

「わかるか？　わくわくが止まらねぇよ」

自覚しているのかいないのか、いつもの陽気な彼が浮かべている太陽のような笑顔とは全く逆の、ドス黒い闇黒世界そのものとでもいうような笑顔を恋人達に向ける剣児。

「そこらへんにいる不良どもとも違うし、だからといって俺が相手をしてきた一流武術家連中とも違う、勿論外にいる何考えているかわからねぇ『害獣』どもとも違うんだ」

「何が違うっていうんだ？　剣児」

新しいおもちゃをみつけた無邪気な子供のように、しかし、血走った目を異様にギラギラと光らせながら嬉しそうに語る剣児の様子に若干ひきながら、三人の恋人の内の一人、ダークブラウンの髪の月光樹妖精族（ルナエルフ）の少女が尋ねかける。

「匂いだよ。すっげぇ、いい匂いがするんだ」

「匂い？」

「そうだよ、匂いだよ。多分、ここにはいないが姫子も感じているはずだ。上質な、獲物の匂いだ。そうだな例えて言えば、捕まえて引き裂けばとてもいい声で哭いてくれる、そんな獲物の匂い」

「剣児くん、久しぶりに病気が出ましたね」

日常生活を送る学校内でも、『害獣』と死闘を繰り広げる『外区』でも滅多にみせることのない狂気のオーラ。

それを存分に放ちながら、嬉々としてしゃべり続ける異様な剣児

の姿を見て、三人の恋人の内の一人、黒髪の風狸(ふうり)族の少女は悲しげな表情を浮かべて首を横に振る。

「最近ずっと大丈夫だったからてっきりもう治ったものだと思って油断していたわ」

「『害獣』ハンター　一級プロの免許に合格して、『騎士』クラスの『害獣』と戦えるようになってからは、すっかり落ち着いてきていましたものね」

「剣児の顔見てみろよ。あの喜悦に歪んだ顔。あたしらとデートしているときでもあんな顔はしやしねぇ。ありゃ、あたしらが止めても絶対話を聞かないぜ。相手には悪いが、血を見ないと終わらないと思う」

「頭が痛いですわ」

人には絶対知られるわけにはいかない剣児のドス黒い闇黒面を知る三人の恋人達は、顔を見合せて深い深い溜息を吐きだす。

「仕方ありません。できるだけ手早く済ませ、事が露見する前に剣児くんを連れてこの場を離れましょう」

「そうね、見つかったら間違いなく大騒動になるわね」

「『期待の新人ハンター、路上で大喧嘩。相手は意識不明の重体』なんて一面トップの新聞が売り出されて見ろ。再起不能の一大スキャンダルだ。剣児はもちろん、あたしらのハンターライセンスも間違いなく永久剥奪だぜ」

「そうならないようにするためにも、速やかに事態を収束させるのです。全ては、我らが『千剣の一（ソード・オブ・ソード）』の為に」

「「了解」」

互いの顔を見合せて頷きあった三人は速度をあげると、狂喜の疾走を続ける恋人の背後を守るようにしてぴったりと張りついた。

そして、四つの人影は再び一つとなって、闇と影で作り出された不気味な裏通りを走り抜けて行く。

いったいどれくらいの時を四つの人影は走り続けたであろうか。

追跡劇は唐突に幕を閉じる。

「み～ぃつけたぁ」

「「「え？」」」

三人の耳に愉悦に満ちた声が聞こえた。

その声は間違いなく前を疾走している三人の共通の恋人の声。

三人が言葉の意味を問いかけるよりも早く立ち止まった剣児は、ぐにゃりと不気味な笑みを浮かび上がらせて、抜く手も見せずに背中から木刀を引きぬく。

三人は恋人の異様な行動にすぐ様反応することができず、剣児をかなり追い越してしまったところで慌てて立ち止まって急反転。

そして、少し後方のところに立っている恋人のところへ急いで戻ろうとするが、それよりも早く、剣児はすぐ目の前に立つ自動販売機を撫でるようにして木刀で薙ぎ払った。

「「「ちょっと何をしているの・・って、ああっ！？」」」

上下に両断されて宙を舞う自動販売機。
しかし、彼女達の目に映ったのは自動販売機の残骸だけではなかった。
自動販売機の部品と一緒に宙に浮かぶのは黒づくめの人影。
剣児の木刀の一撃をモロに食らってしまったのか、空中で身体をくの字に曲げ、苦しそうに手足をばたつかせながら横向きにすっ飛んで行く。
恐らく自動販売機の影に隠れて剣児達をやり過ごそうとしたのであろう。
見事な隠形の術。
プロの『害獣』ハンターであり、大概の敵の気配に気がつくことができる彼女達を見事にやり過ごしたその腕前は間違いなく自分達と同じかそれ以上のプロ級。
しかし、その恐るべき技術も剣児には通用しなかった。
下手をすればベテランハンターでも見逃してしまいかねない見事としかいいようがない隠形。
その隠形をいとも簡単に見破った自分達の恋人を、驚愕に満ちた視線で見つめる三人。
彼の側にあり、長年一緒に戦って来た間柄であるが、三人は未だに彼の人の能力の全てを把握しきれていない。
いったいどれほどの能力を隠し持っているのか。
流石は次代の龍王と目されているだけのことはあるということなのか。
一瞬の攻防の意味をはっきりと理解した彼女達は、あまりの驚きで茫然と立ち尽くすことしかできない。
そんな彼女達の目の前で、自分の獲物を見つけた凶龍が、今まさにその暴虐の爪を振おうとしていた。
「さあ、俺を楽しませてくれよ」

彼女達の目の前で、凶龍の姿が霞んで消える。
そして、次の瞬間、その姿ははるか遠くの廃ビルの壁際に。
そこには先程の横薙ぎの一撃で素っ飛ばされた黒装束の小柄な人影が弾丸のような勢いで迫る。

「折角だからさ、簡単に死んでくれるなよな。興ざめだからさ」

自分のほうに向かって飛んでくる人影を、舌なめずりしながら血走った目で凝視した凶龍は、再び抜く手も見せずにその手にした木刀を振う。
一つ、二つ、三つ。
木刀が振われるたびに肉を打つ嫌な音がビルとビルの間にこだまする。
四つ、五つ、六つ。
空中で剣児の斬撃に捕らえられてしまった人影は、思うさまに木刀の餌食となり、音が響くたびに苦しげに宙でのたうちまわる。
まるで壊れた人形を何度も空中に放り投げるように、宙を踊りまわる、いや、踊らされ続ける人影。
自由のきかない空中にあるために、どうすることもできず人影はただただ木刀に打たれ続けるのみ。
なんとか防御を態勢を取ってしのごうとしていることは、傍から見ていてもよくわかるが、それにも限界がある。
徐々に身体の動きが鈍り弱ってきているのがわかったが、しかし、そのことに気がついているのかいないのか、それを行っている凶龍は木刀を振う速度をさらにあげていく。

「そらそらそらそら!!　どうしたどうした?　空中で踊っているだけか?　くやしかったら何かしてみろよ?」

女性受けのいい端正で甘いマスクを、愉悦に歪んだ醜悪なそれへと変化させ、凶龍は心から楽しそうに木刀を振い続ける。
それに対して何をすることもできずにただただ弄られ続ける黒い人影。
いったいどれだけの斬撃を浴びたのか、やがて、人影は空中でぐったりとして全く動かなくなってしまった。
その様子を地面から不思議そうに眺めていた凶龍だったが、やがて、小首を傾げると大きく振りかぶってトドメの一撃を放ち人影を別の方向へと弾き飛ばした。

「あっれ～？」

再び空中を弾丸のように飛んで行った人影を、不思議そうに眺める凶龍。
その人影は、徐々にその高度を下げて行き、やがて地面へ。
盛大に土煙を上げながらゴロゴロと転がっていった人影は、壊れたマネキンのように地面にうつ伏せの状態で倒れ動かなくなった。
それを見て、物凄く面白くなさそうな表情を浮かべる凶龍。

「おっかしいなあ。手応えのある相手だと思ったんだけどなあ。ずい分ショボイ相手だったなあ」

木刀を肩に担ぐようにした剣児は、そのままその木刀で自分の肩をぽんぽんと叩きながら一人呟く。
これだけの暴虐をしておきながら、罪悪感を一切感じさせない表情。
まるで買ってもらったおもちゃが自分の想像と違っていて、不貞腐れてしまった子供そのものといった様子。
少し離れたところで恋人のそんな姿を呆然と見つめていた三人の恋人達だったが、やがてのろのろと顔を動かしてはるか彼方に倒れ

ている無残な結果のほうに視線を向け、一斉に顔を青ざめさせる。

「や、やっちゃったかぁ」

「予想してはいましたけど、ここまでやっちゃいますか」

同じように真っ青になった顔を見合せた月光樹妖精族（ルナエルフ）の少女と陽光樹妖精族（サンエルフ）の少女は、深い溜息を吐きだすとほぼ同時にがっくりと肩を落とす。

ふと、三人目の声が聞こえてこないことに気がついた二人が、視線を風狸族（ふうり）の少女のほうに向けてみると、自分達と同じような青い顔をしていながら、彼女は両腕を組んで、非常に難しい顔をして考え込んでいた。

「どうしたの、メイリン？」

「これ・・龍乃宮本家に連絡して、内々で処理してもらったほうがいいかもですね」

「え？」

「剣児くんを引っ張って帰っただけじゃ、多分誤魔化し切れないですよ、きっと」

「な、な、なんでだよ！？」

「鮮やかにやり過ぎなんですよ。木刀で劣化ミスリル製の念気自動販売機を上下真っ二つにして、尚且つ、あれだけ人体の急所に無数の斬撃を入れているんですよ？　剣術に詳しい人があそこで倒れている人の身体のあとを調べば、どういう流派でどういった技が使わ

れたかなんてすぐにバレます。しかも、あれだけの超絶な技を使える人が、この都市に何人いると思います？　すぐに足がついて剣児くんが犯人だって特定されちゃいますよ」

「「そ、そんなあああああっ！！」」

事態の深刻さにようやく気がついた二人は、青から白へと顔色を変化させる。

「と、ともかく、龍乃宮本家と姫子さんには私から連絡しておきます。その間にジャンヌさんは剣児くんを確保しておいてください。それからフレイヤさんは、あそこで倒れている人がどの程度のダメージを負っているのか・・あるいは、その・・もう生物として動かない状態なのか、調べていただけませんか？」

懐からライトグリーンの携帯を取り出した風狸（ふうり）族の少女は、ルーン文字を入力しながら残る二人に指示を出す。

指示を受けた二人は一瞬顔を見合せて逡巡する様子を見せたものの、もう一度深い溜息を吐きだして首を横にふると、のろのろと身体を動かして自分達のすべきことをするために行動を開始しようとした。

だが。

「おおっと。やっぱりな」

再び三人の耳に聞こえてくる愉悦に満ちた声。

声が聞こえたほうに三人が視線を向けてみると、そこには先ほどと同じ、醜悪な笑みを張りつかせた恋人の姿が。

そして、その視線は倒れている人影のほうへと向かっていた。

三人は恋人が見つめている方向に恐る恐る視線を向けてみる。

「「「う、うそ」」」

そこには、ゆっくりと身体を起き上がらせようとしている黒づくめの怪人の姿があった。

「やっぱ、死んだふりだったか。そうこなくっちゃなあ。お楽しみはこれからだもんなあ」

にやにやと嫌な笑いを浮かび上がらせながら、ゆっくりと黒い怪人めがけて歩みを進ませていく剣児。

再び暴虐の嵐を巻き起こすために、凶龍と化した少年が進んで行く。

しかし、凶龍は全く気がついていなかった。

自分が、絶対に怒らせてはいけないモノを怒らせてしまったことを。

第六話　『そして、二人は巡り合う』　その４

カラスは知っていた。
知っていたのだ。
凶龍が心の奥底に隠し持つその凶暴性を。
暴虐に走るその危険極まりない本性を。
それゆえに、カラスは凶龍を『友達』とは認めてはいない。
強者でも弱者でも容赦なく引き裂き滅ぼす狂暴な爪と牙。

幼い頃から、カラスは凶龍を見つめ続けてきた。
自分とは対照的に何もかもを与えられ、あらゆる力や才能をその身に宿す天に愛された寵児である凶龍を。
風の吹くまま、気の向くままに力を振い続ける嵐の凶龍。
その気質は昔から全く変わらない。
敵も味方も、強者も弱者も関係なくその嵐に巻き込み吹き飛ばし無残に破壊する。
本人自身は全くこれっぽっちも悪気がなく、巻き添えで誰かが傷つこうとも関与しないし、勿論、謝りもしない。
それどころか自分が『悪』を成しているという自覚すらない。
善悪の区別のつかない幼い子供が、積み上げた積み木を無邪気に壊して崩すように、凶龍はその力を振い続けた。

カラスがカラスではない時、カラスとは別の顔で暮らしている日常生活において、凶龍はカラスの『幼馴染』という位置にいる。
小学校時代から凶龍と付き合いのあるカラスであるが、カラスが凶龍の側にいたのは、凶龍の味方になろうとしたわけでも、凶龍を助けようとしたわけでもない。
凶龍の側にいたほうが、凶龍に意味なく傷つけられる『人』達を助けやすかったからだ。

そして、知り合いでいることで凶龍の暴力が吹き荒れる方向をほんの少しでも変えることができたからだ。
そうして、小学校時代は凶龍の側にはりついて、凶龍の暴力で出る被害をなんとか食い止めていた。
しかし、両親の仕事の都合で、小学校の卒業と同時に、カラスは別の城砦都市へ転校し凶龍と別れることになる。
中学に進級するだんになっても、相変わらず自分の行為がいかなるものであるかを学ぼうとしない凶龍。
そのことに不安を感じたカラスは、凶龍の暴力を別の方向に向かわせるべく『害獣』ハンターになる道を勧める。
凶龍はカラスの思惑通り中学入学と同時に『害獣』ハンターの道へと進み始め、その無軌道な暴力の嵐は『人』から『害獣』へと矛先を変えていたのだが。

カラスは『悪』を認めていないわけではない。
己自身が『悪』であると知っているが故に、人が生きている上で避けて通れぬ『悪』の道を否定する気はさらさらない。
自分自身も生きていくために、数限りない『悪』の行為を繰り返してきたし、これからもそれを止めることはないだろう。
しかし、彼は、己が成した『悪』の行為から目を背けたりはしないし、己が成した行為を正当化させるために虚飾に満ちた言葉で飾ったりはしないし、そして、己が成す行為がどんな意味を持つのか、それによって何を背負わなくてはならないかを嫌というほど覚悟している。

どれほど言葉を飾ろうとも『悪』は『悪』なのだ。

一度生み出された負の連鎖は、断ち切ることがとてつもなく難しい。
自分が成した『悪』は別の『悪』を生み出し、その『悪』がまた

別の『悪』を呼ぶ。
だが、しかし。
世の中には『悪』を知り、『悪』を行う者によってしか消し去れぬ『悪』が存在している。
だから時にはどれほど重くても辛くても走り出さなくてはならない時があるのだ。
それを背負って走り続けなくてはならないときがあるのだ。
他者を傷つけると同時に自分自身を傷つけ、ボロボロになりながらも走り続ける者達がいる。
時には誰かの身代わりとなって、時には大事な何かを守るために、時には自分自身が生き残るために、必死に懸命に走り続ける。
カラスはそんな者達と共に飛ぶ鳥だ。
心弱くとも必死に懸命に生きる者達の悲しみと優しさに満ちた『悪』の夜空に哭く鳥なのだ。

決して、己の傲慢を満たすために『悪』を成す者の味方ではない。

たまたま目に映った道端に咲く花が美しいから戯れに引き抜いて、飽きたら捨てる。
たまたま目に映った道端を行くアリが弱そうだから戯れにつつき、飽きたら踏みつぶす。

凶龍の本性はやはり変わってはいなかった。

高校に入学し、同じクラスになってから、カラスは再びずっと凶龍を観察し続けてきた。
小学校時代に比べれば、その嵐の矛先は一応弱者ではなく、強者達へのみ向かっていた。
恐らく、中学時代に付き合いだしたという三人の恋人達が巧くコントロールしているからだろう。

やれやれ、『害獣』との戦いで『人』として少しは成長したのかなと思い、自分の不安が取り越し苦労だと思おうとしたのだが、しかし、カラスは凶龍の挙動にどこか引っかかるものも感じ、胸を撫で下ろすことができなかった。

何かがおかしい。

何かが引っかかる。

毎日のように学校で無邪気に繰り返されるバカ騒ぎ。
底ぬけに陽気で、誰にでもフレンドリーなクラスの人気者。
しかし、その瞳の中で光る奇妙な色が気に入らなかった。
非常に、物凄く、とてつもなく気に入らなかった。
巧妙に隠されているが、そこにある光は、カラスが普段からよく知っている色に似ていた。
ありもしない種族的優位を信じ、上から見下ろすような傲慢な光。

誰の目にあってもその色の主張は同じだ。

『自分は『人』よりも強く生まれた、家には金もある、他者を支配するだけの権力だってある。だから、他『人』よりも偉い。その偉い俺が我慢する必要なんてない。誰を踏みつけたって、潰したって、壊したって構わない。だって、俺は偉いんだから』

気のせいだと思いたかった。
『害獣』との戦いを潜り抜け、他者の痛みを、苦しみを、悲しみを知ったと思いたかった。

しかし、それこそが気のせいだったのだ。

凶龍はやはり凶龍だったのだ。

凶龍は『崇』の仮面の裏側に隠されたカラスの正体を知らない。しかし、仮面をかぶった『カラス』という存在自体についてもどういう者であるかを知ってはいないはずだった。

なぜならば、一度もカラスの姿で凶龍と会ったことがないからだ。間違いなく、凶龍は己自身でカラスがどういう『人』物であるかを自分の目と耳で確認し判断したわけではない。

おそらく噂話だけを聞いて、その噂話の中のカラスを知っているに過ぎない。

にも関わらず、凶龍は出会い頭に一般人なら間違いなく死んでしまうほどの容赦ない攻撃を敢行した。

自分の暴力を存分に振うことができる相手なら、誰でもよかったのだろう。

特に、一方的に踏みにじることができるなら、尚、よかったに違いない。

本人は、強い相手を好むと常々言っているが、決してそうではないことをカラスはよく知っている。

強い相手がいいのは、強い相手ほど自分の強さに鼻をかけていることが多いからで、凶龍はその鼻をへし折って絶望に顔を歪める姿をみるのが何よりも好きなのだ。

そう、凶龍は天狗になっているものの鼻をへし折るのが好きなのであって、必ずしもそれが強い相手である必要はない。

強かろうと、弱かろうと、自分の腕に自信を持っているものの自尊心を木端微塵にできればそれでいい、そして、相手が弱ければ労せずしてそれが達成できるわけだから、尚いいというわけだ。

カラスの心友である朱雀族の少年は、拳で語り合う性質を持っている。

一度拳を交えれば、相手とわかり合うことができるし、もし、その拳から伝わってくるモノが己の魂に響くものであるならば、自分から折れてでもわかり合おうと努力をする少年だ。

しかし、そんな彼が何度拳を交えても、この凶龍には心を開こうとはしなかった。

最後まで、凶龍を叩き潰すために拳を振るい続け、今も、そのスタンスを崩していない。

そう、拳を交えたからこそ彼にはわかっていたのだ。

凶龍の本性が。

ぼろぼろになった姿でゆらりと立ちあがったカラスは、仮面の裏側に隠れた瞳に、怒りの炎を燃え上がらせる。

ゆ・る・さ・な・い

許さない、決して許さない、断じて許さない。

例えそれが長年付き合いのある自分の知り合いであったとしても関係ない。

ここはカラスのテリトリーだ。

その気になれば、いくら超新星といわれるスーパールーキーであったとしても捜し出すことができないほど見事に隠れ逃げることは可能だった。

しかし、ここで背を向けて目の前の凶龍を見逃せば、いずれまた同じことを繰り返す。

正直にいえば、あまりやりたい相手ではない。

幼い頃から付き合いがあり、嫌というほど相手の凶暴な本性を知っているカラスであったが、同時にかの凶龍が甘えたの寂しがり屋

の子供であることもよ～くわかっていた。
出来の悪い弟のように思っている節がないわけではない。

これほどの暴虐を受けながら、我ながら甘いとはよくわかっていたが、それでもカラスは己自身の心をふっ切る為に最後の確認にでる。

木刀を肩に担ぎ、にやにやといやらしい笑みを浮かべながら殊更にゆっくりと歩み寄ってくる相手に対し、カラスは漆黒の手袋に包まれた手を迫りくる凶龍へと向ける。

「あん？　何の真似だ？」

カラスが妙な手振りをしていることに気がついた凶龍は、その場に立ち止まって小首を傾げながらカラスの手振りを観察する。

「ん？　どうしてもやるのかって聞いているのか？」

手振りが示している意味を察した凶龍が聞き返すと、カラスはこっくりと頷きを返し手振りの意味が間違ってないことを肯定する。

「やるに決まってんだろ。おまえさ、この辺りで随分名前を売ってるそうじゃねぇか。どうせだからよ、俺にも売ってくれよその名前をさ。どんだけ凄いのか見たいんだよ」

にやにやと笑いながらぽんぽんと木刀で肩を叩く凶龍の姿を見て、カラスは深い溜息を吐きだすが、もう一度何かを伝えようと手振り身振りをしてくる。

「喧嘩をする理由がわからないってか？　別に理由なんかどうだっ

ていいんだよ。ごちゃごちゃ言わずに俺の相手をしろよ。そんで、俺にぶちのめされてくれりゃいいんだよ」

怒っているような笑っているような、実に不愉快極まりない表情で傲然と呟く凶龍に、カラスはもう一度溜息を吐きだして見せたが、不意にその身に纏う気配を急変させる。

闇。

深い深い闇の気配。

近づくだけで呑みこまれそうな深い闇をその全身から噴き出し始めたカラスは、不意に凶龍めがけて親指を立てた拳を突き出して見せると、くるっと拳をまわしてその親指を下へ向ける。

「へ～、ふ～～ん。俺をぶっつぶすってか。『外区』でさんざん『害獣』とやってきた俺をぶっつぶすってか。は～ん。舐められたもんだねえ。かっこいいけどさ、おまえ、絶対後悔すんぜ」

顔に張りついているのは、誰が見ても作りものとわかる寒々しい物凄い笑顔。

しかし、その目は血走って全く笑っておらず、凶悪極まりない光がギラギラと宿っている。

「泣いて土下座してもぜってぇ許してやんねぇ。一生車椅子が必要な身体にしてやんよ」

そう呟いた瞬間、凶龍の姿が再びぶれる。

先程使ってみせた瞬間移動。

龍族の王の一族のみが修得することが許される超武術『形意黄龍

拳』の奥義の一つで『縮地』と呼ばれる技であった。
当たり前であるが、多少かじった程度の者がほいほいと使える技ではない。
生まれながらに武術の才があり、尚且つ努力を惜しまなかった者のみが到達できる高み。
そこに辿りついた者のみ使うことができる神業だ。
何の武術の心得もないカラスに見極められる技では決してない。
最初にカラスに一撃を食らわした時に、凶龍はカラスの身体能力をほぼ把握していた。
はっきり言って雑魚、いや、雑魚以下のクズだ。
それがわかっているから、凶龍は完全に舐めてかかっていた。
相手が得体の知れない、自分が考えつきもしない戦法を使うことはわかっていたが、これだけ身体能力に差があるのだ。
むしろ、その罠を食い破ってやろう。
得意満面で仕掛けてくる罠を正面から叩きつぶしてやるのだ。
そのとき、この目の前の怪人はどんな顔をするのか。
想像するだけでも頬が緩む。

「さあ、見せてみろよ、おまえの戦いぶりを!!」

雄々しく咆哮した暴力の化身は、一瞬にしてカラスの目の前に現れると、手にした木刀を振り上げる。
罠を仕掛けるにしても、術を仕掛けるにしても、目にも止まらぬ速さで動き回る自分を捉えられるはずがない。
暴力の化身は、己の勝利を確信し、目の前のカラスが無様に地に堕ちる様を想像して邪悪な笑みを浮かべる。

しかし、凶龍は知らなかった。
何も知らなかったのだ。
カラスが、いったいどういう存在であるかを。

カラスは、その仮面の裏側で・・

凶龍以上に邪悪な笑みを浮かべて嗤っていた。

「地べたを這いずれ、黒すけぇぇぇっえええええええええっ！？」

腹の底から吐き出される裂帛の気合い、しかし、その気合いは途中で悲鳴へと変わる。

勝利を確信して木刀を振り下ろそうとした瞬間、凶龍の視点が一瞬にして下へとスライドする。

浮遊感が一瞬身体を襲い、気がつけば、自分の視点は地面ギリギリの位置にあった。

いったい何事が起こったのかわからなかったが、この場に留まるのは危険だと判断し、再び『縮地』を使用して間合いをあけようとする。

しかし

「か、身体が動かねぇっ！？」

全身のバネを利用してその場を離れようとした凶龍だったが、その身体は全く動かない。

感覚自体はある、何をどうしても、腕や足はおろか、指一本動か

すことができない。
　かろうじて首は動かすことができることに気がついた凶龍は、慌てて周囲を見渡し、そしてその状況をようやく把握すると絶望の叫びをあげる。

「な、なんじゃこりゃああっ!?　埋まってる!?　なんで、俺地面に埋まってるんだあっ!?」

　凶龍は首から上を地上に残し、あとの残り全てが地面に埋まってしまっていた。
　しかも、ただ埋まっているだけではない、どういう仕掛けかわからないが地面に埋まっている身体は何かでがっちりと捕縛されているようで、何をどうしようとも本当に動くことができない。
　武術を極め、他種族を圧倒する怪力を誇る龍族の頂点に立つ王家の血筋に連なる者の全力であるにも関わらずだ。

「なんだこりゃ、なんなんだよ、これは!?」

　全く想定外の展開に存分に慌てふためいて恥も外聞もなく叫びまくる凶龍。
　そんな凶龍の醜態を見て、怪人は不気味な声で嗤う。

『ゲ～～ッゲッゲッゲ』

「気持ち悪い声で笑ってるんじゃねぇ!!　てっめぇきたねぇぞ!!　落とし穴か!?　なんだこりゃ、正々堂々と戦いやがれ!!」

　負け惜しみ以外の何物でもない聞き苦しい叫びをあげる凶龍。
　そんな凶龍の言葉をなんとも気持ちよさそうに聞きながら嘲笑し続けていたカラスであったが、迫りくる三つの気配に気がつくと懐

から素早くなにか刃物のようなものを取り出して、それを凶龍の首筋にあてる。

「「「あっ！！」」」

恋人の窮地に気がつき、救出せんとカラスを急襲しようとした三人の美少女達であったが、その行動は少しばかり遅すぎた。

地面に埋まって動けないでいる恋人の首筋に、小さなナイフのようなものと小型電撃発生棒（スタンロッド）のようなものが当てられていることに気がついて動きを止める。

「剣児くんを人質に取るなんて」

「卑怯者！！　おまえそれでも男なのか！？」

「私達と勝負しなさい！！」

剣児を人質に取った形のカラスに対し、挑発的な言葉を投げかけてみるが、カラスは愉快そうに嗤うばかりで一向に剣児を放す様子はない。

なんとか隙を見て救いだしたいところだが、目の前のカラスに付け入る隙は今のところ全くなし。

しかも救出すべき対象の剣児は地面に身体を埋め込まれていて、脱出させることはかなり難しそうだ。

「くっそ～、せめてあのナイフと小型電撃発生棒（スタンロッド）だけでもなんとかできればなあ」

「そうですねえ、あのナイフと小型電撃発生棒（スタンロッド）さえどうにか・・あれ？　えっと、ナイフと・・あれ？　あれれ？」

悔しげに顔を歪める月光樹妖精族（ルナエルフ）の少女の言葉に頷きを返しかける風狸族（ふうり）の少女。

しかし、返事を返す寸前に、何かに気がついた彼女は、自分の視線の先にある物が、当初思っていたものと違うことに気がついて小首を傾げて眉をしかめる。

「ど、どうしたのメイリン」

「い、いやあのね、フレイヤ」

「う、うん、何よ」

「私、あの黒づくめの人が持っているものが、ずっとナイフと小型（ス）電撃発生棒（タンロッド）だと思っていたんだけど、あれってさ・・」

「何言ってるのよ間違いなくあれは・・あれは・・あれ？　あれれ？　あれって、もしかして」

「櫛と・・念動髪切り機（バリカン）じゃない？」

呆然と風狸族（ふうり）の少女が呟いた瞬間、それを聞いていたらしいカラスが、拳を突き出すようにして何度も頷きを返し、ぱちぱちと拍手を送る。

「『それそれ、大当たり』って、言いたいみたいね」

「あ～、うん、そうね。そうみたいね。なんで！？　なんで、櫛と念動髪切り機（バリカン）なわけ！？」

カラスの真意がわからず、思わず慌てふためく三人。
それに対し、カラスは不気味な嗤い声を再びあげながら、手にした念動髪切り機（バリカン）のスイッチをゆっくりと入れる。
静寂が支配する裏通りに響き渡る不気味な機械音。

『ウイィーーーーン』

「お、おい、ちょ、ちょっと待て!?　お、おまえそれをいったいどうするつもりなんだよ、おい!?」

壮絶に嫌な予感が背中を走り、大量の汗を流しながら気弱な声をあげる剣児。
しかし、それに対してカラスは言葉で答えようとはしなかった。
言葉では答えようとはしなかったが・・代わりにこれ見よがしに念動髪切り機（バリカン）を剣児の目の前に持って行って見せつける。
剣児の目の前で不気味な音と共に念動髪切り機（バリカン）が動き続ける。

「う、嘘だよな?　冗談だよな?　そんなことないよな?　まさか、俺の髪を」

『ウイィーーーン・・バリバリバリ・・』

「うわあああ、ちょっ、待っ、おまっ、やめろ、やめてくれえええええっ!!」

見苦しく叫び続ける剣児の声を少しの間聞いていたカラスであったが、すぐに剣児の顔の前から念動髪切り機（バリカン）を放すと、何の予備動作もなくさっさとそれを使って剣児の髪を刈り始めた。

「お、おま、こんなことしてただですむと思って」

『バリバリ・・ウイィーーーン・・バリバリ・・』

「か、髪は男の命なん・・」

『ウィィィーーン・・バリバリ・・ウイィーーーン・・バリバリ』

「やめろ、いや、やめてください、許してください、お願いやめてえええええええっ!!」

『ウィウィウィィィーーン!!　バリバリバリーン!!　ウィウィウィィィーーン!!　バリバリバリーン!!』

あまりにも予想外の出来事であったために、反応することができず呆然と見つめ続ける三人の美少女達の前で、剣児の髪がみるみる刈り取られていく。

素人とはとても思えない異様に手慣れた手つき。

本職の床屋さん並に鮮やかに手際よく髪はどんどん刈り取られ、やがて、それは一つの形になって現れる。

それを見ていた陽光樹妖精族（サンエルフ）の少女がぽつりとつぶやいた。

「も、モヒカン？」

確かに、剣児の頭は、見事なまでに一筋の髪できた道、そしてそれ以外は見事なまでの五分刈りの構成へと変化しつつあった。

しかし。

「だ、だけどよ、モヒカンって、普通真ん中の毛を残すんじゃねぇの？」

「「あ、ほんとだ。かなり右に寄ってる」」

月光樹妖精族（ルナエルフ）の少女が指摘したように、確かに剣児の頭に残る長髪でできた道は、かなり右寄りに作られていた。

モヒカンヘッドにするつもりならば、頭の中心線に長髪でできた道を作らなくてはいけないはずだった。

なのに何故右側に。

「失敗したのかしら？」

「あ、念動髪切り機（バリカン）止めた。終わったのかしら」

「いや、ハサミに変えたぞ。なんか整えている」

三人が見守る中、あらかた念動髪切り機（バリカン）で大きく刈り取るところは全て刈り終えたのか、そのスイッチを切って懐にもどす。

そして、今度はハサミを取り出すと、櫛をあてながら丁寧にチョキチョキと髪を整えていく。

そうして更にしばらくの間ハサミを動かしていたカラスだったが、やがて、ハサミも懐にもどし、最後の仕上げとばかりに残った櫛を使って剣児の髪形を形作る。

「今度こそ、終わったみたいだな」

「だけど、剣児くんの顔の目の前に座っているから髪形が見えないですね」

「あ、移動するわ。見せてくれるみたい」

剣児の顔の前で何度も髪形のチェックをしていたカラスであった

が、やがて、納得がいく出来になったのか、満足そうに何度も頷きながら三人に見えるようにその場を退く。
自分達の愛しい恋人がどんな姿にされてしまったのか、緊張と不安に打ち震えながら、三人がそこに見たものは。

「「「し、七三なの!?」」」

「な、なにいいいいいっ!!」

そう、そこには、右側に残された一筋の長髪部分を奇麗に左右に分けて、きっちり見事に七三にわけられた髪形が作りだされていた。
現在ほとんど見ることはできなくなった幻の髪形。
ある意味。
ある意味芸術的な出来栄え。
しかし。

「「「だ、だっさ〜〜いっ!!」」」

剣児の恋人達にはひどく不評であった。

第六話　『そして、二人は巡り合う』　その5

「ふざけやがって、ふざけやがって、ふざけやがって、ちくしょう！！」

端正な甘いマスクを大きく歪め、悔し涙を盛大に流し喚き散らしながら、剣児は怒りと憎しみの炎を滾らせた瞳を自分のすぐ横に立つ黒づくめ怪人へと向ける。

「おまえ、これだけのことをしておいてただで帰れると思うなよ！？」

例えこれまでの事情がわからないものがこの場にいて聞いていたとしても、その声に凄まじい怨念がこもっているとわかるような、そんなドスの利いた低音をカラスに投げかける

だが、カラスは全く応えた様子もなく、両手を広げて肩を竦めてみせるばかり。

明かにこちらをバカにしているとわかる態度を崩そうとしないカラス。

そんなカラスを苦々しい表情で見つめ続けていた剣児であったが、やがて何かを覚悟したような表情になって、視線をカラスから外す。

その視線は若干離れたところで事態を見守っている自分の恋人達のほうへ。

「フレイヤ、ジャンヌ、メイリン！！」

愛しい恋人の声にすぐに反応したのは、陽光樹妖精族（サンエルフ）の少女。

「聞こえているわ、剣児くん。もうちょっとだけ待ってね。さっき

メイリンが姫子ちゃんや本家の人達に携帯でここの位置を教えたから、すぐに救助に駆けつけてくれるはずよ」

「いや、姫子達のことは待っていられねぇ。おそらくかなり位置が離れているだろうし、これだけ入り組んだ場所だから、探し出すのに時間がかかるはずだ。それよりもおまえたちに頼みがある」

いつになく真剣な表情。

いつもの陽気で冗談ばかり言っている学生としての表情ではない、その表情は手強い『害獣』と相対したときに見せる覚悟と決意の顔。

その表情を見た三人は、自分達の恋人が何を言わんとしているかを敏感に察知し、緊張で身体を固くする。

「け、剣児くん、まさか・・」

「ああ、そのまさかだ。俺はどうなってもいいから、気にせずこの馬鹿をぶちのめしてくれ!!」

怒りに満ちた表情と声で決意の言葉を口にする剣児。

余程に悔しかったのか、今にも破裂しそうなほどに血走った瞳、憤怒で真っ赤にそまる顔。

これまで戦ってきたどんな『害獣』相手でも見せたことがないほどに、怒り狂っている。

今までに見たことがない、怒髪天を突くような激しい怒りを爆発させている愛しい恋人をしばらくぽかんとして見たつめていた三人だったが、すぐにその心情を察して返事をしようと口を開きかける。

しかし、まさに口を開きかけたその瞬間、何かに気がついてしまった三人は、何故か一斉に剣児から顔を背け何かを必死に堪えるようにしてぷるぷると身体を震わせる。

三人は何度か深呼吸を繰り返して落着きを取り戻しては返事を返そうと振り返るのだが、そのたびに慌てて再び後ろを向いて身体を震わせるという行為を繰り返す。

そして、やがて自分では返事を返すことが難しいとわかると、横にいる他の二人の脇腹をつつきあって、代わりに返事をさせようとし始めてしまうのだった。

「じ、ジャンヌ、メイリン、どっちでもいいから・・ぷぷぷ・・私の代わりに剣児くんに返事してあげて。私、無理。だって、剣児くんのあの髪が・・ぷっ」

「あたしだって無理だってば。・・いひひ・・あの顔だけならなんとかなるけど、あの・・あの髪が・・ぶふっ」

「二人ともいい加減にしてください。剣児くんは必死なんですよ・・うひひ」

「「じゃあ、メイリンが返事してよ」」

「絶対無理です。最後まで言えません。途中で噴き出します。だって・・だって剣児くんのあの顔と髪、どうみても今テレビで人気の汚れ芸人そっくりなんですもの」

「「「ぷ～～っ」」」

ちらちらと振り返って剣児の顔を見ていた三人だったが、やがて、耐えきれなくなってその場にしゃがみこんでしまう。

一応片方の手で口をおさえ、もう片方の手でお腹をおさえてなんとか必死に堪えているが、ちょっとつつけば間違いなくその場で笑い転げてしまうことになってしまうだろう。

そう、顔だけなら。

顔だけならなんということはない、真面目に怒っている顔だから、顔だけ見ていれば何も問題ないのだ。

しかし、問題はその髪型だった。

今の剣児の髪形は七三。

いまどき、どんな職種の男性でもしている人はいないという、ほとんど絶滅になりかけている髪形だ。

それだけでも十分におもしろいのに、さらに恐ろしいことに、彼の七三は普通の七三ではない。

頭の右側に作り出されたモヒカンヘアーを左右にわけて作り出された変形七三とでもいうべき髪形なのである。

一見普通の七三に見えるが、頭にへばりついたうすい長髪の下には、見事な五分刈りが広がっているわけだ。

何事もなければその五分刈部分が見えることはないのだが、彼が埋められているのは風の強いことで有名な裏通り。

そのため、彼女達が見ている前で強風が何度も通り過ぎ、そのたびに剣児の髪形はおもしろいように乱れてわっさわっさとたなびいてしまう。

すると、下の五分刈り部分が露出した、とてつもなくおもしろい髪形へとトランスフォームし、それをまた横に控えているカラスが元の七三に奇麗に整える。

風が吹く。

髪が乱れる。

カラスが髪を整える。

また風が吹く。

髪が乱れる。

カラスが髪を整える。

テッパンだった。

どんなコントよりも超面白かった。

そんな状態で真面目に怒りを爆発させられてもどこかの汚れ芸人ばりに美味しいばかりで、ちょっと見ているだけでも笑いが込み上げてくる。

とはいえ、彼女達は笑うわけにはいかない。

愛する恋人があれだけひどい目にあっているのだ、同じように怒らなくてはいけない、その姿を見て笑い転げるなどもってのほかだ。

だが、そう思えば思うほどドツボにはまって、腹に蓄積される笑いの衝動はどんどん大きく重くなっていく。

やばい、このままではいずれこの笑いは破裂する。

もし、破裂して笑い転げる姿を見られたら確実に自分は恋人から嫌われてしまうだろう。それだけは、それだけはなんとしても阻止しなくては。

心の中でそう考える三人は、涙目になりながら必死に笑いの衝動と戦い続ける。

しかし、ちら見しただけでも噴き出しそうな状態でいつまでも耐

え続けることなどできるはずがない。

もうだめだ、そろそろ限界だ。

そう彼女達が思い盛大に噴き出しかけたそのとき、彼女達の心を激変させる声が聞こえてきたのだった。

「フレイヤ、ジャンヌ、メイリン。いくらでも俺のことを笑い者にしてもいい。俺を笑っても俺はお前達を嫌ったりしないし、恨んだりもしない。だけどこれだけは頼む!!　頼むからおまえ達の手でこいつをぶちのめしてくれ!!　動けない俺に代ってこの馬鹿を打ち倒してくれ、頼む!!」

腹の底からこみ上げてくる爆笑の衝動と必死に戦っていた彼女たちであったが、恋人が発した悲痛な叫び声を聞いて、一瞬にして我にかえる。

そうだ、笑い転げている場合ではない。

自分達が生涯の伴侶として認め、心から愛している恋人が、ここまでひどい目にあわされ、これまで味わったことのないような屈辱を味合わされているのだ。

自分達が彼のことを本当に心から愛していると証明する為にも、なんとしても仇をとらなくてはいけない。

彼女達はすぐさま決意を固め、腹の底にくすぶっている笑いの発作を無理矢理握りつぶすと、プロの『害獣』ハンターとしての表情を浮かび上がらせて、眼前に立ちふさがる憎い漆黒の怪人を睨みつける。

一瞬にして空気の流れが変わる。

ひりつくように鋭い殺気が充満し、焼け付くように熱い闘志が空気の温度を上げていく。

首まで土に埋まりながらも、そのことを敏感に察知した剣児は、ほっと安堵の吐息を吐き出した。

あまりにも華々しい剣児の名声の影に隠れてあまり目立たないが、彼女達もまた一流の腕を持つベテラン『害獣』ハンター。

その実力は決して低いものではない。

一人目は陽光樹妖精族（サンエルフ）の少女フレイヤ・クロムウェル。

とれたての蜂蜜のようにきらきら光る黄金の髪に、御稜高校随一とも言われる豊かで実に形のよいバストが特徴的な美少女の彼女は、『療術』の使い手。

パーティメンバー全員の回復を司る重要な立場にあり、その回復術は何度も仲間達の命を救ってきた。当然のことではあるが、仲間達の回復作業が主な仕事であるため、『害獣』との戦いでは常に後方にあり、敵と直接戦うことはほとんどないし、パーティメンバーの中では最も接近戦能力は低い。

しかし、それは現メンバーと比較した場合に低いということ。

彼女が所属する傭兵集団『剣風刃雷』は剣児をはじめ、接近戦能力が飛びぬけて高い者達が何人も在籍している。

彼ら接近戦のプロ中のプロ達から比べれば彼女の能力は確かに低い。だが、そこらへんの不良と比べた場合は話が違ってくる。

後方支援が得意で自ら率先して戦うことはほとんどない彼女であるが、会得している護身術は並みの不良をよせつけるものではない。

それどころかその腕前は師範クラスであり、舐めてかかれば間違いなく痛い目をみることになる。

二人目は月光樹妖精族（ルナエルフ）の少女、ジャンヌ・ボナパルト。

ショートカットにしたダークブラウンの髪に、剣児とほぼ同じくらいの長身、そして、凹凸の少ないすっきりしたスレンダーボディの美少女の彼女は、『攻術』の使い手。

自然界に満ちる様々なエネルギーを凝縮した特殊な『弾丸』を撃ちだす超兵器『銃器』を操り、危険な前線で戦う前衛への支援攻撃から、はるか後方から相手を殲滅する遠隔広範囲攻撃まで実に様々な効果を発動させる『術』、それが『攻術』。

ジャンヌはその『攻術』を自在に使いこなし、手強い『害獣』との戦いにおいて何度もパーティを勝利へと導いてきた。

当然その技術は『害獣』以外が相手であっても十分に威力を発揮する。

いや、恐らく一発のダメージの大きさだけなら、間違いなくこの三人の中でジャンヌが最強であった。

そして、三人目は風狸(ふうり)族の少女、黄梅林(ホワァンメイリン)。

さらさらと流れる様な艶やかな黒髪。

三人の中で最も身長の低い彼女であるが、凹凸がはっきりわかる、しかし、出過ぎたり引っ込み過ぎたりしていない実にバランスのいいスタイルを持つ。

髪と同じ色をした黒眼は非常に大きく、鋭角的な顔立ちの二人とは違い全体的に丸く柔らかい感じの顔をした彼女は、『美しい』よりも『かわいい』という形容詞がよく似合う美少女。

そんな彼女は、『原初の歌』の歌い手。

はるか古の昔、世界が生まれて間もない頃よりこの世界に存在したという『力』ある音。

それを古代の音楽家達が様々な歌にしたものが『原初の歌』であり、この世界に元々あった音を元に作り出された『原初の歌』は、この世界のルールに則った力であるため『害獣』に感知されることはない。

つまり『術』同様に、『外区』で遠慮なく使用することができる

数少ない超技術の一つなのである。
『原初の歌』は『歌い手』の想いを乗せ、『歌い手』の魂の力によって紡ぎだされる。
その歌は、聞いた者達に様々な効果を及ぼす。
あるときは聞いた者を剛力無双にし、あるときは聞いた者を鉄壁の防御壁へ、またあるときは傷ついた者の心と身体を癒し、そして、またあるときは敵対する者に凄まじい呪いを与える。
『原初の歌』は基本的に触媒のようなものを一切必要としない。
歌い手となる者の歌声だけで発動させることができる。
触媒を必要としないため、歌い手が声を出せなくならない限りいつまでも使用することができる非常に強力な技術であるが、その反面、効果をずっと継続させるためには歌い続けていなくてはならない。
なので、メイリンは戦闘においてはいつもパーティの後方にあって『原初の歌』を歌い続けており、戦闘に参加することはまずない。
そんなメイリンであるから、パーティメンバーのほとんどは彼女は直接戦闘ができないと思っている。
しかし、決してそうではない。
二本の短刀を自由自在に操り、踊るようにして敵と戦う独特のスタイルの武術を会得している彼女は、実は三人の中で最も接近戦能力が高い。
いや、高いどころか、本気になった彼女とまともに戦って勝てる猛者は、『剣風刃雷』の中でも五人といないだろう。
彼女がいつもサポートに回っているのは、『原初の歌』で全体的に戦闘力の底上げができるからで、もし、もう一人『原初の歌』の歌い手が見つかれば、彼女は間違いなく前衛に選抜されることになるだろう。
そう、剣児を取りまく恋人達は、決して騒がしいだけの存在ではないのだ。

一騎当千とまでは言わないが、剣児を取り巻く三人の恋人達はそこらへんの不良程度では束になってかかっても敵わない程の実力の持ち主ばかり。

本来なら、リーダーである剣児をサポートし、彼の指揮の下でその能力を最高に発揮する彼女達。

だが、決してパーティ戦にのみ依存した強さを誇っているわけではない。

如何なる事態にも対処できるように高度な訓練を受けてきた、戦闘のエリートである彼女達は、個人戦においても十分な力を発揮する。

そして、愛する恋人を救い出す為に本気になった彼女達なら剣児がいなくても何も問題はない。

今の彼女達に一切死角はないのだ。

そう思い、勝利を確信した剣児は、自分の横に立つ憎い仇敵に視線を向ける。

「言っておくが、彼女達はマジで強いぜ。泣いて土下座するなら今のうちなんだ・・が？」

がっちりと地面に固定され、ほとんど動かすことができない首を無理矢理動かして仇敵のほうへと顔を向けた剣児は、余裕の笑みを浮かべて傲然と口を開く。

だが、余裕をかましていられたのはほんの一瞬だけ。

言葉を紡ぐ途中、仇敵が懐から何かを出すのを見た剣児は、その手の中にあるものを見て小首をかしげる。

カラスが手に持つのはカード状の何か。

その手にあるカードがどんなものなのかまでは、剣児の視点から

はよく見えない。
しかし、油断も隙もない策略家であるカラスが、なんの意味もないただのカードをここに来て出すわけがない。
剣児は背中に嫌な予感が走るのを感じ、顔を引きつらせる。
（か、カードだと？　まさか仕込みの刃が入っていて投げナイフのように使うのか？　いや、あの身のこなしを見た感じだとなんらかの武術をやっているという風には見えない。あの程度の身体能力しか持たないくせに、あんな貧弱なカードを二、三枚投げたところでフレイヤ達にダメージをまともに与えることなんかできっこない。それくらい、この策士ならよくわかっているはずだ。ということは、武術ではないが、なんらかの効果をもたらすことができる何かということか。技術や戦術だろうか？　カードを使うようなそんな技術なんてあったかな・・）
必死になって自分の記憶の中にある様々な武術や戦術、技術を探る。
今まで戦って来た対戦相手達が使っていたもの、あるいは書物や学校の授業で習ったもの、そして、また先輩の『害獣』ハンター達から手慰みに聞いた噂話などを次々と思いだしていった剣児は、やがて一つの技術に思いあたって驚愕の表情を浮かべる。
（ま、まさか・・まさか、そうなのか？　あれは、『戦術英霊呪符（タクティカル・ロー・カード）』!?）
『戦術英霊呪符（タクティカル・ロー・カード）』

『害獣』達がこの世に出現するよりもはるか昔。
まだ、魔力や霊力といった異界の力が全盛であった頃、それらの力を存分に振い、この世界に様々な伝説を巻き起こした英雄好漢達がいた。
彼らは山を動かし、海を割り、天を轟かせ、時には時間さえも操ったといわれる。
そんな過去の英雄好漢達がこの世に残したわずかばかりの魂の残照を、ある一人の偉大な魔道師が世界各地を旅して、集めに集め倒した。
そして、魔道師は自らが集めてまわった膨大な英雄好漢達の魂の残照、つまり欠片を使って、ある恐るべき魔法の品を作りだした。
それが、『戦術英霊呪符（タクティカル ロー カード）』。
『戦術英霊呪符（タクティカル ロー カード）』は、過去の英雄好漢達の魂の残照を封じ込めて作り出されたもの。
一定の手順を踏むことでカードはその効果を発動し、そのカードに封じられた英雄好漢達に応じて、彼らが過去に使った武術の奥義や特殊な技術を発動させることができる。
発動する効果は実に様々であり、相手を直接的、あるいは間接的に攻撃する効果を発揮するカード、味方をサポートしたり、敵の行動を妨害したりするカード、中には難病を一瞬で治療したり、王クラスの『害獣』の攻撃すら跳ね返すという驚異的な効果を発動させるカードまであるという。
まさに神にも悪魔にもなれるという非常に強力な『古代超遺物（アーティファクト）』。
しかし、このカードは非常に扱いが難しく、下手に使うと使い手そのものに跳ね返り、その身を滅ぼすと言われている。
また、カードそのものも大変貴重なもので手に入れることもまた

至難の業。

かつて製作者である太古の魔道師は、三十六種類の【英雄呪符（ヒーローカード）】と七十二種類の【好漢呪符（デュエリスカード）】を作り出した。

同じ種類のカードでも予備として数枚から数十枚を量産して作り出し、その総枚数は千枚以上に及ぶと言われているが、魔道師は己が作り出したカードの危険性を誰よりもよく理解していたため、死の間際、悪意あるもの達に使わせないようにと、作りだしたカード全てにある呪いをかけて世界各地にばらまいてしまった。

これを知った時の権力者達は魔道師の死後、血眼になってカードを探し求め、自分達の配下達を世界中に派遣。

しかし、配下が持ち帰った一部のカードを解析し、魔道師がかけた呪いの内容を知った権力者達は、一様に愕然となる。

カードは最低でも五十三枚以上集めなくては使用することができなかったのだ。

世界中に散らばり、どこにいったかわからないカード。

千枚近くあるといえば大きな数字に思えるが、それがこの広大な世界に散らばっているとなると話は別。

捜し出すことは困難極まりない。

しかも、呪いの内容はそればかりではない。

たとえ使用するために必要とされる五十三枚以上のカードを集めたとしてもそれだけでは駄目なのだ。

カードの効果を発揮させるためには、魔道師が考え出した複雑怪奇なあるルールに則って使われなくてはならない。

そう呼ばれる厳しく難しいルールを把握し、そのルールにきちんと沿ってカードを使用するものだけが、カードの本来の力を発揮することができる。

そういった理由からカードに秘められた無限の力に惹かれた者達は非常に多いが、実際に『呪符使い（カードマスター）』となれたものは歴史上ほとんど確認されていない。

いや、どちらかといえば、数人といえども存在していたこと自体が奇跡に近いことであるのだが。

それだけに、剣児は自分の脳裏に浮かんだこの予想が信じられなかった。

（ありえない。そんなはずあるわけがない。いくらなんでも、そんな奇跡の力の持ち主がほいほいこんなところにいてたまるものか）

そう心の中で呟いて、自分の脳裏に浮かび上がった恐ろしい予想を打ち消そうとする剣児だったが、しかし、心の中のもう一人の自分がそれに待ったをかける。

（いやちょっと待て。どうみても何の武術も体術も会得していない、身体能力も並以下のこいつが、城砦都市『嶺斬泊』内で最も危険な裏街でその名を轟かせているその事実についてはどう解釈すればいい？　なんの武術も技術もない奴が、この場所で生き残ることは絶対にできない。ましてや悪名とはいえ、その名を轟かせるなんて夢のまた夢。だとすれば、やはりこいつが持っているのは・・）

とてつもなく嫌な汗が大量に剣児の顔から噴き出して流れ始める。

まずい。もし、そうならば、とてつもなくまずい状況であった。

いくら武術の達人、使い手であったとしても、噂の奇跡のカードの前ではひとたまりもないに違いない。

まともに戦った場合、どう考えてもその勝率は極めて低い、下手をすれば、恋人達は今の自分以上にひどい目にあわされかねない。

剣児は恋人達にそのことを伝えるべく、急いで視線をカラスから恋人達に向け直す。

そして、注意を促すために口を開こうとする。

だが

全ては遅すぎた。

遅すぎたのだ。

剣児が口を開こうとしたそのとき、すでにカラスは行動に移っていた。

フリスビーを投げる様な滑らかな動作で手にしたカードを三人の恋人達に向けて投げ放つカラス。

カードは剣児の目の前で、風を切って飛んで行く。

「に、逃げろ、フレイヤ、ジャンヌ、メイリン！！」

剣児の絶叫が裏街に響き渡り

そして、

地獄の宴が幕を開ける。

第六話　『そして、二人は巡り合う』　その6

これだけは。
できればこれだけは使いたくはなかった。

カラスは自分が懐から手元に取り出したモノをしばらく見つめた後、そっと小さく溜息を吐きだした。

今、手元にあるのは一見なんの変哲もないカードに見える代物。

しかし、これは、彼の幼馴染を地獄へと導くとんでもない最終兵器なのだった。

元々、カラスはこれを使うつもりはなかった。
調子に乗っている幼馴染にある程度お灸を据えて、自分がしていることに対して少しでも反省している素振りが見えたら、できるだけのフォローを入れて速やかにこの場から姿を消すつもりでいたのだ。

カラスは、幼馴染に『変形七三の刑』を実行した後、さらし首状態の幼馴染が少しでも反省してくれていることを期待してその視線を向けて見た。

ところが・・
肝心の幼馴染を見てみると、自分が行った暴虐を反省する様子など全くない。
それどころか、恋人達をけしかけ利用してカラスに意趣返しをしようとまでしている。

そう。
幼馴染は元々こういう性格であった。

長年一緒にいて、よ～くわかっていたはずなのに。
今更ながらにカラスは自分の考えの甘さを反省する。
いや、本当にいつものカラスならば、ここまで甘い考えを持って行動することはないのだ。
むしろ『崇(たたり)』の仮面をかぶり、黒装束に身を包むことで闇夜のカラスになった彼は、冷徹極まりない『悪』の策士に変貌するのであるが、どうも今日はダメなのである。
理由は彼自身よくわかっていた。
彼が大事に大切に一途に想っている憧れの『人』
『如月(きさらぎ)　玉藻(たまも)』
その『人』と今日会う約束をしていて、そのことが彼の心を狂わせていた。
どうしても、彼女のことを考えると心が非情になりきれないのである。
彼女が屈託なく笑っている姿や、朗らかで温かくて優しい声を思い出すだけで、彼の中の戦意とか闘志とか、あるいは彼の根底に存在している悪意や害意もしおしおと霧散してしまうのである。
今日の昼間もそのことが原因で危うい目にあってしまったカラス。
十分自覚しているし注意しようと思っていたはずなのだが、結局どうすることもできなかった。
幸いにも危機一髪のところで頼りになる『友達』が駆けつけてくれたため大事には至らなかったが、しかし。
頼りになる彼の『友達』は今、この場にはいない。
自分の身を守れるのは、いつも通り、自分しかいないのだ。

そのことを改めて思い返し心に刻み直したカラスは、覚悟を決めた表情を仮面の裏に作り出して顔をあげる。

そして、その視線は少し離れたところに立つ三人の美少女達へ。

彼の幼馴染、『龍乃宮（りゅうのみや）　剣児（けんじ）』の三人の恋人達。

三人が三人とも可憐で美しく、一見荒事には全然向いていない、淑やかで優しげに見える彼女達。

しかし、その大人しそうな外見の裏側に、とてつもない猛毒を隠し持っていることを、カラスは嫌というほど熟知していた。

侮って手を抜いたりすれば、いとも簡単にその猛毒の餌食になってしまうだろう。

特に、恋人の敵討ちをするためと、完全に本気になっている今の状態の彼女達が相手とならば、尚更手加減している余裕はないし、手段を選んでいる場合でもない。

カラスはもう一度自分の手の中のカードに視線を向け覚悟を決めると、カードを握る手に力を込める。

そして、対峙する三人の強敵へと再度視線を向け直そうとしたのだが、そのとき自分の視界に地面すれすれのところにある幼馴染の顔が入った。

幼馴染の視線は自分の手の中にあるカードに注がれており、やがて、その瞳は驚愕に見開かれる。

どうやらカードの正体に気がついたようだった。

カラスは仮面の裏側でバツが悪そうな表情を浮かべると、聞こえないくらいの小さな声で、『ごめんね、剣児』と謝るのだった。

そして、何かを吹っ切るように再び厳しい表情を作り出して、眼前に立塞がる三人の美少女達にその目を向ける。

カラスがこれまで以上に強烈なプレッシャー放ってきたことを敏感に感じとった三人の美少女達は、素早く戦闘態勢をとって身構え

た。
深い影が支配する裏街の闇の中で、一瞬交錯する八つの視線。
だが、『静』の時間はごくわずかで、すぐに『動』が時を刻み始める。
武術の動きではない、しかし、実に滑らかな動作で一瞬後ろに身体を反転させたカラスは、その反動をそのまま利用して逆回転し、手にしたカードを美少女達へと投げつける。
風を切り、唸りを上げて一直線に三人の美少女達へと飛んでいく無数のカード。

「に、逃げろ、フレイヤ、ジャンヌ、メイリン！！」

破滅を呼ぶ凶器が、自分の大切な者達へ襲いかかっていく様子にたまらず悲鳴をあげる剣児。
しかし、その叫びは少しばかり遅すぎた。

カラスが投げたカードは、真っすぐに美少女達へと向かい、そして・・・

へにょりと、彼女達の手前で失速して落ちた。

「「「「えっ？」」」」

飛来するカードを叩き落とそうと身構えていた美少女達。
しかし、彼女達が迎撃行動を起こすよりもはるか手前で、カードは呆気なく失速し『ぺしょり』というなんとも間抜けな音を立てて地面に落ちた。
その結末を見た三人の美少女達と、そして、遠くからそれを見ていた剣児は、ぽか～んと口を開けてしばし呆然と立ちつくす。

地面に落ちたことが何かの策の布石で、罠かもしれない。

そう思ってしばらく警戒しながらカードを見守っていた三人だったが、カードは静かにそこにあるだけで、何のアクションも起こさない。

敵の意図するところが全くわからずほけ～っと立ち尽くす三人。

ところが、そんな三人にお構いなく、カラスは次々とカードを投げ続ける。

びゅんびゅんと唸りを上げて三人めがけて飛んでいくカードの雨嵐。

しまった、こっちが本命だったかと、慌てて防御態勢を取ろうとする三人だったが、またもやカードは彼女達の目の前で失速。

結局カードは百枚近く投げられたが、一枚として届くことはなく、すべて彼女達の周囲に落ちてばらまかれる結果となった。

三人の美少女はしばらくの間、目の前の地面にばらまかれたカードと、そのカードを投げ付けたカラスとに交互に視線を向け続けていたが、カードはその場にそのままそこにあるだけ、肝心のカラスはおどけたように肩をすくめながら両腕を広げて見せるだけ。

本当に何もない、投げつけられたのが何の変哲もないただのカードらしいと思いいたると、三人は顔をみるみるうちに紅潮させ怒りの炎をその瞳に宿らせる。

「ば、バカにしてるのね」

「あ、あたしらのこと舐めてるよな、てめぇ」

「こ、これでもプロの『害獣』ハンターなんですけどね。そうですか、私達なんて余裕ブッこいて倒せるってことですか」

怒りでぶるぶると体を震わせた美少女達は、浮き出た血管が今にも切れそうなくらいに力を込めて、己の拳を固く固く握りしめると、ゆっくりとカラスのほうへと歩き始める。

「わ、私達を見くびるとどうなるか」

「存分に教えてやろうじゃねぇか」

「勿論、ただじゃないですけどね。私達をバカにした対価は高くつきますよ。こんなカード数枚で支払えるような・・」

両手の拳を盛大にバキボキ言わせながらゆっくりとカラスへと近づいて行く三人。

カラスとの距離が縮まり、あと少しで自分達の攻撃有効範囲に入るところまで迫ったところで、三人の司令塔的存在である陽光樹妖精族(サンエルフ)の少女フレイヤが、二人に戦闘開始の指示を送る。

「行くわよ、ジャンヌ、メイリン!!　いつも通りメイリンの突撃をジャンヌが援護、防御回復は全て私に任せて二人は攻撃に専念して、いいわね!!」

「おうよ、あたしはいつでもおっけ〜だ!!」

自分の横から頼もしい声を上げる月光樹妖精族(ルナエルフ)の仲間に頷きを返したフレイヤは、切り込み役を任せたもう一人の仲間に戦闘開始の合図の声をかける。

「メイリン!!　始めて頂戴!!」

「・・」

風狸(ふうり)族の少女が斬り込むと同時に、得意のフォーメーション攻撃を行わんと身構える二人。

しかし。

し～～ん。

いつまで立っても肝心のメイリンが突撃を開始しようとしない。

「あ、あれ？」

「ちょっ、メ、メイリン？」

「・・・」

焦りながら風狸(ふうり)族の少女メイリンに声をかけようとしたフレイヤだったが、よく見ると自分の横には月光樹妖精族(ルナエルフ)のジャンヌしかいない。

無言でそのジャンヌにもう一人がどこにいるのか問いかけてみるが、ジャンヌも『知らん知らん』と首を振ってみせ、二人はメイリンを探して慌てて周囲に視線を走らせる。

すると、目の前で物凄くリラックスした様子で立っているカラスが、後ろ後ろと指さしていることに気がついた。

フレイヤとジャンヌは一瞬顔を見合せたあと、即座に後ろを振り返る。

すると、二人の少し後方に、呆然とした様子で立ち尽くす黒髪の風狸(ふうり)族の少女の姿が。

「な、何やってるのよ、メイリン！？」

「をいをい、しっかりしてくれよ、メイリン。どうしたっていうんだよ！？」

呆然と立ち尽くすメイリンに駆け寄った二人は、俯いたままなかなか顔を上げようとしないメイリンを心配して声をかける。

すると、メイリンは二人にすっと何かを差し出すのだった。

「え、なに、これ？」

「ああ、さっきカラス野郎が投げつけてきたカードじゃねぇか。これがなんだよ」

「・・―ド・・じゃない」

「「へ？　なに？」」

「カード・・じゃない・・です。・・それ・・写真」

「「はぁ？　写真？」」

二人は怪訝な表情を浮かべながらも、メイリンから手渡されたいくつかのカードに視線を向ける。

「これがいったいなんなのよ？」

「いったい何が映っているっていう・・」

ブツブツ言いながらも、手渡されたカードを裏返したり、もとに

戻したりして確認する二人。
言われてみると確かにそれはカードではなく写真だったのだが、そこに映っているものがいったいなんであるかがわかった瞬間、二人の顔が驚愕に歪む。

「「な、なんじゃあ、こりゃあっ！？」」

およそ少女らしからぬとてつもない野太い声で絶叫をあげる陽光（サン）樹妖精族（エルフ）の少女と月光樹妖精族（ルナエルフ）の少女。
そして、しばらくの間、カード、いや写真を握りしめて震えていた二人だったが、やがてはっと我に返ると、慌てるようにして地面に這いつくばる。

「「まさか、まさかまさかまさか！？」」

地面に散らばった写真を狂ったようにかき集める二人。
そして、拾い集めた写真の一つ一つを確認したあと、絶望に満ちた絶叫をあげるのだった。

「これも、これも・・これもこれもこれもこれもこれもこれもこれもこれも、結局全部かあっ！？」

「あああああ、そ、そんな、信じていたのに、信じていたのにぃっ！！」

怒り、悲しみ、憎しみ、恨み、あらゆる負の感情で己の身体を包み込んだ少女達の絶叫が、夜の裏街に響き渡る。
そんな彼女達の姿を見ていた剣児は、ゆっくりと首を横に振って

みせながら、自分のすぐ側に立つ黒装束の怪『人』に憐れみの視線を向ける。

「何をしたのかは知らんが、おまえ、もう終わりだぞ。あいつらを見ろ、本気の本気で怒り狂ってる」

剣児の声に気がついた黒装束の怪『人』はゆっくりとその視線を地面に埋まっている剣児の顔のほうへと向ける。

そして、剣児の言葉の意味がわからないと言わんばかりに小首をかしげて見せる。

そんな怪『人』の危機感が全く感じられない様子を見ていた剣児は不快気に顔を歪めながら、尚も言葉を紡ぐ。

「おまえ、自分が何をしたかわかってないだろ？　自分で自分の死刑執行にサインしちまったんだぞ？　長年一緒にツルんでいるが、あれだけ怒り狂っているあいつらを見るのは俺だって初めてだ。あれはもう誰にも止められん。俺にも無理だ。自分がしでかしたことだ、しっかり自分で自分のケツを拭きやがれ」

未だに小首を傾げ続けるカラスに盛大に嘲笑を浴びせかける剣児。

そんな剣児の姿を不思議そうに見つめていたカラスであったが、やがて、自分に向かってくる三つの『人』影に気がついてそちらに視線を向け直す。

ちょっとでも油断すれば全てを飲みこみかねない裏街の深い闇。

その闇を焼き払うようにして、憤怒と憎悪の炎を撒き散らしながらカラスに近づいてくる三人の美しい女神達。

味方であるはずの剣児ですら、恐怖を感じずにはいられない凄まじい負のオーラ。

しかし、カラスはそれらを真っ向から受け止めて平然と立ってい

る。
いや、むしろ、両手を広げておどけるようにして肩を竦めて見せていたが、やがて、自分の目の前まで女神達がやってくるとおどけるのをやめて正面から向かい合う。
再び交錯する八つの視線。
やがてくるであろう地獄の饗宴に、身をすくませる剣児。
仇敵がド派手に成敗される姿を想像するとわくわくするが、しかし、その狂乱の渦に巻き込まれたくはない。
現在剣児は身動きが全く取れない状態。
本当なら、できるだけ遠く離れた安全な場所から見物したかったのであるが、流石にこのざまではどうすることもできない。
（できれば俺を救出してからやりあってほしいんだけどなあ・・）
心の中でそうぼやきながらも、三人の少女達の爆発を待ち切れないといった喜悦に歪んだ表情で見守り続ける剣児。
しかし、彼の期待とは裏腹に、カラスのすぐ目の前まで到着しておきながら、彼女達は一向に怒気を爆発させる気配はない。
（あ、あれ？）
流石の剣児も、自分の恋人達が発している気が、普通のものとは若干違うことに気がついて、小首を傾げる。
側にいるだけでひりつくようなマグマのような怒気や殺気。
それらは確かに彼女達から噴出してはいるものの、どう見ても黒装束の怪『人』のほうに向かってはいない。
それらは彼女達三人の元に未だに残っていて、まるで、まとめて誰かにぶつけようとしているかのようにどんどんその場に溜まって

大きくなりつつあった。

（え、ちょっ、どういうこと？　カラスにぶつけるんじゃないの？　そんで俺のことを助けてくれるんじゃないの？）

三人の恋人達の心中を察することができず、困惑の表情を浮かべる剣児。

そんな剣児の困惑ぶりを知ってか知らずか、しばしの間彼を置き去りにした状態で、無言で睨みあう両陣営。

しかし、その静寂は打ち破られる。

三人の美少女達の一人である黒髪の少女が口を開き、能面のような無表情で目の前のカラスに問いかける。

「これ、全部本物なんですか？　合成とかではなく？」

三人は一斉に集めた写真をカラスに向ける。

すると、黒髪の少女の質問に対してカラスはこっくりと頷きを返し、懐から一冊のノートを取り出して彼女達に見せる。

「このノートは？」

訝しがる彼女達の前でノートを広げて見せたカラスは、写真とノートを照らし合わせながら、何やら三人に説明を始めるのだった。

三人は、最初のほうこそ疑わしそうな表情を浮かべていたが、すぐに納得顔になってしきりと頷きを返し始める。

「これは・・ああ、あのときのことね。確か、姫子さん達に付き合うから、私達に先に帰っててくれっていったときだわ」

「このときもそうだぜ。他の旅団との付き合いがあるから、あたし

らは遠慮しろって連れて行ってくれなかったよな」

「そういえば、これのときもそうですね。詩織お義母様がお勤めしていらっしゃる中央庁に呼び出されているからって、私達と別行動されたんですよね」

こうして、写真の一枚一枚について、カラスから身ぶり手ぶりを交えながら懇切丁寧に説明を受ける三人。

カラスと話しこんでいるうちに、彼女達の身体からマグマのような熱気を持って噴出していた怒気や殺気は徐々に熱を下げて行く。

しかし、その代わりに彼女達を包む熱は更なる下降を始め、やがて、触れるだけで凍ってしまいそうな凄まじい冷気となって吹き荒れ始める。

それとともに憤怒と憎悪に彩られた悪鬼の如き様相は彼女達の表情から消え去り、そして、それと入れ替わるようにして浮かび上がるのは大輪の花のような美しい笑顔。

ただし、花のようなといってもそれは春の日差しの下に咲く穏やかで無害な花では断じてない。

薄暗闇の中に妖しい光を放って咲く、見てるだけで悪寒を感じる猛毒の華。

その毒の華を美しくも妖しく咲かせに咲かせた彼女達はやがて、カラスとの長い長い密談を終えた。

そして、その後、ゆっくりと顔を地面に埋まる剣児のほうへと向ける。

「な、な、なに？　なんなんだよ、おまえら？　どうしちまったっていうんだよ！？」

カラスに向けられている、あるいはこれから向けられると思っていた強烈な悪意、害意が、なぜか自分のほうに向けられていること

に気がついた剣児。
三人が放つ強烈なプレッシャーに気圧されながらもなんとか口を開き、彼女達の真意を問いただそうとする。
剣児の問いかけに三人は一瞬顔を合わせたが、すぐに陽光樹妖精（サンエルフ）族の少女フレイヤが残り二人に視線で何かを確認。
残りの二人はフレイヤの言わんとしていることを悟って、同時に頷きを返して了承、フレイヤは再び寒々しい笑顔を浮かび上がらせると、地面から突き出た剣児の前に座り込んだ。

「な、なんだよ？」

「剣児くん、ちょ～～っと、お聞きしたいことがあるんですけど、御伺いしてもよろしいかしら？」

「え？　聞きたいこと？」

寒々しい笑顔から放たれたのはあまりにも柔らかく優しい声。

しかし・・

しかし、どういうわけか、それを聞いている剣児の耳には、ちっとも柔らかさも優しさも感じられない。
どう聞いても穏やかな音程で、激しさのような感じは一切ないのにだ。
だが、どう聞いても剣児の耳にはそうは聞こえない、むしろ地獄の閻魔の厳しい詰問のように聞こえてしまう。

剣児の背中に嫌な汗が流れ始める。

いや、背中だけではない、剣児の身体のありとあらゆる場所で、最大級の警戒信号が鳴り響き、ひっきりなしに大量の汗が流れ続ける。

長年、危険な『害獣』と戦って来て磨き上げられた戦士としての本能が、剣児に大声で叫び続ける。

『逃げろ、剣児!!　今すぐ、逃げるんだ!!　全力で、死力を尽くして、あらゆる手段を使って少しでも遠くへ逃げろ、逃げるんだ!!!』

同感だった。

できれば、今すぐにでも逃げ出したかった。

卑怯者と罵られ、蔑まれてもいいから、この場から全力で逃げ出したかった。

しかし、非常に残念なことに、今の彼にここから逃げる術はない。

宿敵カラスの手により、身体のほぼすべてを地面の中に埋め込まれ、完全に拘束された状態の彼。

自力での脱出は不可能。

本当ならば、目の前にいる三人の恋人達の手で助け出してもらう予定だったのだが、どう観察してみても、彼女達に自分を助けようという意思は感じられない。

当たり前だが、宿敵が自分を今すぐ解放するということもありえない。

なんとか、なんとかして脱出できないだろうか。

焦りもがきながら必死に脱出方法を考える剣児であったが、残っ

ていたわずかな時間もすぐに露と消えた。
地獄の門が開く。

「ねぇ、剣児くん？」

「は、はい」

「この写真はなんなのかしら？」

「え？　写真？」

必要以上ににこやかな表情を浮かべて見せたフレイヤは、地面に埋まる剣児の顔の前に一枚の写真を突き出して見せる。
最初、周囲が暗くてよく見えなかったせいで、写真に何が映っているかわからなかった剣児。
目を細めたり開いたりを繰り返しているうちにだんだんピントがあってきて、そして、その写真に写っている物がはっきりしたとき、剣児の顔から一気に血の気が消失した。

「え、え、え～～～っとおぉ」

「なにかしらこれ？　なんなのかしらね、これは、剣児くん」

「そ、そ、そのおぉ～～」

写真には二人の男女、そして、一つの建物が写っている。
照れたような、しかし、物凄く嬉しそうな表情を浮かべた一組の男女が、仲良く腕を組みながらある建物から出てきたところを写したものだ。
何も知らない『人』がこの写真を見たのなら、別におかしいとこ

ろは何もない。
どこにでもいる仲のいいカップルの、ありふれた日常の写真。
しかし。
少なくともこの場にいる面々からすれば、あまりにも大問題な写真であった。

「ねぇ、剣児くん」

「は、は、はい」

「ここに映っているのって・・剣児くんに見えるわね？」

「そ、そうですね、俺にそっくりですね」

「へ～～、『そっくり』？　『そっくり』な別の『人』ってことかしら？」

「いや、そうじゃないかなぁと思うようなそうでないような気がするような気もなきにしもあらずんばずんばすびどぅば・・」

わけのわかならい物凄く苦しい、いや、苦しすぎる言い訳をする剣児を凄まじい白い視線で見つめていたフレイヤ達であったが、今度は月光樹妖精族（ルナエルフ）の少女が剣児の前に屈みこんでにっこりとほほ笑みかける。

「あのさ～、剣児。以前、剣児さ、『害獣』狩りで怪我したときに入院したことあったよな」

「あ、あ、ありましたっけ」

「そのときにさ、剣児専属の世話係ってことで新人の看護婦がついていたと思うんだけどなあ。剣児覚えてる？」

「わ、わ、忘れちゃったかなあ、あははは」

「あたしは、はっ・き・り・と、覚えているんだけど、この写真に写ってる女って、そのときの看護婦に『そっくり』なんだよなあ。どう思う？」

「ど、ど、どうかな、どういうことかな、どうなってるのかな。お、俺にはちょっ～～っとわっかんないかなあ」

『なははは』と乾いた笑いをもらし、なんとか誤魔化せないものかと必死に視線を泳がせる剣児の姿を、ジャンヌ達はさらに白い視線で見つめ続ける。

すると、今度は風狸（ふうり）族の少女が優しい、いや、優しすぎて返って恐ろしい笑顔を浮かばせながら剣児の前に屈みこみ、口の端をぴくぴくとふるわせて最後の問いかけを行う。

「そっか、わからないんですね。それじゃあ、わからないままでいいので、最後にお聞きしたいんですけど、剣児くん」

「な、な、なんでしょう？」

「このカップルの後ろに建物が立ってますよね。そうです、このピンク色の建物です。カップルはここから出てきたと思うんですけど」

「え、あ、そ、そうですね」

「ここのところ見ていただけますか？　そうそう、この看板です。

『愛の休憩所　やんちゃな子犬』って書いてありますよね。ここって、何をするための場所なんでしょうね？　そして、カップルはここで何をしていたんでしょうね？　剣児くん、どう思います？　どうみてもホテルのように見えるんですが、ホテルの前になにか別の言葉が入っている施設だったと思うんですよ。なんていうんでしたっけ？　『ら』ではじまって『ぶ』で終わるホテルだったと思うんですけど」

「あ～～、う～～」

にっこりとほほ笑みながらも凄まじい眼光を放ち、『言い逃れできるものならしてみやがれコノヤロー！！』と言わんばかりに剣児を睨みつける三人の美少女達。

その姿に完全に気圧され呑み込まれてしまいそうになりつつも、なんとかまだ言い逃れることができないか、うまい言い回しはないかと、彼女達から目を逸らしながら必死に頭をひねりまくる剣児。

しばし、無言の時が流れ、静寂が裏街を支配する。

だが、その静寂の時間は本当にわずかばかり。

三人の美少女達は、目の前で悪あがきを続ける自分達の獲物にトドメの一撃を解き放つ。

「わかったわ。じゃあ、これについては後でゆっくり思い出してもらうことにするから、今はいいわ」

「ふ～～、助かった。って、ちょっと待て。今『これについては』って言った？」

「言ったわよ。まだまだあるんだから、さくさくいきましょう。次は、この写真についてなんだけど、これって旅団第六秘書の新人さんよね？」

「ああ、この写真についても頼むぜ。これってさ、このまえ高校に来ていた教育実習の先生だよな？」

「まだまだ、ありますよ。これは、都市立中央病院の内科の先生ですよね？　それで、この女性は傭兵旅団『山猫の爪』の専属『療術師』の方、それからそれから」

出るわ出るわ。

次々と目の前に並べられていく写真の内容を確認した剣児は、既に卒倒寸前。

どれもこれも剣児と美しい女性達とのツーショット写真ばかりなうえに、撮られた場所は、どれもこれもいかがわしい場所ばかり。

「それにしても、これだけの写真の数があるというのに、全部別の方と写っていますね。一枚として被ってるものがないわ」

「あたしらの目を盗んでよくもまあ、これだけやってくれたもんだよなあ」

「凄いですねえ。これだけのことをしておいて、平然と私達と付き合っていられるその神経が凄いですねえ」

「あわ、あわわわわわ」

最早言い訳しても何の意味もないと悟った剣児は、恐怖で顔を青ざめさせる。

このままではマズイ、絶対にマズイ、何をされるかわかったものじゃない。

剣児はなんとかこの拘束状態から逃れられないか、抜け出せない

かと、懸命に身をよじり始める。

「ちっくしょ～、てっきり『戦術英霊呪符（タクティカルヒーローカード）』だと思ったのに、蓋を開けてみれば俺の浮気証拠写真だったなんて、そんなのありか！？　だいたいどうやってあれだけの写真を集めやがったんだ、あいつ！　いったい何者だ！？　それにそれにこの罠は一体どう仕掛けになっているんだ？　どういう形で埋まっているのか知らんが、全く動けない。ちっくしょう、それもこれもあのカラス野郎が・・ん？」

美少女達に聞こえないくらいの小さな声で毒づきながら必死に地面からの脱出を図ろうとする剣児。

ああでもないこうでもないと体をひねり続けるが、やはりどうすることもできず半分諦めて体の力を抜いた剣児は、ふとあることに気がついた。

脱出することに夢中になっていて気がつかなかったが、いつのまにか自分の目の前から美少女達がいなくなっている。

どういうことかわからないが、今がチャンス！！

そう思った剣児はもう一度奮起すると、力を込めて地中からの脱出を試みようとした。

だが。

まさにそのとき、剣児の耳に少女達の楽しげな、これ以上ないくらいに楽しそうな声が聞こえてくる。

「え？　いいの、これ使っても？」

「うっわ～、雑誌とかで見たことはあるけど、実物見るのはこれが

初めてだ。熱そう」

「これなんてすごいですよ。え、これ中身本物なんですか？　こんなに大量に入れるんだ。剣児くん、壊れちゃうんじゃないかなあ」

くすくすくすと、実に楽しげな・・いや、愉しげな声が聞こえてくる。

その響きに壮絶に嫌な予感を覚えた剣児は、声のするほうへと無理矢理首を回し、視線を向けてみる。

するとそこには、彼の想像を絶するとんでもない光景が繰り広げられていた。

「な、な、なに、なにやってんだ、おまえ！？」

盛大に悲鳴をあげる剣児の目の前。

黒装束の怪『人』は、彼の恋人達にどこから持ってきたのかわからないが、怪しい・・いや、怪しすぎる品々を手渡していた。

それは、やたらと黒くて太くて丈夫そうなムチや、いったいどこで使うのかわからないような巨大なロウソク。

なんだか妙に使いこまれている荒縄や、あと、針こそついてないが、やたらとデカイ注射器のようなものまである。

「おいおいおいおい、ちょっと待て！！　それをどうするつもりなんだよ！？　『嫌だなあ、旦那ったら、わかってるくせに』じゃねぇよ！！　そんなのわかりたくねぇんだよ。ってか、おまえそんなとんでもないものを渡しているんじゃねぇよ！！　それからおまえらも喜んで受け取ってるんじゃねぇ！！」

冷や汗を大量に流しながら喚き散らす剣児の姿をしばらくじ～～っと見つめていた四人であったが、やがて、カラスは再び手を懐に

突っ込むと、何かのチケットのようなものを二枚取り出した。
そして、それを三人の目の前に持って行って指先でいったりきたりさせる。

「どちらか選べってこと？」

フレイヤが代表して問いかけると、カラスはうんうんと頷いて見せる。
三人は顔を見合せたあと、カラスが差し出したチケットに顔を近づけて書いてある内容を確認する。

「えっと、『秘密の社交場　被虐の秘宝館　一泊無料チケット』って書いてあるわね」

「待て待て待て、ちょっと待て、おま、それは叩いたり叩かれたするのが好きな奴専門の・・」

「こっちは、『禁断の世界をちょっとだけ覗き見してみたいあなたのためのソフトルーム』で、『禁断の世界を存分に楽しみたいあなたのためのハードルーム　※各種暴虐アイテムを取り揃えております』って書いてあるな」

「いらんいらん！！　そんな趣味これっぽっちもないから！！　カラス、てめぇ、早くそれをひっこめろこんにゃろ！！」

「迷う必要ないでしょ。ハードルームのチケットください」

「「だよね～～」」

「『だよね～』じゃねえわあああああっ！！」

極上の笑顔を浮かべて見せる三人の美少女に、恭しい態度でチケットを渡したカラスは、残った一枚を懐に直し、別のチケットを数枚取り出して三人に手渡す。

「え、くれるの？」

「なんだろこれ、やっぱりチケットみたいだけど」

「『三角木馬　レンタル無料券』、『逆さ吊り用チェーン一式、レンタル無料券』、『恥辱痴態撮影用器具一式　レンタル無料券』ですって」

「「「カラスさん、ありがと～～」」」

「ぎゃあああああっ！！　バカバカバカッ！！　おまえはバカかあああああっ！！」

これから起こるであろう運命を正確に予感した剣児は、自分を見事に嵌めてくれた黒装束の怪『人』を盛大に罵倒するが、怪『人』は剣児のことを完全に無視。

そんなカラスの様子に怒り狂う剣児は、更なる罵倒を浴びせようとするのだが、怪『人』は剣児を無視したまますぐ側の廃ビルの壁へと移動。

そこの壁を何やらごそごそと探っていたかと思うと何かのスイッチを押す乾いた音が響き渡る。

すると次の瞬間、突然剣児が埋まっている地面が振動し始め、やがて、地面がえぐれるようにして上へと噴き出したかと思うと、剣児の身体が宙へと投げ出される。

「うわわわわっ！！」

すぽんっという間抜けな音と共に空中に飛び出したあと、剣児の身体はそのまま失速して落下。

やがて地面に到達し、しばらくごろごろと転がったあと、カラス達の目の前で止まったのだった。

その様子を呆気に取られて見ていた三人の美少女達だったが、やがて、剣児の姿を見て一斉に頬を赤らめ、両手で顔を隠してしまうのだった。

「「「きゃ～～、剣児くんのえっち～～！！」」」

「いててててて、え？　え！　えええええええええっ！？　な、なんじゃこりゃあああああっ！？」

美少女達の声にはっと我に返った剣児が自分の身体に視線を向けてみると、なんと、剣児の身体は素っ裸。

いや、素っ裸だけならまだよかったのだ。

なんと彼の身体は縛られていた。

それも普通の縛られ方ではない。

一見亀の甲羅の模様に見える、高度な、しかし、やたらエロい縛られ方をしていたのだった。

「ちょ、おま、これ！！　はずせ、今すぐ外せ、はずせってんだ、コンチクショー！！」

顔どころか、全身を羞恥で真っ赤にした剣児が盛大に喚き散らすが、カラスはやっぱり無視。

いったん近くの暗がりの中に消えたかと思うと、そこから台車のようなものを引っ張り出す。

そして、それをガラガラと押して剣児の側へと近寄ると、動けないでいる剣児の身体をよっこらしょと台車の上に載せるのだった。

「おまえ、俺をどうするつもりだ!?　はっ、まさかこのまま表通りに連れて行く気じゃ!?　やめろ、それだけはやめてくれええっ!!」

脳裏に描かれる恐ろしい未来に、悲鳴をあげる剣児。

しかし、やっぱりそれを無視したカラスは、指の隙間から嬉しそうに剣児の痴態を鑑賞している三人の美少女達を手招きする。

「ああ、ひょっとして、あとは私達に任せてくれるってこと?」

フレイヤが再び代表で問いかけると、カラスはまたもやうんうんと頷いた。

その答えを見た三人は肉食獣の笑みを浮かべて台車の上で縮みあがっている剣児を睨みつける。

誰が見ても絶対にただですませるつもりは全くないとわかる壮絶な笑み。

しかし、三人はカラスの視線に気がつくと、バツが悪そうな表情で顔を見合わせる。

そして、カラスのほうに視線を向け直すと、一斉に真摯な表情を浮かべてぺこりと頭を下げてみせるのだった。

「何を言ってもいまさらなんだけど・・ご迷惑をおかけしてしまって本当に申し訳ありませんでした。私達がもっとしっかりしていれば彼の暴走を防げたというのに」

「ごめんな。よく、確かめもせずに喧嘩吹っ掛けちまってさ、あんた結構いいやつだよな」

「今後このようなことがないように、責任をもって私達が彼のことはきっちり躾けます」

「「「『剣風刃雷』の名にかけて、この償いはいずれ必ずさせていただきます。重ね重ねご迷惑をおかけし申し訳ありませんでした」」」

するとと、カラスは『いいよいいよ、気にしないで』と言わんばかりに片手をひらひらとふって見せる。

そんなカラスに苦笑を浮かべて見せた三人は、もう一度ぺこりと頭を下げると、台車に乗せた剣児と共に、裏街を去って行った。

「ちょっと待て、こんにゃろ!!　俺は、俺は全然納得してねえええっ!!　絶対リベンジしてやるからな!!　覚えていろよ、くそガラス!!」

「黙りなさい、剣児くん。見苦しいですよ」

「そうだそうだ、そもそも、まずあたしらが納得してないっつ～の。これまでのこと全部吐いてもらうからな、覚悟しやがれ」

「みなさん、せっかくだから表通りを通ってからホテルのほうに行きましょう」

「「賛成」」

「いやあああっ!!　それだけはいやあああっ!!　ってか、誰かこの亀甲縛りほどいてえええええっ!!」

『ゲ～～ッゲッゲッゲッ』

こうしてカラスの嘲笑が響き渡る中、裏街から暴虐の凶龍は姿を消した。

『サードテンプル』の裏通りに、再び平穏な夜の時間が戻る。

そう確信したカラスはそっと安堵の溜息を吐きだしてしばしの間美しい夜空を見上げる。

空には闇夜を照らす美しい星達の姿。

その姿をしばしの間黙って見つめていたカラスであったが、やがて、その視線を裏通りの闇の中へと向け直す。

狩人との戦いは切り抜けたが、肝心の用事はすんではいない。

待っている。

彼の愛しい人が、この裏通りのどこかで待っているはずだった。

カラスはぼろぼろのコートを翻すと、愛しい人が待つ場所へ向かうために走りだす。

だが・・

「どこに行くつもりだ、『祟鴉（たたりがらす）』」

聞き覚えのある声がカラスを呼びとめる。

不快極まりない声、彼の心をいちいち逆撫でする嫌な声だった。

急ブレーキをかけるようにして足を止めたカラスは、声のしたほうに視線を向けようとしたのだが、そのときになって彼は唐突に自分の大失敗を悟る。

凶龍との戦いに集中しすぎてしまったのだ。

その間に彼は・・

完全に取り囲まれてしまっていた。

十人や二十人ではない、五十人を超えるであろう圧倒的な大人数に取り囲まれてしまっていた。

「さあ、『祟鴉（たたりがらす）』、第二ラウンドを始めようか！！」

第六話　『そして、二人は巡り合う』　その7（前書き）

ロム　：作者にこのまえ聞いて知ったんだが、『龍乃宮　姫子』が中学時代に在籍していたっていう武闘集団があるだろ。『ＧＴＧ』って名前だが、あれがなんの略か知っていたか？

瑞姫　：え？　たしか、『Ｇｒｅａｔ　Ｔｈｅ　Ｇｒｅａｔ』の略じゃなかったかしら？

ミナホ：うんうん、そうやったと思う。

ロム　：そうだと思うだろ？

はるか：違うんですか？

ロム　：『○ｏｕｄａ　○ａｋｅｓｈｉ　○ｉａｎ』の略らしい

ミナホ：！！

はるか：！！

瑞姫　：い、いやあああああっ！！　○ャイアンはいやあああっ！！　ちがうもんちがうもん、○ャイアンじゃないもん、私はしず○ちゃんだもん！！

はるか：ひ、姫様落ち着いてください！！　大暴れしないでくださいってば！！

ミナホ：こういうところが○ャイアンなんやろうなあ

はるか：ちょっと、ミナホ、見てないであなたも姫様を止めてよ！！

ロム　：とりあえず、謎の仮面戦士達が集結する本編、『そして、二人は巡り合う』　その7。スタートです。

ミナホ：あたしらがここに顔を出してる時点で全然謎になってない気がするんやけどなあ

はるか：二人とも、のんびりしゃべってないで、姫様を止めてってばあああっ！！

瑞姫　：絶対絶対わたしは○ャイアンじゃないんだからあああっ！！

作者のあほおおおおっ！！

第六話　『そして、二人は巡り合う』　その7

強い。
間違いなく強い。
とはいえ、際立った強さというわけではない。
自分の動きについてきてはいるし、こちらの攻撃をある程度かわし反撃するだけの技量は持ち合わせている。
が、しかし、その動きはあまり洗練されたものではなく、どちらかといえば不器用。
こちらを圧倒するような威圧感もないし、突出して強いという印象はうけない。
生れながらの喧嘩屋であり、師範代クラスの武術家でもある姫子からしてみれば、目の前の相手はまだまだ隙だらけで、かなり余裕を残した状態で戦っていられる力量。
しかし、この強さは本物の強さである。
凄まじい暴力の化身である姫子であるからこそ余裕をもって対処できているが、並の不良、あるいは修行半ばの拳士がこの目の前の相手と戦っていたのであれば、間違いなく既に地面に這いつくばっていたことであろう。
渾身とまではいかないが、それなりに威力を秘めた姫子の拳や蹴りの一撃を緩やかに捌いたかと思うと、一転して今度は凄まじい反撃の一撃を加えてくる。
ここまでの使い手とは全く思ってなかった。

巷の噂では『祟鴉（たたりがらす）』という怪『人』は奇怪な策を弄する策士と言われている。
力技ではなく、相手の精神的弱点を攻める様な戦い方を得意としていると言われていて、彼の噂話のほとんどがそういった類のものばかり。
武術の技を駆使するなんて話を聞いたことは一つもない。

（今までずっとその爪と牙を隠してきたということなのか？）

一瞬、心の中で自問する。
ほんの一瞬、ほんのわずかな時間。
しかし、生意気にも相手はそんな髪の毛一筋ほどの隙を見逃さなかった。
一瞬の隙をついて、まだまだぎこちないがそれでもそれなりに威力の乗った反撃の一撃を繰り出してくる。
並の戦士であればそれだけで勝負がついていただろう。
だが、彼女はそんじょそこらの並の戦士ではない。
一瞬で判断をつけると、相手の攻撃に自分の攻撃を合せて弾き返す。

（くっくっく、面白い。実に面白いなあ）

牽制の一撃を放って後方に飛び退り、間合いを開けた彼女は、肉食獣の笑みを浮かべて相手を凝視する。
闇夜そのものを切り取って身に纏っているかのような漆黒の戦闘用コート。
コートの袖口から見えるのは炎そのもののような真紅の籠手。
そして、目深にかぶったフードの中には、『祟』の一文字が刻まれた仮面。
目の前に立つのは間違いなく彼女が探し求めていた相手。

生まれながらの『喧嘩屋（クラッシャー）』である『龍乃宮（りゅうのみや）　姫子（ひめこ）』は、久しぶりに現れた思いもよらぬ上質の獲物を確認し、舌なめずりをして、その笑みを深くする。

（しかし、噂というものは本当にあてにならないものだな。どこが策士だ。間違いない、この目の前に立っている奴からは私と同じ匂いがする。己の『武』に命を懸ける者の匂いが）

相手との間合いを少し離すようにして後ろへと下がった姫子は、自分の目の前で油断なく半身に構えこちらを凝視している黒装束の怪『人』を嬉しそうに見つめる。

すでに彼女達の頭の上に眩しい太陽はなく、あたりを照らし出すのは通りのあちこちに設置された念気街灯の頼りない光と、少しずつその数を増やし輝き始めた星の光のみ。

真の闇・・というほど暗黒が支配している空間ではない。

しかし、じわりとそこかしこからわきだして身体にまとわりついてくるような闇が支配する裏通りの中央で、二つの人影が対峙して立つ。

一つは闇の中にあってもまばゆく輝く生命力に溢れた凛とした美少女『龍乃宮（りゅうのみや）　姫子（ひめこ）』。

そして、もう一つは、周囲の闇そのものといった雰囲気を纏いし漆黒の怪『人』。

二つの影は物も言わずに同時に互いに向けて踏み込むと、激しい拳と蹴りの応酬を繰り返しては離れ、離れてはまた近づく。

まるで楽しげにダンスを踊るかのように、闇と影が支配する裏通

りで激しくぶつかりあう。

彼女達が交戦状態に入ったのはつい先程のこと。

異母兄である剣児が率いるチームと別れ、自分達の元から逃げ出した『祟鴉（たたりがらす）』をかつての部下達と共に追い掛けてきた姫子。

当初、引連れてきた数人の仲間達と共にターゲットである『祟鴉（たたりがらす）』を見つけ出し、戦うつもりでいた。

しかし、『祟鴉（たたりがらす）』の第一発見者で、自分達に先んじて追跡を行っていた黒犬型獣人族（オルトロス）の少年エシルリストと合流した姫子は、彼から詳しい報告を聞いて方針を変える。

（『ＧＴＧ』随一の追跡者であるエシルリストの追跡を見事にかわす技量。噂以上のキレ者で策士であると見た。一旦逃げて見せたのもこちらを自分の有利なフィールドに誘い込むつもりだからだろうが。このままのこの人数でいけば奴の思惑通りになりかねんな）

そう考えた姫子は増援を呼ぶことを決意。

『ＧＴＧ』の元団員や、『ＧＴＧ』の傘下に下っていた不良グループのメンバー達で、この近辺にいる者達を片っぱしから念話で呼び寄せた。

呼び出しをかけた中には自分の異母妹瑞姫や、今日は彼女と共に生徒会の手伝いをしているはずの世話役はるかやミナホもいたのであるが、残念なことに彼女達は助っ人を拒否。

瑞姫はターゲットの人物に対して特別な思い入れがあるから断ってくるだろうとは思っていたが、まさか世話役二人からも断られるとは思っておらず、がっくりした姫子。

それでも気を取り直した姫子は一応自分の居場所だけは三人に伝え、気が向いたら救援に来てくれと言って念話をきった。

その後も、いろいろと昔馴染みに声をかけ続け、そうして姫子の元に集まった数は、なんと七十名以上にものぼった。

後から集まってきたメンツは、最初に姫子達と一緒にここに来ていた古株メンバーに比べればかなり質は劣るが、それでもこの数は十分に相手にとって脅威となるはずだった。

（瑞姫達が来てくれなかったのは少々痛かったなあ・・しかし、これなら見つけ次第数に任せて周囲を封鎖して、奴と直接対決できる環境を作り出すことができる。逃げ道さえ塞いでしまえばあとはどうにでもなるからな）

そうして改めて捜索を開始した姫子達であったが、捜索を再開して間もなく、件の怪『人』はすぐに見つかった。

いや、見つかったというよりも自ら姫子達の前に姿を現したのだった。

トレードマークとも言うべき黒装束のフード付き戦闘用コート、『崇』の一文字が書かれた仮面。

間違いなくそれはターゲットの怪『人』。

城砦都市『嶺斬泊』最大の歓楽街である『サードテンプル』北エリアの中でも、人通りがほとんどない最もさびれた場所。

そこにいくつも点在している廃ビルと廃ビルの間に広がる狭い路地の空間を通り抜けようとした姫子達一行。

そこに忽然と姿を現した黒ずくめの怪『人』は、挑発するように自らの人差し指を先頭に立つ姫子へと向けた。

『私を追い回すのはやめなさい。私にはあなた達に追いかけられるいわれも理由もない』

静かに。

どこまでも静かに、男とも女ともとれる不思議な声音で姫子達に呟く怪『人』。

その怪『人』の言葉を聞いた姫子はその顔を肉食獣のそれへと変化させる。

「別に理由なんかどうだっていいのだ。私はただただ戦いたいんだ。おまえのような強いやつとな」

『私は強くありません。そして、何よりも戦いたくありません。あなたのお申し出はひたすら迷惑でしかありません。どうかこのままその方達を引連れて帰っていただきたい』

姫子の返答に対し、静かに拒絶の言葉を紡ぐ怪『人』。

だが、姫子は首をゆっくりと横に振り、ニヤリと口の端を歪めて見せる。

「できんな」

『どうしてもですか？』

「どうしてもだ！！」

姫子の絶叫を合図に、側に控えていたエシルリスト達旧『ＧＴＧ』メンバー達が怪『人』めがけて殺到していく。

姫子は、とりあえず件の怪『人』のお手並み拝見とばかりに両手を組んで仁王立ちすると、これから始まるであろう元部下達と怪『人』との戦いを見物にかかる。

しかし。

『ヴァル・・ヴァルヴァルヴァヴァルヴァルヴァル

凄まじいばかりの獣の咆哮と共に、闇を切り裂いて何かが両者の間に飛び込んでくる。

「な、なんだ・・ぎゃあああっ！！」

「うわああっ！？」

「ひいいっ！！」

横合いから突如として現れた何かは、怪『人』に襲いかかろうとしていた旧『ＧＴＧ』メンバー達を一瞬にして蹴散らす。

圧倒的なまでの破壊力。

姫子には到底及ばないものの、そのあたりの不良達相手なら全く相手にならないほどの実力を誇るはずのエシルリスト達。

しかし、乱入してきた人影は、そんな猛者揃いのはずのエシルリスト達の中に凄まじい勢いで突っ込むと、まとめて木の葉のように吹き飛ばしてしまったのだった。

「な、なに？」

一瞬何事が起こったのか理解できず、茫然とする姫子。

その姫子のほうに、乱入者はゆっくりと顔を向ける。

『申（さる）』

東方文字で大きく一文字そう書かれた覆面ですっぽりと頭全てを覆い隠し、どうみても百九十ゼンチメトルを越えている大柄で筋肉質な堂々たる体格に身にまとうのは、肩から先が千切れてしまっているぼろぼろの黒い戦闘用コート。

漆黒の怪『人』を守るようにして立つその謎の人影は、先程の怪『人』と同じようにその指先を姫子へと向ける。

『一つだけ言っておく。おまえは『強いやつと戦いたい』んじゃない。『一方的に暴力をふるいたい』だけだ。ただそれを指摘されるのが嫌だから、言い訳できなくなるのが嫌だから、自分が壊しても後ろ指をさされない相手を探しているだけだ。さも正々堂々という顔をしてな。反吐が出るぜ』

「な、な、なんだとおおっ！？」

激昂する姫子に対し、『申』と書かれた覆面をつけた巨漢は呆れたように肩をすくめながら首を二つほど横に振る。

そして、姫子とその一党に対し覆面の奥から侮蔑の視線を隠そうともせずにぶつけ続ける巨漢であったが、ふと、右腕を引っ張られていることに気がついて後ろを振り向く。

すると、そこには本当に申し訳なさそうに身体を縮めている黒装束の怪『人』の姿が。

『あ、あの、本当に申し訳ありません。もう、なんと言ってお詫びをすればいいか』

先程までの落ち着いた静かな声音と違い、今にも泣き出しそうな声で巨漢に頭を何度も下げ続ける怪『人』。

『い、いや、済まん。一番辛いのはあんただった。『反吐が出る』は流石に言い過ぎだったと思う。悪かった。悪かったから、そう頭を下げないでくれ』

『いえ、とんでもありません。こうなってしまった責任の大部分が

私にあるのは間違いないことです。事もあろうにあの『人』のことを狙うなんて。そ、それからあの、大『真友』であるあなたを勝手に一方的に呼びつけて巻きこんでしまって本当にもう、なんとお詫びをすればいいのやら』

『いやいやいや、そんなことはない。あいつからあんたの身に起こった不幸な事故については聞いている。今目の前にいる『あれ』があんたにとってどういう存在かもちゃんとわかってる。だから、そう頭を下げないでくれないか。それにな、『K』からも言われていたんだ。もし、あんたから助けを求められることがあったらどうか助けてやってくれってな』

『お兄様が？　ロスタ・・いえ、『申（さる）』くんはお兄様とお知り合いだったんですか？』

『まあ知り合いというよりも恩人だ。奴は『外区』で素材ハンターをやってるだろう？　俺はバイトで『外区』に出ることが多いんだが、そのときに結構助けてもらったりしているんだ。借りが結構たまってるというわけだな。あんたに今日、念話で急に呼び出されたときは流石にびっくりしたが、そういうわけで俺は別に気にしていないぜ。今日はその借りを返す絶好のチャンスだから、せいぜい頑張らせてもらう』

いまだに申し訳なさそうに身体を小さくしている怪『人』の肩を慰めるようにぽんぽんと軽く叩いた覆面の巨漢は、再びその瞳に闘志を宿らせて姫子達のほうへと振り向く。

『さてと、『戦いたい』んだったな？　いいだろう、戦ってやる。ただし、一方的に蹂躙できるとは思わんことだ。最初に断っておくが、俺はかなり強いぞ』

両拳をバキバキと盛大に鳴らしながら一歩前へと進み出る覆面の巨漢。

その巨漢の挑発に対し、リーダーの姫子よりも先に、彼女の周囲に展開していた部下達が反応する。

「舐めやがって！！」

「たった一人で何ができる！！」

「ボロ雑巾にしてやるぜ！！」

口汚く叫びながら殺到してくる有象無象達を覆面の奥から睨みつけ、巨漢は彼らを迎え撃つべくゆっくりと構えを取る。

小さな津波のように押し寄せてくる不良の一団。

だが、今度は左右から飛び出してきたいくつかの人影が、不良達を吹き飛ばす。

『ロスタ・・いや、『申（さる）』はん、一人でかっこつけ過ぎやで！！』

『そうですそうです。私達だっているんですからね。そもそも護衛役は私達で』

『『雲』隊長も、『雨』参謀ものんびりしゃべってないで戦ってください！！』

『もう、目を放すとすぐに二人ともサボろうとするんだから』

『『ごめんなさい』』

不良達に左右から突撃を敢行したのは、全身を濃い蒼色の装束に身を包んだ一団。
みな鉄製と思われる長い棍を手にしており、見事な連携攻撃で不良達を次々と叩きのめしていく。
身体のラインや声から全員女性と思われるが、巨漢同様に覆面をしており、その正体は不明。
『雲』、『雨』、『霞』、『雫』などの文字が書かれた覆面でそれぞれ顔を隠し、全部で九人からなる武装集団は、最初に突撃してきた不良達を片づけてしまうと、今度は姫子の周囲に群がる不良達に目標を定め、突撃を開始する。
そんな彼女達の雄姿を頭をぽりぽりとかきながら見つめていた巨漢であったが、やがて、小さな溜息を吐きだして後ろを振り返る。

『俺、いらなかったかもしれん。あんたのところの護衛集団だけで十分いけそうだ。ってか、彼女達強いな』

『ええ、私の誇りです。でも、あの子達があの大人数相手に委縮せずに戦えるのは、ロス・・あわわ、『申(さる)』くんがいてくれるおかげだと思います』

『世辞がうまいな』

『そんなことないですよ』

『まあいい。とりあえず、俺達で周囲のバカどもは押さえておくから、あんたは真ん中にいる大バカ者に目が覚めるようなキツイのを一発食らわしてやれ』

『は、はい』

『じゃあ、またあとでな。いくぞ、有象無象ども！！　ヴァルヴァルヴァヴァルヴァルゥゥゥゥッ！！』

再び侠気の咆哮をあげた巨漢は、凄まじいスピードで乱闘の中へと突っ込みその剛腕を思う存分振い始める。

総勢七十名近くからなる不良の大軍団と、覆面の武装集団の戦いが益々ヒートアップしその様相は混迷を深めていく。

怒号と悲鳴がひっきりなしに響き渡る狭い路地裏の戦場。
その喧噪の真っ只中で対峙する二つの人影。

「当初と大分思惑が違ってしまったが、まあいい。というか、一対一というのはどちらかといえば望むところだ」

『私は望まない。望んでなどいない。だけど、あなたはそれを望むんですね』

「そうだ。私は望む。より強き者との戦いを。私が全力を出すことができる愉しい戦いを」

姫子の言葉を聞いた黒装束の怪『人』は深く長い溜息を吐きだしながら、ぽつりと呟く。

『これが・・これが『龍乃宮　姫子』の本性、本心・・つまりは・・私の・・本心か』

深い悲しみに包まれたその言葉はしかし、周囲の喧騒に消されて目の前に立つ少女の耳には届かなかった。
姫子は目の前の相手が自分に対して何かを呟いたことがわかった

が、大したことではないと判断すると、問い掛け直すのをやめて構えを取る。

「そろそろ始めてもいいかな、カラス」

『ダメだと言っても始めるんでしょ』

「わかってるではないか。いくぞ！！」

第六話　『そして、二人は巡り合う』　その8

二つの人影が暗闇の中を舞う。
拳と拳の激しい乱舞を。
他の誰かにみせるためではない、しかし、誰が見ても美しく、そして、誰が見てもどこか悲しい乱舞を。
二つの人影は舞い続ける。
一つの影は愉しげに、そして、余裕をもって。
もう一つの影は悲しげに、そして、全力をもって。

（どんな策を弄してくるのかと思ったから念のためにエシルリスト達に周囲を固めさせたのだがな。こうも真正面から拳を交えてくるとは思ってもみなかったわ）

相手が繰り出してくる嵐のような攻撃の数々を余裕たっぷりに受け捌きつつ、姫子は心から愉しそうに笑みを浮かべる。

中学時代、姫子は親友と共に『Ｇｒｅａｔ　Ｔｈｅ　Ｇｒｅａｔ』という武闘集団を作り上げ、地元の不良達相手に日々戦い続ける毎日を送り続けた。
それは不良達から一般生徒を守るとかそういう大義名分の元に行っていたわけではない。
ただただ自分に与えられた力を存分に振いたかっただけである。
ただただ自分が身に着けた技を存分に振いたかっただけである。
己の内に潜む恐ろしい破壊衝動。
それを満たすためだけに姫子は暴れ続けた。
暴れに暴れて暴れまくった。
そして、どこまでもいつまでも暴れ続けた結果、やがて城砦都市『嶺斬泊』東エリアと中央エリアの中の中学、高校に在籍している

不良達で姫子に表立って歯向かう者はいなくなってしまったのだった。

姫子が暴れ倒したエリア一帯の不良達のほとんどが『ＧＴＧ』の傘下に収まり、姫子の視界から拳を向けられる相手がほぼ完全に消滅した。

もしこのあともまだこのまま暴れ続けるならば、残っている西、北、南のエリアに進出していくか、『外区』の『害獣』でも相手にするしかない。

しかし、どちらも姫子は選ぶことはなかった。

他のエリアでは名を馳せるような猛者の存在が確認できなかったのと、『外区』に出て行くことは一族から厳しく止められていたからである。

そして、悶々としているうちに中学校を卒業する日がやってきた。

もう自分と拳を交えるに足る強い相手はいない

姫子は大きな寂寥感を抱えながらもそう判断し、『ＧＴＧ』から引退する決意を固める。

こうして一年と少し前、姫子はこういった拳を振るう世界から一旦足を洗ったのだった。

その後高校に進学し、中学時代の荒々しい男と見間違うような姿から一転、清楚で可憐な女子高生の姿へと見事に転身した姫子は、その姿にふさわしい生活態度で高校生活を送るようになる。

中学時代の姫子を知る者達からすれば、想像できないような穏やかな日々を続けて行った姫子。

一応、学校内のもめ事を処理するという名目で、喧嘩の中に飛び込んでいくようなことはあるにはあるが、一年前のような狂犬じみた行動はみられなくなっていた。

が・・

彼女の心の中の『喧嘩屋』の炎は全く消えてはいなかった。

幼馴染を守るためと称して喧嘩の仲裁に入ることがたびたびある姫子。

しかし、本当はそれを理由に喧嘩の中に飛び込んで、自分と拳を交えるに足る猛者を探していたのだ。

いや、幼馴染を守る為という理由が全くのウソというわけではない。

彼女は幼馴染の少年のことを大切に思っていたし、守りたいという気持ちも決してウソではないのだ。

だが、それが全てでもなかった。

学園のアイドルを演じていながらも、彼女は己の拳を存分に振るえる時、場所、そして、相手を探し求めていた。

（極上というには少々手応えが足りない。しかし、私に真っ向から勝負を挑むだけの胆力だけは流石というべきか）

心の中でそう呟きながら、懸命に自分に拳を振ってくる黒装束の怪『人』を見つめる姫子。

自分と同じくらいの身長、大きなコートではっきりとはわからないが自分よりもさらに華奢な体格。

全身をだぶだぶのコートで覆い隠しているためその種族は全くわからない。

少なくとも自分と同じような角のある種族ではないだろう。

もし角があるのなら、いくらフードで隠そうとしても隠せていないはずだ。

あと獣人系の種族とも違うだろう。

獣人系の種族のほぼ全てには尻尾があるが、この人物には尻尾がない。

尻尾は獣人系種族にとって、大事なバランス感覚器官である。

衣服の下に隠すことができないわけではないが、その場合尻尾の動きを阻害することになるため、動きが格段にぎこちなくなってしまう。

確かにこの人物の動きは自分よりも劣るが、それでも並の戦士以上の動きを見せている。

そう考えると、このコートの下に隠して動いているとはまず考えられない。

（『人』型種族だろうな。妖精族（エルフ）か、あるいは聖魔族（デモン）の人型種か、まあ、どちらにせよ種族の特定はできんか。あと、性別も・・）

姫子は心の中でそう呟くと、自分に拳を放ってくる目の前の人物を凝視する。

手合わせをし、直接拳を交えてみたが、やはりわからない。

この黒装束の怪『人』、男とも女ともつかない不思議な身体をしている。

姫子はこれまで何人もの猛者達と渡り合ってきた。

その相手となった者達は実に様々で、自分よりもはるかに年齢の高い者もいたし、びっくりするくらい幼い相手もいた。

男もいたし、女もいたし、そうかと思えば男でも女でもあるものもいたし、あるいは男でも女でもないものもいた。

そういった幾多の戦いを生き抜いてきたことで、いつしか姫子は拳を交えることである程度相手の性別を特定できる能力を身につけていたのだが、その感覚に響くものが全くないのである。

実に不思議な相手であった。

男のようにも感じるときがある、しかし、女のように感じるときもある、そして、どちらとも思えないように感じるときさえあるのだ。

掴みどころが全くない。
あえて無理矢理例えるとするならば、意思をもった人形と戦っているような感じであろうか。

（『策士』という噂とは違っていたが、『正体不明』という噂のほうは本当のようだな。いったいこいつは何者なのか？）

小首を傾げて相手を観察しながらも、間断なく繰り出される怒涛のラッシュを隙なく捌き、余裕でかわしていく姫子。
魂無き人形が戦っているにしては燃え上がるような熱い闘志、熱い拳。
しかし、こちらから攻撃し、めり込んだ拳から伝わってくるその感覚はどこか生き物のものとは違う何かのような不思議な感覚。
その感覚に戸惑うものの、自分の拳が効いていないのかと思えばそうではなく、姫子の一撃がその身体に叩きこまれるたびに、目の前の人形は苦悶の様子を見せ、低い嗚咽を漏らしている。
明らかに相手は弱っていっていた。
もし、これが本物の人形ならば、疲れたり痛みに退いたりすることはないはず。
機械のように最後まで正確に全力で戦い続けるはずだった。
しかし、相手の動きは機械からはあまりにも程遠い。

（いったい、こいつはなんなんだ。う～む。よくわからん。よくわからんが）

怪『人』の攻撃を余裕で捌きながら、観察を続けていた姫子であったが、唐突に考えることをやめ、結論を出す。

「やめじゃ。もう、飽きた。思ったよりもおまえはおもしろうなかったな」

『!?』

腰の入った右ストレートが飛んでくるのを、片手で受け止めて見せた姫子は、大あくびをしてみせながら馬鹿にしきった表情で相手を見つめる。

その顔に浮かんでいるのは完全に相手を見下しきった傲慢極まりない表情。

「だがまあ、暇つぶしにはなった。私の相手、大儀であった。もう、下がってよいぞ」

呆気に取られたように固まっている黒装束の怪『人』に傲然と呟いて見せる姫子。

その次の瞬間、姫子は怪『人』の拳を放して解放すると、目にも止まらぬ速さで前蹴りを怪人のどてっ腹にたたき込む。

『ぐ、ぐうっ!!』

たまらず後方に吹っ飛んでいく怪『人』。

なんとか足をばたつかせて地面に足をつけて踏ん張る。

そして、砂煙をあげながらも勢いを殺し、ある程度下がったところで踏みとどまることに成功したのであったが、しかし。

『!?』

「ぬるい。ぬるいな、お主。全然なっとらんわ」

踏みとどまったと思ったそのとき、顔をあげた怪『人』の前には、肉食獣の笑みを浮かべた姫子の姿。

一瞬にして間合いを詰めた姫子は、反応が遅れた怪『人』の隙を見逃さず、一気に攻勢に出る。

「チェストチェストチェストチェストォォォォォォ！！」

『きゃあああああああっ！！』

拳と蹴りの凄まじいばかりの連続攻撃。

正拳突きから、回転回し蹴りへ、そのまま、態勢を整えて裏拳、肘打ち、のけぞるところを無理矢理捕まえてその頭を膝へと叩きつける。

ふらつく足にローキック、崩れた所にミドルキック、そして、とどめのハイキックで側頭部をしたたかに蹴り飛ばし、横薙ぎに吹っ飛ばす。

やりたい放題に相手を蹂躙する。

まるでサンドバックか、組手用の木人でも相手にしているかのように容赦なく攻撃を叩きこむ姫子。

嵐のような攻撃はいつまでも続く。

悲鳴をあげながらも怪『人』は必死に防御態勢を整え耐え凌ごうとするが、姫子はその防御を力任せに叩きつぶしながら大技を叩き込む。

次第に防御も取れなくなってきて、ただ殴られるまま蹴られるままの状態になっていく怪『人』。

そんな怪『人』の様子を見ても姫子は攻撃の手を緩めようとはしない。

それどころか、その攻撃は更に激しさを増し、それと共に、姫子の表情にも変化が現れ始める。

攻撃を仕掛け始めた頃には真一文字に結ばれていた口元は、いまやだらしなく歪んで開いてしまっており、そして、その表情は醜悪

極まりない笑みとなっていた。

「はっはっは、踊れ踊れ踊れ！！　踊れカラス！！　上手に踊って私を愉しませろ！！」

久しぶりに振るうことができる暴力に、姫子の理性のタガは完全に外れてしまっていた。

愉悦に歪んだ表情で、実に愉しそうにその暴虐の牙と爪をふるい続ける。

あまりにもひどすぎる凶行ぶり。

彼女の護衛役達は、当然その状況に気がついていたが、周囲に群がる姫子の取り巻き達がいまだに大勢いるため助けにいくことができない。

『あ、あか～ん。やっぱ、二人の間の実力に差がありすぎる！！』

『このままじゃやばいわね。よし、ここは私達で食い止めるから、『雲』は『零』を連れて姫・・いや、リーダーの救援に』

襲いかかってくる不良達を鉄棍で薙ぎ倒しつつ冷静に二人の戦いを見つめていた『雨』が、隣で戦っている『雲』に指示を出そうとする。

しかし。

『それは、ダメだ』

不良達を蹴散らしながら二人のところにやってきた巨漢が、制止の声をかけ、二人の前に立ちはだかる。

『な、なんでや、『申』はん！？』

今にも駆け出そうとしていたところに待ったをかけられた『雲』が、今にも泣きだしそうな声で食ってかかる。

『おまえらもわかっているはずだ。これはあの二人の問題だ。いや、正確にはおまえ達の主自身の問題。自分で自分を越えるための戦い。自分の力で戦い抜き、勝たなくてはいけない問題なんだ』

『で、ですが』

納得できないと巨漢に食ってかかろうとする『雨』。

だが、巨漢はゆっくりと首を横に振りながら、野太い声で断言する。

『信じろ。おまえ達の主を信じろ。大丈夫、絶対に大丈夫。おまえ達の主は絶対に・・勝つ!!』

『な、なんでそんな自信たっぷりに言い切れるんや?』

『俺の背中にあいつがいるように。おまえ達の主の背中にもあいつがいるからだ。あいつが後ろにいる。あいつが後ろで見守っている限り、おまえ達の主はちょっとやそっとじゃ諦めない、くじけない、負けやしない。見ろ!!』

そう言って巨漢が指さすほうに視線を向けた『雲』と『雨』は、信じられないものを見て覆面の下で大きく目を見開く。

『『ひ、姫様!?』』

一方的に殴られ蹴られ、最早防御することもできぬまま、暴虐の

嵐にさらされ続けていた黒装束の人影。
誰が見てもあとは倒れるだけと思われた。
だが。

「そろそろ終わりにしようか、黒カラス！！」

相手が限界に近いと悟った姫子は、トドメを刺してこの戦いを終わりにすべく、渾身の力を右手に込める。
そして、腰だめにした状態から、獰猛な叫びと共に放たれる凶悪な拳の一撃。
誰もがこれで終わったと思った。
姫子も、姫子の取り巻き達も、そして、怪『人』自身も。
しかし、拳が届く寸前、諦めようとする怪『人』の心に誰かの声が聞こえる。

（もう諦めちゃうの？）

（だって・・だって、実力に差がありすぎるもの。身体能力も、武術の技術も、戦いのセンスも何もかもあの子のほうが上なんだもん）

（だからなに？　身体能力が相手のほうが高いから諦めるの？　武術の技術が相手のほうが勝っているから諦めるの？　戦いのセンスが自分よりも優れているから諦めるの？）

（だって、そうじゃない！！　私なんかよりも物凄く圧倒的に強いのよ！？　そんな相手に勝てるわけないでしょ！？）

（そうだね。そう思うよね、思っちゃうよね。だけど・・だけどね。僕は諦めなかったよ）

（！！）

諦めようとする怪『人』に対して投げかけられた一つの言葉。
その言葉の意味を知っている怪『人』は、自分の心の中に立つ一人の少年に視線を向ける。

（辛いよね、痛いよね、苦しいよね。自分は何もしていないのに、何も悪いことをしていないのに、どうしてこんな目にあわなくちゃいけないんだろうって思うよね）

（ごめん、ごめんなさい。ごめんなさい、私・・私ずっとずっとあなたにひどいことを。あなただけじゃない、自分がたくさんの人達にひどいことをしているのに、それを知ろうとしなかった、それを気付こうともしなかった）

（ううん、それはもういいんだ。もういいんだよ。だって。だって、君はもう知っているんだから、もう気がついているんだから。だからここにいるんじゃない）

（許してくれるの？　あなたにあれだけのことをした私なのに、あなたにあれだけひどいことをした私なのに）

（許すも何もないでしょ？　だって君は・・君は僕の大切な『友達』なんだから）

にっこりと穏やかにほほ笑みながら、光の中の少年は暗闇の中に座り込んだままの怪『人』にその手を差し伸べる。

（さあ、立って。大丈夫だよ。君は負けやしない。だって今の君は『人』の痛みや、苦しみや、悲しみを知っているんだから。そんな

君が、力だけの彼女に負けるわけないじゃない）

（私が・・あいつよりも強いっていうの？）

（あったりまえじゃない。だって、君の後ろには、ミナホちゃんや、はるかちゃんや、Kや、詩織さんや、そして、僕がついているんだから！！）

（！！）

光の中で少年は怪『人』に力強く頷いて見せる。

（見せてやりなよ、本当の力を。誰が本物かってことを。君が知ったたくさんの気持ち、たくさんの心をその拳にのせて！！）

（・・わかった。わかったよ、連夜！！）

姫子が放った一撃が怪『人』の顔面に吸い込まれようとした瞬間、『崇』の仮面の下にあるその瞳に再び光が宿る。

突如、怪『人』の姿がブレて見え、次の瞬間、姫子の拳は怪『人』の残像を突きぬけて空を切る。

「な、なんだと・・うおっ！？」

『はあっ！！』

驚き慌てる姫子の横に突如として現れた怪『人』は、姫子の脇腹めがけて凄まじい双掌打を食らわせて身体ごとその場から弾き飛ばす。

流石の姫子もまさかここにきてぼろぼろの怪『人』が息を吹き返

すとは思っていなかった。
反撃に対して何も用意していなかったため、まともに食らうことになってしまい、すぐには回復することができず、その場で脇腹を押えて苦悶の表情を浮かべる。

「き、きさまあああああっ！」

相手を侮りきっていたために、無様にも反撃を許してしまった不甲斐無い自分。
そして、自分のプライドを盛大に傷つけてくれた黒装束の怪『人』に対する二つの怒りで咆哮をあげる姫子。
そんな、姫子を仮面の奥から悲しみに満ちた瞳で見つめる怪『人』

『あなたは・・あなたは何も思わないの？　ただ、自分が思うようにいかなかったから吠えるだけなの？』

「はあっ！？　何を言ってるのだ、貴様！？」

『あなたが振ってきたその拳が、どれだけの『人』に辛い思いを、悲しい思いを、苦しい思いを与えてきたか。考えたことはないの？』

「知らん。なぜ考えなくてはならないのだ？　弱いくせに強いふりをするから悪いのだろう？　そういう輩をぶちのめして何が悪い！？」

『本当に・・本当にあなたはかわいそうな『人』ね』

「だ、誰がかわいそうな人だ！？」

姫子の言葉を聞いた怪『人』は一旦下を向いて深い嘆息を漏らす。

そこには深い深い悲しみと悔恨。
しかし、それを振り払うように首を二つほど横にふった怪『人』は、これまで以上に強い決意と覚悟のオーラを放ちながら顔をあげる。

『今度こそ。今度こそ私は迷わない』

「何？」

『痛み、嘆き、苦しみ、力持たぬが故に差別される『人』達が抱えるたくさんの悲しみ。しかし、それに負けることなく前を向いて生きる『人』達が持つ勇気、友情、喜び、そして、優しさ。たくさんの心、たくさんの気持ちを私は知った。無知で愚かだった私だったけれど、それでもあの『人』はそんな私を見捨てずにずっとずっと側にいてくれた。側にいて、いろいろな心を私に教えてくれた。そんな・・そんな大事な大事なあの『人』の為に、たくさんの心をくれた大切な大切なあの『人』の為に・・私は戦う!!』

強い、しかし、どこまでも美しい覚悟と決意のオーラを身に纏った黒装束の人物は、仮面に包まれたその顔をキッと姫子のほうに向け直す。

「あの『人』がいる。あの『人』が生きているこの優しい夜を守るために!!」

対峙して立つ姫子にビシッと指先を向ける黒装束の怪『人』。
ぼろぼろの身体、コートのあちこちが破れ汚れ傷だらけ泥だらけ。
汚れらしい汚れ、傷らしい傷はほとんどついていない姫子とは対照的に、満身創痍の姿。
だが、その姿は眼前に立つ姫子よりもはるかに美しい輝きを放つ。

己の傲慢に満ちあふれ、一方的に傷つけられる者の痛みや悲しみを省みない者には決して手が届かない美しい光。

「な、なんだ、そのオーラは？　見ているだけでイライラする！！」

「あなたには決してわからない。自分のことだけしか考えないあなたには。自分さえよければいいと思っているあなたには。自分以外の何ものも認めようとしないあなたには。わからない、わかるはずがない！！」

「黙れっ！！　黙れ黙れ、だまれえええええっ！！」

頭を掻きむしりながら苦悩の表情を浮かべた姫子は、やがてその瞳に狂気の色を浮かび上がらせると、拳を握りしめて黒装束の怪『人』めがけて凄まじい勢いで疾駆していく。

最早、怪『人』に怒れる本気の姫龍を止めるだけの力は残っていない。

事態を見守っていた姫子の取り巻き達の誰もがそう思った、だが。

自分めがけて突撃してくる暴力の化身を逃げることなくキッと強い眼差しで見つめた黒装束の怪『人』、いや、漆黒の麗『人』は、真紅の籠手に包まれた左手を前へとつきだす。

その腕の先、長く美しい人差し指と中指の間には、一つの蒼く小さな宝玉。

「いいえ、黙らないわ。あなたは知らなくてはいけない。かつて私が思い知ったように、『人』が『人』と生きていくために学ばなくてはいけない大事で大切なたくさんのことを。あなたは、あなただけは知らなくてはいけない！！　そのためにも！！」

様々な想いのこもった真摯な心からの叫び。
その叫びに反応して指先にある蒼い宝玉が美しくも激しい光を放って輝く。

「あの子に正しい道を示すために、私の大事なあの人の心よ、私の大切なあの人の魂よ、私に力を貸して！！」

漆黒の麗『人』の声に応えるようにさらに強い光を放って輝きを増した宝玉の中心に一つの東方文字が浮かび上がる。

その文字は

『勇』

麗『人』はその文字を確認するや右手の籠手のスロットにその宝玉を叩きつけるようにしてセット。
次の瞬間、籠手にセットされた宝玉から飛び出した蒼い光は漆黒の麗『人』の全身を包み込む。
あまりにも想定外な出来事に思わず呆気に取られて立ち止まってしまった姫子の前で、麗『人』の身体に異変が。
姫子につけられたはずの傷が見る見るうちに治っていく。
それればかりではない、薄汚れ、破れ放題だったコートは新品のように美しく変化。
身体のあちこちの傷や汚れが消えると、今度は麗『人』の容姿そのものが変化していく。
漆黒の戦闘用コートは籠手と同じ炎のような真紅の色に変わり、前が外れて左右にわかれる。
コートの下に着ていたと思われる純白の戦闘用アーマーに、ミニスカート、ロングブーツが見える状態になり、コートのフードが後ろに倒れて中からは長く美しい黒髪が流れおちる。

そして、『崇』の一字が書かれていた仮面は左右にわかれてショルダーガードになる。
素顔が完全にさらけ出された状態になった麗『人』。
しかし・・

「くっ、『人』の認識をぼやかす能力か!?　顔が、顔が判別できん!!」

整った顔立ち、間違いなく自分と同年代の少女とまではわかるのだが、肝心の　麗『人』の顔の部分だけが陽炎のように揺らめいていてはっきりと認識できないのだった。
ふとあることに思い至った姫子は苛立った声で麗『人』に問いかける。

「貴様、本当に『崇鴉(たたりがらす)』なのか!?」

その姫子の問いかけに対し、真紅の麗『人』はどこまでも透明な微笑みを浮かべて口を開く。

「『崇鴉(たたりがらす)』はあなた達が勝手につけた名前。自分達でつけたのだから、自分達で判断すればいいでしょう?」

「くっ、ならば、改めて問う、おまえはいったい何者なんだ?」

「そうね・・」

少し考えた麗人は、ふとその視線を頭上へと向ける。
そこには大小様々な星々が輝く、どこまでも深く静かな夜の空が広がっている。
中央には銀色の三日月。

しばし黙って見つめていると、その夜空をゆっくりと横切るようにして飛んで行く一羽の鳥の姿が。
それを見た麗『人』は口元にかすかな笑みを浮かべ、視線を再び目の前の姫子へと向け直して口を開く。

「そう、あの人と同じように夜に啼く鳥・・ナイチンゲールってところかしら」

「さ、『小夜啼鳥（ナイチンゲール）』だと？」

「ふふ、あの『人』が聞いたらなんていうかな」

自嘲気味に薄い笑みを浮かび上がらせた謎の麗『人』ナイチンゲールだったが、すぐに表情を改めると、強い意志と覚悟を秘めた視線を姫子へと向け直す。

「さあ、決着をつけましょう、『龍乃宮（りゅうのみや）　姫子（ひめこ）』。これ以上、その名前で悪いことはさせないわ」

「何を言っている、貴様！？　私の名前をどう使おうと私の勝手だ！！　もう頭にきた、本当にぶっ潰す！！」

ナイチンゲールの言葉の意味がわからず、しかし、妙に心に引っかかる言葉にイライラを爆発させた姫子は、今まで見せなかった本気の闘気を？き出しにして構える。
その構えに対し、ナイチンゲールもまた構えを返して戦闘態勢を取って見せる。
再び燃え上がる二つの闘志、二つの魂。

「遊びは終わりだ、ナイチンゲール。それなりに楽しかったが、も

う十分だ。私の拳を食らって沈め」

「もう一度だけいうわ、『龍乃宮(りゅうのみや)　姫子(ひめこ)』。痛み、嘆き、苦しみ、力持たぬが故に差別される者達が抱えるたくさんの悲しみ。しかし、それに負けることなく前を向いて生きる『人』達が持つ勇気、友情、喜び、そして、優しさ。たくさんの心、たくさんの気持ち、たくさんの魂、たくさんの大切がこの世にはある。かつて私もあなたもそれを知らなかった。どれ一つとして知ってはいなかった。愚かだった、本当に無知で愚かだったわ。でも、でもね。今の私は知っている。教えてもらったから。大事なあの『人』に教えてもらったから。そして、今もあの『人』が教えてくれるから、与えてくれるから。私は・・私は戦える!!」

万感の思いを込めて紡がれる言葉。
そこに宿る強い想い、強い決意、強い覚悟。
それらに気圧されて姫子は思わず一歩足を後ろに下げてしまう。

「あの『人』が紡ぎ育てるこの優しい夜の平穏。誰にも汚させやしない。私は守る。あの『人』が与えてくれたこの力で!!　勝負よ、『龍乃宮(りゅうのみや)　姫子(ひめこ)』!!」

「う、うるさいうるさいうるさ〜〜い!!」

「うおおおおおっ!!」

二つの魂、二つの拳が夜の闇を破って走る。
麗しい咆哮を上げ、光と光の間を舞う美しき獣達。

今、決着の時。

夜空を翔ける流星にも似た閃光の一撃。
そのたった一撃が、暴力の化身を打ち砕く。

闇広がる地面に横たわるは夜に啼く鳥に非ず。
地に落ちたるは暴虐の龍。
聖なる鳥に牙を折られ、龍は今、深い眠りに落ちる。
どこまでもどこまでも。
深い深い眠りに。

『終わったな』

地面に横たわる龍族の美しい少女をぼんやりと見つめている真紅の麗人の横にやってきたのは『申(さる)』の覆面をつけた巨漢。
全身傷だらけ泥だらけのひどい姿ではあるが、全く疲れた様子は見えない。
巨漢の後ろに視線を向けてみると、あれだけいた不良達のほとんどはすでに逃げ去ってしまっており、この場にとどまっている者はみな、地面に横たわって気絶していた。
その光景を見て安堵の溜息を吐きだしたナイチンゲールは、華のような笑顔を浮かべてぺこりと巨漢に頭を下げる。

「はい、御蔭さまでなんとか終わりました。それもこれも『申(さる)』くんのご助力あってのこと。本当にありがとうございました」

『よせ。大したことはしていない。どっちかというと、あんたのところの護衛衆のほうが大活躍だったと思うしな』

『そうやそうや！！　今日はあたしらめっちゃ頑張ったで！！』

『ず、頭脳労働専門のはずなんだけどなあ。なんで、私、あんなに頑張っちゃったんだろ？』

礼を言うナイチンゲールの声に反応し、『申（さる）』の巨体の後ろからひょこっと顔を出したのは、『雲』や『雨』の東方文字の覆面をした女性戦士達。

そんな女性戦士達の声に、麗人は慌てて頭を下げる。

「いや、みんなにも感謝しているのよ。本当に。いつもいつも助けてくれてありがとうね。ミナ・・いや、『雲』も『雨』も、そして、みんなもありがとう」

『姫様、感謝の気持ちはわかったけど、お願いやから、あたしらの本名うっかりいわんといてな』

『そうそうバレたら大変なことになるんですから。特に龍乃宮本家筋にバレたらえらいことなんですよ』

『あのな、偉そうに言っているがおまえら人のこと言えないだろ。さんざん俺の名前言いかけていたくせに』

『『「ほ、本当に申し訳ございません」』』

ぼやくように呟いた巨漢の言葉に、一斉に頭を下げるナイチンゲ

ール、『雲』、『雨』の三人。
そんな三人の姿を見て小さい嘆息をもらした『申（さる）』は、再び視線を目の前で眠る龍族の美少女に向ける。

『ところでこれどうするんだ？　持って帰るのか？』

「ええ、流石にこのまま放置するわけにはいきませんから。でも、流石に今日という日は堪忍袋の緒が切れましたし呆れ果てました」

巨漢の横に立ち、地面に横たわる龍族の少女を同じように見下ろすナイチンゲール。
何気なくその瞳を覗き込んだ巨漢は、そこに深い悲しみと激しい怒りの炎が浮かび上がっているのを見て顔を顰める。

「高校に入ってからすっかり落ち着いていたようで、安心していましたのに、結局猫を被っていただけなんですね。それだけでも裏切られた気分ですのに、よりによって憂さを晴らすためにあの『人』を狙うなんて。今日はなんとか食い止めることができましたが、いつまた凶悪な牙を剥き出すか・・それならいっそ私の手で」

真紅の籠手に包まれた手刀を静かに振り上げるナイチンゲール。
そんなナイチンゲールの腕を無言で掴んだ『申（さる）』は、悲しみに揺れる瞳をまっすぐに見つめながらはっきり首を横に振ってみせる。

「止めないでください。これは全て私の責任。あの『人』に被害が及ぶ前に私自身が決着を！！」

『とりあえず、まずはあいつに相談してみろ』

「そ、そんなことは！！　だ、だって迷惑ですし・・」

『あいつのことを信頼していると言った言葉はウソか？』

「ウソじゃない！！　決して、それだけは決して・・嘘ではありません」

『それなら、尚更相談してみるべきだ。多分、あいつもあんた自身から相談しに来るのを待っていると思う』

「そ、そうでしょうか？」

『あんたの知っているあいつと、俺の知っているあいつが同じなら、間違いないと思うがな』

掴んでいたナイチンゲールの細く白い手をそっと放した巨漢は、いたずらっぽくそう呟きながら肩をすくめて見せる。

その言葉に不安そうに巨漢を見上げたナイチンゲールだったが、またすぐに顔を伏せると唇をかみしめて地面をじっと見つめる。

そんなナイチンゲールに近寄ってきた『雲』と『雨』の二人が、その身体を両側から優しく抱きしめる。

『もう、そんな暗い顔しとらんと。相談しようや。あの『人』なら、宿難はんなら、なんとかしてくれるって』

『そうですよ。だって、そうじゃないですか。姫様がこうなってしまった時に、まっさきに姫様の危機を察して龍乃宮本家から助け出してくれたのは他ならぬ宿難くんでしょ？』

『そして、今も、ずっと姫様のことを守ってくれてる』

『『『『『『私達の、みんなの、本物の姫様。私達の目の前にいる本当の『龍乃宮(りゅうのみや)　姫子(ひめこ)』を守ってくれているじゃないですか！！』』』』』』

「『雲』、『雨』、それにみんな・・」

いつの間にか集まって来ていた他の隊員達もナイチゲールの周囲を取り囲み、わいわいと楽しげに彼女を励まし続ける。

その様子を見ていて、ようやく気持ちが解れたのか、ナイチンゲールはここにきて初めて心からの笑顔を浮かべて見せる。

「そうね。ちょっと・・ううん、かなり遅くなっちゃったけど、相談してみるわ。怒られるかもしれないけど、きっと、彼ならわかってくれるよね」

『そうやそうや、案ずるよりも産むがやすしやで、姫様。っていうか、いっそ、宿難はんとの間で子供作ってホンマに産んでしまうのもええかもしれん』

『そうね～、それもありよね～』

「ば、ば、バカバカバカッ！！　な、何言ってるのよ、私とあの『人』は別にそういう仲じゃ・・そりゃ、あの『人』がどうしてもっていうなら考えないでもないっていうか、それはそれでいいかもしれないというか。でも、私とあの『人』の間にある強い友情とか、絆とか、そういうのもあるから・・」

『姫様、姫様？　そろそろもどってきてや。ただの冗談なんやで？』

「ふ、ふぇっ！？」

『うちの姫様は本当にもう、からかいがいがあるというかなんというか』

「ちょ、ちょっと、あなたたちね！！」

『雲』と『雨』の漫才のようなやり取りを聞いていた面々の間に笑い声が広がる。

その笑い声に、ようやくナイチンゲールと『申（さる）』は今日の激闘の終わりを実感したのであったが、最後の最後でその予感は打ち破られる。

少し休んで息を整えた後、地面に横たわる龍族の少女を肩に担ぎ、その場を立ち去ろうとしたナイチンゲール達一行。

そこに、周囲の偵察に出ていた護衛衆の一人が物凄く慌てた様子で戻ってくる。

『大変です、大変です、姫様！！』

「どうしたの、『電』？　そんなに慌てて」

『カラス様が・・カラス様が』

「え・・」

どもりながらも何かを必死に伝えようとする護衛衆の様子に、嫌な予感を覚えるナイチンゲール。

そして、その予感は的中する。

『カラス様が、何者かにかどわかされました！！』

「えええええええっ！？」

第六話　『そして、二人は巡り合う』　その9

慣れていた。
昔から慣れていた。
こういうことは昔から日常茶飯事だったので、別に苦しくもなく悲しくもなく、すでに何も感じないといってもいい。
昔からというが、正確にいうなら物心ついていたときにはすでにという感じであろうか。
言葉をしゃべれるようになっていたそのときにはもうすでに、彼は他者からいじめられるのが普通になっていた。
殴られる蹴られるのは当たり前。
髪の毛を引っ張られる。
大事なものを隠される奪われる壊される。
顔に屈辱的な落書きをされる。
衣服を破られる。
ひどいときには崖から突き落とされたり、ガラスに頭を突っ込まれたりなどという命に関わることも何度もあった。

自分が生まれ落ちた世界に味方はほとんどいない。

右も左も善も悪もわからないような幼児の時点で、彼はそのことを嫌というほど自覚させられていた。
彼を産み育ててくれた両親や、彼よりも先にこの世に生まれていた二人の兄姉は数少ない例外ではあったが、それでもひとたび家の外の世界に出れば、そこは彼を害する敵達の悪意、害意が溢れる世界。
少しでも気を抜けばあっというまにその悪意という名の濁流に呑み込まれ流されて、最後には押し潰されるのみ。
そんな世界の中で、彼はずっと生きてきた。

十七年もの長い長い間、生きてきたのである。

そんな彼であるから、この程度のことでは心が折れたりはしない。

「おらおら、どうしたどうした」

「くやしかったらやり返してみろよ」

「ヘタレが。ざまあないぜ」

両手両足を羽交い締めにされた状態で、四方八方から殴られ蹴られ続ける。

乱暴を働いている不良達は、みな見るに堪えない下卑た笑いを浮かべ、聞くに堪えない罵倒を彼に浴びせながら、いつまでもいつまでも彼を小突きまわし続ける。

大して腰の入っていないパンチ、どこかのプロレスラーの技を見よう見まねしているだけのキック。

どれもこれでもプロの『害獣』ハンターや、武術家のものとは比べ物にならないほどお粗末なもの。

しかし、それでも種族的に腕力自慢の者達が放つパンチやキックである。

トロールや巨人族、牛型や象型の獣人族といった怪力が自慢の種族の不良達が放つそれらの攻撃は、いくら武術の心得がない、戦闘技術を全く学んでいないといってもそれなりに威力を発揮する。

身体能力に劣る下級種族ならば、間違いなくとっくにミンチになって死んでいるような打撃の嵐なのだ。

彼らは自分達が、行っていることがどういうことなのか理解しているのだろうか？

もちろん、答えは否だ。

自分達の行為によって、相手が死んでしまうなんて露ほども思っ

ていない。
そして、相手が死んでしまったら、こういうのだろう。
（ちょっとふざけてやっただけなのに、あっさり死にやがって）
ちょっとではすまない。
やられるほうは間違いなく凄まじい苦痛と恐怖を味わっているというのにも関わらず、彼らは自分達が行っている行為を悪いことだとは思っておらず、ましてや殺してしまっても、まるで運が悪かったみたいな言い方をするのだ。
こんな奴らに殺されてやるわけにはいかない。
こんな奴らに殺されてしまっては、自分をこれまで育ててくれた両親に申し訳が立たない。
彼は、『崇（たたり）』の一字が書かれた仮面の奥にある黒い瞳に凄まじい闘志の炎を宿し、自分を取り囲む不良達、そして、その彼らの中心に立つ二つの『人』影を睨みつける。
すると、彼の視線を敏感に察知した片方の『人』影が、醜悪な笑みを浮かべてその口元を歪める。
「おや、まだ心が折れていないようですね。流石は音に聞こえた『サードテンプル』の『招かれざる乱入者（スクランブル トリックスター）』。もっとも、今回は私達がお招きしたわけですがね、『祟鴉（たたりがらす）』殿」
男性にしては非常に高く美しいボーイソプラノの声でしゃべりかけるのは、一人の小柄な魔族の少年。
声と同じように、一見少女のようにも見える色白で美しい少年。
しかし、その美しい顔に刻まれた醜悪な笑みが全てを台無しにしてしまっている。

『カミオ・ヘイゼル』

近くの工業高校に巣くう不良グループ『砲戦華（ほうせんか）』のリーダーで、高校二年生。

彼がここにいる理由はただ一つ。

「さて、折角お招きに応じていただいたのですから、まだまだ楽しんでいただきますよ。今朝の御返しをさせていただかないとね」

そう、カミオが部下達を引連れてカラスの前に現れた理由、それは、今朝の件の復讐であった。

今朝、カミオは部下達と共に、一人の美女をナンパしようとした。それは霊狐族の女性で、ふるいつきたくなるようなメリハリのあるグラマラスな身体に、一流モデルや女優に匹敵するような美貌の持ち主。

いい返事がもらえなければ、無理矢理にでも拉致して楽しもうと思っていたというのに、思わぬ邪魔が入った。

他ならぬ『サードテンプル』の怪人『祟鴉（たたりがらす）』である。

カミオは腕に自信があった。

カミオは上級聖魔族（アークデモン）であり、表だって差別されたり馬鹿にされたりすることはなかったが、かわいらしい少女のような外見をしてるため、侮られてみられることが多い。

それを嫌ったカミオは、舐められないようにと必死に剣術や格闘術を学んだ。

父親について『外区』に出かけ『害獣』狩りにも参加した。

そうやって身に着けた武力、いくら『サードテンプル』の怪人と

言えど、物の数ではない。
そう思っていた。

だが。

カミオはあっさりと負けた。

これ以上ないくらいの完敗。
自慢の剣術を披露するどころか、それよりもはるか手前で無力化され、何一つついいところを見せずに終わってしまった。
ありえないくらい無様な姿を部下達の前で晒すことになったのだ。
その様子を最初から最後までしっかり見ていた、あの部下達に微妙な表情。
あまりの屈辱にしばらく声がでなかったし、それどころか動くことすらできなかった。

（許さない。許さないぞ、『崇鴉（たたりがらす）』！！）

復讐を固く誓ったカミオは、自分達の配下である不良達を全て集めて総動員し、朝からずっと『サードテンプル』周辺を見張らせていたのである。
カミオ自身は、すぐに見つけられるとは思っていなかった。
相手は警戒心が非常に強く、滅多に姿を現すことがないと言われているあの『崇鴉（たたりがらす）』。
流石のカミオもそんなにすぐ復讐を果たせるとは思ってはいない。
しかし、だからといってそのまま放置しておけば、いつまでたっても相手を捕まえることはできない。
非常に効率が悪い方法だと理解しつつも、ともかくこの方法が使えるうちはしばらく続ける覚悟で作戦を開始。

それがよかった。

これからしばらくは姿を現さないだろうと思っていた『祟鴉（たたりがらす）』が再びこの『サードテンプル』に姿を現したのだ。

学校をサボってまでも、配下達と張り込んでいた甲斐があった。

いったい何を目的で現れたのかわからないが、ともかく『祟鴉（たたりがらす）』はこの地に現れた。

このことに歓喜したカミオ達は、すぐにでも襲撃をかけるために、『サードテンプル』のあちこちに散らせていた他の配下達を集合させる。

しかし、思わぬ事態が彼らに待っていた。

なんと、『祟鴉（たたりがらす）』を追いかけていたのは自分達だけではなかったのだ。

『龍乃宮（りゅうのみや）　剣児（けんじ）』

カミオが通う御稜高校にその名を轟かす、三大武芸者の一人。

プロの『害獣』ハンターとしても大活躍している超有名人。

そんな『武』の化身が『祟鴉（たたりがらす）』を狙って追いかけている。

狙った獲物は絶対に逃がさないことで知られている『龍乃宮（りゅうのみや）　剣児（けんじ）』だ、間違いなくどこかでカラスに追いつき激突するに違いない。

カミオの配下の数は五十人を超えている。

しかし、この数を以てしてもあの龍神には敵わないことをカミオはよく知っていた。

実は、カミオ、この件の人物と同じクラスに在籍しているのだ。

日々クラス内で彼の戦いぶりを見ているカミオは、横やりをいれてもまず勝てないということをよく熟知していた。

そして、『龍乃宮（りゅうのみや）　剣児（けんじ）』と事を構えたくない理由がもう一つ。

顔を見られるのは非常に不味いということだ。

御稜高校内のカミオは品性公正な模範的生徒、頼れるクラスの副委員長として通している。

ぶっちゃけていえば、アウトローとしての側面は隠して学校生活を送っているのである。

復讐は果たしたいが、高校での自分の評判を落とすような迂闊な行動は取りたくない。

カミオは、自分の不運を呪いたくなったが、ともかく、相手に悟られないように事態を見守ることにした。

そして、やがてカミオの予想通り、カラスと龍神は激突する。

カラスを見つけるなり、一方的に滅多打ちにし、やりたい放題の暴虐ぶりを見せつける龍神。

自分のプライドをいいようにへし折ってくれた仇敵がやられる姿を見るのは多少気が晴れる光景。

しかし、それ以上に折角見つけた獲物を横取りされている思いのほうが強く、だんだん気分が悪くなってくる。

すぐにでも飛び出していって、カラス諸共滅多打ちにしてやりたいが、流石に相手が悪い、どう考えても返り討ちにあうのが関の山だ。

もう、ここにいても意味がない。

あれだけやってしまったら、すぐに警察が飛んできて大騒ぎになるだろう。

龍乃宮の力で、事態をもみ消そうとするのかもしれないが、さてどこまで通用するか。

ともかく、ここにとどまれば自分達まで巻き込まれかねない、そう思って撤退しようとしたカミオであったが、天はここでも彼に味方する。

なんと、一方的にやられていたカラスが、『龍乃宮(りゅうのみや)　剣児(けんじ)』の側近である恋人達を寝返らせて撃退してしまったのである。
遠目から見ていたので、その方法まではよくわからなかったが、ともかく、邪魔者は退場した。
流石、『サードテンプル』の怪『人』ということであろうか。

だがしかし、兎にも角にも今が、今こそが絶好のチャンスだった。
『龍乃宮(りゅうのみや)　剣児(けんじ)』との戦いを無事乗り越えたことで、カラスは完全に油断している。
今ならば、不意を打つことができる。
いや、今この時しかチャンスはない。

ひょっとしたらという思いで、周囲に配置させていた配下の者達に緊急事態の合図を送る。
そして、カミオは『崇鴉(たたりがらす)』に声をかけ、自分のほうに注意を向けさせると同時に配下の者達を襲いかからせた。

『崇鴉(たたりがらす)』はすぐに自分の周囲の敵意に気がつき、懐から何かを出して襲撃者達を迎撃しようとしたようであったが、カミオ達のほうがほんの一歩だけ早かった。

カミオ達は仇敵を拉致することに成功。
巨人族をはじめとする力自慢の者達に『崇鴉(たたりがらす)』の身体を拘束させ、カミオは近くにある廃ビルの中へ連れ込んだ。

そして始まる暴虐の宴。

剛力自慢の自分の手下達にがっちりと拘束させた状態で、四方八方から殴る蹴るの暴行三昧。

少しでも自由にすれば何をしでかすかわからない相手だけに、ちょっとの油断もしないようにと拘束している手下達にしっかり注意した上でのリンチ。

流石のカラスもどうすることもできないようで、殴られ蹴られて壊れた人形のように身体を痙攣させるだけ。

本来なら、仮面やフードをはじめ、身ぐるみ全て剥いだ上で蹂躙してやりたかったのであるが、何をどうしても?すことができなかった。

現在使用を禁じられている魔力や霊力といった異界の力の類で作られたものかとも思ったが、そういった力の気配は全くない。

と、なると、それとは違う何らかの技術で作られた代物ということになるが、このような技術など聞いたことがなく、配下の者達の中にもこの技術について知る者は一人としていなかった。

自分達が知らない未知の技術。

そのことが非常に不気味であったし、気になって仕方なかったが、この場所ではこれ以上どうすることもできない。

それでもなんとかしたかったが、やはりどうすることもできなかったので、とりあえずそのままにして制裁を加えることにしたのである。

なんらかの特殊効果がこの着衣に込められているのかもしれなかったが、とりあえず、件のカラスは今の状態から抜け出せずにいることから、放っておいてもこちらに害はないと判断し配下の者達に指示して今朝の分の仕返しを存分に始める。

殴る殴る殴る。

一方的に殴る。

蹴る蹴る蹴る。

一方的に蹴る。

巨人族やトロール族、ゴブリン族やオーク族、エルフ族やデモン族、様々な種族の配下達が、たった一人を取り囲み思う存分その暴力を振う。

その光景を少し離れたところで見つめるカミオは、自分に恥をかかせてくれた仇敵がいいように無様に一方的にに嬲られているのを見て、大いに溜飲を下げて愉悦に満ちた醜い笑顔を浮かべる。

「いいざまだな、『崇鴉（たたりがらす）』殿。余計な手出しをしなければこんなことにはならなかったのに。大した力もないくせにカッコつけようとするからだよ。自分の馬鹿さ加減を猛省したまえよ」

美しい顔を醜悪に歪めながら聞くに堪えない嘲笑を得意げにあげるカミオ。

だが、そんなカミオの耳に、自分の物とは違う別の嘲笑が聞こえてくる。

最初、自分の側近の誰かが、同じように笑っているのかと思った。

だが、周囲を見渡すと自分以外誰も笑っていないことに気がつく。

いったい誰が、そう思って前を見たカミオは、嘲笑をあげていた者が誰なのかに気がつき、怒りで顔を紅潮させる。

「き、貴様・・」

嘲笑をあげていたのは、他ならぬ『崇鴉（たたりがらす）』その『人』であった。

殴られ蹴られながらも、カミオや周囲の不良達に顔を向け、耐え

られないという風に低い嗤い声を上げ続ける『祟鴉（たたりがらす）』。
そう、『祟鴉（たたりがらす）』はおかしかった。
おかしくてたまらなかったのだ。
自分達が王様であるかのように振舞い、傍若無人の限りを尽くすこの連中が。
何もわかっていない、何一つとしてわかっていないのだ。
この世の全てのものが、なんでもかんでも力で解決できると思っているこの連中が滑稽で仕方なかった。

とりあえず、殴れば屈伏すると思ったのか？
とりあえず、蹴れば降服すると思ったのか？

確かに『人』の心は弱く脆い。
時には泣きたくなるときだってある、弱音を吐きたくなる時だってある、何もかもを諦めて投げ出してしまいたくなる時だったあるだろう。
孤独に耐えらずその場から逃げ出してしまう時だってある。

しかし！！

それでも『人』は前に進むのだ。
どれだけ傷ついても倒れても動けないと思ったとしても、無理矢理にでも『人』は前に進んでいく。
引きずられるように、押し出されるように、前へ前へと進んで行く。
泣いた分だけ、弱音を吐いた分だけ、投げ出した分だけ、逃げだした分だけ、傷ついた分だけ。
『人』の心は強くなる。

一度折れても折れたところを無理矢理繋ぎ、『人』は強くなって

生きていくのだ。
心の傷をいくつも抱えて、それでも生きていくのだ。
そうやって強くなった心はそう簡単には折れない、折れたりしない。

目の前に立つこいつらはそうした想いをどれほど経験したことがあるというのだろう？

いや、この愚か者達にそんな経験はない。
カラスにはわかる。
何度も何度も地面に倒れ、砂と土を噛み、血と涙を流してきたカラスにはわかる。

ここにいるのは血統書つきの上等な飼い犬ばかり。
どいつもこいつも親兄弟に甘やかされ、大した挫折も知らず、ぬくぬくと温室の中で育ってきた室内犬なのだ。

誰かを踏みつけた経験はあっても、踏みつけられた経験はない。
誰かを傷つけた経験はあっても、傷つけられた経験はない。

意味なく吠えるだけしか能のない奴らがこの闇夜のカラスの翼をへし折る？

面白い冗談だ。

実に面白い冗談だった。

怪力任せに殴られ蹴られ、カラスの身体は今、間違いなく瀕死の状態だった。
一応、彼が着ている漆黒の戦闘用コートは対打撃仕様で、ある程

度の攻撃は防ぐことができるようにできている。
しかし、それにも限度というものがある。
これだけの人数、しかも剛力自慢の種族の者達に力一杯殴られ蹴られすれば、いくら対打撃仕様でも全ての打撃を吸収しきれない。
両手両足は複雑骨折していたし、あばらは折れ内蔵のいくつかに突き刺さっている。
刺さっていない内蔵でも、破裂していると思われるものがあるとわかる。
仮面にあらかじめ仕込んでおいた痛覚を麻痺させる薬のおかげでなんとか持ちこたえているが、恐らくこのまま放置すればそれほど時間がかかることなくこの世とおさらばだ。

だが、それでも絶対に屈伏することはない。
だが、それでも絶対に降伏することはない。

命乞いはしない、負けを認めたりもしない、最後の最後まであがき続ける、この心臓が動かなくなるその一瞬まで諦めない。
例え殺されることになったとしても、最後の最後まで自分は自分であり続ける。
カラスは低い嗤い声をあげ続けながらも仮面の奥にある二つの瞳に強い光を宿して、周囲の不良達を睨みつける。
殴られながらも、蹴られながらも、決してその光を弱めることなく、一瞬の隙も見逃さないよう見つめ続ける。

「気に入らない、気にいりませんね」

『祟鴉（たたりがらす）』から発せられる強い闘志が未だに衰えぬことに気がついたカミオの表情が険しくなる。
もっと早くに屈服し命乞いをしてくるかと思ったのだが、生意気なことに仇敵は泣きごと一つ洩らさない。

それどころかこちらに対する敵意を益々強くし、こちらに向けて凄まじい闘気をぶつけてくる。

気に入らない、非常に気に入らなかった。

泣きわめいて土下座して許しを乞う無様な姿を期待しているというのに、あまりにも気に入らない展開、気に入らない態度であった。

カミオは、舌打ちをひとつ漏らして腰から二本の直剣を引き抜く。

本来都市の中で刃のついた武器を持ち歩くことは法律違反なのであるが、バレなければ問題ないと家から持ち出してきたのだ。

そして、面白くなさそうにその二本の直剣を見つめたあと、一本を自分のすぐ横に立つ大柄な『人』影に突きだして渡す。

「ジャック。そろそろ終わりにするから、君、手伝いなさい」

「え、へ？　お、俺っすか！？」

カミオが剣を渡したのは、西域牛頭人体族（ミノタウロス）の少年ジャック・ブルータス。

御稜高校の一年生達の中では、最大の勢力を誇る不良集団のリーダーであるジャックであるが、実は中学時代からのカミオの側近の一人。

上級聖魔族（アークデモン）としてこの都市でそれなりの権力を持つカミオの父親バエル・ヘイゼル。

そのバエルのボディガードをしているのがジャックの叔父で、その叔父の紹介でジャックは幼き頃にカミオと知りあうことになった。

腐った性根の持ち主同士で気があったためか、ジャックは一つ年上のカミオを兄貴分として慕い、カミオが起こす様々な悪事に加担してきた。

そんなジャックをカミオも可愛がり、父親や一族の権力を乱用して様々な恩恵を授けてきた。

本来、実力では到底入れないはずの御稜高校に入学できるように

根回ししたり、ジャックが引き起こす悪事の数々をもみ消したりとそれはもう様々。

そのため、ジャックはカミオに対して表面上は忠誠を誓っており、今日もカミオの要請でカラス狩りに出張って来というわけである。

とはいえ、正直なところを言えば、敬愛する兄貴分の頼みであっても今日は来たくはなかった。

と、いうのも、今日の昼間、彼はある人物にさんざんな目にあわされていたからである。

その人物は自分よりも圧倒的に立場が低く、能力もない弱小種族。だったはずなのに。

こちらは相手をはるかに凌駕する武力、圧倒的な人数で軽く捻り潰すことができるとタカをくくってかかっていった彼は、物の見事に撃破されてしまった。

もう、このまま家に帰って不貞寝してしまいたい気分だったのだ。

だが、兄貴分はそれを許さず、ぐずる彼を半ば恫喝する形で無理矢理参戦させたのであった。

自分の部下達に盛大に八つ当たりしながらも、なんとかカミオと合流を果たしたジャック。

ジャック自身は『崇鴉（たたりがらす）』自身に思うところはなく、別にどっちでもいいという感じではあったが、兄貴分の手前手を抜くわけにはいかない。

そこでジャック自ら先頭に立って彼の腕自慢の側近達と共にカラス拉致作戦を決行。

無事カラスの身柄を拘束し、なんとか面目を保つことに成功する。

これで一応義理も果たしたことだし、あとは自分がいなくても大丈夫だろうと判断した彼は、部下達と共にそろそろ帰ろうかと思っていたのであったが・・

「あ、兄気、こんな物騒なもんで何をどうする気だよ?」

直剣を渡されたものの、カミオが自分に何をさせるつもりで渡したのかその真意が見えず、困惑しきった顔で自分よりも小さなカミオを見下ろすジャック。

そんな察しの悪いジャックの様子を呆れたように見つめていたカミオだったが、短い嘆息をひとつ漏らしたあと、怒ったような表情で自分よりも大きなジャックを見上げる。

「決まっているでしょう。それであの忌々しいカラスにトドメを刺すんですよ」

「ああ、そっか。なるほどね、トドメを・・って、と、トドメッ！？」

カミオの言葉にようやく渡された直剣の意味がわかったジャックであったが、わかったが故に驚愕の声をあげる。

「あ、あ、兄気ちょっと待ってくれ。ま、ま、まさ、まさか、殺、ころ、コロ」

「そうですよ。今更何をいっているのですか？　だいたい、すでにこれだけさんざんやっているではありませんか。言っておきますが、すでにそこのカラスは致命傷を負っています」

「ち、ち、致命傷！？」

「いったいどれだけ殴って蹴ったと思うのですか？　巨人族やドワーフ族だって耐えきれないくらいの打撲を与えているのですよ。放っておいてもどの道死にます。ここにいる者は全員殺人の罪を犯すことになるんです」

「え、ええ、さ、殺人？　えええ、そ、そんなっ！！　で、でも、それならわざわざトドメをささなくても」

「このまま泣きごと一つ洩らさず、負けを認めないまま死なれては私の気が晴れません。せめて私の手で決定的な敗北を刻んでやるのです」

そう言ってぞっとするような酷薄な笑みを浮かべるカミオ。

長年カミオと付き合っているジャックであるが、流石のジャックもこの狂気に満ちた笑みを直視することができず思わず顔を背ける。

そんなジャックの様子に気を悪くした風もなく、カミオはまるでゴミでも片付けにいくような軽い口調で恐ろしいことを平然と口に上らせる。

「私がカラスの首を叩き落としますから、あなたは、あいつの心臓に一突き入れてやってください」

「し、しん、しんぞ」

「いいですね？」

明らかに腰が引けているジャックに顔を近づけたカミオ。

一見優しげに笑っているように見えるが、目が全く笑っていない。

それどころか、その狂気に満ちた目は雄弁にあることをジャックに語っていた。

（言う通りにしなければ、今度はおまえを殺す）

長年の付き合いでその目が意味することを正確に理解してしまっ

たジャックは、大きく溜息を吐きだした後、若干身体を震わしながら覚悟を決める。
そして、自分が使うにはやや小ぶりな直剣を両手で掴み、必要以上に力を込めて握るとカミオよりも先に歩きだす。

「ジャック、なんの真似ですか？」

突如やる気を見せ始めた弟分の不可解な行動に眉をしかめるカミオ。
そんなカミオの言葉にジャックは振り返らないままに未だ震える口調のまま言葉を紡ぐ。

「も、もしもの場合、兄貴を主犯にするわけにはいかないから、俺が先にやる。兄貴は俺が心臓刺したあとにやってくれ」

「生意気なことを。ですがまあ、その意気はよし」

弟分の言葉に一瞬顔を顰めて見せたカミオであったが、すぐに表情をほころばせると小走りに駆け寄ってその横につく。

「では、あなたのお手並み、とくと拝見させていただくとしましょう」

「できれば考えなおしてもらいたいんだけどなあ」

「何かいいましたか？」

「言ってないっすよ」

あくまでもにこやかな表情のまま、狂気を垂れ流し続ける自分よ

りもはるかに小柄な兄貴分をなんとも言えない表情でそっと盗み見たジャックであったが、最早止めることは不可能と判断すると、自分の部下達に拘束されて壊れた人形のようになっている黒装束の怪『人』のほうに視線を向け直す。

明かに折れているとわかる手足は、間違っても曲がらない方向に曲がり、黒装束の袖口からは真っ赤な血がとめどなく流れ続けている。

恐らくそう待つこともなく絶命することは間違いない。

それから刺しても問題ないんじゃないかなどと、ここにきてヘタレたことを考えるジャックであったが、その満身創痍の怪『人』から放たれ続ける恐ろしいまでの闘志を見て即座に考えを改める。

今、目の前にいる怪『人』が放っている凄まじくも恐ろしい闘志。

その闘志を彼は知っていた。

（こいつまさか）

『祟』の仮面と黒づくめでぼろぼろの戦闘用コートに隠された謎の『人』物。

だが、そのシルエットはどこか彼が知る人物と重なるものがある。

そういえば、その『人』物もこの怪『人』同様に、恐ろしいまでの技量で『道具』を使いこなしていなかっただろうか？

もし、もしも、その『人』物とこの目の前の『人』物が同一の存在だとするならば。

ジャックの背中に一瞬にして大量の汗が拭き出し流れ始める。

（もしそうなら、そうだとするならば、兄貴だけの問題じゃねぇ。絶対にここで殺しておかなくては。あいつは、あの化け物は俺たち以上に執念深い。ここで見逃せば、いったい何をされるかわかったもんじゃねぇ）

ジャックは昼間に自分が味わうことになった屈辱の数々を思い出した。
それは単純な暴力によるものではない。
とても他人には言えない、いや、絶対に知られたくない屈辱の数々。
味あわされただけでも十分な屈辱だというのに、それは味あわされただけでは終わらなかった。
その屈辱の秘密を、今、相手はしっかり握りしめているのだ。

（あの秘密を暴露されたら俺は生きてはいけない。もし、こいつがあいつ自身だとするならば、好都合ってもんだ。証拠隠滅の為にもここで死んでもらう！！）

心の中でそう決意したジャックは、横に立つカミオと同じような冷徹な色を瞳に宿す。
カミオは自分の横に立つ舎弟の雰囲気が変わったことを敏感に察知したが、その殺意がまっすぐカラスに向かっていることを悟ると、満足そうな表情を浮かべて追及することをやめる。

「おまえが何者かは知らん。こうなってくるとむしろ知りたいとは思わん。だから死ね。ともかく死ね。今すぐ死ね」

ぼそりとそう呟いたジャックは弓を射るように剣を引いて構える。
その切っ先は真っすぐに『祟鴉（たたりがらす）』の心臓へと向いていた。

第六話　『そして、二人は巡り合う』　その１０

「いい構えに、いい気迫ですね、ジャック。さて、『崇鴉（たたりがらす）』殿、何か言い残すことはございませんか？」

舎弟の頼もしい姿に気を良くしたカミオは、目の前で今にも息絶えそうな状態でありながら闘志を枯らすことなくこちらにぶつけてくる黒装束の怪『人』に問いかける。

しかし、怪『人』は不良達に闘志を放つだけで言葉自体を紡ごうとはしなかった。

カラスにしてみれば、こんな奴らとは一言も口をききたくなかったのだ。

だが、言い残したい言葉がないわけでもなかった。

できれば。

できることならば、ある『人』にだけは謝りたかった。

心から謝りたかった。

彼が自分の心に住まわせる憧れの、そして、最愛の女性。

せっかく彼女が自分と約束してくれたのに。

彼女自身が、こんな自分に会いたいと、会ってほしいと約束してくれたのに。

結局自分はその約束を果たせなかった。

たとえ、ここで命散らすことになったとしても、彼自身にほとんど悔いはない。

短い人生ではあったが、彼は自分が間違いなく幸せだったと思っている。

温かくも優しい両親の元に生まれることができた。
兄姉妹達は自分のことを本当にかわいがってくれた。
生死を共にするほど仲が良い友達もできた。
人間である自分を差別することなく、自分達が蓄えた知識技術を惜しみなく伝授してくれた偉大な師匠達とも会えた。

辛いこと悲しいことはいっぱいあったが、それ以上に楽しくも満ち足りた『人』生であった。

これ以上望むことは贅沢以外の何物でもない。
それはよく心得ている。

しかし

もし一つだけ願いをかなえてもらえるなら、もし許してもらえるならば

最愛の『人』の側で死にたい。

たった一人、自分が愛したあの『人』の側で死にたかった。

最後の最後まで『生』を諦めはしない。
だが同時に、目の前に構えられたあの剣を避ける術が今自分にはないこともわかっている。

終わりの時が来る。

それはもうどうしようもなく逃れられない運命。

そう確信する。

なればこそ、あの『人』の側で最後の時を迎えたかった。

どうしてそう思ってしまうのかはわからない。
でも、どうしてもそう思ってしまうのだ。
かつて自分がその道を通ったように感じてしまうのだ。

（そう思うのは迷惑ですよね、如月さん）

心の中で苦笑しながら最愛の女性に呼びかける。
答えが返ってくるはずはないとわかっている、だけど、もう一度だけ、幻聴でもいいから、あの『人』の声が聞きたかった。

そう思って問いかけた言葉。

心の中、誰も聞いている筈のない言葉。

だったはずなのに。

（迷惑に決まってるじゃろうが、この馬鹿っ、あほっ、スカタン！！）

突如として心の中に響き渡る妙齢の女性の声。

聞き間違えるはずがない。
聞き間違えようがない。
多少言葉使いが違っていても、最愛の女性の声を間違えたりするはずがないのだ。

だが、同時にカラスは絶望も感じていた。
大量の失血のせいでとうとう幻聴が聞こえるようになってしまったらしい。
どうやら本当に最後の時がやってきたようだ。

でも。
でもよかった。
幻聴でもいい。
今わの際に最愛の女性の声が聞こえた。
それだけでも満足だった。

（バカバカバカッ!!　満足してるんじゃない!!　やっと、やっと逢えたのに!!　悠久の時を延々と彷徨ってようやく出会えたというのに、何勝手に諦めてるんじゃ、この大バカ者!!　あ～、もうこれじゃから、安心して消えられないんじゃ!!）

カラスは心の中で小首を傾げる。

妙にリアルな幻聴だなと。

（ちがうっちゅ～にっ!!　幻聴じゃないの!!　わしなの!!　本人なの!!　本物なの!!）

すかさず返ってくる言葉にしばし考え込んだカラスだったが、もう最後だし、なんでも聞いてみるかと幻聴に聞き返してみる。

（え、本物なんですか？）

（本物、本物）

（マジですか？）

（マジでマジで）

（本気ですか？）

（本気で本気で）

（『真剣』と書いて『マジ』と読むみたいな感じですか？）

（『真剣』と書いて・・って、あ～～もうもうっ！！　おまえ、相変わらず本当にしつこい！！　本物だっつ～ったら本物なの！！）

（あ、なんだ、本物かあ。幻聴かと思っちゃった・・って、えええええっ、ほ、ほんものおおおおっ！？）

（驚くの遅っ！！　ってか、今にも死にそうなこの極限状態でいくらなんでも冷静すぎるじゃろ、おまえ！？　どんだけ精神図太いんじゃ！？）

（褒められちゃった、てへっ）

（いやいやいや、全然褒めとらんから。きっぱり呆れてるから）

（え～～）

（『え～』じゃないわっ！！）

もう心底呆れ果てたと言わんばかりの口調でカラスに語りかけて

くる妙齢の女性の声。
そんな女性の様子もどこ吹く風、どこまでもいつもの調子で軽口を返し続けるカラス。
しかし、女性はそんなカラスの言葉に誤魔化されはしなかった。

（まったく、そうやって苦しい時ほど心配かけないように無理しておどけてみせるんじゃから。ほんとにほんとにほんとにもう、バカなんじゃから）

（む、無理してるわけじゃないですよ。無理してるわけじゃなくて、本当に楽しくお話したいだけなんです。多分、これが最後ですし）

どこか疲れたような、しかし、本当に嬉しそうに心の中の最愛の女性に声をかけるカラス。
だが、そんなカラスに対し女性は本気の一喝を放つ。

（だから、『最後』っていうんじゃない！！）

（え、でも）

（いいか、よく聞け、この大バカ者。残される者の身にもなってみろ。目の前で死なれる者の身にもなってみろ。どれだけ辛いか、どれだけ悲しいか、おまえにわかるか？）

（それは、その・・そうかもしれません。いえ、そうですね。すいません、浅慮なことを、いえ、とても残酷なことを願ってしまいました。ごめんなさい）

深い悲しみが宿る女性の言葉に、過去にあった何かを思い出したカラスは、素直に謝罪の言葉を口にする。

すると、女性のほうも何か思うことがあるのか、ひどく動揺して慌てたように言葉を紡ぐ。

（い、いや違う。謝ってほしいわけじゃない。その、おまえが死んでしまう原因を作ってしまったのはわし・・私だし、死んだ後も残って私を慰めてくれたことには感謝してるし、ずっと一緒にいてくれるためにそういうことを言ってくれている気持は嬉しいから全部否定しているわけじゃないというか・・）

（死んでしまう原因？　いや、今のこれは僕の油断が招いたことですし、死んだ後も残れるかどうかわからないですけど）

（以前の話のことなの！！）

（以前？）

（い、いいから!!　それはもういいから!!　気にしないの!!　それよりも私がここに来たからには最後にはさせない、させはしない!!　そうさせないために私はこの世界に生まれてきたんだから!!）

とても強くとても激しい決意と覚悟が込められた言葉。
その言葉がカラスの心に響いた次の瞬間だった。
突如としてカラスのその心が、そしてカラスのその命の炎が、再び活性化して燃え上がる。

（え、ちょ、な、何を？　何をしたんですか!?）

（私の最後の魂の残照全て使っておまえの命の炎を再び活性化させた）

（は、はあっ！？　ちょっ、何勝手なことしてやがってくれますかな！？　最後の残照って、それって如月さんが死んじゃうってことじゃないですか！！　やめてくださいやりなおしてください、今すぐに！！　そんなことで助けられても全然嬉しくありません！！　如月さんに死なれちゃったら、僕が生きてる意味もないじゃないですか！！）

女性の言葉の意味を瞬時に把握したカラスは、焦りまくって心の中で盛大に喚き散らす。

（いいのよ。私は消えるけど、私は消えないもの）

（い、意味がわかりませんってば、消えちゃダメです、そんなの嫌です、逝かないでください！！）

（ふふふ、ほんと、やっぱり変わらない。どんな風に生まれてきても、どんな風に育ってもあなたはあなたなのね。嬉しい。あなたにもう一度逢うことができて本当にうれしい。ほんとはこの世界の私の中で消えるつもりだったけど、どうしてもあなたかどうか確かめたくて、私がずっとずっと探していたあなたなのかどうか自分自身で確認したくて、無に抗ってここまで飛んできた甲斐があったわ）

（うわああっ！！　そ、そんな最後みたいな言葉聞きたくない！！聞かせないでください！！　消えちゃだめだあああああっ！！）

（ありがとう。でもね、本当に大丈夫なのよ。ここにいる私はあなたの命となってあなたの中に消える。でも、私の心はちゃんと残ってる、体と魂もちゃんと残る。ちゃんと残ってあなたのことを守る。今度こそ守るから、そして、一緒に生きるから）

自分の心の中にいる女性の気配が今にも消えていきそうなことを感じとったカラスは、懸命に女性をこの世界に繋ぎ止めようと泣き叫び続ける。

だが、そんなカラスの悲しみに満ちた声、心に対し、女性はどこまでも優しく、そして、どこまでも力強く話しかける。

それは最後の力を振り絞った魂の声。

しかし、そこに悲しみはない。

あるのは新しい希望のみ!!

（二つの声、二つの心、二つの魂、いまこそ重なる時。ずっとずっと、これからはずっと一緒。いつまでも一緒。もうこの手からこぼし落としたりはしない。もう二度とあなたを失ったりはしない。私達はもう巡り合った。あとは走り出すだけ。私は逝く、あなたの命の中に。だけど、私は生く、あなたを守るために!!　さあ、始めましょう。もう一度、私達の物語を!!）

（如月さん!!）

（すぐ・・会えるわ・・ほら、上を・・見て。希望はすぐ・・そこに・・ある・・ああ・・愛しているわ・・わたしの・・わたしだけの人）

『うわあああああああああっ!!』

心の中で小さく小さくなっていく女性の気配。

なんとかして掴もうとするが、急速に消えていく女性の気配を掴むことはできず、カラスは半狂乱になって叫ぶ。

ただひたすらに叫び続ける。

その声は実際の声となって外へと飛び出し、その様子を見ていた

カミオとジャックは一瞬ぎょっとして狂乱状態に陥ったカラスの姿を見つめる。

「死に直面してついに頭がおかしくなりましたか」

「こうなるとトドメをさしてやるのが慈悲ってやつか。迷わず成仏しろよ」

一瞬顔を見合せて嘆息を漏らした二人。

しかし、すぐに表情を引き締めたジャックは、もう一度剣を構えると目の前の黒装束の怪『人』の胸を見据える。

一撃で心臓を抉り抜く。

そう狙いを定めると、限界まで自分の腕を引き絞る。

『サードテンプル』を大いに騒がせた怪『人』もいよいよ最後の時を迎える。

この場にいる誰しもがそう思い、その最後の瞬間を見逃すまいと目を凝らす。

しかし、たった一人だけ、別の場所を見据えている者がいた。

それは今まさに殺されようとしているカラス本人。

彼は、半狂乱になりながらも心の中の女性が残した言葉を信じ、真上に視線を向け続けていた。

カラスがいるのは吹き抜けになっているかつてある会社のロビーとして使われていた場所。

昔はガラス張りにされていたのであろうが、今はすっかり全て割れてしまって夜空が丸見えになっている。

その闇夜の中には控え目だが美しい光を放ち続けるたくさんの星々とミスリル銀でできたような白銀色の三日月。

そして

一匹の狐

（え？　き、狐？）

カラスは一瞬自分がいま見ている物が幻覚か何かかと思った。
漆黒の夜の世界、星でできた銀色の川に浮かぶ三日月型の船。
その中から飛び出したのは黄金に輝く一匹の狐。

気高く美しく、そして、誰よりも愛おしく感じるその狐を見たとき、カラスは間違いなく幻覚だと思った。

だが、その狐は彼の視界から消えない。
いつまでたっても消えない。
それどころかどんどん、どんどん近付いてくる。

どんどん、どんどん。

近く近く。

一直線に彼の元へ。

（ちょっ、え？　え！　えええええええっ！？）

見る見る大きくなっていくその狐は、やがて、カラスの目にはっきりと全体が見えるほどに近づく。

そして、カラスは、それがいったいなんなのか、いや、誰なのかを悟ると、仮面の奥にある瞳を極限まで見開いて、驚愕に満ちた絶叫をあげるのだった。

『いやいやいやいや、嘘！　ウソ？　うそ～～ん！？』

再び叫び出したカラスにまたもや驚くジャックとカミオ。

しかし、先程のことがあったことである程度耐性がついていたため、すぐに冷静さを取り戻したジャックは、カラスにトドメを刺すべく今度こそ最後の一撃を解き放つ。

「あばよ、クソガラス」

スピードそのものはそれほど速くはない。

しかし、このメンバーの中で屈指の怪力の持ち主である西域牛頭人体族（ミノタウロス）の少年の一撃は、緩い中にも凄まじい重みを感じさせる風を巻き起こしながらカラスの心臓へと吸い込まれていく。

しかし。

カラスの胸に到達しようとした瞬間、剣は乾いた音と共にへし折れて宙を舞う。

そして、続いて起こる物凄い轟音、周囲を一瞬にして覆い隠すほど舞いあがる土煙り。

目の前で起きた怪奇現象の意味がわからず、ぽかんと口を開けて固まるジャック、カミオ、そして取り巻きの不良達。

ただ一人今起きた事態の真相を全てしっかりと見ていたカラスは、土煙の中に立つ一匹の獣の影に視線を向ける。

天から舞い降りて自分の窮地を救ってくれた世にも美しい生き物を。

体長二メトルを越える大きな体躯は黄金そのものといった美しい獣毛に包まれ、その大きくも細っそりした素晴らしい身体からは、四本のすらりとした四肢、形の良いお尻からは一本の細い尻尾と、先が二つに分かれ、二本になりつつある大きく太い尻尾。

どう見ても『狐』。

しかし、顔だけが違う。

本来『狐』の顔がある場所に、それはない。

あるのは『人』の顔。

頭部から大きな狐の耳が出ているものの、紛れもなくそこにあるのは『人』の女性、それも絶世の美女の顔だった。

獣毛と同じ黄金色をした長く艶やかに光るストレートのロングヘアー、ルビーのような真紅の瞳、薔薇のような色をした唇、そして、抜けるような純白の肌。

そんな美女の顔を持つ大狐は、周囲を面白くなさそうな無表情でしばらく見つめ見まわしていたが、やがて、カラスのところでその視線を止める。

次の瞬間、無表情だったその表情に心からの安堵の色、瞳に万感の思いを浮かびあがる。

「よかった、間に合った。あなたが絶対絶命のピンチだって聞いた時は生きた心地がしなかったけど。あいつが言ったようになんとか間に合ったのね。よかった、本当によか・・」

明かな涙声でカラスに語りかけながら駆け寄ろうとした大狐だったが、そのカラスの身体を不良達が拘束し続けていることに気がつくと、再びその表情を無表情の鬼のへと変化させる。

「どけ。邪魔をするな、屑ども」

不機嫌そうな声と共に前脚を一閃。
目にも止まらぬ速さで風が走り抜ける。
すると、その一瞬の後、ぼとぼとと何が固い床の上に落ちる音がした。
いったい何が落ちたのか、最初そこにいる誰一人としてわからなかった。
落とされた者である本人達ですらわからなかった。
しかし、その中の一人が、なんとか我に返り、近づいてくる大狐に対し、恫喝めいた言葉を発しようとしたその瞬間、その人物は自分から何かが失われていることにようやく気がついた。

「あ・・あうああ、あう・・」

顔の下を構成しているある部分に手をやったその者は、自分の顔からそれが失われていることに気がついて絶句する。
いや、絶句したわけではない。
悲鳴をあげようとしたのだが、できなかったのだ。
なぜなら彼の顎は、蹴り飛ばされて床の上に落ちていたのだから。
いや、彼だけではない、カラスの身体を抑えつけて拘束していた不良達全ての顎が蹴り飛ばされてなくなってしまっていた。
遅れて気がついた彼らは一斉に悲鳴をあげようとする。
だが、下顎を完全になくしてしまっている彼らにそれができるはずがない。
しかも、不幸なことに、自分の顎がなくなったと認識してしまったことで、耐えがたい苦痛が彼らを襲う。
他人に苦痛を与えることは得意でも、与えられることには全くなれていないし得意ではない彼ら。
あっというまに全員ばたばたと悶絶してその場に倒れこむ。
その様子を軽蔑しきった冷めた視線で見つめていた大狐だったが、

すぐに視線を地面にへたりこんでいるカラスのほうに向け直す。
不良達に向けていた鬼の表情から、再び女の顔になった狐は、カラスの元に駆け寄ると、そのぼろぼろの身体を前脚で器用に引き寄せ抱きしめる。

「こんなに・・こんなにボロボロになっちゃって。ごめんね、来るのが遅くなっちゃって本当にごめんね」

血だらけ泥だらけのカラスの仮面に、狐は美しい顔をすりよせ心からの謝罪の言葉を口にする。
本当に愛おしそうにカラスの身体を抱きしめる大狐。
その瞳からはいつしか熱いものが噴きこぼれはじめていた。
カラスはすぐにそれに気がついて、傷だらけ泥だらけの自分のコートのポケットから奇麗なハンカチを取り出そうとしたが、今更ながらに両腕がぽっきり折れて使い物にならなくなっていたことを思い出した。
取り出そうと動かしてもぷらぷらするだけで満足に動かない腕。
一応、先程命の炎を燃え上がらせてもらったことで致命傷からは回復してはいるものの、両手両足は相変わらずぽっきり折れたままだし、それ以外の場所も結構傷だらけの満身創痍。
一番大好きで、一番心配をかけたくないその『人』に、なんとも情けない姿を晒している。
カラス自身が泣きだしてしまいそうだった。

「ああ、いいの。あなたは動かなくていいのよ、むしろ無理しないで。大丈夫だから。もう大丈夫だから、後でちゃんと治してあげるから」

カラスの行動の意味をなんとなく察した狐は、これ以上ないくらい優しい表情を浮かべて首を横にゆっくりと振ってみせる。

「あなたが生きていてくれた。それがとても嬉しい。あなたに会えて、抱き締めることができる。それがとても嬉しい。あなたとまたお話するができる、あなたのお話を聞くことができる。それがとても嬉しい。こんなにもたくさんの嬉しいを感じることができる。やっぱり、あなたは私の特別な『人』。裏切られるとか、裏切られないとか、信頼できるとか、信頼できないとかもうどうでもいい。どうしてわからなかったんだろ。ほんとバカだった、私。また失ってしまうところだった。でも・・でもね」

そう言って自分の目の前にある『崇』の仮面をじっと見つめる狐。
まるでその奥にあるカラスの本当の瞳を見ているかのように、じっと見つめ続ける狐。

「もうわかったから。もうわかってしまったから。だから、だからね」

何かを言おうとする狐。
懸命に何かを言おうとする狐。
しかし、想いが深すぎるせいかなかなか言葉を紡ぐことができず、狐は声を詰まらせ、ただただはらはらと涙を流すだけしかできない。
そんな狐の身体に、カラスは折れて使い物にならなくなった両腕をそっとまわす。
強く抱きしめることはできない。
しかし、それでもカラスは今できる全力でその腕に想いを込めて大狐の、最愛の女性の身体を抱きしめるのだった。
そんなカラスの行動に、一瞬びっくりした表情を浮かべた狐であったが、すぐにこの上なく幸せそうだといわんばかりの表情になると、狐自身もそっとカラスの身体を抱きしめ返す。
カラスが苦しくならないように。

でも、自分の想いが伝わるようにと。

「あなたにね、あとでいっぱいいっぱい聞いてほしい話があるの。もうたくさんたくさんありすぎてここでは話しきれないの。それからそれから、あなたに聞きたい話もいっぱいいっぱいあるわ。それもたくさんたくさんありすぎてとてもじゃないけど、まとめきれない。だけど、付き合って。最後までつきあってほしい。どれだけ時間がかかるかわからないけど、他でもないあなたに話したいから、他でもないあなたに話してほしいから。いい・・かな？」

気弱で不安そうな表情で聞いてくる狐に対し、カラスは迷うことなく力強く頷きを返す。

それを見た狐は、今にも泣き出しそうな、しかし、とてつもなく嬉しそうな表情を浮かべて自分の顔をカラスの仮面にこすりつけた。

「ありがとう。ここにいてくれてありがとう。生きていてくれてありがとう。私に出会ってくれてありがとう。あ～、もう嬉しすぎて何かもういろいろなことがどうでもよくなってきたなあ。でも、すっきり爽やかな気持ちでこれからあなたと新しい関係を築いていくためにも、ここでいい加減をかますわけにはいかないよね」

歓喜の表情を浮かべて腕の中のカラスのことを見つめていた狐だったが、そっとその小柄な体を部屋の隅っこへと運んで座らせると、これまでとは明らかに違う種類の笑みを浮かべてカラスに再度笑いかける。

「ちょっとだけここで待っててね。すぐに済むから。ケジメだけはきっちりしとかないと、後でモヤモヤするのは嫌だものね」

実に爽やかで優しい笑顔。

しかし、カラスは瞬時にして理解する。
目の前の美しい獣の目が全く笑っていないことを。
美しい獣の背中が憤怒の炎で燃え上がっていることを。
そして、間違いなくこれからこの部屋にとてつもなく巨大な嵐が吹き荒れることになることを。

「じゃあ、ちょっと行ってくるわね」

カラスが制止の言葉を発しようとするよりも一瞬だけ早い絶妙なタイミング。
そのタイミングで言葉を発して制止の言葉を封じた狐は、カラスに背中を向ける。
そして、その顔は美女のそれから、獰猛な肉食獣たる狐そのものへ。
黄金の毛並みに中に、ぽつんと一つ、真紅のくまどり模様が覆う、不気味な白い狐の顔。
濡れ濡れと不気味に輝く真っ赤な瞳が、すっかり静まり返った室内をゆっくりと見渡していく。
先程までの土煙がようやくおさまった室内。
突然現れた大狐の存在を未だに受け入れることができず、カミオやジャックをはじめとする不良達は呆気に取られて突っ立ったままの状態。
そんな不良達を完全に馬鹿にしきった様子で見ていた狐は、誰が見ても嘲笑しているとわかる形に表情を歪めて見せる。
聞えよがしに鼻から噴き出して嗤ってみせる。
そのことにようやく反応を見せたのは西域牛頭人体族（ミノタウロス）の少年ジャック。
真ん中で折れた直剣の切っ先を狐に突き付けて激昂する。

「だ、誰だおま・・」

「黙れ！！」

凄まじいばかりの一喝に、ジャックの舌が凍りつく。

ただでさえ静まり返っていた室内の空気が、さらなる緊張に包まれて硬質化。

今まで感じたことのないとてつもない圧迫感が室内にいる不良達に襲いかかる。

いてもたってもいられず、今すぐにでも逃げ出したい衝動にかられる。

じわりじわりとわきあがってくる不安が不良達の心を覆い尽くしていく。

原因はわかっていた。

目の前に立つ金色の獣が放つ不気味なオーラが彼らの心を締め付けているのだ。

「き、貴様、今朝のあの女・・」

なんとかその呪縛を打ち破ったカミオが、自分自身を奮い立たせる意味も含めて、懸命に言葉を口にしようとする。

だが、その途中、自分自身に向けられた狐の恐ろしいまでの怒りの視線をまともに直視してしまい、どうにか動かすことができていた舌は完全に凍りつき何もしゃべれなくなってしまう。

静寂が再びこの場を支配する。

そして、その静寂の中心に立つ狐が、ゆっくりと言葉を紡ぎ始める。

それは音楽。

美しい女性の声が紡ぎ出す、それは・・

紛れもない鎮魂歌であった。

「おまえ達に言っておく。今更反省をするな、謝罪をするな、そして、許しを乞うな。おまえらの上っ面だけの言葉など聴くだけで耳が穢れる。私がおまえ達屑どもに望むことはたったの一つ」

凄まじい殺意と闘志溢れる真紅の瞳が、その場にいる不良達全てを射抜いて呪縛する。

そして、黄金の獣は静かに怒りを爆発させる。

「今すぐ覚悟を決めろ」

小さな、ひどく小さな声。

これだけ静かな場所にあっても、ちょっと気が散れば聞き逃しそうな小さな声。

しかし、その場にたたずむ不良達全員その声をはっきりとその耳に聞いた。

聞きようによっては優しく穏やかな口調にも聞こえるその声。

だが、この場にいる全ての不良達は、一人の例外もなくそういう風には聞こえなかった。

彼らに聞こえたのは。

冷徹な死刑執行の宣告。

「私の大事な、大切な、かけがのない人に手を出したおまえ達は・・一人の、いいか、一人の例外もなく」

踏みだす。

憤怒の化身がその足を踏み出す。
決して触れてはならぬ、禁断の逆鱗。
決して傷つけてはならぬ、大事な宝物。
それに触れた者達に、それを傷つけた者達に・・

怒りの剣を振り下すために。

「狐(わたし)に蹴られて地獄に堕ちろおおおおおっ！！」

今、ここに、

怒りの獣心降臨。

次回予告

長い長い孤独の果てについに狐は最愛の己の半身をみつけ、深い深い想いの果てについに少年は最愛の人の心を手に入れる。
ようやく巡り合った二つの魂は、重なり合って一つになる。
強く強く結び付いた二つの心は、今度こそ離れまいと固く固くその絆を深めていく。

狐と少年。

玉藻と連夜。

二人の新しい生活、新しい人生が今始まる。

次回

真・ここは違うどこかの日常

過去編（高校二年生編）

第七話

『玉藻と連夜』

立ちはだかる者全てをなぎ倒し、どこまでも突き進め、運命の恋人たち！！

玉藻：やっとここまできたね、連夜くん。

連夜：ようやくここまで来ましたね、玉藻さん。

玉藻：これからね。

連夜：これからですね。

玉藻：あらためて、これからもよろしくね、連夜くん。

連夜：こちらこそ、よろしくお願いいたします、玉藻さん。

玉藻：えへへ、じゃあ、いっちょ始めるとしますか。私達の本当の物語を！！

第七話　お～ぷにんぐ

玉藻：ああ、そうよ、私が悪いわよ。ええ、ええ、確かに私はお酒を飲み過ぎています。

連夜：あ、あの、玉藻さん？

玉藻：ミネルヴァの誘いを全然断ってませんよ。勧められるままにいくらでも飲んでますよ。ビール、八幡酒、ウィスキー、スコッチ、焼酎、紹興酒なんでも好きです。ああ、そうですよ、お酒と名前のつくものならなんでも飲んでますともさ。

連夜：いや、ですから

玉藻：だから何？　正しいことを言ってるから上から目線でお説教なの？　連夜くんは私の何よ、親にでもなったつもりなの？　いい加減にしてよ、うんざりなのよ、もう！！

連夜：そういうことじゃなく

玉藻：あ～、そうよ、どうせ私は子供よ。すぐにひねくれるわよ、反発して人の言うことまともに聞きませんよ。怒られても右から左です。はっはっは～～っだ！！

連夜：あのですね

玉藻：もう、連夜くんなんて知らないわよ！！　私に愛想を尽かしたっていうなら、今すぐでていけばいいじゃない！！　私は未練たらしくすがりついたりしないわよ！！　さあ、行きなさいよ、行け

ってば！！　連夜くんの、馬鹿ぁっ！！

連夜：行けと言われても

玉藻：何よ、文句あるの！？

連夜：いや、そんな風に土下座したまま足にしがみつかれてキレられてもですね、僕は、どう対処したらいいかわからないというか

玉藻：・・・

連夜：・・・

玉藻：（号泣）

連夜：（大汗）

玉藻：わ、笑えばいいじゃない！！

連夜：笑いませんから。

玉藻：で、出て行けばいいじゃない！！

連夜：出て行きませんから。

玉藻：・・・

連夜：よしよし

玉藻：ぐすん、連夜く～～ん！！

連夜：はいはい

第七話　『玉藻と連夜』

ＣＡＳＴ

如月（きさらぎ）　玉藻（たまも）

城砦都市『嶺斬泊』に住む、大学二年生。二十歳。
上級種族の一つである霊狐族の女性。金髪金眼で、素晴らしいナイスバディを誇るスーパー美女。
この物語のヒロインであると同時にヒーローでもある。
長い長い悠久の時の果て、ついに運命の人、魂の伴侶たる宿難（すくな）連夜（れんや）を見つけ出す。
そして、二人の本当の物語が始まる。

「いろいろ一緒に考えて、乗り越えていこうね、連夜くん」

宿難（すくな）　連夜（れんや）

言わずと知れた本編主人公。
都市立御稜高校に通う高校二年生。人間族。男性。十七歳。
周囲のほとんどが敵という環境の中にありながらもそれに負けることなく逞しく日々を生きる。

魂の伴侶たる玉藻の想いを受け止め、その半身となって生きることを固く誓う。

「僕を選んでくださってありがとう。僕、精一杯玉藻さんの望みに応えますから」

龍乃宮（りゅうのみや）　瑞姫（みずき）

龍乃宮（りゅうのみや）　姫子（ひめこ）の腹違いの妹。上級龍族。女性。十七歳。
姉の姫子に比べるとやや細身ですっきりしたスタイルの持ち主の美少女。
以前、自分を助けてくれた『祟鴉（たたりがらす）』を慕う。
が、しかし、その本当の正体は・・

「うわ～～ん、老師ぃ～～!!　連夜が心配ですぅ～～!!　連夜が帰ってこないですぅ～～!!　私、わたし、どうしたらいいんですかぁ～～!!」

水池（みずち）　はるか

姫子と瑞姫に仕える二人組の従者の一人。中級龍族。女性。十七歳。
ややぽっちゃり系。一見温和そうに見えるが、実は結構腹黒で策士。情報収集能力はピカイチ。
姫子、瑞姫、剣児の秘密を知る人物の一人。

「そうねえ。宿難くんが絡まないとほんとに聞きわけがよくて、頭の回転も速い方なんだけどねえ」

東雲（しののめ）　ミナホ

姫子と瑞姫に仕える二人組の従者の一人。下級龍族。女性。十七歳。

スレンダーな体系で、西隣にある城砦都市の方言『通転核（つうてんかく）』弁（関西弁）でしゃべる。武術の達人。

はるかと同じく姫子、瑞姫、剣児の秘密を知る人物の一人。

「姫様、どんだけ残念やねんな」

ドナ・スクナー

世界三大種族の一つ『聖魔』族の中の頂点を極めるある種族の女性で、連夜の母親にして、宿難家を代表する無敵の非常識人。

城砦都市『嶺斬泊』の中のほぼ全ての行政を取り仕切る政府機関『中央庁』のお役人様で、バリバリのキャリアウーマン。

夫同様に家族のことをこよなく愛しているが、中でも夫のことは、子供達がドン引きするほど絶愛している。

瑞姫の武術の師匠でもある。

「ひ～こちゃん、なんて顔をしているの。もう、ほんとにしょうのない子ね」

玉藻：連夜くん

連夜：なんですか？

玉藻：わがままばっかり言ってごめんね

連夜：いいんですよ。玉藻さんはそれでいいんです。

玉藻：連夜くん、これからも見捨てないで一緒にいてね

連夜：勿論です、僕のほうこそよろしくお願いします。

玉藻：連夜くん、大好き！！

連夜：あ、ですが

玉藻：；へ？

連夜：やっぱり、お酒はもう少し控えてくださいね。

玉藻：ぎゃふん

第七話　『玉藻と連夜』　その１

小さな念気蛍光灯が照らし出す小さな部屋の真ん中の小さなテーブルの前。
そこにある小さな椅子に座りこむのは、黒髪黒眼の人間族の一人の少年。
貧弱な光に照らし出されたその顔には、薄暗い中でもはっきりとわかるほど疲労が色濃く映し出されている。
誰が見ても疲れきっているとわかる表情。
深い溜息を何度か繰り返して吐きだし、肩を落とした状態でぼんやりと座り続ける。
しかし、やがて、きっと表情を引き締めると、テーブルの上に置いていたエプロンを握りしめて立ち上がる。

かわいらしいひよこのアップリケのついたエプロン。

少年にとってそれは、最強にして最高、無敵にして不敗の戦闘服。
少年が敬愛してやまない偉大な父が自ら作ってくれた、何ものにも代えがたい最大の宝物。
一瞬、万感の思いを込めてエプロンを見つめた少年だったが、その瞳に浮かんでいた優しい色を、次の瞬間凄まじい闘志の炎にかえて身に着ける。
そして、やたら気合いの入った声で小さく『よしっ！！』と掛け声を出すと、自分の成すべきことを成すために少年は行動を開始しようとした。

・・のだが。

「あ、そうだ。そういえば、あのあと連絡いれるの忘れてた」

ふと、何かを思いついた少年は、エプロンのポケットに右手を突っ込む。
しばらくごそごそと何かを探る少年。
なかなか目当ての物がみつからず、どこか不機嫌そうに『・・・むう』とかわいらしい唸り声を上げていたが、やがて、大きなポケットの中に目当ての物の感触を探り当てると、目を輝かせて急いでそれを外へ取り出した。

ナイトブラックの渋い折りたたみ式最新型携帯念話。
もちろん、『人』型種族用のノーマルタイプ。

少年は携帯念話を開くと、手慣れた様子で短縮ルーン番号を押して通話キーを押下する。
リンガー音が二つほど流れた後、相手側が受話器を取ったことを知らせる音が耳に聞こえ、少年はいつもの調子で口を開こうとしたのだが。

「もしも・・」

『連夜!?　連夜ですのっ!?』

少年がしゃべりかけるのを盛大に遮り、明らかに切羽詰まっているとわかる声音で話しかけてくる、否、叫び声をあげてくる通話相手。
その声、その相手に少年は心当たりがあった。
ありはしたが、しかし、それは、自分が想像していた相手ではなかった。
思わず携帯を耳から放し、特殊水晶画面に表示されているルーン番号を確認する。

しかし、番号に間違いはない。
この番号は間違いなく少年の自宅の番号。
少年は、困惑の表情を浮かべながらも再び携帯を耳に当てる。

「龍乃宮さん!?　龍乃宮さんなのかい?　なんで僕の家に?」

『そんなことはどうだっていいんです!!　それよりも、連夜、大丈夫なの?　怪我していない?　今どこにいるの?』

「落ち着いて龍乃宮さん。僕は大丈夫だから」

『本当に?　本当に大丈夫なの?　また、痩せ我慢しているんじゃないの?　あああ、あなたに何かあったら、何かあったら私どうしたらいいの?　どうすればいいんだろ、どうしよう、連夜に何かあったらどうしよう』

「本当に大丈夫だってば。痩せ我慢もしていない。五体満足きっちり無事だから」

『本当に?』

「本当、本当。そもそも、大怪我しているようだったら、もっと切羽詰まってるでしょ。僕の声、切羽詰まってるように聞こえる?」

『き、聞こえない。じゃ、じゃあ、本当に無事なのね』

「うんうん、大丈夫大丈夫。心配かけて本当にごめんね」

『ううん、そんなことはいいの。でも、よかった。連夜が無事で・・ううう・・本当に・・えぐっえぐっ・・本当によかったよおおお・・

うわあああん』

「ちょっ、な、泣かないでよ、龍乃宮さん」

受話器の向こうで知己の少女が泣き出してしまったことを悟って、大いに慌てふためく人間族の少年、宿難（すくな）　連夜（れんや）。

その声は誰が聞いても本当に心から連夜のことを心配していたのだとわかる声。

それだけに連夜は、バツが悪そうな表情でこめかみをぽりぽりとかきながら、必死に慰めと謝罪の声をかけ続ける。

「ごめんごめん。本当にごめんね、心配かけちゃったね。でも、大丈夫だから。全然、ぴんぴんしてるから。ね～、お願いだから泣きやんでよ」

『無理・・えぐっえぐっ・・そんなすぐに・・ぐすっぐすっ・・涙は止まらないもん・・うぐっうぐっ・・連夜のバカッ。ばかばかばかっ!!　いっつもいっつも危ないことばっかりして!!　人には危ないことするなっていうくせに、自分は真先に危険のど真ん中に飛び込んでいくんだから!!』

「いや、うん、まあその、返す言葉もございません。ともかくごめんなさい。私が悪うございました」

『本当に反省してる?』

「してるしてる」

『心から反省してる?』

「してますしてます」

『わかった。じゃあ、今回だけは許してあげますわ』

受話器の向こうの少女がようやく泣きやんでくれたらしいと悟ってほっと息を吐きだす連夜。

やれやれと肩の力を抜いた連夜は、ようやく自分が聞きたい内容について質問しようとしたのであるが、またもや少女の言葉が連夜のそれをさえぎる。

『で？　いったい何があったんですの？』

「え、え～っと、何があったのって何のことかな？」

『とぼけないで！！　あの大惨事はいったいなんなんですのよ！？　あの廃ビルの中に倒れていた不良達、全員一人の例外もなく下顎を斬り飛ばされて悶絶していましたわよね？　いったい、あそこで何があったんですの！？』

「げっ、ひょっとして、龍乃宮さん、あの現場に行ったの！？　なんで？　僕、お母さんにちゃんと一般人の目に触れないように、中央庁側で封鎖してほしいって頼んだのに！？」

受話器の向こうの少女の口から飛び出した言葉の内容に、思わず驚愕の声をあげる連夜。

『大丈夫、一般人の目には触れていませんわ。ドナ老師は連夜の願い通りにしてました。現場周辺は中央庁特殊部隊のみなさんががっちり封鎖した後、悶絶していた不良達全てを中央庁直轄の犯罪者専用特殊病院に速やかに搬送したから、大丈夫ですわ。一応言ってお

きますけど、全員生きてます』

「そ、そうか。死者は出なかったんだね。よかった。ところで、なんで龍乃宮さんはあそこの現場に？」

『もう、連夜ったら、いつまで私のこと『龍乃宮さん』呼ばわりなんですか？　心配しなくても間違いなくここは連夜のお家です。今、私の周囲には私の秘密を知ってる『人』しかいません。学校の中にいるときならしょうがないから、その呼び方も我慢できるし、連夜以外の誰かならそんなに気にはならない。でもね、連夜にだけは呼ばれたくないの。連夜にだけは本当の名前で呼んでほしいの。学校ではそういう風に呼ばれているけど、そうしないといけないってわかってはいるけど、本当は私・・そう呼ばれるの・・ぐすっぐすっ・・つらい・・』

「あわわわわ、わかった、わかった。わかったから、泣かないでよ『姫子』ちゃん。これでいい？」

『うん。ほんとはね、学校でもそう呼んでほしいんだ。でも、もう一人の私がいるから、それは無理だってわかってる。だから・・だからね、それ以外のところではちゃんと。お願い、ちゃんと私を名前で呼んでほしい。でないと、私、ときどき自分が本当は誰なのか、本当は自分がなんなのかわからなくなっちゃうから』

またもや受話器の向こうで涙声になっている少女。

しかし、先程とは違い連夜は慌てることなく穏やかな表情を浮かべると、受話器の向こうで不安がっている少女に優しい口調で話しかける。

「何言ってるのさ。姫子ちゃんは姫子ちゃんじゃない。それははる

かちゃんや、ミナホちゃんをはじめとする龍族の護衛衆のみんな、Kや、詩織さん。スカサハや、さくらを筆頭にうちのメイドさん達、それにうちの父さんや母さん、みんながわかってるよ」

『うん、そうだね。だけど連夜は？』

「僕？　え、言わないといけないの？」

『うん、聞きたい。連夜の口から聞きたい』

どう聞いても甘えているとわかる声。

無意識なのだろうが、この受話器の向こう側にいる幼馴染は、二人っきりになるとこうして『友達』以上の関係を求めてくる。

正直、連夜としてはそれ以上求められても応えられないというのが本音なのだが、さりとて心に大きな大きな傷を負っているこの大事な友達を捨て置くわけにもいかない。

非常に微妙な心境ではあったが、友達の心が自分の言葉程度で少しでも救われるならと、できるだけ心を込めて自分の正直な気持ちを口にする。

「しょうがないなあ。一回しか言わないからね。今、僕としゃべってる姫子ちゃんこそが本当の姫子ちゃんだ。今、僕としゃべっている姫子ちゃんこそが、僕の『友達』だ。少なくとも僕はそう決めた。誰がなんと言おうと僕はその考えをやめないよ」

『うん。うん、ありがとう、連夜。あたし・・あたし・・うれし・・うええ・・うえええん』

「うわわわわ、また、泣く!!　ちょ、やめてよ、姫子ちゃん。お願いだからいちいち泣かないでってば!!　話がちっとも前に進ま

ないよ！！」

当初、さっさと要件だけを話して念話を切るつもりだったのに、予想外の人物の登場の上に、想定外の展開の連続に全く話が進まず流石の連夜も困惑と悲嘆に満ちた声をあげる。

またもや、このまま受話器の向こう側にいる人物を慰めないといけないのかとがっくり肩を落とす連夜。

しかし、連夜の予想はまたもや裏切られる。

別の人物の声が突如として連夜の携帯から響いてきたのだ。

『レンちゃ～ん、ダメよ、ひ～こちゃんを泣かしたら。女の子泣かしちゃダメって、お母さんいつも言ってるでしょ？』

落ち着いた感じの妙齢の女性の声。

低いアルトの音楽的な口調、連夜は自分の耳に飛び込んできたその声にほっとした表情を浮かべる。

「お、お母さん？」

『そうよ～、頼れるレンちゃんのお母さんですよ～。ずっと横で聞いていたんだけど、ひ～こちゃん突然号泣しちゃうから、念話をかわりました』

「いや、横で聞いていたのなら、早く代わってほしかったよ。話している途中で何度も泣きだすから、全然話進まなくて困っていたんだけど」

『何言ってるの。ひ～こちゃん、ずっとあなたのこと心配して『サードテンプル』中を探しまわってくれていたのよ。それはそれはもう一生懸命に探してくれてね。『連夜に何かあったらどうしよう、

連夜が死んだら私も死ぬ』とか、それはもういじらしいこと言っちゃって（ちょ、老師、余計なこと言わないでくださいませ！）・・余計なことじゃないわよ。ここでしっかりアピールしとかないと、ひ～こちゃんレンちゃんをゲットできないわよ。（げ、げ、ゲットって、そんなこと言われても、私は別に連夜のことなんか、なんとも思ってないし。ゲットできなくたって、全然困らないというか）もう～、そういうこと言ってるからいつまでたっても全然進展しないんじゃない。ぼやぼやしてると他の誰かにレンちゃん取られちゃうわよ。（と、取られたって、ぜ、全然構わないんだから・・別に・・なんとも・・ふえぇ・・連夜が他の誰かのものに・・うえぇ、うえええええん！）ま、また泣く。よしよし、ごめんね。ひ～こちゃんにはまだまだレベル高いことだったわね。もうちょっと簡単なところから攻めて行こうね』

「お、お母さん、お願いですから、できれば念話してる相手に集中してもらえませんか？　側にいる別の『人』と会話されると非常に困るんですが」

『あら、やだ、聞こえちゃった？』

「いや、全部丸聞こえですから。ってか、わざと聞かせようとしているでしょ？　勘弁してほしいんだけどなあ・・まあ、いいや」

全く悪びれた様子なく、むしろ嬉しそうな声をあげる母親の声にげんなりした表情を浮かべる連夜。

しかし、すぐにその顔を引き締め真摯な表情になると、すっと頭を下げながら言葉を紡ぎ出す。

「それよりも、僕がお願いしたとおりに後片付けしてくれたんですね。本当、助かりました。ありがとうございます」

『全くもう、いつもいつもレンちゃんが巻き起こす騒動は規模が大きいからびっくりさせられるわ。今回のこれだって一般人に見られていたら大事件になっていたところよ。間違いなく明日の新聞の一面トップを飾っているわね。朝のニュースとかでも取り上げられてとんでもない騒動に発展していたかも。本当によく反省しなくちゃだめよ、レンちゃん』

「す、すいません。まさかここまで大事になるとは思ってなくて」

『そうね、あなたにしては・・いや、『サードテンプル』の怪『人』、『祟鴉（たたりがらす）』にしては珍しい大失敗ね。いつもなら、大騒動になってもきちんと着地地点を定めて、私達の力がなくても自然と片がつくようにもっていくのに。今回は本当に危なかったようね。ひょっとして死にかけた？』

穏やかで優しげないつもの母の口調。

だが、息子がさりげなく隠そうとする真相をズバリと暴いて突いてくる。

これについては予想済みだったので、連夜は苦笑を浮かべながら素直に肯定の言葉を口にする。

「うん。なんとかしようとはしてみたんだけどね。甘かったよ。やっぱり僕はまだまだだって、思い知らされた」

『そう。一応聞いておくけど、実はもう死んでしまった状態で、残留思念だけでここに念話をかけてきているわけじゃないわよね？もしそうなのだとしたら、お母さんもお父さんも、回収した彼らに対する態度を変えないといけないから。仕事上の立場としてはどんな凶悪犯罪者相手といえど、どこまでも公平に扱わないといけない。

けれど、もしも・・もしも相手があなたの命を奪っていたのだとするのなら、私は迷わず今の地位を捨てて『母親』としての立場を選ぶ。それは恐らくうちの旦那様も一緒。持てる力の全てを使って、あらゆる苦痛を奴らに味あわせてやる』

受話器越しからでも十分に伝わってくる恐ろしい気配。

凄まじい怒り、怨念、憎悪、悲哀、様々な負の感情がゆっくりと大きく膨れ上がっていく。

連夜は一瞬顔を強張らせるが、それが母親が自分に対して抱いている深い深い愛情故のものとわかっていたので、すぐに表情を和らげ安心させるように言葉を紡ぐ。

「ただの人間の僕にそんなことできるわけないでしょ。大丈夫、ほんとに生きているから。姫子ちゃんにもさっき言ったけど、ぴんぴんしてる。持ってきておいた『神秘薬』で大きな傷はあらかた治したよ。まあ、流石に疲労や痛みまではどうにもならないけど、じきにおさまるから大丈夫だよ」

『信じていいのね？』

「信じて。こういうときに家族に対してだけはそういう嘘はいわないし、言っちゃいけないってお父さんにしっかり教育されてきたから」

『お父さんの名前を出されたら信じないわけにはいかないわね～。わかった。信じるわ』

巨大な負の念が急速に形を失っていくのを感じ、ほっと胸を撫で下ろす連夜。

「ありがとう、お母さん」

『ううん、いいのよ。レンちゃんが無事でほんとによかったわ。お母さんにとっても、お父さんにとっても、そして、彼らにとってもね』

「そうだお母さん。お願いだから、回収した彼らは生かしておいてね。あれだけの地獄を見た以上、逃げだそうという気力も体力も残ってないと思うし」

『それそれ、そういえばそれを聞きたかったのよ。いったい結局何があそこであったの？　あれをやったのレンちゃんじゃないでしょ？　斬り飛ばされた下顎のあの凄まじい切り口。剣や刀を使ったものじゃないわね。そうね、手刀かあるいは足刀だと思う。凄まじい力とスピードで、強引に斬り飛ばしたって感じだった。あんなことができる武術の達人なんて、この都市に何人もいないわ』

「あ、あはは。さ、流石、この大陸最強の武術家。あれ見ただけでそこまでわかっちゃうんだ」

恐ろしい洞察力を発揮してみせる母親に、ただただ驚愕して苦笑するしかない連夜。

『あ～、じゃあ、やっぱり私の知ってる『人』なのね？　誰？　レンちゃんのお友達なら大体把握してるけど、あれができる『人』となるとなあ。剣術や刀術なら、我が家のダイちゃんか、ダイちゃんのお師匠様である坪井さんがいるけど、あの二人は違うわね。無手となると、うちの詩織か、美咲。でも、二人とも白なのよねえ。詩織と美咲は仕事でずっと私と一緒だったからねえ。あとアルトティーゲルさんのところも怪しいっちゃあ怪しいけど、あそこは『斬る』

じゃなくて『貫く』だから違う。人造勇者と同等の力を持つ『Ｚ（ゼ）ーＡｉｒ（ツター）』シリーズの所有者であるクリスくんとひ～こちゃんもアリバイがしっかりあることがわかってるからこれも白。だとすると、もう限られてくるのよね』

途中まで面白そうに語っていた母親であったが、唐突にその口調が変わる。

まるで男のような低い声でぼそりと呟く。

『【頂獣断鎧拳（ちょうじゅうだんがいけん）】』

「げっ！！」

母親の発した単語の意味を知る連夜は、思わず驚愕の声をあげる。

そして、息子の反応を聞いた母親は、自分の予想が当たっていたことを悟って元の声音に戻すと、上機嫌な口調で再び最愛の息子に語り始めるのだった。

『あ～、やっぱりそうかあ。いや、そうかなとは思っていたのよね。Ｋくんなのね、あれをやったのは』

Ｋ（ケイ）

連夜の盟友にして、屈指の武術の達人。

その腕前は、この都市最強を誇る武術の達人である連夜の母親と、この都市不敗を誇る剣術の達人である連夜の父親が、二人揃って『将来間違いなく無敵の武術家になるだろう』と広言しているほど。

連夜が考えるに、両親と兄の師匠坪井以外で真正面から連夜の兄大治郎と戦って勝てる可能性のあるのは彼だけだと思っている。

元々はある名門の上級種族の生まれであるが、排他的で傲慢な自

分の一族を嫌って出奔。
以来、連夜の父親の親友である素材ハンターのところに身を寄せ、彼が運営している素材収集旅団と共に世界中を旅して回っている。
あまりしゃべるのは得意ではなく、どちらかといえば口べた。
社交性は非常に低いが、誠実で義理堅く人情に厚い。
それだけに連夜の信頼は厚く、もしこの都市にいればまず間違いなく一緒に行動していたであろう人物。
・・なのであるが。

前述したとおり、彼は今、この都市にはいない。

明かに勘違いしていると思われる母親の言葉を、連夜は焦って訂正しようと口を開きかけるが、それを封じるかのように母親は得意気に自分の推理を進めていく。

『古流武術【頂獣技牙(ちょうじゅうぎが)】の奥義の一手、【頂獣断鎧拳(ちょうじゅうがいけん)】。あそこまで極めていたとはねえ。流石、Kくんねえ。見事なものだわ』

「いや、あのね、お母さん、実はね」

『いいのいいの。どうせ、犯人を追及する気ないから。興味本位で聞いてみただけ』

「え!?」

『どうせ、あの連中レンちゃんのことだからいいように弄ってくれたんでしょ？　大方それを見て怒ったKくんが報復に出た。でも、やりすぎた。レンちゃんとしては、盟友のKくんを犯罪者にしたくない。そこで、慌てて私に念話をかけてきた。中央庁にある揉め事処理専門の部署【機関】。そのトップに立つ長官である私なら、配下にい

る腕利きの部下たちを使ってこういった事態を速やかに収集できるから・・ってところでしょ？』

「いや、その大筋は間違ってないんだけどね、お母さん、あのね」

『いいの、いいのよ。どうせ、そこにKくんいるんでしょ？　レンちゃんから伝えておいてくれる。あいつらのことは心配いらない、後のことはきっちり責任を持ってこっちで処理するから。それから、私もうちの旦那様も、レンちゃんを助けてくれたことに心から感謝してるって。いい？　ちゃんと伝えるのよ』

「え～っと、あの・・うん、まあ、わかった」

結局自分の推理を得意気に話しきり勝手にまとめてしまった母親。
それを聞いていた連夜は、非常に複雑な表情を浮かべて困惑する。
母親の推理はほとんど間違っていない。
概ねその通りである。
だが、肝心要の二つの個所が致命的に間違っていた。

一つは言うまでもない。
不良達をぶちのめした相手は、連夜の盟友Kではないということ。

そして、もう一つ。
もう一つ間違っていることがある。

古流武術【頂獣技牙（ちょうじゅうぎが）】。
確かに、不良達を倒した技は、この武術の物だ。
しかし、母親は知らない。
古流武術【頂獣技牙（ちょうじゅうぎが）】には二つの技の体系があることを。
一つは、上半身を使用し、破壊力そのものを追及した技の体系『

手の法』。
先程、母親が口にした奥義、【頂獣断鎧拳（ちょうじゅうだんがいけん）】はこの『手の法』の奥義の一つ。
手刀そのものを無敵の刃と化して、相手を切り裂き真っ二つにする技。
その威力は凄まじく、例え金剛石で出来た鎧かぶとであったとしても断ち切るという。
連夜の盟友Kは、確かにこの技を会得していて、連夜自身そのありえない破壊力を何度かその目で目撃している。
が、しかし。
連夜はこの【頂獣断鎧拳（ちょうじゅうだんがいけん）】に似て非なる別の技をもう一つ知っていた。
それは古流武術【頂獣技牙（ちょうじゅうぎが）】もう一つの技の体系。
下半身を使用した技の体系『足の法』。
その『足の法』の奥義の中にそれはある。
その名も【獣心断罪脚（じゅうしんだんざいきゃく）】。
相手を鎧ごと破壊する【頂獣断鎧拳（ちょうじゅうだんがいけん）】に対し、【獣心断罪脚（じゅうしんだんざいきゃく）】は相手の身体を破壊すると同時に心までも破壊する恐ろしい技。
食らった相手の心に、癒えることのない『恐怖』の傷を刻み込む。
この都市に在住している者の中でその技を使える者はたった一人しかいない。
そして、そのことを知る者はこの都市の中で技の継承者である当人を除いてたったの二人。

連夜は、母親の間違いをすぐに訂正しようと思った。
だが、話の流れから言って母親がこれ以上追及してくる気配がないことを悟ると、しばらくはこのことを伏せておこうと考えなおす。
なんとなくであるが、今、すべてを話すといろいろと不都合が生じる様な気がしたからだ。
まあ、どのみち不良達が回復してしゃべれるようになれば、すぐ

にKではないことが発覚するだろうが、とりあえず、いまは母親自身がもういいと言ってることだし、しばらくそっとしておくことにする。

『ところでレンちゃん、あなた今どこにいるの？』

「僕を助け出してくれた『人』の家だよ」

『助け出してくれた？　Kくんのところ？』

「いや、違うよ。Kじゃない。動けない僕をわざわざ担いで逃げてくれた『人』の家にいるんだ。おかげで僕は無事逃げることができたんだけど、その担いで逃げてくれた『人』が家についた途端倒れちゃってね。今、看病しているところ」

『あらあらあら。乱闘に巻き込まれて怪我でもしちゃったの？』

「ううん、違う。怪我はしてないんだけどね。どうやら【過邪（かぜ）】みたいなんだ。二本あるうちの一本の尻尾が裂けて二つになろうとしているから、多分、間違いないと思う」

『あらあら、まあまあ』

【過邪（かぜ）】

異界の力を強く持つ中級以上の種族にとってごく一般的な病気。異界の力・・と一口に総称されるが、実際にはいって魔力や霊力といろいろとあり特性も勿論それぞれ違う。

破壊の能力に特化したもの、逆に創造の能力に特化したもの、自分の身体の外に奇跡を起こすもの、あるいは自分の身体自体に奇跡

を起こすものと実に様々である。
だが、種類に限らずそういった力は強くなればなるほど扱いが非常に難しくなってくる。
成長の段階に応じてその力もまた成長していくわけだが、当然、大きくなった力をコントロールできるようにと、自然と身体そのものもそれを扱えるものへと変化するようになっていく。
しかし、力が強ければ強いほど、成長する力に身体や精神自体の成長が追い付かない場合もままある。
そんなときに、成長した力のオーバーヒートによって体調不良を引き起こす症状、それが【過邪(かぜ)】である。

『【過邪(かぜ)】は異界の力を強く持つ種族の誰もが通る道だけど、あれ、結構辛いのよねえ。その恩人さんにはご家族の方いらっしゃらないの？』

自身も経験者である母親は、自分の経験を思いだしたのかうんざりしたような、それでいて心から心配するような口調で息子に話しかける。
正直、相手が相手だけに連夜としては結構心配しいたりしたのであるが、いろいろとすでに心配かけてしまっている母親にこれ以上心配の種を提供したくなかったので、ことさら明るい口調を作り言葉を紡ぐ。

「うん、一人暮らししていらっしゃるから。しっかりした方なんだけどね。とりあえずもう熱も下がり始めているし、山は越えたと思う。でも心配だから、一応今日のところは泊って様子を見ることにするよ」

『そう。まあ、レンちゃんはこの都市最高の『療術師』であるブエルの一番弟子だし、ダイちゃんやみ～ちゃんが【過邪(かぜ)】を発症した

ときに看病した実績もあるわけだから、問題ないわね。でも、何かあったら何時でもいいからすぐに念話かけてきなさいね、いいわね』

「わかった。ありがとうね、お母さん。じゃあ、申し訳ないですけどあとのことはよろしく」

『うん、わかったわ。こちらで回収したあの子達の件はお母さんがちゃんとしておくし、家のことは旦那様がやってくださるって仰っているから、心配しないで。そうそう、帰ってきたら、改めてひ～こちゃん達にお礼を言わなきゃダメよ。ひ～こちゃん達ね、あなたを探すときに結構危ない目にもあったんだから。ひ～こちゃんだけじゃない、はるかちゃんやミナホちゃんをはじめとする龍族メイドもだし、ロムくんもなのよ』

「えええええっ!?　み、みんなあのときあそこにいたの?」

『そうよ～。大変だったみたいよ～。ね、ひ～こちゃん、頑張ったんだもんね（べ、別に頑張ってないですわ。たまたまですわ。と、特別連夜の為に動いたわけじゃないですし）もう～～。なんでこういうときだけでも素直にならないの、この子は。ちょっと、レンちゃん。ひ～こちゃん、あんまりにもいじらしいしかわいそうだから、せめて、『ありがとう、大好きだよ、姫子』か、『そういう姫子を愛しているよ』くらい言ってあげて!!（ぎゃ～～!!　ろ、老師何いっているんですの!?　そ、そんなこと別に聞きたいわけじゃ）

あらじゃあ、言ってほしくないわけ?　（いや、そういうわけじゃないというか・・言ってくれるなら聞きたいというか、でも、別に無理強いしてるわけじゃないし、いやいや言ってほしくないし、ことわられたらショック大きいし、というか、言わせようとして嫌われたらいやだなあ・・嫌われたら・・うえええ・・うえええええん）ま、また泣く!!　ちょっと、ひ～こちゃん、いくらなんでも打た

れ弱すぎるわよ!?　か弱い女の子だって言ってももっと強くならないとダメなのよ!!』

「相変わらず本当の親子以上に仲いいね、二人とも。とりあえず、帰ったらみんなにお礼は必ず言うようにするよ。じゃあ、切るね」

『え、ちょ、レンちゃん、ひ～こちゃんに『愛してる』の一言だけでも（老師、もういいですから!!）全然いいことないでしょ、ひ～こちゃん!!　あのね、ひ～こちゃん、私としてはね、レンちゃんとひ～こちゃんに』

ぷつっ

有無を言わさず通話を切る連夜。

ああなってしまうと完全に『近所のおしゃべりおばちゃん』と化してしまい、いつまでたっても話が終わらなくなってしまうだ。

このまま放置すれば、間違いなく話の内容は泥沼のカオス状態になってしまうのは、まず間違いない。

そうなる前に先手を打って通話を切ってしまうのが、最善の対処法なのだ。

「やれやれ。本当にもう、お母さんは、僕と姫子ちゃんをからかうの大好きだからなあ。困ったもんだよなあ。はあ～～～」

なんとも言えない複雑な表情で深い溜息を吐き出す連夜。

がっくりと肩を落とし疲れきった表情を浮かべたまま、ぼんやりと宙を見つめる。

しばらくの間、そんな感じでぼ～～っとしていた連夜であったが、やがて、手にしていた携帯念話をもそもそとズボンのポケットにもどす。

そして、ゆっくりと顔をあげたときには、先程までのふぬけた表情はどこにもない。

まるで一流の戦士のような厳しくも真剣な表情になった連夜は、獲物を狙う鷹のような鋭く光る目で自分の周囲に視線を走らせ始める。

連夜が今いるのは、三ＬＤＫのマンションの一室。

その中にあるキッチンの中心に立ち、連夜は各部屋に広がっている凄まじい光景をじっと見つめ続ける。

脱ぎ散らかされた様々衣服、下着類。

近くのお惣菜屋で買ってきたはいいが、食べきれなかったらしく中身が残ったままになった弁当や、総菜の数々。

整理されることなくほったらかしにされ、あちこちに散乱している雑誌類。

そして、なによりも部屋の空間を圧迫していたのは、無数の空缶空きビンの山。

ビール、東洋酒、どぶろく、ワイン、ウィスキー、ウォッカ、チューハイ、カクテル、その他多数。

見渡す限りゴミ、ゴミ、ゴミ、ゴミ、ゴミの山。

どこを見ても何を見てもゴミしか目に入らない。

しかもそのゴミは、ただ視覚的にのみ強烈なインパクトを与えているわけではない。

あらゆるゴミというゴミが入り混じり、自己主張を繰り返すこの家の中には、連夜がこれまで嗅いだことがないような凄まじいまでの腐臭が漂っている。

嗅覚的にもとんでもないインパクトが強制的に与えられてしまうのだ。

まさに腐海。

まさにごみ屋敷。

「ふっふっふ、これはあれですね。『家事のプロ』を自負する僕に対する挑戦ですね」

額から一筋の汗を流しながらも、不敵な笑みを浮かべながら両拳をボキボキと鳴らして見せる連夜。

家の主人の許可を得てはいないが、『家事のプロ』たる自分がこの惨状を見てしまった以上、この状態のまま放置することは絶対にできない。

隅から隅まで徹底的に片づける！！

『家事のプロ』たる連夜の真の戦いが、今始まる！！

ちなみに、この家の主の寝室はすでに掃除完了済み。

連夜の手で整理整頓がきちんとされ、隅々まで掃除がいき届いた実に快適な空間になっている。

そこに敷かれた布団の中、この家の主は夢の世界を絶賛放浪中。

「う〜ん。ミネルヴァ、私もう呑めないったら。でも、焼酎は好きなの〜。むにゃむにゃ」

天下泰平。

第七話　『玉藻と連夜』　その２

どれくらい眠っていたのだろうか。
闇の世界から急速に意識が浮上し、ぼんやりとだが思考能力が回復してくる。
自分が布団の中で横になっていること、今まで眠っていたことをすぐに自覚するが、それ以上のことを考えるにはまだ頭ははっきりしてはいない。
そんな状態のまま、しばらく横になった状態のまま天井をぼんやりと見つめ続ける玉藻。
やがて半分くらい覚醒した状態になると、いろいろな夢を見ていたことを玉藻は唐突に思い出す。
楽しい夢、悲しい夢、嬉しい夢、辛く苦しい夢、本当にいろいろさまざま。
そう言った夢を間違いなく見ていたという覚えはあるが、では具体的にどんな内容だったかと聞かれると、もうすでに記憶の中には残っていない。
夢というものはそういうものだとわかってはいる。
しかし、浮かんでは消えたたくさんの夢の中に、何故か忘れてはいけない大切な大切な夢があったような気がする。
絶対に思い出さないといけない、自分にとって大切な何か。
絶対に思い出して現実にしないといけない、自分にとって大事な何か。

（あ～、なんだったけ～。ここまで出ている気がするんだけどなあ）

いつもなら、やっぱりどうでもいいやと一笑に付してさっさと忘れてしまうようなこと。
だけど、今回だけはどうしてもそうすることができない。

何故か、有耶無耶にしてはいけない、絶対にそうしてはいけない気がする。

気がするのだが。

やはり思いだすことができず、横になったまま、彼女は深い深い溜息を一つ吐きだした。

気だるい感じが全身を包み、いつも通りではない疲労感。

とはいえ、熱っぽさはなく気分が悪いということもない。

それどころか、額と後頭部に程よい感じの冷たさすら感じる。

額に手を回してみると、冷たく冷やされたタオルのようなものが置かれている。

また、自分の頭の下敷きになっているのはいつもの枕ではなく、冷たい氷枕へと変わっていた。

首を横に回してみると、布団の横に氷水の入った洗面器が置かれているのが見えた。

（あ～、誰か看病してくれていたんだなあ・・）

そういえば、昨日すこぶる体調が悪かったのだと、唐突に思い出す。

昨日、玉藻は小学校時代からの親友にして悪友であるミネルヴァ・スクナーの追試に付き合って、大学に出かけた。

正直朝から調子は悪かったものの、なんとかなるだろうと軽い気持ちで出かけてしまったのが最大の間違い。

途中から一気に体調が悪くなり、静かな図書館に避難してダウンしていたのだった。

熱っぽいし、頭は痛いし、吐きそうだし、身体は全身だるいし、実に最悪な状態であったが、今は全然そんなことはない。

誰かわからないが、実に細やかに配慮して看病してくれたのだろ

う。
いつも寝ているせんべい布団と違い、今自分が寝ている蒲団はふかふか。
頭を乗せている氷枕は冷たすぎない程度にひんやりしてて気持ちいい。
額に乗せてあるタオルは、目にかからないように注意してのせてられているので、これもまた快適だった。
実に寝やすい。
というか、二度寝したい誘惑に勝てないほど気持ちいい。

（もういいや、もう一回寝よう）

あまりの気持ちよさに即決し、再び目を瞑り眠りの世界に入ろうとする玉藻。

しかし。

あることに気がついて意識を一気に覚醒させる。
そして、自分の中にわきあがった強烈な疑問を思わず叫びながら布団を跳ね除けて起き上がるのだった。

「って、誰が!?　誰が、看病してくれたの!?」

玉藻は一人暮らしの大学生。
ルームメイトなどいないし、彼氏もいない。
家族はここから遠く離れた霊狐の里に住んでいるし、こちらに来るなら一週間以上前に連絡がきているはずだった。
と、言うことはいったい誰が・・
得体の知れない不安と恐怖で、玉藻の全身からいやな汗が噴出す。
急いで自分の着衣と身体を確認するが、熱のせいによる汗はかい

ているものの、着ているパジャマに乱れはないし、身体そのものにどうこうされたわけでもないようだった。
その事実に少し安堵の息をもらしかける玉藻。
だが。

「あ、あれ・・そういえば私、いつパジャマに着替えたの？　と、いうか、ここってどこ！？」

玉藻は唐突に、昨日のある時間から先の記憶がないことに気がついた。
親友ミネルヴァに付添って大学にやってきた後、気分が悪くなり図書館に入った。
ここまでは覚えている。
しかし、それ以降の記憶がない。
まさか、自分は誰かに拉致されたのか！？
玉藻は戦慄すると共に自分の意識を一瞬にして戦闘モードへと切り替える。
嬉しいことではないが、玉藻は下心満載の男性達から頻繁に毎日のように声を掛けられている。
自分に向けられるそんな男性達の目は、どれもこれも発情期の血走ったオスそのものの欲情の光で満ちあふれており、気持ち悪いことこの上ない。
勿論そういう輩に対して好意を持つわけがなく、容赦なく片っ端から蹴り倒し絶対に寄せつけたりはしないのだが。
昨日は本当に体調が悪かった。
あの状態の自分に襲いかかられていたのなら・・
玉藻はぞっとしながら急いで周囲を見渡す。
きちんと整理整頓された六畳ほどの部屋
真ん中には布団が敷いてあり、ほかには化粧台とか、タンスとかまばらに置いてあるだけ。

一応窓はあるのだが、かけてあるカーテンも実用性だけを考えたような地味な紺色だし、全体的に部屋の中は地味で質素だった。

「どんだけ地味な部屋なのよ。布団はともかくとして、化粧台なんて私の部屋にある奴と同じ。これ家具雑貨店『ダブルバード』で買ってきた『三千九百八十サクル』の安物だし、タンスもこれ『七千九百八十サクル』の特化品でしょ？　あ～あ、カーテンもうちにあるやつと同じ。どうみても男の部屋のカーテンよねえ、これ。そうそう、ここに私がコーヒーこぼしてつけたシミが・・って、私の部屋じゃん！！」

ようやく自分がどこにいるのかを把握した玉藻は驚愕の声をあげる。

気がつかなかった。

いや、本当に玉藻は気がつかなかった、いや気がつけなかったのだ。

今自分が居る場所が、他ならぬ自分の部屋だということに。

それはなぜか？

あまりにも自分の寝室が、奇麗になっていたためだ。

「え？　え？　なんで？　ビールの空き瓶は？　雑誌は？　もっといっぱい散らかっていたのに、あれ？　あれれ？」

彼女の記憶にある彼女の部屋は、こんなに小奇麗で整理整頓された部屋ではなかった。

いや、それどころか、『奇麗』とか『整理』とか『整頓』とかなんて言葉は欠片も存在しない部屋であった。

ビールの空きビンや、読みかけの雑誌や、脱ぎ散らかされた服が部屋のあちこちに散乱し、その中に埋もれるようにせんべい布団がかろうじて敷かれている。

そんなとんでもない状態であったのだ。
であったにも関わらず、玉藻の部屋はその様子を一変させている。

「どういうこと？　いったい、一晩で何があったの？　え、ちょっと待てよ、本当に一晩なのかしら！？」

はたとある可能性について気がついた玉藻は、急いで化粧台に近寄る。
そして、そこに置いてある時計を手に取って確認してみると。

「表示されている日付と私の中の最後の記憶の日付を照らし合わせてみると・・一日しか経ってないということか」

自分が予想していた最悪の事態ではなかったことに脱力しながら、すとんとそこに坐り込む玉藻。
のろのろと化粧台の上に時計を戻しながら、深い溜息を一つ吐き出す。

「う～～ん。ってことは、私の中で失われている記憶は半日程度ってことか。いったい、何があったんだろ？　図書館に入ってから先の記憶がすぽんと抜け落ちているのよねえ」

両腕を組んでしばし考え込む。
なんとなくぼんやりとだが思いだせそうな気がするのはする。
かなり大変な何かがあったはずなのだが。
あ～でもない、こ～でもないとしばらくそのまま頭を捻り続ける。
そうして十分ほどうんうん唸っていた玉藻であったが、はっとあることに気がついてその身を緊張で強張らせる。

この家に誰かがいる。

自分以外の誰かがいる、誰かの気配がする。

どうして今まで気がつかなかったのか？

玉藻は霊狐族である。

霊狐族は異常に警戒心が強い一族で、自分のテリトリーに侵入してくる外敵、あるいは自分に向けられる害意、悪意、敵意を瞬時に敏感に察知する能力を持っているのだ。

普通なら気がつかないわけはない。

いくら起きたばかりとはいえ、下手をすれば命に関わるかもしれない重大事を見過ごすわけがない。

にも関わらず玉藻はこの気配を完全に見過ごしていた。

いや、そればかりではない。

今、意識してこの家の中の自分以外の誰かの気配を感じている。

感じてはいるのだが。

その気配に対する警戒心というか敵対心というか、闘争本能というか迎撃態勢というか、そう言ったものが全然わいてこないのである。

と、いうことは自分の知り合いだろうか？

ありえるといえばありえる。

氷枕といい、冷たいタオルといい、ふかふかの蒲団といい、誰かが調子の悪かった自分を看病してくれたのはほぼ間違いはない。

それもかなり気を使って看病してくれていたとわかることからも、相当親しい間柄の誰かのはずなのだ。

しかし。

この気配の主はどうも自分が知る誰とも気配が違うような気がする。

だが一方で、物凄くよく知っている気配という感じもする。

よ〜するによくわからんというのが本音。

とりあえず、相手からは一切悪意の類は感じられないし、ここでぐだぐだしているよりも、直に確かめたほうが早いなと決断する。

本調子でないが、なんとか意識を集中して今一度家の中の気配を探る。

すると、リビングルームの向こうにあるキッチンのほうから何者かの気配を感じる。

玉藻は音もなく立ち上がると、自分の部屋からリビングにつながっている襖へと向かい、少しだけ襖を開けて中を見る。

「え・・うそ・・」

玉藻は自分の目に映るリビングルームの様子が信じられず、何度も目をこする。

ピカピカに磨き上げられたテーブルに地味だが趣味のいいモスグリーンいろのカバーがかけられたソファ。

ベランダに続くガラス張りの大窓はきれいに磨き上げられ、ぼろぼろになっていたはずのカーテンは光を入れることができる薄く透けている白いレースのカーテンと、厚めの生地でできたレモンイエローのカーテンの二種類にかえられていた。

部屋の隅にきちんとセッティングされた念波放送受信対応の二十八型テレビに、色艶のいい観葉植物が植えられた鉢植え。

家具が置いていないスペースはあきらかにきちんと掃除されて、

恐らく雑巾がけまでしてあるのがわかる。
しかも、ほんのりと匂うか匂わないかという嫌味にならない程度に、金木犀の良い香りまで漂っている。

「ど、どうなってるの？」

玉藻が驚くのは無理もない。
玉藻の記憶の中にあるリビングルームはゴミ捨て場のような見るに耐えない有様だったのだ。
記憶している限りでもありとあらゆるものが部屋中に散乱していたはず。
自分が脱ぎ散らかした衣服。
自炊するのがめんどくさくて近くのお惣菜屋で買ってきて食べきれずに中身残ったままの弁当（中がどうなっていたかについては絶対確かめたくない状態）。
暇つぶしに買ったのはいいけど整理できずにほったらかしの雑誌類。
そして、なによりも部屋の空間を圧迫していたのは、無数の空缶空きビンの山。
ビール、東洋酒、どぶろく、ワイン、ウィスキー、ウォッカ、チューハイ、カクテル、ｅｔｃｅｔｃ。
いや、確かに玉藻は酒が嫌いではない。
どちらかといえば結構好きなほうだ。
しかし、流石に部屋を埋め尽くすまで飲むほどではない。
むしろちびちびと、ちょっとだけ楽しみたい程度なのに、小学校時代から続く腐れ縁というにはあまりにも長い付き合いの親友が、ほとんど毎晩のように酒のビン缶を抱えてやってくることが最大の原因なのだ。
いや、百歩譲ってここで飲むのは許してもいい。
だが、飲んだ後の後始末を全くしないで、ごみ散らかし放題で帰

るのはいかがなものか。
思い返すとふつふつと怒りが湧き上がってくる。
と、いうか、なんだかその友人に関することで重大な何かを忘れてしまっているような気がするのだが、とりあえず、その思いをとりあえず心の棚の上に置いておいて、もう一度部屋の様子を落ち着いて伺ってみる。
腐海というか魔界というか一種異様な光景と醜悪極まりない匂いに満ちていた部屋が、どうやったらここまで昇華されるのか。
しばらく唖然としていた玉藻であったが、ずっとそうしているわけにもいかないので、意を決してリビングに出て行くことにする。
なるべく気配を消し、滑らせる音が立たないようにゆっくりと襖をずらすと、なるべくキッチンから死角になっている場所を選んで素早く移動する。
キッチンから死角になっているリビングの壁際に移動した玉藻はもう一度気配を探るが、キッチンで感じる気配の主はまだこちらに気づいていないようだ。
ほっと安堵の吐息をもらし、何気なく視線をめぐらせると、自室からは見えなかったソファの影に何かが積まれているのが目に入る。
注意を向けてみると、どうやらそれは自分の衣服。
恐る恐る近づいて確認してみると、それらは全て綺麗に洗濯されてきちんとたたまれており、しかもブラウス類などはアイロンまでかけてある念のいりよう。

「か、完璧だわ・・完璧な掃除・・完璧な洗濯・・」

正確に四角に折りたたまれたブラウスを持つ手をぶるぶると震わせながら、玉藻は恐るべき可能性に気づいて台所のほうに振り向いた。

「ま、まさか、キッチンにいるってことは!?」

うそだ、そんなわけない、信じたくないと思いつつも、ゆっくりと四つんばいになりながらキッチンに近づく玉藻。
しかし、そんな玉藻を絶望に追い込むかのごとく、リビングから離れるにつれて金木犀の香りは薄くなって消えていき、かわりにものすごい食欲をそそるいい匂いが・・
そう、この匂いはあれだ、あれに間違いない！

「お、お腹に優しいクリームシチューの優しい香りが」

認めたくない、認めたくないが、自分の狐特有の鋭い嗅覚はごまかすことができない。
匂いだけでわかる。

この匂いをさせているクリームシチューは絶対おいしい！！

「か、完璧か、全部完璧なのか！？　掃除洗濯炊事、非の打ち所のない完璧超人か！？」

なんか女として物凄い敗北感を味わわされてがっくりとうなだれる玉藻。

たった一日で自分の住居ををごみ屋敷から、できるかっこいい女の部屋に作り変えた見知らぬ完璧女。
まるで『この程度のこともできないなんて・・あんたってくずね・・うふふ』と嘲笑されている幻覚まで見えてきて、玉藻は立ち直ることができずに床に涙の池をつくるのだった。

「どうせどうせ、わたしは駄目な女ですよ～。掃除片付けできないパナシ女ですよ～。洗濯できない異臭汚物女ですよ～。料理作って

もまずいものしか作れませんよ～。しくしくしく」

「あ、あの～、そんなところで寝ているとお身体にさわりますよ」

「ほうっておいて！どうせ、わたしは女のくずよ、くずなんだから！！　うわぁぁぁぁぁぁぁん！！」

「そんなことないと思いますよ」

「上辺だけの同情なんていらな、え？」

さっきからから自分が誰かとしゃべっていることに気がついた玉藻は、声のしたほうにゆっくりと顔を向ける。

そして、自分の先に立つ一人の少年の姿をその目にしたとき、強烈な衝撃に貫かれて玉藻は思わずよろめいた。

「あ、あなたは・・」

一度も見たことも会ったこともない少年。

しかし。

自分はよく知っていた。

玉藻は自分の目の前に立つ少年のことをよ～く知っていた。

見たことがないはずなのに。

会ったこともないはずなのに。

玉藻は知っていた、知っていたのだ。

そして。

「おはようございます、如月さん」

一度も見たことがないはずの笑顔。

一度も聞いたことがないはずの声。

なのに。

いつもどおりの優しい笑顔。

今までと変わらぬ温かい声。

懐かしくて切なくて嬉しくてどうにもたまらなくなった玉藻。

気がついたそのときには、涙と鼻水で美しい顔をぐしゃぐしゃにしながら少年の小さな体を力いっぱい抱きしめていた。

「え？　え？　き、如月さん？」

「おはよう、おかえり、ただいま、ああ、やっと、やっと会えた、やっと捕まえた、捕まえたんだから！！」

第七話　『玉藻と連夜』　その3

溢れる想いに任せて、しばらくの間、目の前に立つ少年を抱きしめ続ける玉藻。

自分の顔のすぐ下には少年の柔らかい黒髪。

そこに顔を埋めて匂いを嗅ぐ。

柑橘系のシャンプーを使っているからだろうか、実に爽やかで甘い香りが玉藻の鼻孔をくすぐる。

抱きしめた身体は思ったよりも小さく、自分の腕の中にすっぽりと納まるが、やはり男の子だからかそれほど柔らかくはない。

服の上からでもわかるほど、引き締まった筋肉の感触。

しかし、だからといって拒絶感とか嫌悪感のようなものは一切感じない。

むしろ実に馴染んだ抱き心地で、いつまでもいつまでも抱きしめていたくなってしまう。

そうして、失われた何かを取り戻そうとするかのように、自分の腕の中にいる大切な何かを全身で感じようとする玉藻。

ふと、視覚的になんだか物足りないと思った玉藻は、ちょっと腕を緩め、腕の中にいる少年の身体を少しだけ離す。

そして、腕の中の少年の顔が見えるように自分の身体をずらし、もう一度その全身を観察する。

すると、見るからに性格の良さそうな顔をした高校生くらいの人間族の少年が心から心配している様子でこちらをのぞきこんでいるのが見えた。

くせのない黒髪に、大きな瞳、かっこいいというよりは圧倒的にかわいい感じのする顔。

恐らく学校の中でも小柄なほうに入るであろう身体に、かわいい

ひよこのアップリケがしてあるエプロンがよく似合っていた。

やっぱり自分はこの少年に会ったことがなければ、見たこともない。

そう確信する玉藻。

だが、次の瞬間、玉藻の脳裏にいくつもの記憶がフラッシュバックしていく。

脳裏に浮かび上がる数々の記憶、脳裏に映し出される様々な映像。

自分の記憶として自覚できるものもあれば、全く記憶にないもの、どうして今思いだしているのかわからないもの、流れる映像に心当たりがあるもの。

一気に噴き出したそれらは、玉藻の意思を無視して洪水のように流れて行く。

『え、でも、僕の魂が気に入ったんでしょ？　それってどんな形であれ好意があるってことですよね？』

『だって、きれいなおねえちゃんを目のまえでよくみたかったから』

『もう、狐さんはいっつもそうなんですから。ちょっとそこに正座してください』

『またね、たまもおねえちゃん』

『！？』

『玉藻さん、いつかまた二人でもう一度あの世界に戻りたいですね』

『この子達も、おねえちゃんとおなじなんじゃないかな』

『いえ、あの、どうぞ、食べていいですけど』

小さくてごぼうみたいに痩せた少年、フードにすっぽり覆われて顔がよく見えない少年、『祟』の一文字をつけた仮面をつけた人影、ゆったりした東方の着物姿に身を包み穏やかな表情でこちら見つめる年齢不詳の青年。

膨大な記憶の濁流に翻弄されながら、やがてそれは二つの記憶によって終焉を迎える。

玉藻の脳裏に浮かび上がるのはフードにすっぽりと覆われて顔がよく見えない少年。

どういう顔をしているのか、どんな表情をしているのかさっぱりわからない。

しかし、その声はどこまでも温かく、その言葉は何度聞いても玉藻の心を熱くさせる。

『おねえちゃん、僕が勝ったら、僕のおよめさんになってくれる?』

いいよ。

今なら、言える。

はっきり言える。

いいよって、お嫁さんになってあげるって。

あのときは言えなかった言葉だけど、今なら、今すぐにでも応えられる、はっきり口にして答えられる。
でも、その答えはもう届かない、永遠に届かない。

記憶の中で手を伸ばそうとする玉藻の前から少年の姿は急速に闇に溶けて消えていく。

そして、次に玉藻の前に現れたのは、小さくてごぼうみたいにガリガリにやせ細った少年。
質素な茣蓙の上に寝かされた十代後半と思われる人間族の黒髪の一人の少年。
その少年は今にも消えてしまいそうで儚げな、しかし、どこまでもどこまでも優しさと慈愛に満ちた表情でこちらをじっと見つめて言葉を紡ぐ。

『狐さん、僕が死んだら僕を食べて、そして、僕のことは忘れてください。忘れて自由になってください。もう僕に縛られないで。あなたが大好きな風のように、雲のように、自由に楽しく暮らしてください。そして、お願いだから、幸せになって・・』

弱いくせに、脆いくせに、苦しいくせに、辛いくせに、意地を張って痩せ我慢して、最後まで余計なお節介全開で・・

少年は永遠にその目を閉じた。

自分は全然幸せになれなかったくせに、人には幸せになれという。

「なれるわけがないでしょうが！！　忘れられるわけがないでしょ

うが!!　私を・・私をバカにするなあああっ!!」

いつの間にか玉藻の目からは滝のように熱い何かが溢れだしていた。

溢れだしていたが、そんなことを言っている場合ではないし気にしている場合ではない。

ここはきっちり言っておかないと、また同じことを繰り返す、絶対に繰り返すことになるのだ。

玉藻は目の前の少年の胸倉をムンズと掴むと、持ちあげて自分の顔の真正面へと持ってくる。

そして、渾身の気合いの入った瞳で少年の黒い瞳をギラリと睨みつけるのだった。

「あ、あ、あの如月さん?」

「よく聞きなさいよ、この大バカ者!!　いい?　二度と私を置き去りにすることは許さない!!　許さないんだからね!!」

「ちょ、あの、落ち着いてくださいってば、き、如月さん?　もしもし?」

「黙って私の話を聞きなさい!!」

「は、はい。すいません」

「すいませんじゃないのよ!!　謝って済む問題じゃないのよ!!　例え私の為にだったとしても、自分が死んじゃったら何にもならないのよ!?」

妙に申し訳なさそうに身体を小さくしている少年の姿を見ていると、かわいそうだしもう許してあげようかなという気持ちがむくむくとわき上がってくる。

だが、今後のためにもここで徹底的に叩いておかないといけない。

そうしなければ、また自分はあの辛い想いを味わうことになる。

なんせこの目の前にいる超ド級のスーパーアルティメットミラクルアメージングウルトラワンダフルお人好しバカは、大切な人の為ならば、自分の命を平気でドブに捨てることができる、そういう生き物なのだ。

というか、実際にそれを許してしまったがために、自分は地獄のような辛い想いを味わったのだった。

絶対に油断してはならない。

ここは心を鬼にしてよく言い聞かせておかなくてはいけないのだ。

「自分を忘れろだとか、自由に生きろだとか、幸せになれとか、大きなお世話なのよ!!　私は私が決めた『人』の為だけに生きるの、私の決めた『自由』の為だけに生きるの、私の決めた『幸せ』の為だけに生きるのよ。それは誰にも邪魔させないし、否定させないし、強制されたりもしないの!!」

「ええ、それが僕の望みでもありま・・」

「ばかっ!!　全然わかってないじゃない!!　私が、私が生きる目的はね。『自由』も『幸せ』も、全部、あなたって『人』あってのことなんだって、いい加減わかれ!!　あなたという『人』が千切れた時点で私の人生は終わってるのよ!!　だから、あなたは生きないとダメッ、私の側で生きないとダメッ、離れたらダメッ、絶対に絶対に絶対に、二度と離れたらダメッ。ここよ、私の腕の中の

み。あなたの存在価値はここの中にだけある。それ以外の場所で生きることはもう許さない！！　当然死ぬのもダメッ！！　わかった！？」

噛みつくように本能の赴くままに絶叫する玉藻。

そんな玉藻の姿をぽか～んとしてしばらく見つめていた少年だったが、その言葉の意味を知ると急速に顔を赤らめ、宙釣りにされたままなんだかもじもじして玉藻から顔を背ける。

「あ、あ、あの・・な、なんかその」

「何よ？」

「その、今の・・あ、愛の告白みたいですね。えへへ」

自分で言ってても恥ずかしいのか、すっかりゆでダコになってしまった少年は、耐えきれなくなって顔を下に向けようとする。

しかし、玉藻はそれよりも早く少年の下顎をがっちりともう片方の手で掴んであげさせる。

そして、完全に据わりきってしまった目で少年の大きく見開いた黒眼を真っすぐに見つめ、真顔で告げるのだった。

「それ以外の何に聞こえるのよ」

狙った獲物を捉えた捕食獣としての表情、全身から発せられる圧倒的なオーラ。

どこからどう見ても、誰がなんといおうとも、全身全霊、全力全開で『マジです』と訴えかけてくる黄金の瞳の前に、言葉を無くしてしまう少年。

「あ、え、い、う」

「返事は？」

「え？」

「返事はどうしたの！？」

「え、えええっと、返事って、急に言われてもその、心の準備があの」

「男らしく『はい』か、『わかりました』で答えなさいっ！？」

「そうですね、男らしく『はい』か、『わかりました』で・・って、どっちも肯定じゃないですか！？」

「嫌なのっ！？」

「いえ、嫌じゃないです。その・・わかりました。僕で・・こんな僕でよかったら如月さんの側にいさせてください」

相変わらず顔は熟れたリンゴのように赤いまま。

しかし、少年の表情は真剣そのもので、その深い夜色の瞳は真っすぐに目の前の黄金の瞳を見つめ返す。

しばし、交錯する二つの視線。

やがて、その夜色の瞳に浮かぶ深い想いを感じ取った金色の光は、耐えきれなくなってまた滲みはじめ、熱い何かで濡れはじめる。

「本当に？　嘘じゃない？」

「本当です。嘘じゃないです」

「もう勝手にいなくなったりしない？　もうどこにもいかない？」

「あなたが望んでくれる限り、許してくれる限り、側にいさせてください」

「わかった。私は、私、如月（きさらぎ）　玉藻（たまも）は望む、あなたが側にいてくれることを望む。私、如月（きさらぎ）　玉藻（たまも）は許す、あなたが側にいることを許す。だから・・だから、いつまでも私の側にいて、お願い」

「はい」

優しい声、優しい表情。

それは今まで通りの声、それは今まで通りの表情。

何も変わらない、いや、むしろこれまで以上に深く大きく、かけがえのない何かが含まれるようになったそれら全て。

玉藻は取り戻した。

今、完全に取り戻したのだ。

それを確信した玉藻の全身を凄まじい歓喜が包み込み、気がついた時には玉藻は少年の小さな唇を自分のそれで塞いでいた。

ずっと我慢していた何かを取り戻すかのように重ね貪る玉藻。

唇を離してはまた重ね、重ねてはまた離す。

そうやって何度も同じことを繰り返していた玉藻だったが、なんだかそれでもまだ物足りない気がして、今度は半分狐、半分人の半獣人化の姿になると、盛大に少年の顔を舐めまわし始める。

獣人の一族の者にとって、顔を舐めるという行為は、ごく親しい者にしか行われない神聖な儀式である。

親と子、あるいは兄弟姉妹、そして、夫婦かそれに近い恋人同士。

強い愛情、強い絆を感じる者に対し、自分が抱いている正の感情

を表現するために行われるのだ。
玉藻は今まで顔を舐めるという行為を他の誰かに行ったことがほとんどない。
ほとんどないが一応あるにはある。
しかし、それは恋人とかそういう関係の相手ではない。
里に残してきた自分の妹。
自分に懐いてくれ、一緒にいてくれたたった一人の家族。
それ以外にはない。
そして、里を離れてからは一度たりともない。
正直、自分がこういう行為を行うことは二度とないのではないかと思ってきた。
自分に近寄ってくる大勢の男達、あるいは一部の女達、すべて、嫌悪の対象でしかなかった。
なのに、自分は今こうして自分以外の誰かに対し、ありったけの愛情表現を行っている。
不思議だった。
実に摩訶不思議であったが、嫌悪感は全くない、むしろずっとずっとこうしていたい。

「ちょ、如月さん、お気持ちはわかりました。顔を舐めることが獣人族にとって最大限の愛情表現にあたることだということは理解していますし、それをしていただけるのは大変光栄だと思っています。しかしですね、そろそろ、放していただけないかと」

「いや」

「いやって・・」

玉藻の腕の中で、心底困惑した表情を浮かべる少年。
決して嫌がっていないことはわかってる。

ただ、どういう態度をとればいいのかわからなくて、何よりも照れくさくて逃げたがっているのだ。
そんな少年の気持ちが手に取るようにわかる。

かわいい。
なんて、かわいらしくて愛おしい生き物なのだろう。
いっそ食べてしまいたい。
頭から丸ごと食べてしまうのだ、そうすれば二度と裏切られることはない。
愛しい少年の生命は永遠に自分のもの。
そして、同時に。
愛しい少年の笑顔は永遠に失われる。

「ないわ。ないない。それだけはない」

「ふぇ？　何がですか？」

「いいの。気にしないの」

「またそれだ。なんなんですか、毎回毎回、一人で意味深なこと言っては一人で納得しちゃうんだから」

「いいったらいいの。気にしなくていいの。どうせ説明したって、あなたの答えなんて決まってるもの」

『いいですよ、僕を食べても』

「それはもういいっつ〜の。食べないっつ〜の」

「何をですか？」

「いいから。気にしなくていいっていってるでしょ。もうっ！！」

「そんな無茶な、うわっぷ。如月さん、僕、さっきまで掃除してたから埃まみれで汚いですって！！　お腹壊しちゃうからいい加減顔を舐めるのはやめてください！！」

「汚いなら尚更奇麗にしないとダメでしょ。あなたは黙ってなさい」

「えええええっ！？」

情けない表情で腕をばたばたさせてもがく少年。

そんな姿を見た玉藻は、くすくすと笑いながら少年の顔に自分の赤く長い舌を這わせていく。

自分の腕の中で完全におもちゃになってしまっている少年には、本当に申し訳なかったが、玉藻は今、最高に幸せだった。

だって、この世で一番大事だと思っている掛け替えのないものがこの腕の中に戻ってきたのだから。

もう二度と取り戻せないかもしれない、そう思っていた大切な大切な宝物が戻ってきたのだから。

その幸せを噛みしめながら、丹念に丁寧に大切に大事に少年の顔を舐めていく玉藻。

そんな風にどれくらい幸せな時間を堪能していたであろうか。

玉藻は、ふとあることに気がついて、少年の顔を舐めるのをやめ

る。
そして、腕の力を緩めて少年の身体をそっと離し、まじまじとその顔を見つめた。
玉藻の腕の力が抜けたことで、ようやく解放されるのだと思った少年は、どこかほっとした表情を浮かべて肩の力を抜こうとする。
しかし、目の前にある玉藻の狐の顔が、微妙に困惑気味に歪んでいることに気がついて、小首を傾げる。

「ど、どうしました、如月さん？」

「あ、あのね」

「は、はい」

「そ、そのね」

「え、ええ」

「だ、だからね」

「な、なんなんですか？　いいからなんでも聞いてください。どうしたんですか？」

物凄く何か聞きたそうにしているのだが、同時に物凄く言いにくそうにしている狐。
何度も口を開きかけて言葉にしようとしてはやめ、また何かを聞こうと言葉を紡ぎかけるがやめる。
そういうことを何度も繰り返し、話が全く先に進まない。
そのことに業を煮やした少年が強い口調で逆に玉藻に問いかけると、ようやく玉藻は言葉にする決意を固めたらしく、おずおず口を

開いた。
それもなんだかやたら申し訳なさそうに。
「そ、そのね」
「はい、はい」
「い、今更なんだけどね」
「ええ、ええ」
「『何言っちゃってるのおまえ!?』とか言わないで聞いてほしいんだけど」
「いや、いわないですから。なんなんですか、早くいってくださいってば」
言ってる途中でなんだかやたら顔が赤くなってきた玉藻。
途中から声がだんだん小さくなっていき、またもや口を閉ざしてしまう。
しかし、少年に強く促され、物凄く仕方ないという感じではあったがとうとう思いきってそれを口にする。
「あ、あのあの。あのねあのね」
「は、はい」
「いや、つまりその、だから、いわゆる」
「要点だけズバッと言ってください!!　ズバッと!!　早く!!」

「んもうっ、こういうところは全然変わらないんだから！！　だから～、その～、あ、あなたは」

「僕？　僕がなんですか？」

「あなたは」

「僕は？」

「あなたは、だ～れ？」

「・・・」

「・・」

し～～～ん。

狭いキッチンの中を地獄の沈黙が支配する。
その沈黙の中にたたずむ二つの人影。

一つは、真っ赤になった顔を相手に見えないようにささっと背け、この沈黙が早く終わりますようにと必死に両手で耳をふさいで無駄

な努力を続ける狐。

もう一つは、両目と口を最大限まで開放し、埴輪のような状態になって狐の背中を見つめる少年。

やがて、はっと我に返った少年が、追い打ちとなるような無情な言葉を狐に投げかける。

「すいません、如月さん、もう一回言ってもらってもいいですか？」

「無理」

「いや、無理じゃなくて、ショックのあまり何を言われたのかわかんなくなっちゃったので、もう一回お願いします」

「絶対無理」

なんとか少年の言葉を聞かないようにと自分の耳を塞ぎ続ける玉藻。

しかし、少年は無情にもその手の隙間に口を近づけて自分の言葉を無理矢理狐の耳の中へと流し込む。

流石の狐の両手も、少年から流し込まれ続ける無形の言葉の刃を防ぐことはできず、なすすべもないままに翻弄され、いやんいやんと身体をよじり続けて悶えるばかり。

顔はますます真っ赤になり、フローリングの上に団子のように丸まって、なんとかこの羞恥地獄から逃れられないかと更なる無駄な努力を試行し続けるのだった。

「ちょ、如月さん、本当にお願いしますよ、話が全く先に進まないじゃないですか！！　もう一度お願いしますよ」

「む〜り〜！！　絶対む〜り〜！！　恥ずかしくて死ぬ！！」

「わかりました。じゃあ、僕が覚えている内容があってるかどうかの確認でいいです。いまさっき、如月さんは、『あなたは、だ〜」

「あ〜〜〜〜、ああ〜〜〜、あ〜〜〜〜、聞こえない、聞こえない、聞こえないったら、聞こえない〜〜！！」

「なんなんですか、いったい！？　え、あれ、ちょっと待ってくださいよ。さっきの質問が間違い無かったとしたら、如月さん、あれですか？　全然知らない相手に愛の告白したってことですか？」

「いやあああああっ！！　言わないで言わないで！！　ち、ちがうもん、い、今のはちょっとした冗談だもん！！」

「どっちがですか？　愛の告白がなかったってことですか？　冗談ということですか？」

「いや、それはぁ〜、超本気だったけどぉ〜」

「じゃあ、『あなたは、だ〜れ？』が冗談だったってことですか？　僕、自己紹介しなくていいんですね？」

「いや、それも〜、ちょこっとは本気だったような気がしないでもなかったようなそんなアンニュイな午後に薔薇からタンポポに変わる季節の変わり目が」

「わけわかりませんて。じゃあ、もう自己紹介しなくていいってことでいいですか？」

「そ、そんなに自己紹介したいなら、聞いてあげないこともないわよ」

「まさかの上から目線!?　ってか、玉藻さん、まだ熱が下がってないんじゃないですか？」

玉藻の言動にいいように翻弄されつつあった少年であったが、玉藻の体調が昨日から悪いことを思い出して顔色を変える。

「え、えっと、熱？」

「昨日から体調悪いみたいでしたけど、やっぱりまだ本調子じゃないんですね。いつもの如月さんらしくないし、ひょっとしてまだ熱があるんじゃないですか？」

その少年の言葉を聞いた玉藻はフローリングに座りこんだ状態で吃驚した表情を浮かべてみせる。

少年は、そんな玉藻にかまうことなく近づくと、美しい金髪に隠れた額にそっと手を伸ばして触れる。

「よかった、熱は下がったみたいですね」

「あ、あの・・」

「でも、あまり無理しないほうがいいですよ。霊力覚醒によって引き起こされる【過邪（かぜ）】って、油断してるとぶり返すことが結構あるんですよ」

「【過邪（かぜ）】？　私、【過邪（かぜ）】だったの？」

「気がついてなかったんですか？　ほら、尻尾がいま三本になっていますよね。昨日はまだ分かれかけの状態で先が割れているだけでしたけど、今は完全に分離してますよね」

「ほ、ほんとだ。私の尻尾、三本になってる」

少年の言葉に玉藻は、急いで後ろを振り返る。

すると、昨日まで確かに二本だった自分の尻尾が、三本に増えているのがはっきり確認できた。

意識すると、三本の尻尾を別々に自分の意思で動かすことができる。

間違いなく自分の尻尾だった。

「おお、すごい！！　でも、私が【過邪（かぜ）】だってことがよくわかったわね？」

「兄や姉も【過邪（かぜ）】で倒れたことがあるんですよ。その症状の細かいところは違いますけど、大きなところが変わりませんからね。そうだ、ちょっと待っててください」

少年は玉藻の側からパタパタと離れて、台所の横に移動していった。

そこにはユニットバスと洗面所があるはずだが。

ぼんやりとそっちを見ているとやがて、袖を捲り上げた少年がもどってきた。

「ちょうどいいからお風呂入っちゃってください。汗かいて気持ち悪いでしょ？いまいい湯加減になってますから。東方ゆず湯にしたので、過邪ひいた身体にいいし何よりもあったまりますよ。さ、起

きて起きて」

少年は玉藻の両手をつかむと、無理にならない程度に引っ張ってその身体を起こし、背中を押して風呂場の前の洗面所兼脱衣所に連れて行く。

そして、玉藻の身体を中にいれたあと脱衣所の扉を外側から閉める。

「ゆっくりつかってくださいね。あ、そうそう、着ていたものは魔道洗濯機の中にいれておいてください、あとで洗いますから。着替えは籠の中にいれてますからそれを着てくださいね」

少年の言葉に足もとに目をやると、下に置かれた竹でできた籠の中にはきちんとたたまれた新しいパジャマと下着が。

しかし、あることが気になった玉藻はすぐにパジャマを脱ごうとはせず、ドアの向こう側にいるはずの少年のほうに視線を向け直す。

「いや、あの、その」

「お風呂からあがったらご飯にしましょう。そのときに僕のことを改めてご説明させていただきます。あと、昨日のこともお話しないといけないですし」

「いや、だから、そうじゃなくて」

ドア越しに何かを伝えようとする玉藻。

いろいろと聞きたいことがあるのは間違いない、それを少年は後で説明してくれるといっている。

なぜかわからないが、この場限りの嘘ではないと確信できる。

それで納得できるはずなのだが。

しかし、今、玉藻が言いたいのはそれではない。
もっと単純なことで大事なことなのだが。
なんだか、それをここで言うのはあまりにもしつこいような気もする。
ドアの向こうでちょっとシュンとして切ない溜息をひとつ吐きだした玉藻は、とりあえず、大人しく風呂に入ってしまおうとパジャマを脱ごうとした。
そのとき、玉藻が一番欲しかった言葉がドア越しに投げかけられる。

「大丈夫ですよ。ちゃんと、側にいますから」

「え・・あ、う、うん」

やっぱりいつもどおりの優しい声。
その声を聞いてようやく安心した表情を浮かべた玉藻。
衣服を全て脱ぎ目の前の洗濯機の中に放り込んだあと、風呂場の扉をあけて中へとはいっていった。

第七話　『玉藻と連夜』　その４

「あ～・・やっぱりねえ・・あは、あははははは・・はぁぁ・・」

『多分そうじゃないかなぁ』と思ってはいたのだが、中に入ってみるとやはり風呂場の中はぴかぴかで、カビとか毛玉とかどこいったのよってくらい光っていた。

リビングやキッチンの様子からある程度察してはいた。

察してはいたが、ここまで完璧に整備されているとは予想だにしなかった。

『整備されている』というのは、バスルームの壁や浴槽が奇麗に磨かれているということだけではない。

ほとんど中身がなくなりかかっていたはずのシャンプーやリンスはきっちり中身が補充されているし、化粧を落とすための特殊石鹸やその他諸々全てきっちり新しいものに代わっている。

木工所の廃材で物凄くいい加減に作られたとわかるほどいびつだった風呂イスや、風呂桶も、杉の木製の新品のものに変わっているし、それぱかりか、見ただけで絶対高価だとわかる高級ボディソープとか、やたら柔らかいスポンジとかまで簡易鏡台の前にずらりと並べられている。

「いったい、あのこなんなのよ。いや、まあ、そのキライってわけじゃないし、むしろ好きだけど、いくらなんでも凄すぎるでしょ」

杉の木でできたやたら香りのいい風呂椅子に坐り込み、なんともいえない深い溜息を吐き出す玉藻。

しばし、ぼんやりと湯気の立ち上る浴槽を見つめていたが、いつまでもそうしているわけにもいかず、とりあえずのろのろと体と頭を洗う。

その際になんとなく目の前に並べてあった高級ボディソープを手に取り、ためしに使ってみることにする。
スポンジに少量含ませて身体にこすりつけてみるとやたら景気よく泡が出る。
まあ、別にそれはそれでいいかと気にせず丹念に身体をこすり、椅子と同じ杉の木でできた風呂桶で湯をすくって身体を流す。
そうして何度か身体に湯を流してきっちりボディソープを流した玉藻、なんとなく自分の肌を触ってみたあと、玉藻はその肌の感触に思わず驚きの声をあげた。

「なにこれ、すべすべ!?　しかもなんかうっすら光ってない?　高級ボディソープ恐るべし!!　ってか、いったい値段いくらするんだろ!?」

改めて今使ったボディソープの容器を手に取り、あちこちに視線を向ける。
しかし、値段らしきものは容器のどこにも書いておらず、そのことが逆にとんでもない値段であることを示していそうで怖くなり、そっと元の位置にもどす玉藻。
つくづく小市民の自分が嫌になったが、まあ、しかし、置いていたということは使ってくれということなのだろうと考えてそれ以上値段のことは考えないようにする。
もう一度、なんとも言えない溜息を吐きだし、その場で脱力。
なんだかとてつもなく疲れてしまった気がしたので、湯船に浸かってしばしリラックスすることを決める。
黄色い東方ゆずがぷかぷかと浮かぶ湯船にそっと足をつけ、ゆっくりとそのメリハリの効いた美しいスタイルの体を沈めていく玉藻。
鎖骨のあたりまで湯につかり、水面から湯気がゆっくりと上昇していくのをのんびりぼんやりと眺め続ける。
それにしてもと考えるのはあの少年のこと。

自分の寝室、、リビング、キッチン、そして風呂場。
腐海というか魔界というか、あるいはごみ屋敷というべきか。
この家に漂っていた無数の汚物をきっちり駆逐し、掃除し、整理し、整頓し、そして、再生させたのは間違いなくあの少年だろう。
恐るべき清掃能力。
いや、掃除だけではない。
リビングにきちんと畳んでおかれていた洗濯物の数々。
どれもこれも、まるで売り物のように美しく折りたたまれ、ものによってはアイロンがけまでしてあった。
そして、あの自分を惹きつけてやまないクリームシチューの匂い。
絶対に美味しい、間違いなく美味しい、一刻も早く風呂からあがってお腹一杯食べてみたいと思う、あのクリームシチュー。
掃除、洗濯、炊事。
完璧だ、完璧すぎるほど完璧だ。
と、いうか自分には逆立ちしたってできない。
一応、玉藻は家事がまったくできないわけではない。
一人暮らしが長いため、普通のご家庭の娘さんよりは家事ができるし、絶対に負けないと自負している。
昨日まで自分の家がごみ屋敷と化していたのも、ほとんど自分のせいではなく、長年の悪友のせいだし、本気になればそれなりに玉藻だって家事をこなせるのだ。
しかし、そんな玉藻でもここまではできない。
いや、恐らく何年修行してもこの域には絶対に到達できないだろう。
恐るべき家事能力だった。
そういえば、こういう家事能力に長けた『人』物が、玉藻の知り合いの中にいたような気がするのだが、はて、それは誰だったか。
湯船に顔の下半分まで浸かり、ぶくぶくと言わせながら、必死に頭の中の人名録を探る玉藻。
だが、なかなかそれに該当する人物の名前が浮かび上がってこな

い。

あの人でもない、この人でもないと、何人かの心当たりを頭の中に思い浮かべてみるが、どうしてもしっくりこない。

そうやって湯船の中に浸かりながらどれくらい考え込んでいたか。いい加減、ふやけて湯あたりしそうになるくらいの時間の果てに、ようやくあることに気がついた。

「って、よく考えたら、直接聞けばいいじゃない！」

ざばっと湯船から飛び出した玉藻は、風呂場から急いで脱衣所に出ると、いつのまにか洗濯機の上に置いてあった新しいバスタオルを手に取った。

おそらく洗濯用の洗剤の匂いと思われるいい香りがバスタオルからしてくる。

しかもふわふわで柔らかい。

なんともいえない心地よさを感じながら体を拭いた玉藻は、急いで下着とパジャマを身につけると脱衣所の扉をあけてキッチンへ。

「ちょっとそこの少年！　あなたに聞きたいことが！！」

「あ、お風呂からあがられたんですね。湯加減どうでした？　熱くなかったですか？」

「うん、全然、ちょうどよかったわよ～。って、そうじゃなくってね」

台所で用事をしながらあくまでもさわやかに、しかも温かい笑みを浮かべて話しかけてくる少年のペースにもろにはまりつつある玉藻。

それに気がついて玉藻はなんとか踏みとどまろうとするのだが、

そんな玉藻の心理状態など少年にわかろうはずもない。
少年は複雑な表情で唸り声をあげている玉藻をそこに残し、炊事で濡れてしまった手をエプロンで拭きながら、パタパタと近くにある冷凍霊蔵庫へ移動。
ドアを開けて中から何かの液体が入った瓶を取り出してくる。
鮮やかな黄金色をした液体が、細長い形の瓶の中で美しく輝いている。
少年は手にした瓶の冷たさを確認して満足そうに一つ頷いたあと、食器棚から玉藻が愛用しているグラスを迷うことなく選び出し、そこにその液体を注ぎこんで渡してきた。

「はい、どうぞ」

あまりにも邪気のない顔でわたされた玉藻は、思わず手に取ったグラスの中の液体を勢いに任せて一気に飲み干してしまう。

「ありがと。んぐんぐんぐ・・ぷはぁ・・って、うまっ!! なにこれ!? ビール!?」

「味はよく似ていますけど、ビールじゃないんですよ。ある薬草と果物を組み合わせて作った偽ビールってところでしょうか。アルコール入ってませんし、体にもいいんですよ」

「へえええええええええ、そんな飲み物あるんだ!?」

「滋養にいいペクヨンニンジンと、新陳代謝を活性化させるユグドラシルレモンを不死山の霊水に浸して作るんですけどね。もう一杯入れましょうか?」

「あ、お願い」

すっかり偽ビールが気に入ってしまった玉藻は、少年が入れてくれたグラスの中の液体を、今度は一気飲みしないでちびちびと飲む。

「いま、夕食の用意しますから、座っててください。あ、そうだ、これよかったら食べててくださいね」

と、再び霊蔵庫を開けて、中から何かが盛りつけられた皿を出して玉藻にわたす少年。

「これは？」

「前菜みたいなものです。野菜のスティックで、ニンジンみたいに見えるのがオレンジセロリ、黄色のがオリーブアスパラガス、キュウリを切ったように見えるその緑のがライムキャロットです。横に添えてある特製辛子マヨネーズをつけながら食べてください」

「ふむふむ・・おいしい！！　これ、おいしいよ！！」

「それはよかったですけど、リビングに持って行って座って食べてくださいね。すぐに、メインディッシュのほうも用意しますから」

「メインディッシュって、あの鍋の中のシチューでしょ？　美味しそうないい匂いしているわよねえ。早く食べたいなあ」

「おや、よくシチューを作っているってわかりましたね？」

「鼻には自信があるもの。あと美味しいか不味いかもわかるわよ」

「あはは、御口にあうかどうかわかりませんけど。とりあえず、リ

ビングのほうに行っててください。すぐに持って行きますね」

「は～い」

と、玉藻をリビングのほうに行くように促しておいて、自分は再び台所に立ちなにやら忙しく夕食の用意を始める。

その様子を見て自分も手伝ったほうがいいのかなあ・・なんて思ったが、どう考えても邪魔にしかならないなと思い直し、おとなしくリビング向かう玉藻。

野菜スティックの皿と、偽ビールの入ったグラスをテーブルの上に置いて、テレビをつける。

ちょうどニュースの時間だったらしく、有名芸能人の魔薬問題についての報道が流れていた。

「魔薬は怖いわねえ・・」

と、野菜スティックをぽりぽり食べながら、ニュースを見る玉藻。

もう完全にその姿は、『今日は外で食べてくるから』って旦那の連絡があって家事さぼることに決めた主婦か、仕事から帰ってきて好きな野球の中継放送をビール飲みながら見ている中年サラリーマンそのものである。

その後もほけ～っと、緊張感の欠片もない表情でくつろいでいた玉藻。

ご飯まだかな～なんて、野菜スティックをぽりぽり食べながら間抜けなことを考えていたが、唐突に我に返る。

「違うの、違うの、違うのよ、そうじゃないのよ！！」

自分の目的を思い出した玉藻は、テーブルの前から立ち上がると再びキッチンへと突撃。

相変わらず忙しそうにご飯の準備をしている少年の背後から声をかける。

「ご飯も気になるけど、もっと重要なことがあるんだってば!!ちょっと聞いてよ、ねえってば!!」

どうしようもない焦りと苛立ちが多分に含まれた声。
ご飯を食べる時にちゃんと説明する、少年はそう言っていた。
玉藻もその言葉を聞いたときには納得していたのだが、一度気になりだすとどうにも止まらなくなってしまったのだ。
今、知りたい。
どうしても知りたい。

この少年が本当は誰なのかということを。

切実な心の叫び。
玉藻に背を向けて忙しそうに食事の準備をしていた少年だったがそんな叫びに反応してぴたりと動きを止める。
そして、手にしていたお玉や、小皿をそっと炊事場の上に置くと、玉藻のほうにゆっくりと振り返った。

「あっ!!」

玉藻は、小さい叫び声をあげる。
振りかえった少年の顔。
そこに先程までの優しい笑顔はなかったから。
どこまでも虚無な白地に、黒く細い線で作られた『貌(かお)』。
そこにあったのは彼女がよく知る『貌(かお)』。
『崇(たたり)』の一文字が書かれた白い仮面。

そして、玉藻は全てを思い出す。

昨日自分に何があったのかを。

昨日自分が何をしたのかを。

「夢じゃ、なか、ったんだ」

『祟(たたり)』の一文字が書かれた白い仮面を見つめながら、茫然と呟く玉藻。

そんな玉藻の前でゆっくりと『サードテンプル』の怪『人』は身に着けた仮面を取り外し、素顔をさらす。

そこには、怪『人』本来の『顔(かお)』。

「夢じゃありませんよ。やっぱり、僕だってことに気づいていらっしゃらなかったんですね」

どこか悲しげに、そして、寂しそうに見える笑顔。

少年は、自分の右手に持つ白い仮面と、目の前に立つ玉藻とを交互に見つめ、明らかに無理しているとわかる笑顔を浮かべ、それでも口を開いた。

「ごめんなさい。騙すつもりじゃなかったんです。あの、まさかこんな展開になるとは思ってなくて。その、不愉快だったら、僕、出て行きますから」

胸が。

胸が締め付けられる。

違う、違うのだ。

こんな悲しい表情をさせたいわけではない。

すぐにでも否定の言葉を発したいのだが、驚きと切なさですぐに声が出せない。

しかも、もどかしく口を開こうとしても気の利いた言葉もみつからず、焦りばかりがどんどんつのる。

そんな玉藻の様子をどう見たのか、少年は、一瞬泣きだしそうな表情を見せたかと思うと、それを隠すように玉藻に向かってぺこっと一礼。

そのまま部屋を出て行こうと駆け出した。

そんな少年の様子を見ても情けないことに玉藻の口からは引きとめる言葉は出ないまま。

このまま行かせてしまうしかないのか。

玉藻の首から上は、自分の目の前から姿を消そうとしている少年を見つめながら、大間抜けにもぼんやりと考えるしかできなかった。

しかし、玉藻の身体はそんな情けない指令頭部とは違っていた。

頭が考え指令を出すよりも早く、己の成すべきことを果たすために行動を開始。

部屋から出て行こうとした少年の小柄な体に向けて、凄まじい勢いでダッシュをかけると、背中から強烈なタックル。

そのまま少年の身体を床に押し倒す。

もちろん、華奢な少年の身体が傷つかないように、己の身体をクッションにするように態勢を入れ替えることも忘れない。

「き、如月さん、あの」

押し倒された少年が不安そうな表情で何かを言いかける。

それに対して、玉藻も何かを答えようと頭を働かせかけたが、少年の黒い瞳にうっすら何か光る物をみつけた瞬間、思考することを

一瞬で放棄。
少年が何かをしゃべろうとする前に、自分の唇で強引に塞いでしまう。
床の上に抱きあったまま、しばし唇を重ね合う二人。
少年は、ちょっとだけ抵抗する素振りを見せたが、結局最後には玉藻に身を委ねるように力を抜いた。
その後ももう少しの間だけ、寝そべった状態で抱き合っていた二人。
もう逃げる気配がないと確信した玉藻は、ゆっくりと唇を離す。
そして、まだ不安そうな表情を浮かべている少年に、優しい笑顔を浮かべてみせながら口を開くのだった。

「私の側にいなきゃダメって言ったでしょ？　逃げちゃだめよ」

「で、ですが」

「驚いたことについては謝るわ。ほんとにごめんね。私ね、昨日の記憶がさっきまで飛んじゃっていて、あなたがあなただっていう可能性についてまるで失念しちゃっていたのよ」

「記憶が飛んでた？　ああ、やっぱりそうだったんですか。昨日から、少し混乱されていらっしゃいましたからね。今は大丈夫ですか？」

「うん、今は大丈夫よ。全部はっきり思いだしたから。でも、ああ、そうなのね。あなたってこんな『顔（かお）』していたんだ」

少年の小柄な体を抱きしめている両手のうち、左手をそっと放した玉藻は、目の前にある顔に左手を伸ばしてそっと触れる。
男の子とは思えないほどすべすべした肌、ひげは全くなくまるで

女の子よう。
　鼻も口も小さく、このまま女の子に変装しても、それほど違和感はないような気がする。
　しかし、大きな黒い瞳だけが違う。
　一見しただけでは、かわいらしい風にしか見えない眼。
　だが、その黒い瞳の奥に宿るのは強烈な意志の光。
　その光のせいで、女の子という雰囲気はまるでない。

　これが世間にその名を轟かす『サードテンプル』の怪『人』の素顔。

　ある意味、予想外。
　ある意味、想像通り。

「がっかりされたでしょ？　こんな情けない顔で」

　なんとも言えない情けなさそうな顔で聞いてくる目の前の少年に、玉藻はゆっくりと首を横に振ってみせる。

「ううん、そんなことないよ。　情けないなんてことないじゃない。それに、私は多分この顔しか好きになれないしね。きっと。他のどんな男や女の顔も好きになれないだろうって思う。『人』として好きにはなれても、『番い』としては好きにはなれない。だけど、あなたは違う。あなたが好き、あなただけが好き。この顔のあなたが好き」

　どんな相手にも見せたことがない艶やかで幸せそうな笑顔。
　少年がそんな玉藻の笑顔にぽ～～っと見とれていると、また玉藻は少年の唇に自分のそれを重ねた。
　今度はそれほど長い時間ではなかったが、唇を離したあと、狐の

顔になって少年の顔を愛おしそうに舐める。

「で？　私はどう呼べばいいのかしら？」

「え？」

「な・ま・え。あなたが私の仮面さんってことはわかったわ。でも、それだけ。まだそれだけしか知らない。私はまだまだあなたのことを知らない。とりあえず、これからあなたのことを隅々まで教えてもらわないといけないけど、まずその大いなる第一歩として、教えてちょうだい。私はあなたをなんと呼べばいいのかしら？」

少年の黒い瞳と、その周囲に滲んでいた何か丁寧に舐めとりながら、優しい口調で問いかける狐。

そんな狐の言葉に、少年は一瞬考え込む素振りをみせたが、すぐに穏やかな笑みを浮かべながら口を開いた。

「『連夜（れんや）』です。『連』なる『夜』と書いて『連夜（れんや）』」

初めて聞いた名前。

しかし、はるか昔から、ずっとずっと前からその名前を知っていたような気がする。

「連夜くん。レンヤくん、れんやくん、連夜くんかあ。いい名前だね」

声に出してみると、本当にしっくりくる名前だった。

何か、自分の身体の大事な部分にすとんと落ちておさまったような、欠けていた何かがもどってきたような、そんな感じ。

大事な何かがまた一つもどってきたような気がして、心から笑顔

を浮かべる玉藻。
　そんな玉藻の笑顔に見惚れて顔を赤らめながら、少年、いや、連夜は嬉しそうにほほ笑みを浮かべる。

「はい、ありがとうございます」

「ううん、お礼を言うのは私のほう。ずっとずっと今まで私を助けてくれてありがとう。いろいろと、本当にいろいろと私を助けてくれたよね。励ましてくれたり、危ない所を手伝ってくれたり、迷っているところを導いてくれたり、ほんとにほんとにいろいろありがとう」

「い、いえ、とんでもないです。僕こそ、昨日は危ない所をありがとうございました。流石に昨日のあれだけはどうすることもできなくて。如月さんが来てくださらなかったら、僕、本当に死んでいました」

「ああ、あれね。あれは別にいいのよ、なんでもない。これからは私が連夜くんを守るって決めたんだから。あんな腐れ外道どもの好き勝手には絶対させないから。と、いうか、あれだけ痛めつけてもまだこれ以上連夜くんに付き纏うというのなら、それなりにこっちも覚悟を決めるし」

　一瞬にして玉藻の周囲から凄まじい殺意が噴き上がる。
　それは誤魔化しようのない明確な殺意。
　言葉にしなくてもわかる。
　これ以上連夜を傷つけるようなら。

【殺す】

と。

恐らくそれは脅しでもなんでもない。

連夜ほどではないにしろ、かなり厳しい世間の中で生きてきた玉藻である。

信頼できる者はごくわずかしかおらず、それでも懸命に生きてきた玉藻。

大切な者を守るためならどんな手段も厭わないというその覚悟と決意には、大いに共感できる。

そして、それを迷わず実行するだろうということもよくわかる。

自分もまたそうであるから。

しかし、一方で、連夜の心の中には別の想いもある。

それは連夜のわがまま。

自分勝手なわがままだとわかってはいたが、それでも願わずにはいられず、連夜は玉藻の身体をそっと抱きしめて懇願する。

「如月さん、それはやめといていただけませんか？」

「なんで？」

「如月さんにはそういう世界にあまりいてほしくないです」

そう、連夜は思う、切実に思う。

汚い仕事をするのは自分だけでいい。

汚れるのは自分だけでいいのだ。

愛しい『人』は、奇麗なままで笑っていてほしいのだ。

それが連夜の願い。

しかし。

「それは聞けないし、絶対聞かない。連夜くんの気持ち、わからないでもないよ。だって、私も同じこと思ってるから。連夜くんにはできるだけそういう世界にいてほしくないってね」

「僕は如月さんとは違います。『人』の全種族の中で最底辺に位置する人間族だから。僕が生きる世界はそこにしかないから」

「うん、そうかもね。だけど、私もそこに生きるの。一緒に生きる。連夜くんが私の側にいてくれる、それはすなわち、私が連夜くんの側にいるってことだわ。連夜くんがずっと私を支えてくれたように、今度は私が連夜くんを守る。言っておくけど、否定されてもこればかりは聞かないから。私の存在意義に関わることだから。だから覚悟しておいて。私は私の大切なものを守るためなら、一切の容赦をしないってことを」

強く大きく、そして、何よりも恐ろしい殺意、害意、悪意のオーラ。

見ているだけで、感じているだけで命を奪われそうなのに、なぜこれほどまでに切なくも嬉しいのだろう。

じわりと連夜の瞳が潤んでいく。

「あ、ちょ、連夜くん、また泣いてる!!　もう、仮面かぶってるときはあれほど強いのに、どうして素顔だとそんなに涙脆いの。ほんとにもうしょうがないんだから」

めざとく連夜の涙を見つけた玉藻は、慌てて自身の発していた殺

意のオーラを引っこめて、優しくその涙を舐め取っていく。

「す、すいません、如月さん」

「謝らなくていいから、動かないでじっとしていなさい。ほんとに泣き虫さんね」

「め、女々しい性格なので」

「もうっ、そんなこと言ってないでしょ。あ、そうだ。ところで、私が下顎蹴り飛ばしてやったあいつら、結局どうなったんだろ？あいつら全員に制裁を加えてやったあと、すぐに連夜くんを抱えて『サードテンプル』を離れて、自分のマンションまで戻ってきて、連夜くんの両手両足を『療術』で治療して。そこで私の記憶は終わっているのよね。不良どもをなぎ倒したのはいいけど、救急車も何も呼ばずにあの場所を離れたからなあ。ぎりぎり手加減してやったけど、あんまりにも腹が立ったもんだから、何人かはマジで蹴りいれてやったから、ひょっとして一人くらい死んだかな」

罪悪感の欠片もない声。

むしろ、この場にいない不良達に対し、感謝しやがれといわんばかりに凄まじい怒りのこもった声で呟く狐。

そんな狐を愛しそうに見つめながら、連夜は首をゆっくりと横に振る。

「いいえ、一人も死んでいません」

「死ななかったんだ。へ～～。あいつら結構頑丈だったのね。って、なんで知ってるの？」

「僕が救急車を呼んでおきました。あと、ツテを利用してあの場で起こったことはある程度もみ消してもらっているはずなので、如月さんにご迷惑をおかけすることはないと思います」

「そうなんだ。って、『もみ消した』！？　連夜くんのツテっていったい何者なの？」

かわいらしい顔から発せられたとんでもない単語に思わず目を剥く玉藻。

しかし、玉藻の目の前の情報発生源は、相変わらずかわいらしい顔でくすくす笑うばかり。

「今は秘密です。でも、ヒントだけ言っておくと、玉藻さんが知らない『人』じゃありません」

「え？　私が知っている『人』なの？　嘘でしょっ！？　だって、あんな繁華街の中で起こった乱闘をもみ消せるっていったら、結構な権力持ってないとできないわよ？　私の知り合いにそんな権力持った『人』なんていなはずだけど。まあ、師匠のブエル教授なら中央庁に知り合いがいるだろうから、やってやれないことはないかもしれないけどさ」

「教授じゃありませんよ。まあ、そのうち会っていただくことになるでしょうから、楽しみにしていてください」

「う～～～。すっごい気になるなあ。でも、わかった。楽しみにしとく」

物凄く不満ではあったが、どうもこの件に関して、目の前の少年が口を割りそうにないことを敏感に察知した玉藻。

仕方ないという仏頂面でしぶしぶ頷きを返す。
そんな玉藻を楽しそうに笑顔で見つめる連夜。
仏頂面と笑顔。
向かい合う二つの表情だったが、結局、仏頂面は目の前の笑顔に負けて苦笑へと変わり、そして、それはすぐに満面の笑みへと変化する。
そして、二つの表情は全く同じ幸せそうな表情へと変わって行った。
しばし、二人の間を流れる穏やかな時間。
いつまでもこの時間に浸っていたい、そう願う二人であったが、ふと連夜はあることを思い出した。

「あ、そうだ」

「ん、どうしたの、連夜くん？」

「食事の用意の途中でしたよね。とりあえず、話の続きは食事しながらにしませんか。シチュー冷めちゃいますし」

「んあ！？　そうだったそうだった！！　シチュー食べたい！！」

「すぐ用意しますね、如月さん、リビングで待っててください」

ぴかぴかに磨き上げられた床から先に身体を起こした連夜が、玉藻に手を貸して起こしてやる。
そして、炊事場の蛇口をひねって手を洗いながら笑顔で玉藻に声をかけ、食事の用意を再開しはじめた。
玉藻は、連夜の後ろ姿をしばしうっとりと見つめていたが、やがて嬉しそうに一つ頷いてリビングへ向かう。
しかし、途中玉藻はあることに気がついた。

ふと立ち止まって考え込む。
そして、勢いよく振り返ると、物凄く不満そうな表情で連夜を呼ぶ。

「ちょっと連夜くん！！」

「ふぇ？　どうしました、如月さん？」

怒声に近い荒々しい不機嫌そうな声。
いったい何事かと振り返った連夜の目に、声同様に不機嫌そうな顔をした玉藻の姿が映る。
小首をかしげながら、何か自分が機嫌を損ねるようなことを言ったのだろうか。
そう思った連夜は、目の前の愛しい大切な人に問いかけようとしたのだったが、それよりも早く玉藻が自分の不満をぶちまける。

「『如月さん』じゃないでしょ！！」

「え？　え？」

玉藻の言葉の意味がわからず、頭の上にハテナマークを連発する連夜。
そんな連夜の姿に苛立ちながらも、玉藻はしょうがないなあという表情で言葉を紡ぐ。

「た・ま・も！！　ちゃんと名前で呼びなさいよ！！　なんで苗字なのよ？　連夜くんって苗字じゃないんでしょ？　名前でしょ？　なのに、私は苗字なの？」

「だ、だって、なんか馴れ馴れしいというか、無礼というか」

「物凄く距離感があるわよ。そんなに私との関係は余所余所しいの？　いやよ、そんなの！！」

ぶ～～っと盛大にむくれる玉藻の姿に、あわあわと慌てる連夜。
しかし、すぐに表情を改めると、顔を下に向けたり上に向けたりを繰り返しながら、恥ずかしそうにその言葉を口にするのだった。

「じゃ、あ、玉藻さん」

「じゃあ、はいらないでしょ」

「玉藻さん」

「名前を呼ぶだけ？」

何かを期待して懇願するようにじっと見つめてくる玉藻。
わからないふりはできなかった。
連夜は、顔を真っ赤にしながらも玉藻が待ち望んでいるであろう言葉を口にする。

「玉藻さんのことが好きです。玉藻さんだけが好きです」

「はい、よくできました。私も、私も連夜くんが好き、連夜くんだけが好き。大好きだからね」

第七話　『玉藻と連夜』　その5

城砦都市『嶺斬泊』内部に存在する五つのエリアの中で最も人口の多い中央エリア。
その中央エリアの、東の端。
閑静な住宅街の一角に一つの大きな屋敷がある。

『猫メイドさんのお屋敷』

ご近所の皆様からそう親しみを込めて呼ばれているこの屋敷には、無数とも言える『東方猫型獣人（ねこまりも）』族のメイドさんや、召使いの方々が住みこみで働いている。
三種類の毛で構成されている一般的な猫の姿のものもいれば、真っ黒な毛、あるいは真っ白な毛のもの。
モップのように毛がふさふさのもの、かと思えば逆に全く毛がないもの。
小人族よりも小さいもの、あるいは『人』の種族と大して変わらない大きさのものと実に様々。
この都市で猫型の獣人の一族は他にもいるが、『東方猫型獣人（ねこまりも）』族はこの屋敷内にしか存在しておらず、その彼らが屋敷の内外を出入りするものだから、それはもうかなり目立つ。
いや、この屋敷が目立っているのは彼らだけのせいではない。
彼らを従えている屋敷の主達も実に個性的な者達ばかりである。
一流モデルや女優なんか目じゃないほどの美貌とスタイルを誇る赤毛の中年美女を筆頭に、二十代と思われる金髪の美女に十代半ばの銀髪の美少女。
獅子の頭を持つこの都市最大最強の剣士。
実に目立つ、めちゃくちゃ目立つ。
一部、非常に地味で目立たない住人も何人か存在しているが、基

本的にこの家に出入りしている者は目立つものが多い。

そんな中、今、この屋敷の中央リビングに、この屋敷の住人ではない一人の少女の姿がある。

目立つ目立たないのどちらかで言えば、圧倒的に目立たない。

圧倒的に目立たないし、存在感もどちらかと言えば薄い。

しかし、ひとたび認知されれば、絶対に忘れることはできない容姿を彼女はしていた。

彼女を一言で現すとすれば、もうこの言葉しかありえない。

『かわいい』

それも普通にかわいいわけではない。

誰が見ても圧倒的にかわいい、めちゃくちゃかわいい、すんごくかわいい姿をしていた。

『人』型種族、『獣』型種族問わず、彼女を見た者のほとんどが彼女のかわいらしさに魅了されるであろう。

小さな顔の大半を占める大きく黒い瞳。

顔の下半分には形が非常によいが、ちんまりした口に、ちんまりした鼻。

瞳と同じ色をした艶やかで腰まである長い髪。

ある理由から本名を名乗ることを許されなくなった不運な少女。
彼女が現在名乗っている仮の名は『龍乃宮（りゅうのみや）　瑞姫（みずき）』。

この屋敷の住人の一人である『宿難（すくな）　連夜（れんや）』と同じ都市立御稜高校に通う同じクラスのクラスメイト。
そして、彼の幼馴染にしてかけがえのないの『友達』の一人。

その彼女は、現在、その『友達』の家のリビングで、難しい顔をしながら同じ場所をいったりきたりしている。
両腕を組み、かわいらしい顔をしかめっつらにして歪め、何十分もそうして往復運動繰り返し続けていた。
時折、立ち止まって何かを考え込む素振りを見せるのだが、そのたびに溜息を吐きだしてはまた往復運動にもどる。
そして、ときどき歩きながら同じようなことを呟くのだ。

「連夜ったら、結局朝になっても帰ってこなかった。どうしたんだろ、何かあったんじゃないかな。大丈夫かな。携帯念話に念話してみようかな。でも、なんか恩人の方の看病しているとかいっていたし、もしまだ看病しているんだったら、邪魔になっちゃうし。でも、心配だな。はふ～」

悩ましげに呟く。

そして、また往復運動。

周囲には彼女の頼れる世話役達が控え、彼女の行動を見守っているのだが、誰もその行動を止めようとはしない。
と、いうのも、彼女のその行動の意味をみんなよくわかっているからである。
わかっているからこそ、止められないのだ。

止めたところで、それは一時的なもので、下手に止めるとどういう行動にでるかわからない。
それがよくわかっているから、声をかけられずにいた。

「な、なあ、はるか。もうそろそろあんた、姫様を止めて～な。昨日はわたしら、ここに泊めてもらってしもて、えらい迷惑かけてしもてるねんで。その上、三食きっちりいただいてしもうてるし、また今晩も泊るんか？　ええ加減帰らんとまずいで、ほんま」

世話役筆頭である、下級龍族の少女『東雲（しののめ）　ミナホ』が、隣に立つ同僚に声をかける。

「私が言っても聞いてくださらないわよ。それにあなただってよく知ってるでしょ？　宿難さんが絡むと完全に自分を見失ってしまわれるから、下手なこと言うと何をしでかすかわからないんだもの」

九人の世話役の中で最も頭がよく、チームの参謀役になっている中級龍族の少女『水池（みずち）　はるか』だったが、こればかりはどうしようもないと大げさに肩をすくめてみせる。

「ほんま困ったもんやで。恋は盲目っていうけど、姫様の場合、目だけじゃなくて、耳も鼻もやし、それに頭までバカになってしまうから、始末に悪いねんなあ」

「そうねえ。宿難くんが絡まないとほんとに聞きわけがよくて、頭の回転も速い方なんだけどねえ。あ～あ、学校さぼっちゃったわね、私達」

「まあ、そこは別にええねんけどな。どうせ、『セカンド』様は姫様にこっぴどくやられて本家でダウン中。一週間は起き上がられへ

んやろう。『ソード　ｔｙｐｅ２』は行方不明になってるっていうしな。それよりも問題は姫様や。あれをほんまにどうにかせえへんと、まずいで」

「ほんとにねえ、一途なんだけど、妙に依怙地になってるというか」

「自分が宿難はんにめちゃくちゃ恋しているってことを自覚してないしなあ」

「友情だとか思ってますしね。そうそう、姫様が宿難くんを見る目、ミナホ見たことがあります？」

「あるある。授業中といわず、休み時間といわず、目から熱光線（ブラスター）発射されてもおかしないくらい、めっさ熱い視線注いでいるやろ？」

「あれ、ご自分では気がつかれていないって思ってるみたいですわ」

「え、うそやろ！？　あれだけ露骨にモーションかけとるくせに、気がつかれていないとか思っとるんかいな！？　周囲からみたらバレバレやし、宿難はん本人も完全に気がついてるやん。姫様、どんだけ残念やねんな」

「ほんとにね～。うちの姫様は、そういうところがかわいいというか。小学生でももうちょっと進んだ恋愛すると思うんだけど」

「まあ、『セカンド』様とか、『ソード　ｔｙｐｅ２』とかは気がついてないみたいやけどな」

「だって、二人とも元が姫様ですもの。そういう残念なところは余すところなく引き継がれているみたいですしね」

そう呟きながらちらっと視線を自分達の主のほうへと向けるミナホとはるか。

しかし、肝心の二人の主は、相変わらず溜息を吐きだしながら、同じところをぐるぐる回り続けている。

結構大きな声でしゃべっていたのであるが、全然二人の会話を聞いていなかったのか、見事なまでにスルーである。

顔を見合せた二人は、自分達の主以上に深く大きな溜息を吐きだした。

「あか～ん。今回のはかなり重症や」

「いつもでしたら、これだけこきおろしたらすぐに聞きつけて、『言いたい放題言ってるんじゃありません！！』とか言って怒鳴りつけてくるのに」

「ほんまに宿難はんのことが心配なんやなあ」

「ほんと、いじらしいですわね。ですが、こんな状態じゃあ、何を言っても耳に入らないでしょう」

彼女達の主がこうなってしまっているのには勿論理由がある。

この屋敷の住人の一人である『宿難（すくな）　連夜（れんや）』。

瑞姫にとってかけがえのない、絶対に失いたくないと思っている大事な大事な『友達』。

ちょっと変わったところがあるが、都市立御稜高校に通う地味な高校二年生。

全種族の中の底辺に位置する人間族に生まれ、何の特殊能力もなく、身体能力も下の上といったところ。

目立つところといえば、たくさんの種族の者達から嫌われ差別されていることだろうか。
それ以外には目立つところは何もない。
むしろ、嫌われているからこそ、極力関わりたくないとばかりに普通は無視され、空気のように扱われる。
だが、そんな彼にはもう一つの顔がある。
この都市最大の歓楽街『サードテンプル』に暗躍する謎の怪『人』。

『崇鴉（たたりがらす）』

心弱くとも必死に懸命に生きる者達の悲しみと優しさに満ちた『悪』の夜空に哭く鳥。
良くも悪くもその名は『サードテンプル』の裏街に響き渡っており、だからこそ彼の敵は多い。

彼に痛い目にあわされたもの、彼を倒して名を上げようというもの、純粋に戦いを楽しみたいもの、その目的は実に様々。
だが、彼を倒した者はいまだ誰一人としていない。
様々な技術技能知識を会得した彼は、それらを存分に振って並みいる強豪達を次々と返り討ちにしてきたのだ。

上級種族が持つ特殊能力も、超人的な身体能力も彼にはない。
しかし、どんなハプニングに見舞われようと生き残る術を、負けない術を、彼は誰よりも熟知していた。
それは人間族という理由だけで幼い頃から嫌われ差別されひどいめにあわされてきた彼だからこそ身につけることができたスキル。
多少腕がたつというくらいでは、『崇鴉（たたりがらす）』を倒すことは不可能なのだ。

だから今回も彼は多少のハプニングが起こっても問題ないと思っていたのだろう。

それは間違いなく・・

油断だったに違いない。

今回彼に襲いかかった敵は、これまでの敵とは少しばかり違っていた。

高校生にしてすでにその名を轟かしている若き『害獣』ハンター。
中学時代に付近一帯の不良達の頂点に君臨していたという伝説の女王。
そして、下級種族を虫けらのように扱う最悪な外道集団。

いち早く友の危機を知った瑞姫は、仲間達と共に現場に急行し彼に襲いかかろうとしていた集団を抑えることに成功した。
成功したのだが、それは結局一部でしかなかったのだ。
彼女達が一つの集団を相手にしている間に、肝心のカラスは別の集団に拉致されてしまう。

必死になって攫われた彼を探す瑞姫達。
しかし、彼の行方は一向に掴めなかった。
正直、もうだめだ、間に合わない、彼はすでにこの世にはいない。
瑞姫は何度もそう思った。

だが、彼は生きていた。
生きていたのだ。

何者かの手で救いだされ、事なきを得たという。
そのことは彼自身が念話をかけてきて話してくれた。
無事だという。
大丈夫だという。
心配ないという。
その言葉にほっと安堵の息を吐きだした。
よかった、本当によかった。
瑞姫は本当に心からそう思った。
だが。
そのあと彼はすぐには帰ってこれない、このままでは帰れないと告げた。
彼を救ってくれた恩人の体調が優れないので、帰らず看病するという。
瑞姫が知る『宿難（すくな）　連夜（れんや）』という少年は実に義理堅く、心優しい性格をしている。
もし、彼の言葉が本当ならば、自分の命の恩人を放り出して自分だけ帰ってくるなんてことは絶対にできないし、しないだろう。
だから、彼の行動はよくわかる。
きっと恩人の体調がばっちり治るまでつきっきりで看病するに違いない。

それはきっと大変なことだろう。
しかし、彼ならばきっとやり遂げるし、大丈夫。
彼が下手な医者なんかよりもはるかに医術に長けていることは、瑞姫自身よ～くわかっていた。

だから大丈夫なのだ。
きっと大丈夫なのだ。
間違いなく大丈夫なのだ。

今回の事件はこれで終わり。
万が一の為にと、彼の屋敷に仲間達と集まりいつでも出撃できる状態で待機していたが、もう必要はない。
速やかに撤退し、また明日から平凡だが平和な学校生活にもどるのだ。

そうしようと思っていた。

連夜が帰らないと言い出すまでは。

連夜の為に集まっていた何人かの仲間達は連夜の念話の後、すぐに帰宅していった。
彼女の部下である世話役の何人かも家に帰した。

だが、彼女は帰らなかった。

どうしても納得することができなかったのだ。
何故かはわからない。
何故かはわからないが、妙に胸騒ぎがするのだった。
連夜の念話を受けてからこっち、胸騒ぎが止まらない。
止まらないどころか、その胸騒ぎは時間が立つにつれてどんどん

大きくなっていく。

結局昨日はこの家の主の一人であり、彼女の武術の師である連夜の母親の好意に甘え、残った一部の部下達と共にこの屋敷に泊まらせてもらった。

日向の匂いのする実にふかふかで気持のいいベッド。

彼女のことを本当の家族同然に思ってくれているこの家の住人達が用意してくれた寝床。

彼女がこの屋敷に泊まるときには、いつもすぐ横には彼女の幼馴染がいた。

そして、彼の健やかな寝息を子守唄にして彼女は眠るのだ。

だが。

今日、ここに彼はいない。

優しい連夜。

辛い時も悲しいときも、嬉しいときも楽しいときも一緒にいてくれる実の兄弟よりも兄弟らしい大事な『友達』。

彼女の大切な『人』。

それがいない、いつもの場所にいない、彼の部屋のどこにもいない。

彼女が眠る部屋は彼の部屋だというのに、その主がここにいない。

彼女は一睡もできなかった。

一睡もできないまま朝になった。

寝不足でとんでもなく不細工になってしまった顔。

それをよく自覚してはいたが気にしてはいられなかった。

学校に行く時間が迫る。

それもよく自覚していたが気にしてはいられなかった。

待てど暮らせど連夜は帰ってこない。
学校をさぼってまでも彼の帰りを待ち続けたが、昼を過ぎても彼は帰ってこなかった。
これぱかりは気にせずにはいられなかった。

大いに気になる、めちゃくちゃ気になる、いてもたってもいられないくらい気になって気になって仕方ない。
自分と一緒にこの屋敷に残ってくれた部下達がしきりに自分を心配している。
それはよくわかっていた。
わかっていたが、そちらを気にかけている余裕がいまの瑞姫にはなかった。
それどころか、際限なく湧き上がってくる苛立ちを抑え、意味なく喚き散らさないでいることに全力を傾けなくてはならないほど、今の瑞姫は追い詰められていた。

なんだかわからない。
なんだかわからないが、猛烈に、強烈に、激烈に嫌な予感がする。

瑞姫の大事な大切な何かが、今この瞬間、誰かにめちゃくちゃに汚されている気がしてならない。

そして、それは彼女の大事な大切な『友達』に直結している気がしてならないのだ。

いったい今日何度吐きだしたかわからない溜息を吐きだした瑞姫は、今にも泣きだしそうな表情でリビングに置かれているかわいらしいピンクの念話に視線を向ける。
待ってみる、しばらく待ってみる。

お昼はとうの昔に過ぎ去り、リビングの窓の外はうっすらと赤く染まっている。
そろそろ時刻は夕刻。
もういい加減帰って来てもいいのではないだろうか。
あるいはなんらかの連絡があってもいいのではないだろうか。
そう期待しながら念話を見つめ続ける瑞姫。

しかし、念話は一向に鳴らない。

瑞姫は小さな手でぐしぐしと自分の目元を拭い、再び往復運動を繰り返そうとした。

だが、今日何十回と延々と繰り返されたそれは、ある人物によってついに終止符を打たれることになった。

横合いから伸ばされた白く美しい腕が、彼女の小さな体をすくい上げてその動きを止めたのだ。
一瞬自分がどうされたのかわからなかった瑞姫であったが、すぐに気がつくと、のろのろと瑞姫は自分を抱き上げた人物に視線を向ける
そこには燃えるような赤毛をした美貌の魔人の姿があった。

「ろ、老師」

「ひ～こちゃん、なんて顔をしているの。もう、ほんとにしょうのない子ね」

なんとも深く優しい笑顔を瑞姫に向ける魔人。
彼女の武術の老師であり、この家の主の伴侶たるドナ・スクナーは、自分の小さな弟子を大きな胸の中に抱きしめる。

そして、涙でぐしゃぐしゃになった彼女の顔をその指先でそっと拭ってやるのだった。

「だってだって」

「だってだってじゃありませんよ。女の子がそんな顔してちゃだめ。女の子はね、どんなときでも笑顔がデフォルトなのよ」

「でもでも」

「だっても、でももないの。　ほらほら、泣かない泣かない。ひ～こちゃんこんなにかわいいのに、涙と鼻水で全部台無しになっちゃってるわよ」

拭っても拭ってもあとからあとから姫子の目と鼻から大量に湧いてきて流れ出す涙と鼻水を、困ったように見つめる美貌の魔『人』。

「ひ～こちゃん、朝からず～っと、そうしてるの？」

「ご、ごめんなさい。お暇しないといけないってわかってるんですけど」

「いいのよ、いいのよ。前にも言ったけど、ここはもうひ～こちゃんの家なんだからね。無理して龍乃宮の借家に帰らなくていいのよ。いつまでもいてくれていいんだけど、私が言いたいのはそっちじゃなくて、朝からずっと念話の前に張りついているのかってこと」

「そ、それは」

敬愛してやまない老師の問いかけに対し、胸の中の瑞姫は返事を

することができず、顔を下に向けてもじもじと身体をゆらし続けるだけ。

「もう〜、やっぱりそうなのね。心配し過ぎよ、ひ〜こちゃん。うちのレンちゃんは、確かに強烈に意地っ張りで痩せ我慢大好きだけど、大丈夫じゃないときに大丈夫って言ったりはしないわ。あの子が大丈夫って言ったんだから、本当に大丈夫なのよ。あなただってよく知ってるでしょ？」

抱き上げた瑞姫の小さな小さな体を、よしよしと優しく撫ぜて慰めてやりながら穏やかな声で話しかけるドナ。

しかし、瑞姫の表情は一向に晴れない。

その様子に気がついたドナが瑞姫の顔を覗きこみ、無言でその真意を問いかけると、瑞姫は一旦視線を慌てて逸らしてみせる。

しばし、師弟の間で流れる静寂の時。

しかし、結局、弟子のほうが根負けし、視線を師匠のほうへと戻したのだった。

「命の危険はない。それについては私も老師と同じ考えです」

「でしょ？　だったら心配しなくても」

「でも、胸騒ぎが止まらないんです！！　何かが。何かわからないけど、連夜に何か起こってるんです。大変な、重大な、一生に関わるような、そんな何かが！！」

「え？　え？　何それ？　大変で、重大で、レンちゃんの一生に関わるようなって、何？　例えばどんなこと？」

これまで一度として見たことがない悲痛で必死な形相。

そんな表情で訴えかけてくる瑞姫の姿を呆気に取られて見つめるドナ。

しかし、その言葉の内容が全く理解できず、ただただ困惑するしかできない。

「わかりません、うまく説明できないんです。こうなんていうか、自分の感情が制御できないというか」

「どういうふうに？」

「胸の奥がキリキリ痛むというか、モヤモヤが止まらないというか」

「ふむふむ」

「お腹のちょっと下のほうがズキズキ痛むというか、熱くなってたまらないというか」

「ほむほむ」

「連夜のことを考えるだけでイライラして、怒りと不安で押しつぶされそうになるというか。そう、なんか私の大切なものが誰かにめちゃくちゃに汚されている、今この瞬間も、誰かが我がもの顔で私の大切なものを汚している感じがするというか、うがあああああっ！！」

「ちょ、ひ～こちゃん、落ち着きなさいってば！！」

突如暴れ出した瑞姫を、慌てて押さえてどうどうと宥めるドナ。

幸い、瑞姫はすぐに我に返っておとなしくなったが、今度は前以上の激しさで泣きだしてしまう。

「うわ〜〜ん、老師ぃ〜〜!!　連夜が心配ですぅ〜〜!!　連夜が帰ってこないですぅ〜〜!!　私、わたし、どうしたらいいんですかぁ〜〜!!」

「どうしたらって、う〜〜ん。なんていうか、ほんとひ〜こちゃんは恋する乙女なのねえ。そこまでレンちゃんのこと好きだったのか。これはおばさん、予想外だったなあ」

自分の豊満な胸の中で、泣きじゃくり続ける小さな小さな弟子の背中を優しく撫ぜ続けるドナ。

幼い頃から自分の息子と一緒に育ってきた小さな女の子。

子犬同士がじゃれあうような仲で、いつまでもそういう仲のままなのではないかとずっと思っていた。

しかし、いつしか片方はだんだん片方を異性として意識しはじめ、もう片方は全く意識しないまま時はすぎ、二人は大きく成長した。

一人は実子、一人は弟子。

だが、ドナにとってはどちらも大事な自分の子供なのだ。

二人ともに幸せになってほしいと切に願うが、さて。

困ったように溜息を吐きだし、なんとアドバイスしたものかと悩んでいると、不意に胸の中の小さな弟子が顔をあげた。

なんだかそこには、妙に固い決意と覚悟の光が見える。

いやな予感がした。

「ど、どうしたの、ひ〜こちゃん」

「老師、私、やっぱり連夜を迎えに行ってきます」

「あらそう?　って、えええっ!?　どこに?　どうやって?　ひ〜こちゃん、レンちゃんがいる場所なんて知らないでしょ!?」

流石のドナも弟子の突拍子もない宣言に目を剥く。
しかし、肝心の弟子はなんだか妙に血走った目で不敵な笑みを浮かべて見せていたが、不意にビシッとリビングのすみっこを指さして見せるのだった。
そこには、二人の世話役の姿が。
いきなり自分達に話を振られることになってしまい、困惑して慌て始めるはるかとミナホ。

「な、な、いきなりなんですの、姫様!?」

「なんやの、なんやの、姫様!?」

「はるか、ミナホ」

「「は、はい?」」

「連夜を超特急で探してきて」

「「はあっ!?」」

いきなりのムチャ振りに、仰天して目を剥く二人。

「いきなり何言い出すねん、姫様!!　そんなことできるわけないやんか!!」

「え〜、だって、こういうとき東方野伏(ニンジャ)みたいに、シュバッって姿を消して、その後、また私の背後にもどってきて『姫様、連夜殿の居場所を突きとめましてござる』って言うんじゃないの?」

「どこのニンジャムービーですか!?　胡散臭(うさんくさ)!!　物凄い、胡散臭(うさん くさい)です!!」

「じゃあ、もういいわよ、自分で探すから」

「自分で探すって、どうやって!?」

「わ、私と連夜は固い絆で結ばれているから、きっとわかる」

「根拠全然あらへんやん!!　あかんて、絶対あかんてば!!」

「あ～、もう、どうしてこういうところはちっとも成長しないのかしら。ほんと疲れる子ねえ」

　このあとしばらく、単独で連夜を探しに行くと言ってきかない瑞姫を説得するために、屋敷中が大騒ぎとなり、結局、瑞姫達はこの日も泊ることになってしまった。

第七話　『玉藻と連夜』　その６（前書き）

とりあえず、一旦推敲終了です。
お騒がせいたしました。

第七話　『玉藻と連夜』　その6

目の前のテーブルに並べられていくのは今日の夕食の数々。
おいしそうな匂いをさせているクリームシチュー。
外側は明らかにサクサクしていそうにみえるクロワッサン。
そして、ポテトサラダの入った皿が手際よく並べられていく。
その様子をそわそわしながら見つめ続ける玉藻。

もういいかな？　もう食べてもいいかな？

そんな雰囲気を全身から発している玉藻の姿に気がついた連夜は、
優しい笑顔を浮かべながらこっくりと頷いてみせる。

「冷めないうちに食べてくださいね」

「え、あ、うん、じゃあ、いただきます」

待ちきれないという風にスプーンとフォークをとった玉藻は早速
メインディッシュのクリームシチューに手を伸ばす。
大きなシチュー皿に盛り付けられたクリームシチューにスプーン
を突っ込み、大きくすくって食べようとする玉藻。
しかし、あることに気がついて掬いあげようとしたスプーンを止
める。
よくよくシチューの中身を観察して見るとなんだかちょっと普通
のクリームシチューとは違うような。

「これって・・鮭？」

ちょいちょいとシチューの中をかきわけてみると、クリームシチ

ューの入ったシチュー皿のど真ん中に、鮭と思われる魚の大きな切り身が鎮座していた。

「そうです。別でムニエルした鮭の切り身です。一緒に煮込んだわけじゃありませんから、身はぐずぐずになってないはずです。ナイフとフォークでお好きな大きさに身を切っていただいて、シチューと一緒に口に入れてくださいね」

横で甲斐甲斐しく給仕をしてくれている連夜のほうに一瞬目と耳を向けた後、もう一度シチューへと視線をもどす。

とりあえず、説明通りに早速やってみることにする。

皿の中の鮭の切り身を大きめに切りとり、スプーンになみなみとすくたシチューと一緒に口の中へ。

シチューのほんのりした甘さと、鮭の控え目な塩味が絶妙にあいまって口の中いっぱいに広がる。

「美味しい!!　ほんと美味しい!!　こんなの外の店でも食べたことないわよ!!」

絶対美味しいとはわかってはいても、実際に食べてみて実感する美味しさは別のもの。

正直、かなり感動してしまう味だった。

鮭のムニエルはバターベースのようだが、シチューと一緒に食べることでまた違った趣があり、シチューの味がしっかり強調してありつつもそれで鮭の風味を損なうこともなく見事に協調しあっていた。

また、しっかり煮込んであると思われるのに、じゃがいもは全然荷崩れしておらずほくほくで、それとは逆に人参はとろけるようにやわらかくなっている。

どうやったらこんな風に調理できるのか皆目見当もつかないほど

高度な技術で作られていることは、いくら素人の玉藻にだって容易にわかる。
全然しつこくないし優しい味のせいかいくらでもお腹に入っていく。
夢中になって食べ続け、気がつくと三杯もおかわりし（四杯目はさすがに体に悪いと止められてしまった。）クロワッサンもポテトサラダもきれいにたいらげてしまっていた。

「ふ〜、おいしかったぁ。御馳走様」

すっかり膨れて大きくなったお腹をぽんぽんと叩きながら、行儀悪く後ろにのけぞって座る玉藻。
その姿に若干の苦笑を向けつつ、連夜は空になった皿を手際よく片づけて立ちあがる。

「いえいえ、お粗末様でした。じゃあ、食後のデザートとコーヒーを取ってきますね」

「は〜い」

空になった皿を手早く引き揚げるのと入れ替えに、連夜は今度はデザートの入ったガラスの器と淹れたてのコーヒーの入ったマグカップをテーブルの上に並べる。
玉藻がガラスの器をみると、中にはちょっと黄色の濃いいプリンらしきデザートが入っていた。

「なんか色が濃いいわね、このプリン」

「あ、わかりましたか。それ普通の卵から作ったプリンじゃないんですよ」

「？」

「シャンファ烏骨鶏っていう品種が産んだ卵なんです。普通の鶏の卵と見た目はよく似てはいるんですけど、普通のものよりもはるかに栄養価が高いんですよね。味は濃厚なんですが、調理の仕方によっては非常にあっさりした味に変わるんです。体が弱っているときにはちょうどいいかと思いまして」

少年の言葉にふむふむとうなずきながらスプーンですくって一口入れてみる。

「あま～～～い！！　ってか、あれ！？　すぐ甘さが消えちゃうよ！　なにこれ、うま！！　甘いのがしつこく口の中に残らない！！　けど、あまい！うまい！！」

と、あまりの美味しさに夢中で食べてしまい、あっというまになくなってしまった。

想像以上に美味しかったため、味を楽しむという考えを完全に忘れてしまっ故の大失敗だった。

空になったガラスの器を悲しそうにみつめ、そのあと少年のほうを捨てられた子犬のようなまなざしでみつめる玉藻。

「あはは、わかりました。まだありますよ」

「やったーー！」

再びプリンをゲットして喜ぶ玉藻。

今度はすぐ食べてしまわないようにちょっとずつ味わいながら食べる。

「う〜ん・・不思議だわ。すごく甘くかんじるのに全然厭味な味じゃないわねえ・・ひょっとして、かけてあるキャラメルソースにヒントがあるのかしら・・」

などと、ちょっと真剣にプリンを考察してみる玉藻。
そんな風に子供みたいに目をキラキラさせながらプリンを見つめる玉藻の姿を、連夜はなんともいえない優しく穏やかな、しかし、実に幸せそうな表情で見つめ続ける。

何度も心の中で思う。
夢ではないのか。
目の前で起きているもの、目にしている全ては夢ではないのかと。
自分の願望が見せている、夢。
本当の自分はまだ、あの廃ビルにいるのではないか。
そして、あの狂い牛の剣で胸を貫かれ瀕死の状態にあるのではないか。
今、目の前にあるものは全て、死の直前にある自分がこの世で見る最後の幻影。

だが、別の自分が即座にその考えを否定する。

違う。
それは違う。
目の前にあるのは紛れもない現実。

この世界の最底辺にある人間という種族に生まれ落ちた自分。
幼き頃から厳しい現実に翻弄されてきた、激しい差別に晒されてきた、何度も何度も死ぬような目にあってきた。
だが、そんな中でも彼は生き残ってきた、懸命に全力で必死にな

って生き残ってきたのだ。
連夜が潜り抜けてきた危険の中には、一瞬の現実逃避すら許されない過酷なものが何度もあった。
そんな連夜が、例え死の間際であったとしてもこのような穏やかで平和な幻をみるであろうか。
答えはわかりきっている。
否だ。
恐ろしく諦めの悪い性格、最後の最後の最後まで生にしがみつこうとするいぎたない魂。
それが自分、宿難（すくな）　連夜（れんや）なのだ。
見るとしても、それは死の向こうにある生にしがみつくための何か。
こんな穏やかな光景では間違ってもない。
死にさらされるたび、絶対絶命に陥るたび、実際に彼の脳裏に走ったのは、彼の前を通り過ぎていったたくさんの人達の姿。
思いだすたびに涙が止まらなくなる。
そんな亡き人達が、彼が窮地に陥るたびに現れて彼を励ます。
そんな幻は何度もみた。
だが。
そんな幻は見ても、このような安らぎに満ちた幸せな幻影は見たことがない。
だからこそ、これは幻ではない。
だからこそ、これは現実なのだ。

だからこそ、連夜は思う。

まさかこんな日が来るとは、正直夢にも思っていなかったと。

確信すればするほど、どうしようもなくいろいろなものが胸に込み上げてくる。

連夜は、半ば諦めていたのだ。

一番欲しい人の心を手に入れることを。

諦めの悪い自分が、どうしても諦めざるを得なかった。

そんな状況に彼を追い込んだのは他ならぬ彼の実姉ミネルヴァ。

姉ミネルヴァに自分の想いを知られたあの日。

玉藻の親友にして、連夜の姉ミネルヴァは、連夜にこう言い続けてきた。

しつこくしつこく。

何度も何度も。

『玉藻は男アレルギーで男が大嫌いなんだから、絶対に近づいちゃだめよ。連夜はそんなことしないと思うけど、『ミネルヴァの弟』ですなんてこと言って無理に近づこうとかしないでね。あの子、男に近づかれるだけで体調崩すんだから！！』

絶対、嘘だ。

嘘に間違いない。

しかし。

嘘だとは思ったが、本当だった場合、取り返しのつかないことになるかもしれない。

アレルギーは馬鹿にできない。
アレルギー体質の『人』は原因となる要因によって、心臓発作を起こしたりもするのだ。
もし自分のせいでそんなことになったら、もし自分のせいで玉藻の身体に異変が生じたら、そして、もし自分のせいで玉藻の命が危険にさらわれたら。

耐えられない、それだけは耐えることができない。

だから仮面をつけたのだ。

だから性別を隠したのだ。

例え、自分がどこの誰ともわからずともいい、それでもそばにいたかった。
その声を聞いていたかった、その笑顔を見ていたかった。
諦めきれない自分の最後の抵抗。

側にいるだけ、ただ、それだけでよかった。

だけど、まさか、こんな風に自分の想いが通じる日がこようとは。

連夜は目の前の愛しい人の姿を見つめる。

やはり。
やはり姉の言っていたことはウソだったのだ。
全然、大丈夫だ。
それどころか、その、目の前の愛しい人は自分に対して妙に、というか、めちゃくちゃ、というか、壮絶に積極的に迫ってくる。

やっぱり、これは夢じゃないのかと思ってしまうが、自分の唇に残る温かく柔らかい感触がその想いを木端微塵に粉砕する。
思い出しただけで顔から火が噴き出しそうだ。

万感の思い。
温かいいくつもの感情が溢れ出して止まらない。
ふと気がつくと、瞳が潤みかかっていることに気がついた。
幸い、目の前の愛しい人は、プリンを食べることに夢中で気がついていない。
連夜は愛しい人に背を向けてそっと立ち上がる。

「玉藻さん、ちょっと失礼します。僕、台所で洗い物してきますね」

「あ、うん、いってらっしゃ・・って、いや、ちょっと待った!!」

流れそうになっている涙を誤魔化すためにそそくさとその場を立ち去ろうとした連夜。
しかし、その連夜の背中に凄まじい勢いで玉藻が迫る。
連夜がその気配に気がついたそのときには、あっというまに連夜の身体は横抱きにされて持ち上げられていた。
そして、何事が起こったかわからず、ぽか〜んとしている間にその身体は運ばれて、玉藻が座っていたテーブルの前へと移動。
再び気がついたそのときには、連夜は玉藻の膝の上に横抱きにされた状態で座らせられ、目の前には狐になった玉藻の顔が迫っていた。

「え?　え?　玉藻さん?」

「いいから。何も言わなくていいから」

困惑して問いかける連夜を黙らせるように、玉藻は連夜の潤んだ瞳とその周りを優しく舐めとっていく。

少年が流そうとしていたものが、悲しみの涙ではないとはわかっていた。

何故かはわからないが、それはわかっていた。

だけど、泣いている。

悲しみの涙ではなくとも、涙を流している。

それがわかってしまったからには放っておけなかったし、放っておく気はさらさらなかった。

彼が傷つく姿を見るのが嫌だ、見たくない、出来る限り傷ついてほしくない。

昨日の夜、今にも死にそうなほど傷ついてぼろぼろの姿になった彼を見たとき、息が詰まって本当に心臓が止まりそうになった。

あのとき心が引き裂かれるということがどういうことか、嫌というほど思い知らされた。

もう、二度とあんな想いをしたくない。

だから、守ると誓ったのだ。

この少年の身体も、そして、心も守ると。

そのためならどんなことだってできるし、どんなことだってする。

ただ、心を癒し守るといっても、玉藻にはそれほど選択肢があるわけではなかった。

どうやれば少年の心を癒せるのか、ほとんど何も思いつかない。

しかし、幸いにも、自分は『女』で、腕の中の恋人は『男』である。

『女』として『男』を慰めることはできるはず。

この世に生まれおちてから二十年。
そういう経験は一度たりともなかったが、なぜか自分の深い記憶の奥底にそれらの記憶がばっちりと残っているのがわかった。
これは自分の中に現れた、もう一人の自分を名乗る者の記憶だろうか。
そのもう一人の自分は、今、自分の腕の中にいる恋人とよく似た・・いや、そっくりな少年と深く愛を営んでいた。
正直、見ているだけで恥ずかしくなる記憶の数々。
普段の生活の中で思い出してしまっていたら、間違いなく大いに取り乱してしまっていたに違いない。
しかし、今日、この場合だけは非常にありがたかった。
全然、全く、これっぽっちもそういう経験がなかった自分に、どうすればいいのか、どうするべきなのかを自然と身体が思いだし始める。
これならなんとかできる。
そう確信した玉藻の黄金の瞳がゆっくりと赤く染まっていく。
玉藻はその舌をゆっくりと顔から首筋に、そして、はだけたシャツから見える胸元に這わせていく。
「え？　た、玉藻さん？」
おとなしくされるがままになっていた連夜は、自分の周囲に漂い始めた妙なピンク色の気配に気がついた。
膝の上に乗っていたはずの身体は、いつのまにか完全にカーペットの上に押し倒されている。
いや、それどころか、着ていた蒼いシャツははぎとられ、下に着ているTシャツは半分脱がされて腹部が全開。
いくら恋愛ごとに鈍感極まりない連夜でも、これがいったいどう

いう状況かくらいはわかる。
『男』の自分が押し倒されているのは非常に情けないとは思ったが、玉藻の性格から考えれば自分達の場合はむしろこれが普通なのかもしれない。

小さい頃から憧れていた強くて奇麗なお姉ちゃん。
最愛の人。
そのかけがえのない女性から求められている。

連夜の脳裏に、理性とか欲望とか、道徳とか好奇心とか、これからの二人の未来とか、今この瞬間の二人の気持ちとか、それはもう様々な考えが浮かんでは消え、消えてはまた浮かび半ばパニック状態になりそうになった。
もう、このまま流されようか。
自分の上に覆いかぶさってきている、この恐ろしくも美しく、厳しくも非常に優しい狐のことが大好きだった。
その最愛の狐が身体ごと想いをぶつけている。
受け入れればいい。

そう思って身体の力を抜きかけた連夜だったが。
突然、あることを思い出して真っ青になる。

まずかった。
非常に不味い状況だった。
思いだしてしまった以上このまま流されるわけにはいかなかった。

彼女の身体が今どういう状況にあるのか、完全に完璧に把握した連夜は、悲鳴交じりの声で絶叫する。

「玉藻さん、ちょっと、待った待った、待ってぇっ！！」

「無理」

「無理じゃないでしょ！！　あんっ、どこ、舐めて、あ、いや、そんなとこ、ちょ、と、ともかくすとっぷ、すとっぷぅぅぅっ！！」

「玉藻は急に止まれない」

「何でですか！？　車じゃないんですから、止めてくださいってば！！　ず、ズボン脱がしちゃらめぇえっ！！　ってか、なんでそんなに服脱がすのに手慣れているんですか！？」

「失敬ね。服を脱がすのに手慣れているわけじゃないわよ。連夜くんを裸にするのに慣れているだけ」

「あ、な～んだ、そっか。それならしょうがないなぁ、って、なんで僕限定なんですか！？　そもそもいつ慣れたんですか！？」

「生まれる前に何度も実戦していたから。もう免許皆伝よ」

「すごいや、玉藻さん、いや～、生まれる前かあ。それなら、僕に覚えがないのは当然だよね。って、意味わかりませんよ！！　どんないいわけですか！？　ちょっ、いやっ、玉藻さん、お尻はダメ！！」

「連夜くんのお尻桃みたい」

「だからって、かじらないでください！！　舐めないでください！！　揉まないでください！！」

「もう、なんなの、なんなの、なんなのよ、いったい！！　じゃあ、どこならかじってもいいのよ！？　舐めてもいいのよ！？　揉んでもいいのよ！？」

「今日はダメです！！　どこもダメです！！　ダメったらダメなんです！！」

「じゃあ、もういいや。めんどくさいから全身隈なくフルコースでいっとく」

「きゃ～～！！　人の話、全然聞いてな～い！！」

もう、ほとんど全裸に近い状態になりつつある連夜であったが、持てる力の全力を振り絞って抵抗する。

正直、種族の能力差で本気になれば強引に事に及ぶことは十分可能であったが、あまりにも嫌がる連夜の姿に流石の玉藻も一時中断。

物凄い不機嫌極まる表情を浮かべ、血走った瞳をギロリと真下に組み敷いた連夜へと向ける。

「どうして！？　どうして止めるわけ？　ここは流されないとダメな状況でしょ！？」

「何でですか、流されちゃだめなんですってば！！　危なかった、本当に雰囲気に流されてしまうところでしたよ、雰囲気こわっ！！」

「なんで？　なんで流されちゃ駄目なの！？　連夜くん、ひょっとして私のこと嫌いなの？」

「違います違います。玉藻さんのことは好きです、本気で愛しています。僕だってできることなら、そういうことしたいです」

「じゃあ、いいじゃない」

「全然いいことないんですって！！　今日はダメです、絶対ダメです！！」

「だ～か～ら～、なんでダメなの？　ひょっとして連夜くんは『結婚するまでは清い関係でいよう』の『人』？」

「いえ、家の両親も正式に結婚して夫婦になるずいぶん前からすでにそういう関係だったそうなので、僕としてはあまりこだわりませんが」

「じゃあ、あれ？　今日告白したばかりなのに、そういう関係にまで発展するのはちょっととってこと？　確かに告白したのは今日だし、あなたの素顔を見たのも今日が初めてだけど、付き合いとしては一年以上あるわけだから、知らない関係ってわけでもないでしょ？」

「いや実際にはそれ以上の関係なので、それについても別に忌避感はありません」

「じゃあ、何が気に入らないのよ？」

「玉藻さんの体調のことですよ」

「私の体調？」

全然予想していなかった答えを聞いて、玉藻はきょとんとした表情で小首を傾げて見せる。

そんな玉藻の姿を見た連夜は、なんとも言えない深い溜息を吐き

だしてみせたが、どこか諦めたような苦笑を浮かべるとゆっくりと口を開いて説明を始めるのだった。

「玉藻さん、霊力覚醒のせいで、【過邪（かぜ）】を引き起こしていた状態だったでしょ」

「うん、そうみたいね。でも、今はかなり調子いいわよ」

そういって、連夜の身体の上でえいやと正拳突きを繰り出し、自分の身体の快調ぶりをアピールする玉藻。

「ええ、そうですね。熱も下がったようですし、食欲もあるようですし、ほとんど治ったとみて間違いないと思います」

「でしょ～。別に体調悪くないわよ、むしろ絶好調に近いというか」

「ええ、そこが問題なんですよ」

元気元気と両腕でかわいく力瘤を作ってみせる玉藻だったが、その姿を見た連夜はむしろ眉をしかめる。

「絶好調なのが問題なの？」

「霊力のオーバーヒートが納まって、今、玉藻さんの体内の霊力は非常に安定した状態にあります。それに伴い、霊力は以前よりも増加し、その増加した霊力は崩していた体調を元に戻すべく、物凄い勢いでフル回転し始めている真っ最中です」

「いいことじゃない。何が問題なの？」

連夜の言葉の意味がわからずますます首を傾げていく玉藻。
それに反比例するように連夜の顔はだんだん険しくなっていく。

「良すぎるんですよ。体調を良くするのは非常にいいことです。いいことなんですが、その。ある一部の機能も活性化させてしまうんです」

「一部の機能って？」

「まあ、その、つまり、男性の僕としては非常にいいにくいんですけど」

何故か顔を赤らめ言葉を濁す連夜。
その後もなかなか続きを話そうとしなかったが、玉藻に促されて渋々口を開いた。

「いいから、言ってみてよ。別に怒ったりしないから」

「わかりました。その、ズバリ言うと」

「ズバリ言うと？」

「『子宮』です」

「『子宮』？」

「文字どおり赤ちゃんを作る機能が、玉藻さんの体内で絶賛フル稼働中なわけです。もし、今、玉藻さんとその、あれがあれで、ああなっちゃうようなことを、何の回避策もしないままにしちゃうと、ほぼ間違いなく僕と玉藻さんの間に新しい命が誕生してしまうわけ

です」

赤面しながら説明を終えた連夜は、なんとも疲れ果てたという表情で『はふ～』と大きな溜息を吐きだす。

しかし、その衝撃の説明内容を聞いていた玉藻はというと。

「ふ～～ん」

わかっているのかわかっていないのか、ほけ～～っとした表情で生返事を返す玉藻。

「『ふ～～ん』って、リアクションうすっ！！」

「だって、他の『人』ならともかくあなたとの子供なわけでしょ？別にいいわよ。それくらい覚悟の上で関係を持とうとしているわけだし」

「覚悟を決めるのが早すぎます！！」

すかさずツッコミを入れる連夜であったが、何故かこのとき玉藻の表情はこれまでのおちゃらけたものではなく、その瞳には妙に真剣な色が浮かび上がっていた。

それに気がついた連夜は、玉藻の身体の下から心配そうにその顔を覗き込む。

すると、玉藻は慌てたように一瞬その顔を逸らしかけたが、何か決意したように再び顔を連夜のほうに向け直した。

「玉藻さん？」

「連夜くんさ。ちょっと私の話を聞いてくれる？」

「あ、はい。なんでしょう」

「私の、私の家族の話。いや、そうじゃないわね、血のつながりがあるだけの一族の、私が生まれた一族の話」

第七話　『玉藻と連夜』　その7

たくさんの子供達がいた。
玉藻の周囲には実にたくさんの子供達がいた。
死んだ魚のような目をした生きているのか死んでいるのかわからない子供達が。

霊狐の里に生まれついた子供達。
彼らは生まれてからすぐ、特殊な洗脳呪術を施される。
自らの意思を奪われ、機械として生きる運命を押し付けられる。
彼らは一生を機械として生きる。
霊薬を作るためだけの機械として。
一族の頂点に立ち権力を握る一部の腐った老人達のために。
彼らの大事な大事な金蔓として生きるのだ。

「世間から完全に隔離された世界。出口のない監獄。あそこに生まれるということは、地獄に生まれるということだったわ」

そう、玉藻はそんな場所に生まれてしまったのだ。
誰も助けてはくれない。
周りは全て敵。

権力を握る里の老人達以外は全て老人の操り人形という異様な世界。
大人達は子供達を生み、育て、働かせ、そして監視するための機械。
子供達はただひたすらに霊薬を作るための道具。
一般社会にある『人』の営みは何一つとして存在しない。
夢も、希望も、友情も、愛も、何もかもが存在しない灰色の世界。

ここに生きる者達は、ただ生きているだけ。
老人達に贅沢をさせるために生きているだけ。
金を産み出す作業を延々と繰り返すために生きているだけ。
ただそれだけ。

「でも、私は違った。なぜそう生まれついてしまったのかわからないけど、私は機械にはなれなかった。老人や大人達は何度も何度も私を機械にしようと躍起になったけど、結局は、無駄だった」

そして、やがて老人達は玉藻を機械にすることを諦める。
自分達の意のままにならぬ子供など欠陥品でしかなく、本来なら処分の対象。
しかし、幸か不幸か、玉藻には霊薬を作る才能があった。
それも希少価値の高い特殊な霊薬を作り出す才能が。
老人達は欲に目がくらみ、玉藻を活かしておくことにした。

機械仕掛けの世界で来る日も来る日も玉藻は霊薬を作り続けた。
他の子供達とは違い、自らの意思を持つ玉藻。
彼女にとってはその毎日は拷問以外のなにものでもなかったが、それでも玉藻は耐え続けた。

いつか。
いつか必ずこの地獄から脱出するチャンスが来ると。
その日まで決して諦めないと固く心に誓って玉藻は耐え続けた。

そして、その日がついに訪れる。

支配者たる老人達の直系の孫の中に、いずれその支配権を受け継ぐために教育されている霊狐の若者達がいる。

自分達の血を色濃く受け継ぐ、たったそれだけの理由で洗脳を免れた者達。
老人達に次いで優雅で贅沢な生活を送る者達。

その中に一人、老人達の暴政に心を痛める女性の姿があった。
彼女は現在里に敷かれている非人道的なあまりにもひどい老人達の横暴に深い怒りと悲しみを感じてはいたが、たった一人ではどうすることもできず、流されるままに生活を送っていた。
だが、そんな彼女は、ある日玉藻という存在を知る。
老人達の洗脳を受け付けない、特殊な子供の存在を。
彼女がそのとき何を思い、具体的にどう動いてくれたのか、玉藻は知らない。
しかし、玉藻と彼女が出会った翌日から、玉藻の生きる環境が急激に変化をはじめる。

彼女が選んだ他の何人かの子供達と共に、玉藻は里から離れた場所で暮らすことになった。

そして・・
里の外に出て、都市にある学校に通うことになった。
学校でミネルヴァという親友に出会うことになった。
里で一緒に暮らす子供達に徐々に意志の光が戻りはじめ、晴美という小さな少女が大切な妹となった。
それ以降、たくさんの出会いが続いた。
辛くて苦しくて、今思い出しても涙が止まらない別れもあったが、それ以上に続くたくさんの出会いの果てに、ついに玉藻は本当の自由を獲得する。

「ああ、ごめんね、結局何が言いたいのかってことなんだけど、私ね、家族ってものに強い憧れがあるんだ。今まで話してきたとおり、

私の一族ってほんとろくでもない奴ばっかだったのよ。この都市の中じゃ至極当たり前な家庭の風景ってやつなんか、どこにもない世界だったわ。だから、最初、この都市に来た当初はね、家族なんて上辺だけのうすっぺらなもので、自分には必要ないなんて思っていたのよねえ」

そう言ってほろ苦い表情でかすかに笑って見せる玉藻。

「今は、違うんですか？」

「うん。違う。違うってことを見せつけられたから」

「見せつけられた？　誰にですか？」

かわいらしく小首を傾げながら問いかける連夜。

相変わらず玉藻に組み敷かれカーペットの上に横になったままではあったが、その視線は真剣そのもの。

妙にいじらしいというか愛おしいというかかわいらしいというか、そんな連夜の姿になんだか胸がもやもやっとしてきた玉藻は、離して持ち上げていた身体を再び連夜の身体に密着させて上からきゅっと抱きしめる。

「た、玉藻さん？」

「ちょっと待って、今、心を落ち着かせるから」

「え？　え？　むぐっ」

そして、何度も軽く唇を重ね、連夜の細い首筋やうなじや耳の裏側にまで唇を押しつけたあと、ようやく心が落ち着いたのか、顔を

ちょっとだけ離す。
下には目を白黒させて困惑している連夜の姿。
なんだかそういう姿もかわいらしくて、またもやもやしてきたが、なんとなく次に同じことをすると、それだけで済みそうになかったので残念ではあったが一時中断。
再び言葉を紡ぐことにする。

「えへへ。ごめんね、話中断しちゃって」

「いえ、いいですけど。それで、誰に家族ってものが上辺だけのものじゃないって教えてもらったんですか？」

「そうだ、そうだ。その話だったね。私の親友にね、ミネルヴァって奴がいるじゃない。もうほんとうるさくて騒がしくて自分勝手で目立ちたがりでお祭り好きでお節介焼きのどうしようもないやつなんだけどさ」

「あはは、確かに」

「あいつの家ってさ、結構な金持ちなんだよね。大きな屋敷でさ、使用人さん達もたくさん住みこみで働いているし、親父さんは何をやってるのかいまいち知らないんだけど、お母さんはなんか中央庁の御偉いさんらしいんだ。多分、それでお金持ってるのかなあって思うんだけど。いや、そこは別にどうでもいいのよ。そうじゃなくてさ、あいつって、ド派手なんだけど、金持ち臭がしないんだよね。妙に庶民じみているというか。あれだけの金持ちで、使用人さん達もたくさんいたら普通もっとお嬢様お嬢様していそうなもんなんだけど、全然そんなことないんだよね。何度か家に遊びにいったことあるけど、まあ、驚いたわ。私がもってる金持ちのイメージってさ、家族全員、お互いに無関心で、家に帰っても会話なんか全然なくて

痛いような無音の空間が広がってるみたいな。そんな感じだったんだけど」

「違ったんですか？」

「違った違った。学校でハジケテル普段のあいつと変わらないのよ。いや、学校以上に家の中ではハジケテテさ。お兄ちゃんとは喧嘩する、妹とも喧嘩する、お母さんには豪快に怒られて、お父さんに慰められる。いや、もう、あいつもそうだけど、あいつの家族もすごいのよね。見ているだけで、こっちも楽しくなるというか。ぎゃ～ぎゃ～わ～わ～、それはもう賑やかなのよ。いついっても賑やかで華やかで、自然な笑いに満ちあふれてて。あとからあいつに聞いた話なんだけど、最初から大きな屋敷に住んでいたわけじゃないんだって。普通のマンションに住んでて、使用人さん達もいなかったって。ごく普通の家庭だったそうなんだけどね。なんかいつのまにかこうなってたって言っていたなあ。あ、いかん、話がそれた。ともかく、私が抱いていた家族っていうものと全然イメージが違っていたの。なんかあの空間を見せつけられたときは、もうあまりのショックでなんだかわからなくなっちゃっていたんだけど。今、冷静になって思い出してみるとさ、きっとね、そのときの私の心の中で一番大きかったのは、『羨ましい』っていう気持ちだったと思うんだ」

懐かしそうに楽しそうに、でも、寂しそうに、そして、本人の言う通り、心底うらやましそうに語る玉藻。

「だからね、私ももし家族を作るなら、あんな家族を作りたい。ううん、絶対いつかあんな家族を作ってみせるって、いつしか思うようになっていったの。賑やかで華やかで、それでいつも笑い声が聞こえるような、そんな家族。作りたいんだ、自分の手で。幸い私は『女』で、自分の力で家族を生み出すことができる。相手さえ選り

好みしなければすぐにでも家族は増やせる。でもねえ、誰でもっていうのは絶対いや。というか、私が心から認める『番い』と家族を作りたいのよ。ここまで言って、『わからない』とか言ったら力いっぱいぶつからね」

おどけたような口調で話しかけているはいるものの、玉藻の目は真剣そのもの。

勿論、それがわからない連夜ではないし、その気持ちを茶化したりするはずもない。

玉藻に負けないくらい真剣な表情で頷きを返す連夜。

「わかりますよ。僕だって一番好きな『人』と自分の家族を作りたいですもん」

気持のこもった言葉。

それを聞いて満足そうに笑みを浮かべた玉藻は、連夜の頬に自分の唇を軽く押しつけてから、また話を再開する。

「好きな『人』の子供を産みたい。私が心から好きで愛することができる『人』の子供が産みたいの。そして、その子に私が与えられなかったものを与えてあげたい。だから、もしも、あなたとの間に新しい命を授かることになったとしたら、私は迷わず産むわ。子供を産み育てることがどれだけ大変なことか、実際に経験したことないから偉そうなことといえないけど、でも、そうしたいのよ。それが私の夢の一つ」

先程までの鮮血のような赤い瞳ではない。

満月のような黄金の瞳をきらきらと輝かせながら、穏やかな表情で言葉をゆっくりと紡ぎ出す玉藻。

連夜はそんな玉藻の姿をしばらく眩しそうに見詰めていたが、そ

の後、困ったような表情を浮かび上がらせる。

「玉藻さんのお気持ちはよくわかりましたし、その覚悟も、軽い気持ちじゃないってこともわかりました」

「よかった。じゃあ、私を受け入れてくれるよね」

連夜の言葉に歓喜の表情を浮かべる玉藻。

しかし、次の瞬間、連夜の口からはその表情を木っ端微塵にする言葉が飛び出すのだった。

「でも、ダメです。やっぱり今日は本当にダメです」

「そっかあ、ダメかあ、じゃあ、しょうがないよね。って、なんでやねん!!　なんでなんでなのよ、ちょっとぉ!?」

まさか拒絶されるとは思っていなかったので、あやうく聞き流して納得しかける玉藻。

寸でのところで気がついて猛然と連夜に食って掛かる。

「どういうこと？　やっぱり私のことが嫌いなの？　それとも、私のどこかに不満があるとか？　いや、確かに私は家庭的じゃないかもしれないわよ。あなたほど家事はできないし、家の中をごみ屋敷にしちゃうし、がさつだし、乱暴者だし、ちっとも女らしくないし、連夜くんのこと自分から押し倒しちゃうし、うう、よく考えたら私ちっともいいところないじゃない」

「いやいやいや、そんなことないですって。玉藻さんは綺麗だし優しいし頭もいいし、僕には勿体無いくらい素晴らしい女性ですよ」

「じゃあ、なんで拒否するのよ!?　文句ないのなら、拒否したりしないでしょ？　やっぱり私に原因が」

「違います。そうじゃないんです。玉藻さんのことが理由じゃないんです。僕が理由なんです。僕自身が原因なんですよ」

体を激しく揺らしながら泣き叫ぶ玉藻。

しかし、連夜がぽつりと呟いた言葉を耳にして、暴れるのをピタリとやめる。

「連夜くんが、原因？」

「そうです。正確には僕にはまだ、新しい命を迎えるだけの覚悟も自信もないんです」

玉藻がきょとんとした表情で問い掛けると、連夜は沈痛な表情で頷きを返した。

自信も覚悟もない。

不安げな表情と共に発せられたその言葉は、恐らくまぎれもなく彼の正直な気持ち。

その言葉を聞いて、玉藻はすぐになるほどと納得する。

考えてみれば当たり前の話なのである。

自分が押し倒している少年は、どうみてもまだ高校生くらい。

中学生ではないとは思うが、かといって自分と同じかそれ以上には決して見えない。

外見と裏腹に、非常に大人びてしっかりした考え方の持ち主の連

夜。

仮面を被って正体を隠していたときにあった、玉藻を包み込むような大きくも優しく温かい雰囲気。

それは仮面を外したあとも変わることなく彼の周囲に残っていて、だからこそ、ついつい忘れてしまっていたのだが・・

彼はまだ未成年なのだ。

その彼に新しい命の責任を取れといっても戸惑うのは至極当然のことである。

自分も今年二十歳になったばかりの小娘であるが、歩んできた人生がまるで違うのであるから、自分にあてはめてその考え、責任、覚悟を押し付けるのははた迷惑な話であるに違いない。

やはり事を急ぎすぎたのだと、玉藻は猛省する。

子供が欲しいというのは嘘ではない。

嘘ではないが、しかし。

目の前にいる最愛の少年を自分の側に繋ぎ止めておくために、鎖として利用しようとしていなかったかと誰かに問い掛けられていたら。

その問い掛けに対し、完全に否定してみせることはできなかっただろう。

「ごめんね、連夜くん。私、焦りすぎた。連夜くんってまだ高校生くらいだよね？　それなのに新しい命はまだ早いよね」

玉藻は押し倒していた半裸の連夜の体を引っ張って起き上がらせると、そっとその体を抱きしめる。

しかし、玉藻の言葉を聞いていた連夜は、その腕からそっと抜け出してゆっくりと首を横に振ってみせるのだった。

「あ、れ、高校生じゃないの？」

「いえ、そうじゃないんです。確かに僕は高校生です。高校生ではありますが、幼い頃から父の農業を手伝っていまして、これでもある程度収入があるんです。今すぐ、玉藻さんと結婚して一人くらい子供を作ったとしても十分養っていける自信もあります。玉藻さんが産んでくださる子供が間違いなく霊狐族であるわかっているのなら、僕は抵抗したりしませんでした。むしろ、いますぐにでもその子に会いたいですし、この手で育ててあげたいです」

「え？　じゃあ、何が問題なの？　ごめん、あなたが何を心配しているのかが、全くわからない」

「僕が、僕が心配して恐れているのは」

「恐れているのは？」

「生まれてきた子供が、僕と同じ人間族だった場合です」

まるで血を吐くような、苦渋に満ちた表情。
本当に心配し恐れているとわかる。
それは表情ばかりではない、玉藻が抱きしめるその小さな体は、小刻みに震えていた。

「連夜くん」

「すいません、無様な姿を見せてしまって。ですが、それが本音な

んです。霊狐族の玉藻さんには理解しがたいでしょうけど、人間族は本当にひどい差別に晒されています。この都市の条例では一応そういった差別行為を行うことは厳禁となっています。罰則も厳しいので他の都市に比べれば格段にそういう風潮はゆるいのですが、それでもエリアによっては未だに人間族に公然と差別は行われています。そして、他の都市になるともっとひどい場所がたくさんあるんです。僕はそういった場所を同じ人間族である父と一緒に旅して回って、自分の目と耳で確認してきました」

玉藻の腕の中でどこか遠くを見つめる連夜。

念気蛍光灯の明かりの下にいるというのに、とてつもなく暗い影が少年の表情を覆い隠す。

その表情を見ているのが非常に辛くて苦しくて、玉藻は思わず連夜の震える体を強く抱きしめる。

「連夜くん、もういいよ。辛かったらそれ以上話さなくてもいい。だいたいわかったから、それ以上はもう」

自分の頬を連夜のそれに慰めるように擦り付けるが、連夜は再びゆっくりと首を横にふる。

「大丈夫ですよ、玉藻さん。それにあと少しだけ玉藻さんに話しておきたいことがあるんです。ですからもうちょっとだけ僕の話につきあっていただけますか？」

「う、うん、いくらでも付き合うわよぅ。でも、本当に無理しちゃや～よ」

「はい、大丈夫です。えっと、いろいろな場所で人間族は差別されているってところからでしたね。僕は幼い頃から父に連れられて本

当にいろいろなところにいきました。といっても、世界全土というわけじゃないんですが、それでも相当な距離を歩いたと思います。少なくとも三十を越える都市を巡り歩きました」

「そ、そんなに！？」

「ええ。ですから小学校低学年のときはほとんど学校に行かなかったです。ちゃんと落ち着いて学校に行くようになったのは五年生を越えてからだったかな。友達は片手で数えられるほどしかいなかったです。でも、辛くはなかった。いろいろな場所に行って、いろいろな『人』に会い、いろいろなことを学びました。都市に入っただけで投獄されそうになったこともありましたし、その都市の住人全体から汚い言葉で罵られたこともあります。物を投げつけられたこと、騙されたこと、死にそうな目にもあったこと、本当にいろいろなことがあって、思い返すとよく今まで五体満足でいることができたなってつくづく思います。でも、辛いことばかりだったわけじゃありません。本当に親切な『人』達と出会ったこともありました。他では絶対に見られないような不思議なものや、美しいものもこの目でみました。美味しい食べ物をみつけたり、珍しい動物に出会ったり。他では絶対に修得できないような技術や技能や知識を教えてもらったこともあります。それらは学校では決して学べないこと、体験できないことばかりで、父には本当に感謝しているんです」

「そう、連夜くんのお父さんは本当に凄い『人』なのね。そして、連夜くんはそんなお父さんが大好きなんだ」

「はい、この世で最も尊敬している『人』で、生涯最大最高の師匠と思っています。そんな父が側にいてくれたから、今の僕があります。これだけ厳しい世界の中で、生き残る為の術や心構えの全ては、全部父が僕に与えてくれたものです。逆に言えば、父がいなければ

僕は今、この場にいなかったでしょう」

途中まで目を輝かせながら話を続けていた連夜であったが、急にその光は力を失い、言葉に力が無くなる。

「もし、仮に僕に人間の子供ができたとして、父と同じようなことが果たして僕にできるでしょうか。危ないところを助けてあげられるでしょうか、力を貸してあげられるでしょうか、生き残る術や心構えを教えてあげられるでしょうか。正直、全く自信がありません。父はとても偉大な『人』です。はっきり言って僕があと十年必死に修行したとしても、到底辿りつけないような高みにいる『人』です。それはよくわかっているんです。僕は僕で、父は父なんだって。僕は僕のやり方、生き方で進んでいくしかない。よくわかっているんですけどね」

そう言ってなんともいえない自嘲に満ちた表情を浮かべる連夜。

流石の玉藻も、そんな連夜に対してかける言葉がみつからなかった。

慰めてどうこうなる問題ではないのだ。

これは、連夜自身が乗り越えないといけない問題で、玉藻が手を貸すことは許されない。

いや、恋人として、いずれ彼の伴侶となるものとして、この問題は連夜だけのものでは決してない。

彼が親になるということは即ち、玉藻自身も親になるということだ。

厳しい差別に晒される人間族の子供の親になるということなのだ。

同じ人間族だからという理由だけで、彼に子供を押し付けて任せ、守らせるなんてことが許されるわけがない。

ましてや、自分にそんなことができるわけがない。

玉藻は心を引き締めると同時にその表情も引き締め、自分の腕の

中で苦悩する最愛の『人』に視線を向ける。

「連夜くん。連夜くんの話はよくわかった。私ね、あなたとこういう関係になれたことにすっかり浮かれてしまって、あなたが抱えている問題のことなんか、これっぽっちも考えていなかったわ。本当にごめんなさい。でもね、今の話を聞いて、私も考えるって約束する。あなたと一緒にこのことについて真剣に考えるって約束するわ」

「玉藻さん」

深い想いと力強い意志が感じられる言葉。

その言葉を聞いた連夜の瞳が思わず潤みかける。

そんな連夜の姿を優しい表情で見つめていた玉藻は、再びその身体を強く抱きしめる。

「いろいろ一緒に考えて、乗り越えていこうね、連夜くん」

「はい、よろしくお願いいたします」

「うん、こちらこそよろしくね。あ、そうだ」

「なんですか？」

「できるだけ考えるつもりだけど、私って超バカだから、す～ぐ忘れちゃうのよね。で、うっかり忘れたまま、新しい家族が誕生しちゃうようなことになったりなんかしちゃったりしたら、そのときはごめんしてね」

てへっとかわいらしく笑いながら、こつんと自分の頭に拳を乗せる玉藻。

しかし、その言葉を聞いた連夜の顔はみるみる青ざめて行く。

「ちょっと待ってくださいよ、玉藻さん。ごめんしてねって以前にですね、新しい家族ができるような行為をしなければ、そういう失敗はありえないと思うんですが」

「ごめん。多分、答えが出るまで理性がもたないから」

「ぐ、具体的に言うと、あとどれくらい、もちそうですか？」

「う～んと、三秒？」

「きゃあああああああっ！！」

第七話　『玉藻と連夜』　その８

キッチンのほうからは洗い物をしている少年の気配と匂いが漂ってくる。

もう絶対に忘れないし、間違うことがない気配と匂い。

自分の身体に存分に刻みこんで覚えさせ、どんなにその姿が変わってしまっても、誰の目にもわからなくても、自分にだけは絶対に絶対にぜ～ったいに誤魔化せない気配と匂い。

しばらくその気配と匂いを、目をつぶって感じ続け、ぶれることがないことを確認し続ける。

大丈夫、死の間際にあって意識が混濁した状態であっても、これだけは見分けられる。

そう心から確信した玉藻はようやく目を開けると、気配と匂いがする方向に改めて視線を向け直した。

視線を向けた方向には、忙しそうに炊事場で皿を洗っている少年の後ろ姿。

身につけた衣服の上からではあるが、全体的に華奢な感じがするものの、男性特有の少し角ばった線と少年特有の緩い曲線とが絶妙なバランスを醸し出している。

特に後ろから抱き締めてしまいたい小さな背中と、きゅっとしまったウエストのあたりがなんともいえない色気があり、それが玉藻にはなんともたまらないのだ。

たまらないというか、我慢できないというか。

玉藻は、くたっと床の上にうつ伏せになると、爛々と眼を光らせてターゲットとなる部分に注視する。

そして、まるで蛇のような動きで身体全体を左右に揺らしながら、床の上を滑るように移動。
凄まじい勢いで獲物へと近づいた玉藻は、あと少しというところで空中へジャンプ。
そのまま、獲物の、いや、連夜のお尻に後ろから組みついた。
「ああん、連夜くん、連夜くん、連夜きゅ～～ん！！」
「ちょ、玉藻さん、もうっ！！　なにやってるんですか！？」
危うく手にしていた皿を落としそうになった連夜であったが、間一髪なんとかその場に踏みとどまり、急いで皿を食器念動乾燥機の中へと避難させる。
大事な皿を守りきったことに、ほっとした表情を浮かべる連夜。
しかし、それも束の間のこと、腰にしがみついてきた甘えたがりの恋人が、これでもかこれでもかとばかりに連夜のぷくっとしたお尻にその顔を押し付け、今まで以上にぶんぶんと連夜の身体を振り回し始める。
「大好き、大好き、大好き～～ん！！」
「大好きはわかりましたけど、まだ洗い物途中なんですから、邪魔しないでくださいってば！！」
「洗い物？　もうやぁねぇ、連夜くんったら。ちゃんとさっき洗ってあげたじゃない」
連夜の言葉の意味をどう捉えたのか、玉藻は何故か顔を赤らめてしきりに『いやんいやん』と身体をくねらせる。
一瞬どういう意味ですかと問い掛けそうになる連夜。

だが、連夜が問いかけるよりも早く、玉藻はとんでもないことを自ら口走りはじめるのだった。

「私の血と汗と何かで汚れちゃった連夜くんの身体はぁ～、私がさっきぃ～、お風呂に一緒に入ってきれいきれいにしてあげたじゃないのよぅ。もう忘れちゃったのん？　しょうがない『人』ねぇ」

「そっかぁ、そういえばそうでしたねぇ・・って、なんてこと口にしているんですか、玉藻さん！！」

玉藻が口にしようとしていることがなんなのかを完全に理解した連夜。

顔を熟したトマトのように真っ赤にしながら、あわわと両手を振り回して慌て始める。

「『なんてこと』って、いやあねぇ、連夜くんたら、照れちゃって。だって、私と連夜くんはぁ～、ついさっきぃ～」

初々しい様子で照れまくる連夜の様子を見た玉藻は、とてつもなく嬉しそうに連夜の腰をさらに強く抱きしめる。

そして、その柔らかいお尻に頬を押し付けたまま、うっとりと自分達が先程まで行っていたある行為についての感想を口にしようとしたのであるが。

「うわあああああっ！！　ちょっ、何を口にしようとしているんですか、玉藻さん！！　そういうことは口にしちゃ駄目です、絶対にダメ！！」

「え～、いいじゃない別に。私と連夜くんしかこのお家にはいないわけだし。誰も聞いていないんだから、私と連夜くんがさっき人生

で初めて」

「きゃあああああっ!!　も、もう、その話はいいんですっ!!　おしまい!!　僕が言ってるのは夕食の後片付けの最中だから邪魔しないでって言ってるんです。玉藻さんが口にしようとしている行為とは一切関係ありません!!」

「関係ないことはないでしょ。だって、連夜くんの後片付けがこんなに遅くなっちゃったのは、私と連夜くんがさっきまで、リビングの床の上や御布団の中とかお風呂場で」

「ぐ、具体的に話さなくていいんです!!　ってか、絶対余所でそんなこと話さないでくださいね!!」

「そんなぁ～。さっきの連夜くん、すっごいかわいかったのに。私の腕の中で必死に声を押し殺してしがみついてくる連夜くんの姿が、もうたまらんというか、あれだけでご飯三杯はいけるというか。ほんとにかわいかったのっ!!　あれが世間一般でいうところの『萌える』ってことなのね!!　連夜くんのあの姿について誰かに話したい、めっちゃ話したい。でも、逆に私の胸の中にだけ納めて私だけの秘密にもしたいし。ねぇねぇ、連夜くんはどっちがいいと思う？」

「にゃ、にゃあああああっ!!　何言ってるんですか、何言ってるんですか!!　そ、そんなこと知りません!!」

真剣極まりない表情でとんでもない質問を連夜にぶつけてみる玉藻。

すると連夜は、怒りと羞恥心と果てしない照れくささで極限まで真っ赤になった顔をぷいっと玉藻から逸らしてしまう。

そして、明らかにぷりぷりと怒った様子を再び炊事場に向かい、先ほどとは打って変わって荒々しい手つきで洗い物を再開し始めるのだった。

「もうもうも〜〜〜っ、もういいです！！　僕後片付けの続きしますから、玉藻さんはリビングに戻ってテレビでも見ててください！！」

自分の腰にがっちりとしがみつき、上目づかいで見つめてくる玉藻。

「やだ〜、一人でテレビ見てるの寂しいもん。ねぇねぇ、連夜くん、もう邪魔しないから、ここにいてもいいでしょ〜？」

痛いほど視線を感じてはいたものの、しばらく連夜は玉藻を放置して洗い物に専念。

しかし、何度も何度も玉藻がしつこく懇願してくるものだから、やがて諦めたように視線を足もとに座り込む玉藻のほうへと向ける。

横目でじろりと一瞥。

必要以上にうるうるとした瞳で連夜を見つめる玉藻。

両者によって交わされる静かだが、激しい無言の攻防。

しかし、この戦いの結末はわかりきっていた。

この二人がこういう戦いを始めた場合、絶対に結末が変わることはないのだ。

予想通りに敗者となった連夜は、深い溜息を吐きだしたあと、ゆっくりと頷く。

「本当に邪魔しないでくださいね」

「えへへ、は〜い」

連夜の言質をとった玉藻は、嬉しそうにパタパタと三本の尻尾を振りながら満面の笑顔で再び連夜のお尻に顔を押し付ける。

連夜は、玉藻のそんな姿に対し、もう少しお小言を言おうかなと思ったが、なんともいえない幸せいっぱいな表情の玉藻の顔を見ていると、何も言う気がなくなってしまう。

結局、苦笑を浮かべただけで再び口を開こうとはせず、連夜はまた洗い物を再開する。

静かな。

とても静かで穏やかな時間。

蛇口から出る水の音と、その水が食器を洗いながす音だけが緩やかに流れて行く。

二人とも何もしゃべらない。

一言も口をきかない。

しかし、それは冷めきった感情の果てに生まれる沈黙ではない。

お互いがお互いを感じている、感じることができる空気、空間がここにはある。

だから、今、言葉は必要ない。

玉藻は、抱き締めた愛しい人の身体から伝わってくる大きな優しさを。

連夜は、幼い頃から憧れ続け、ついにその心を手に入れた最愛の人がすぐ側にいてくれることを。

そんなことを無心に感じながら、温かな空気の中に浸り続ける。

どれくらいの時をそうしていただろうか。

そろそろ夕食の洗い物の終わりが見えてきた頃。

連夜が、すべての食器を乾燥機に放り込み、スイッチを入れようとしていたまさにそんなとき、玉藻が沈黙を破ってぽつりと呟いた。

「ねぇ、連夜くん」

「なんですか？」

「怒ってる？」

恐る恐るといった感じ。

そして、物凄く聞きにくそうな声。

誰がどう聞いても短すぎて、内容がはっきりとわかりにくい問いかけ。

しかし、その質問に対し、連夜は『何をですか？』とは聞き返さなかった。

かすかに苦笑を浮かべて見せはしたが、すぐにいつもの優しい笑顔になって首を横に振りながら乾燥機のスイッチを入れる。

「別に怒ってませんよ」

「ほんとに？」

「本当ですよ」

「絶対に？」

「怒ってませんて」

「ご、ごめんね」

力ない謝罪の言葉。

ふと足元に視線を向け直すと、連夜の視界にはへにょっと垂れた三本のふさふさした尻尾。

連夜はそのまま屈みこむと、三本のうちの一本を手に取って優しく撫ぜる。

ふわふわの黄金の獣毛に包まれ太く見える狐の尻尾。

一見大きく見えるが、実は獣毛を取り除くとかなり細長くなっていて、しかも軽い。

「この尻尾って、【過邪（かぜ）】の影響で新しく増えた尻尾ですよね」

「う、うん。よくわかるね」

「他の二本よりも明らかに細いですからね。どうですか？　今まで身体になかった器官が増えたわけですが、何か違和感ありませんか？」

その言葉にしばし考えこむ玉藻。

両腕を組んで小首を傾げながら、連夜が持っていない残りの二本の尻尾をぱたぱたと動かしてみる。

そして、今度は連夜が持っている三本目の尻尾の先端をぴこぴこ。

「う～ん、別に違和感はないわ。ただ、ほかの二本ほどまだうまくは動かせないけどね」

「そうですか」

「時間が経てば、ほかの同じように動かせるようになるわ。でも、それが何？　私の尻尾に何かあるの？」

質問の意味がわからなかった玉藻は、いまだ自分の尻尾を優しく撫ぜ続けている恋人にきょとんとした表情で尋ねる。

「いえ、大した意味はないんです。ただ、なんとなく・・」

「なんとなく？」

玉藻の問いかけに対し、何かを口にしようとした連夜であったが、結局そのまま何も言わずに口を閉ざしてしまった。

気になる玉藻は視線だけで問い掛け続けてみたが、その後連夜が口にしたことは別のこと。

「そうだ、さっきのことですが」

「え、あ、うん」

「僕、本当に怒ってませんから」

新しく生えてきた尻尾をそっと下し、それとは別の尻尾を取りながら玉藻のほうに顔を向けた連夜は、穏やかな表情で頷いて見せる。

そこには一片の曇りもなく、ただただ穏やかな笑みが浮かんでいるだけ。

玉藻はしばらくその笑顔をぼ～～っとした様子で見惚れていたが、はっと気がついたような表情を浮かべたあと、すぐに顔を俯かせる。

そして、頬をちょっと赤くしながら両手をもじもじと組み合わせ、ごにょごにょと聞こえるか聞こえないかくらいのかすかな声で言葉

を紡ぎ始めるのだった。

「だ、だけどさ。連夜くんは、今日はダメって言っていたのにさ。その理由もしっかり話してくれたのにさ。結局、私ってば勢いに任せて、その、連夜くんのこと押し倒して、いろいろとその、『いやんあはん』や、『うふんだめん』なことってしちゃったしさ」

「それでも最終的に僕が受け入れたんですから。本当にダメだったら、最後まで抵抗しましたよ」

「で、でも、それはぁ～、連夜くんが優しいからで、私のために折れてくれたんでしょ？」

「そんなことないですって。それに僕は全然優しくないですよ。超自己中心型ですし」

「や、優しいよ、連夜くんは!!　全然、自己中じゃないし。それに比べて私ってやつは。だ、ダメ女って思ってるよね？　ウザイって思ってるよね？」

「思ってないですってば。あのね、玉藻さん。確かに僕は今日はダメっていいました。新しい命ができたとしても、育てる責任も自信も覚悟も持てないって言いました。でもね」

玉藻の尻尾をゆっくりと撫ぜ続けながら、はふ～と一度溜息を吐きだした連夜。

しかし、すぐに表情を引き締め、真っすぐに玉藻を見つめる。

「僕が一番に望んでいることは、玉藻さんが望む道に一緒についていくことなんです。玉藻さんが進もうとしている道に一緒についてい

いって、少しでもそのお手伝いができたらいいなあって。仮面をつけて玉藻さんに会っていたときから、ずっとその想いは変わっていないはずなのに、ちょっとヘタレたこと言っちゃったんですよね。でも、今日、玉藻さんははっきりと自分の進む道についてきてくれって、僕に言ってくれました。側にいてほしいって言ってくれました。それは僕が一番待ち望んでいた答えなんです。その答えを貰えた時の為に、必死にいろいろな技術や技能や知識を身につけてきたんです。なのに、今になって自信も覚悟もないってどういうことだってことですよ。ここで覚悟決めなくていつ決めるんだってことなんですよ。で、改めて思いなおしたんです。出来る限り玉藻さんの望む通りにしようって。本当にどうしようもないときはダメだけど、それ以外の場合、僕の覚悟や力でどうにかなる場合は全力で受け止めようって」

「連夜くん」

「何かあっても僕が責任を持ちます。いえ、持たせてください。力関係では玉藻さんには全然敵いませんし御役に立てませんけど、それ以外の生活全般のことでは少しは役に立てると思うんです。だから」

尻尾から手を離し、玉藻の手をそっと取って握りしめた連夜は、冬の夜空のような黒い色をした瞳を玉藻の黄金色の瞳へと向ける。

澄み切った瞳と心。

それを感じ取った玉藻は、連夜の手をそのまま引き寄せて、自分よりも小柄なその身体を万感の思いを込めて抱きしめるのだった。

「ありがとう。ありがとうね、連夜くん」

「いいえ、それは僕のセリフです。僕を選んでくださってありがと

う。僕、精一杯玉藻さんの望みに応えますから」

「うん」

再び重なり合う二つの影。

それは完全完璧な一つにはなれない。
一つになることは一生ないであろう二つの心、二つの魂。
そのことを二つの影はよくわかっていた。
だが、同時に、どれだけずれることがあったとしても離れることは決してないと確信する。
二つのままで一つであり続ける。
それが二つの影の願い。

二つあることで自分達は決して孤独ではないと知る。
そして、重なり合い一つになることで大きな力を発揮するのだ。

存分にお互いを感じながら、その場で抱き合い続ける二人。
片方はどこまでも熱く。
片方はどこまでも静かに。

やがて、己の中に熱を感じた片方は、もう片方からそっと身体を離す。

そして。

「どうしよう連夜くん、わたし、私・・」

「ど、どうしたんですか、玉藻さん?」

妙に熱っぽく艶っぽい視線が連夜に注がれる。
まるで飢えた肉食獣が餌となる草食動物を見つけたときのような、そんなギラギラした視線。

（あれ？　この玉藻さんの視線、どこかで見たような感じがするんだけど）

連夜の心のうちに再びわき上がる強烈な嫌な予感。
その予感はすぐに現実となる。

「わたし・・めっちゃ、テンションあがってきた！！」

「え？」

うおおっと雄叫びなんかあげちゃったりなんかしつつ、玉藻は連夜の両肩をがしっと掴む。
一方連夜はというと、そんな玉藻の急展開についていけず、ぽか～んとして玉藻の顔を見返すばかり。
完全においてけぼり状態。
しかし、そんな連夜に構わず、玉藻は己の本能の赴くままにエンジン全開で爆走を開始する。

「なんていうのかな、連夜くんの熱烈な愛の言葉がキュンキュン胸にきちゃって、テンションあがりまくりっていうか、そう、つまりこれは『最初からクライマックスだぜ！！』的な感じ？」

「いや、『感じ？』って言われても。もしもし？　玉藻さん？」

「よ～し、よしよしよし、なんかまた私の中の永久機関システムがいい感じに唸りを上げて動き出したわ。なんていうかその、連夜く

んに『貫かれる、止められるものなら止めてみろ！！』的な感じ？」

「えええええっ、玉藻さん、何言ってるんですか！？　ちょっと、あ、なんでエプロンひっぺがえすんですか！？　きゃあああっ」

「いくぜいくぜいくぜぇぇぇっ！！　連夜くんの唇は私のもの、連夜くんのうなじも私のもの、連夜くんのおへそも私のもの、連夜くんのお尻は私のもの、そして、連夜くんの

【現在、掲載できない類の言葉が使用されています。また、同時に掲載できない類の行為が行われていますので、ご迷惑をおかけいたしますが、行為終了までしばらくお待ちくださいませ】

連夜くん、連夜くん、しっかりして！！」

いつの間に移動したのか、二人の姿は現在玉藻の寝室の中。
上に大きめのカッターシャツ一枚だけ羽織っただけの姿になった玉藻の口から悲鳴があがる。
彼女の目の前には背中を向けて全裸で横たわる連夜の姿。
いったい何があったのか、その身体は小刻みに震えて激しく憔悴しているよう。
玉藻に声をかけられてからもしばらくはぴくりとも動かなかった連夜だが、やがてのろのろと顔だけを玉藻のほうに向ける。
うっすらと上気して赤くなった顔。
男であることを忘れてしまいそうなほど色っぽい表情、潤んだ瞳で玉藻を見つめた連夜は、小さい声で呟く。

「玉藻さんの・・バカ」

結局、この日も連夜は泊まり込み、玉藻が完全に回復した翌日、家へと帰っていった。
もちろん、家に帰るという連夜と玉藻の間で、またもや一騒動あったりもしたが、定期的に玉藻の家に連夜が通うということで玉藻が渋々納得。

二人の新しい生活、新しい人生は実に騒がしく幕をあけたのだった。

ここことは違うどこかの世界で、二人の新しい日常が始まる。

次回予告

心に深い傷を持ちながらも、強く生きる二つの魂。
巡り合ったその二つの魂は、お互いを強く強く補完しながら固く固く結びついていく。
離れ離れにならないように、引き放されないように、二人はその想いと絆を深める。

そして、その想いと絆は続いていくのだ。

どこまでもどこまでも

次回

真・ここは違うどこかの日常

過去編（高校二年生編）

第八話

『二人の日常』

平穏な日常の中、育まれるはささやかな愛。

玉藻：よ～しよしよしよし、次回も限界までイチャイチャするぞおおおっ！！

連夜：玉藻さん、気合い入り過ぎですってば。

玉藻：い～の！！　連夜くんと私のいちゃらぶ生活、誰にも邪魔はさせないんだからね！！

連夜：多分、大丈夫です。多分

玉藻：そうね、多分、大丈夫ね・・って、なんで『絶対』じゃなくて『多分』なの？

連夜：じゃあ、次回もよろしく！！

玉藻：ちょ、連夜くん？　なんで逃げて行くの？　ちょっと、連夜くん、待ちなさい！！　ちょっとおおお！！

第八話　『二人の日常』　その1

どんなに嬉しい出来事があったとしても、どんなに悲しい出来事があったとしても、『人』は日々の生活から逃れることはできない。

当り前のように起きて、ご飯を食べて、仕事をし、そして、また明日同じことを繰り返すために眠る。

『人』がこの世に生まれ落ちてから、再び死んで無明の闇の中に還るまでの間、延々と繰り返される『日常』。

その『日常』という名前の戦いが続く日々を生き続けなくてはならない。

と、言っても毎日毎日寸分の狂いもなく同じ日々かといえば、またそれも違う。

ときには、いつもと違う出来事が起こり、それを乗り越えて進まなくてはいけないこともある。

あるいは回り道したり、誰かに手伝ってもらったり、諦めて別の道を選んだり、それはもう『人』によって起こる出来事は様々、そして、選ぶ道もまた様々である。

しかし、大半の『人』の人生は、どれだけ変わった出来事に巻き込まれたとしても、最終的には同じようなループへと再び戻り、また単調な『日常』との戦いが始まるのだ。

そして、それは宿難（すくな）　連夜（れんや）という少年にとっても例外ではなかった。

一カ月前、連夜の人生に大変な出来事が発生した。

『恋人』というものが出来たのだ。

相手は自分よりも三つ年上の大学生で、自分の実姉の大親友。

一流モデルや有名女優でも全然歯が立たないくらいの凄まじい美

人。
そのうえ都市立大学に通うスーパーエリートで、武術の腕前はこの都市でも十指に入るほどの強者。
性格は人付き合いが少々苦手で気難しいところがあるものの、連夜に対してはとてつもなく優しい。
幼い頃から大好きで大好きでたまらなかった、憧れの女性。
その女性と、ある出来事がきっかけで付き合うことになってしまった。

連夜がこの世に生を受けてから十七年間。

連夜は一度たりとも『恋人』というものを持ったことがない。
おかげで付き合いだした最初の頃は、本当に戸惑うことの連続ばかり。
どう付き合えばいいのか、どう付き合っていけばいいのか全くわからない連夜。
『恋人』に嫌われたくない一心で、腫物を触るように慎重に慎重を重ねて付き合い、自分達に一番いい距離を探ろうとして頑張った。

しかし、年上の『恋人』はそんな彼の臆病な配慮を、たった数日で簡単に蹴っ飛ばして木端微塵に粉砕してしまった。

勿論それは決して悪い意味でではない。
年上の『恋人』は連夜の想像をはるかに超えて積極的だったのだ。
連夜が距離を取ろうとするよりも早く毎回その懐めがけてひたすらに真っすぐに飛び込んできて、避ける暇も、対抗する策を仕掛ける暇も決して与えない
凄まじい勢いで連夜の精神防御壁を破壊し、粉砕し、突破してくる。
自分が傷つくことなんか全くお構いなしのスーパーカミカゼアタ

ックである。
そして、慌てふためく連夜の心と体をがっちりと羽交い絞めにした上で、雁字搦めに押さえこんでしまうのだ。

そう連夜の年上の『恋人』は、決して連夜に距離を空けさせようとはしなかったし、絶対にさせなかった。

連夜にしてみれば距離を探るどころの話ではない。
あっという間に彼女の間合いに支配され、気がついた時にはもうそのペースにすっかり慣れてしまっている自分の姿。

今、彼女に捨てられるようなことになれば、大怪我どころで済まない心の傷を負うことになるだろう。
なんせたった一カ月そこらで完全に連夜の心は彼女に掌握されてしまっていたのだから。

付き合い始めてから一カ月後の今、彼女を中心とした生活が当たり前のように流れている。

夢のような幸せ。
しかし、それは儚く消える危うさと背中合わせ。

それを自覚した当初はかなり悩んだ。
これで本当にいいのかと、かなり悩んだ。
悩んでは見たが、結局、どうにもならないということがわかっただけだった。

根本的に連夜は『恋人』のことが好きだ。
好きという言葉ではいい表せられないくらい、『恋人』のことが心から好きだったし、愛している。

だから、他の『人』に取られて自分が捨てられる姿を想像しただけで、どうしようもなく悲しく、身を刻まれるように苦しく辛い。

だが、多分、そうなることで『恋人』が今以上に幸せになれるとわかったら、自分はあっさり納得してしまう気がする。

自分の幸せよりも『恋人』の幸せのほうが重要だから。

そして、連夜はそれらのことについて考えることをやめた。

とりあえずさしあたっては、本日、あるいは明日、そして、ごくごく近い未来にある彼女を幸せにしなくてはならない。

それ以上の未来にはまた別の誰かが彼女の側にいるかもしれない。

だが、今現在その役目は間違いなく連夜のものであり、連夜の仕事である。

そういう風に思いながら日々を送っていった結果、あっという間に一カ月という月日が流れた。

ありがたいことに、連夜はまだ『恋人』に飽きられて捨てられてはいない。

いつまで続けられるかわからないが、彼女の『日常』を守り、その『日常』が幸せであるようにと、今日も連夜は『日常』に戦いを挑む。

連夜は、一週間に二日か、三日、一人暮らしをしている『恋人』の家に通っている。

本当は毎日のように通いたいのであるが、いろいろと問題があり、二日か、多くても三日しかいけないというのが現状である。

学校帰りに『恋人』の家に立ち寄ることが多い連夜。

連夜は、そのときに家の中を掃除したり、たまっている洗濯物を洗濯したり、夕食や、翌日の朝食、場合によっては翌日彼女が大学に持っていくお昼ご飯のお弁当の用意をしたりして過ごす。

一応『恋人』は全く家事ができない『人』ではない。

それなりに掃除洗濯炊事をこなすことができる。

できるのだが、その彼女の家事能力のキャパシティを大幅に超えて邪魔する『人』物達が何人かすぐ側にいるため、その機能を活かすことができないのである。

当たり前であるが、その邪魔をする『人』物達の中に連夜は含まれてはいない。

むしろ、彼女達がしっちゃかめっちゃかにした『恋人』の家を清潔且つ、整理整頓された『人』の住む空間に修復し、維持しているのは他ならぬ連夜である。

幼い頃から家事の達人である父親に厳しく教育されてきた連夜は、そこらへんのハウスキーパーが束になってかかっても敵わない位の恐るべき家事能力の持ち主である。

実家にはたくさんのプロのメイドさん、召使さんが働いている。

それぞれが掃除の達人、洗濯の達人、料理の達人であり、非常に優秀な『人』達ばかり。

一つ一つの能力では、間違いなく連夜よりもみな優れている。

だが、家事全般の総合能力で見たとき、連夜に匹敵する、あるいは越えるだけの能力を持った『人』材は一人として存在していない。

強いてあげるとするならば、連夜の妹弟子でメイド長のさくらがいるが、そのさくらでも連夜には遠く及ばないのである。

達人を越える名人級の腕前。

それを存分に振い、連夜は、日々愛しい『恋人』の日常生活を守っているのだ。

さて、今日はその『恋人』の家を訪れることになっている日。
一昨日訪れたときに彼女の家の霊蔵庫をチェックしたが、中にはほとんど何も入っていなかった。
今日は、しっかり買出ししてから行かなくてはいけない。
連夜は、高校の授業が終わったあとの放課後、彼女の家の近くにある総合衣食住商品取扱大型店へと向かった。

連夜が住んでいる城砦都市『嶺斬泊』。
北方都市最大の交易都市であるここには、当然のことながら総合衣食住商品取扱大型店がいくつも存在している。
城砦都市『ストーンブリッジ』に本社を置く『グレートA』。
城砦都市『アルカディア』に本社がある『良音』
城砦都市『通転核』が発祥の地と言われる『コップ』
実に様々な店が、あちこちに点在してその覇を競っているが、なかでも連夜がよく行くのはこの『嶺斬泊』で生まれた『ジャスト』だった。

理由は実に簡単。
取り扱っている商品が若干だが、ほかの大型店舗よりも多く、何よりも月に何回かある特売日の値引きが非常に高いからだ。
誤解のないように説明しておくと、連夜が『恋人』の生活費を全て出しているわけではない。
むしろそういうことを非常に嫌う『恋人』は、連夜に出来るだけ出費させないようにしている。
連夜に買い物を任せはするものの、必ず連夜が建て替えた金額を全て細かく算出し、絶対に連夜の負担にならないよう後で支払ってくれるのだ。

連夜は現役の高校生。

普通なら親の脛をかじってお小遣いをもらい、収入などないはずで、『恋人』のそうした気遣いがありがたいはず。

・・なのだが。

連夜の場合は少々事情が違う。

連夜は幼い頃から父の農業を手伝っていて、今では自分でもいくつかの畑を所有している。

父親から譲り受けたいくつかの畑を耕し、市場に出回りにくい薬草や食物を栽培してそれをしかるべきところに売ってそこそこの収入を持っているのだ。

つまり、彼は高校生であると同時に、既に社会に出て収入を得ている社会人でもあるのである。

今の状態でも贅沢さえしなければ、『恋人』一人くらい楽に養っていけるだけの財力を持っている連夜。

だから、連夜としては別に『恋人』の生活費くらいどうってことないし、むしろ、今後のことも考えて出してあげたいのであるが、彼の『恋人』はというと。

『連夜くんの気遣いは本当にうれしいけれど、何もかもおんぶに抱っこしてもらうのはいや!!　絶対にいやっ!!　連夜くんのお荷物にだけは絶対になりたくない!!』

と言って、絶対に受け取ってくれないのである。

連夜にしてみれば、自分のほうがはるかにお荷物という気がするのであるが、でもまあ対等の立場でいたいという『恋人』の気持ちはわからないことはない。

むしろ、自分に立場を置き換えてみれば、自分も同じことを言う

だろうなと考えて、彼女が出してくれるお金はありがたく受け取ることにした。
こうして、買い物したお金はきちんと彼女から連夜に支払われることになったのである。

が、しかし。

その受け取ったお金は連夜の財布には入っていない。

連夜は彼女に秘密で某銀行に彼女名義の口座を作った。
そして、受け取ったお金はそこに全て連夜の手で預けられ貯金されていっている。
もちろん、彼女には完全に完璧に秘密である。

バレたら大変なことになるので、いざというそのときまでは徹底的に秘密を貫くつもりだ。

さて、こうして実質的には『恋人』の懐へ戻ることになる予定の買物の代金。
しかし、最終的に『恋人』の懐にもどることになるといっても、一時的には間違いなくそのお金は懐から離れてしまう。
いくら『恋人』の為になるとはいえ、考えなしに大きな買い物をしてしまうと最愛の『恋人』に負担になってしまうわけだ。
そこで連夜はできるだけ特売日を狙って安くていいものを買うことにしている。
毎日チラシをチェックし、安くていいものは絶対に見逃さない。
長年鍛えられ磨きあげられてきた連夜の『主夫魂』が今日も燃える。

「おお、卵安い！！　って、烏骨鶏の卵も今日特売してる！！！」

学校での授業終了後、ＨＲにも出席しないままに学校を抜け出し、夕日が沈む前にジャストにやってきた連夜。

高校生の少年が買い物カートを押しながら、特売品の卵のパックの値札をうっとりと見つめる光景というのも、なかなか妙なものだが、本人は全然気にしていなかった。

連夜は、Ｌサイズの通常卵のパックを二つと、烏骨鶏の卵パック二つをカートにそっと割れないように入れると、背中のリュックから今朝の新聞に折り込まれていたジャストの広告チラシを取り出した。

「よし、目当てだった『神農牛乳』と『卵』と『トイレットリーフ』は買った。あと他に目ぼしいものなかったかなぁ」

ショッピングカートのカゴの中に並べられた本日の戦利品を見て満足気に頷いたあと、別の標的を探すために手にしたチラシへと視線を向ける。

日が暮れるまでにはまだ時間がある。

まだお得な商品があるかもしれない。

それを見逃してしまうのはあまりにも悔しいので、真剣にチラシを見つめる連夜。

高校の授業でもここまで真剣に、そして熱心に教科書を見たりしないだろうことを自覚し、若干自嘲気味な苦笑を浮かべながらも、チラシを穴があくほど見つめ続ける。

そんなときだった。

連夜は、突如自分の首にほっそりきれいな女性の腕が巻きついてくるのに気がついた。

新雪のようにどこまでも白い肌に、物凄く形のいい細く長い指がそろった手。

しかし、それは病的な白さというわけではない。
その証拠にその腕は細くはあっても貧弱ではない。
鍛え上げられ、鞭のように見事な筋肉がついている。
そんな腕の持ち主で、連夜が知っている人物と言えば一人しか思い浮かばない。
しかし、現在その人物は大学で講義を受けている時間のはずなのだが。
不審には思ったが、この気配、この匂い、この肌ざわり、どれをとっても予想通りに人物に間違いないと確信する。

「玉藻さん？」

「そうよ～、あなたの最愛の恋人、玉藻で～す」

連夜の顔の前にひょこっと顔を出したのは金髪金眼の霊狐族の美女。
バレタかという顔で可愛らしく舌を出してみせたあと、人目もはばからず連夜の頬にちゅっと軽くキスする。

「だ、大学の講義中じゃなかったんですか？」

「うん。でもさぼちゃった。てへっ」

「さぼったって」

「だって、あの授業ってさ、ミネルヴァと一緒なんだもん。連夜くんだって知ってるでしょ？　あいつと同じ授業受けると、終わったあと必ず呑みに連れ出されちゃうんだもん。どんだけ断っても私のこと強引に連れ出そうとするからね。あいつさぁ、ここ最近はバイト三昧でほとんど大学に来てなかったんだけど、このまえの追試騒

動からこっち、真面目に授業に出てきちゃってるのよねえ。連夜くんが来る日はできるだけ同じ授業には顔を出さないように調整していたんだけどなあ」

大いに驚いた表情で問いかけてくる連夜に、玉藻はなんとも疲れ果てた表情で首を横に振ってみせる。

「ありゃりゃ、それはまた大変でしたねえ。でも、さぼってしまって単位は大丈夫なんですか？　玉藻さん自身が今度は追試受けないといけないなんてことにならないですか？」

「だ～いじょ～うぶよん。あいつと違って私は真面目に授業受けているからね。出席日数は全然余裕だし、今日受けなかったのはただの必修科目だからね。試験で『不可』さえ取らなければ問題なしなし」

ぶいぶいっと連夜のほうに二本の指を立てて見せながら、玉藻は実に無邪気な表情で微笑みかけてくる。

そんな最愛の恋人の姿を、赤く上気した表情で見惚れる連夜。

めざとくそれを見つけその表情の意味を悟った玉藻は、年下の彼氏をからかってやろうといたずらっこそのものといった表情で口を開いた。

「あれあれ？　連夜くん、顔が赤いぞ？　さては私の美貌に見惚れていたな？」

からかうような口調。

自分の言葉に年下の彼氏が大いに慌てふためくのを想定しての言葉。

だが、彼女の三つ年下の彼氏は、予想していたのとは大分違う反応を見せるのだった。

「はい、あまりにも玉藻さんが超絶に奇麗だから、見惚れていました。女神様っていうのが本当にこの世にいるとするなら、それはきっと玉藻さんみたいな姿をしているんでしょうね」

お世辞ではない。

表情は柔らかく笑ってはいるが、その瞳、その口調は間違いなく真剣そのもの。

むしろ、あまりにも素直に絶賛されてしまった玉藻のほうが耐えきれず、顔を真っ赤にして大いに慌て始める。

「も、もうもうっ、連夜くんったら何言ってるの!?　め、女神って、そ、そんなわけないでしょ!!」

「痛いっ!!　ちょっと、痛いですって玉藻さん!!」

盛大に慌てふためきながら、照れ隠しに連夜の背中をバシバシ叩きまくる玉藻。

そんな姿もかわいらしいことこの上なかったりするのだが、背中に間断なく浴びせられる衝撃と激痛のせいでのんびり見ている余裕はない。

流石、一流武術家の『恋人』である。

相当手加減してくれているのであろうがその連撃は尋常ではない。

日頃不良達に絡まれて相当耐久性があがっているはずなのだが、どうにも耐えきれずにたまらず悲鳴をあげる。

「ご、ごめん、連夜くん。恥ずかしさのあまりつい。い、痛かったよね、ごめんね」

「流石は音に聞こえし『不良潰し（アウトローイーター）』。御稜高校史上最強の元風紀委

員長殿。数に物を言わすことしかできないバカ達の一撃とは比べ物にならないですね。手加減してもらってもこたえます」

「だ、だから、ごめんってば。もう、そんなにいじめないでよ。本当に悪かったって思っているんだから」

あからさまに冗談とわかるように大袈裟に痛がって見せる連夜。しかし、それを見た玉藻は連夜の思惑とは違い、みるみる表情を曇らせて本気で涙目になっていく。

「じょ、冗談ですって玉藻さん。泣かないでくださいよ」

「う～～、連夜くんのいじわるぅ～。わ、私だってね、自分でがさつだなってわかってるんだから、そ、そんな風に言わなくてもいいじゃ・・うえぇぇ」

「うわ～～、ごめんなさい、ごめんなさい。本当にごめんなさい」

大慌てで謝罪の言葉を口にするも、玉藻の顔はあっというまにくしゃくしゃになり、両手で顔を覆って泣きだしてしまう。

スーパーの一番奥にある卵売り場で、人通りは中央売り場に比べれば格段に少ないが、それでも結構な数の『人』が行き来する往来のド真中。

眼を見張るような超絶的美女が大泣きしている姿に気がついた通りすがりの『人』達が、野次馬根性で次々と立ち止まり興味深そうに見つめてくる。

すぐにそのことに気がついた連夜は、これ以上騒ぎを広げないために必死の説得工作にでる。

「た、玉藻さん、さっきのは嘘です、嘘！！　全然痛くなかったで

す！！　ちょっと冗談で言ってみただけなんです、ごめんなさい、調子に乗り過ぎました」

「ぐすっ、ぐすっ。怒ってない？」

「怒ってません怒ってません。こんなことくらいで怒るわけないじゃないですか」

「ほんとに？　私のこと嫌いになったりしてない？」

「玉藻さんを嫌いになんかなるわけないじゃないですか。絶対にそんなことにはなりません」

「じゃあ・・好き？　私のこと愛してる？」

必死の説得工作に徐々に玉藻の機嫌が直っていく。

涙が引っ込み、表情がみるみる明るくなっていく。

だが、その表情は徐々に明るいとかいうレベルから、明らかに何かを期待してわくわくしているそれへと変化。

周囲に群がる野次馬達の存在をばっちりわかっているはずなのに。

連夜が一刻も早くこの場から立ち去りたいと思っていることもわかっているはずなのに。

もう十分機嫌は直っているはずなのに。

目の前の美しい年上の恋人は連夜にかなり高いハードルを『飛べ』と要求してくるのだった。

（え～～、何この羞恥プレイ！？）

流石の連夜もこの要求にはすぐに応じることができず、思わず心の中で絶叫して周囲に視線を向ける。

すると、周囲に群がる野次馬達が、さも買い物をしていますという風を装いながら、耳を大きくしてこちらに向けているのがわかってしまった。

目の前の恋人からだけでなく、周囲の野次馬達からも期待に満ちた気配が流れてきるのを感じ、連夜は途方に暮れた表情で天井を見あげる。

どうしても言わないといけない状況らしい。

正直、このまま有耶無耶に誤魔化して走って逃げだしたかったが、それをすると連夜に逃げられた恋人が盛大に傷つくことになる。

そういうことまで計算にいれた状態、そういうことが全部わかった状態で、この頭のいい年上の恋人は要求してきているのだ。

しょうがない、腹をくくるしかない。

連夜は、顔が引き攣らないように全力で顔面の筋肉をコントロールしながら、なんとか笑顔を作って言葉を無理矢理紡ぎ出す。

「も、勿論、玉藻さんのことを愛していますよ」

「なんか、いやいや言ってるように聞こえる」

わざとらしく顔を伏せた玉藻は、心底悲しんでいるという表情で上目づかいで連夜を見つめる。

どんなドラマのヒロインでも見せられないような、本当に心からの悲しみに満ちた表情、そして仕草。

大抵の男であれば、これほどの美女にこんなに悲しい表情で訴えられてしまったら、どんなお願いでも聞いてしまうであろう。

だが、連夜は見逃さなかった。

上目づかいで見つめてくる玉藻のその瞳を。

その瞳が完全に笑っていることを。

（もう～～、玉藻さんはずるいよなあ）

ここがスーパーの中ではなく玉藻の家の中だったのなら、即座に正座させてお説教しているところである。

しかし非常に残念なことに、ここは玉藻の家の中ではない。

地の利は完全に圧倒的に玉藻に有利だった。

勝負を仕掛けられた時点で連夜に勝ち目などなかったことを今更ながらに悟った連夜は、完全敗北を認めてもう一度言葉を紡ぐ。

「本当に、心から、玉藻さんだけを、『恋人』として、愛しています」

できるだけ大きな声で、はっきり聞こえるように連夜は言葉を身体の外へと解き放つ。

すると、玉藻は一瞬吃驚したような顔を浮かべたが、すぐに大輪の華のような笑顔を浮かべて連夜の小柄な体に正面から抱きついた。

「嬉しい！！　私も、私も連夜くんの大好き！！　愛しているわ！！」

天の彼方、あるいは地の果てまで届けと言わんばかりの心からの大絶叫。

勿論、それを聞いて嬉しくないわけはなかったが、連夜は、周囲の様子を見てぎょっとなる。

そこにはいつのまに集まっていたのか、物凄い数の野次馬達が、連夜と玉藻の愛の告白に対して割れんばかりの拍手喝采を送っていたのだった。

「いや～、久しぶりにいいもの見た」

「若いっていわね～」

「幸せになるのよ～」

「お母さん、あのお兄ちゃんとお姉ちゃんって結婚するの？」

「そうね～、きっとするわね～」

「ちゅ～もするかな？」

「そうね～、きっとするわね～」

（しないしない！！　こんなところでできるわけないでしょうが！！）

無責任に浴びせられる祝福の言葉の数々に、羞恥で顔を真っ赤にする連夜。

いくら玉藻でもこの状況は恥ずかしいだろうと思い、自分よりも高い位置にある顔を見上げてみる。

すると、そこにはやたらうっとりした表情、熱い視線で自分のことを見つめ続けている姿。

その顔のどこを探しても羞恥の色は浮かんではいない。

それどころかなんだかめちゃくちゃ幸せそうだった。

（ダメだ！！　これ以上ここにいたら死ぬ！！　恥ずかしくて死ぬ！！！）

連夜は玉藻を横抱きにして持ち上げると、ショッピングカートを器用に動かして全速力でその場から逃げ出したのだった。

第八話　『二人の日常』　その2

玉藻を横抱きにした状態で器用にショッピングカートを操った連夜は、スーパーの中を凄まじい勢いで走り抜け、ガラス扉越しに外が見える出口付近まできてようやくその足を止めた。

そこは先程までいた卵売り場のちょうど反対側にある野菜売り場。

色とりどりの野菜が所狭しと並べられた中、見るからに新鮮そうな丸く大きなキャベツが山積みに展示されている場所の前で玉藻の身体をそっと下におろした連夜。

乱れた息を整えるために、大きく肩を上下させて深呼吸を繰り返す。

「こ、ここまで、来れば、流石に、大丈夫でしょ」

荒い息を吐きだしながら周囲を見渡した連夜は、誰も追っかけてきていないことを確認して、ほ〜〜っと大きく深い溜息を吐きだしてがっくり肩を落としたあと、疲れたように自分の膝にその手を置く。

そんな年下の恋人の姿をしばらく優しい表情で黙って見つめていた玉藻だったが、やがてくすくすと笑いながら近づいて嬉しそうにその腕を取って自分の腕を絡める。

「んもう、連夜くんったら、恥ずかしがり屋さんなんだから」

「普通、あれだけの『人』に見られていたら誰だって恥ずかしいです！！」

「え〜、私は全然恥ずかしくなかったよぉ〜。むしろ、連夜くんの男らしい告白がとっても嬉しかったっていうか」

先程の羞恥プレイを思い出して再びその顔を真っ赤に染めた連夜は、自分のことを面白そうに見つめる玉藻に盛大に食ってかかる。

だが、玉藻はそんな年下の彼氏の抗議などどこ吹く風。

むしろ、温かい眼差しで連夜を見つめ、心から嬉しそうにその唇を愛しい恋人の頬に押し付ける。

その表情は本当に幸せそのもの。

その姿にすっかり毒気を抜かれてしまった連夜は、なんとも言えない情けない表情で玉藻を見つめていたが、結局、最後には苦笑を浮かべて首を二つほど横に振る。

そして、降参ですとばかりに両手を挙げて見せたあと、そのまま肩をすくめるのだった。

「本当にかなわないな～。でもまあ、玉藻さんに喜んでもらえたんだから、よかったとすべきなのかな」

「もう、私が遊びであいうこと言わせたと思ってるの？」

「違うんですか？」

疑わしそうに見つめる連夜に対し、玉藻は一瞬慌てたように顔を背けてみせる。

その後そのまま顔を下に向けて、なんともバツが悪そうに両手の指をちょんちょんと突き合わせて身体をくねらせていたが、次第にその黄金の瞳には真剣な光が。

「まあその、全然遊びじゃなかったって言えばウソになるけどぉ～。でもでも、本当に連夜くんに言って欲しかったんだからね！！」

「でも、僕、二人っきりの時には結構口にしていると思うんですけ

ど」

「うん、それはわかってる。連夜くん、二人っきりの時はちゃんと口にしてくれるよね。『好きだ』って。『愛してる』って。『玉藻さんだけです』って。でもでも、毎日でも聞いていたいんだもん。そうしないと不安になっちゃうんだもん」

「ふ、不安って何がですか？　僕、何か玉藻さんにひどいことしましたか？」

「そうじゃないけど」

「けど、なんなんですか？　言ってください、玉藻さん。もし僕に改善できることなら改善しますから」

今にも泣きだしそうな本当に不安そうな表情。

そんな玉藻の顔を見ているのが辛くて、連夜は真摯な表情で玉藻の身体をそっと抱きしめて覗きこむ。

すると、玉藻は一瞬躊躇する気配を見せたが、連夜の真剣な色が浮かぶ瞳に促されて口をゆっくりと開いた。

「だって、連夜くんって」

「僕が？　なんですか？」

「すっごいモテそうだから。私のこといつか捨てちゃうんじゃないかって。ときどき不安になるんだもん」

「はぁっ！？」

いつもの冗談かと思った。
玉藻は年下の彼氏をからかうのが物凄く好きだ。
特に恋愛経験がほぼゼロの連夜が、玉藻の言動でいいように翻弄される姿を見るのが何よりも好きという困った悪癖がある。
だから、これもそれの一種だなと連夜は一瞬思った。
だが、すぐにその認識を否定さぜるを得ない証拠を見つけてしまう。
玉藻の黄金の瞳に、本物の恐怖が映っていたからだ。

「いやいやいや、そんなバカな。そんなこと誰からも一回も言われたことないですし、モテたこともありませんよ。そもそも、玉藻さんが生まれて初めてできた恋人ですのに」

「ウソっ！！」

「嘘じゃありませんて。本当に玉藻さんが初めての『恋人』です。それまで女の子と付き合ったことなんて一度たりともありませんよ」

連夜の言葉に対し、玉藻は物凄い疑惑の眼差しを向け続ける。

『どんな嘘も見逃さないし、絶対に誤魔化されないんだから！！』

口には出さないが、玉藻のそういう意思が痛いほど伝わってくる。
しかし、連夜にしてみれば今のところ疾しいところが全くないし、心当たりもないので、ただただ戸惑うばかり。
そうして、怒ったような顔と、片方は困ったような顔のにらめっこが延々と続いたが、やがて、怒ったような顔をしていたほうが、不意に肩の力を抜いて瞳から疑惑の光を消した。

「やっぱりほんとなの？　本当に私が初めて？」

「こんなことで嘘ついてどうするんですか。それに、僕、いつも言っていますよね？　ず～っと玉藻さんのことだけしか見てなかったって」

「だ、だってぇ～～」

物凄く不満そうな、困惑しきったような複雑な表情で呟く連夜の言葉を聞いた玉藻は、いそいそとその側に近寄って横から抱きつく。

そして、『人』の顔から白地に赤いくまどり模様のある『狐』の顔に変化すると、甘えるように連夜の顔を舐めるのだった。

「い、一週間に多くて三日、少ないと二日しか会えないんだもん。その間に他の女に言い寄られてやしないか、誑かされてやしないか心配で心配で」

「ありませんから、そんなこと。そもそも、玉藻さんのほうがモテるじゃないですか。大学と言わず、普通に外を歩いているだけで『男』達に囲まれっぱなしで。捨てられるとしたら僕のほうでしょうに」

「す、捨てたりしないわよ、バカッ！！　私がそんなことするわけないでしょ！？　本当にそんなこと疑ってるの！？」

あまりにもありえないことで嫉妬されたことに驚いて、ついつい本音をポロッと出してしまった連夜。

それを耳敏く聞きつけた玉藻は、『狐』というよりも『般若』のような顔になって烈火の如く怒る。

「いや、だって、玉藻さんて、誰が見ても顔もスタイルもいいし、

頭もいいし性格もいいし、武術の腕も凄いし、相手なんてそれこそ選びたい放題に選べるでしょ？　僕なんかいつ捨てられても不思議じゃないよなあって、思ってました」

「ええっ！？」

凄まじいばかりの剣幕で詰め寄ってくる玉藻の大迫力に圧倒されっぱなしの連夜。

しかし、もう怒られるんだったらこの際とことん怒られようと腹をくくり、普段思っている本当の気持ちを吐きだすことにする。

出来すぎる恋人を持つが故の不安。

それを口にした連夜であったが、今度は玉藻がぽか～んとする番であった。

「え、選びたい放題って。あのね、連夜くん」

疲れたような、いや、疲れきった表情でやれやれと首を横に振って深い溜息を吐きだした玉藻。

片手を額にあてて下を向き、しばらく考え込む。

目の前にいる年下の恋人になんと言ったものかと悩んでいたが、やがてゆっくりとその顔をあげた。

「私の周囲に群がってくる男達なんてね、私の肉体（からだ）目当ての馬鹿ばっかりよ。はっきり言って気持ち悪くて怖気が走るわ。そんなものを選び放題と言われても、どれ一つとして選びたくないの。それにもう私は、私に一番合った『人』を選び出したんだから、今更選び直す必要なんか全くないし、選び直すわけないでしょ」

すっと連夜の後ろに近づき、背後からぎゅっとその身体を抱きしめた玉藻は、『狐』の顔を連夜の顔にこすりつける。

「だいたいね、私よりも連夜くんのほうがよっぽど心配だし油断できないわよ。私に言い寄ってくるのは私の外見にしか興味のないバカばっかりだけど、連夜くんに言い寄って来そうな女の子のって、連夜くんのいいところをきっちりわかっていそうなんだもの」

「いいところって、僕にいいところなんて特にありませんよ」

「あるわよ!!　いっぱいあるじゃない!!　プロのハウスキーパーさん以上に家事全般できるってこともそうだけど、それ以外にもびっくりするくらいいろいろな技術を身につけているし、大学の教授並に知識は豊富で頭はいいし、なによりも物凄く優しいし。あ～、やっぱり心配だわ。連夜くんにその気がなくても、性質の悪い虫がぶんぶん飛んできてまとわりついてきそう。いい、連夜くん、他の女に気を許しちゃダメだからね、絶対絶対だめなんだからね!!」

涙目になった状態で盛大に喚き散らす玉藻。

そんな玉藻をぼんやりと見つめ続ける連夜は、なんだか自分の思っていた状況と全く逆だなあなんてことをのんびりと考えながら苦笑浮かべる。

そうして、しばらくの間半泣き状態の玉藻をやんわりと宥めていた連夜であったが、先程と同じようにだんだん人の目がこちらに向いてきていることを感じて、慌てて玉藻に提案する。

「た、玉藻さん、一時休戦しましょう。また、人の目が集まってきていますし。この続きは帰ってからということに」

「む、連夜くん、逃げる気？」

「逃げませんよ。でも、心配だったら捕虜が逃げないように側で見

張っててください」

すっと片腕を差し出す連夜。

『狐』はしばらくなんとも言えない表情で差し出された腕を見つめていたが、本当にしぶしぶ、他に方法がないから仕方なくという表情で自分の腕をからませる。

「も、もうしょうがないわね。今回だけは誤魔化されてあげるわよ。本当にもう仕方なくなんだからね」

「ありがとうございます」

物凄い不機嫌な表情に怒ったような声の玉藻。

そんな玉藻の仏頂面に対して、嬉しそうに視線を向けてぺこっと一礼した連夜だったが、ふと何かに気がついて、頭を下げたまた視線をある方向に向ける。

すると形のいいお尻から飛び出た三本の尻尾が、嬉しさ全開で扇風機のように高速回転を繰り返しているのが見えた。

思わず噴き出しそうになる連夜だったが、なんとかそれを飲みこんでお腹の中で押しつぶす。

そんな連夜の様子に気がついていない玉藻は、まだ気付かれていないと思ったまま不機嫌そうな表情のまま年下の恋人に声をかける。

「ほ、ほら、まだ買い物残っているんでしょ？　あとは何を買うの？」

「え？　ああ、まだいろいろとあるんですけど、とりあえずちょうどいいからキャベツを買っていきますね。できるだけ早く終わらせるつもりですけどもうちょっと付き合ってもらっていいですか？もし退屈だったら先に御家に帰ってもらって待っててていただいても

いいですけど」

「いいわよ、いいわよ。どうせ、先に帰ってもやることないし、連夜くんを待ってる間、一人で寂しいだけだから一緒にいる」

あっというまにまた元の甘えん坊バージョンに戻ってしまった玉藻。

自分の寂しさをこれでもかと訴えかけるように瞳をうるうるさせながらぴとっと連夜の身体にくっつく。

「じゃあ、お言葉に甘えてもうちょっと買い物させてもらいます」

「うんうん、私のことは気にしないでゆっくりお買い物してね」

玉藻の返事ににっこりと穏やかな笑みを浮かべて見せた後、連夜はさっきの爆走で乱れてしまったショッピングカートの中へと視線を向ける。

手早くカートの商品をもう一度奇麗に整理整頓し、他の商品が十分積み込めるくらいの隙間をあっというまに作り出した後、目の前にあるキャベツの山へと改めて視線を移し直した。

山積みキャベツのコーナーの前には『今が旬!!　春夏秋冬キャベツ　本日大特価!!』のパネル。

それを見て、自分の目当ての商品であることを確認した連夜は、玉藻に腕組みをさせたまま山積みのキャベツに近づき、それを一つずつとって状態の良し悪しを選別し始める。

一つ一つを手に取っては、重さや葉っぱの状態を熱心に観察し続ける連夜。

そんな連夜の様子を、横に立つ玉藻は飽きることく優しい表情で見続ける。

元々玉藻が目立つ容姿であるということもあるが、傍から見ると

身長差はかなりある。
しかも、玉藻が一流モデルや有名女優なんか目じゃないくらいの超絶美女であるのに対し、横に立つ連夜はと言えば、意識しなければ群衆の中にあっというまに埋没してしまいそうなほど平平凡凡な普通の少年。
二人の間にそびえたつギャップの壁は、誰が見ても凄まじく高く分厚いものがあり、誰がどう見ても超絶にバランスが悪い、めちゃくちゃ悪い。

はずなのであるが。

その二人が醸し出している温かくも穏やかな雰囲気が不思議とみる者を納得させてしまう。
どうみてもバランスが悪い、いや悪すぎるカップルが、とてもお似合いに見えてしまうのだ。
一生懸命買い物をしている小さな彼氏と、それを温かく見守っている背の高い年上の彼女。
デコボコではあるが仲の良いとても不思議なカップルの姿に、周囲の人達は次第に目を奪われていった。

「う〜ん、どれもいまいちだなぁ。別に虫が食っているのとかはいいんだけど、どうも大きすぎるのが気になるなあ」

再び自分達に視線が集まり始めていることに全く気がつかないままに、目の前のキャベツを選定することに熱中し続ける連夜。
どうにも自分が納得できるものがなく、顔を顰めてしきりに唸り声をあげながら両手に持つキャベツに難しい視線を向ける。

「大きいといけないの？」

「いや、いけないことはないんですけどね。『春夏秋冬キャベツ』は小さくてしっかりした包み状になってるやつほど糖分が高くて甘いんですよ」

「へ〜。そうなんだ」

「そうなんです。今日は『回鍋肉（ホイコーロー）』にしようと思っているんで、できるだけ新鮮で質のいいのがほしいんですけどねぇ」

「おお！！　私、『回鍋肉（ホイコーロー）』大好き！！」

横で素直に喜ぶ玉藻。

そんな玉藻を連夜は穏やかな笑みを浮かべて見つめる。

「玉藻さん、ほんと『上華帝国』料理好きですものねえ。餃子とか、春巻とか、シュウマイとか、レバニラ炒めとか、麻婆茄子とか」

「うんうん、どれも大好き！！　いや、連夜くんがつくってくれる料理は大概なんでも好きなんだけどね。でもでも、特に東方諸国料理シリーズはどれも好きね。『八幡朝廷』料理の寿司とか、『上華帝国』料理の炒め物なんかは特に好き！！　そうだ、連夜くんが作ってくれる特製チャーハンも大好きよ！！　同じくらい天津飯も好きだけど。今日はどちらかあるのかな？」

「チャーハンを作る予定ですよ。『回鍋肉（ホイコーロー）』がありますから、あまりこってりしてなくてあっさりしたチャーハンにするつもりです。そうですね、ネギとカマボコと卵を入れて、最後にかつおぶしをかけた『八幡（はちまん）』風チャーハンにしようかな」

「おお！！　あれおいしいよね！！　そっか、『回鍋肉（ホイコーロー）』と『八幡（はちまん）』

風チャーハンかあ。となると」

夕食の献立が自分の大好物だと知った玉藻は、じゅるりと盛大に生唾を飲み込んだあと、何かを期待するような、それでいて、懇願するよう物凄く甘えきった視線を連夜へと向ける。

そんな玉藻の姿をちらりと横目で見て確認した連夜は、すぐにその視線の意味を正確に把握したのであるが、何故か微妙な表情を浮かべるとわざとらしく顔を背けて玉藻の顔をそれ以上見ないようにしてしまう。

「ねぇねぇ、連夜くん？」

「キャベツは買ったし、あと豚肉とかつお節かな。かまぼこは霊蔵庫に中にあったし、卵はさっき買ったものね」

「ねぇねぇ、連夜くん？」

「さぁさぁ、次行きましょうかね。次」

「もうっ！！　聞こえないふりしちゃダメっ！！　ビール、買ってもいい？　ねぇねぇ、ビールビール。いいでしょう？　『回鍋肉（ホイコーロー）』と『八幡（はちまん）』風チャーハンがあるのに、ビールを飲めないのは絶対にやだあああああ」

「・・・」

どこかのわがまま幼稚園児のように、ぷうっとふぐのように頬を膨らませて連夜の腕にぶらさがる玉藻。

そんな玉藻の姿を疲れたような表情で見つめた連夜は、胸のうちにたまっている何かを言葉にして吐き出すべく口を開こうとした。

だが、玉藻の涙目になった眼を見ては口を閉ざし、その後なんとか自分を鼓舞しては口を開こうとするのだが、また最愛の恋人の悲しそうな表情を見ては口を閉ざす。
そんなことを延々と繰り返していた連夜であったが、結局最後に言葉にしたのは。

「三本だけですよ」

「五本！！」

「え～～」

「五本ったら、五本！！　五本じゃなきゃ、やだやだやだやだやだ～～！！」

まるっきり子供そのものに地団太を踏んで喚き散らす玉藻。
その様子をすっかり呆れ果てた表情で見つめていた連夜であったが、玉藻のあまりの抵抗ぶりにとうとう根負けしてがっくりと肩を落とす。

「もう～～、太っても僕は知りませんからね！！」

「やったあああっ！！　ビール！　ビール！」

最愛の恋人の許可を勝ち取った玉藻は、その場で何度も飛び跳ねて身体全体で喜びを表現する。
その後、苦笑を浮かべている連夜をその場に残し、いずこかへと走り去って行った。

「あれ？　ちょっと、玉藻さん？　どこへ？」

連夜がそれに気がついて声を掛けようとしたときには、もうその姿はなく、連夜は呆気に取られてその場に立っていたのであるが。
ほどなくして。

「ただいま～！！」

「うわっ、びっくりした！！」

今、見送ったばかりの玉藻の声が背後から聞こえてきたことに驚く連夜。
振り向くとやたら嬉しそうな表情をした玉藻が、両手いっぱいに抱えた何かをどさどさとカートの中に放り込んでいる姿が見えた。
いったい何を入れているのかと、視線を下に向けた途端、連夜の顔が強張って固まる。

「ちょ、玉藻さん、これはいったいなんですか！？」

「ビールよ。あ、先に言っておくけどちゃんと約束を守って五本しか買ってないんだから。偉いでしょ。えっへん、ぷい」

服の上からでもはっきりとその大きさ形の良さのわかる胸をこれでもかと見せつけるようにして突きだして、鼻息荒く会心のどや顔をしてみせる玉藻、
そんな得意絶頂状態にある玉藻と、カートの中の惨状を交互に見つめていた連夜だったが、最終的になんとも言えない情けなさそうな表情になると、カートの中に山積みされた酒の缶の中からいくつかを取り、それを玉藻のほうへ見せつけるようにつきだす。

「これはなんですか？」

「チューハイ」

「これはなんですか？」

「発泡酒」

「これは？」

「カクテル」

「これは？」

「ワイン」

「他にもいっぱい種類ありますけど全部お酒ですよね」

「うん！！」

完全に引き攣った笑顔を浮かべて問いかける連夜と、心から嬉しそうな満面の笑みで答える玉藻。

対峙する二つの笑み。

「つ、つまり、『今日の晩御飯は酒のつまみに最高だから、とことん飲むわよ！！』ってことですか？」

「おぅいぇ～。ざっつらいっ！！」

ビシッと親指を突き出した拳を連夜のほうに突き出し、片目をつぶりながらぺろっとかわいらしく舌を出して見せる玉藻。

もう、これ以上の幸せはないぜと言わんばかりに、今、玉藻の笑顔は最高潮に輝いていた。

そんな玉藻の様子をひくひくと頬を引き攣らせて見つめる連夜。

盛大にお説教してやろうかと思ったが、指摘したとしても、恐らく相手はビールのことしか約束していないというのが目に見えていた。

しかも、ビールに関しては取り決め通りきっちり五本しか持ってきていないし。

一応、霊狐族や妖狐族をはじめとする狐獣人系の種族は異様に酒に強い種族であることで知られている。

恐らく先祖代々の宴会好きの遺伝子が子孫達に受け継がれているためと思われるが、その例にもれず玉藻も酒にかなり強い体質なのである。

家中が酒の空き缶でいっぱいになるほど毎日毎日ミネルヴァ達と宴会を繰り広げても、ある程度大丈夫なのはその体質のおかげであることはまず間違いはない。

・・間違いはないのだが。

彼女はうわばみというほど飲めるわけではないし、飲みすぎるとすぐに吐いてしまう程度には弱いのである。

元々はそれほど酒が好きだったとわけではなく、姉ミネルヴァに強引に付き合わされて飲むようになった玉藻。

連夜と付き合うまでは特別酒が好きだったわけではなかったのだが、一緒に夕食を取るようになってから、日に日にその酒量が増えている気がするのだ。

どうも原因は自分にあるのだと薄々感じているし、玉藻の身体の為にも是非とも摂生してほしいところなのだが。

（近いうちになんとか原因を探り出して根本的に解決しないとなあ）

そう思って心の中で深い溜息を吐きだす連夜。

とりあえずは、今日をなんとかしなければと、頭を切り替えて玉藻の酒を封じる方法について考え始める。

う～んと頭をひねって考えること三分ほど。

『ぴこ～ん』と、何かが閃いた連夜。

未だに勝利の笑顔を浮かべ続けている玉藻のほうに視線を向けると、それに負けないくらいの実に清々しい笑顔を浮かべて見せる。

「た～ま～も～さん」

「え、な、なに？　どうしたの連夜くん？　う、なに、その邪悪な笑み」

異様ににこにこしている年下の姿に気がついた玉藻。

彼の身体全体からあふれ出る邪悪な気配に思わず慄き、無意識に一歩足を退いてしまうのだった。

しかし、そんな玉藻の姿を見ても連夜は全然気を悪くしたようすもなく、むしろその邪悪な笑みを深めるととんでもないことを宣言する。

「突然ですが」

「え？　え？」

「晩御飯のメニューを変更します」

「え？」

「うどんにしま～す！！」

「えっ、えええええっ！？」

連夜の思わぬ反撃にたまらず悲鳴をあげる玉藻。

だが、そんな玉藻の姿をわざと見ないようにした連夜は、踊るような足取りで軽やかに麺類のコーナーへと移動。

さっさと某有名食品会社のうどんを三玉手に取ってカートの中に入れる。

その後、必要な調味料や生活雑貨をさっさと選んでカートに入れた連夜は、もうここには用はないとばかりにレジへと向かいだした。

「ネギはあったし、油揚げもありましたしねえ。かまぼこはもともとあるし、よしよし、材料に不安はありませんね」

ルンルンと鼻歌交じりに、上機嫌な様子でスキップするように進んで行く連夜。

そんな年下の恋人の姿を呆気に取られて見つめていた玉藻であったが、しばらくしてから我に返ると、ダッシュで後を追いかける。

そして、その背後からガシッと組みついて強引にその動きを止めると、いやんいやんと身体全体で猛抗議を開始するのだった。

「やだやだやだ、連夜くん、ちょっと待って、ストップ、ぷり～ず！！」

「連夜は急に止まれません。あしからずご了承ください」

「何言ってるのよ、どこの車なのよ、ちゃんと止まってよ、安全運転が大事でしょ！！　って、そうじゃなくてメニューに不満がありますですよ、コック長様！！　うどんはないっすよ、うどんは！！

それはないでありんすよぉぉぉっ！！」

「大丈夫です。ちゃんと玉藻さんの大好きな狐うどんにしますから。油揚げの大きいのいれますからね」

「やった～、油揚げ油揚げ！！　・・って、違うでしょ！？　そういう問題じゃないでしょ！？」

「あれ？　きざみうどんのほうがよかったでしたっけ？」

「う～ん、きざみうどんのほうが汁をよく吸ってくれるけど、普通のきつねうどんも捨てがたいなあ。　・・って、そういう意味じゃなくて、きつねうどんもきざみうどんも根本的にはどっちも同じでしょうが！！」

「わかりました。じゃあ、玉藻さんのうどんには卵もいれますから」

「うんうん、月見風きつねうどんもいいわよね。　って、ちっが～う！！　なんで？　なんでうどんなの？」

「いや、たまにはあっさりしたもののほうがいいかなと思いまして。でも、誤解しないでほしいんですが、決して、『うどんで、ビールのがぶ飲みはしないよね、くふふ』なんて性格の悪いことを考えてメニューを変更したわけではないんですよ、ええ。玉藻さん、麺類お好きだったでしょ？　このまえ美味しいうどんの汁の作り方を父に教えてもらったところでして、試してみようと思っていたんですよ。かなり美味しいので是非玉藻さんに召し上がっていただきたくて。あ、そうそう、今日買うことになるビールとお酒は一緒に飲んでいただいていいですからね。『うどんの汁とビールとお酒でお腹の中ざぶざぶになっちゃうかも、ぷぷ』なんて絶対思ってませんか

ら、どうぞ遠慮なく飲んじゃってください」

梅雨明けの夏空のような実に爽やかな笑顔と対照的に、連夜の口からは『お腹の中は真っ黒です』と言わんばかりの言葉が紡ぎだされる。

そんな連夜の姿を呆気に取られたように呆然と見つめ続ける玉藻。

二人は見事なまでに対照的な表情でレジの前に並ぶ。

誰がどう見ても、勝者と敗者ははっきりしていた。

もはや逆転は不可能。

二人のやりとりを興味深そうに見つめていた野次馬達の誰もがそう思った。

だが、ここで玉藻は伝家の宝刀を引き抜く。

絶対無敵、必殺必中の玉藻最大の奥義!!

玉藻は物凄く寂しそうな表情をわざと作り出すと、連夜のシャツを後ろからちょっと引っ張って注意を引かせる。

まだ前にレジ待ちの客が二人ほどいることを確認してから後ろに振り向いた連夜は、迂闊に振り向いてしまったことを大いに後悔した。

（し、しまったあああ!!）

心の中で盛大に絶叫する連夜。

彼の目の前には、瞳を真っ赤に晴らして瞳を潤ませ、今にも泣き出しそうな表情になった玉藻の姿。

（や、やヴぁ～い！！　この展開は！！）

相手の作戦を瞬時に悟った連夜。

なんとか相手にその作戦を行わせないために口を開きかけるのだったが、そのときには最早手遅れ。

ちらちらと顔を下に向けたり上に向けたりを繰り返しながら、如何にも『私が悪かったの』的な雰囲気を連夜にぶつけてきつつ、玉藻は連夜を一撃で沈める必殺の言葉を紡ぎ出すのだった。

「連夜くん、ごめんなさい。お、お酒全部もどしてくるから、ビールだけにするから。『回鍋肉（ホイコーロー）』と『八幡（はちまん）』風チャーハン作って。お願い。それともだめ・・かな？」

本当に心から反省していますといわんばかりの声、表情。

そして、トドメと言わんばかりに、ほろりと流れる一筋の涙。

完璧だった。

連夜を屈伏させる見事なまでに完全完璧な連続攻撃。

ただでさえ年上の恋人に対して激よわの連夜。

この必殺攻撃を跳ね返すだけの力も覇気もあるはずもなく、がっくりと肩を落とした連夜は力なく頷くしかできなかった。

「わかりました。じゃあ、今日は玉藻さんのご希望通り、『回鍋肉（ホイコーロー）』と『八幡（はちまん）』風チャーハン作ります」

「ほんと？」

「ほんとですよ」

「嘘つかない？」

「嘘じゃありませんよ」

「うどんじゃないよね？」

「うどんはまた今度にします」

「ヨッシャアアアッ！！」

しつこいまでに連夜に念を押し、今日の晩御飯が再び自分の大好物へと変更されたことを確認した玉藻。

あっというまに涙を引っこめると会心の笑みを浮かべて勝利の雄叫びをあげるのだった。

「本当にもう玉藻さんはズルイんだから」

「えへへ、連夜くんごめんね」

自分の周囲を跳ねまわりながら喜びを表現する玉藻。

そんな玉藻を呆れたように見つめていた連夜だったが、深い溜息を吐きだしたあと何とも言えない苦笑を浮かべてみせる。

「もういいですけど、ビール以外のお酒はちゃんと返してきてくださいね」

カートからビール以外の酒の缶を全部取り出して玉藻に渡す連夜。

玉藻は、てへへとバツが悪そうにそれらを受け取ると、またもや物凄い勢いで店内へと走っていった。

やれやれといった表情でそれを見送った連夜だったが、レジの順番が回ってきたことに気づきカートを前へと進める。

「しかし、み～ちゃんとは一度本気で話をしないといけないよなあ。二十歳になったばかりだっていうのにあの調子で飲み続けていたら、アルコール依存症か、成人病になっちゃうよ。本当にみ～ちゃんは、もう」

「連夜くん、一人で何ブツブツ言ってるの？」

「うわっ、びっくりした！！　た、玉藻さん、こっそり背後に立たないでくださいってば」

「えへへ、ごめんごめん。それよりも連夜くん、早くかえろ～。お腹すいちゃった～」

「はいはい、じゃあ、帰りましょうか」

ありふれた日常。
ありふれた毎日。

二人の日常は続く。

第八話　『二人の日常』　その３

己の魂の半身。
いや、そんな言葉程度では到底片づけられない。
間違いなくそれ以上の存在である最愛の恋人『連夜』。
彼を得てから、玉藻の日常は一変した。

ずっと今まで日々を生きるためだけに生きてきた玉藻。
灰色に満ちた世界に流れる時間の流れに身を委ね、それに溺れないようにして流されるままに流されるだけ。
自分を気にかけてくれる友人や師匠の存在、心躍らせる様な戦いを提供してくれるライバルたち、そして、あるいは小児科の医者になるという夢、それらが、玉藻の灰色の人生に色をつけてくれることはあったが、それはそのときだけのこと。
デフォルトで色がついたままなんてことは、生まれてから二十年、一度としてなかった。

だけど。

だけど、今は違う。

今の玉藻の目の前には、はっきりと色のついた世界が広がっている。
鮮やかで生気に満ち、そしてなによりも優しい色をした世界が、玉藻を毎日出迎えてくれるのだ。
それを玉藻に与えてくれるものがなんなのか、最早考えることすらバカバカしいほどはっきりしている。

『連夜』だった。

玉藻よりも三つ年下。
人間族の小柄な少年。

その彼が与えてくれる穏やかで安らぎに満ちた日々。
何物にも代えがたい彼と過ごす時間。

彼という存在を自分のモノにしてから一カ月半。
彼の体も、心も、そのほとんど全てを狂ったように貪り食って己のモノとし、自分の色で染め上げ続けた毎日。
しかし、それでもまだ玉藻は連夜を求め続ける。

すでに心の飢えは満たされてはいる。

連夜は玉藻には勿体ないくらい、出来すぎた恋人。
ほとんど毎日玉藻のところにやってきては、何くれとなく世話を焼いてくれる連夜。

彼はいつも玉藻に『好きです』と言ってくれる。
彼はいつも玉藻に『愛しています』と言ってくれる。
彼はいつも玉藻に自分ができる精一杯の全力で尽くしてくれる。

浮気なんかする気配など微塵もない、いつもいつも玉藻だけを見つめ続けてくれる連夜。
そんな連夜に愛されて、玉藻の心の飢えは十分に満たされているのだ。

だが、玉藻は連夜を求め続ける。
狂ったように連夜を求め続ける。
いや、恐らくすでに狂っているのだ。

玉藻は自分の精神が派手にぶっ壊れてしまっていることを自覚していた。

連夜と一緒にいると、感情をうまく制御できないのだ。

大学では感情をほとんど表に出すことのない『機械仕掛けの女神』と呼ばれている玉藻。

日々のほとんどを無表情かつ無感動に過ごし、親しい者達の前ではある程度感情の起伏を見せるものの、大きく爆発させたりは決してしない。

自分でも、『人』が当たり前のように持っている感情がないのではないかと疑ってすらいたのに。

連夜の前では簡単に感情が爆発する、いや、してしまうのだ。

ちょっとしたことで喜び、怒り、悲しみ、そして、笑う。

中でも強烈に発動してしまうのが、『嫉妬』の感情。

売店で女性店員に品物があるかどうか聞いているだけ、通りすがりの女子高生が道を聞いてきただけ、電車に乗ったときに彼の視線の先にたまたま奇麗な女性が立っていただけ、どれもこれもどうということのないことばかり。

自分でもそんなことはわかってる、よ～くわかってるはずなのに、そういう場面にちょっとでも遭遇するともうダメなのだった。

怒る、拗ねる、泣きわめく。

子供のすることだと頭ではわかっているのに、止められない。

自分が悪い、自分勝手なわがままだとわかっているのに、連夜に心ない言葉をぶつけて傷つけてしまい、あとで猛烈に後悔するのだ。

それでも、連夜は許してくれる、そんな自分をあっさりと受け入れてくれる。

そんな連夜が愛おしくて愛おしくて、自分にはできないことをあ

っさりとしてのけるそんな連夜が憎くて憎くて、めちゃくちゃにしてやりたくなって、連夜を蹂躙して壊す寸前で気がつく。

連夜を心から愛していることを。

毎日それの繰り返し。

よくもまあ、これだけ理不尽な目にあわしているというのに、愛想を尽かされないものである。

自分自身の傲慢さに呆れかえってしまうし、もし、本当に捨てられてしまったらと考えただけで体が震え涙が止まらなくなるが、とにかく今のところは許してもらえている。

しかし、いい加減この病的な嫉妬深さをなおさないと、恋人の堪忍袋の緒がいずれ切れてしまうのは間違いない。

ひょっとすると、どこまでも調子に乗っていいようにしたとしても最期まで連夜は玉藻の好きにさせてくれるかもしれないが、その場合、連夜自身の命に関わる重大事になってしまうだろう。

それは困る、絶対に困る。

連夜の命に関わるのは絶対にダメだし、連夜の健康や精神状態が悪くなるのもよろしくない。

よろしくないのだが、すぐに感情をコントロールできるようになるかと言えば、恐らくそれは無理。

いったいどうすればいいのかわからず、玉藻は自分のすぐ横でうつ伏せになり、ぐったりしている連夜の身体を引き寄せて抱きしめた。

自分よりも小さな体ではあるが、非常によく鍛え上げられて引き締まっている。

贅肉などどこにも見当たらない実に素晴しい肢体。

その肢体を今日も自分勝手に蹂躙してしまったのだ。

例によってその理由はあまりにも子供じみたもの。
自覚症状ははっきりあったが、結局破壊衝動を抑えることはできず、マンションの実家に恋人を無理矢理引きずり込み、衣服を強引に脱がしてあっというまに行為に及んでしまった。

それは獣でもしないような破廉恥極まりない所業の数々。
思い返しただけで、自分自身を今すぐ殺して埋めてしまいたくなる。

それにしても本当に腕の中の小柄な恋人は我慢強い人である。
普通女性からこれだけ屈辱的なことをされてしまったら、男のプライドとやらはズタズタで、許してもらえないどころか、殺意や憎悪を抱いてもおかしくないはず。
しかし、女である自分ですらわかるほどひどい扱いをしているにも関わらず、連夜はそれについて絶対に怒らない。
多少苦笑したりはするものの、事が終わったあと、いつもと変わらぬ優しい笑顔を浮かべて玉藻を許してくれるのだ。

（ごめんね、連夜くん、本当に本当にごめんね）

心の中で今日も盛大に謝りながら、その身体を抱きしめて、唇やら、ほっぺやら、うなじやら、首筋やらを存分にぺろぺろ舐める。
嫌われて捨てられることにでもなったら、一番困るのは自分だとわかっているのだが、どうしてもやめられない、止められない自分の乱行に玉藻の目から涙がこぼれる。

（どうして私ってこうなんだろう？　連夜くんのこと大事にするって決めたのに）

はふ～と悩ましげに溜息を吐きだして腕の中で眠っている恋人に

視線を向ける。
自分の命と同じ、あるいはそれ以上に大事な恋人。
とりあえず、それはまだ自分の腕の中にある。
そのことを確認した玉藻は、安堵の溜息を吐きだそうとしたが、ふと落とした視線の先で眠っていると思われた恋人と視線を合わせることになってぎょっとする。

「れ、連夜くん、起きていたの？」

「起きていましたよ。それよりもですね」

「れ、連夜くん、ごめんね。いっつもいっつも、本当にひどいことばかりしちゃって」

「いや、それはいいですよ。これくらいで玉藻さんの気が晴れるのだったら、別にどうということはないです」

「うう、本当に破廉恥で淫乱で乱暴者でごめんなさい、すいません」

本気で落ち込みがっくりと項垂れる玉藻。
そんな玉藻の頬にそっと小さな手を当てた連夜は、しばらくの間優しく撫ぜながら玉藻を慰める。
そうして、しばらく二人の間に静かで穏やかな時間が流れていったが、やがて何かを思い出した連夜は慌てたように口を開いた。

「もういいですってば。それよりも玉藻さん、あのですね、そろそろ」

「ダメ」

玉藻の腕の中で顔を真っ赤にした連夜が、物凄く何かを訴えかける視線を向ける。

しかし、玉藻は不意に顔を連夜のほうから背けると、その視線を合わせないようにしながら冷たく拒否の言葉を返す。

連夜がこれから何を言おうとしているのか、玉藻にはすぐにわかった。

だから、その言葉を聞きたくなかった、いや、聞くわけにはいかなかった。

完全に拗ねた表情になった玉藻は、連夜と視線を合わせようとはしないが、その身体をこれまで以上に強く抱きしめて拘束する。

それは連夜をどこにも行かせない離さないという無言の意思表示。

玉藻の意思をすぐに察知した連夜は、困りきった表情を浮かべて口を開く。

「いや、でもですね」

「ダメったらダメ」

「ダメと言われても、もうそろそろ時間が」

「ダメなの!!　絶対帰っちゃダメなの!!」

「いや、僕もできればそうしたいところなんですが」

「じゃあ、そうすればいいじゃない!?　なんで?　なにが不満なの?　私のことが嫌いなの?　そりゃそうよね、こんな自分勝手な女、普通好きになったりしないわよね!!」

「そんなことないですってば。玉藻さんのことは好きですよ」

「じゃ、じゃあ、今日は泊っていってよ!!」

「い、いやそれはちょっと」

「連夜くん、いっつもいっつも泊らずに帰っちゃうんだもん。朝起きたとき、どれだけ私が寂しい想いをしているか、連夜くん、全然わかってない!!　本当は一緒に暮らしてほしいけど、それは流石に難しいってことくらいわかってる。今はまだ、そのときじゃないってことくらいわかってる。でも、でもね、たまの土日くらいは泊って行ってよ!!　なんでいっつも夜になると帰ってしまうの!?　次の日にまた会いに来るんだったら、泊ったって別に問題ないじゃない!?　なんで?　ねぇなんでなのよぉ!!」

「ご、ごめんなさい。それについては本当に申し訳なく思っています。でもですね」

「『でも』じゃないでしょ!!　連夜くんのバカ、バカバカバカ〜〜〜〜〜ッ!!」

「あああ、玉藻さん、泣かないでくださいよ!!　僕だって、僕だって玉藻さんと暮らしたいですよ、できるなら、側にいてずっと玉藻さんのお世話がしたいです。だけどですね!!」

泣き喚く玉藻の顔を、苦悩に満ちた表情で見つめる連夜。

どこまでも平行線の二人の言葉。

二人とも、相手を苦しめたいわけではない、できればお互いの願いを素直に聞いてあげたい。

だけど。

一人は、これまで我慢に我慢に重ねてきて、その限界点をついに突破してしまったが故に。

一人は、これから先の二人の平穏な日常を守りたいと考えるが故に。
二人の主張は真っ向からぶつかりあい、引くことができないところに来ていたわけだが、その二人の激突は、思わぬ形で終局を迎える。

『ぴんぽ～ん』

部屋の中に鳴り響くチャイムの音。
それを聞いた二人は一瞬にして口をつぐんで言い合いをやめると、互いの顔を見合わせる。

「誰かしら、こんな時間に？」

布団の中で身をよじり、壁にかけてある円形型の壁掛け時計に視線を向ける玉藻。
時計が示す時間は夜の二十一時。
深夜ではないが、『人』が訪ねてくるには少しばかり遅い時間。
平日であれば玉藻の悪友達が酒盛りをするために押しかけてくることも珍しくはないのだが、土日は彼女達のリーダー格であるミネルヴァ・スクナーが家族と団欒したいからという理由で招集をかけないためやってくることはまずない。
そして、今日はその彼女達がやってくるはずのない土曜日。
他にマンションの回覧板という可能性もあるのだが、それ以外に玉藻の家に誰かが来るなんてことはない。
それ故に玉藻は非常に怪訝な表情を浮かべて小首をかしげて見せていたのだが、彼女の目の前にいる恋人は少しばかり違っていた。
急いで玉藻の腕から抜け出すと、そのまま布団から飛び出して大慌てで衣服を身につけ始める。

「や、やばいやばい！！　もう来ちゃったよ。あと、一時間は大丈夫だと思ったのに、考えが甘かったかぁ」

そう言ってあっという間に衣服を身に着けた連夜は、玉藻の寝室が駆け出し台所やリビングを超特急で片づけ始めた。

「れ、連夜くん、いったい全体どうしたの？」

「どうしたのじゃありませんよ！！　玉藻さんも早く服を着てください！！」

「何、慌てているのよ？　どうせ、回覧板か何かよ？」

「違います、回覧板じゃありません！！　ともかく早く服！！　服を着てくださいってば！！」

とんでもなく素晴らしいプロポーションを惜しげもなく晒しながら素っ裸で寝室から出てきた玉藻は、まるで何かの痕跡を必死に消そうとしているかのように掃除片づけを行っている連夜を怪訝そうに見つめる。

連夜は、そんな危機感ゼロの玉藻に大声で注意をしようとするのだが、何かに気づいて玄関のほうに一瞬視線を向ける。

そして、二度目のチャイムが鳴らないことを確認。

しばらく待ってもチャイムが鳴らないことを確認すると、短く安堵の溜息を吐きだして再び玉藻のほうに視線をもどし、囁くようにして玉藻に注意を促す。

玉藻はそんな連夜の姿を困惑しきった表情で見つめていたが、あまりにも連夜が必死に頼み込んでくるので渋々寝室にもどり、部屋の中に散らばっている下着、Ｔシャツ、ジーパンを拾い上げて身につけ始める。

「なんなのよもう。いったい何がどうなってるの？」

いつにない年下の恋人の慌て方がどうにも腑に落ちない玉藻。

玉藻のかわいい恋人は、そのかわいらしい外見とは裏腹に実に腹の据わった人物である。

滅多なことでは驚かないし慌てることもない。

にも関わらず、そんな恋人が今日に限って大いに慌てふためいている。

こんな恋人の姿を見るのは初めてかもしれない。

「そういえば連夜くん、回覧板じゃないって断言していたわね。ひょっとして連夜くん、誰が来たのかわかってるのかしら？」

ぶつぶつ言いながらも一応服を全て身に着けた玉藻は、再びリビングにもどってくると相変わらず忙しく片づけを続けている連夜に声をかけようとした。

そのとき。

『ぴんぽんぴんぽ～ん』

再びチャイムの音が鳴り響く。

「はいはい、わかったわよ。出ればいいんでしょ、出れば。もう、いったい誰よ、こんな時間に」

「ちょ、ま、た、玉藻さん、待ってください！！」

憤懣やるかたないという表情を浮かべた玉藻は、訪問者の正体を確かめるべく玄関へとスタスタ歩いていく。

だが、その玉藻の行動に気がついた連夜は、慌ててその前に先回りすると、両手で玉藻を押しとどめる。

「連夜くん、何やってるの？　誰が来たのか確かめないと」

「ちょ、ちょ、ちょ～～っと待ってください。あと、声の大きさをもっと落としてください！！」

「え、なにそれ、どういうことよ？」

「いいから、僕の言う通りにしてください、お願いします！！」

両手を合わせて必死に拝み倒した連夜は、玄関の目の前でようやく玉藻の足を止めることができた。

そのことにほっと胸を撫で下ろした連夜であったが、すぐに人差し指を口の前に持って行くジェスチャーで静かにするように玉藻に指示。

その後、玄関扉の覗き穴からそっと外の様子を伺ったのだが。

「や、やっぱり」

大きく眼を見開いて外の様子を確認した連夜は、がっくりと肩を落として項垂れる。

そんな連夜の様子に玉藻はいったい外に何があるのか問いかけるべく口を開こうとしたのであるが。

恋人に問いかけるまでもなく、その答えは外から聞こえてきたのであった。

『た～ま～ちゃ～ん。あっそび～ましょ～！！』

年若い女性達から発せられたと思われる大合唱。
その声の主達を、玉藻はいやというほどよく知っていた。

「げげげっ！！　み、ミネルヴァ達なの！？」

第八話　『二人の日常』　その４

「ねぇねぇ、たまちゃんいないんじゃない？」

「そんなことないって。絶対いるって。まぁ、寝てるかあるいはお風呂入っているかもしれないけどさ」

「まだ二十一時だし寝てるってことはない気がしますけど、お風呂はあるかもですね～。たまちゃん、お風呂大好きですし」

城砦都市『嶺斬泊』東地区、閑静な住宅街にある十階建てのマンション。

そこの二階通路のある一室の玄関前に集まったのは、三人の女性達。

それぞれみな、『人』並み以上の容姿を持つ美人ばかり。

彼女達はこの城砦都市きっての名門大学である『与厳大学』の学生達で、中学校以来の幼馴染の関係。

日中はそれぞれ専攻が違うため別行動であるが、放課後や休みとなると集まって旅行や食事会（という名の酒盛）をする仲の良い間柄。

今日は一応集まる予定はなかったのだが、天魔族のリーダーから急遽招集がかけられて飲み会が行われることになってしまった。

場所は彼女達のいつもの集合場所。

メンバーの一人で、美人なのにいっつも仏頂面をしている愛想の全くない霊狐族の友人の家、つまりここであった。

「どうする？　もう少し粘ってみる？　それとも場所変える？」

ここに集まった三人のメンバーの一人、メンバー最大の酒豪でも

ある西域半人半蛇族（ラミア）のリビュエー・シーガイアは、大きな蛇の胴体をしきりにうねらせて動かしながら残りの二人を見つめる。

「もうちょっと粘ってみようよ。絶対たまちゃんここにいるって。なんかわからんけど、すぐに出てこれないだけだと思うしさ」

「そうかな～」

「よく考えてみなよ。親戚とは小学生の頃に縁を切ってて音信不通、バイトもしてない、ましてや恋人なんて一度もいたことがないたまちゃんだよ？　どこかに出かけていないなんてことあると思う？　あの子多分、男と一回もデートとかしたことないよ。あと断言しておくけど、あの子間違いなく処女。下手すると三十路越えてもそういうことないんじゃないかなあ」

「「ありえるわね～」」

あまりにも失礼な内容をしれっと断言するリーダーであったが、残り二人はその内容を否定するどころかあっさりと肯定。

しかも『うんうん』と何度も頷きを返し、妙に納得していたりする。

そして、なんとも言えない複雑な表情で心配そうに溜息を吐きだす。

「合コンとかに無理矢理にでも連れていったほうがいいのかな。あまり好きそうじゃないから今まで誘わなかったけどさ」

「たまちゃん潔癖だからねぇ。でも、一回くらい経験させておいたほうがいいかも」

「無理矢理は反対ですけど、説得はしたほうがいいですわね。どこかの会社のお局様になって後輩のみなさんから鬱陶しがられる姿が」

「「容易に想像できるよねえ」」

『ダメです、玉藻さん！！　我慢してください！！』

『お願い、放して連夜くん！！　こいつら全員ぶっ殺す！！』

「そうそう、そんな風に言ってすっごい嫌がりそうだよねえ」

「でもねえ、全く男を知らないまま歳を重ねていくっていうのもどうかと思うんだよなあ」

「別に結婚とかはしなくてもいいとは思うけど、やっぱ相手は必要だよねえ」

「うんうん」

「ところで皆さん、いま、たまちゃんの声が聞こえませんでしたか？」

「いや～、特に聞こえなかったけど、リーダー何か聞こえた？」

「うんにゃ、聞こえなかったよ。くれよんの空耳じゃない」

「あら、そうですか。確かに聞こえたような気がしたのですけどねぇ」

そう言って声が聞こえたと思われる玄関のほうにおっとりと視線

を向けるのは、人頭獅子胴族（スフィンクス）のクレオパトラ・ポンペイウス。
黒曜石のような黒髪黒眼、きめの細かい白い肌の美しい女性の顔、豊かな二つの双丘がある女性の胸、しかし、その下半身と肩から生えた二本の前肢は堂々たるライオンのそれ。
背中からは大きな二枚の白鳥の翼が生えていて、なんとも異様で神秘的な美しさを持つ女性。
親はこの都市有数の実業家で、『害獣』ハンター用武器で有名な大手メーカーをはじめとするいくつもの会社を経営。
要するにいいところのお嬢様、それがクレオパトラであった。
彼女はしばらく声がしたと思われる玄関の扉のほうを凝視していたが、やがて一つ溜息を吐きだすと、妙に改まった表情で自分達のリーダーのほうへと視線を向け直した。

「ねぇ、リーダー。いい機会だからちょっと真面目な話をしたいのですけど、いいかしら？」

「なによ、くれよん、真面目な顔しちゃってさ。あ～、喉乾いた。とりあえず、ここで飲んじゃおっと」

人頭獅子胴族（スフィンクス）のクレオパトラの言葉に、いい加減に答えを返した彼女達のリーダー、金髪碧眼の超絶美女ミネルヴァ・スクナーは、酒盛りの為に持って来ていたスーパーの紙袋の中からビールの缶を一個取り出して蓋を開ける。
そして、それを口につけて豪快に一気飲みしようとしたのであるが。

「多くは言わないので一つだけちゃんと聞いてください」

「ぐびぐび。なによ、くれよん」

「いい加減諦めていただけませんか、あの子のこと」

「ぶふっ！！」

さらっとクレオパトラが放った一言に、思わず鼻からビールを噴き出すミネルヴァ。

「げ、げほっ、ごほっ、き、急になに言いだすのよ、くれよんったら！？」

「え～、リーダーまだ諦めてなかったの？　もういい加減にしなよ」

クレオパトラの言葉の意味を敏感に察知したリビュエーが、呆れ果てたと言わんばかりの表情で盛大にむせるミネルヴァに視線を向ける。

「ふ、二人ともなに言ってるのさ！？　意味がさっぱりわからないんだけど。な、なんのことかな？」

「今更私達にとぼけて見せてもしょうがないとおもうのですが？いったい何年あなたと付き合っていると思ってるんですか？」

「そうそう。だいたいさぁ、リーダーの持ち物ってほとんどすべてあの子に選んでもらったり買ってもらったりしたものばっかでしょ？　服もカバンも化粧品もアクセサリーも、筆記用具からお弁当までぜ～んぶあの子が選んだか、買ってくれたものばかり。違う？」

「それに、たまちゃんがいないときの話題といえば、あの子のことばかりですよね。あ、誤解のないように言っておきますけど、別にそれが苦痛ってわけじゃないですよ」

「うんうん、私達もあの子の近況は気になるから話してくれて全然構わないんだけどさ、でも、リーダーの気持はバレバレさねぇ」

「う〜〜〜」

二人の容赦のない追及に、ミネルヴァはマンションの通路に座り込むと、不貞腐れたような顔でぷいっとそっぽを向いてしまった。

「あ、あんた達には関係ないでしょ！？　ほっといてよ！！」

「そういうわけにはいきません。あの子も今年十七歳、来年には十八歳になって結婚できる年齢になります」

「リーダー、絶対我慢できないよねえ。いや、もうすでに理性の阻止限界点突破してるんじゃないの？」

「うるさいうるさいうるさ〜〜い！！　もう、なんなのよあんた達は！？　『人』のことより自分のこと心配しなさいよ、もう！！」

「ええ、ええ、勿論自分のことを心配してます。大学卒業後は私も結婚するつもりですし、そのためにはいいお婿さんを探さないといけないですからね」

「でもねなかなか優良な物件ってないのよねぇ」

話の始めでは、確かに心から心配そうな表情を浮かべていたクレオパトラとリビュエー。

しかし、今、彼女達の表情には妙に妖しいというか艶っぽいというか、まるでここにはいない獲物を狙っている肉食獣のような笑顔

が。
それを見たミネルヴァはすぐにその意味を察して、敵意剥き出しの視線を二人へと向ける。

「ちょっと、あんたたち、まさか」

「私ね、大学卒業後は父の後を継いで『害獣』ハンター用の武器製造販売に携わるつもりなんです。そして自分の会社を業界トップにのしあげる。それが私の夢。そのためには、私のことを支えてくれるパートナーが必要。知識が豊富で、頭が良くて、精神的にも強くて、なによりも優しい『人』」

「うんうん、いいよねえ、そういうパートナー。私はさ、大学卒業したら、術師用道具の開発部門に就職するつもりなんだよね。相当な激務でさ、家事とか一切やる暇ないと思うんだ。だから、結婚相手としては、家庭に入って家のこと守ってくれる『人』がいいなあ。料理がうまくて、洗濯とか掃除とか嫌がらずにやってくれて、あと、私好みのかわいい男の子だったりすると尚いいんだけどなあ」

うっとりした表情で自分達の理想の結婚相手について語る二人の乙女。
だが、どう聞いてもそれは特定の相手を指し示しているとしか思えないし聞こえない口調。
しばしぽかんと口をあけて二人のことを見つめるミネルヴァ。
しかし、その特定の相手が誰であるかをすぐさま察すると、凄まじい怒りの炎を瞳に浮かべ二人を睨みつける。

「好き勝手いってくれちゃってるけど、あんた達にはやらんからね。絶対絶対ぜ〜〜ったいにやらんからね！！」

「あ～ら、でもそれはあなたが決めることじゃないないですよね？
決めるのはあの子自身」

「そうそう、リーダーがなんて言おうとも、あの子が私のことを選んだりなんかしちゃったりなんかしたら、くふふ」

「ないないない！！　絶対な～い！！」

「「なんでよ！？　選ぶかもしれないでしょ！？」」

「そんなことさせるかぁ、させるもんかあああああっ！！」

次第にヒートアップしていく三人の女性達。
夜の二十一時を回っているということもあり、マンションの通路には彼女達以外の『人』影はない。

ないがしかし。

彼女達のすぐそばには、彼女達以外に二人の『人』物の姿があった。
それは彼女達が陣取るマンションの一室の玄関扉の向こう側。
息を潜めて彼女達の様子を伺う二つの『人』影、それは。

「三人に意中の『人』がいるっていうことは知っていたけど、まさか、全員同じ『人』だったなんて」

三人の会話を盗み聞きしていた玉藻は、その内容を知って呆然となっていた。
小学校以来の大親友と中学校以来の二人の親友達は、自他共に認める美女揃いであり、男女問わず非常にモテル。

しかも、三人とも玉藻と違って性に対して非常に大らかな考えの持ち主であるため、不特定多数の恋人達と平気で付き合うし、肉体関係を持つこともザラにある。

だが、彼らの全てが彼女達にとって仲のいい『お友達』でしかないこと、それ以上では決してないことを、玉藻はよく知っていた。

玉藻にとっての連夜。

いや、そこまでいかなくても、ある程度『本気』になって恋をしているとわかるような相手を玉藻は見たことがない。

彼女達にとって『男』（ごくまれに女性が相手のときもあるが）はあくまでも『遊び』であって、『本気』ではなかった。

一度として『本気』の彼女たちを見たことはなかったはずなのに。

「全員本気だよね、あれ」

マンションの通路で大声を張り上げて舌戦を繰り広げている友人達。

ちょっと聞いただけではふざけているようにも聞こえる内容だが、十年近く彼女達と付き合いのある玉藻には、それが紛れもない本気であることがはっきりとわかる。

おちゃらけているような口調、半分笑い声を交えて口から零れて行くいくつもの言葉。

しかし、その目が全然笑っていないことを、その口調の中に隠しきれない『本気』が見え隠れしていることを、玉藻は見逃さなかった。

「どうしよ、私出て行って止めたほうがいいかな。今は冗談半分みたいな感じだけど、いつ『本気』の喧嘩になってもおかしくないよね、この雰囲気」

玄関の扉の内側、小さな覗き穴から見える殺伐とした光景をはらはらしながら見守っていた玉藻だったが、ふとこういう揉め事処理が得意な専門家がすぐそばにいることを思い出して振り返る。

「ねぇねぇ、連夜くん、やっぱり私、出て行って止めたほうがいいかな？　どう思う？　って、どうしたの連夜くん？　なんで突っ伏しているの？」

揉め事処理の専門家にアドバイスをもらおうと振り返った玉藻であったが、そこには、何故か両手両膝を床について盛大に落ち込んでいる恋人の姿が。

「あああああ、この『世界』を司る全知全能なる超絶管理者様、どうかお願いです。あそこで言い争っている『人』達の話題に僕が関わっていませんように！！　どうか、どうかお願いですから、僕にはなんの関係もないようにしてください！！　してくれなきゃいやあああああっ！！」

「え？　え？　いったいなんのこと？　それになんで泣きそうになってるの、連夜くん？」

意味不明なことを呟きながら半泣きになっている連夜の姿を見て慌てて側に駆け寄っていく玉藻。

恋人の顔を心配そうに覗きこみ、よしよしと背中を撫ぜてやると、連夜はなんとか立ち直ったようで、片手でぐしぐしと目元を拭ったあと、引き攣った笑みを浮かべて玉藻のほうに視線を向ける。

「す、すいません、玉藻さん、だ、大丈夫ですから」

「いや、そう言われても全然大丈夫そうに見えないんだけど」

「ほんと大丈夫ですから、見苦しく取り乱してしまってすいませんでした。それよりも玉藻さん、仲裁に出て行かれるのは非常に素晴らしい御考えだと思います」

「やっぱりそう思う？　うん、わかったちょっと行ってくるね」

「あ、でもちょっと待ってください」

連夜の後押しを受けてどこかほっとしたような表情になった玉藻は、早速玄関の扉を開けて出て行こうとする。

しかし、鍵を掴んで回そうとしたそのとき、後ろから迫ってきた連夜が素早く玉藻の手を掴んで止める。

「どうしたの？」

「玉藻さん、大変申し上げにくいんですけど、出て行くのは僕が姿を消してからにしていただけませんか？」

「姿を消すって？」

怪訝そうに見つめ返してくる玉藻の顔を、なんともいえない複雑な表情で見つめる連夜は、顔をちょっと伏せて溜息をひとつ吐きだしたあと、ゆっくりと口を開いた。

「隠すつもりはなかったんですが、あの中には今ここでどうしても顔をあわせたくない『人』がいるもので」

物凄く言いにくそうに言葉を紡ぐ連夜。

正式に恋人同士になってから一カ月半、自分に関するある程度の

ことは目の前の恋人にポツリポツリと話してきたのではあるが、大きな秘密をいくつかまだ話せずにいた。
中でも特にドデカイ秘密なのが、扉の向こうでぎゃ～すか喚いている人物のこと。
どう話したものかと苦悩し首を捻っていると、予想外の言葉が恋人の口から放たれる。

「そっか、連夜くん、ミネルヴァとは会いたくないよね」

「ええ、そうなんですよ。って、玉藻さん、ご存知だったんですか!?」

恋人の口からあっさりと零れおちた個人名に、連夜は驚きの声をあげる。
そんな連夜の様子を見た玉藻は、バツが悪そうに表情を曇らせる。

「う、うん。あんまり愉快な話じゃないし、連夜くんも話したがらないから、敢えて話題にしなかったんだけど」

「そ、そうだったんですか」

あまりのショックに呆然としたままでいる連夜に『知らないふりしてて、ごめんね』と呟いて、そっとその身体を抱きしめる玉藻。
そう、玉藻は知っていた。

恋人連夜と親友ミネルヴァが抱える秘密の一つを。

それは

二人が不倶戴天の仇敵同士であるという秘密。

玉藻の恋人である人間族の少年連夜には、善良な一般高校生という表の顔とは別に、歓楽街に出没する仮面の怪人『祟鴉（たたりがらす）』という顔がある。

仮面の怪人『祟鴉（たたりがらす）』は夜の街の平穏が乱れる場所に現れて、凄まじい嵐を巻き起こして、夜の世界に平穏を取り戻したあと去っていくわけだが、その嵐に巻き込まれた者達の中にミネルヴァの親しくしている友人達が何人かいた。

そのときなぜ、ミネルヴァの友人達が巻き込まれたのかについての詳細については玉藻も、そして、ミネルヴァ本人も知ってはいない。

ただ、はっきりわかっているのは、巻き込まれた彼らが『祟鴉（たたりがらす）』にとんでもなくひどいめにあわされたという事実。

それを知ったミネルヴァは激怒し、自分の友達の仕返しをすべく、暇を見つけては『祟鴉（たたりがらす）』を探し彼のテリトリーである城砦都市『嶺斬泊』最大の歓楽街『サードテンプル』に足を運んでいるようだ。

玉藻にとってミネルヴァはかけがえのない大親友である。

小学校以来、わけありの自分とずっと一緒にいれくれた大切な友人。

その友人が『祟鴉（たたりがらす）』を許すことのできない仇敵と定めたのである。

本来なら一緒になって捜し出し、ケリをつけなくてはいけないのであるが、玉藻には二つの理由からそれをすることができなかった。

一つ、件のカラスにひどいめにあわされた連中は、ロクでもない悪党ばかりだということを玉藻が知っていたこと。

その友人達は、ミネルヴァの前では非常に善良なフリをしていたが、裏に回っては下級種族に対してめちゃくちゃひどいことをしていたのを玉藻はよ～く知っていたしその現場を何度も目撃もしていた。

ミネルヴァの友人でなければ玉藻自身が制裁を加えてやりたかったほどなのである。

そんなクズ達の仇を討つなどまっぴら御免、絶対に御断り、むしろ、内心では『祟鴉（たたりがらす）』よくやった、ぐっじょぶ！！　と快哉していたほどなのだから。

そして、もう一つの理由、こっちは特にデカイ。

ミネルヴァが追い求める『祟鴉（たたりがらす）』の正体は、玉藻が愛して愛して愛しすぎておかしくなってしまったほどに愛している恋人の連夜なのだから。

いくら親友の頼みであっても絶対に頷くわけにはいかないし、連夜をミネルヴァの前に突き出して渡すなんて絶対に考えられないしありえない。

二人にはどうあっても戦ってほしくなどないが、もし、二人が激突することになったら、玉藻は最終的に連夜の側にまわるだろう。

と、いうか、連夜をさらって全速力でその場から逃げる。

ミネルヴァと正面から戦っても負ける気はしないが、理由が理由だけに戦いたくはない。

玉藻にしてみれば、連夜とミネルヴァ、二人ともやはり大事だし、ともかく戦ってほしくはないのだ。

「あなたははっきり言ってくれなかったから推測でしかなかったけど、やっぱりそうなのね。私の家に泊らずにいつもいつも夕食後に帰ってしまうのは、ミネルヴァのせいね？　ミネルヴァ達がうちの家をたまり場にしていて、不定期だけど夜に泊りにくることがあることをあなたは知っていた。だからなのね？」

「あ～、まぁ、はい、そうです。できればまだここで顔を合わせる時ではないと思っているので」

「言ってくれればよかったのに」

「そうなんですけど、物凄く言いづらいというか。あの『人』の外

面だけ知っている『人』ならともかく、あの『人』と十年近く付き合いがあって、裏の裏まで知り尽くしている玉藻さんにその関係を打ち明けるのはちょっと勇気がいるというか」

「わかるわぁ。なかなか言えないわよね。あなたとあいつの関係なんて迂闊に『人』に聞かせられないというか、伏せておきたいというか。わたしがあなただったら、因果の彼方に消滅させてしまいたいくらいだものね」

「いや、あの、流石にそこまでではないんですけど。っていうか、大親友の玉藻さんに『わかる』って言われると、いくらあの『人』でも相当にへこむと思うので、そこは『わからない』でいてあげてください」

「え？　なんで？　絶対そういう関係ではいたくないでしょ？　普通？　あいつと『そういう関係』（意味：仇敵同士）って、めっちゃいやじゃない？」

「いやいやいや、待ってください、それは言い過ぎですって！！　まあ、そういいたくなる日がないわけではないですし、確かにめちゃくちゃ疲れますけど、僕としては『そういう関係』（意味：姉弟同士）はそこまでいやじゃないですって」

「え？」

「え？」

表面上は成り立っているように見える会話であるが、実は全然噛み合っていないことに、うっすらと気がつき始めた二人。

当然のことながら、玉藻は、連夜とミネルヴァが仇敵同士故に出

会いたくないのだろうと思っていて、そういうつもりで話を進めているのだが、それは当事者である連夜の思惑とはかなり違っていたりする。

連夜にしてみれば、それよりももっと重大なある秘密がミネルヴァとの間にあり、てっきりそれを玉藻に知られてしまっていたと思っていたのであるが、一連の会話からどうも違うようだと気がつき玉藻のほうに困惑の表情を向ける。

二人は、お互いの認識を合わせるために、胸の内に広がる疑問を口にしようとしたのだが。

ちょうどそのとき、外から一つの絶叫が聞こえてきた。

「よ～～っし、わかった!!　ここでウダウダ言ってても仕方ない。こうなったら、白黒ハッキリさせようじゃないの!!」

それは西域半人半蛇族（ラミア）の女性リビュエーの声。

穏やかならざる気配が玄関の扉越しにも伝わってきて、連夜と玉藻は一瞬顔を見合わせると、急いで玄関の覗き穴へ。

そこから外の様子を伺ってみると、天魔族、西域半人半蛇族（ラミア）、人頭獅子胴族（スフィンクス）の三人の女性が、今にも互いに飛びかかって行きそうな凄まじい形相で睨み合っているのが見えた。

「や、やばい。ミネルヴァも、くれよんも、りっち～も、本気でヤルつもりだわ!!止めなきゃ!!」

大慌てで玄関の扉の鍵を開けて外へと飛び出して行こうとした玉藻であったが、鍵を開ける寸前、その耳に意外な言葉が飛び込んでくる。

「いいわね、これから携帯かけて、本人に直接聞くわよ!!　どう

いう結果が出ても、恨みっこなしだからね！！」

「え？」

てっきり血で血を洗う殴り合いが始まると思っていた玉藻は、その言葉に一瞬硬直し鍵を開けるのをやめる。

「や、やめてください、りっち～！！　そ、それだけは、それだけはぁ」

「そ、そうよ、りっち～、自暴自棄はダメ。ふ、蓋を開けなければいつまでも可能性は五分五分なのよ？　『シュレティンガーの猫』なのよ！？」

「え～い、くれよんもリーダーも見苦しいわよ！！　この期に及んでヘタレたこと言わないの！！」

「「だ、だってぇ！！」」

「だってもへちまもない！！　え～い、女は度胸！！」

「「あっ！？」」

盛大にあがる悲鳴の中、ミネルヴァとクレオパトラの制止を振り切って、手にした携帯念話を作動させるリビュエー。

リビュエーを止めることができなかった二人はその場で石化してしまったかのように硬直。

そして、いったいどうなるのかと再び覗き穴にもどって外の様子を見守る玉藻。

四人の女性達から発せられる様々な感情の渦のせいで、完全に空

気が固まってしまった玄関前のフィールド。
ちょっとでも動けば『ヤラレル！！』みたいな妙な気配に支配された空間に、誰もが耐えきれなくなっていた、

まさに、そのとき！！

『ぴろぴろぴろ～、ぴろぴろぴろ～』

玉藻の真後ろから聞こえてくる、微妙に間抜けな警告音（アラーム）。
素早く振り返った玉藻の目に、その場から抜き足差し足で立ち去ろうとしている恋人の姿が。

「連夜くん、何やってるの？」

「え、えっと、その、と、トイレに」

いつもと変わらぬにこやかな表情。
しかし、なぜか恋人の顔からは冷や汗が滝のように流れ落ちているのを玉藻は見逃さなかった。
それどころか連夜の手には何かが握られていることも見逃さなかったし、その何かから間抜けな警告音（アラーム）が鳴っているのも見逃さなかった。
そして、トドメとばかりに聞こえてくる外からの声。

「変ねぇ、着信音は鳴っているみたいなのに、あの子出ないわ。『ぴろぴろぴろ～、ぴろぴろぴろ～』って。あんな間抜けな着信音使ってるのあの子くらいだから、番号かけ間違えたってことはないはずなんだけど」

一瞬にして玉藻の顔が笑顔に変わる。

恐ろしいまでのにこやかな笑顔に。
それと対照的に笑顔が完全に引き攣った状態になる連夜。

「連夜くん？　それはいったいなにかしら？」

物凄く優しげな声、穏やかな笑顔。
が、しかし、連夜は知っていた。
今、玉藻がどんな状態であるかを。

玉藻がいま。

大激怒していることを。

「こ、これはですね」

「これはなに？」

「これはその」

「なにかしら？」

「こ、これは、これは、これはキッチンタイマーです！！」

「嘘つけ！！」

第八話　『二人の日常』　その5

ズンズンと荒い足取りで玄関扉の前から戻ってきた玉藻。
目の前で泳ぐようにして両手をばたつかせて慌てに慌てている最愛の少年にギロリと視線を向ける。

「連夜くん。私にわかるように説明してもらえるかしら？」

大輪の花のような笑顔。
しかし、口元はぴくぴくと引き攣っているし、目は全く笑っていない。
その様子を見てとった連夜は、誤魔化すことはほとんど不可能と悟り、大きく深いため息を一つ吐き出した。

「どうしても説明しないと駄目ですか？」

「どうしても説明してくれなきゃ駄目よ」

「た、大した関係じゃないんですよ、本当に」

「大した関係じゃないなら説明するのは簡単よね？　さっさと説明してちょうだい」

「あうう」

誤魔化すことはできないとわかってはいたが、それでもなんとか逃れられないものかと抵抗してみる連夜。
しかし、予想通りとりつくしまは全くなし。
それどころか目の前の美しい恋人の顔のあちこちには、恐ろしく

ぶっとい青筋がいくつも浮き上がり始めていた。
もはやこれまで、そう観念したような表情を見せた連夜は、そっとベランダに近づきもう一度ため息を吐き出す。

「わかりました。ではお話いたします」

「うんうん、早く話して。早く早く」

外に広がる美しい夜景を、なんともいえない憂いを帯びた表情で見つめていた連夜であったが、やがて、覚悟を決めたように口を開いた。

「外にいる方達と僕との関係、それは」

「それは？」

「そう、それは今から五百年前、大陸の西の果てで起こった壮絶な騎士達の戦いで・・いたい痛いイタイッ！！　ちょ、玉藻さん、めっちゃイタイ！！　すっごい痛い！！　ムチャクチャいたいっ！！　ほっぺつねらないでくださいってば、ちょっとぉ！！」

容赦なくギリギリとほっぺを抓りあげられて、たまらず悲鳴をあげる連夜。
どれだけ怒りのボルテージがあがろうとも、これまで最愛の恋人である連夜に対して暴力的なことは一度たりともしたことがない玉藻。
しかし、流石に今回のことは内容が内容だけに穏やかでも平静でもいられないようで、苛立ちを隠そうともしないままほっぺをつまんだその手を放そうとはしなかった。

「れ～ん～やぁ～くぅ～ん。あたしがぁ～、物凄い短気な性格だってことはぁ～、よぉ～くわかってるでしょぉ？　私はね、オタク受けしそうな厨二話が聞きたいんじゃなくて、あなたとリビュエー達の話が聞きたいんだけどぉ、私の主旨がはっきり伝わらなかったのかしら？」

「い、いえいえとんでもない。ちゃんと伝わっていますとも。ですけどね、ちょっと空気が重くなんかなったりなんかしちゃったりしていたので、ちょっとだけ場を和ませようかな～なんてね。と、ともかくここは一つ、穏便に平和に話し合いませんか？　ね、ね」

「あらあらあら。でもね、流石に最愛の『人』が浮気しているかもしれないってことになれば、どんな恋人でも平和主義者ではいられないと思うんだけど？　それについてはどう思う？」

「あ～、う～、それは確かにそうですねぇ～。そうですけど、とりあえず、ほっぺつねるのをやめていただけないでしょうか、すっごい痛いです」

「ちゃんと話してくれたら、すぐにやめるわよ。でも、今度誤魔化そうとしたら別のところを引きちぎる・・のはマズイから、十八歳未満御断りの映画でも上映できないような物凄くエロいことするからね。あ、具体的に言っておいたほうがいい？」

「いえ、結構です。今すぐ本当のことをしゃべりたくなりましたから」

誰がどう見ても、明らかに脅しのレベルを超えているとわかるギラギラした妖しい光。

そんな光が宿った真っ赤な瞳が、自分の全身を舐めるように粘っ

こく見つめていることに気がついた連夜は、全力かつ高速で首を横に振ってみせた。

「じゃあ、今しゃべる、すぐしゃべる、早くしゃべる!!　外の三人と連夜くんはどういう関係なの!?」

「えっと、それは」

「それは!?」

連夜の顔に、ズイッと自分の顔を近づけてくる玉藻。

顔そのものは宝石にも負けない素晴らしい美貌だが、纏うオーラは悪鬼羅刹のそれ。

あまりにも強烈なプレッシャーに思わず失神してしまいそうになるのをグッとこらえ、連夜はなんともいえない複雑な表情でぽつりとつぶやいた。

「許婚なんですよ」

「へ?」

「だから、リビュエーさんとクレオさんは、親同士が決めた僕の『許婚(いいなずけ)』なんです」

「ああ、そう、イイナズケね。な〜んだ、イイナズケかぁ。そっかそっか、あ〜、びっくりした。つまり、あいつらと連夜くんはただのイイナズケの関係ってわけね」

「そうです」

「・・・」

「・・・」

ようやく素直に白状した連夜に対し、玉藻は余裕の表情で『うんうん』と頷いて見せる。

連夜の予想とは違い、物凄い落ち着いた様子。

むしろ余裕たっぷりといった様子に見える。

内容が内容だけに、聞いたあと暴れだしたりしないか、いや、下手をすると外にいる彼女の友人達を襲撃すべく飛び出していくのではないかとハラハラしていたのだが、意外にも玉藻は非常に冷静に見えた。

（あれ？　僕の考えすぎだったのかしら？）

そう心の中で呟き、思わず首を傾げる連夜。

しかし、連夜はすぐに気がついた。

目の前の恋人が全然冷静ではないことを。

いや、それどころか、彼女の心の歯車が物凄い勢いで空回りしていることを。

なぜなら、玉藻は延々と首を縦に振り続けていたから。

いつまでたっても首を振り続けていたから。

壊れた人形でも、エキサイトしたヘビメタ歌手でもここまでは振らないよっていうくらい、すごい勢いでヘッドバンキングしていたから。

連夜は、急いで玉藻に駆け寄ると、その両肩に手を置いて必死に呼びかける。

「た、玉藻さん、ちょっと、もしもし！？　しっかりしてください！！」

「え？　なに、連夜くん、私はしっかりくっきりがっくり瀕死の重体で今にも倒れそうなくらい大丈夫」

「瀕死の重体で、倒れそうは大丈夫って言いません！！　ってか、それ全然ダメですから、普通にアウトですから！！　ちょ、しっかりしてください、玉藻さん！！」

「いやそれよりもね、連夜くん」

「な、なんですか？」

「イイナズケって、『良い菜漬け』ってことよね？」

「違います。どこまでも普通に違います」

「・・・」

「・・・」

「えっと、じゃあ『好い名付け』って意味よね？」

「違います。ありえないくらい違います」

「・・・」

「・・・」

「えっとえっとえっとぉ～、まさかとは思うけど、はるか昔にさびれた地方に伝わる古い言い伝えとして聞いた覚えがあるようなない

ような・・『自分達の子供同士を将来結婚させることを約束したとかなんとかいう間柄』みたいな意味のことがかすかに頭の記憶の奥底に残っているんだけど、これは違うわよね？　絶対間違ってるわよね？　ね、ね」

「いえ、、間違いなくそれです」

「・・」

「・・」

「そっかそっか、それで間違いないんだぁ。あは、あはは、あははははは・・は・・はは・・」

連夜のとんでもない内容の告白を聞いた玉藻。

最初のうちは全然ショックを受けた風もなく、不自然なほど明るい調子で『あっはっは～』なんて笑っていた。

だが、その意味がゆっくりと脳みその中に浸透してきたのか、徐々に動きが鈍くなり、やがて笑顔を張り付けたままの状態で彫像のように固まって動かなくなる。

「た、玉藻さん？」

「・・」

「も、もしもし？」

「・・」

「玉藻さん、大丈夫ですか？　って、う、うわっ！！　た、玉藻さ

ん、しっかりしてください！！　玉藻さん、玉藻さ～ん！！」

一方、玉藻の家の玄関扉のすぐ外側では。

「駄目だわ。全然でない。忙しいのかな？」

何度もしつこく見慣れた念話番号をかけてみたが、結局念話は繋がらず、リビュエーはため息を一つ吐き出して念話をかけることを諦める。

「変ですねぇ。大概この時間は家にいるはずだから、念話をとってくれるはずなんですけど」

「きっと、あんたの念話だったから取らなかったんだてば。そもそもね、この時間ならきっと家にいるはずよ」

どこかほっとしたような、それでいてどこか勝ち誇ったような表情で肩をすくめてリビュエーを見つめるミネルヴァ。

そんなミネルヴァを少しの間忌々しそうに見つめていたリビュエーだったが、やがて、どこか面白そうな光を瞳に宿し口を開いた。

「じゃあ、リーダー、かけてみてよ」

「え」

リビュエーの言葉に、ミネルヴァの体が硬直する。

「リーダーの家にいるっていうのならかけて確かめてみてよ。自分の家でしょ？　かけられないわけないわよねぇ？」

「え、え～っと、うん、それは勿論、かけられるに決まってるじゃない。あっはっは」

マンションの廊下の前にある柵に腕を乗せて余裕の表情を浮かべて見せるミネルヴァ。

しかし、そう断言しつつもミネルヴァは一向に自分の携帯念話を取り出して、自分の家にかけようとしない。

「どうしたの？　早くかけてよ」

「い、いや、かけられないわけじゃないのよ。かけられないわけじゃないんだけど、今日はたまたま家に携帯念話を忘れちゃって」

あたまをかきながら、いかにも困ったなあなんて感じで笑顔を浮かべるミネルヴァ。

そんなミネルヴァを白い目で見つめていたリビュエーだったが、おもむろに自分の携帯念話に視線をうつすと、登録しているアドレスから一件選び出しそこに発信をかけた。

「え、ちょ、リビュエーさん、いったいどこに念話を・・」

『～ちゃらちゃっちゃっちゃ、ちゃらちゃちゃ、真っ赤なフレア～いま、瓦礫の大地を裂く！！　正義の使者、戦女神（いくさめがみ）、降臨せよ、お～っ！！　オォーレェイナァー！！』

何かを悟ったミネルヴァが慌ててリビュエーの携帯を取り上げようとするが、それよりも早くミネルヴァの懐から、やたら懐かしい合体ロボットアニメのオープニングテーマが大音量で響き渡る。
一瞬に凍りつくミネルヴァ。
そして、そんなミネルヴァにやたら生温かい視線を向けるリビュエーとクレオパトラ。

「これって、たしかリーダーの携帯の着メロですよね」

「家に忘れたはずの携帯の着メロがなんでリーダーの懐から聞こえてくるのかなぁ？　不思議だなぁ。ねぇ、リーダー」

「あ、あううう」

突き刺さるようなというよりも、ねっとりと粘りつくようななんともいえない四つの視線にがっちりと囚われたミネルヴァは、顔のあちこちから冷や汗をだらだらと流して呻き声をあげる。

「まさかとは思うけど、例によって何かしでかして」

「あう」

「ドナおばさまに知られて怒られる前に家を飛び出して」

「あうあう」

「行くあてがないからとりあえず朝まで酒盛りして」

「あうあうあう」

「明日の朝、何事もなかったかのように家に帰ろうと思って、それまでの繋ぎとしてあたし達を呼び出したわけじゃないよね？　違うよね、リーダー？」

「あう、あう、あう、あう」

「え、ちょっと図星なんですか？　だから家に念話かけられないんですか？　まさかとは思いますけど、念話にドナおばさまがでたら大変なことになるからなんてこと考えて躊躇しているんじゃないですよね？」

「あうううう・・ご」

「「ご？」」

「・・ごめんなさい」

「「もう～～～～～っ！！」」

額に青筋を立てながら詰め寄ってきた二人の友人の姿に、最早言い逃れはできないと思ったのか、がっくりと首を前に倒して謝り倒すミネルヴァ。

その姿をしばし怒りの表情で見つめていたリビュエーとクレオパトラであったが、やがて、なんともいえない表情でため息を吐き出し肩をすくめて見せる。

「そんなことだろうとは思ったけどさぁ」

「まあ、毎度のことですからねぇ。リーダーがこんな時間に私達を呼び出すときは、大概、ドナおばさまを怒らせるようなことして」

「家から逃げ出してきたときだって、相場が決まってるもんねぇ。で、今回はいったいなにやらかしたのさ、リーダー」

「え、いや、ちょっと、隠していた私の大事な宝物の数々が、その、あの、部屋を掃除しに来たメイド達に、もう、あの子達たら、どうしてみつけちゃうのよ！！　絶対わからないところに隠していたはずなのに。しかも、それをお母さんに密告するっていったいどういうことなの！？　ひどすぎるわっ！！」

廊下の安全柵に突っ伏して『うわ～ん』と泣き始めてしまうミネルヴァ。

どうやらいつもの嘘泣きではなく、結構マジで泣いていることから、本当に大事にしていた何かをみつけられてしまったようだ。

しかも、それは『人』に絶対にみられたくない何か・・

親友といって差し支えない二人にも、その何かをはっきりと口に出して伝えないところからも、余程秘密にしたいものに違いない。

しかし。

二人はそういう秘密主義なミネルヴァの態度を見ても全く気を悪くした様子もなく、それどころか顔を見合わせるとミネルヴァが驚愕するような内容の会話を始めた。

「ああ、とうとう、あの子の裸を隠し撮りして作った手作りエロ写真集みつかちゃったんだ」

「うんうん、そうなのよ・・え？」

「写真集だけじゃなく、記録映像もでしょ。着替えとか、お風呂の様子とかかなり撮りだめしていたみたいですし」

「えっ、ちょっ？　え、なんで？」

さらっとというか、ぽろっとというか、ともかく当たり前のように二人の口からこぼれ出た言葉。

その中に、聞き流しには絶対できない内容の単語が入っていることに気がついたミネルヴァは、一瞬にして涙をひっこめると、蒼白になった表情を二人に向ける。

「しまったぁ、こうなるってわかっていたら、焼き増しもダビングもしておいたのになぁ」

「いやいやいや、待て待て待て、焼きまして、ダビングて」

「諦めましょ。そもそも、そんなもの持っているとわかったら、ドナおばさまにどんなお仕置きされるかわかったもんじゃないですし」

「ちょっ、まっ、なんで？　なんで二人とも知って、え、あたし完璧に隠していたはずなの・・」

「そうかぁ、とうとう見つかったのねぇ。でも、ちょっと惜しいなぁ。あの子が十六歳の時に前から撮影したシャワーシーンだけはほしかった」

「あれすごいですよねぇ。いったいどうやって気づかれずに撮影したのか」

「うんうん、撮影技術は勿論すごいんだけど、あの子のあれが」

「ええ、あの小柄な体に似合わない立派なあれが」

「「すごい！！」」

「ちょっ、待て、おまえら！！　あたしの前でなんの話をしている・・」

どんどんとんでもない方向に話が進んでいくことに気がついたミネルヴァが、怒りと羞恥に満ちた表情で慌てて二人に声をかけようとする。

だが。

「「リーダーが隠し撮りした変態エロ映像の内容についてですが、何か？」」

「いえ、その、できれば、あの、プライベートな問題に関わってくるので、そこのところはそっとしておいていただきたいというか、いえ、なんでもありません」

二人から穏やかならざる視線でギロリと睨み返されたミネルヴァは、自分自身に思い切り後ろめたいところがあり、急いで二人から眼をそらす。

そして、マンションの廊下の隅っこのほうにそっと移動して座り込むと、床に『の』の字を書いて盛大にいじけ始める。

「変態て、エロて・・大事な・・うとの成長記録じゃない。別にそれを実の・・ねである私が持っていたって、いいと思うのよ。なのになのに、なによなによ、みんなして私が悪いみたいに」

「「いや、力いっぱいあなたが悪いですから」」

「うえ～～ん、二人ともひどいよ～～」

全然反省する気配がない自分達のリーダーに対し、二人の容赦ないツッコミが炸裂。

ミネルヴァは、わざとらしく『よよよ』と崩れ落ちてその場でなきじゃくるのだった。

勿論、二人とも自分達のリーダーがこの程度のことでヘコムことも、反省するようなことも、懲りることもない『人』物であることをよ～く知っていたので、冷たい視線をしばらくそちらに向け続けたあと、疲れたように顔を見合せて深いため息を吐き出した。

「あ～あ、もう、リーダーの馬鹿話はともかくとして、ほんと、あの子どうしちゃったんだろうね。リーダーの念話ならともかく、私のかけた念話を無視するなんてことこれまでなかったのに。友達のところにでも行ってるのかしら？」

「あるいは、友達とは到底いえない誰かのところに連れていかれているか」

持っていた携帯念話を折りたたんで懐にしまおうとしたリビュエーだったが、横に立つクレオパトラが発した言葉にその動きを止める。

そして、まるで出来そこないのゴーレムのようなぎこちない動きでその視線を親友のほうへ向け直した。

「クレオ。・・笑えないよ、それ」

「笑わすつもりで言っていません。あなただって、一カ月前に起こったことを『申』から聞いているでしょ？」

他の誰かには聞かせられないのか必要以上にボリュームを絞った

小声で話すリビュエーに、相対しているクレオパトラも同じくらいの音量で答えを返す。
真剣極まりない表情で。
そのクレオパトラの言葉に、いったんは懐にしまいかけた携帯念話に視線を向け直すリビュエー。

「何もなければいいですけど。この前のようなことがないとは・・」

「さ、『申』や『戌』がついているでしょ？　新しく入った『酉』の名を持つ子もいるっていうし・・」

「でも、ずっと張り付いているわけじゃないですわ」

「・・」

しばらく何かを考え続けるリビュエー。
その表情はミネルヴァと話していたときのような、明るく屈託のないそれではない。
何か、いや、誰かを心配しているとわかる色がありありと浮かび、それは大きな影となって表れていた。

夜のマンションの廊下に、痛いほどの静寂が流れる。

どれくらいの時を二人はそうしていたのか。
やがて思考することをやめた西域半人半蛇族（ラミア）の麗女は、視線を隣に立つ人頭獅子胴族（スフィンクス）の親友へと向けた。

「クレオ・・」

「わかったわ」

リビュエーの大きな碧眼の中に浮かぶいくつもの言葉、それを無言で読み取った切れ長の黒目の持ち主は、大きく一つ頷きを返してから肩からかけたブランド物のバッグを器用にあけた。
そして、わざと誰かに聞かせるかのような明るさと笑いに満ちた大声をあげる。

「残念ですけど、あの子のことは諦めましょう。それよりも、たまちゃん家にいないみたいですし、どこか別の場所考えたほうがいいですよね。適当な知り合いの家が空いてないか聞いてみますね」

「うんうん、よろしく。そうだ、この前知り合った若い子達がいいかもね。『龍』族や『虎』族の子がいたから、私達が『知りたいこと』をよく知っているかも」

「ですね、私達が『知りたいこと』をよ〜く知っていると思います」

ライオンの前足をバッグの中に突っ込んで自分の折りたたみ式携帯念話を取り出したクレオパトラは、軽やかな笑い声をあげながらリビュエーに返事を返し、携帯を開いて番号を入力する。
いつもと変わらぬいつも通りの会話。
ただ二人の眼だけは。
眼だけは笑っていなかった。
ともすればあふれて漏れそうになる『負』を宿す意志の光だけはかろうじて抑えていたが、その眼には明らかに『負』の感情に属する『焦り』と『動揺』の色が浮かんでいた。
そして、携帯のルーン番号を押すクレオパトラの指には、かすかな震えが。
しかし、彼女達は努めてそれを表情にも態度にも出ないようにして平静を装い続ける。

理由はたった一つ。
それはすぐ傍にいる誰かに気付かせない為。

「あれ？　今度はクレオが念話かけているの？」

ひとしきり拗ねて気が晴れたのか、二人が気付かれたくないたった一人がのこのこと二人の元に戻ってきた。
二人は気を抜けば歪んで壊れそうになる表情を必死に苦笑に形作り、その要注意『人』物に視線を向ける。

「え、ええ。たまちゃんいないみたいですしね、このままここにたむろし続けてもしょうがないですし。どこか酒盛りして騒いでも怒られないような場所がないか、お友達にあたってみようかと思いまして」

「クレオちんや、リビュエーのところは駄目なの？」

「ええっ！？　わ、私達のところですか？　いや、それは・・」

思いもよらぬミネルヴァのツッコミに、咄嗟に取り繕うことができず動揺をあらわにするクレオ。
その様子に何かピンときたミネルヴァは、ここぞとばかりにからかおうと人頭獅子胴族（スフィンクス）の友人に絡もうとしたのだが。

「別にあたしらのところでもいいけど、ドナおばさんに通報されても責任もたないよ？」

「うっ、そっか。あんた達、実家住まいだもんね。おじさん達にみつかるのは確かにまずい」

絶妙なタイミングで滑り込んだ西域半人半蛇族（ラミア）の麗女の援護射撃の前に呆気なく撃沈するミネルヴァ。
その様子を見たクレオは、ほっと胸を撫で下ろしながら頼れる相棒に感謝の視線を向ける。
そこにはいつものシニカルな笑み。
が、待っているはずだったのだが。

「リビュエー？」

念話をかけようと通話ボタンを押しかけた状態で相棒の異変に気がついたクレオが不審そうに声をかけると、相棒ははっと我に返り、何か慌てた様子でクレオが念話をかけようとするのを止める。

「ちょ、ちょっと待ったクレオ。念話かけるの待った」

「どうしたの、リビュエー？」

「いや、あの、その、つまり、えっと、たまには居酒屋なんてどうかな？　『ネオゼウスドア』？　じゃなくて、『ルーツタウン』？　でもなくて、『ゴッドドア』？　でもなく」

「何言ってるんですの、リビュエー？」

自分から提案してきたのはいいが、どうにも要領を得ない調子で話を進めるリビュエー。
そのあまりにも妙な様子にクレオとミネルヴァは思わず顔を見合わせる。

「『ニューオープンタウン』？　でもなくてって、いったいどこな

らいいっていうのよ！？」

「どうしたの、なんで一人でキレているの？」

「いや、別にキレてなんか。あ～、もう！！　じゃあ、『サードテンプル』？　ＯＫ？　あ、そう？　じゃあ、その『サードテンプル』の居酒屋で飲みましょ。ね、ね」

「あ、うん、いいけど。なんか、誰か他にいるの？　まるで誰かに聞いていたみたいな・・」

「そそそそ、そんなことないない！！　そうそう、クレオ。悪いけど、リーダー連れて先に行ってて。長時間座ってたから尻尾がしびれちゃって」

どこかわざとらしい様子で自分の蛇の胴体をさすってみせるリビュエー。

あまりにも不自然な態度にクレオもミネルヴァも不信感バリバリに、愛想笑いを浮かべる目の前の友人を凝視する。

しかし、クレオはすぐにあることに気がついた。

リビュエーが自分の体をさすってみせるときに、クレオにしか見えない角度でその指をある方向に向けたことに。

クレオ、その方向に視線を向けあるものを見つける。

そこにあった誰かの意志を察した彼女は、すぐに相棒の芝居に乗ることを決断する。

「リビュエーは置いといて、先にいきましょ、リーダー」

「え、ちょ、待ってよ。なんか、リビュエーの様子おかしくない？　おかしいでしょ？　おかしいよね？」

「リビュエーがおかしいのはいつものことですわ。さぁ、いきましょ、いきましょ」

「えええっ！？　いや、まあ、それはそうだけど、いや、ちょっと、ひっぱらないでよ、クレオ。ちょっとぉ！？」

「あたしもすぐに行くから、リーダーのことよろしくねぇ～」

先ほどまでの不審そうな表情はどこへやら。

いつもの極上女神スマイルを浮かべたクレオは、一人納得できないでいるミネルヴァの服の端を咥えると強引に引っ張ってずんずんとそこから連れ出していく。

ミネルヴァはなんとか抵抗しようとするが、大柄で力も強い人頭獅子胴族（スフィンクス）の前ではどうすることもできず、呆気なくマンションから姿を消した。

マンションから遠ざかって行く二人を見送ったリビュエーは、二人の姿が見えなくなったのを確認するとほ～～っとため息を吐き出して脱力する。

「まったくもう、いつもいつもそうだけど、『人』の意表を突くのが好きな『人』ですよね、あなたは」

いったい誰に聞かせているのか、苦笑交じりにそう呟いたリビュエーは、自分のすぐ下にある床へと顔を向ける。

いや、顔を向けた先は床ではない。

自分の胴体の先、胴体とほぼ一体化している尻尾の先。

そこに視線を向けると、マンションの扉が少し開き、そこから伸びた少年の手がリビュエーの尻尾を軽く握っているのが見えた。

「念話が繋がらなくて、また誰かに襲われているんじゃないかって、あたしもクレオもハラハラしていたのに。一体全体どういう経緯でそんなところにいるのか、詳しく説明していただきたいんですけどね、ボス？」

扉の向こうにいる『手』の持ち主に、呆れ果てたような声で話しかけるリビュエー。

すると、その声に応えるように、人間族の少年がひょっこりと顔を出した。

黒髪黒目、この部屋の主の最愛の恋人である高校生の少年は、照れたような、それでいて困ったような表情をリビュエーに向ける。

「いや～、いろいろとあるんですよ。リビュエーさん」

「それを説明してほしいんですけど？」

「まあ、ともかく、話を聞いてくれますかね？　他でもないみ～ちゃんのことなんだけどね」

「ああ、ひょっとして」

「うん、そろそろ、み～ちゃんと正面から向き合おうかなと思ってね」

第八話　『二人の日常』　その6

どれくらいの時間そうしていたのだろうか？

誰かが自分の体を軽く揺さぶっている。

誰かが自分の名前を呼んでいる。

触覚と聴覚に間断なく与えられる刺激が、ブラックアウトしていた彼女の意識を夢の世界から現実世界へと浮上させる。

「・・まちゃん、たまちゃんったら、お願いだからいい加減起きてよねぇ！！」

「う、う～～ん」

何者かの手が自分の腕を掴み、激しいというほどではないが自分の体を揺さぶり続けている。

そして、はっきり聞き覚えのある声が自分の名前を呼んでいる。

それらをおぼろげに認識した彼女は、ゆっくりとその眼を開けた。

「やっと、目が覚めた？　大声で呼びかけても揺らしてもなかなか起きないから焦ったわよ」

「り、リビュエー？」

「そうで～す。あなたの大親友、リビュエーちゃんで～す！！」

視線の先には朗らかな笑顔を浮かべてこちらを見つめている西域半人半蛇（ラミア）族の友人の顔。

中学時代からの付き合いで、玉藻の数少ない大事な友人の一人。

そして・・

徐々にはっきりしてくる記憶とともに、玉藻はにこりと優しい笑顔を浮かべて目の前にいるリビュエーに呼びかける。

「リビュエー」

「ん？　な、何、たまちゃん？」

普段、仏頂面がデフォルトで、どんなときでもほとんど表情を変えない玉藻。

リビュエー、ミネルヴァ達といったごく一部の特に親しい友人達と一緒にいるときでさえ、『ブスッ』とした表情をなかなか変えようとしない玉藻。

そんな玉藻が、今まで見たことがないような素晴らしい笑顔で自分を見つめている。

リビュエーは一瞬、玉藻の白薔薇のように美しい笑顔に魅了されかけた。

が、しかし。

それと同時に彼女の背中を物凄い悪寒が走り抜ける。

嫌な予感がする。

猛烈に嫌な予感がする。

激烈に嫌な、いや、ヤバイ、ヤバすぎる予感が！！

それを察知してリビュエーが思わず身を引いた次の瞬間、白薔薇の笑顔が、嫉妬に狂う悪鬼羅刹女のそれへと変わった。

「死ねやぁぁぁぁぁぁっ！！」

「ちょっ、きゃあああああああああっ！！」

カンフー映画の主人公のように、寝ていたソファからブレイクダンスの要領で跳ね起きた玉藻は、体全体を凄まじいで回転させ、その勢いそのままの威力を必殺の旋風脚として解き放つ。

まともに食らえばただでは済まない一撃。

幸いにもわずかに早く身を引いていたために、玉藻の爪先はリビュエーの首数センチのところで空を斬るにとどまった。

しかし、武術の超人たる玉藻が放った一撃は、文字通りの旋風を作り出し、そこから生れ出た風圧がリビュエーの体を後方へと吹き飛ばす。

人間の上半身と大蛇の下半身が、見事に横によじれながら宙を舞うが、大蛇の下半身を器用に操ってちょうど開いていた部屋の扉に巻きつけ、なんとか無難に着地。

不意打ちにも近い最初の一撃を無傷でやり過ごしたリビュエーは、安堵のため息を吐き出した。

だが、その息はすぐに冷たいものへと変化する。

もし、今、ほんのわずかでも反応が遅れていたら。

再びリビュエーの背中を悪寒が走り、体中から冷や汗が『ぶわっ』と噴出した。

「たまちゃん、ちょっ、まっ、すとっぷ、ストップ！！　いやあああああっ！！」

「リビュエー。何も言わず、何も聞かずに今すぐ死んで」

「た、たまちゃん、ひょっとして、マジ？　マジでいっちゃったりして・・うっきゃあああああ！！」

「うっふっふ、マジよ、大マジ、『真剣』と書いて『マジ』と読むくらい本気の本気」

玉藻の家のリビングルームの中央、嗤っているのか怒っているのか俄かには判別しがたい凄まじい形相で仁王立ちした玉藻は、部屋の中の物が壊れるのも構わず、必殺の蹴りを次々と繰り出してリビュエーを追い詰めていく。

「彼は私のものよ。私だけのものなのよ、心も体も、頭の先から足の指の爪先まで私のもの。その心の中は当然のこと、彼の男性の象徴たるアレだって私だけのもの、横に並び立つ権利、後ろを守る権利、彼を引っ張るために前を進む権利、どれもこれも私のもの。それを脅かすものはすべて、『死』あるのみ」

「た、たまちゃん、完全に性格変わってるわよっ！！　お願いだから、落ち着いてたまちゃん、いつもの無表情、無感動、無関心のたまちゃんはいったいどこにいったの！？」

「ふっふっふ、これが私の本性よ。いつものアレはむしろ抜け殻。彼を得た今、私は本来の私に戻った。強欲で嫉妬深く、冷酷で情け容赦ない。だけど、心から彼を、彼だけを愛している私。他のものはどうでもいいわ」

「本気やん！！　本気でイッちゃってるやん！！」

親友の眼に宿る紛れもない狂気の光を確認し、恐怖の悲鳴をあげるリビュエー。

「だから、『許婚』なんていてはいけないのよ。『許婚』なんてものはいらないのよ。彼と私の関係を脅かすものは、すべからく、瞬殺、滅殺、完殺する!!　って、チョロチョロ逃げているんじゃないわよ!!　『人』の恋路を邪魔するものは、『狐(あたし)』に蹴られて地獄に堕ちろおおおおっ!!」

「もうっ、ボスっ!?　どこにいるんですかボス!?　くっそ〜、いったいどこにいったのよ!?　あ!!　ひょっとして、たまちゃんがこうなるってわかってて放置して私に押しつけたのか、あの『人』!?　って、きゃあああっ!!　たまちゃん、ほんとにやぁ〜めぇ〜てぇぇっ!!」

「え〜い、だから、逃げるなっていってんでしょうが!!　大人しく私に蹴られて往生しなさい!!」

きゃ〜きゃ〜、わ〜わ〜と実に騒々しく逃げ回るリビュエーを、狂気の宿る血走った目で必死に追いかけ続ける玉藻。

しかし、リビュエーは実にフレキシブルに動く蛇の下半身を巧みに使い、部屋の中にあるソファやテレビなどを盾にして玉藻の攻撃をことごとくブロック。

やがて、いい加減二人の息が切れ始めたころ、リビュエーは今がチャンスとばかりに釈明の言葉を口にする。

「はぁはぁ、たまちゃん、いい加減私の話を聞いてちょうだい。ご、誤解だから!!　誤解なのよ、たまちゃん!!」

「ふぅふぅ、な、何が、ふぅふぅ、誤解だっていうのよ」

「たまちゃんがボス・・いや、あの子から私のことをどう聞いたか知らないけど、絶対たまちゃん誤解してるんだってば！！」

「誤解？　あ～ら、それはどうかしら？　じゃあ、聞くわ。連夜くんは、あなたが『許婚（いいなずけ）』って言っていたけど、それは嘘なの？」

「い、いや、嘘ではないけど、でもね・・」

「でしょうね。惚気るわけじゃないけど、連夜くんは、そういうことで私に嘘は絶対に言わないわ。多少誤魔化そうとして適当なことを言うときはあるけど、そんなときは絶対に私にわかるように言うの。嘘だって私がすぐに気が付けるようなはっきりした作り話か、あるいは、今話したのは全部作り話だったってすぐに打ち明けてくれる。でも、今回に限っていえばそのどちらでもなかった。つまり、連夜くんが私に言ったことは事実だったってこと」

「そ、それはそうよ、確かに私は一応『許婚』よ、でもね・・って、うっきゃあああっ！！　だから、もうちょっと話を聞きなさいって」

「最早、問答無用！！」

「あなたは無用でも、私には必要なのよ！！」

悲鳴と怒号が飛び交うリビングルームの中を、再び壮絶な追いかけっこが始まる。

逃げる大蛇に、追う狐。

いつ果てるとも知れぬ死闘。

そして、その二人の獣の戦いをそっと物陰から見守る一つの影。

二人の知己であり、この戦いのカギを握るといってもいいその影・・黒髪黒目の少年は、リビングルームの扉の影からそっと中の様子を窺っていたが、やがて、優しいというか、優しすぎるというか、妙に邪悪な光を目に宿した笑みを浮かべてリビングルームに背を向けた。

「玉藻さんもリビュエーさんも、楽しそうだなあ。よし、ここは気を利かせてもうちょっとそっとしておいてあげようっと」

「そんな気の使い方するなあああああっ!!」

足を忍ばせて部屋から立ち去ろうとしていた連夜の姿をめざとく見つけたリビュエーは、拾ったスリッパをその後頭部めがけて投げつける。

「痛いっ!!　何、するんですか、リビュエーさん?」

「何するんですかじゃねぇわよっ!!　なんで物陰から様子を窺ってるのよ!?」

「だってだって、二人ともとっても仲がよさそうで、踏み込んでいくのもどうかなって思って。う〜ん、ジェラシー?」

扉の影からそっと顔だけを出してかわいらしく小首を傾げて見せる連夜。

しかし、長年の付き合いのあるリビュエーを誤魔化しきることはできなかった。

なぜなら、すぐにリビュエーは気がついたから。

困り切ったような、悲しんでいるようなその顔の中で、目が。

その目が・・

完全に噛っていることに。

「ボス、あなたこの状況を楽しんでいるでしょ！？　絶対そうでしょ！？」

「そんなことあるわけないじゃないですか。誰よりも信頼している大事な『許婚』の一大事をおもしろおかしく観戦しているなんて、そんなバカなことが・・あっはっは」

「うそつき～～～～っ！！　目いっぱい楽しんでいるじゃないのよ、ばかあああああっ！！」

「ば、馬鹿だなんて・・ひどい、ひどすぎる。子供の頃はあんなに仲が良かったのに。一緒にお風呂に入ったり、添い寝してもらったり、そういえば嫌がる僕を抑えつけてお医者さんゴッコしたこともありましたよね」

「なぁんですってえええええっ！？　リビュエー、あんた、コロスッ！！」

「うっきゃあああああっ！！　ボスのあほおおおおっ！！　余計なこと言うなあああ！！」

連夜のとんでもない告白を聞いた玉藻は更に怒りのボルテージをあげて、リビュエーへと襲いかかる。
そして、それに伴ってその蹴りの一撃はより早く、より重く、より激しくなっていく。

「あか～ん、もう無理！！　受け切れない避け切れない捌き切れないぃぃぃ！！　ボスの馬鹿！！　バカバカバカッ！！　死んだら化けて出てやるぅぅっ！！」

「それは無理。化けて出てきても私が地獄に蹴り返すんだから！！　ちぇすとおおおおおっ！！」

誰が見ても芸術的で素晴らしい体術を駆使し、紙一重で避け続けていたリビュエーであったが、流石に部屋の隅っこに追い詰められてはどうすることもできない。
獲物を仕留めることを確信したメスの肉食獣の表情に獰猛な笑みが浮かぶのを見て、大蛇は己の最後を悟る。
風を斬る音が聞こえ、自分を斬り裂く刃と化した美しい足が迫るのを感じた。

今度こそジ・エンド。

だが。

凶器の迫る気配とほぼ同時に、大蛇は自分の前に誰かが立ちはだかる気配を感じて目を見開いた。

そこには黒髪黒目の人間族の少年の姿。

両手を広げ、大蛇に背中を向けて立つ少年は、実に優しい声音で

目の前の羅刹女に話しかけた。

「はい、そこまでで～す」

「ちょっ、連夜くん!?」

悪鬼羅刹と化した狐の一撃は、人間の少年の顔面ギリギリのところでピタッと止まっていた。

狐が繰り出した蹴りの一撃が巻き起こした風が、少年と大蛇の横を通り過ぎて消える。

二人の体は強烈な風圧にさらされはしたが、怪我らしい怪我はしなかった。

だが、もし止まっていなければ、この蹴りが止まることなく少年の顔面にたたきつけられていたとしたら・・

間違いなく少年の顔面は見るも無残に木端微塵になっていただろう。

それを正確に悟ったリビュエーの顔はみるみる真っ青に。

リビュエーはきっと少年も同じような顔色になっているだろうと、のろのろと体を動かして少年の表情を覗き込む。

しかし・・

リビュエーのそれとは対照的に少年の表情は動じた様子はなく、むしろにこにこと相手の顔を見つめていた。

自分の顔面を粉砕していたかもしれない狂気の雌狐の顔を。

「ぼ、ボス、よく平気ですね?」

「なにが?」

「顔面ぐちゃぐちゃにされていたかもしれないですよ！？」

「あ～、そういうこと？　ないない。玉藻さんが僕を傷つけるなんて、天地が引っくり返ってもないもの」

「でも、万が一ってことが」

「だから、ありませんて。玉藻さんが僕を知覚してからは、ずっと、僕のほうばかり気にしていらっしゃったもの。僕がいつ飛び出してもどんな状況であっても、今みたいに攻撃を寸止めできるように加減してらっしゃったから、全然怖くなかったですよ」

「いや、むしろ攻撃が激しくなったじゃないですか」

「ううん、あれはね、僕に当てつけるためにわざとです。ね、玉藻さん」

「知らないわよ。連夜くんの馬鹿」

連夜にそう問いかけられた玉藻は、両腕を組んだ状態でぷいっと顔を背けてしまった。

リビュエーが視線を向けてみると、口を尖らせた玉藻の表情は真っ赤に染まっており、連夜の言葉が図星であることを無言で語っていた。

「僕が玉藻さんに嘘をつかないように、玉藻さんは僕を傷つけるようなことはしないんです。絶対にね」

「はいはい、だったらさっさと止めてくれればよかったのに」

目の前で不貞腐れている狐同様に、大蛇もまた同じように唇を突き出して膨れて見せる。
しかし、少年は涼しい顔で肩をすくめてみせる。
「真実を話すことは簡単だったけど、果たしてそれで二人とも納得してくれたかな？」
「少なくともたまちゃんに私とボスが世間一般でいうところの『許婚』の関係じゃないってことを、ボスの口から直接伝えてくれればこんな大騒動にはなってなかったでしょうが」
「い～や、それはどうかな。玉藻さんはことが僕のこととなると異様に鋭いからね。例え、僕とリビュエーさんの間に恋愛感情が全くないと説明していたとしても、かなり親しい間柄であることはすぐに看破されていたと思うよ。そうなったら、今以上に玉藻さんは荒れ狂っていたと思うね」
「恋愛感情はないって説明しているのに、私狙われちゃうわけ？」
びっくりした表情で不貞腐れている玉藻に視線を向けてみると、益々むすっとした表情になっているのが見えた。
どうやら連夜が言っていることはあながち的外れなことではなかったらしい。
「多分、僕とリビュエーさんの関係がなんなのか、自分で確かめないことにはいくら説明しても収集がつかなかったと思うんだよね」
「前々から根暗で疑り深そうって思っていたけど、たまちゃんって本当にそういう性格だったのね」

「性格最悪で悪かったわね」

呆れたように話すリビュエーにぶすっとした表情のままぼそりと呟く玉藻。

そんな玉藻の様子を優しい表情で見つめていた連夜であったが、やがてリビュエーに視線を向け直すと意味深笑みを浮かべて見せる。

「そういうリビュエーさんだって、『人』のこと言えないでしょ？」

「私が？　なんで？　一方的に追いかけられまわされたのよ？　一歩間違えれば殺されていたかもしれないのに、完全に被害者でしょうが」

連夜の言葉に、物凄く憤慨しているといった様子で怒り声をあげるリビュエー。

しかし、そんなリビュエーを見ても連夜は全然気圧される様子がなく、むしろ面白そうに彼女を見つめて口を開いた。

「よくいいますよ。ほんと、演技がうまいんだから。きゃ～きゃ～騒いでいた割にはリビュエーさん、玉藻さんの攻撃一撃ももらっていないですよね？　玉藻さんて武術の腕は相当のものがありますよ。少なくともこの都市にいる武術の使い手達で玉藻さんに正面切って戦いを挑んで勝てるのは十人いるかいないかですよ。なのに、リビュエーさんは全部の攻撃を避け切ってみせた。武術の腕前がないにも関わらずね」

「そ、そりゃあ、必死だったから」

「いいえ、それは違いますね。この騒動が起こる前、僕に『許婚』がいたことを知ってショックを受けた玉藻さんはたまらず意識を失

ってソファに横になっていました。そのときリビュエーさん、あなたは玉藻さんに『能術』をかけていたでしょ？　それも極端に命中率が落ちる術を。そして、玉藻さんが起きてきて、自分を見てどうするかじっと観察していた」

「え、ちょ、わ、私、寝ている間に術をかけられていたの！？」

連夜の言葉に驚きを隠せない玉藻。

目の前の大蛇に視線を向けると、慌ててリビュエーは慌てて玉藻から視線を外して見せた。

「な、な、なんのことかわからないなぁ」

「本当なのね？」

「え、え～～っと」

怒ったように見つめると、リビュエーは視線をあからさまに泳がせてまともに玉藻とあわせようとしない。

玉藻はしばらく怒りに満ちた眼差しをぶつけていたが、やがて、なんともいえないため息を吐き出すと、呆れたような疲れたような複雑な声で呟くのだった。

「おかしいなぁとは思っていたけど、そういうカラクリがあったのね。どうりで当たらないわけだわ。でもなんで？　なんでそんな真似を？」

「玉藻さんの本当の気持ちを知るためです」

「私の気持ち？」

「ええ。玉藻さんが僕に対してどれくらい本気なのか確かめる為・・でしょ、リビュエーさん？」

「・・知らないわよ。ボスの馬鹿」

連夜の言葉に、今度はリビュエーのほうがむっつりと両腕を組んで黙り込む。

「それはやっぱり、『許婚』だから・・」

「いいえ、違いますよ。リビュエーさんは、玉藻さんが僕を騙そうとしているんじゃないか、いいように利用しようとしているんじゃないかって、心配していらっしゃったんです」

「だから、『許婚』だからでしょ？」

「いいえ、そうじゃないんですよ。リビュエーさんは・・いや、リビュエーさんだけじゃなくて、クレオさんもそうなんですが、お二人とも『許婚』ってことに対外的になってますけど、正確には僕の『近習』なんです」

「『近習』？」

聞きなれない言葉に首を傾げながら戸惑いの声をあげる玉藻。

そんな玉藻を面白そうに見つめた連夜は、相変わらず仏頂面で何もしゃべろうとしないリビュエーのほうに視線を向け直した。

「そうです。『近侍』ともいいますけど、年の近いボディガードというか、世話役というか。まあ、ともかくそういう関係なんです。

そうなった経緯はいろいろ複雑な紆余曲折がありまして、今すぐ説明するには時間がないので割愛しますけど、リビュエーさんは『許婚』という立場からではなく、僕の命を守る『近習』としての立場から玉藻さんを試したんです。まあ、確かに僕はリビュエーさんを愛していますし、リビュエーさんも僕を愛してくださっていると確信していますが、でも、それは男女のそれじゃないんです。『主従愛』というか『姉弟愛』というか、そういう感じです」

「ほんと、嫌味なくらいそういうことさらっというんだから、ボスは」

連夜の言葉を聞いていたリビュエーは、若干表情を緩めると何とも言えない苦笑を浮かべて連夜を見つめた。

その視線は確かに愛情に満ちている。

が、しかし。

連夜の言うとおり、自分が連夜に向けているそれとは違う光であることが、今の玉藻にははっきりとわかった。

自分とは違う形の絆。

それがわかって、玉藻は心の中で安堵の溜息を吐き出し、同時に、自分が恐らく一生得られないであろう絆に軽い嫉妬を覚える。

いろいろと二人に言いたいことがあったが、しかし、結局、それとは別のことを口にした。

「連夜くんのお家って、もしかしてお金持ち？」

「昔からそうだったわけではないんですけどね。彼女達を雇うことになったあたり・・具体的に言うと僕が小学生の頃にいろいろとまあお金が入ることがありまして。まあ、世間一般の方達よりはちょ

っとだけお金がありますね」

「あ～、そうなんだ。ところで、さ、いろいろ話が変わって悪いけど、私はこの子達と中学生の時に知り合ったけど、そのとき連夜くんっていなかったよね？　ボディガードでも世話役でもなんでもいいけど、もしそんな関係だとしたら連夜くんと一緒にいなかったのはおかしくない？　私一度も連夜くんらしい子にあった覚えないわよ？」

「鋭いですね、玉藻さん。実は、彼女達が中学校に入るときに僕の世話よりもある仕事を優先して行ってもらうように命じたんです」

「ある仕事って？」

特別何か強い思いがあって尋ねたわけではない。

しかし、尋ねられたほうと、その質問に深く関わる大蛇は思わず顔を見合わせて、深い深いため息を吐き出した。

「え、なんか、聞いちゃまずいこと聞いてしまったかしら？」

「いえ、そうじゃないんです。それこそが本題だったもので」

「本題？」

「ええ。リビュエーさんとクレオさんに僕の『近習』の仕事を放棄してまでも行ってもらった使命、それは」

「それは？」

「ミネルヴァ・スクナーを監視することと、そして、万が一彼女が

トラブルに巻き込まれたときにフォローすること」

「ミネルヴァの監視とフォローって・・え、それってどういうことなの！？」

第八話　『二人の日常』　その7

連夜とリビュエーの口から紡ぎだされたのは、玉藻が全く考えもしなかった答えであった。
それゆえに咄嗟に答えを返すことができず、しばし呆然と二人を見つめる。
そして、穴があくほど二人の目を交互に覗き込みそれが真実なのかどうかを見極めてみる。
一人は長い付き合いのある親友、もう一人はその心をほぼ完全に掌握している最愛の恋人。
そこに一かけらでも嘘があれば、見抜く自信が玉藻にはあった。
だが・・

「本当のことなのね？」

二人の目の光の中に一かけらも嘘がないことを見てとった玉藻は、呻くようにして確認の声を絞り出す。
そんな玉藻に、二人はゆっくりと頷きを返した。

「そうです」

「本当のことなのよ、たまちゃん」

「なんで？　ミネルヴァもリビュエーやクレオと同じで『許婚』じゃないの？」

「違うのよ～。そこは全然違うのよね～。本人はそうありたいと望んでいるみたいだけど」

「やめてくださいよ、玉藻さんもリビュエーさんも。み～ちゃんと『許婚』だなんて冗談じゃありません。お隣の城砦都市『ゴールデンハーベスト』ならともかく、この城砦都市『嶺斬泊』では認められてはいないことですしねぇ」

「え？　え？」

意味がわからない。

自分にとって最大の親友と、自分にとって最愛の恋人が色っぽい関係ではないということだけはわかる。

恋人の口調、表情、そしてそれらを含めた反応の全てが、玉藻ともリビュエーとも違う関係であることをはっきりと明示している。

しかし、玉藻が当初考えていた『敵』という関係でもないということもわかった。

口調は明らかに嫌がっているが、その中にひどく深い愛情が潜んでいることを玉藻は一瞬で看破していたから。

だが、だからこそわからなかった。

いったい、親友ミネルヴァと恋人連夜の関係はなんなのだ。

少なくとも玉藻から見た親友ミネルヴァは、連夜を敵視しているようであったが。

頭にいくつものクエスチョンマークを浮かび上がらせ、困惑の表情を隠しきれない玉藻。

そんな玉藻の様子を見ていたリビュエーは、苦笑を浮かべながら誤解を解く言葉を口にしようとした。

玉藻も、ミネルヴァもリビュエーにとっては単なる友人以上の大事な存在。

誤解したまま出くわして喧嘩にでもなったら大変だ。

そう、自分が玉藻に散々追いかけられたように。

と、そう思ったところまではよかったのだが。

そこまで考えたところで、リビュエーの思考回路は百八度転換した。

友達想いの天使回路から、彼女のボス直伝の恐るべき悪魔回路に。

「たまちゃん、よく聞いて」

「え、何、リビュエー」

いまだ混乱したままの玉藻の顔に、ずいっと自分の顔を近づけるリビュエー。

その真剣そのものの表情に玉藻は自らも表情を引き締め、リビュエーの言葉を待つ。

間違いなく大事な何かを自分に伝えようとしているだと信じて疑わずに。

そして、

悪魔の言葉がリビュエーの口から玉藻の耳へと流しこまれた。

「たまちゃん、よく聞いて。リーダーはね・・いや、ミネルヴァ・スクナーは、あの『人』は」

「う、うん、ミネルヴァが何？」

「『許婚』よりももっとボスに近い存在なのよ！！」

「な、なんですってぇぇぇぇっ！？」

「いや、間違ってないけど言い方がおかしいでしょ、リビュエーさん。それに玉藻さんも真に受けすぎですってば、もしもし？　お二人とも僕の話を聞いてくれています？」

真剣そのものの表情、口調で、目の前の玉藻に衝撃の事実を告白するリビュエー。

そして、その衝撃の告白の内容に、少なからぬ動揺を見せる玉藻。

二人を横から見つめる連夜は、心底疲れたような、呆れたような、そして、困り切ったような表情で呼びかけるが、片方は故意に、もう片方はあまりのショックでそれどころではなく連夜の声に応じようとはしない。

「い、『許婚』よりも近いって」

「ええ、そうよ、『許婚』よりもはっきり近い存在だわ。いえ、それどころか、下手をすれば『恋人』と同じくらい、いやそれ以上に近いといえる存在かもしれないわ」

「そそそそそ、そんなバカな！？」

「いい、よく聞いてたまちゃん。リーダーが今までボスにどんなことをしてきたか知ってる？」

「どど、どん、どんなことがあるっていうのよ！？」

契約者に甘い誘いをかける伝説の『悪魔』の如き妖しさ爆発の微笑みで囁きかけるリビュエー。

そのリビュエーの言葉を耳にした玉藻は、必死に平静を装うとす

るが、動揺は全く隠しきれない。

『そんなの全然気にしないわ！！』

・・なんて表情を作ろうとしているが、明らかにその表情は

『めっちゃ、気になるや～ん！！』

・・と、語っていたりする。

それでもまだなんとか『怒り』顔を維持しているが、目はだんだん涙目になってきているし、口は徐々に歪み始めている。

「リビュエーさん、ほんといじめっこですよね」

「そ、そんなことないも～ん」

不安と焦燥に耐えてぷるぷる震えている玉藻の姿と、それを妙にうっとりした表情で見つめているリビュエーに交互に視線を走らせた連夜。

そのあと、横にいるリビュエーになんとも言えない苦い表情を向けて呟くと、その言葉にはっと我に返るリビュエー。

一瞬だけ連夜に視線を向けたあと、慌てて視線をそらして表情を取り繕う。

そして、再びその視線は目の前の玉藻に。

「と、ともかくリーダーは、毎回ボスにすごいことやっちゃっているんだから」

「す、すご、すご、すごいことって何よ！？　そ、そんなことある

わけが・・」

「まず朝起きてきて『おはようのハグ』」

「『おはようのハグ』ぅ！？」

「しないと一時間以上床に寝そべってダダをこねまわしますからなんですけど・・」

「しかもただのハグじゃないのよ。ボスの体を抱きしめて動けなくしたうえで、ボスのお尻を撫で繰りまわすの」

「お尻を撫で繰りまわすぅ！？」

「あれは本当にやめてほしいです。まるで満員念車の中で中年オヤヂの痴漢に触られている気分になります」

「次に『いってきますのチュー』」

「『いってきますのチュー』ぅ！？」

「そそ、しかもただのチューじゃないのよ。ボスの体を抱きしめて動けなくしたうえで、ほっぺにチューすると見せかけて無理やりベロチューを」

「無理矢理ベロチューだとぉ！？」

「いえ、迫っては来ますけど絶対させませんって」

「そして、そして、帰ってきてから『ただいまのハグ&チュー』し

たあと、『仲良く一緒にお風呂』、『らぶらぶ夕食』、とどめに『今日も一緒に愛の就寝』へ」

「いやあああああっ、そんなのいやあああああっ、あたしの連夜くんが、あたしの連夜くんがぁぁぁぁっ！！」

「ないない、ないですって。どこの新婚カップルですのん。ちょ、玉藻さん？　しっかりしてください。前半はともかく、後半は完全にフィクションですから」

美しい金髪をかきむしりながら半狂乱に陥っている玉藻に近寄った連夜は、よしよしとその背中を優しくさすってやる。

「え？　フィクション？　うそんこなの？　全部？」

連夜の言葉にはっと我に返った玉藻は、だばだばと涙が流れる大きな瞳を最愛の恋人のほうへと向ける。

するとその視線を受けた恋人はにっこりとほほ笑みながら大きく頷くのだった。

「ええ、安心してください半分は間違いなく『フィクション』で『うそんこ』です」

「な～んだ。半分はうそだったのね。よかったぁ～。半分うそだったのかぁ・・って、半分はほんとなんじゃないのよ、ばかあああああっ！！」

一瞬心からの安堵の表情を浮かべかけた玉藻であったが、連夜の言葉の意味にあっさり気がついて癇癪を爆発させる。

「ってか、どういうことなの？　おはようのハグやら、ただいまのちゅ～やら、それって普通一緒に住んでいる家族やら、ふ、ふ、夫婦やらでないとできないことなんじゃないの!?　なんでミネルヴァがそういうことを連夜くんにできるの、おかしくない？」

「おかしくないわよ。だって、リーダーとボスって普通に一緒の家に住んでいるんだし」

「な～んだ、そっかぁ。一緒に住んでいるなら不思議じゃないわよね。それなら納得、それなら安心。って、納得も安心もできるわけあるかぁぁぁぁぁっ!!」

リビュエーの口から放たれたトドメの言葉に、とうとう玉藻のストレスパラメータは阻止限界点を突破。

大狐の姿になって、泣きわめきながら盛大に床を転がりまわる。

「いやよ、イヤヨ、絶対に嫌よ～～～!!　ミネルヴァと連夜くんが、そんな、そんな、一つ屋根の下で、『あっはん』なことや『うっふん』なことを、いやあああああっ!!　ミネルヴァが連夜くんに『今日は寝かさないわよ』とか、『今日の連夜はかわいいわね』とか言ったりしているわけ!?　連夜くんも『そこをもっともっと』とか、『そこがいいです、あんっ』とか応えたりしているの!?　いやっ、不潔、不潔よ、そんなことを言っていいのは私だけだし、連夜くんは私としているときしか言っちゃダメッ!!　ああ、それなのに、それなのにぃぃぃっ」

「ちょっ、玉藻さん、本当に落ち着いてください。なんかとてつもなくとんでもないこと口にしてますから!!」

「これが落ち着いていられるかあああああっ!!」

体長二メトルを越える巨大狐が、駄々をこねながらリビングルームの中を所狭しと転げまわり、それを小柄な人間族の少年が必死に追いかける。

まるでコメディアニメのように実に楽しげでおもしろおかしい風景であったが、やってる当人達は大真面目。

たっぷり十分近くも転げ回り、最終的に追いついてきた連夜を自分の大きな体の中に捕まえて丸めこんだところでようやく駄々をこねまわすのを止める玉藻。

連夜の顔をしきりに舐めたり甘噛みしたりしながら、精神を落ち着かせる。

「まったくどういうことなの？　私だけって言ったのに、なんでミネルヴァとそういうことになってるわけ？　私が納得できる説明をしてくれるまで絶対離さないんだからね！！」

すんすんとしきりに鼻を鳴らしながら怒ったような表情で連夜の顔を盛大に舐めまわす大狐。

玉藻の腕の中、やりたいようにやらせてやりながらよしよしと狐も顔を優しく撫ぜて慰める連夜は、ふと横に立つ大蛇に視線を向ける。

妙に生温かい視線を向ける大蛇のほうに。

「いや、最初からちゃんと説明するつもりだったんですよ。それなのにリビュエーさんが」

「え～、私は厳然たる事実を言っただけだもん」

連夜から非難の視線を向けられたリビュエーは慌てて視線を外してそっぽを向くが、ニヤニヤ笑いは張り付いたまま。

そんなリビュエーを恨めしそうにしばらく見つめていた連夜だったが、玉藻に顔を両手で挟まれて無理矢理横に向けられたことで中断。

「痛たた、玉藻さん、痛いですって」

「もうっ！！　説明はどうなったのよ！？　ミネルヴァと一緒に住んでいるってほんとなの？　いったい、ミネルヴァと連夜くんはどういう関係なのよ？」

「ああ、そうでした。そのことです」

「まさか、まさか本当に、ミネルヴァと連夜くんは恋人同士っていうか」

「ないない。さっきから言ってますけど、そんなこと絶対ありえませんから。いや、確かにみ～ちゃんは美人だし、頭もいいし、家事とか全然駄目ですけど、客観的に見て非常に魅力的な女性だと思います」

「じゃあ、やっぱり！！」

今にも大泣きしそうな、しかし、同時に怒り狂って暴れ出しそうな、非常に複雑怪奇な表情で迫ってくる狐の顔を優しく撫ぜながら、連夜ははっきりと首を横にふる。

「だけど恋人同士って、それはないですよ。そもそもそんなこと考えただけでさむイボがでますし、考えたこともありませんから。玉藻さんが考えているような関係ではありません」

「だったら、はっきり言ってよ、どういう関係なのかを!?　このままじゃ私、頭がおかしくなってしまいそうよ!!」

「本当にごめんなさい。それについては心から謝罪します。ですけど、それをはっきり説明するためにも、玉藻さんにちょっと手伝ってほしいことがあるんです」

「え?　手伝ってほしいこと?」

腕の中の最愛の恋人が言いだした不可思議な提案に、思わずきょとんとして首を傾げる玉藻。

その玉藻の姿を見てなんともいえない苦笑を浮かべた連夜がさらなる説明をしようとするが、ニヤニヤ笑いをやめたリビュエーがやってきて視線で連夜に説明の交代を申し出る。

しばし見つめあう連夜とリビュエー。

結局、連夜はリビュエーの提案に頷きを返して口を紡ぎ、代わりにリビュエーが説明を続ける。

「たまちゃんは納得しづらいかもしれないけどさ、ここはボスの提案に乗ってあげてもらえないかな。今仮にリーダーが言葉で説明したとしても多分、たまちゃんはボスとリーダーの関係を信じられないし、納得できないと思うのよね。私やクレアは、ドナおばさまやジンおじさまを知っているから納得できるけど、普通は思いつかないと思うもの」

「それってどういうこと?　そんな複雑な関係なの?」

「いや、ボスとリーダーは非常にシンプルな関係よ。ただねぇ、たまちゃんにはわからなかったわけだし」

「何が？」

「リーダーとボスの顔を見ても何も気付かなかったわけでしょ？まあ全然似てないから気付けというのが無理なんだけどさ。ともかく、もうちょっとだけ付き合ってよ」

「あ～、もうなんだかまだるっこしいわねぇ。私にどうしろっていうのよ？」

「一芝居付き合ってほしいのよ」

いたずらっこそのものといった表情で玉藻に顔を近付けたリビュエーは、またもや玉藻が全く予想していなかった言葉を口にする。

友人の真意が全くわからず、思わずリビュエーの顔を見返す玉藻。

青白い顔に小さく細かい宝石のような美しい鱗がびっしりと覆う友人の顔。

その中に存在する二つの瞳には、自分に対する害意らしきものは全く映ってはいないが、そこをどれだけ探るように見つめてもやはり真意を掴み切ることができない。

これ以上探ってみても何もわからない。

そう判断した玉藻は疲れたように首を横に振りながら口を開いて真意を直接問いただす。

「ひと、しばい？　なんで？　いったいなんの為の芝居？」

「こういうややこしい事態を作り出した人物に、そろそろ収集してもらいたいのよ。私もクレオも、そしてボスも、馬鹿正直にあの『人』が書いたシナリオに従ってきたわけだけど、そろそろ幕引きのときなのよね」

「幕引き？」

「そう。と、いうかね、たまちゃんとボスがこうなっている時点で、あの『人』の書いたシナリオはもう終わってるのよねえ。なのにあの『人』一人がそれに気がついていないから」

「いまいちよく、わからないけど、そうすることで私に何かメリットがあるわけ？」

「あるわ。それは、ボスとリーダーの関係がはっきりすること。そして、それと同時にたまちゃんが一番知りたがっていることもはっきりする」

「私が知りたがっていること？」

「そうよ。ボスの・・あなたの『連夜くん』のこと」

「！？」

リビュエーの言葉に思わずその体を硬直させる玉藻。

そうその通りであった。

玉藻は連夜のことをほとんど知らない。

自分に対して絶大な信頼と愛情を寄せてくれている最愛の恋人『連夜』。

玉藻自身も、同じくらい彼のことを信じているし愛していると自負しているが、しかし。

その氏素性についてはほとんど知らない。

知っていることと言えばごくわずか。

彼女の師匠であり後見人でもあるブエル・サタナドキア教授の『古い友人の息子』ということ。

そして、歓楽街『サードテンプル』にその名を轟かす仮面の怪『人』物、『祟鴉（たたりがらす）』の正体ということの二点だけ。
勿論、大切な大切な恋人のことが知りたくないわけがない。
いや、知りたいに決まっている。
しかし、無理に聞き出そうとは思わなかった。
やろうと思えばそうすることができなくはなかったが、それよりもそうした行動がこの優しい恋人との絆に亀裂を生じさせる可能性のほうが怖くて、どうしても踏む出すことができなかったのだ。
本格的に付き合いだしてからまだわずか一カ月程度しかたってないということも理由としてあったし、ともかく今の幸せな生活をちょっとでも揺るがせかねないことは、玉藻にとっては絶対のタブー。
そういう思いがありありと浮かびあがった玉藻の表情。
その様子を見たリビュエーは自分の予想が的中していたことを確信し、真剣な表情でゆっくりと頷きを返してみせる。

「たまちゃん、ボスのことほとんど知らないでしょ？　どこに住んでいるのか？　家族はいるのか？　普段何をしているのか？　そして、いったい何者なのか？　知りたいでしょ？」

「そ、それは勿論そうだけど、連夜くん、自分から話そうとしないから、聞いちゃだめなのかなって」

「あ～、言えなかった理由はね、リーダーなの」

「ああそう、ミネルヴァが理由だったの・・って、なんでぇっ！？」

なんでもないことのように、さらっと爆弾を投下するリビュエー。
玉藻は目を剥いて腕の中の恋人に視線を向ける。
すると、連夜は困り切ったといわんばかりの苦笑を浮かべて静かに肯定の頷きを返した。

「ほ、本当なの？　ミネルヴァに口止めされてたってこと？」

「それを本人の口から説明させたいのよ。と、いうことで、協力してくれるかしら？」

同性から見ても非常に魅力的なウインクで玉藻に返事を要求してくるリビュエー。

そんなリビュエーと、そして腕の中の連夜を交互に見つめていた玉藻だったが、やがて、決意の色を瞳に浮かばせてゆっくりと口を開いた。

「わかった。やるわ」

そして、世にもバカバカしい喜劇の幕があがる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7892p/

真・ここは違うどこかの日常

2011年10月2日23時29分発行